

ストライクウィッチーズ
～蒼空を舞う零の
荒鷹～

鷹と狼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

序章

西暦1945年8月15日、日本敗戦。

ソロモン海戦から終戦まで戦い抜いたラバウル六勇士の一人である桜井洋介は、尊敬していた上官や戦友、幾多の軍人と民間人が犠牲になった大東亜戦争が終わった。

だが3日後、8月18日 占守島にソビエトロシア軍が侵攻。

桜井洋介は愛機零戦64型と共に緊急出撃した。

目次

登場人物 紹介	1		
プロローグ	9		
第501 ストライクウィッチーズ ブ リタニア編			
第1話 魔女たちとできること	17		
第2話 ウィザードの配属	29		
第3話 日ノ丸のウィザード	57		
第4話 ありがとう	86		
第5話 南方の過去	145		
第6話 安全第一、速度で間一髪			
第7話 夜間哨戒と悪夢	176		
第8話 大混乱、スースーする事件	219		
第9話 君を忘れない	301		
第10話 守りたいもの	339		
第11話 突き詰めた真実	368		
第12話 ストライクウィッチーズ			
第502 ブレイブウィッチーズ ペテ ルブルグ編	411		
第13話 新たなる戦場へ	457		
第14話 北国の大空に羽ばたけ			

473	第15話	502着任での腕試し	
496	第16話	野戦看護婦の慰問	
	第17話	極寒の再会 前編	538
	第18話	極寒の再会 後編	578
	第19話	幸運と覚醒 前編	622
	第20話	幸運と覚醒 後編	656
	第21話	戦場のメリーサトウルヌス	693
	第22話	幻光の観客席	724
	第23話	番外編 ペテルブルグで一	771
番長い日			794
	第24話	特攻隊の介錯 前編	829
	第25話	特攻隊の介錯 後編	861
	第26話	父娘、それぞれの活動	884
	第27話	伯爵からの約束	921
	第28話	ブレイクウィッチーズ	949
	第29話	仇討ちするブレイク	994
	第30話	再会の無情	1028
	第31話	妹対姉 魔眼対決	1053

第32話 雪原の一大決戦

1086

第33話 ひかり輝いて

1122

君と繋がる空 短編集

第34話 高野五十六

1169

第35話 ウイッチ育成の指導

1189

第36話 この空の下で

1199

第37話 戦友への花束

1219

第501 ストライクウィッチーズ2

ロマーニヤ編

第38話 もう一人のウィザード

1254

第39話 決死のトライヤヌス 前編

第40話 決死のトライヤヌス

後編

1277

第41話 マジックキャットの指令

1294

第42話 魔術師、再び501へ

1326

1351

第43話 小島の訓練所

1386

第44話 ステラの経緯

1417

第45話 5人でできること

1442

第46話 険悪なジェット

1469

第47話 二人の絆

1503

第48話 ローマの休日 前編

1563 第 1540

4

9

話

ロ

ー

マ

の

休

日

後

編

登場人物 紹介

桜井洋介（さくらい ようすけ）

所属 日本海軍第302航空隊 第5中隊第1小队

階級 一飛曹→飛曹長→少尉→中尉 1945→（SW時）

出身地 兵庫県 神戸

生年月日 1925年 1月12日

趣味特技 剣術10段、射撃 ランニング 読書 釣り 料理 機械いじり

愛機 96艦戦 ↓ 零戦22型 ↓ 52型 ↓ 零戦64型

年齢 20歳 1945年 ↓ 1944年（SW時）

身長 172センチ

通称 荒鷹

使い魔 鷹

固有魔法 波導

服装、所持 第3種軍服、航空備品一式、4式半自動小銃（照準機眼付）、軍刀（鷹狼）アダマンチウム（和名、金剛鉄）、南部14年式拳銃、軍隊手帳 色眼鏡 写真
桜型の御守り×3

武装 99式13^ミ機銃Ⅱロケット投擲装備（SW時）90 ロケット弾

CV 古谷徹 モデル 桐島弾

今作の主人公。予科練出身、初陣は1942年4月18日、本土初空襲でB―25の撃墜で厚木十三により小隊に編入、空母瑞鶴に配属。

ソロモン海戦やラバウル、マリアナ、フィリピンで奮闘。

1944年9月に内地に帰還した後、呉で幼なじみの雪と結婚。だが、翌年の呉軍港空襲で意識不明になった。

その激戦である米海軍パイロットのライバルと引き分けが続いた。

性格は心優しく、面倒見が良く仲間思い。仲間の為なら命を懸けることもある。あまり怒らない性格。また、他人をさげすむ者を嫌う、仲間や家族のことを馬鹿にされると誰であろうと殺気を出しながら怒りぶつける。

家族は中学を卒業後に1938年の水災害で亡くし、姉は従軍看護婦 沖縄戦で行方

不明

次男は戦車兵 ベルリン駅で戦死

上記の通り、初陣以来、戦場で闘うほど強くなり、機体がボロボロになっても生還する。

ソロモン海戦、フィリピン決戦まで、厚木十三中尉の掩護を務め、ラバウルでラバウル六空勇士を結成。天才的な手腕でメンバーのNo. 2エースに成長。

45年2月、内地に帰国後、三沢基地にて新型の零戦64型を受領。本土防衛に務めながら沖縄戦で鹿屋基地に特攻隊の護衛隊所属、8月6日の桜花の護衛を最後、千歳基地に転属、飛行中に8月15日に終戦を迎えた。8月18日に千島列島にソビエトロシア軍が進攻、翌日、零戦64型で緊急出撃。

戦闘機パイロットの生涯として、米英露の航空機108機を撃墜した。
戦後、狼の桜井勇介、鷹の桜井洋介と称された。

桜井亜弥

1945年7月23日

年齢 9 歳

身長 146

血液型 A

出身 広島、呉↓北海道

使い魔 蝦夷狼

搭乗機 零戦54型（魔導エンジンはブリタニアからの輸送、ユニット本体は坂本の協力で扶桑から輸送、ペテルブルグで受領）

武装 刀（ビブラニウム（ロマーニャ501基地の洞窟で入手））

所持物 桜型の御守り 短剣 少佐の襟章

特技 剣術

CV 洲崎綾

モデル 艦これの 暁 使い魔発動時 響

洋介と雪の一人娘、父親の洋介が消息不明になって母親の雪と北海道に移住。夫の洋介を探す為に、洋介が貯めた恩給で母親と慎ましく暮らしていた。北海道で絶滅した蝦夷狼のひびきと仲良くなり、友達になった。

人懐っこく、人が困っている時に必ず手助けする性格。

1954年12月冬、母親の雪が亡くなり、ショックで外出してひびきと猛烈な吹雪に遇い謎の施設にいた。人型のネウロイに半改造を受けて助けられ、ペトロザヴオーツクの市街地郊外に倒れていた。

母親の血筋が濃い為、ウィッチの世界でウィッチになった。普段髪の色は黒だが、使い魔の発動時に髪が白銀に変色する。

バッキー・S・五十嵐

1924年9月20日

アメリカ ハワイ出身

身長174 体重61

血液型 A

搭乗機 グラマンF6Fヘルキャット ↓ グラマンF8Fベアキャット

階級 曹長↓中尉↓大尉

使い魔 鷲

固有魔法 強化

呼称 サムライハンター

特技 剣術 射撃 アウトドア 写真撮影

武装 M-2重機銃 M-1半自動小銃 M-1911拳銃

所持物 カメラ 軍刀（アンダマチウム）

CV 鈴木健一 モデル 常陸院光

日系アメリカ人、ハワイの真珠湾攻撃を目の当たりにしてアメリカ海軍の航空隊に入隊。

初陣が1944年のラバウル航空決戦。その空戦で桜井洋介と交わり、結果は引き分け。

次の戦いに備えて戦争末期のハワイで最新鋭戦闘機F8Fベアキャットを受領。本機で挑むも、1945年7月24日28日、8月6日の桜花による神雷部隊の特攻攻撃まで彼と戦い、引き分けだった。

9日後終戦、パイロットの生涯として敵の日本機30を撃墜した。

9月にライバルの桜井洋介と幼馴染みのステラが戦場で戦死して絶望。彼女の意志を継いで謎の飛行物体「フーフアイター」を調査。

翌年1946年3月、バミューダ海域を調査中に謎の渦に飲まれ消息不明。医療施設でステラと再会。ウィザードに覚醒し、第504統合戦闘航空団アルダーウィッチーズ

に編入。

トラヤヌス作戦前に桜井洋介と再会、当作戦で共同戦線。

ステラ・A・エヴァンス

1927年6月11日

アメリカ ロサンゼルス リトルトーキョー出身

身長163

血液型 O

搭乗機 P-51ムスタングH型

階級 軍曹↓少尉↓中尉

使い魔 虎

呼称

固有魔法 レーダー魔導針

特技 射撃 ナイフ捌き 器械体操 料理

武装 M-2重機銃 M-1A-1バズーカ M-1911拳銃 ナイフ

CV 桑島法子 モデル ステラ・ルーシェ

日米のハーフ。アメリカ有数の富豪の娘。バッキーと幼少からの関係。ロサンゼルス上空に謎の飛行物体飛来に興味を示し、日本軍の真珠湾攻撃を切っ掛けにアメリカ軍に入隊したものの認められず、親のコネでようやく1942年時、陸軍航空隊に入隊。

初陣は1943年、ダンピール海峡。ラバウル空襲、フィリピン攻略。アメリカ軍の対特攻隊迎撃のメンバーの一員、7月30日シンガポール空襲の護衛参加、大賀虎雄が扱う二式水上戦闘機と空戦、損傷して墜落行方不明。彼女の生涯は、10機撃墜。

目が醒めて、ロマーニヤ空軍少佐フェデリカ・N・ドツリオに救われた。ウィッチに覚醒するも魔法が不安定、ウィッチ養成所で訓練。休暇中、バッキーと再会。訓練終了後、第504統合戦闘航空団アルダーウィッチーズに編入した。

プロローグ

8月18日

北海道 海軍千歳航空隊

「桜井中尉、沖田少尉！ご武運を!!」

「てやんでい洋介、進次郎！必ず生還しろ!!」

「一平、トチローさんありがとう。桜井洋介、零戦64型、行きます!!」

「お互いに任務を遂行するぞ一平! 沖田進次郎、発進します!!」

桜井洋介は愛機の発動機が唸る零式艦上戦闘機64型に搭乗し、僚機はソロモン海戦から戦ってきたラバウル六勇士のベテランパイロット、沖田進次郎少尉と共に北海道の千歳海軍航空隊の滑走路を走り、離陸した。

千歳基地の紫電のパイロット里見一平と秋山敏郎整備員たちと関係者が帽子を振り、見送った。

千島列島の間上空を飛行中、東の海と空から朝日が昇った。

「……今、見られる空の朝日が最後だな……雪……亜弥……」

二機は一旦、幌筵島の飛行場に着陸、燃料を給油。完了次第、北方の島、濃霧が漂う占守島へ向かって飛行した。

離陸して3分後、島の竹田浜上空にソビエトロシア軍戦闘機ミグ10機がカムチャツカ半島から飛来した。

こうして、終戦直後で最初と最後の空中戦が始まった。

「そっつ!!」

ギョオオオオオオオオン　ダダダダダダ　ドウウン

「よしつ、最後の1機を撃墜!!」

ギューイン

『桜井さん、さすがは新型ですな!……64型がもつと早く戦場に出ていれば……』

「言うな進次郎、…戦争は終わった……だが、今は火事場泥行為の露助の進行を食い止めて、守備隊を援護、戦死した幸吉の故郷を守らねば!!…っ!?…増援だ!」

上空の敵機が殲滅寸前の頃、地上の戦車隊が爆撃機1機の襲撃を受けて危機に瀕し、

気付いた洋介は爆撃機を目標に急降下して銃撃した

ダダダダダ

「クソつ装甲が厚い、流星は空飛ぶ戦車シュトゥルムビク、後部銃座も厄介だ……」

シュトゥルムビクの防御で機銃では撃ち抜けず、洋介は翼にロケット弾の発射を準備、照準に捉え、射った。

「喰らえ!!」

バシユツ ドウウン

「やったか……ぎやつ……」

ロケット弾でシュトゥルムビクを撃墜。だが、撃破した敵機の部品が飛び散り、風防の防弾ガラスに当たり、割れた破片が洋介の左目元を引き裂き、流血で意識が危ぶまれて

いた

『桜井さんっ!!…桜井さんっ!!』

「……………左……………目……………やら……………れ……………た…」

『幌筵島の飛行場へ、俺が誘導します!』

「…頼…む……………すま…な……………い…（厚木隊長……………沖田さん…虎雄…幸吉……………トチローさん……………トチコさん……………父さん…母さん…志帆姉さん、勇介、……………雪……………亜弥…僕は…）……………進次郎……………」

『桜井さん、…必ず、雪さんと娘さんの亜弥ちゃんの元へ帰って下さい!この空で死んだら、承知しませんよ!!』

『…ああ…必ず…雪と……………亜弥の元へ……………ザザ…ガガー……………』

洋介の意識が朦朧していると突如濃霧が発生して、2機は進路を変えずに霧に突入、突き抜けたのは沖田進次郎少尉の零戦1機のみであった。

「……………中尉っ…桜井中尉……………桜井…さん……………桜井さん……………桜井さんっ!!
…洋介さん…洋介さん!!」

進次郎は無線が切れた空域へ引き返し、空と占守島、海上を至るまで探した。だが、どんなところを探しても遺体どころか、機体の破片すら存在しなかった。

「……………洋介さん…すみません…」

進次郎の零戦の燃料が危うく、北海道の千歳基地へ引き返した。

この時点で、米英露の航空機を108機を撃墜した日本海軍中尉、桜井洋介は千島列島上空で消息不明。

だが、桜井洋介は新たな戦場へ飛び立ったのであった。

第501 ストライクウィッチーズ ブリタニア編 第1話 魔女たちとできること

20世紀初頭、突如出現した異形の存在「ネウロイ」

圧倒的物量と瘴気汚染により世界は瞬く間に侵略されていった。

人類は唯一の希望として魔導エンジンによる飛行脚「ストライカーユニット」を駆る少女たち、『ウィッチ（魔女）』に望みを託した。

1944年　ブリタニア　ドーバー海峡近海

扶桑皇国海軍欧州派遣艦隊

艦隊上空にネウロイ襲来。

扶桑皇国海軍のウィツチ、坂本美緒少佐以下空母赤城の艦載機が発艦して迎撃、彼女を除いて返り討ちにあつて殲滅。美緒が危ぶまれていた時に、赤城から新たなるウィツチが発艦、宮藤芳佳が飛び立った。

ギユウウウウウン　「坂本さーん!!」

「……宮藤っ!……何て奴だ、初めてストライカーを履いたというのに……」

ネウロイがめがけてビームを放ち、芳佳は強大なシールドで防いだ。美緒は驚愕して新たな作戦をたてた。

美緒は芳佳にネウロイの弱点であるコアの位置を認知させ、降下して接近、刀でネウロイを引き裂いた。

そして芳佳も続いてネウロイの本体スレスレに接近、機銃掃射でコアのカバーをこじ開けた途端、救援に向かってきたウィッチの攻撃でコアが破壊、ネウロイを消滅した。

芳佳はホッとしたのか、美緒が芳佳の右腕を肩に伸せて飛行

「大した奴だ、…何の訓練も無しにここまでやるとはな…」

救援 ゲルハルト・バルクホルン班視点

「コアを破壊かくにーん♪十発十中だよー!! スッゴいでしょー!!」

「こちらでも確認した。ネウロイ撃墜、戦闘を終了する」

「坂本少佐く!!ご無事ですか!!」

フランチェスカ・ルッキーニが陽気にはしやぎ、バルクホルンは沈着に判断したときにペリーヌ・クロステルマンがでしゃばって先行したときだった

「っ!?!…何なんですのあの小娘は、一体誰なんですか!!」

ペリーヌが歯ぎしりしている時、ルッキーニがある機影を目にした。

「ん?…少佐の後ろ……別の新ウロイだ!?!」

「何だって!!ペリーヌ、警戒戦闘配置につけ!!」

「ハッハイ!!少佐く!!新ウロイが…!!」

双発型（B―26型）ネウロイが襲い懸かり、ペリーヌの連絡でインカムに聞いた坂本は魔力が尽きかけていた。

「何だと!?!クソ魔力が…」

ギョオオオオオオオオオオ

「……………あれ……………」

美緒は何とか離脱しようと、芳佳は薄く目を開け、雲の中から爆音が鳴り響き、戦闘機が出現した

「進次郎……どこだ!!……ぐ……!……広い……海………何だあれはっ!!………少女が空を飛んで……日本の空母だ………」

桜井洋介が目にしたのは、少女の空中飛行と黒い飛行物体だった

「何だあれは!!米英露の新型機か!!」

『ザザ……ガー……その戦闘機、何者だ!!?ネウロイに近付くな、空域を離脱しろ!!』

「(え……少女の声……?)ネウロイ……?なんだそれは……!?!」

「(ネウロイを知らないだと…)『その機体では無理だ…コアを狙って破壊しない限り返り討ちにあらうぞ!!』」

「…う…コアって…あの…赤く変な球体のことか…！…！…了解っ!!突貫する！」

「(なぜ、奴がコアが見えるんだ…)『まっ待て!!』」

洋介が扱う零戦64型はネウロイに接近、ネウロイが発射したビームを次々と回避、主翼の下に装備していたロケット弾を発射、ネウロイ本体に命中してコアが見えた。

「命中っ！…留めだっ!!」

カチッ カチッ

洋介はスロットルレバーの引き金を絞るにも、弾が切れた。

「しまったっ！弾切れだ……かくなるうえは……」

遠くから見たウィッチたちは、その行動を見て慌てた。

「何をしていようとするんだ奴は！」

「まさか体当たりをするんじゃない……！」

「そこっ!!」 バキュウウウン パキイイイン

美緒と芳佳は慌てながら手を伸ばした。

洋介は操縦席から新式の四式半自動小銃を取り出し、照準器でコアを入れて発砲、弾丸がコアに命中して破壊、ネウロイを撃墜した。

「な…何てことだ…あの通常の戦闘機でネウロイを撃墜するなんて…『おい、その戦闘機！所属と官姓名を返答せよ！』」

バルクホルンは心底驚き、その戦闘機に向けて連絡した。

「ぐ…日本…海軍…中尉……桜井…洋介…」

だが、洋介の息が荒く、声が震えながら戦闘機がふらつき様子がおかしくなっていたことに気付いたのはルッキーニが疑問を感じた。

「あの飛行機…ふらついて…うじゅつ!?!…もしかして墜ちちゃう!?!」

「何だと!!おいつ機首を上げろ、墜落するぞつ!!」

「…うおっ…!」

ギュイイイイン

「……はあ……我、負傷……あ……着陸可能な……飛行……場……を……誘導……されたし……」

「了解した、ペリーヌとリーネは少佐たちを頼む！」

「了解!!」

「ルツキーニは私とあの正体不明機とパイロットを基地に誘導する!!」

「うじゅっ!了解!」

ギューイイイン

「ねえ、大丈……うぎやつ大変!!顔と胸から血が流れている!!」

ルッキーニが洋介機に接近、風防越しで確認すると、操縦席に座る光景を目の当たりにしたルッキーニは顔を真っ青にしながら報告した。

「何だって!!501基地、飛行している正体不明機を確保、パイロットは負傷!至急救急の用意を求む!!」

『「こちら501基地、了解。直ちに緊急配置に着きます!」』

第2話 ウィザードの配属

ルッキーニが洋介機に接近、血にまみれていることに驚き、バルクホルンは救急を求めた。

そして、洋介はゆっくりと飛行した。

「……慌てるな……下手に飛行すると…機体ごとひっくり返る…」

洋介は、飛行している少女たちの誘導で徐々に基地に近付き、そして着陸した。

「……着陸……助かった……ここ……は……どこ……だろう……ゆ……き……」
ガクッ

洋介は安堵して、死んだように眠りに尽き、隊長のミーナ・デイトリンデ・ヴィル

ケが基地の兵士を動員し担架に乗せて医務室へ運んだ。

「急いで、パイロットを担架にのせて緊急手術！」

「二 了解!!」

「よく着陸の許可したなミーナ」

「美緒……ええ、まあこの状況下で許せない訳ないでしょ。例の扶桑からきた新人さんは?」

「今は部屋で休ませている。」

「そう……ねえ美緒……この戦闘機の零戦は?」

「はっはっは!!はつきり言っただけ、だが、艦隊の上空にネウロイが出現したときに、どこからか現れて、奴がネウロイを撃墜して危機を回避してくれた。この零戦だが

見たことが無い型だ…エンジンは一回り大きい、武装どころか…機体の国籍マークが赤い丸だ……この零戦パイロットはどうした？」

「今は緊急手術中だから意識が戻るまで掛かりそうよ」

「そうか、パイロットの所持物は？」

「そうね…、後でトウルーデとエーリカ、シャーリーさんに調べさせるわ」

その後、ミーナの指事をうけた3人は、格納庫で所持物を調べた。

「扶桑刀と扶桑の拳銃、航空備品一式。軍隊手帳…日本海軍…？…そっちはどうだ」

「おっライフフル銃だ……ん……？……リベリオンのM—1銃と似てる」

「こっちのバックの中は緑の軍服一式、飛行服……あつ……サンングラスだ〜♪…ポケッ
トの中に……おっ写真だ……」

「写真!?!どんなのが写っている?」

「さっきのパイロットと女性だ!」

「女性!?!彼女かな?」

シャーリーはいたずらな笑みを浮かべた。彼女たちの背後に、バルクホルンが近付いた。

「遊ぶなお前たち!!次はあの戦闘機の調査だ、いくぞ!」

「おおつ!あの戦闘機、どのくらいスピード出るかな?」

「コラ!スピードのことしか頭に無いのか!!」

そして、洋介の手術は無事に終えて、病室のベッドで意識が戻る日をミナ、坂本は

待った。

宮藤芳佳は自己紹介と基地の案内、訓練が終わった後、許可を取って病室に足を運び、患者に両手を翳し、治癒魔法をかけた。

「ゆつくりと慎重に、落ち着いて…」

「……………ん……………雪……………ゆ……………き……………」

「……………ゆき……………」

洋介は気を失いながら、毎日のようにうわ声をあげた。

それから1週間、昨日は芳佳とリーネが活躍した次の日の午前の訓練を終えた頃、二人は病室に行った。

「ねえ芳佳ちゃん、あのパイロットさん、いつ目を覚ますのかな……」

「そうだね、あの人の左目は怪我して包帯で巻かれていたけど……私は練習も兼ねて昨日の夜にも治癒魔法を掻けたから」

「凄い勇気だね芳佳ちゃん……あ……」

「どうしたのリーネちゃん？あ……」

二人が目にしたのは、意識が回復してベッドに座っていた洋介の姿であった。

「ん……君たちは……？」

「あ……ああ……」

「あつ……すまない……ちよつと、ここはどこなんだ……？」

すぐさま芳佳とリーネはミーナ中佐と坂本少佐に報告、二人の指揮官は事情聴取のため病室へ向かった。

洋介は窓の景色を眺めた。

「…いい景色だな…ここは天国か…？」

洋介がそう思っていると病室のドアが開いた。

入ってきたのは日本海軍の将校第2種服を着た女性とドイツの将校服を着た赤髪の女性が入ってきた。

洋介が最初に疑問に感じたことは、ズボンを履いてなかったことが気になり、赤面したことだ。

「貴女方は…（なんで下着姿なんだ／＼）…？」

「意識が戻ったところでごめんなさいね」

「早速で悪いが質問に答えて貰うぞ」

「別にいいが、あなたがこの指揮官か？」

「ええ、私はカールスラント空軍JG3航空団司令、501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ隊隊長ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐です」

「私は扶桑皇国海軍遣欧艦隊第24航空戦隊288航空隊、同じくストライクウィッチーズ隊所属の坂本美緒。階級は少佐だ。お前の出身国と部隊名を教えてください」

「（…カールスラント…？…扶桑…？）はっ、私は日本海軍第302航空隊、北海道千歳基地所属。第5中隊第1小隊長、桜井洋介。階級は中尉です」

「ん…日本…？…バルクホルン大尉の報告で日本と聞いたが、扶桑人ではないのか？」

「扶桑…？…なんだそりゃ…俺は予科練時代で戦艦扶桑に一時練習生で乗艦し、乗組員ではないが…俺は、日本人だ。少佐も日本人ではないのか…？」

「……桜井中尉、日本っていう国はどこにあるの？」

「え……どこって……ここですがね……」

ミーナは食い違う言葉で疑問、世界地図を取り出して日本はどこか聞くと、洋介は極東の島国である日本を指した。

「なんだと、ここが日本だと!? どう見ても扶桑にしか見えないが……」

「もしかして………」

ミーナはなにか悟ったかのように呟き、洋介に質問した。

「桜井中尉、あなたは今年は何年だと、ここはどこだと思いますか？」

「え……?……1945年8月で……場所は北方……だと思いますが……」

「!?」

「やつぱり……あの桜井中尉、非常に言いにくいことなのだけど………今は1944年と……ここはブリタニアなの……」

「!?……1944年だつて!!……なぜ去年に……大戦時に戻ったんだ!?……しかし、ブリタニアってなんだ……?この地図の……アメリカは少し違う、中部太平洋になんだ?こんなデカイ島は!?支那が……中国がない!!」

「大戦……?アメリカ……?なにとどんな敵と戦つてたんだ!……それに中国つてなんだ?」

洋介の言葉に坂本美緒が困惑した。

洋介が知っている限り事情を話した。1914年の欧州大戦、1939年9月から始まった第2次欧州大戦、41年からアジアも含めた大東亜戦争、そして1945年8月に敗戦。

ミーナたちの顔がどんどん暗くなり、洋介が話しているのは人類が殺し合う戦争

だった。

そして洋介は彼女の話聞いて驚いた。この世界では1914年、1939年に人類同士の戦争はなく、代わりに謎の生命体の怪異ことネウロイと戦争をしていて、そのネウロイに対抗できるのは魔力を持ったウィッチだけだという。

「と……となると、あなたは異世界の人間ってことになるわね……」

「信じられないが、嘘をついてない目ではないな……」

「異世界だって……？……あの……俺はどうなるんだ……？……」

「とりあえず上に報告します。処置が決まるまでしばらくこの病室にいてください。あと、魔法検査してもらいます。」

「魔法……？……ん？わかりました……あと一つ、俺からちよつと質問を聞いてもいいか？」

魔法と言う言葉を聞いた洋介は頭を傾げながらも、ある疑問を二人に質問した。

「ん……？なんだ？」

「なんで、あんたらは…ズボンを履いてないんだ…？」

「あら、何を言っているの？可笑しな人ね、ズボンなら履いているじゃない」

「うう…／＼／＼（……………異世界とはいえ…これはひどい……………）」

ミーナが制服の裾を捲り上げると、洋介は赤面して頭を抱えた。

そして、基地の軍医が、洋介の見たことの無い医療道具で彼の身体を検査、坂本とミーナは医師からのカルテを見て驚いた。

ブリーフィングルームにて、9人のウィッチが集まり、質問した。

「なあミーナ、少佐、例のパイロットのはどうなるんだ…？」

「ええ、一応、聴取はできたのだけど……………」

「何か…問題でもあったんですか…？」

「ええ、リーネさん。本人曰く『異世界から来た』そうよ。」

「さつき魔力を確認したが、信じられないが、魔法検査で奴に魔法力を備わっている。」

「異世界？」

「…………あいつ男なのに、魔法力を持っているのだと!？」

「ワーオ♪男の人で魔法を、面白そう♪」

「なんですのそれは……………ふざけているのですか？」

「ペリーヌさん、彼は混乱しつつも、本人はいたってまじめなんだねど……………」

「嘘をついているんじゃないか？ ミーナ、少佐」

「あいつの目を見たが、決して嘘をつく者の目ではなかったな。それに、私と宮藤の危機を救ってくれた奴だ。」

「サーニャとエイラはどう思う？」

エーリカが二人に聞き、エイラはタロットカードを出して占った。

「そうダナ…占いデ…スゴ腕…怪しい奴ではないナ」

「私は……………いい人だと…思います…」

「…ムツ……………」

サーニヤの言葉で、エイラは膨れっ面になった。

「とりあえず、私は上層部に報告してきます。皆さんは何かあるまで待機してください。」

ミーナと美緒がミーティングルームを退出すると、ウィッチたちはざわついていた。

「男の人なら虫好きかなー？」

「あたしはそいつが乗っていた戦闘機に興味あるな！どのくらいでるんだろ？」

「コラ、リベリアン!!お前はスピードのことしか頭にないのか?」

「…怖い人じゃないと…いいけど………」

「リーネちゃん、あのパイロットさんは私は坂本さんを助けてくれた人だから、きつといい人だよ!」

病室―

暇を持て余した洋介は病室の床で腕立て伏せをしていた。

「ぐ……暇だな……いつまでこの傷病衣を……」

「桜井中尉、入りますよ」

「はっ！ ミーナ中佐、どうぞ！」

入ってきたのはミーナと美緒だった。洋介はトレーニングを止め、姿勢をただした。

「桜井洋介中尉、あなたの魔力検査の結果ですが、あなたには魔法があることがわかりました。」

「っ!?!…魔法だつて? そんな…夢みたいなのが…」

洋介はミーナの言葉に、信じられない顔で驚愕した。

「そして、あなたの処置はウィザードとして、501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の隊員として、あなたを仲間にすることが決まりました……ということでしょうか?」

洋介は目を瞑り考えた。

あの大戦で幾人の敵を殺し、その手は血に染めてた罪悪感を持っていた。

「(…僕が、魔女の世界に送られたのは…神が与えた罰なのか…)」

深呼吸して、そして決意した。

「日本海軍中尉、桜井洋介。今からウィザードとして501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の隊員に任命されました!!」

と、日本海軍式敬礼をして返礼した。

「よろしく願います!!ミーナ中佐、坂本少佐!!」

「はっはっはっ!!元気のいい奴だな!!氣に入った、お前は世界初のウィザードだからな――これからビシバシ鍛えるから覚悟しろよ桜井!!」

「ようこそ、ストライクウィッチーズへ、桜井さん」

「俺が…世界初のウィザードだって…?（坂本少佐、戦死した厚木隊長みたいだな…）」

「あと、これあなたの機体に入っていた物を調査したため、お返しします」

ミーナが渡した物は、第3種軍服と南部十四年式拳銃、帯刀する軍刀「鷹狼（ようろう）」であった。

「その刀は……………」

「ん…？桜井、さつき私の目で確認したが良い色の刃だな」

「はい、代々家に伝わる刀です。私が下士官時代、姉から頂いた軍刀です。…何か特殊な金剛鉄で作られたとか…」

「それに桜井さん、さつきからカールスラント語が流暢ですね。」

「カールスラント語…………？あの中佐、習ったことが……………までよ……………」

洋介は疑問を感じたが、あることを悟った。この魔女たちがいる世界に迷い混んだ彼は各国の語学を修得したのだと。

「(はは…これはありがたについているな♪)」

それから数時間後、ブリーフィングルーム

「これから会議を始める」

「…もう知っていると思いますが。この隊に新しい仲間が増えます。」

「早速紹介する。入ってこい」

美緒の合図で、洋介は海軍第3種軍服、軍刀と拳銃を着用、教壇に立ち、9人のウィッチ達の前で自己紹介した。

「日本海軍第302航空隊、第5中隊、第1小隊長、桜井洋介。階級は中尉、本日付けのウィザードとして、第501統合戦闘航空団の隊員となりました。どうぞよろしくお願いします。」

互いに交流しながら個別の自己紹介となった瞬時、部隊でまだ幼い少女が洋介の前に現れた。

「あたしはフランチエスカ・ルッキーニ。ロマーニヤ空軍の少尉だよー♪ねえねえつ、洋介は虫好き!?!」

「(この幼い少女が少尉?) 洋介…? ああ、昆虫は好きだな」

茶髪で部隊の中でスタイル抜群の長身、陸軍軍服の少女がニヤけながら近づいた。

「あたしはシャーロット・E・イエーガー。リベリオン合衆国陸軍出身で階級は中尉。シャーリーと呼んで」

「そうか、同じ中尉だな。なら俺も洋介と呼んでも構わないよ（アメリカ人か……デカイな／＼／＼）」

シャーリーは洋介とガッチリ握手するにも、手が硬かった。

「やっぱ男の手は硬いな／＼あとであの機体について教えてくれ♪」

「ああ、いいとも」

眼鏡を掛けた、金髪のツンとした少女が赴き、洋介の頭から足元を目にした。

「わたくしはペリーヌ・クロステルマン、自由ガリア空軍中尉ですわ。しかし、ウィザードとは珍しいですわね」

「あんたは雰囲気的に、フランス人か……」

「フランス…？」

銀髪で一人の少女が一人眠っている少女の肩を支えながら紹介した。

「私はエイラ・イルマタル・ユーティライネン。スオムス空軍少尉だ。コッチはサーニャ・V・リトヴァク。オラーシャ陸軍中尉だ」

「よろしく。その娘、眠そうだが大丈夫か…？」

「サーニャは夜間哨戒を担当しているから尚のこと。」

エイラがサーニャに関して弁護する。次に、小柄でニヤけた金髪の少女が洋介に近づいた。

「わたしはエーリカ・ハルトマン。カールスラント空軍、階級は中尉、よろしくねっ洋介」

「よろしくな！」

「んでこっちは」

「ゲルハルト・バルクホルン、カールスラント空軍大尉だ」

「た…大尉！よろしくお願いします!!」

「ふん、言っておくが私はどこの馬の骨のお前を、部隊の一員として認めていないからな
！」

洋介は上官に対して敬礼したものの、バルクホルンは何も言わずに部屋から出た。

そして、最後に病室の扉に現れた二人の少女が来た。一人は緊張で震え、もう一人は興味津々の瞳をしていた。

「君たちは？」

「私は…ブリタニア空軍軍曹リネット・ビショップ、…リーネと呼んで下さい…」

「私は扶桑出身の宮藤芳佳です。階級は軍曹、入ってきたばかりですが、よろしくお願いします。」

「よろしくリーネさん、宮藤芳佳さん。いうとなれば、君たちは先に編入した先輩だな。」

「そんな…私なんかまだです／＼／」

「俺のことは洋介と呼んで下さい。」

「はい！ねえ洋介さん、私の扶桑料理を食べて下さい。そして、洋介さんの世界の話が聞きたいです…」

「あ…ああ…食事と聞いたら腹が減った…何か食べさせて下さい…」

芳佳が言いかけたとき、洋介は食事に関して目を輝かせた。

その後食堂で、洋介は宮藤芳佳が余ったご飯の残り物で簡素な雑炊を口にした。

「えっ!?……洋介さんは異世界の扶桑……日本の空で飛んでいたのですか……?」

「ああ、…戦争をしていた空にだ……だが、戦争が終わり、最後は愛機と共に飛んでいた
…」

「……」

「それ以上に驚くのは、このイギリスの地図で見たが、ドーバー海峡上空を飛んでいたことだ……まさか……勇介と晴香さんが眠る地の欧州に……」

「勇介……?」

箸を手にした洋介は、悲しい目をしていた。まだ、三ヶ月も経たない頃に、弟の桜井

勇介と戦友の大賀虎雄の妹、大賀晴香はドイツの首都ベルリンで命を落とした。

芳佳はこの時だけ、黙り混んでいた。

格納庫

食事を終えた洋介は、整備士から工具を借りて、魔女たちが履く機械の筭、ストライカーユニットが納める格納庫に赴き、隅に置かれている愛機の零式艦上戦闘機64型に赴いた。

「よう、愛機よ…三沢基地から、僕とよく日本の空を守り、戦ったな…」

洋介と零戦64型は半年の間で幾つもの戦場の空で戦い、機体には幾つもの傷が付いていた。

硫黄島の戦い、本土防空、沖縄への特攻隊の護衛任務、終戦前後の樺太、占守島の戦い。

そして、愛機と共に人の死を見届けていた。

「この世界で、こいつと共にネウロイと戦わねばならんか……しかし、僕はウィザードと言えども、この愛機でネウロイと戦えるのか……？」

眩きながら愛機に手を差し伸べて触った時――

「ん……ぎやつ……!？」

突然、零戦64型が光り出した。

第3話 日ノ丸のウィザード

眩い光の中で、徐々に零戦の機体に変化が現れた。

「なんだなんだ…!?!」

「なにごとだ!?!」

ストライカーユニットが納める格納庫は光溢れ、その場には整備士の知らせを聞いた美緒とミーナが駆けつけて来た。

「な……なんてとこだ……これはどういことなんだ……？」

光が収まり、洋介が目にしたのは、三沢基地から鹿屋基地、横須賀、呉、千歳基地、占守島で飛行して闘った戦闘機ではなく、ウィッチたちが履いている「ストライカーユニット」という機械の筈に変わっていた。

機体のエンジンは新型の金星エンジン、胴体に日の丸と隊長機の証である青の二本線模様。

そして決定的なのは、厚木基地時代にトチロー整備士たちが描いた垂直尾翼に鷹が嘴で刀をくわえた黄褐色のカラーマーク、洋介の愛機、零戦64型であった。

その光景を見た洋介は腰を降ろした。

「……桜井さん……？」

「機体の整備しようとしたら、急に光り出して……光りが収まったらストライカーユニットになっていました……あははは……まさかこんなことになるとは……トチローさ

んが見たらスパナで打たれる……いや、逆に興味を持たれるかな……？」

「桜井さん……大丈夫ですか？」

「………はっ、ところでミーナさん、ストライカーユニットってどう動かすのですか？ 脚に履くのはわかるが……」

「え？ 桜井さんは魔法力がありますね。桜井さんが言った通り、脚に履いて……」

「うおおー!!」

「!!」

美緒が笑顔になりながら、洋介の零戦を履いた。

「ちよつと、美緒!!」

「ミーナ、こいつに口で教えるより、私が手本を見せる!!桜井、悪いがちよつとだけ飛ばせてくれ!!」

「そういう問題じゃないだろ!少佐!!」

「発進!!」　グオオオオオン

バルクホルンが言ってくるが、そんなことはお構い無しに坂本は機体を滑走路へ移動させようと魔動エンジンに魔力を注ぎ、飛行した。

「(……凄い……!)」

シャーリーは洋介の肩に手を乗せ、目を輝かせながら訪ねた。

「おおつ、飛んだな!なあ洋介、あのユニットの最高速度は?」

「ん…シャーリーか…、軽く600はでる…」

「そうかつ！少佐なら速度を実証してくれるだろ。洋介のユニット、あたしもあとで乗せてくれ！」

「なっ…、シャーリーさんまで…」

美緒は基地上空で飛行曲技を実施、そのあと、彼女は飛行から帰還、洋介と芳佳が坂本の元にきた。

「坂本さん、どうでした!？」

「おうつ、私の零式より速かった!!」

「速度はどうでした？」

「そうだつ、650キロは出た！最高のストライカーユニットだ。私も使い慣れた零式ユニット乗りとして使いたいくらいだ!!」

「坂本さん、鳥みたいです！」

「鳥ではないぞ桜井、我々はストライカーユニットを扱うストライクウィッチーズだ！」

「……坂本さん、……教えて下さい!! ストライカーユニットの扱いを!!」

「はっはっは!! 良い心掛けだ! ビシバシ鍛えてやる！」

「はい!!」

「よかったね、美緒。でも、今度こういう事したら……（黒笑顔）」

「わ……わかった……!!」

坂本は冷や汗を掻き、洋介はある人物を思い出して身体が震えた。

「（怖い笑みだな…、雪と柚子さん、トチコさん、志帆姉さん並みに怖い）…坂本さん…ミーナさん、ユニットの動かし方なんだけど…」

「あら、そうだったわね。まず桜井さん、脚をユニットに入れてみてください」

「こ、こうですか？」

ミーナに言われた通りに、長ズボンのままでユニットの口のような場所につま先から足を入れる。すると

「うわっ！なんか頭になんか…飾り！？しっぽが生えた!!」

「はっはっはっ！これは使い魔だ！」

「使い魔…？」

「これは…鳥？」

「これは……驚かしら？」

「いや、この模様柄は……鷹だ！」

「桜井さん、私達ウィッチは動物と契約を受けてサポートとして戦っているのよ」

「ど…動物と契約…!？」

「この通りです」

ミーナや美緒、芳佳たちは手本として頭部と尻から狼と犬の耳としっぽが出た。

「そ、……そうなんですか……驚いたな～……まるで『のらくろ』みたい…」

「のらくろ…？それにあなたはいつ、どこで契約を!？」

「い…いつって言っても…」

洋介は右手で頭を抱えながら思い出そうにも思い出せなかった。

鳥類を使い魔に持つウィッチは航空ウィッチとして比較的優秀になる傾向がある。

ミーナから助言をもらった洋介は軍刀と四式小銃を装備、頭に略帽、飛行ゴーグルを装着。右側から九九式13ミリ機銃（投擲装備）が出てきた。

すると、ミーナが洋介にある物を渡した。

「桜井さん、これを耳に嵌めてください」

「ん…？これは？」

「それは私たちウィッチたちの小型無線機のインカムです」

「い…インカムか…便利な代物だな」

洋介は、最後に自身の耳に、渡されたインカムを装着。

「よし、じゃあ、始動してみろ」

「了解!!」

洋介は不思議だった。初のストライカーユニットを扱うのに魔法力の注ぎ方が手に取るように分かった。

いつも愛機に乗っている感じと同じであり、彼は目をつぶり、スーっと息を吸いそして

「(よし…いくぜヨ…相棒!!) コンタクト!!」 ヴウオオアアアーーー ゴオオオオオオー

そういうとユニットのエンジンがかかり爆音が鳴り響き、風が吹く。そして地面には魔法陣が展開される。

「う……風が！目が開けられない……」

「すごい音……！」

芳佳は強風のあまり目が開けられず、リーネは驚いていた

「すごい！男性でも魔法陣だわ！」

「スゲー！」

「桜井洋介、零戦64型、行きまーす!!」 ギュオオオオオオオオ

洋介は滑走路から離陸、飛行した。

「はっはっはっ！あいつは一発でなかなかやるな!!宮藤、リーネ！お前たちも桜井と訓練も兼ねてひとつ飛びしてこい!!」

「はいっ!!」

ドーバー海峡上空

「凄い、飛んでいる！飛んでいるんだ〜！」

「洋介さーん!!」

洋介の後方から、ユニットを履いた芳佳とリーネが飛行して追いついてきた。

「どうですか？生身で飛ぶ感想は？」

「芳佳、リーネ。最高だ!!この興奮は予科練の初訓練飛行以来だ!!俺は鳥だ、鳥になったんだ!!…64型がこんなに性能が良い機体だったのか!?飛んでいる君たち、空飛ぶのらくろだな♪」

洋介の興奮は止まらなかった。狭い操縦席の中とは大違い、暫く飛んでいると

「……ねえ洋介さん…」

「ん?どうした?」

「洋介さんは元の世界に帰りたくはないのですか?」

「そうですよ……家族が心配するんじゃない?」

「……そう言えば考えてなかったな…」

芳佳とリーネの質問で洋介は思った、あの時は戦闘中だったため、戦死した。

故郷に帰っても家族の妻である雪は意識不明で娘を残し、心残り。そう思った時に、海面を目撃、なにかが飛行していた。

「おい……二人とも、海面に……」

「あれは……っ!? ネウロイ!!」

「なにっ!？」

「なんで、ここに?」

「おそらくリーダーに探知されんように、低空飛行したんだろ!こちら、桜井! ネウロイ発見!!これより追撃する!」

『了解！こちらに向かう、3人で時間を稼げ！』

「了解！芳佳、リーネ！いくぞ!!」

「り、了解!!」

ユニットを履いて初飛行の中でネウロイと遭遇、敵に向かって降下。

敵であるネウロイに目視まで接近、フォルムは前の世界で闘った露の忌まわしいシュトゥルモビク型であった。

「リーネは後方で援護射撃、芳佳は俺とついて来い!!」

「り、了解!!」

リーネが銃身に向けて射撃、左翼に命中、バランスを崩すも直ぐに回復して元通り、シュトゥルモビクが二人に向かい、ビームを放った。

芳佳は円状のシールドで防ぎ、洋介は何と回避した。

「芳佳！何だそれは!!」

「シールドです!!ウィッチが持つ能力の一つです!!洋介さんも両手でかざして!!」

「……」……うか……?」

「あ……あれ……洋介さん?」

洋介は芳佳の真似ながらやったが、シールドが出なかった。それをインカムで聞いたミーナが洋介に質問した。

「『シールドが出ない!!……もしかして、桜井さん、……あなた年齢は……!?!』」

「ん……年齢?!……俺は丁度二十歳です!!」

ミーナは愕然とした。ウィッチは二十歳前後にシールドの効果が薄れ、使えない。

洋介と芳佳はネウロイの背後をとって射撃したが、ネウロイが後部からビームを洋介に向けて放った。

「しまった!!（くそっ…あの時の再現だ…無念…）」 バシユッ

「洋介さん!!」 ああっ…」

ビームが洋介に命中、大爆発した。

だが、煙が止むと洋介は左腕でシールドを翳し、無事だった。

「あ…危なかった…!!…何だ!?…これが…シールドか…」

「洋介さん!!大丈夫ですか!?!」

「ああっ!心配かけてすまん!今から反撃する!いくぞ!!」

「はいっ!!」

洋介と芳佳は再びネウロイの背後に付き、ネウロイがビームを放つも、二人はシールドで防ぎ、徐々に接近した。

洋介の額に稲妻が走り、コアはシュトゥルムモヴィクの操縦席に確認した。

「見えた、コアは操縦席にある!」

「だったら風防を狙えば!」

「よし!俺は右翼、芳佳は左翼を銃撃、バランスを崩したらリーネは風防を狙え!!」

「はい!!」

二人はネウロイの両翼を銃撃、バランスを崩したところでリーネが風防を狙撃、コアが露出した。

だが、すでに3人の弾薬が消耗、洋介は機銃と小銃を芳佳とリーネに渡し、腰に装備した軍刀を抜き、速度を上げてネウロイの真上に接近した。

「これで止めた、一刀両断!!」 スパアアアン

魔力を込めた軍刀でコアを斬り、ネウロイを撃墜した。

破片が散りばめる中で、美緒たちが到着、洋介たちは報告した。

「はっはっはっ！桜井よ、よくやった!!」

「いえ坂本少佐、俺だけではありません。この2人がいたからこそです!!」

「桜井、私に少佐はいらん。さん付けで構わない!」

「はっ!……坂本さん!（坂本さん、厚木隊長と沖田さんみたいだな）」

洋介が答えた時、芳佳が近づいてきた。

「でも、洋介さんもすごいですよ！」

「そうですよ、刀でネウロイを斬り倒したところが…」

「坂本さんみたいでした！」

芳佳とリーネは洋介の戦いぶりに興奮、二人の言葉を聞いた美緒は目の色を変えて、洋介の腕を掴んだ。

「そうか、よしつ桜井！基地に帰ったら訓練、剣術で私と付き合え!!」

「えっ…ちよつと坂本さん…」

「はっはっはっ、遠慮するな！扶桑男児もとい、ウィザードならなおのことだ！」

「ちよつと待って下さい坂本さん、俺は日本男児です!!」

「どっちでもよい！宮藤とリーネ、帰還したら訓練だぞ！」

「はっはい！」

基地に帰還後、3人は夕方まで訓練訓練また訓練、洋介は2人以上に美緒と剣術に付き合わされ、終わるころにはヘトヘトになった。

「やるな〜桜井！」

「いえ、俺は元の世界でも常に剣術を…たまに、小隊の隊長と剣術を交わしていました…」

「そうか、いつでも剣術のトレーニングにつき合って貰うぞ!!」

「はっはい、坂本さん!!」

それから洋介は正式に配属してから早1週間、基地の雰囲気にも慣れた。だが、女性

の下の光景も。これは慣れちゃいけないものに慣れた気がした。だが、慣れないのが坂本美緒による滑走路10周ランニング。

「ハア…ハア…洋介さんすごいですね。私なんて5周で限界でしたよ」

「…私も…」

「…俺も…予科練時代でかなり…しごかれたからな。ペースを落とせば10周追加されたし…」

「……なんか大変ですね、洋介さんも…」

「……！まだ訓練が残っているぞ!!」

「「は、はいっ！」「」

竹刀を持った美緒が、洋介に質問した。

「桜井！この海の先に何がある!？」

「欧州です!!フランス…いえ、ガリア、カールスラントなどがネウロイに占領されています!」

「そうだ！お前はウィザードとして、ウィッチ達とそこを奪還せねばならない！その為には訓練、訓練、更に訓練だ!」

「はっ!!（そうだ、世界が違えどあそこは虎雄の妹の晴香さんと弟の勇介が眠っているドイツへ行かねばならん!）」

洋介はこの世界について色々と勤勉、最低限の国名を学び、そして、異世界でも自身の兄弟と戦友の妹の地へ赴かなければならなかった。

夕方、洋介は美緒とストライカーユニットで訓練飛行、剣術にもつきあわされ、大抵引き分けと数回勝敗した。

「んゝやつと終わったけど結構堪えるな、…予科練以来だな、こういう訓練」

「おい、ウィザード」

「はっ！…バルクホルン大尉？」

体力を使い果たし、寝転んでいた洋介はバルクホルンが来ていたことに気付き、立ち上がって敬礼をしたが

「ここは最前線だ、常に即戦力が求められる」

「……………」

「ウィザードになってから調子に乗るな、死にたくなければ故郷に戻れ」

「…故郷ですか…生憎、俺は元の世界で幾多の激戦を経験しているんで…それに、簡単に

帰れるなら苦労はしません。」

「……………なに？」

「何でもないですよ、大尉。それじゃこれで」

「……………異世界か……………馬鹿馬鹿しい」

訓練の終了後、洋介は滑走路の先端部に居座り、胸ポケットから写真を取り出した。
その後、芳佳とリーネの二人は並んで滑走路の先に座る。

「洋介さん。ここ、私のお気に入り場所なの」

「うん。何度見ても、綺麗な場所だよね」

「うん」

「…確かにいい夕日だ。外地、南方のラバウル……ニューブリテン島とトラック諸島を思い出すな…」

「ニューブリテン島……？トラック諸島……？」

「教えてくださいね。洋介さんがいた世界を…」

「ああ……いずれな。……雪、亜弥。父さん、母さん、志帆姉さん、勇介、濤さん。厚木隊長……沖田さん……虎雄……進次郎……幸吉……トチローさん、トチコさん……晴香さん……純子さん……柚子さん……僕は魔女がいる世界でも頑張るよ……」

洋介は夕日が沈む大西洋の海を眺めた。あの南方の思い出を……

ブリタニア 作戦指令部―

ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐は指令部に招集を受けて、ブリタニア首相チャーチルと空軍大將トレヴァー・マロニーに戦況を報告した。

「無事、扶桑からの増援と補給が届いたようだが…」

「坂本少佐及び、補充要員ウィッチー1名、宮藤芳佳が着任しました。通常通り、軍曹待遇としてやります。」

「戦力の強化は有り難いことだ。それに先日、報告書を見たが、我が国の近海に出現した男性ウィッチは？」

「桜井洋介。扶桑皇国海軍中尉です。先日の襲来した敵を撃墜し、我々ウィッチーズ部隊に編入させて、強化を図ります。」

「うむ」

「しかし最近、ネウロイの襲来が不定期になっているじゃないか…」

「確かに、今までの週一回のパターンから徐々に感覚が狭まっています。」

「今のままで行くわけにはいかんだろうな」

「現場を無視したまま空論を押し付けるのは御断りしたはずですが」

「んん…?」

その言葉でマロニーは眉間にシワを立て、チャーチルが咳払いした。

「結果が出させれば良いのだよ。」

「ご安心下さい、ブリタニアの…いえ、世界の空は、私たちウィッチーズが守ってみせます!」

ミーナは自信に満ちた言葉を宣告した。

第4話　ありがとう

食堂―

「あ、洋介さんおはようございます」

「おう、おはよう。朝食ご苦労さま芳佳」

洋介はカウンターを挟んで二人に話しかける。

「そうだ洋介さん、知ってますか？カウハバ基地が迷子になった子供のために出動したんですよ」

「すごいですね！ たった一人のために動くなんて！」

「…そりやすごいな…まあ、軍隊は国を護ることと、いざとなれば人命救助も任務の内だから…俺の元いた部隊も、遭難者や迷子、あと国内の空襲災害時に派遣したから…」

「へえ…そうなんですか…やっぱ、一人を助けられないと、みんなを助けるなんて無理ですよ！」

「……………」

「？…………どうしたんですか洋介さん？」

「えっ？…………いや何でもない…」

芳佳とリーネの言葉で、ついこの間まで防空任務に就いていた。

だが、洋介が戦った空で敵の爆撃機と戦闘機を撃墜したにも関わらず、幾人の犠牲者が出てしまった事を悔やんでいた。

「みんなを守る、確かに大切なことだが……」

「みんなを助ける……そんなの夢物語だ」

「!？」

突然隣から声が聞こえた。その言葉は洋介が思ってたことを言っているように聞こえた。

「バルクホルン大尉？」

「すまん……独り言だ」

「……………」

その後、しばらくして501全員が食堂へ集まってきた。洋介も食事を受け取って適

当な席にむかった。

「おーい洋介、こっちの席空いてるよ」

「おう、ありがとう。ハルトマン」

その席にはエーリカのほかに、シャーリーとルツキーニが座っており、笑みながら洋介を見つめていた。

「ん……？どうしたんだ……俺を見つめて……」

「ねえ、洋介、♪」

「写真に写っている洋介と」

「この女性はだれ、な、の、♪」

「ん……？あつその写真っ!?かえせっ!!」

「言ゝわなゝいとゝ♪」

「返さゝなゝいゝよゝ♪」

「誰が言うかつ!」

洋介は、44年の呉で妻となった雪の二人写真を取り返すのに、三人のウィッチと奮闘した。

「あなたたち、御食事中静かにしてくださいまし!」

「う……す……すまない……」

騒いってしまった洋介は、気まずい雰囲気になった。

「それに大尉？」

「そうね、元気ないわねトウルデー…」

「……………そんなことない」

「でも手が止まってるぞ」

「そうだね、食事だけはしっかりとるのにね」

「……………」

「……………」

バルクホルンは無言のままスプーンを動かし始めて、ミーナ中佐とハルトマンは困ったような笑顔を浮かべていた。

「おかわりー!!」

「あ、はい!!」

芳佳がルツキーニにお代わりのボールを持って走ってきた。

「……………」

「あの…お口に合わなかったですか？」

「……………」

「あ……………」

何も言わずバルクホルンは席を立って行ってしまった

「……………」

洋介はバルクホルンとはあまり交流がなく、何か思いつめているように見えた。食べている最中、ペリーヌと芳佳が言い争っていた。

「どうしたんだ？二人とも」

「あ、洋介さん。なんか納豆が、お口に合わないみたいで…」

「当たり前でしょ！こんな腐った豆なんて食べられませんわ!!」

「ん…ペリーヌ中尉。だがここは最前線だ、食べられるときは食べてたほうがいい、いっつ糧食が持つかわからない」

「ぐぬぬ…それに桜井中尉、なんで宮藤さんと同様、坂本少佐と付きつきりですか!?!」

「上官の指示で動いています。俺は帝国海軍軍人だ、上官の命令は絶対です。」

「なら、模擬空戦で勝負ですわ！わたくしが勝ちましたら、少佐に近づかないでくださいまし！」

「いいでしょう。丁度、武器を試したいなと考えたところ。俺が勝ったら…」

ペリーヌはハナから洋介のことは異端であるウィザードは基より、男がウィッチーズの一員として認めていなかった。

ブループルミエ（青の一番）と称された、ガリア空軍トップエースの意地がある。

洋介とペリーヌはユニットを履いて滑走路を離陸、地上には芳佳や少佐たちが見物していた。

洋介が対峙するペリーヌ・クロステルマン。ガリア空軍が誇るトップエースのウィッチだった。

「いっけー洋介！」

「ペリーヌさんしっかりー!!」

「はっはっはっ!! 見ものだな」

審判はルツキーニが務め、合図を出した。

「行つくよー! よーい…」 パアアアン

二人は空中戦に入り、ペリーヌは先制して洋介の背後にまわり、機銃を向けた。

「くらいなさい!」 シュンツ 「なっ…き…消えた、一体どこに…!」

背後に殺気を感じたペリーヌは、ゆっくりと頭をうしろにむけたら、洋介が四式小銃と13ミリ機銃を構えていた。すると

「ばんばんばん! だだだだだだだだだだだつ!!」

と、言葉で言った

「ペリーヌ機を撃墜成功!!」

洋介はいたずらな笑みを浮かべた。だが、ペリーヌの表情が赤くなった。

「なら、もう一戦を受けてくださいまし!」

「いいでしょう!」 スチャツ ギュオオオオオオオ

洋介は武装を軍刀と拳銃に変換、二度目の空中戦が始まった。ペリーヌはすぐさま洋介の背後を執り、機銃の引き金を絞りかけた時、洋介は速度を減速して拳銃を発砲。

「きゃっ!!……………えっ……………」

洋介が拳銃（ペイント弾）で当てたのはペリーヌのブレン機銃であり、抜刀した軍刀で彼女の喉元に刃を近づけた。

「ペリーヌさん撃墜成功。…さて、模擬空戦を終了。基地に帰投しましょう」

軍刀を鞘に納め、滑走路へ向けて洋介が先行した。

「え……………ええ…………」 スチャ ダダダダダダダダッ

ペリーヌは無意識に機銃を洋介に向けて発砲。だが、撃った弾が洋介には命中せず右に流れ逸れていた。

「……………はっ……………わたくし……………が……………なんて事を…………………………」

ペリーヌは正常に戻り、手が震えていた。インカムからミーナが出た。

『「ペリーヌさん！今の発砲はなに!？」』

「…そ…それは……………」

「それは俺に向けて撃てと命じました！ユニットを履いたばかりでために、ある飛行技術を試したかったのです!!」

「(さ…桜井中尉……)」

「『…わかりました。…二人とも、帰投してください。……………』」

「了解!!」 ギュオオオオオオオオン

基地に帰投後、ペリーヌは洋介の海軍パイロット名物の手作りである納豆の細巻きを食べる罰を受けていた。

「あ…いけますわね……」

しかし、味は旨かった。隠し味に紫蘇の葉を刻んで入れていた。洋介は格納庫で64ユニットを整備員たちと整備していた。

「……………これで良し……………スイマセン中尉、中尉も手伝ってくれて」

「構わんよ。俺もパイロットと言え、少しでもストライカーユニットの知識を頭に入れないと、先任の整備班長の言い付けで生き残れない、いつも感謝します」

「中尉……あと我々がやっておきますので」

「ああ、頼みます。」

その場をあとにして、廊下を歩いているとそこに芳佳がモップを手に掃除をしていた。

「感心だな、ん……あぶない！」

「ふう……（カツ）え……」

芳佳がモップを後ろに向けたらなにか当たる音がした。振り返ると

「よう芳佳……、ペリーヌもあぶなかったな……」

そこにはモップの柄を左手で抑えた洋介とペリーヌがいた。

「えっ！洋介さん!?えっと、あの…ごめんなさい!!」

「いいよいいよ、大丈夫だから。それと掃除をするときは周りに注意しろ、危うくペリーヌにモップが当たるところだったぜ。」

「えっ、そうだったんですか！大丈夫ですかペリーヌさん？」

「そのセリフ、そのまま桜井中尉に送りますわよ…」

「あ、はい……………」

「…大丈夫だ。じゃあ芳佳、これから気をつけて行動するようにしてくれよ」

「あ、はい…」

洋介はその場を後にしようとしたとき、何か視線を感じた。その先にバルクホルンとハルトマンがいた。

そして芳佳と目が合った途端その場から離れた。大尉の目がなにかかわいそうであつた。

「…中尉…桜井中尉…!」

「……ん……?」

「先ほどは庇ってくれてありがとうございます。（それと、模擬空戦の際と手作りの料理も／＼）宮藤さんも次からは気をつけてくださいね」

ペリーヌはお辞儀して、頬を赤くしながらその場を後にした。

「あ、あの洋介さん…本当にごめんなさい。私失敗ばかりして……」

「心配するな芳佳、人間は失敗する生き物だから。俺もこう見てもドジをすることもあ
る。大切なことは、その失敗で何か学んでいくことが大事なことだ。」

「そうなんですネ…洋介さん、洋介さんはなんで軍隊に入ったのですか…？」

芳佳の言葉で洋介は制止した。

「……お国と家族の為に」

「お国と家族の為にですか？」

「ああ、俺は15歳の時に災害で両親を亡くし、俺と弟は軍隊に入隊した。俺は海軍の戦
闘機パイロット、弟は陸軍の戦車兵。姉さんは赤十字の看護婦として、お国の為に。4
2年初陣で戦い、44年9月に幼馴染みと結婚して、翌年に娘が生まれ、また家族の為
に生き抜く為に戦った…」

「ええっ!?……洋介さん、ご結婚なさったのですか！それに娘さんも!？」

洋介は内胸ポケットからシャリーたちから取り返した写真を芳佳に渡した。

「ああ、これが俺の妻だ」

「へえ、綺麗だな……あれ……この人が雪さん？」

「……っ！なんでそれを知っているんだ!?!／／／」

「洋介さんの緊急手術後、私が治癒魔法を掻けながら、ベットでうわ言で言いましたよ。雪……雪……と。」

洋介の顔が赤くなりながら黙り込み、芳佳が娘が映っていないことに気付いた

「あれ?……洋介さん、娘さんが映ってないですよ……」

「ははは……／／これは結婚前の写真だ……芳佳はなぜ、軍隊に入ったんだ？」

「……………私は最初戦争が嫌いでした。お父さんを奪った戦争が嫌いでした…でも私は決めたんです。実家はよろず屋診療所の医者の子ひとりっ子ですから。傷ついた人、病氣な人、たくさんの方のために私の力を役立てたい、そう思って私はウィッチーズに入ったんです。」

「……………そうか…君は医者の子か……………芳佳は強いな！」

「そんな！私は強くなありません！／／／」

「いいや強いゼヨ、精神で比べると俺よりもな……………」

「……………そうだ、洋介さんの奥さんと娘さんは元気になってますか？ご姉弟は？」

「つ……………」

「洋介さん？」

芳佳は洋介の姉弟と、妻子の言葉で固まった。

「妻は従軍看護婦として従事、…戦争末期の…軍港空襲で…意識不明の重体を受けた
…俺が防空戦闘していたその戦場で…姉さんは従軍看護婦で沖縄に…弟は戦車兵
で…ドイツ…カールスラントのベルリンで戦い…戦死した…」

「!?……洋介さんの奥さんも…姉弟も戦争で……でも洋介さんの世界にはネウロイがい
なかったんでしょ?」

「ああ…いない…けど、人類の共通する敵がない世界は、人間同士が戦争する世界だ
…」

「え?」

「戦争の火種は幾つかある。資源や、領土、人種。平和だった期間は10数年に過ぎない
…」

「……………辛くはなかったんですか？」

「辛くないと言えば嘘になる…俺はあの戦争で多くの戦友を失った…隊長と先輩や同期と友人、部下たちが…俺は戦争が終結した時、人を殺して罪を犯した。だけど芳佳、一般人と軍人の違いはこの軍服を着ていることだ…国や大切なものを守る為に、血で汚れる。それが俺たち軍人だとそう思っている」

「……………」

「……………暗い話をしたな…それと…治癒魔法をありがとう。礼が遅れてごめん」

「いえ、いいんです…その…最後に…娘さんの名前は…なんですか？」

「…亜弥（あや）だ。生後1カ月とちよつとだ。妻の電報の知らせで読んで、たった1日の休暇だったが、抱いた時は良かった。妻が入院している間は妻の知り合いに預けている。」

「亜弥ちゃん、いい名前ですね。」

さつきまで辛く暗かった洋介は少し明るく、笑みを浮かべた。その表情をみた芳佳は安心した時、二人の前でミーナに会った。

「あつ宮藤さん、桜井さん。ちようどよかった。」

「あつ…なんですかミーナ中佐？」

「1500時になったら、テラスに集合してくださいね♪」

「はい…」

そして1500時、ウィッチ全員集合した。テラスにやってきた洋介の目に映ったのは、綺麗に並んだケーキと紅茶だった。

「まさか…異世界に来てお茶会をやるとは…シンガポールの、イギリス人が経営している喫茶店で六勇士と飲んだな〜♪」 クイツ 「(…ん…茶菓子が美味しい…)」

「作戦室の報告では、明後日が出撃の予定です。なので皆さん、しっかり英気を養うように」

「ああ、…宮藤とリーネ、それに桜井はこのあと訓練だ。」

「はい、わかりました」

「了解」

そういい芳佳は紅茶をススツと飲んだ。

「もう…下品なんですから…」

「え?……」

「芳佳ちゃん、紅茶は音を立てないで飲むの」

「え！あの…ごめんなさい／＼／＼／＼／＼／」

「しかし桜井さん、あなたのカップの持ち方が独特ですね」

ペリーヌが洋介に気付いたのは、洋介のカップの持ち方は、カップの取っ手を持たずに片手の指先で淵を掴んで飲んでいた。

「ん？…これか、前の東南アジアのシンガポールでイギリス兵捕虜、こつちではブリタニア兵の捕虜が経営している喫茶店で…仲間と付き合わされたとき、紅茶を啜り注意を受けてティーカップの取っ手が折れて、落として割ってしまった。そのあと将校に叱られたな…以来取っ手を持つのが怖くなった…」

「洋介さん、ブリタニアの捕虜と…」

「フフフ。桜井さんもお茶目なところがありますのね。」

「／／／／／…ほつといてください…、それにリーネ、ブリタニア捕虜の関わりは俺の単なる交流だ」

「そうですか……良かった…」

リーネは胸を撫で下ろし、ホッとしていた。

お茶会が終わり、午後の訓練も終わった後、洋介は食堂に向かった。

「…痛てえ…もつと鍛えねば…ならんな…」

芳佳たちの訓練が終わった後、洋介は坂本美緒少佐と剣術の稽古まで付き合い、心に悩みがあつたために、結果は引き分け1回、負け多数であつた。

食堂に入るとミーナとバルクホルンがいた。

「バルクホルン大尉！」

「今回はどうするの？」

「いつも通りしてくれ」

「でも、少しは手元に置かないと…」

「衣食住全部出るんだ、必要ない」

「そう………」

朝のように困った顔を浮かべながら、ミーナは離れていった。

そして、洋介は基地の資料室で世界の状況に関して学んでいた。

「……第1次ネウロイ大戦……扶桑海事変……ヒスパニア戦役……カールスラント撤退戦……リバウ撤退戦……」

人類は怪異ことネウロイの出現で古代から今日まで攻防が続いていることを実感する時、ミーナは手に持っていた封筒を洋介の元に持って来た。

「桜井さんちよつといいかしら？」

「なんですか中佐？」

「はい、どうぞ」

洋介はミーナの前で立ち上がり、彼女から封筒を渡された。

「これは…？」

「お給料よ、半月分だけだね」

封筒の中は、洋介がいた部隊の給料の倍の数であった。

「は、半月分!?これですか!?……もしかして、いつ戦死するかも知れない最前線だから、せめてお金にはつ……て配慮ですか?」

「ええ、そうよ。よくわかったわね」

「俺の部隊も似たような感じでしたから……恩給として……」

「そうなの……」

その時、洋介は質問を変えた。

「そう言えば、先程なぜバルクホルン大尉は受け取らなかったんですか?」

「……………桜井さん、カールスラント撤退戦って知っていますか?」

「え?ああ……確か、国民全員をイギリス……いや、ブリタニアか……このブリタニアに避難させたって話しか……少しでも、この世界が知りたくて学びました」

洋介はこの世界情勢である程度の国名や知識、歴史を学んだ。

日本Ⅱ扶桑

イギリスⅡブリタニア

アメリカⅡリベリオン

イタリヤⅡロマーニヤ

フランスⅡガリア

ドイツⅡカールスラント

ロシアⅡオラーシャ

フィンランドⅡスオムス

「そう、そのカールスラント空軍のウィッチの中に、わたしとエーリカ、トウルーデも戦ったのよ」

「確か、3人はカールスラント軍でしたね」

「ええ、その時私たちは撤退支援のためにネウロイと戦い、そのネウロイを撃墜したのだけど……」

「けど？」

ミーナはそこで顔をかしめ

「撃墜したネウロイの破片が街に大量に落ちて、破片が落下した先に逃げ遅れた人がいたのよ……」

「……まさか……」

「ええ、…それがトウルーデの妹さんのクリスマスさんよ」

「!？」

「幸い命に別状はなかったけど、意識不明で入院中よ。給料も全部に出しているわ…でもトウルーデは妹と国を守れなかったことを今でも後悔しているわ…」

「そうですか…そんなことが…（そうか、だから大尉はあんな目をしていたのか…）」

「桜井中尉」

「はい！」

「あなたは前の世界の小隊長を務めていたから、今後は私と坂本少佐の補佐官として務めて貰います」

「ミーナ中佐、了解しました!!」

洋介は上官であるミーナに敬礼した。後日―

「よし、今日は編隊飛行の訓練を行う!! 私の一三番機にはリーネ、バルクホルンの二番機は宮藤だ！」

「はい！」

「え……?」

芳佳はバルクホルンを見た

「……………」

「どうした宮藤!!返事はどうした!!」

「はっはい!!」

「俺はどうなりますか、少佐!？」

「今は人数が足りないからな、桜井はこの飛行が終わった後、リーネと交代だ!」

「了解です!!」

その後、4人が大空に飛び去っていった。洋介はいつでも出撃できるように格納庫に向かった。そこにペリーヌがいた。

「ん……ペリーヌ中尉」

「あ…桜井中尉、なんでここに？」

「俺もこのあと訓練飛行だから、いつでも出撃できるようにユニットを履いて待機しよう。ペリーヌも同じか？」

「ええ、そうですわ。訓練で腕を上げるために。なんであの豆狸が少佐と付きつきりなのでしょう…」

ペリーヌの言葉を聞いた洋介は、目つきを変えた。

「…ペリーヌ中尉…きみの敵はなんだ？」

「え……もちろんネウロイですわ。」

「きみは、宮藤芳佳にライバル心を持つのは構わない、いつまでも味方内でライバル心を持てば敵であるネウロイが得する。」

ウウー ウウー ウウー

「…っ!? 警報!!」

洋介がラバウル時代、給士のトチコが言われた言葉述べる時、基地にけたたましい音がなり響く。

洋介には戦時で忘れたこともない空襲や敵機来襲を知らせる警報だった。

「桜井さん！ペリーヌさん！」

「ミーナ中佐！」

「今すぐ出撃して！ 私たちも出撃します!!」

「了解!!」

洋介とペリーヌはすぐにユニットを履き、ユニットのエンジンを回した。

「コンタクト!!」 ブルルルルルン 「桜井洋介、行きます!!」

ギョオオオオオオン

空域はFA GE07 AT15 一万5000に侵入。
飛び立って数分、洋介たちは坂本に追いついた。

「最近奴らの出撃サイクルにぶれが大きい…」

「カールスラント領で何か動きがあったらしいけど…」

「カールスラント!？」

「どうした、バルクホルン」

「……大尉……」

「よし、隊列変更だ！ペリーヌはバルクホルンの二番機、桜井と宮藤は私とケツテを組め！」

「了解!!」

「また、あの豆狸！」

「ふえっ!!」

芳佳を睨みつけるペリーヌ、美緒は気づかず、彼女は魔眼で索敵を開始する。そして

ネウロイの姿を捉えた。

「敵発見!!」

「バルクホルン隊は突入!!」

「少佐は援護に！」

「了解だ！ついて来い宮藤、桜井!!」

「了解!!」

「はい!!」

洋介と芳佳も武器を構え坂本少佐に続いた

「くらえー!!」

ネウロイに接近して13ミリ機銃弾を叩き込む。そして離脱して、また攻撃する。

「なかなか装甲が厚く削れん、だったらロケット弾で…ん…？」

今の状況を確認をしようと洋介は周りを見た。

「…バルクホルン大尉の動きが変だ…」

洋介から見てバルクホルンの動きは2番機であるペリーヌを完全に無視をしていた。これは編隊飛行戦闘では致命的な失態だった。

「何を焦っているんだ、バルクホルン大尉は!!」

「どうした桜井!」

「少佐、バルクホルン大尉の動きが変です!!」

「なんだと!?…確におかしい、いつもは必ず自分の2番機を必ず視界に居れている」

バルクホルンとペリーヌが削ったところにリーネの対戦車ライフルが直撃、それに怒ったネウロイが大量のビームを発射。洋介とウィッチたちはシールドで防ぎ、回避行動を行った。

「っ!?あの…馬鹿!!」

「バルクホルン、近づきすぎだ!!」

美緒は叫んだ。だが、そのあと衝撃的なことが起きた。

ネウロイが放ったビームを回避するまではよかったが、その先にペリーヌがいた。そして

「きやつ!」

「っあー！」

二人は激突、そしてネウロイはバルクホルンにめがけて、ビームを放った。

「っ！まずい！！」

洋介はバルクホルンへと向かうが間に合わず、ネウロイのビームはバルクホルンの弾倉に命中、機銃が爆発した。

「ぐっ…ああっ！！」

そのままバルクホルンは落ちてゆく

ギョオオオオオオン 「間に合えええええええ！！」

「大尉っ！！」

「バルクホルンさん！！」

洋介に続き、芳佳とペリーヌも急降下、3人はスピードを加速させ、洋介は地面に激突する前にバルクホルンを空中で受けとめた。

「よかった…間に合った…」

「急いで手当てを！」

3人はそのまま減速して地面に降り立った。

「胸からひどい怪我をしている。…芳佳、頼む!!」

「はい!!」

洋介は第三種軍服の上着を脱いで地面に敷き、バルクホルンをその上に寝かせた。

そして、芳佳は慣れた手つきで軍服の胸元を開ける。側にいたペリーヌは身体が震え、動揺した。

「わ、わたくしのせいだ…どうしよう…」

「出血が…このままじゃ動かせない。ここで治療しないと…」

「お願い…大尉を助けて!!」

芳佳は力強く頷き、治癒魔法を発動させた。彼女の両手から青白い光が溢れ出す。

「焦らない…ゆつくりと、集中して…」

「…これが治癒魔法か…」

しかし、ネウロイが容赦なく人命を救助をしていた芳佳たちにビームが放たれた。

「しまった！一か八か…」 スツ スパアアン

腰に帯刀していた愛刀の鷹狼を抜刀、ネウロイのビームが芳佳たちに当たらず、ビームを斬り裂いた。

「……シールドを張らずに、刀でビームを斬った…」

「凄い…」

「芳佳、できるだけ早く頼む！……なにぼさつとしているんだペリーヌ！大尉を助けたければ、シールドを張って守るんだ！」

「はっはい!!」

「……ぐっ！うう……」

「バルクホルンさん！今治しますから」

ネウロイはビームを次々と放たれ、洋介は軍刀で引き裂きながらその場で指揮を執り、ペリーヌはシールドを張った。芳佳は懸命に治癒魔法の効果がでたのか、バルクホルンの意識が回復して目が覚めた。

「…私に張りついては、お前たちも危険だ…私に構わず…その力を敵に使え…」

「嫌です！必ず助けます！仲間じゃないですか！！」

「そうですわ大尉！先に回復を！！」

「敵を倒せ、…私の命など…捨て駒でいいんだ…」

「あなたが生きていれば、もつともつと大勢の人を守れます」

「無理だ…皆を守るなんて…出来やしない…私は…たった1人でさえ…もう行け…私に…構うな…」

「っ!?!……」

バルクホルンの言葉を聞いた洋介は軍刀の取っ手を握りしめた。

「なんだと…ふざけるな…」

「なに……?」

「ふざけるなっ!!何が無理だ…何が捨て駒だ…簡単に言うなっ!!お前は残された者たちの気持ちを考えたことがあるのか!!」

「……桜井?」

「俺は、ミーナさんからすべて聞いた…」

「…そうか…なら話しが早いな…私にはもう、生きる資格なんて、誰かを守る資格なんてないんだ…」

「クリスを…妹さんのことはどうするんだ…あの子を孤児にさせる気か!!お前の妹はまだ生きているだろうが!!目を覚ました時『あなたのお姉さんは戦死されました』聞いたらその子がどんな顔をするのか考えたことあるのか!!それがわかって言っているのか!!」

3人は驚いた。あの桜井洋介が怒っていた。いつもは優しい桜井洋介の顔が、今は鬼のような形相になっている。

洋介は自分が怒ってる理由がはつきりとわかる。自分とは違う大切なもの、仲間や家族がいるのにそれをないがしろにしていることに怒ったのだ。そして、洋介の大切な家族を元いた世界と離れて失った洋介だからわかるのだ。

かつて、洋介の隊長、先輩パイロットたる厚木十三の記憶がよみがえった。

洋介が護衛していた味方機を見殺しにした責任を持ち、一時自決を図った時に殴られ、襟首のマフラーを掴み、怒っていた。

1944年6月、マリアナ沖海戦後

バシッ

『洋介、まだわからないのか!!お前に家族はいないのか!?!』

『…両親は…災害で亡くなりました…姉は従軍看護婦…弟は…戦車兵…エンゲ（婚約者）がいます…』

『…だったら、ラバウル六勇士の教訓を思い出し、残した姉弟と新たな家族のために死ぬな、生きろ!!そして、戦闘機乗りの任務を遂行しろ!!』

「俺が生きている間は誰も死にさせやしない！（すいません厚木隊長、あの終戦後の戦いで命令を守れず、俺はこの世界に来てしまいました）」

「……………」

「大尉、あんたの妹さんを悲しませるな…唯一の家族をひとりぼっちにさせるな…罪を滅ぼしたかったら生きて妹さんのために死ぬな。そんな不幸な思いは俺だけで十分だ……………」

「う……………」

「…ぬちどう宝！」

洋介はバルクホルンを見つめる。先ほどの怒りの目はなく、今はとても悲しそうな眼をして、以前にラバウルで幸吉から教えてもらった沖縄の言葉を述べながら涙を流した。

「ペリーヌ、…ここは任せた。俺は少佐たちと合流して、少しでも奴を引き付ける。頼めるか？」

「え？…ええ…わかりましたわ」

「頼む…!!」 ギュオオオオオオン

洋介はネウロイに向かって飛行した。

「あいつ…なんであんなに…」

「洋介さん、前に言っていました…」

「宮藤さん？」

バルクホルンとペリーヌの疑問に芳佳が答えた。

「洋介さんは、洋介さんの世界で両親は自然災害で亡くなり、起きた戦争でお姉さんと弟さんが戦場で行方不明…、…奥さんと娘さんと離れ、この世界に跳ばされました…」

「な…あいつは結婚を…」

「ええっ！…ご両親が…姉弟…奥さまと娘さんと…離れ離れに…」

「洋介さんがバルクホルンさんに怒ったのは、自分の家族、大切なものを失ったからこそ怒ったんです」

「……桜井中尉にそんなことが…」

「……そう……か…」

バルクホルンは涙ながら呟き、洋介が言ったことを理解した。

そしてどれだけ自分が愚かだったことを。そして決意した。自分はまだ死ねない、祖国を取り返すために、仲間のために、家族のクリスのために、そして自分自身のためにも

「……宮藤、頼む……早く傷を治してくれ！」

「……はい!!」

「あの敵は、私が倒す!!」

バルクホルンは上空にいるネウロイを睨んだ

ギユイイイイイン 「くらえっ!!」 ダダダダダッ バンバンバン

洋介は坂本たちと合流、機銃弾と小銃弾をコアがある部分を射撃して、徐々に装甲が剥がれた。

「よくやった桜井、留めを刺せ!!」

「了解!!…しまった!弾切れだ!」

洋介は機銃と小銃をしまい、軍刀と拳銃を取り出した。

「まだ未完成だが、やるしかない!」

洋介はネウロイのコアをめがけてスピードを加速、拳銃を乱射して軍刀を構えた。

「頼光斬!!」 スパアアン

「おおっ!!」

「やったか!？」

だが、さっきの斬り技が外れ、コアの表面を斬ったに過ぎなかった。洋介の魔法力もさっきのブームを跳ね返すのに使ってしまった、少なくなっていた。

「……」までか……」

洋介が呟いた、その時

ギョオオオオオン 「あとは私に任せてくれ！」

そこには急上昇して傷を治したバルクホルンがいた

「大尉……」

「すまなかった……それとありがとう桜井、今度こそみんなを守ってみせる！」

バルクホルンは、ネウロイに突っ込み、機銃をネウロイのコアにめがけて撃ち、ネウロイを撃墜させた。するとそこへミーナが飛んできた。

「ミーナ…」 パーン

ミーナはバルクホルンの頬をひっぱたいた。

「何をやっているの!?! 貴女まで失ったら私達はもう失ったらいの! 故郷も何もかも失ったけど、私はチーム…いいえ家族でしょ! この部隊の皆がそうなのよ! ……あなたの妹のクリスだって、きつと元気になるわ。だから、妹の為にも、新しい仲間の為にも、死に急いじゃダメ!!」

ミーナはバルクホルンを抱きしめた。

「すまない…私達は、家族だったんだよな…ミーナ、休みを…休みを貰えるか…見舞いに行ってみる」

「…ええ、…もちろんよ」

「やつと行く気になったな」

洋介の右肩に手が置かれた、それは怒りに満ちていた坂本美緒であった。

「桜井、なんだあの剣術は！未熟にもほどがある！基地に帰投したらすぐに訓練だ!!」

「はっはい!!」

「それにいい技だから、私にも教えて貰うぞ！」 ギュオオオオオオン

「わかりました!!」 ギュオオオオオオン

翌日、バルクホルンは妹のクリスが入院している病院へと向かった。一方、洋介はいつもの倍以上に訓練を付き合わされ、特に剣術では夕方まで徹底的にしごかれた。

格納庫前には訓練を終えた芳佳とリーネが、洋介を迎えに行った。

「洋介さん、大丈夫ですか？」

「…ああ…、芳佳…：リーネ…今日の戦闘はいい活躍だったな」

「…そんな…／／…洋介さんも活躍したじゃないですか」

「…今日の俺は戦闘で足手まといなことしただけだ」

「そんなことないよ洋介、宮藤。」

「「ハルトマン」さん」

「二人ともトゥルーデを助けてくれてありがとう！」

「そんなことないですよ／／／／」

「そうだな…、妹さんの見舞いに行くことが、大尉の勇気だ。」

ブルルルルン 「噂をすれば、帰って来たね」

ミーナと帰還したバルクホルンは、ふと洋介と芳佳を見た。滑走路の脇からペリーヌが芳佳の元に来た。

「あ…ペリーヌさん…」

「…宮藤さん、一応…お礼に…」

「…そうなんだ。」

「（あの二人に礼を言わねばな…）」

その夜、洋介は軍刀の鷹狼を手入れしていた。

「……よし……終わった、そろそろ眠……（誰だ……？）どうぞ、開いてますよ」

ノックをしてドアを開けて入ってきたのは、バルクホルンであった。

「桜井、この夜分すまない……」

「バルクホルン大尉……いえ、いま武器の手入れを終えたばかりです。自分は大尉の……上官反抗を犯しました。軍法会議の覚悟はできています」

「いや……かまわない。お前が怒鳴らなければ、私は目を覚ますことがなかった。兄弟がいたら、こんなこと言われるかも……／＼／＼」

「え……？」

「いや…何でもない…／＼／＼…宮藤から聞いた、お前は姉弟がいて、既婚者で妻と娘と離ればなれになっていたとは…」

「いえ…姉さんは…従軍看護婦として戦場で行方不明、弟は戦車兵として戦場で…ベルリンで…戦死しました…胸が張り裂けそうに辛かった…あの時は祖国は敗戦して戦争が終わった。俺は故郷に…残した妻と娘の元へ帰れると思った…だが、戦いが続いていた…そして、俺はこの世界に……」

「…っ!?お前の弟が戦車兵、ベルリンで…!?」

その言葉でバルクホルンは驚愕し、洋介は彼女にある程度解説した。

洋介がいた世界の日本とドイツ、ウィツチの世界で言えば扶桑とカールスラントは同盟国。弟の勇介は対戦車戦の技術を学ぶ為に、お供の女性兵士と特別留学した。しかし、大戦末期に海路が遮断、帰国が絶望になり異国の地に外人部隊として奮闘。だが、国の攻防戦で民間や異邦人を守る為に首都ベルリンで散って逝った。

そしてバルクホルンは頬を赤く染め、洋介を抱きしめた。

「……桜井……元の世界が忘れられないのはかまわない、お前も私達の家族だ。……それに……／＼／」

「た……大尉……／＼／」

「……わかっている、……私をトゥルーデと……呼んで欲しい……命令だ……／＼／」

「わかった、……トゥルーデ……約束してくれ、何があっても妹さんを一人にしないでくれ」

「ああ……約束する……」

第5話 南方の過去

トゥルーデの騒動から数日後、洋介はミーナから御礼として基地の外出許可を頂いた。

「……………よしっ！こんなもんやな〜♪」

洋介は格納庫で、九二式側車付きバイクを整備して整えた。基地と空中でも欠かさずに軍刀と拳銃を装備したその時―

「洋介さ〜ん！」

「ん？芳佳、リーネ？……………どうしたんだ？」

「私たちもミーナ中佐から休暇を頂きました。」

「私も芳佳ちゃんと一緒に基地が指定する市街地へ行きませんか？」

リーネの発案で洋介は悩み気味だったが、直ぐに答えた。

「…そうだな。芳佳とリーネにしても乗りたかった船だ。側車に乗って、501が指定する市街地へ行こう！」

「はい！」

芳佳とリーネは洋介が運転するバイクの側車に乗車。リーネの案内で彼女たち501が指定する市街地に到着した。

「ここがブリタニアの、…リーネちゃんが…501が指定する市街地なんだね！」

「良いでしょ芳佳ちゃん。洋介さんもどうですか？」

「…ん、ああ。民間人だけじゃなく各国の軍人の兵士も滞在しているんだな。」

街にはブリタニアの民間人だけじゃなく、各国の軍人と兵士が滞在する。ブリタニアのネウロイ上陸に対しての備えと、欧州奪還に備えていた。

「洋介さん…町人はそこそこだけど、何だか軍人が多くてちよつと不安…」

「ん…そうだな…（どいつもこいつも、酒場へ出入り…いざと成れば、ネウロイと戦えるのか……）」

だが、洋介から見た光景は、ネウロイの備えに緊張感はなく、娯楽に尽くしていた。

「きやつ!？」

そう洋介が心配する時、リーネの悲鳴が聞こえた。

「おうっウィッチのお嬢ちゃん！」

「かなりの上玉だな、オレたちと遊ばねえか!!」

「やめて下さい！わたしは友達と……」

「きみは軍曹、オレたちは曹長。階級の下は上官に従うのは当然だろ！」

柄の悪い3人のブリタニア兵がリーネの手首を掴み、某店に入ろうとした。

「リーネちゃん!!」

「やめろ!! 貴様ら、どこの部隊の者だ!!」

「洋介さん！」

「なんだ、てめえは？」

「501所属。扶桑海軍中尉、桜井洋介だ!!」

「桜井…？」

「尉官様がなんで501のウィッチと同行しているんだ？」

「貴様らに説明している必要はない！そのウィッチを離せ、隊に戻れ!!」

「ははーん！てめえは501JFWのウィッチのヒモだな！男に飢えている自ら生け贄に…っ!？」

洋介は魔法力を発動し、軍刀を手に掛け、ブリタニア兵を威圧した。

「もう一度言う、ウィッチを離せ!!」

「わわ…わかった…わかりました…！」

ブリタニア兵は洋介を恐れてリーネを解放した。

「リーネちゃん！……リーネちゃん、大丈夫？」

芳佳はリーネの元に駆け付け、心配した。

「うん、大丈夫だよ芳佳ちゃん。洋介さん…」

「ひとまずだが、そこの喫茶店で休もう。」

洋介はリーネを横抱き喫茶店に入れ、芳佳は治癒魔法でリーネを手当てし回復させた。

「ありがとう…、芳佳ちゃん…」

「リーネちゃん、大したことなくてよかった」

芳佳はホッと胸を撫でいた。その光景を見て洋介は微笑んだ。

「あの…洋介さん…助けてくれてありがとうございます／＼」

「いやいや、…昔、フィリピンで味方が現地人を襲っていたことを思い出し、現地人をほっとけなくて助けた。僕の上官と部下と共に…」

「凄いなあ…」

「……芳佳とリーネ、仲が良くて良いな。」

「えへへ…／＼」

「洋介さんの世界でも、仲が良いお友達はいたのですか？」

「ああ、いたよ。予科練などの教育と精鋭部隊。これがその写っている写真だ！」

洋介の胸ポケットから写真を取り出した。幾つかの写真の中で教育時代や呉での三姉弟と仲間。そしてラバウル時代、写っているのは中央の最前列に隊長の厚木十三中尉と沖田新一郎少尉、原住民の少女サン。右側に沖田進次郎二等飛行兵曹と金城幸吉三等飛行兵曹、左側に桜井洋介飛行兵曹長と大賀虎雄一等飛行兵曹。後ろには零戦と零観、翼には双子の兄妹、秋山敏郎と敏子兵曹長。

「へえ、皆、笑顔で写っているな」

「この人が洋介さんの仲間さんなのね！訊かせて下さい……！」

「……そうだな……良いだろう……！」

洋介は一時躊躇ったが、話すことを決意した。

西暦1943年3月2日 ダンピール海峡上空にて5機の日本の戦闘機と水上戦闘機、観測機が日本の輸送船団を襲う米軍の戦爆連合と交戦。

その内の一機の零戦22甲型が闘っていた。

「墜ちろ!!」 ギュイイイン ダダダダダ 「よしっ! B—24 撃墜!!」

桜井洋介がまだ未成年だった頃、小隊の一員で飛曹長に昇進。ラバウルに着任して以

来の空戦で幾つもの敵機を撃墜した。

『桜井、沖田！燃料がそろそろ危うい、ラバウルに帰投するぞ！』

「了解!!」

洋介と仲間の沖田進次郎二等飛行兵曹と隊長である厚木十三中尉の元に集い、ラバウルに向けて飛行する。その途中で零観と二式水戦が合流してきた。

『十三！俺たちが乗船した輸送船がやられた!!』

『なに!?!』

『『そうか、なら共にラバウルへ帰投しよう新一郎！なにかのよしみだ!』』

『『すまん!!』』

「厚木隊長、俺は反対です！足の遅い下駄履きの連中と敵機の…」

「遅くて悪かったな飛曹長！沖田少尉！ワシもこんな空母組と胸くそ悪いですよ!!」

洋介と悪口で言い争っていたのは大賀虎雄一飛曹、二式水戦のパイロット。

そして、ニューブリテン島ーボルゲン湾上空に到達した時だったー

「ぐ……あぁっ!!」

「大賀、どうしたんだ!？」

虎雄の二式水戦のエンジンが火を吹き、ボルゲン湾を目掛けて落下した。

「『エンジン不調!!沖田少尉、墜落します!』」

「『大賀!!』」

「『沖田少尉、厚木中尉！お世話になりました!!』」

虎雄は敬礼して、みるみる落下していく中、洋介の脳裏にあることを思い出した。あ
の水災害で多くの洋介の被災者が呑み込まれ、彼の両親も犠牲になった。

「馬鹿野郎!!」

洋介は落下していく虎雄を追い掛けた。

『『桜井飛曹長……?』』

「機首を上げろ!!俺と年齢の変わらない奴が命を散らすな!!」

「……ああっ!」

洋介は愛機の右片翼で虎雄の二式水戦を持ち上げようと、見事に着水させた。

「ほっ……こちら、桜井!編隊に戻っ……!」ガクッ「しまった!?!…調子に乗って翼
が……せめて、砂丘まで!!」

洋介の愛機の右片翼がもがれてバランスを崩して砂丘に不時着した。

「はあ……はあ……、危ない……ニューブリテン島の西側、ボルゲン湾のどこだ……ナタム……向こうが……グロスター……？」

「おーい!!おーい!!」

洋介は愛機から降りて地図を開くと、海上から虎雄は二式水戦を漕いで砂丘の海岸に漂着させた。

「おい、飛曹長!!」

「……ん?……なんだ?」

虎雄は個人装備の二式テラ銃と南部十四年式拳銃を置いて、拳を構えた。

「……このあいだの酒保の喧嘩の続きだ！」

「良いだろう!!……はあっ!!」

洋介も南部十四年式拳銃と軍刀の鷹狼を置いて、喧嘩の続きを始めた。

互いに顔面の頬や腹部、痣や吐血が出るまで殴り続け夕日が水平線に沈むまで決闘が続いた。

夕方ー 洋介と虎雄の決闘を終え、密林で確保したマンゴーをかじりながら夕日を眺めた。

「……マンゴーは美味いが、傷が沁みるなあ……」

「こつちの台詞だ、……お前……柔道は何段だ……?」

「柔道5段、それに空手も5段だ」

「……………通りで凄腕だな……………」

「あんたも剣道で鍛えたんだな……………あの手刀が効いたぜ…」
「ぷつくくく……………わっはっはっはっはっは!!」

ナタム岬で不時着した二人のパイロットが笑いあった。

ラバウルへ帰還するために二人の機体を調べたが、洋介の愛機の零戦、エンジン部分と20ミリ長身機関砲2挺以外は使用不能。

虎雄の二式水戦、エンジンとプロペラが使用不能。

二人は協力して洋介の零戦22型エンジンを分解して、二式水戦のエンジン部分に移植、エンジンと本体にパイプやコードを繋ぎ合わせ、機銃の交換作業を徹夜して終えた。

翌朝――

「はあくやつと終えた……」

「……直したのはいいが、燃料が足りない……」

「だな………ラバウルまで飛行どころか………エンジンを移植した機体のテスト飛行すら難しい………ガソリンでもあれば………」

「そうだな………さつき上空で対岸のグロスター岬に米軍の拠点を確認………侵入する価値がある。少なくとも、ガソリンくらいは………」

「………そうだな、………行くタイミングからして夜間でだ！」

三日月が照らされる夜、ジャングルで歩行するのは米軍に見つかる可能性があった。為、小銃と拳銃、軍刀の装備でボルゲン湾の海を泳ぎながらグロスター岬へ向かった。

深夜。グロスター岬、海岸―

「ふはあつ…………鉄条網がない…………」

「…………海からの侵入は正解だったな…………」

「…………必要なのは燃料、糧食だな…………」

「そして、この拠点を爆破する！」

米軍がニューブリテン島を上陸して以来、ラバウルに侵攻した。

日本軍の侵攻を阻止するために損害が相次いでいる。洋介と虎雄はラバウル侵攻を阻止、爆破して延滞させることにチャンスがあった。

米兵が就寝時、監視をすり抜けて備蓄集積所を探した。

米軍 備蓄集積所

「……違う……この箱じゃないな……」

「……これは？衣類かよ……」

二人は集積所で燃料が入ったドラム缶とポンプ、ジープを確保、そのあと食料を探しながら積み荷の箱を確認する。すると――

「……ん？……小銃……？アメリカ軍の最新式半自動小銃か……トチローさんの土産として持って帰るか。」

洋介はアメリカのM――半自動小銃と弾薬を鹵獲した。それから1時間――

「あつた！糧食だ！」

「こつちも粉火薬を見つけた！これを導火線の代わりに……」

虎雄は缶詰を背嚢に詰め込み、洋介は粉火薬で集積している物資に燃料を搔け、地面

に線状に書いた。

「飛曹長、ワシは糧食を積み終えた。そっちはどうだ？」

「あと少し、我々はこの拠点を抜けるまでは爆発して貰いたいからな……………」

「…………ジャップ!!」

「っ!?!しまった!!見つかった!!」

「ずらかれ曹長!!」

洋介は導火線作りに夢中になり、米軍3人の監視兵に発見された。二人は逃走用に燃料を積んだジープへ向かった。だが―

バババババツ 「ぎやつ…………」 バタツ

「……!?…虎雄…!!」

虎雄は短機関銃の掃射を受けて倒れた。

「…虎雄……しつかりせい、虎雄!!」

「stop!!holdappu!!」

「……………つ!!貴様ら!」 スパアアン

「「 ヴアア……… 」」

洋介は軍刀の鷹狼を鞘から抜き、米兵が彼に小銃を向けて発砲する中で洋介は斬り倒し、返り血を浴びて立っていた。

「はあはあ……ざまあ見ろ……! ……うう………」

洋介の手と鷹狼は血に染まり立ち往生した。

「(……これが……戦争なのか……)」

銃声の騒音で兵舎から次々と武装した米兵が出てきた。

「(もう……ここまでか……志帆姉さん、勇介……雪……父さん……母さん……)」

この状況で洋介は死を覚悟した。

「行くぞ、洋介!!」

「……っ!?! 虎雄!!」

倒れていた虎雄が立ち上がり、洋介の飛行衣の胸ぐらを掴みジープに乗車した。

「虎雄……運転は任せろ！」

「わかった、なら射撃はワシに任せろ！」

「あの導火線を狙え!!」

「よしっ!!」 バアアン

虎雄はテラ銃で洋介が設置した導火線に命中した。洋介と虎雄は背中を合わせ、エンジンを発動。逃走しながら検問を突破、米軍の拠点から脱出。ジャングルに突入して身を隠した直後に、拠点が大爆発を起こした。

「拠点からいい花火が上がったな〜♪」

「ははっ♪全くだ!……しかしながら、背囊に詰め込んでいた缶詰で命拾いしたとは……お前は運が強いな〜」

「……まあな、ワシが幼い頃に海で……不思議なことに……青い人魚に助けられたんじゃ……」

「……青い人魚……?」

二人は水上戦闘機の元に到着、略奪した米軍の燃料を戦闘機に給油、急いで糧食の缶詰を食事をした。

「………美味しいな〜♪」

「だな、洋介……それ以上食うなよ。機体の重量や厚木中尉や沖田少尉たちの土産として持つて帰るんだからな〜♪」

「洋介か……ふっ……」 カアアン

「!?!」

虎雄の言葉で洋介は微笑んだ。すると一発の弾丸が洋介が持っていた缶詰を弾き飛んだ。

「追ってだ！」

「早いな!! 虎雄、とつと下駄履き戦闘機のエンジンを回せ!!」

「言われなくともやるぜ!!」

虎雄は二式水戦に搭乗、洋介は鹵獲した小銃で敵兵に向けて乱射して援護した。

バアン バアン バアン カキイーン 「弾切れだ！」

M—1小銃の弾薬クリップが跳び出し弾切れになった時、戦闘機のエンジンが発動した。

「洋介、乗れ!!」

「わかった!!」

「行け行け行け! 飛べえ!!」

洋介は急いで風防にしがみ付き、水戦が水上を走り蹴り飛んだ。

「飛んだ……飛んだな!!」

「以前の速度とは桁違い、流石は22型のエンジンだ!」

「虎雄、頼みがある!」

「ん……?」

二式水戦は上空で急旋回、逃走に使ったジープと洋介の零戦22型が機銃を掃射して大破した。零戦22型が敵の手に届かない様に破壊させた。

「ありがとう！」

「礼を言うのはワシの方じゃ、ワシの愛機に最新式のエンジンの搭載と命、友人が出来たことじゃ洋介♪」

「……………そうだな、俺もいい友人ができて嬉しいぜ！虎雄……………ほれ、呉での写真だ、虎雄の妹さんがいるなら譲る……………」

「え……………いいのか……………ありがたいがこの写真に洋介の姉弟……………」

「いいんだ、あの時の酒保のお詫び。また呉に帰投したら現像して貰うぜ！」

朝日が昇り、水戦はラバウル基地へ向けて帰投した。

帰投する中、二人は煌めく海の岩礁を目の当たりにした。その岩礁は、花の様に咲い

ていた。

ラバウルの原住民、少女のサンに聞いた話によると、海に咲く花を見た者は必ず死を招く。古くからの伝説だった。

「……と、言う訳だ」

「……………」

洋介の回想で芳佳とリーネは驚愕し、言葉が出なかった。

「……洋介さんの世界は人同士、醋慄の地上で恐ろしいところから生き延びたんだね！」

「まあな、……虎雄の共同がなければ、いや……ストライクウィッチーズの様なラバウル六勇士を結成しなければ……あの戦争を生きることが出来なかった……それに、あのラバウル帰還後、僕の愛機を紛失、虎雄の愛機を改造して、トチロー整備班長が怒り、スパンで殴りに掛かって来たから、怖かった……」

「へえ……（恐ろしい……）」

「そして、虎雄さんは？他の皆さんは……？」

「……あの戦争で……虎雄は45年の7月、シンガポールのマラッカ海峡上空で戦死した……」

「え……？」

リーネの言葉で芳佳は基地を思い出し、洋介は深刻な顔をした。

「虎雄だけじゃない、……45年2月で厚木隊長はフィリピン。8月に沖田さん、幸吉は長崎上空で。僕の姉弟の姉さんは6月の沖縄で行方不明……弟は5月にドイツ、いやカールスラントのベルリンで虎雄の妹さんの晴香さんが戦死……まして、上官や先輩、同期や後輩、部下。民間人が戦火の中……僕も多くの敵を殺し、屍の上に立っている。」

「……洋介さん……」

「……僕は这个世界に彷徨ってきたのは、神が与えた罰なのか……」

その一言の後で洋介はコーヒーを飲み、空を見つめた。

「落ち込まないで洋介さん！」

「そうだよ、洋介さん！」

「……洋介さんはこのウィッチの世界にきたのは、洋介さんが神様に与えられたチャンスかも知れないよ!」

「このネウロイが侵略する中でも闘って、洋介さん!」

「芳佳……リーネ……（厚木隊長!）」

洋介は芳佳とリーネの前に、上官だった厚木十三の幻影が浮かび上がった。

「（厚木隊長……そうですね!）ありがとう、芳佳、リーネ。この喫茶店のお茶代と、あの買い物を僕がご馳走するよ。」

「ありがとうございます」

芳佳とリーネの表情が明るくなり、喫茶店で済ませ、残りの買い物で必須の水着を購入して基地へ帰投した。側車付きバイクの側車で眠りこけ、リーネは洋介の後部座席で

背中にしがみ付いて眠っていた。

「(洋介さん……暖かい……／＼／＼)」

第6話 安全第一、速度で間一髪

基地上空

「22型甲…懐かしい…」

グオオオオオオン

ギユイイイイン

「喰らえ!!」

ダダダダダダ

「くっ…また回避されたか…!」

「そこっ!!」
ダダダダダダ
「す…凄い…!」(俺は64型を扱い、相手にしていた敵を…)」

早朝

起床ラッパが鳴る前に、桜井洋介は上官の坂本美緒と模擬空中戦を展開、お互い引けを取らない攻防が続いていた。

今回の洋介は美緒の零式脚22型甲を履きながら、初陣のソロモン海戦を懐かしみ、美緒は洋介の64型を履いて、射撃と剣術の訓練を受けていた。

基地
滑走路

「ありがとう桜井、私の訓練に付き合ってくれて心から感謝する!」

「いえ、ベテランウィッチの坂本さんの22型ユニットを貸して頂いたことに、光栄です」

「はっはっは!!さすがは異世界のユニットだ、私のユニットの機動と性能が桁違いだ!桜井、お前の64型ユニットを私に譲ってくれんか?」

「すいませんが坂本さん、俺はこの愛機一筋で欧州を奪還したいのです!」

「はっはっは!!そうか、シャーリーみたいだな!」

「シャーリー?」

「わかった!」

パパ
パパ
パパ

起床ラッパが基地中に鳴り響いた。美緒は所持する懐中時計に目を通し、確認した。

「もう時間か、解散！」

「はっ!!」

洋介は訓練を終えた後、愛機のユニットを軽く整備している時――

パカーン!! 「ん……?なんだ、いまの音は？」

しばらくしてミーナはブリーフィングルームに集合の指示を受けた。明日の活動についてであつた。

その中で、芳佳は頭を擦っていた。

「え？海に行くのですか!？」

「明日の午前からだ、場所は本島東側沿岸。」

「やったー!!海だー!!海水浴だー!!」

芳佳は喜ぶ時、洋介があることに気付き解説した。

「芳佳、喜んでいるところ悪いけど、これは訓練だと思うぞ」

「え…？そうなんですか？」

「桜井の言うとおり、我々は戦闘中に何が起ころうとも対応せねばならん。例えば海上で飛行不能になってもだ。そこで海に落下した時の訓練が必要だ」

「なるほど…」

「なんだ宮藤、訓練が嫌いなのか？」

「あついえ、そうじゃないですけど」

「そう落ち込むな芳佳、1日中訓練ってわけじゃないんだ。」

「ふふっ♪場所はここ、時間は1000時よ。いい？」

「了解！」

「(朝10時か、その前に魚の仕掛けを設置するか…♪)」

「わかったね宮藤さん？」

「あ、はい！」

「では以上の内容をシャーリーさんやルツキーニさんに伝達して下さい。そうそう宮藤さん、桜井さんがいったとおり別に1日中訓練ってわけじゃないわ。訓練の合間にはたっぷり海で遊べるってことよ」

「良かったな、芳佳。」

「はい、ミーナ中佐…洋介さん、行ってきます。行こうリーネちゃん！」

「うん♪」

二人は格納庫に向かった。

「さて、俺も行くか。」

「ん？桜井、どこにいくんだ？」

「格納庫で愛機の点検です。俺の使い魔によるユニットで本格的に最高速度を出してみ

たいのです。」

格納庫に洋介が向かう途中、轟音が格納庫から鳴り響き、敵の襲撃かと思ったが、エンジン音の爆音だとわかった。思っているうちに格納庫に到着したが

「静かにして下さああーいい!!」

「うぐっ!頭に響く…声がデカイ…」

「あ、すいません…あ、洋介さん」

「よう…それにしても」

「んゝうるさいなゝ」

「ん?」

声がする方向をみると、そこには猫のようにだらけて寝ているルツキーニがいた。

「ルツキーニちゃん」

「んゝもう…気持ちよく寝ていたのに芳佳の大声で起きちゃったじゃない」

柱の上で目をこするルツキーニ、そして飛び降りて芳佳たちの前に降り立つ。

「あ…ごめんね。でもルツキーニちゃんあの音平気だったの？」

「うん、いつものことだし」

「え、…いつもの事って、シャーリーさんいつもこんな轟音を立てて」

「ほんと人間の慣れは怖いな…（…俺も空襲のサイレンでも慣れてたな…）」

「ストライカーのエンジンを改良してただけだよ。洋介はなんか用？」

「ああ、シャーリーは以前、俺の零式の速度を試したよな。俺の使い魔は鷹だから、鳥の魔力によるウィッチは飛行能力が良いから、俺は能力を利用して愛機の速度を試そうと思っただけ」

「へーそうなのか…そうだと洋介、あんたの速さを見せてくれよ」

「ああ、別にいいぜヨ」

滑走路

「準備はいいか？洋介！」

「ああ、ばっちりだ!! 記録係よろしくルッキーニ！」

「うん! まかせて!!」

洋介の側には芳佳、リーネ。そして速度計を持ったルツキーニがいた。洋介は零戦64型の速さが気になっていた。

洋介も青森の三沢基地の受領以来、戦局の理由で、松根燃料の使用で戦っていた零式が、出せるか気になっていた。

シャリーリーのユニットはP-51ムスタングユニット。本土防空戦で見飽きるほどムスタングと交わっていた洋介は、エンジンを作動し、不屈の精神が出ていた。

「本当に凄い音ですね」

「いいエンジン音だな!!」

「ああ、そうだな。今日の零戦は機嫌がいい」

今日の零戦はいい爆音を出していた。初陣の本土初空襲以来、九六艦戦。

ソロモン海戦で零戦22型、ラバウルからフィリピンで52型のエンジンより優れた爆音だった。

洋介は略帽を被り、飛行ゴーグルを着用した。

「行くぜ愛機!!」

零戦も答えるように、エンジンの排気管が火を吹いた。

「スタート!!」

ルツキーニの合図と同時に二人は発進し急上昇した。

「すごい……」

「もう見えなくなつたよ……」

一方、基地のとある部屋のバルコニーに坂本とミーナ、そして速度計を持ったペリーヌがいた。

「あの零式速いな……一気に上がったな桜井の奴」

「高度1000メートルまで50秒、前回のシャリーさんより1分弱速いですわ。少佐」

「うん…お手並み拝見だ」

上空

ギュイイイイイン 「まだまだ、…相棒行くぜ！エンジン出力全開!!」

洋介は速度を一気に加速させた。

「洋介さんまだ加速している」

「『今、何キロだ、ルツキーニ?』」

「時速700キロ!...780...790...

『すごい...』

「800キロ突破!!まだまだ上がってる!シャーリーの記録を破ったよ!!」

『すごいもう記録破られたのか!』

「すごい!!今の時速900だよ!!」

「すごい、洋介さん!!」

『あたしもあのくらい出たらな〜』

一方、バルコニーでは

「加速が止まりました。」

「どこまで行つた？」

「えと…900キロまでです！」

「さすがにすごいわね…美緒」

「ああ、…予想外だ、さすが異世界人といったところだろうか。やっぱりあの零式、私も欲しいな」

「もうっ美緒ったら…でもやっぱり、レシプロじゃこれが限界かもしれないね」

「音速はまだ遠いか…」

滑走路

「あつ！戻ってきた！」

ルツキーニが空のあなたを指さした。その指した方角を見ると洋介が滑走路に向かつて降りてきた。そして芳佳たちは減速して着陸した洋介の元に向かった。

「いやゝやつぱり思い切り飛ばすのは気持ちいいなゝゝで、どうだった？」

「すごいです！洋介さん！」

「すごかったです!!」

「すごいよ洋介ゝ!!時速900キロだよ!!シャーリーの記録超えちゃったよ!!」

ルツキーニが興奮しながら洋介に報告する。無論、着陸したシャーリーも同じだった。

「洋介の零式すごいな！あたしも速度計をみて興奮したよ！」

「そうか…っ!?!…900だつて!?!…やったぜよ…」

洋介はユニットを脱いだ途端に倒れそうになった

「洋介さん!?!」

「大丈夫ですか!?!」

芳佳とリーネが心配そうに駆け寄った

「ああ、大丈夫だ。ちょっと気が抜けたただけだ。…そう言えば芳佳たちは、ミーナ中佐の報告、シャーリーたちに行ったのか?」

「報告?」

「うじゅ?」

「あーわすれてた!!」

芳佳たちはシャーリーとルツキーニに明日、海に出かけることを報告した。

「そうか、それは楽しみだな♪」

「ん?」

「何がです?」

シャーリーは笑みながら

「二人の水着姿。あと洋介のビキニ姿もな♪」

「えー!!」

「ちよつと待て!!俺は男だ、水着姿なんて恥ずかしいわ／＼／＼／＼／＼／＼／」

洋介は裏声で女性的になり、注意した。

以前にシャーリーとエーリカ、ルッキーニは洋介の赤道祭の記念写真で女装姿が気に入り、3人のイタズラで洋介は無理矢理に女装に変貌、501の魔女から大いにウケのであった。

「あははは!冗談だよ、冗談。そう怖い顔で睨むなつて…」

「でも洋介さん、女装のおめかしして、女性と分かりませんよ」

「おいおい…芳佳まで…」

そんな話をしながらみんなは、格納庫を後にした。

「あれ?そういえばルッキーニがいないな…まあ、またどこかで寝てるな。さて、明日の仕掛けの疑似餌を作るか。」

一方ルツキーニは、格納庫のラックの上で寝ていた。

「うじゅ…あれ？みんなは？」

目が覚めてみると誰もいない。そして、ルツキーニの目の前にはシャーリーがまだ仮整備の機体と、その翼に掛けてあつたシャーリー愛用のゴーグルがあつた。

「ディッツディッツディッツン♪」

ルツキーニは機体のそばに降りてゴーグルを取つたが

ガシャン

ゴーグルを取つた瞬間、シャーリーの機体はバランスを崩し転倒、部品が散らばりオイルが床に漏れて広がつた

「うにやぎやあああー!!」

ルツキーニは雷に打たれたような悲鳴を上げた。

「ど、どうしよう……この部品は……こつち？……これは……ここかな？……」

ルツキーニは部品を適当に組み立てて形だけ元に戻した。

「ふう〜これで元通り〜だよね……」

オイルまみれた顔でそういったルツキーニだが、その適当に直したストライカーがのちに大変な事態になるとはこのとき思わなかった。

翌日 本島東側海岸

晴れたブリタニアの空が501を照らす。ウィッチたちの格好はいつもと違った。シャーリーとルツキーニははしやぎながら海に飛び込み、二人は豪快に水柱を立てて入っていく。

トウルルーデはクロールしており、それを追う形でエーリカが犬かきをしている。

勿論、浜辺にはサーニャとエイラが座り。北国出身である二人は肌が日焼けに弱く、ブリタニアの暑い太陽に日焼け負けしていた。

一方、洋介は

「な、何でユニットを着けるんですか坂本さん!？」

今、洋介と芳佳、リーネは水着姿でストライカーユニット（訓練型）を履いている。竹刀を持った坂本美緒少佐が怒鳴り込んだ。

「つべこべ言わず海に飛び込め!!」

「「はっはい!!」」

3人は海に飛び込み、もがきながら海中にしずんだ。洋介は溺れながら予科練時代の水泳練習を思い出した。

1940年 8月 横須賀航空隊基地、横須賀港で岩を積めた背嚢を背負つての遠泳訓練。予科練の教官が内火艇の上で練習生に激を入れていた。

「帝国海軍軍人たる者泳げないのは致命的だ!!」

ストライカーの重さは当時の重量と比べて違うが、下手すると溺れ死ぬ。海面を出ようともがきながら、ユニットを外そうとするがなかなか外れない。洋介は焦って必死にもがくが外れない。

「……くそっ……外れない……」

「『桜井、焦りは禁物だ!!いつ、いかなる時も冷静さを忘れるな!!』」

「…大神…教官…ぬががぁー!!」

坂本とミーナは静かに海を見守り、懐中時計を取り出して時間を見た。

「…浮いてこないな」

「ええ…」

「ぶわっはー!?」 ザッパーン

「おっ、桜井か!」

海面から上がり、近くの岩にしがみついた。

「…死ぬかと思った…けほっ…かはっ…（大神教官…雪…助かりました……）」

鼻で海水を吸い込んだため、咳き込む。

「大丈夫？上がつてこれる？」

「中佐…すいません…」

ミーナが岸に引き寄せようと手を差しのべ、洋介はその手を掴もうとした。だが

「ぐわがつ!？」

「!？」

洋介の足が何かに引つ張られ、再び海に沈んだ。

「（足に何か…！…タコか!?!いや、まさか海の怨霊か…!?!）」

洋介は自分の足に巻き付いているものを確認した。その正体は

「んんんっ！」

「んんんっ！」

芳佳とリーネが絡みついていた

「(君たちかいなんんん!?)」

数分後

「よし、訓練終わり!!みんな休憩だ!!」

美緒の掛け声で全員が休憩に入る。

他のウィッチたちはまだ余力が残っており海で遊んでいるが、芳佳とリーネは海からユニットを持つてくるときには既にクタクタに疲れ果てており、砂浜に倒れた。

「…もう動けない…」

「私も…」

「遊べると言ったのに…ミーナ中佐の嘘つき…」

「すぐに慣れるさ」

二人の上から声が聞こえる。顔を上げるとそこには水着を着たシャーリーがいた。

「シャーリーさん」

シャーリーは芳佳とリーネの間に仰向けに寝転がる。

「こうやって寝てるだけだって悪くはない」

そう言ってシャーリーは両腕を広げて寝る。それを見て芳佳とリーネも両腕を広げて寝転がる。

「お日様あつたかい…」

「うん、気持ちいい…」

「だろ？」

芳佳とリーネの感想をシャーリーは賛同する。暫く寝転がっていた三人だったがふと、リーネがシャーリーにきいた。

「…シャーリーさん」

「ん？なんだ？」

「先ほど一緒にいたルツキーニちゃんはどこに？」

「ルツキーニ？ああ、あいつは洋介の元に向かったな」

訓練を終えた洋介は疲れながらも軍帽と上着を着て、海の岩場に設置した仕掛けの岩場に向かった。

「おおつ、獲れた獲れた♪」

幾つかの疑似餌には鯛が食い付いて釣れた。洋介の背後から音が聞こえた。

「…!? 誰だ…ルツキーニか」

「あ…洋介、何してるのこんなところで？」

「見てのとおり、釣れた鯛で夕食の準備だ。刺身や天ぷら、鯛めしを作る。」

「えー、洋介は料理が出来るんだ」

「ん…まあな、…俺の実家は料理屋…母さんからいろいろと教わったからな…小隊で非

番の時は釣りをよくやったな…隊長や沖田さん、虎雄…幸吉…進次郎…」

「ん…、楽しみ♪」

仕掛けで獲れた魚を次々とバケツに入れていた時に空を見上げ、日光が照る太陽に何かが飛んでいる気配を感じた。

「…!?…」

「どうしたの洋介？」

「何か飛行…ネウロイだ!!」

その時、基地のサイレンが鳴り響き、ウィッチたちは急いで格納庫に向かった。先に到着したシャーリーはムスタングのユニットを履き、出撃した。

「速いなシャーリー…（ん…変な音をしていたが、気のせいかな…?）」

格納庫、簡易指揮所―

「敵は高速型1機、レーダー網を掻い潜って侵入した模様」

坂本少佐は通信手から電話で報告を聞き、ミーナに報告した。

「まだ予定より、2日早いわ」

「誰が行く?」

「いまシャーリーさんたちが向かったわ」

その次に芳佳とリーネがユニットを履いて出撃、その後に洋介も軍刀と拳銃を装備して出撃した。

『中佐、俺たちも行きます!』芳佳、リーネ、行くぞ!!」

「はい!!」

指揮所

「目標は…このまま進むと…ロンドン!」

「ロンドンだ! 敵はロンドンを目指している! シャーリー、お前のスピードを見せてやれ!!」

「『了解!!』」

無線で敵の目的地を聞いたシャーリーは速度を上げた。

「頼んだわよ、シャーリー」

「あゝ…シャーリー行っちゃった…まさかあのままなのかな…」

「何があのままなんだ…？」

美緒の反応でルツキーニが応えた。

「えつとね、あたし昨日シャーリーのストライカーをね…」

と、言いかけた時、後ろから黒いオーラを感じた。

「つと、えつと何でもないです…」

「続けなさうい、フランチエスカ・ルツキーニ少尉」

振り返ると、顔は笑っても目は笑っていないミーナがいた。

「はわわわわわわわ」

ルツキーニは冷や汗を流し、青ざめて震えていた。

シャーリーのストライカーを壊して、そして適当に直したのが発覚した。つまり、シャーリーが履いているストライカーは内部回路が滅茶苦茶になっているということだった。

ドーバー海峡上空

「なんで、そんな大事なことを誰にも言わなかったんだ!!」

『とにかくシャーリーさんに追いついてっ!!』

「了解!!（シャーリーのエンジン音の違和感の原因はそれか…このままだと…まずい）芳佳、リーネ何としても追いつくぞ!このままだとまずい!!」

「は、はい!」

「わかりました!」

「ん…?」

3人は全速力のところ、海面に別の影が映っていた。洋介が後ろを振り向くと、横長四角で両腕には3本指の鉤爪ネウロイが接近して洋介に攻撃した。勘づいた洋介はシールドで防いだ。

「あ、危ない…」

「ネウロイ!？」

「こんな時に…」

「俺がこのネウロイをくい止める、君たちはシャーリーの元へ!!」

「洋介さん!!」

「刀と拳銃だけで無理です!!」

「何もないよりマシだ!最低でも奴を追っ払ったら後で合流する、行けえ!!」

「わかりました!!」

「必ずですよ!!」

芳佳、リーネは洋介を後にしてシャーリーを追いかけた。インカムからミーナが掛かってきた。

『桜井さん、後方から別のネウロイが出現した…』

「只今交戦中!二人は今シャーリーの元に…」

その瞬間、シャーリーが飛行した方向から衝撃波が発生、洋介とネウロイは飛行バランスを崩した。

「わわっ!!……今だっそこっ!!」

崩した瞬間に拳銃を抜き、鋭い感覚でコアに向けて乱射、軍刀で斬りネウロイを撃墜した。

「よしっ!こちら桜井、ネウロイを撃墜!」

『了解。直ちにシャーリーさんの元に向かってください。』

「了解です!……さっきの衝撃波は…神雷部隊の桜花に似てるな…」

一方、シャーリーは高速型のネウロイを追いかける度に速度が下がるどころか上がっていた。

「やった…のか? ついにあたしは音速を超えたのか?」

無線からシャーリーの喜ぶ声が聞こえた。

『シャーリー、応答しろ!!』

「少佐!! 洋介!! やったぞ! ついにあたしは音速を超えたんだ!!」

「止まれ!! ネウロイにぶつかるぞ!!」

「へ?」

シャーリーの前方にネウロイが急接近していた。

「つ!! 嘘だろおお!!!!」

シャーリーは急停止して、シールドを張ったが、そのままネウロイに突っ込み、そしてネウロイを貫き白い破片に変えた。

「敵、撃墜です！」

リーネが無線で本部に報告した。

『シャーリーさんは!?!』

「あつ！あそこにいました。シャーリーさんは無事です!!」

二人の前に遠く上昇していくシャーリーの姿があつた。その顔は満足そうな顔をしていた。すると、彼女の上昇が止まり、脚のユニットが脱げ落下し始めた。

「あわわわわ」

「全然無事じゃなあゝい!!」

シャーリーは水面に叩きつかれる寸前、芳佳とリーネに確保された。だが

「ええゝな、なんで!？」

「すまない、遅れ…わわっ…!!／／／／／」

シャーリーの水着がボロボロになり、裸同然であった。そして、洋介は遅れながらも二人に合流した。

「うわゝ……おおきい……／／／」

芳佳がシャーリーのバストを堪能、それは至福の笑顔だった。

「きやく芳佳ちゃん何やってるの!?!それに洋介さんは見ないでください!!」

「見てない見てない…／／／…リーネ、僕の上着を使え…」

洋介は身体を反対に向けて、軍服の上着を脱いでリーネに渡した。

「あ…ありがとうございます！」

リーネはシャーリーに上着を被せた。

「『おい、どうした!? 報告しろ!!』」

「こちら桜井、シャーリーを確保、これより帰投します!!」

洋介は無線で報告、残りの3人を連れて基地に帰還した。

基地に帰投した後、夕食は洋介の海鮮の手料理だった。ウィツチたちは今日の訓練や緊急出撃の為に動き、洋介の料理を堪能していた。

だが、ルツキーニはミーナから拳骨と夕食抜きの際を受けていた。シャーリーは無事に生還したものの、危険に晒した為に、洋介と一緒に食事の配膳と食器洗いを担当した。

夕食後― 二人は食器洗いをしていた

「…うじゅ…洋介…」

「ん、どうした？」

「…お腹が…すいた…ゴメンね…洋介まで…」

「…1人だけ受けさせる訳にはいかん、一緒に連帯責任を受けているから当然…それに
ルツキーニのたんこぶが痛々しい…これをやるから、食べて元気出せ…」

洋介は、棚に隠して置いたチラシ寿司と天ぶらをルツキーニに与えた

「…えっ…いいの…？」

「ああ…こつそりと食べな…今後また大変なことをやったら、中佐に言うんだぞ…後で
芳佳にたんこぶを治して貰え…」

「…うん…♪」

ルツキーニにとって罰をうけた後、洋介の恩情で暖かかった。

「ねえ…、洋介もあたしみたいに罰を受けたの…？」

「もちろんだ、俺の小隊の担当整備士のトチローさんからのスパナで頭部の強打、忘れたことがないから痛いぞ…」

「へ…へえ…そうなんだ………」

洋介はソロモン、ラバウル時代から幾度も敵機の攻撃に被弾、機械に人一倍愛情を注ぐ担当整備士の秋山敏郎に、スパナで強打を受けたのであった。

第7話 夜間哨戒と悪夢

1944年 8月16日 ブリタニア上空、JU52ので坂本美緒少佐は仏頂面をしていた。

「不機嫌さが顔に出てるわよ、坂本少佐」

その向かい側にミーナ・ヴィルケ中佐が彼女を見て言う。

「わざわざ呼び出されて何かと思えば……予算の削減なんて聞かされたんだ。それに、世界初のウィザードである桜井を、動物を見るような目をしていたから。顔にも出るさ」

そう、二人は桜井洋介を連れてブリタニア上層部に呼び出されたのだ。

その内容は501の予算削減の話だったのだ。洋介は上層部に、501と自身の実績

をなだめさせて、ギリギリのところを回避させた。

「だけど桜井さんのおかげである程度回避したのよ。でも、彼らも焦っているのよ」

「すいませんミーナ中佐……この俺のために……俺はこの501で帰るべき家です。中佐や坂本少佐が、俺をウィザードとして受け入れなかったら、野垂れ死んでいました」

「そう言ってくれて助かるぞ桜井、連中が見ているのは自分たちの足元だけだ」

「戦争屋なんてあんなもの」

ミーナは話した後、少し表情を変えた。

「前に桜井さんが言ったみたいにネウロイが現れなかったらあの人達、今頃人間同士で戦い合っていたのでしょうね……」

「そうだな、…世界大戦となっていたんだろうな……」

二人はそう言って次の言葉を失う。美緒は洋介と横で外の景色を見ていた芳佳に話かけた。

「悪かったな桜井、宮藤」

「いえ…」

「え…?」

芳佳は突然話を振られて何のことか分からず驚く。

「せっかくだからブリタニアの街を見せてやろうと思ったのに」

「いえ…私は軍にもいろんな人がいるんだなって…」

「そうですね…、俺も上層部の連中の顔を拝めましたから…ん…?」

そう話している途中、ここで別の声が聞こえてくる。

「♪」

それは歌声だった。

「…あの、何か聞こえませんか？」

芳佳は美緒に質問した。

「ん？ああ、これはサーニヤの唄だ。基地に近づいたんだな」

「私達を迎えに来てくれたのよ」

「サーニヤの唄か…美しい…唄だ…」

それを聞いて洋介と芳佳は輸送機の外で同行しているサーニヤに向かって手を振っ

た。

「ありがとう」

サーニヤはそれを見て恥ずかしくなったのか、輸送機から離れ、雲に入ってしまった。

「…ん…？嫌われたか…？」

「サーニヤちゃんってなんか照れ屋さんですよ」

「うふふ、そんなことないですよ桜井さん。とってもいい子よ。唄も上手でしょ？」

そう会話している間も、サーニヤの唄声が機内に流れる。突然その唄声がピタリと止まった。

『「あらっ」』

「どうしたサーニヤ」

美緒がサーニヤに聞く。

『…誰かこつちを見えています』

「報告は明確に、あと大きな声で」

『「すいません」』

美緒から注意され、サーニヤは謝った。サーニヤと同様に洋介も何か気配を感じた。

『「シリウスの方角に所属不明の飛行物体、高速で接近しています」』

『「…ネウロイかしら？」』

『「はい、間違いないと思います通常の航空機の数値ではありません。』

すると、洋介も何かの気配を感じた。

「ん?…少佐、中佐。その近辺に…何かが…」

「なんですつて?」

それを聞いて、美緒は魔眼で確認するが、彼女の目には何も見えなかった。

「…私には何も見えないが」

『「雲海の中です。目標を肉眼で確認できません」』

「(…頭が…左の傷が痛い…なんだこの気配は…守占島で…)」

それを聞いて、芳佳は慌てる。

「ど、どうすればいいんですかあ？」

「どうしようもないなあ」

「悔しいけど、ストライカーがないから仕方ないわ」

「そ、そんなあ…」

芳佳に対して落ち着いて答える美緒とミーナ。

「まさかそれを狙って!？」

「ネウロイがそんな回りくどいことなどしないさ」

『「目標は依然、高速で近づいています」』

ミーナが推測するが、美緒が否定した。その間にも、サーニヤの報告ではネウロイが

接近しているという情報が届いた。

「サーニヤさん、援護が来るまでに時間を稼げればいいわ。交戦は出来るだけ避けて」

『「はい」』

サーニヤは命令を受けて、フリーガーハマーの安全装置を解除。そしてそのままネウロイのいる方向へ転換した。

『「目標を引き離します」』

「無理しないでね」

「…サーニヤちゃんにはネウロイが何処にいるか分かるんですか？」

芳佳は先程までのサーニヤの動きを見て不思議に思い、美緒に質問した。

「ああ、あいつには地平線の向こう側にある物だつて見えているはずだ」

「へえ」

説明を聞いて芳佳は関心した様に声を吐く。

「それで何時も、夜間の哨戒任務に就いて貰ってるのよ」

「お前と桜井の固有魔法みたいなもんさ。さつき唄を聞いただろ？あれもその魔法の一つだ」

「唄声でこの輸送機を誘導していたのよ」

ミーナと美緒が説明する中、サーニャは雲に向けてフリーガーハマーの引き金を引き、2つのロケット弾を発射した。ロケット弾はそのまま真っ直ぐ飛び、雲の中で爆発した。

「反撃してこない…?」

サーニヤはネウロイからの攻撃がないことに違和感を感じる。その間にも、輸送機はネウロイから遠ざかっていく。

「サーニヤ、もういい。戻ってくれ」

『「でも、また…」』

「ありがとう、1人でよく守ってくれたわ」

ミーナの言葉に、ようやくサーニヤも戦闘を終了した。沈着していた洋介も何かの別の気配が無くなり、冷や汗で右手で頭を抱えていた。

「…一体…何だったんだ…」

「洋介さん、顔色が…」

「…大丈夫だ…疲れただけだ…」

「後で軍医に診てもらったらどうですか？」

「宮藤の言う通り、軍医に診てもらえ」

「わかりました…」

雲の下での雨で基地に帰還後、洋介は輸送機から降りて階段で歩いている時に気を失い、倒れた。

「洋介さん!!」

「桜井っ!!」

「桜井さん!?!」

洋介は氣を失っている間にある夢を見た。

そこは終戦後の呉の海軍病院であり、病室と敷地には外地から復員した傷病者がぎっしりすし詰め状態にいた。

「……」は……呉海軍病院……この兵達は……あれは？」

昭和21年、呉の海には海軍の艦艇を輸送艦に改装した空母葛城や翔鳳、駆逐艦雪風

の姿があり、次々と復員兵を降ろした。彼らの顔は、日本に帰国して涙を流す者がほとんどだった。

洋介は後ろを振り向くと、赤子を背負った看護婦を見つけた。それは洋介の妻である雪と亜弥だった。

「あれは……？……ゆ……き……雪っ!!……亜弥!!……」

洋介は妻と娘を呼んでも、顔を振り向くことはなかった。

「雪っ!! 亜弥!!……僕だ!! 洋介だ!! 帰ってきた……」

その二人は光の中で消えた。

「はっ……」

目が覚めるとそこは自分の部屋のベットであり、外を見ると朝日が昇っていた。

「……夢か………雪……亜弥……」

起床ラッパが鳴り響き、洋介は急いで3種軍服を着用して部屋から出て食堂に向かった。

食堂のテーブルにはブルーベリーが並んでいた。

「みなさん、おはようございます！」

「「おはよう洋介！」桜井！」

「おはようございます洋介さん！お身体の具合は…？」

「ああ、この通りすつきりした…なんだ、このブルーベリーは…？」

「私の実家から送られてきたんです。ブルーベリーは目にいいんですよ」

「へえ、知らなかったな……甘い、旨い！」

芳佳、シャーリーとルツキーニがブルーベリーを食した後に、変色した舌を見せあつて笑ったり、エイラがペリーヌの口をおっぴろげながらじやれていた。

その時、美緒が洋介の元に来た。

「元気になったな。いいか？桜井」

「坂本さん、おかげさまで元気になりました。」

「はっはっは！それは良かった。昨晚の件で夜間戦闘のシフトを敷いた。主にサーニヤ

を中心に宮藤とエイラ、そして桜井だ。」

「え、…なぜですか？」

「昨晚の経験者と同時に正体不明の物体を確認した人材だ、暫く4人で夜間専従班に任命する。サーニヤの階級順でお前は2番機だから必ずサポートしろ。」

「はっ!!…夜間戦闘は久しいな…B―29の夜間迎撃以来………しかし、黒い色メガネはどこにいったかな…」

「ん?…黒い色メガネ？」

「

「はい、夜間飛行用のメガネですが…常に持っているのですが、無くしたみたいです。」

「桜井、探しているのこれか？」

「あつ、俺の色めがね…トゥルーデ…どこにあったんだ!？」

トウルルーデが洋介の色めがねを差し出した。

その訳は、洋介がこの世界に来て所持物を調査するため、エーリカがこっそり持ち出したからだ。

海上訓練の休憩で日光を浴びている時に掛けていた。

「あああ…、サングラスを掛けていればセクシーギャルに、なれたのに…」

「何がセクシーギャルだ…」

エーリカの言葉で二人はため息をした。

洋介は夜間に備えて色めがねを着用、美緒が夜間飛行するメンバーに指示を出した。

「サーニヤ、桜井、エイラ、宮藤。お前たちは夜間に備えて寝ろ！」

「はっ!!では、俺は自分の部屋で寝ますので…」

「何を言っているんだ桜井…?」

「え?」

「わざわざ部屋に戻らずともサーニヤたちと一緒に部屋でいいだろ」

「坂本さん、あなたが上官と言えどもこの命令だけは受けませんぞ、第一に俺はウイザード男だ!!」

「そうダゾ少佐、こんな奴と部屋に…」

洋介と同様にエイラも美緒に反感、しかし

「…私は構いません…」

「なっ…なにい!?!」

「さ…サーニヤ…」 「宮藤」 芳佳は反対だよな…」

「わ、私もいいですけど、……洋介さんは変なことする人じゃありません」

「(ooooooooo)」

洋介とエイラはショックで落ち込み、ガックリしていた。

サーニャと芳佳は賛成していた。サーニャは異世界からきた洋介に少し興味をもっていた。

「はっはっは!! 決まりだな!! まあ、親睦を深めると思つてだな……」

「駄目に決まっているでしょ?」

坂本美緒の後ろにいつの間にかミーナが来ていた、口が笑っていても目が笑っておらず、食堂にいた者は彼女の別の気配を感じた。

「はい! 桜井さんが言った通り男女別になつて寝ること。そのあたりはキッチリしてもらいます」

洋介は安心して自分の部屋に戻って、色めがねを掛けたまま眠りに就いたサーニャは少し残念そうに3人はサーニャの部屋Ⅱ臨時夜間専従詰め所に戻った。その部屋はカーテンなどで暗く閉ざされていた。

「…なにも部屋の中まで真っ黒にすることないのにね…」

「暗いのに慣れろツテことダロ」

「別に…いつもと変わらないけど…」

「そうなんだ」

「ナア…サーニャ…なんでアイツに…」

「……洋介さんの…いた世界がどんなところなのか…」

「聞いてみたいんだねサーニヤちゃんは、私もある程度は聞いたよ」
「私も聞きタイ…どんなノダ？」

サーニヤはぬいぐるみを抱き、エイラは特技のタロットをしながら芳佳の洋介から聞いた話を聞いた。洋介の世界はウィッチどころかネウロイが存在せず、人間同士の戦争、姉弟がいて、既婚者であり産まれたばかりの一人娘がいる。終戦後の戦いでこの世界に来ていた。

「アイツにあんなことガ…」

「…残酷で悲惨なんだね…洋介さんの世界は…」

エイラは芳佳にタロット占いの結果を出した。それは一番会いたい人に会える答えだが、芳佳の父親は亡くなっていたために悲しげであった。夜間戦闘メンバーの観る夢の結果は不吉な予感であった。

すると、芳佳は眼を閉じる前に壁掛けのカレンダーを見た。

「8月18日…」

芳佳、サーニヤ、エイラは同じ夢を見た。そこは時々濃霧に包まれ、島の草原に3人は立っていた。

「ここは……どこかの島……？」

「美しい……綺麗な草原……」

「しかし、……霧に包まれてイル……」

3人が歩いていると、濃霧から音が鳴り響き、閃光が飛んでいた。

「あれは!？」

「…なんダロウ…?」

「…ということは…人がいる」

「行ってみよう!!」

3人が走って赴くと、その現場に兵士が倒れていた。

「オラーシャ兵!」

「怪我が酷い、ネウロイの仕業か?早く回復を宮藤!」

「はい!」

「ちよつと待って…この旗…」

サーニヤはある違和感を感じた。負傷したオラーシャ兵が持っていた軍旗は紅く、金

色の鍬が左端にあった。

3人の背後からガチャガチャと金属音が響き、戦車が丘から下ってきた。

「扶桑軍の戦車だ!!」

「オオーイ、ここダア!!負傷…」

「エイラ、宮藤さん!伏せて!!」

「キャツ「わわっ!」あれ?なんとも無い…赤い丸…?」

砲弾が3人の直ぐ近くに着弾、擦り傷どころか埃も被っていないかった。

戦車部隊の後ろに歩兵が続々と走っていた。芳佳は片眼を明け、兵士が掲げていた旗は扶桑の新月の旗でなく、赤い丸の旗だった。

霧が晴れて、3人は草原を見渡すとネウロイの姿が無く、人間同士が武器を持って戦っていた戦場に居た。

「な、…なんてところだ…」

「…なん…で…なんで…人同士が戦っているの…ここは…もしかすると洋介さんがいた世界…」

「……………」

サーニャは両軍の兵士の屍の頭をやさしく撫で、涙を流した。

「…かわいそうな…人たち…」

3人の真上で敵味方戦闘機の空中戦が交わっていた。その中で見覚えがある機体を見つけた。

「あの戦闘機…」

「…機体とマーキング…洋介さん!？」

洋介は深く眠りにつき、夢を見ていた。

彼の周りには戦友や仲間、上官や部下、特攻隊員が囲んでいた。

「俺も許嫁がいたのに、なんでお前がのうのうと…」

「あなたはどうして生きているんだ」

「少尉、なんで…」

「この血を染めて被った殺人鬼」

「…臆したパイロットめ…」

「…やめろ…やめろやめろ！…やめてくれ…」

『おつきろー!!』

「…っは…夢か…神崎…中川…熊井さん…大塚さん…竹久さん…野上さん………」

ルツキーニの声が聞こえ、部屋に眠っていた芳佳たちが目を覚ます。そして全員が食堂に向かう。そこには洋介以外の全員が席に就いていた。

「あの、洋介さんは？」

「えっと、洋介さんは台所で…」

「はあ…、終わった終わった♪」

芳佳の質問をリーネが説明しかけたとき、ちょうど洋介が台所から出てきた。

「洋介さん…!?」

「洋介さん…なにしてたんですか…?」

「秘密だ。夜間飛行のお楽しみ♪」

サーニャが洋介に質問した時、いたずらな顔をしながら席についた。

そして彼らの目の前にはマリーゴールドのハーブティがあつた。全員がそれを飲む。

「…山椒みたいな匂いだね」

「確かに、山椒だな…少し懐かしい匂いだ」

「山椒?」

芳佳がそう感想するが、リーネは何のことか分からなかった。その時、ルツキーニが芳佳の横に現れた。

「芳佳、リーネ、洋介、べくして」

そうしてルツキーニ達が舌を出す、別に変色していることはなかった。そして、再び静かに飲んでいた洋介はサーニヤと同感であり、サーニヤはカップをテーブルに置いた。

「(…まづい)」

夜間専従班のサーニヤ以下、洋介と芳佳、エイラの4人はハンガーから滑走路を見ていた。滑走路に誘導灯が付くが、芳佳は初めての夜間哨戒のため目が慣れておらず、目の前の光景を見て尊んだ。

「…震えが止まらない…」

「何で？」

「夜の空がこんなに暗いなんて思わなかった」

「夜間飛行初めてナノカ？」

「無理ならやめる？」

「サーニヤの言うとおり、今ならやめることもできるがどうする？」

洋介たち3人は芳佳を心配し提案するが、芳佳は手を目の前に出した。

「……て、手を繋いでもいい？サーニヤちゃんの手を繋いでくれたら、きっと大丈夫だから」

それを聞いたサーニヤの魔導針が緑からピンクに変色。心なしが使い魔の尻尾も揺れている。

そしてサーニヤが芳佳の右手を繋いだ。それを見て面白くなさそうにしていたエイラが反対側に行き、芳佳の左の手を繋いだ。

「さっさと行くゾ！」

その光景を見ていた洋介は微笑み、3人の前に出る。

「ふふつ、良い仲になるな。それじゃあ先に俺が離陸する。芳佳も慌てず、ゆっくり来ればいい。」

「はっはい！」

洋介が先に離陸を仕掛けた時、3人はすぐに離陸する。

「えっ、ちよっ、心の準備が!？」

「ははっ、あの2人容赦ねえ……ととっ／＼／／／」

芳佳は心の準備が整っていなかったが、そのことにサーニヤとエイラはそのまま離陸してしまふ。サーニヤはその瞬間に洋介の左手を掴み握った。しかし、その気持ちもすぐに消えた。4人が雲の上まで来た時、芳佳はその光景を見て目を輝かせた。

「凄いなあ！私一人じゃ絶対こんなところへ来れなかったよ！」

芳佳は上空で8の字に飛行しながらはしゃいでいた。

「ありがとうサーニヤちゃん！エイラさん！」

「…うおーい、俺は…？」

忘れられていた洋介が突っ込んだ。

「あ、ごめんなさい洋介さん…」

「まあいい、…夜間飛行…こんな静かで、満天の星夜はラバウル以来だ…日本海軍パイロット名物、梅紫蘇の海苔巻きを食べるか？眠気覚ましに効くぞ」

「はい、いただきます」

洋介は図嚢に入れていた夜食を取りだし、4人はネウロイが出現しない内に食した。

「(酸っぱいけど、…美味しい…)あの…洋介さん」

「ん…なんだい？」

それまで洋介に口を閉ざしていたサーニヤが洋介に話し掛けた。

「洋介さんがいた世界、…どんな戦いをしてきたのか気になります」

「…純粋な君にいい話ではないが、いいのか…？」

「はい…」

洋介は前にいた世界の話をした。両親が自然災害で亡くなり、姉は赤十字看護婦、弟は戦車兵になってバラバラになった。そして洋介は空に強く憧れ、海軍航空隊に入隊した。

1939年に世界大戦が勃発、3年後に練習生時代、練習戦闘機に搭乗した4月当日に初実戦、本土を爆撃したアメリカリベリオン爆撃機を1機初撃墜した。この後に撃墜王（エース）の一人になった。

4ヶ月後、空母搭乗員となり南太平洋で戦った洋介は多くの敵機を落としたが戦線は徐々に後退、ラバウルで2年駐在しても戦い以外いい思い出もあつた。

部隊対抗の拳闘大会であるパイロットと準決勝で敗退、釣り勝負で勝ち友人となり。司令官の発案で、凄腕の少数精鋭の部隊を結成した。一時的に本土に帰還して、幼馴染みと結婚した。

マリアナ、フィリピンなどの血み泥の激戦で多くの仲間が散つて逝つた。洋介の従軍看護の姉が沖繩で行方不明、弟はドイツカールスラントのベルリンで戦死した。

本土軍港の空襲の爆撃で意識不明、1人娘を残して。

1945年、8月15日敗戦、戦争が終わった。だが、ロシア・オラーシヤが火事場泥行為に侵攻、緊急出撃。それが最後の空中戦となり、このウィッチが戦う世界に来了。それまでに洋介はネウロイと違い、お国の為とも言えども多くの人間をこの手で殺してきた。敵のみならず、味方や民間護衛の為に守りきれず見殺しにしまった。

洋介の話しを最後まで聞いたサーニヤは恐ろしく、青ざめた。

「…と、言うことだ…サーニヤ…僕が恐ろしいか…？…さつき握った手は…多くの血で染まっている…」

「…野蠻で殺人鬼だな…アンタは」

エイラは無邪気に洋介を責めた、だがサーニヤは

「…そんなことがないよエイラ…そんなことがないですよ洋介さん、…洋介さんが人を殺しても守るべき命を助けたじゃないですか…この世界に来了時に、少佐と芳佳ちゃんを助けたり、バルクホルン大尉を助けた…」

「そうですよ、味方を助けたことにも人の命を助けたことになりますよ洋介さん！」

「…サーニャ…芳佳…」

不思議にも基地に帰投するまでネウロイは出現せず、4人は沈黙していた。サーニャは洋介の顔を覗いた時、片目から一筋の涙が流れていた。

帰投後、4人は次の夜間飛行に備えて就寝した。そして、洋介は再び夢を見た。戦争で戦い、散って逝った戦友の一人が洋介の隣にいた。

「…虎雄…」

「よう洋介、シンガポールの別れ以来の再会だな」

「…君は…戦死したはずじゃ…」

「そうらしいな。だが、回りがなんと言おうとも耐えろ！ワシは死んでも、魂は生きている！洋介はどんなことがあっても生きて生きて生きまくれ!!」

「虎雄!!……夢か…、すげえ汗…眠気覚ましに川で行水すつか…」

夕方、洋介は近くの川でサルマタの格好で、身体を水に浸けていた。

「いい冷たさや…故郷の川を思い出すな………唄が聞こえる…唄…?」

「オイっ何やってるンダ!」

洋介が後ろを振り向いたら、サウナから出てきて川辺に身体にタオルを巻いた3人がいた。

「あらら…／＼／＼」

「／＼この野蛮人!／＼私らノ裸をミンナ!!」

「わわっ!誤解だ!!…俺が先客やったんや…」

「問答無用……オイ、その身体のキズ……」

エイラは洋介に物を投げつけたところ、彼の顔の左目元から脚にかけて幾つか傷痕があるのを見た。

「洋介さん……そのキズ……どうしたのですか……」

「……僕が殺した……代償だ……この左目元は、オラーシャからだ……」

何事がなかったかのように、洋介は慌てながら川辺を去った。

食堂のテーブルに湯呑みが置かれていた。その中は

「……肝油か……これ……」

洋介にとっては苦手なものであった。

「はい、ヤツメウナギのビタミンたっぷり目にはいいですよ」

エーリカは匂いを嗅ぎ、トゥルーデは引ききみだった。

「なんか生臭…」

「魚の油だからな…栄養があるなら問題ない」

「はーはは、いかにも宮藤さんらしい野暮ったいチョイスですこと」

「いや、持ってきたのは私だが…」

ペリーヌは馬鹿にするが、芳佳のではなく敬愛する坂本美緒少佐のものだった。

「あ、ありがたかったですわ!!」

「あ、ちよつと待てペリーヌ！」

ペリーヌはそのまま肝油をイッキ飲みした。すると顔色が悪くなり、そのショックで眼鏡にヒビが入った。

「うえゝなにこれゝ」

「エンジンオイルにこんなのをあつたな…」

「ぺっぺっ！不味いぞこれ！」

ルッキーニは当然の反応をし、エイラは完全に舌が拒絶、サーニャは固まってしまっている。

「新米の時は無理やり飲まされ往生したものだ」

「…ゲホッ…おえ…お気持ち、お察します少佐…俺も防空夜間戦闘の出撃前に飲まされました…」

「もう一杯♪」

「（ミーナ中佐…あんたの舌はどうなってんねん…）」

肝油をお代わりするミーナは、隣にいる者は軽く引き、トウルルーデに至って完全に轟沈していた。

そして夜がやってきた。夜間飛行で洋介はサーニヤとエイラについて聞いた。

エイラはスオムスの冬防衛戦争から姉妹共々戦ってきた未来予知が出来る魔女であつた。

サーニヤはウィーンの音楽学校に留学中にオラーシャがネウロイの襲撃を受け、国に残つた両親は東側に避難した。

オラーシャは日本に扶桑の何十倍の国土があるため、さつき3人で語り合つた時に芳佳から助言を貰い、いつか会えると希望を持った。

最初は夜間に怖がつっていた芳佳も今は平気で飛んでいる。

昨日同様、月光に照らされ、星々が輝く夜空を飛ぶ。

「ねえ、聞いて！今日は私の誕生日なの！」

「え……？」

「なんで黙ってたんだヨ！」

「私の誕生日は、今日お父さんの命日でもあるの！なんだかややこしくて、皆に言いそびれちゃった……」

「馬鹿ダナお前、こう言う時は楽しいことを優先してもいいんだゾ！」

エイラの言葉で、洋介は納得した。

「……へーそうなのか……」

「ナア、桜井中尉の誕生日はいつなんだ？」

「ん…俺の誕生日か…1月12日…まだまだ先だ。…8月18日、…俺の最後の戦いだっただな。」

「そうなのか、…ツタクサーニヤといいお前と宮藤といい…変なところで気を使うな」

「芳佳ちゃん、洋介さん、耳を澄まして…」

サーニヤは頭のアンテナに手を翳す。するとどこからか陽気な音楽が流れてきた。

「あれって…何か聞こえてきたよ…」

「これって…ラジオか？」

「夜になると、空が静まるから…ずっと遠くの山や地平線からの電波も聞こえるようになるの」

「へえ〜♪凄いいい！こんなこと出来るなんて！」

「うん芳佳ちゃん、夜飛ぶときはいつも聞いているの」

「ハワイの真珠湾を攻撃した厚木隊長らベテランパイロット達も、こんなだったんだろうな〜…」

「「真珠湾…？」」

「サーニヤ、それは2人だけの秘密じゃなかったのかヨ…」

「ごめんね、エイラ…ん…!？」

「ん…これは？」

洋介の言葉にサーニヤと芳佳は首を傾げ、エイラが面白くなさそうな顔をしていた。

二人の夜間勤務に出ていた頃に共有した秘密。するとサーニヤの魔導針が反応したがそれだけではなかった。

「これは…声？」

「…なんだ…？」

何かの唸り声のようなのが静かな夜空に響く。その唸り声の音程とリズムに聞き覚えがあった。

「これは…サーニヤちゃんの唄に似ている…」

「…なんで…」

「敵だ!!サーニヤ…」

「え!?!ネウロイなんですか!?!」

「ああ…雲の中から来るぞ、散開!!」

「え…?」

洋介の反応で雲の中から赤いビームが降ってきた、光はサーニヤの左脚を掠めた。

「サーニヤ!!」

エイラは落下するサーニヤを確保した。

「サーニヤちゃん大丈夫!」

幸い、左のストライカーは失ったもののサーニヤには怪我はなかった。しかし

「敵はの狙いは、私…皆私から離れて逃げて!」

サーニヤが回避行動をとった時にネウロイのビームは確実にサーニヤを狙っていた。

「駄目だ!!仲間を置いて逃げる訳にはいかない!!」

「で、でも皆が…」

「サーニャは一人じゃないダロ!」

「そうだよ、私たちはチームだよ!サーニャちゃん!」

洋介は闘志を燃やし、小銃と機銃を構えた。

「エイラ、芳佳!!俺が囷になる。奴に仕掛けて雲の上に引きずり出す、その瞬間にあいつを倒せ!!サーニャは敵の位置の指示を頼む!!」

「了解しました!」

「ワカッタ!」

「洋介さん、気をつけて」

「よし、作戦開始!!」

洋介は爆音を発して分厚い雲の中へと突入した。

雲の中は目視で見えず、波導で探しながら感じ、ネウロイのビームを交わしつつ小銃と機銃を撃った。敵の攻撃が止み、位置が分かりにくく見失った。

「しまった…サーニャ、敵のネウ公位置は!？」

「洋介さんのいる位置から、2時の方向。距離1500…」

「了解。…スウ…」

洋介は気力を集中させ、サーニャが示した位置に擲弾を向けた。

「そこっ!!」

波導で敵を発見、たった1発のロケット弾を放ち命中。そして敵は雲の上へと出てきた。

「今だ!! エイラ!!」

「了解!!.. わわっ!!」

エイラは自身の機銃とサーニヤのフリーガーハマーをネウロイに向けて撃ち放った。

洋介は雲の中から出て、敵の背後に付き小銃を構え撃った。ネウロイは最後の力を振り絞り、3人に向けてビームを放ったが、サーニヤを背負った芳佳はシールドを張った。

「私が敵の攻撃をシールドで防ぎます!!」

「気が利くナ宮藤!!」

「大丈夫！ 私たちきつと勝てるよ!!」

「それがチームだ!!」

3人はネウロイに立ち向かう。そんな3人を見てサーニヤも動いた。サーニヤは芳佳の背中に掛けてある機銃を構える。

「へっ?」

「なっ?」

「む?」

3人はその行動に驚くが、そのままサーニヤは引き金を引いた。そしてネウロイに向けて3人の弾丸が飛んでいく。その弾丸を正面から受けたネウロイはコアまで削られ、遂にその姿を欠片に変え撃墜した。

「よっしや!!……これは……?」

ネウロイが撃墜されたことを切っ掛けに、4人は張り詰めた力を抜いた。しかし、彼らはまだ気になることがあり、そのまま上空を見ていた。

「……まだ聞こえる」

「なんで? やつつけたんじゃ……」

「いや、さつきよりもノイズが無いぞ……」

3人はこの音が何なのかわからなかった。しかし、サーニヤはこの音に心当たりがあるのか理解した。

「違う……これはお父様のピアノ……」

そう言ってサーニヤは、片足だけになったユニットを再び作動させる。そしてそのま

ま高度を上げた。

「…そつか、ラジオだ。この空のどこから届いているんだ！ 凄いや！ 奇跡だよ！」

「…そうだな…」

芳佳はその奇跡とも言えることに驚きはしやぐ。しかしエイラが首を振った。

「イヤ、そうでもないかも」

「「えっ？」」

「今日はサーニヤの誕生日だったんだ」

「そうなのか…」

「ああ、正確には昨日カナ」

「え…？じゃあ私と一緒に…」

芳佳と洋介はエイラの説明に驚いていた。自分の誕生日がまさかサーニヤと同じだなんて

思わなかったからだ。2人は言葉を奪われた。

「サーニヤノことが大好きな人なら、誕生日ヲ祝うナンテ当たり前ダロ。世界の何処かにそんな人がいるなら、こんなことだって起きるんだ。奇跡なんかじゃナイ」

「…エイラさんって優しいね」

「…そんなんじゃないよ、バカ…」

「ば、ばかって…」

「…!？」

サーニヤは上空で、遠くにいる両親に言葉を送っていた。

「お父様、お母様、サーニヤはここにいます…ここにいます」

そして、芳佳はサーニヤに声をかけた。

「お誕生日おめでとう！サーニヤちゃん！」

「あなたもでしょ」

「へっ…?」

「お誕生日おめでとう、芳佳ちゃん」

「おめでとナ」

「…あれ？洋介さんは…?」

全員がめでたい言葉を贈るなか、洋介の姿はなかった。

洋介は何かの気配を感じ、単独で探した。たどり着いた空域には黒く渦状のホールがあり、空中停止した。

「黒いホール…あの時の気配だったんか…この中に潜れば、元の世界に…家族の元へ…雪…亜弥…」

洋介は考えながら、左手を伸ばしながら近づいた。すると

「(それで…いいの?)」

「っ!?!…誰だ!!」

洋介の頭の中に、少年の声が聞こえた。

「(君がホールに潜れば、元の世界に帰れる…だけどこの世界はいずれ、彼らによって滅

んでしまう)」

「彼ら…ネウロイにか…僕はこの世界に来て…何のために寄越したんだ!? 何のために…」

「(悔いの無い選択を……君の解答は……?)」

「…僕の解答…」

「あつ、いたゾ！」

「洋介さあゝん！」

洋介の後ろにいた芳佳たちが、サーニヤの魔導によつて探してきた。

「みんな…(…僕の解答は…)」

「…黒いホール…ネウロイ!?…洋介さん、離れて!!」

洋介は鞘から軍刀を抜き構え、サーニャは黒いホールに気付き、芳佳の機銃を構えた。

「みんな…来るな、近づくな!!」

「洋介さん!?」

「アンタナニを!!…刀が…」

洋介は軍刀に魔力を込め、蒼白い光がでた。

「…これが…僕の解答…解答だ!!波導斬!!」

「」 つ! 「」

洋介は軍刀を振り、黒いホールを断ち斬った。だが、洋介はその頭の中で聞いた少年

にあることを説いた。

「……僕からの質問だ……お前は何者だ……？」

「……俺はオーデイン……この世界での武運を祈るよ、息子よ………」

「……息子だと？……オーデイン……北欧神話の神か………」

東の空から朝日が昇った。

「『洋介さん……』中尉……ナニがあっただヨ？」

「いいや、ネウ公を落とした。……芳佳、サーニヤ。お誕生日おめでとう！」

「い……いえ」

「無事で……よかった……」

洋介は軍服の左胸ポケットから2つ、桜の形をした御守りを取り出した。

「……………僕からのささやかな贈り物だ。受け取ってくれ。」

「桜の御守り…可愛い〜！」

「これが扶桑の桜…これをもらっていいのですか？」

「ああ、3個ある。僕の妻からの贈り物だ、間違えて貰ったが欲で罰が当たる。…いや、…当たったな…この世界に来たことが」

「「ありがとうございます」大切にします／＼／＼」

「いいなあ、なあワタシノハ？」

「いや、…残念ながら2つしか贈り物はない…」

「なにい！サーニヤと宮藤にあげても私のは無いダト!？」

「2人の誕生日だ、…許せ！」

「グヌヌ…アンタの寄越せ！」

「おいおい、人の欲張って取ると罰が当たるでエイラ！」

笑ってごまかす洋介だったが、エイラはムツとして洋介の顔を睨み、洋介の御守りを横取りしようと追いかけているが基地に帰還。

基地に帰還後、早速誕生日パーティーが始まった。洋介も楽しみながらソファアークに座って眺めていた。するとミーナが来た。

「どう？桜井さん。楽しんでいますか？」

「ミーナ中佐、…とても安らかな感じは久しぶりです」

「…そう言えば桜井さんがこの世界に来て3ヶ月が経つのね…」

「そうですね。ここに来た日のことが昨日のことに感じますよ。」

「ふふ…桜井さん。初めてここに来たときは少し固かったけど、今は打ち解けているように
うで安心したわ…／／／」

洋介は唯一世界に帰れる黒いホールを斬ったことは後悔していなかった。

家族と再会を拒む代わりに、この世界にいる。命ある限りネウロイを最後の1体を討伐するために闘うことを、この世界に骨を埋めることを心に誓った。

第8話 大混乱、スースーする事件

夜間哨戒の任務が解任して数日後の早朝、洋介は軍刀鷹狼を携え滑走路をランニングしていた。

「はあはあ……ふう……」

ランニングを終えた洋介は空を見上げると、朝日が昇りサーニヤが夜間哨戒を終えて基地に帰艦した。

「サーニヤか、…毎晩の哨戒任務お疲れさま…」

基地から起床ラッパが鳴り響き、坂本少佐とサーニヤを除くウィッチたちが起床した。

洋介は手拭いで汗を拭きながら廊下を歩いていると、ミーナとリーネに出会った。

「あら、桜井さん」

「洋介さん、おはようございます」

「中佐、リーネ、おはようございます！」

「おはようございます。美緒のように朝から訓練してたのね」

「いえ、常に身体を鍛えねば生き残れません。これは俺の教官や上官の影響です。…他のみんなは…？」

「それが、みんなはバラバラに食堂や訓練、バルクホルン大尉はハルトマンさんを起こしに行ってます」

「大尉がハルトマンを起こしにか、…考えられないな…」

「桜井さんは車の運転は出来ますか？」

「はっはい、車とバイクを扱えます」

「よかったわ。大切な配送物の受け取りに行くけど、車輛の運転とボディガードお願いしたいけどいいかしら？」

「わかりました。…ですがこの辺りの地理は分かりにくいですが…」

「ふふっ♪心配ないわよ、ここの地理に詳しいリーネさんも着いて行きますから」

「わかりました！自分は急いで部屋に戻って、支度します！」

「出発は15分後よ。」

「はっ!!失礼します。」

洋介は急いで部屋に戻って第3種軍服を着用、帯刀を纏い、南部十四年式拳銃と軍刀を装備。

最後に略帽とゴーグルを持って部屋から出たとき、廊下から叫び声がした。

「…つとと、この叫び声は…トウルーデ！」

洋介はトウルーデが叫んだところへ向かった。着いたところがエーリカ・ハルトマンの部屋だった。

「（ハルトマンの部屋…）どうしたんだトウルーデ!?」

「っ!! 入るな!!」

「かはあっ…」

洋介はエーリカの部屋のドアを開けた時、部屋の中はゴミ屋敷状態であり、エーリカ

はズボンを履いておらず、トゥルルーデは怒りが頂点に達して柏葉剣付十字勲章を投げ、なげた勲章は洋介の額に刺さった。

「すまない桜井…」

「構まないよトゥルルーデ…戦場で傷付くことは馴れている…」

洋介の額にガーゼが貼られ、トゥルルーデは床下を見てしよんぼりしていた。

「なあ、桜井…桜井が経験した人と人の争いは…」

「…トゥルルーデ、それは聞かない方が身のためだ、君は覚悟ある軍人と言えども純粋な女の子だ。身体に傷を付られるより、精神に…心に傷が付く…」

「そ、そうか…す、すまない…こんなこと言って…」

「おっと、こんな時間か！俺はミーナ中佐から運転手兼ボディガードの任務がある。

トウルルーデ、失礼する！」

「あ、ああ……気をつけて行け」

洋介は腕時計を見て、立ち去ろうとしたが、一時停止してトウルルーデに言及した。

「また、俺が経験した講談かなにかあれば教える！」

「ああ、ありがとう！」

トウルルーデは微かに笑みがあつた。そしてその場を後にして、洋介は急いで車庫にたどり着いた。ジープを車庫から出した時にミーナとリーネが乗車した。

「お待たせしましたミーナ中佐、リーネ軍曹。」

「ありがとう、桜井さん」

「あれ？洋介さん、その額は…？」

「う…これはですね…」

洋介は運転しながら説明したら、2人は可笑しく笑っていた。

「洋介さん災難でしたね」

「まあ、トゥルーデが僕の命を奪わずにすんで、ホッとした…」

「桜井さん、トゥルーデがやったことを許してね。」

「僕はもう恨んでないですよ。恨んだら、精神的に人を苦しめることになります」

「あつあそこに」

リーネが指した方角に坂本少佐の指導の元で芳佳が掛け声を掛けながら木刀を振り、

その後にはペリーヌも自ら参加、ルッキーニは強制的に参加させられた。

「今朝も訓練してる。坂本少佐、本当に熱心ですね」

「そうだな、ここは最前線だから。生きるための訓練だ」

「焦ってなければいいんだけど…」

「え？」

洋介とリーネの会話の中、ミーナは陰ながらなにか呟いた。

「いいえ助かったわ、リーネさんがいて。大切な配送物を受け取りに行きたかったんだけど、誰もこの辺りの地理に詳しくなくて…」

「／／…お役に立てて嬉しいです」

洋介は話を変えた

「中佐、トゥルーデから聞いたのですが今日はハルトマン中尉の表彰があると…」

「そうよ桜井さん、エーリカの表彰柏葉剣付騎士十字勲章が届きますから」

「へえ、凄いな…ハルトマンは今まで何機を落としたのですか？」

「250機の記録よ」

「ハルトマンさんの250機の撃墜記録、凄いですね洋介さん。」

「ははっ、そうだな…僕のネウロイの撃墜記録より程遠い…」

「あら、桜井さんのたった3ヶ月の50機撃墜記録も凄いわよ。この世界で桜井さんは
ウィザードとしてトップエースわよ」

「あ…そうなんですか？ありがとうございます。」

「受け取り場がちよつと遠いわね…桜井さんの世界で楽しい思い出話はないかしら…？」

「あつ…私も聞きたいです」

「そうですね…」

洋介が卒業して空母瑞鶴の搭乗員時代、戦時中南洋の赤道付近で行われた赤道祭の祭りが一番の思い出だった。主に仮装祭が悪夢、まだ下士官時代の洋介は空母の模擬空中戦で隊長に反感、処罰として女装、家政婦の格好になった。

危うくデートになりかけたところが最悪だったことを語った。その時、リーネが怪しい笑みを浮かべていたことは洋介は知らなかった。

話している間に受け取り場に到着、ミーナとリーネは受け取りに行き、洋介は車上待機しながら居眠りしていた。

「…ふああ…平和や…久しぶりやな…のんびりするの…ん？」

洋介は何か気配を感じた。

「いい天気ですね」

「本当に平和ね」

「お二人さあ〜ん、荷物を受領したら基地に帰りましょう！今日のおやつは、僕がドーナツを作りますから〜」

「わかりました〜！」

「桜井さんの手作りおやつ、楽しみわね♪」

やや速度を上げてまっしぐらに帰投、基地が肉眼で見える距離に迫った時にサイレンが鳴り響いた。

「空襲のサイレン…!？」

「敵襲です!!」

「予報が全くアテにならなくなってきたわね…」

「掴まってください、速度を上げますよ!!」

洋介は車輛ごと基地に突入、格納庫付近まで突き進んで停車。後は駆け足で走っていると、ルツキーニを捕らえたエーリカがいた。

ミーナの固有魔法によると、ネウロイは確認せず、ルツキーニが誤って警報を作動させた。

それ以前にルツキーニはペリーヌとエイラ、芳佳のズボンを略奪、ハルトマンに捕らわれるまで逃亡していた。

ウィッチたちはルツキーニを捕らえたエーリカを囲んで称えていたが、すると洋介は納得いかず疑問を感じた。

「この混乱の中、素晴らしい冷静さでした。ハルトマン中尉」

「どうもどうも♪」

「ハルトマン！やったな、お前こそカールスラント軍人の誇りだ！」

「見事だ中尉！」

「「すーい!!」」

「さあ、今から受勲を始めましょう。準備はいいですねハルトマン中尉！」

「りょーかい！」

ルツキーニは孤独で落ち込み、洋介は小声で尋ねた。

「…ルツキーニ、君のパン…／／いや、ズボンはどうしたんだ？」

「うじゅ…洋介…お風呂から出たら無くなってた…」

「そうか、…ミーナ中佐、その受勲を待って下さい！」

洋介はこの場で受勲式を制止した。

「」！？」」

「なにい!？」

「どういうことですか!?!桜井中尉…」

「この空襲のサイレンを誤って作動したのはルツキーニですが、それ以前にルツキーニの行動が疑問に感じます。僕に1時間だけ捜査の許可をお願いします！」

「桜井、なに勝手なことを…」

「いいでしょう…捜査を許可します。1時間後にハルトマン中尉の表彰式を始めます！」

「感謝します！…もう一つみんなが事件発生前後のアリバイを尋問調査します。」

洋介は軍隊手帳と鉛筆を取りだし、ウィッチたちに聞き込み尋問調査を行った。

ミーナ中佐以下、桜井洋介とリーネは事件発生前後の犯行は白

バルクホルンとシャーリーはお互いに食堂に滞在、ジャガイモを食べあっていた。犯行は白

早朝、サーニヤは疲れと寝ぼけでエイラの部屋で、お互いに同じベットで眠っていた。犯行は白

起床後の訓練の後、坂本美緒少佐以下、芳佳とペリーヌ、ルツキーニは浴場に行くま

でズボンをちゃんと履いていた。

夜間哨戒組を除くハルトマンはバルクホルンの説教を受けた最後に起床、食堂に行くまでほつつき歩いていった。

最後に現場検証へ、問題となった脱衣場

「ルツキーニのパン…ズボンは入浴前に存在、湯上がりに紛失…」

1時間後、立派な軍帽を被り、軍服を纏ったエーリカの受勲式が始まった。

壇上には501統合戦闘航空団司令、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐が立っていた。

「ハルトマン中尉、壇上へ！」

「はい！」

美緒の指示でエーリカは壇上に上がった。ウィッチたちは拍手を送る中、ルツキーニは両手に水が入ったバケツを持ち、ズボンが履いていない状態だった。

「うう…スースーしゆる…」

「ルツキーニちゃんかわいそう…」

「うーん…そう言えば変なんだよね…それに洋介さんはルツキーニちゃんの疑いを晴らすと調査すると…」

「もともと、お風呂であたしのズボンが無くなったから、ペリーヌのズボンを借りたんだよ…」

「なっ!？」

壇上でミーナが箱から勲章を取りだし、エーリカの首に掛けようとしたとき

「ミーナ中佐!!」

「なっなに!?!」

制止したのは洋介だった。トゥルーデは怒り、矛先を洋介に向けた。

「なにやっているんだ桜井! 神聖な受勲式になんて…」

「バルクホルン大尉、坂本少佐、ミーナ中佐。俺が受勲式を中断したことは後で軍法会議でもなんでも構いません、俺はわかりました。今回ルツキー二の騒動を起こした元凶の犯人がこの中にいます!」

「「「!?!」」」

「なっなに!?!」

「なんですって!?!」

「犯人は誰なの…?」

「犯人は…君だ、エーリカ・ハルトマン中尉!」

「ええっ!?!」

「「なに…!」」

「ちよつと待て桜井、なんでハルトマンが…」

「え…えええ…」

ハルトマンはあたふた困惑、洋介は人差し指を舐めて、指を上に向けた。

「…おつ、いいタイミング。論より証拠…」

西から小さな風が吹き、壇上にいたハルトマンの制服の裾が捲れた。気づいたのは芳佳だった。

「あっ!!」

「「「「「 あああ… 「「「「」

「ああつ、あたしのズボン!?!」

ルツキーニのズボンはエーリカが履いており、そのことに全員が驚いた。

その後、エーリカ・ハルトマンは受勲式が終わった後、自室の部屋の掃除と洋介の手作りドーナツのおやつ抜ききの罰を受けた。

ルツキーニのズボンを盗った理由は、部屋中探しても見つからなかったからだ。あの部屋では見つける物も見つけない。

ルツキーニは汚名返上したが、みんなを騒がせたことのために食器洗いを受けた。

第9話 君を忘れない

格納庫

洋介は幾人の整備員と愛機の零戦64型の魔導エンジンの整備の手伝いと相談をしていた。

「…いつも手伝ってすみません中尉」

「いや、ここも俺にとって大事なところですよ…（トチローさんとトチコさんにかなりしごかれたからな…）話を変えるが、機体はともかく、この魔導エンジンの量産は可能か…？」

「んん…難しいですね…他のウィッチのストライカーユニットと違って、特殊な部品を使っているから、まず部品の生産をしてエンジンを組み立てねば…」

「そうか…」

整備員からの言葉をきいて、洋介がエンジンから離れた時、格納庫内に別の声が聞こえてきた。

「いつもありがとうございます！」

その声に洋介を含めた整備員たちが振り向く。そこには手にお盆を持った芳佳が立っていた。

「おつ、芳佳か…」

「あつ洋介さん。お菓子作ってみたんですけど、皆さん食べて下さい」

芳佳がそう言つて差し出すが、整備員たちはそんな芳佳を余所にユニットの方を再び向いてしまった。

「あの、これ、扶桑のお菓子で…」

「芳佳…整備員のみんな、なんで芳佳の手作りの菓子を取らないんだ…?」

「…洋介さん…」

洋介は困った反応をする芳佳に声を掛ける。洋介が芳佳の代わりに代弁した。

「あの…この基地の規制を知っていますか?」

「え…規制ですか?」

芳佳は整備員の言った規制について懸命に考え始めた。

「えっと、…我々はミーナ中佐から、必要最低限のウィッチ達との会話、及び接触は禁止されているんで…」

「え、でも洋介さんは…」

「中尉はウィッチじゃなくてウィザードです…同じ男同士だからミーナ中佐から特に禁止とありません…詳しいことはわかりませんが…」

そんな規制を聞いて洋介と芳佳は驚きと同時に残念な思いになる。
せつかく作ったおはぎを振る舞えないことになった。

そんな芳佳を見て、洋介は名案を思いつく。

「おっ…、そうだ芳佳」

「なんですか？」

「それ、俺から整備員に渡せば問題ないぞ？」

「え？」

そんな提案を言う洋介に芳佳はなんのことかわからず疑問の声を漏らす。

「つまり、芳佳が作ったそのお菓子を俺から渡すことができるってわけだ。…まあ、裏技みたいなものだけど。どうする？」

「えつと…」

芳佳は数秒悩んだのち、洋介にそのお盆を差し出した。

「その、お願いします…」

「了解、…僕もおはぎが大好きだ、また作ってくれ／＼／」

「はいっ！」

洋介はお盆を受け取り、整備員たちに渡した。

「へえ…、そんな事があったの」

リーネは強い風に扇ぎながら洗濯物を干しながら感想を溢す。内容は先ほど格納庫であつた件だ。

「あの時は洋介さんがいたからよかつたけど…なんでミーナ中佐はそんな規制を作つたんだろう…リーネちゃん知ってる？」

「私も命令があるのは知っていたけど、あまり気にしていなかつたから…あつ…」

「…よつと！」

一枚のシートが風に飛ばされ掛けたとき、洋介が助走して魔力を発動、シートを片手でつかんだ。

「シート危なかつたな…ほれ」

「あ、ありがとうございます／＼／」

リーネも一応命令の存在を知っていたが、あまり気にしていなかった。
洋介が唯一、彼がウィザードの為に優しく強く、憧れの存在だった。

「こんな命令絶対変だよ、変すぎる。リーネちゃんと洋介さんはそう思わない？」

「?…なにがだ芳佳…?」

「えつと…、私、姉弟以外の男の人とほとんど話したことなくて…」

「そっか、学校とかは？」

「ずっと女子高だったから」

今やってきた洋介は理解せず、リーネは元々女子高出身で、部隊に入っても話す男の人は洋介だけ、それもいつも一緒にいることの多い芳佳と洋介に比べたら圧倒的に少ない。そのため男性と接する機会があまり無いため、芳佳の言うことをあまり自分で表現できなかった。

「そうなんだ…あつ、ほらあれ、赤城だよ！」

リーネの話を聞いて芳佳は少し下を向いたが、前方に見えたある艦艇にその顔を上げた。

「赤城？」

「赤城だって!? この世界に…空母赤城が…この目で見られるとは…！」

洋介は感涙した。

彼がいた世界で、戦闘機パイロットになったばかりの洋介が驚いたのは、連合艦隊の機密でミッドウェー海戦で沈められた情報だ。

洋介がこの世界に来て赤城を目の当たりした時、意識が朦朧してあの世に来たのかと思っただ。

「…私の乗ってきた船。修理しているって聞いたけど、直ったのかな？」

説明する時、基地の建物の影からシャーリーとルツキーニが出てくる。

「あつ、いたいた。洋介！芳佳！」

「2人とも、ミーナ中佐が呼んでたぞ！」

「はい」

「…何だろう？」

シャーリーから言われた言葉に、洋介と芳佳は首を傾げる。リーネも呼ばれた理由が思いつかず首を傾げ返したのだった。

そして呼ばれた洋介と芳佳は部隊隊長室の扉を叩き、入室した。

「失礼します！」

室内を見渡すと、中には坂本と初老の扶桑軍人がいた。

「おお、宮藤さん！桜井さん！お会いしたかった！」

そう言つて近づく扶桑軍人の前に、ミーナ中佐が重なつた。

「こちらは赤城の艦長さんよ。ぜひ、あなたたちに会いたいとおっしゃつて」

「杉田です。乗員を代表してあなた方にお礼を言いに来ました！」

「お礼？」

「杉田艦長、なぜ私にも…いや、なぜ私の存在を知っているのですか…？」

芳佳はお礼と言われてオウム返しするが、洋介はなぜウィザードの存在を聞かれたのか疑問に感じた。

「桜井中尉は世界初のウィザードとして、今は赤城乗組員のみしか伝えない存在です。我々扶桑人の誇りです。貴方方のおかげで遣欧艦隊の大事な艦を失わずに済みまし、何より多くの人命が助かりました。本当に感謝しております。」

そんなことを言われ芳佳は少し縮こまる。

「いえ、私はなにも。あの時は坂本さんと他の人たちが……」

「私も同じです。あの時の私はただの戦闘機パイロットであり、意識が朦朧とする中でネウロイと戦いました。それに、私は扶桑人ではありません、日本人です。異世界から来ました。」

「そんなことはないぞ、あの時お前たちがいなければ全滅していたかもしれない。誇りに思ってもいいぞ、桜井、宮藤。」

謙遜する洋介と芳佳に対して美緒が言う。彼女に言われては2人とも誇りに思っていた。照れ笑い、笑み隠しする。そんな2人に杉田艦長が包みを差し出す。

「全乗組員で決めました。これを貴方にと」

「あらあら、よかったわね」

「ありがたく受け取っておけ、宮藤、桜井。」

杉田艦長から包みを渡され、ミーナ中佐と美緒はよかったねと二人に言う。

「はい、ありがとうございます！」

洋介は異世界の日本軍人に対して敬礼し、包みを受け取った。杉田艦長は少し微笑んだ後、表情を引き締め、ミーナの方向を向いた。

「反攻作戦の前哨として、我々も出撃が決まりました。」

「ついにですか…」

「反攻作戦？」

ミーナは杉田の言葉を聞いて覚悟をしたように表情を引き締めるが、芳佳はなんのこともだかわからず聞き返した。

「ええ、今日はその途中で寄らせて頂いたのです。明日には出港なので是非艦にも来て下さい。皆が喜びます」

「はい」

「赤城の見物か、いいなあ」

元気に返事をする芳佳と羨ましがる洋介だったが、次の言葉でその思いは消えた。

「残念ですが、明日は出撃予定がありますので…」

「そうですか、残念です」

ミーナにそう言われ、杉田は残念そうにする。芳佳も同じようにがっかりするが、こ

の状況で洋介はある提案をした。

「ミーナ中佐、杉田艦長、私が宮藤軍曹の警護しながら赤城見物の許可を。1時間だけの有余を下さい。」

「桜井中尉…」

「…桜井さん…いいでしょう、1時間だけ見物の許可をします。但し、最低限の接触はいけませんよ」

洋介の一言で、芳佳の表情が明るくなった。

「ミーナ中佐、ありがとうございます」

「感謝します！失礼します」

二人は隊長室から出た後、赤城を見物した。

飛行甲板や艦橋、食堂室など。至るところで乗組員が芳佳に感謝の言葉を送ったり、洋介に握手を申す者やウィッチとの関係を聞かれるか否だった。

1時間近くなったら、洋介は芳佳の身を案じてラツタルを渡って基地に戻ってリ―ネと照れ笑いをする時、一人の青年が現れ、芳佳は立ち止まる。

「宮藤さん！」

「ふえっ!？」

「さ、先の戦いでの宮藤さんの勇敢な戦闘には大変敬服しました！艦を守って頂き大変感謝しております！」

「あ、はい。どういたしまして…」

「あの、そのですね。これ、受け取って下さい！」

「えっ?」

芳佳は青年から渡された封筒を見て驚くが、洋介は笑みを浮かべる。リーネはそれが何か察したようで、芳佳に小声で伝えた。

「ラブレターじゃない？」

「え？ラブレター？」

「戦時で不謹慎！……と言いたいが、艦内で渡しそびれたんだな……青春だねえ♪受け取ってもいいじゃないかね」

リーネは芳佳の持っていた包みを持ち、芳佳の手を開けた。突然ラブレターを貰ったことに驚き、顔を少し赤くした。そして少しずつ手を伸ばし、それを受け取ろうとした時だった。

「あっ！」

そのラブレターは突風で宙を舞った。

「逃がすか!」

芳佳と青年は追いかけるが、洋介が魔法力を発動し、跳び上がり掴んだ。

「よしっ確保………痛っ!」

「洋介さん!」

「中尉!」

だか、着地で滑ってバランスを崩してラブレターを離れたところ。ミーナがそのラブレターを持って立っていた。

「ミーナ中佐!」

「…このようなことは厳禁と伝えたはずですが」

芳佳がミーナを呼ぶが、彼女は青年の方にきつい言葉を向けていた。

「すみません、是非とも一言お礼が言いたくて」

「ウィッチーズとの必要以上の接触は厳禁です。従ってこれはお返しします」

「申し訳ありませんでした…」

青年は走って行ってしまった。芳佳は光景を見てショックを受け、洋介は鋭く言及した。

「中佐、自分はこのウィッチとの規制は守りますが…手紙の一枚くらい貰っても、罰はありません…もしくはミーナ中佐、…これ以上に探りませんが何か隠し事を…?」

「…う……………」

ミーナはなにも言わずにこの場を去った。

洋介は自室に戻り、杉田艦長から頂いた包みを開けた。

「外套か、僕がいた世界と変わらんデザインだな……ん……これはただの外套ではない……」

ブリーフィングルームに集められたウィッチーズは、ミーナからの説明を聞いていた。

「ガリアから敵が進行中との報告です」

「今回は珍しく予想が当たったな」

その説明に美緒が感想を溢すが、洋介も同じ意見だった。

「（敵さんが一定のペースで来るならこつちとしては戦いやすい…）」

「現在の高度15000、進路は真っ直ぐこの基地を目指してるわ」

「よし、バルクホルン、ハルトマンは前衛！ペリーヌとリーネが後衛！宮藤は私とミーナの直僚！桜井はいつも通り遊撃！シャーリーとルッキニー、エイラとサーニャは基地待機だ！」

「お留守番～お留守番～♪」

「ユニットのセッティングでもするか～♪」

基地待機組は色々な反応をするが、出撃組は気を引き締めた。そして、その様子を見て坂本少佐は号令をかける。

「よし、準備に掛かれ!!」

そして出撃組は格納庫に行き、ユニットを履く。洋介もユニットに魔力を流し始めた。最近、洋介は、坂本美緒に疑問を持ち。彼女は洋介の零式64型を練習で使用する

いたことだった。洋介自身は構わなかったが違和感を持ちながら離陸、滑走路ではシャーリーとルツキーニが見送りをする。

「行つてらっしゃーい!!」

そして上空で編隊を組むウィッチ達。しばらく飛んでいるとき、坂本がネウロイを発見する。

「敵発!!」

「タイプは!？」

「確認する!」

ミーナ中佐がどんな種類か聞きつけ、美緒が眼帯を取り魔眼で確認をする。それを聞いて洋介も波導で坂本の方角を感じ美緒がネウロイを特定した。

「300m級だ！いつものフォーメーションか!？」

「そうね」

「（四角状、…赤い斑点がバラバラに散らばっている?）」

洋介は疑問に思い、ウィッチ達に通告した。

「坂本さん、みんな！あのネウロイに対して、いつもより警戒して下さい!!」

「なに!?!…わかった。よし突撃!!」

そして全員がネウロイに突撃をする。前衛のエアリカとトゥルーデがネウロイを射程に捉えた時、突如ネウロイは小型に分裂した。

「なに!?!」

「分裂した!？」

それぞれ驚くが、ミーナが固有魔法の『三次元空間把握能力』を使い、その数を数える。

「右下方、80中央100、左80」

「総勢260機分か、勲章の大盤振る舞いになるな！」

「そうね」

「で、どうする?」

美緒がミーナに聞くと、ミーナは直ぐ様フォーメーションを指示した。

「あなたはコアを探して」

「了解」

美緒が返事をする。

「バルクホルン隊は中央」

「了解」

トウルルーデが返事をする。

「ペリーヌ隊、右を迎撃」

「了解」

ペリーヌも返事をする。

「宮藤さん、あなたは坂本少佐の直僚に入りなさい」

「了解！」

「いい、あなたの任務は少佐がコアを見つけるまで敵を近づけないことよ」

「はい！」

「桜井さんは私について来て！左を迎撃するわ！」

「了解！」

そうして、ウィッチーズ8人対ネウロイ260機の勝負が始まった。

空の乱闘でウィッチ達は次々とネウロイを墜としていき、洋介とミーナ、トゥルーデと個々でネウロイを撃墜していた。

洋介は持ち前の格闘戦で両腕に持った四式小銃と99式13ミリ機銃でネウロイを撃墜、洋介は魔力を絞った状態で戦闘している時、ある感覚が出た。

「…29…（敵の動きが鈍い…）そこっ!!」

みんなはふと洋介の闘い方が凄まじく、固唾を飲んだ。

しかし、いくら戦闘をしてもまだコアを撃墜できないでいた。

「キリが無いよ!」

「コアは一体どいつなんだ!?!」

エーリカに続きトゥルーデも疑問の声を漏らす。ミーナは坂本の下へ行った。

「コアは見つかったか!?!」

「駄目だ」

「まさか、また陽動?」

ミーナがハツとするが、美緒はそれを否定する。

「コアの気配があるんだ！但し、どうもあの群れの中にはいない…」

長期戦になるにつれて、一行はだんだんその戦場はガリアに接近してきていた。このままでは誰かがやられてもおかしくない。その時だった。

芳佳が何かに気付き振り返った。

「っ!? 上!!」

その声を聞き美緒も振り返る。そこに確かにネウロイはいた。太陽を背にして数機のネウロイが隠れていた。

美緒は魔眼でネウロイを見る。しかし太陽と被ってしまった。

「くそっ、見えない…」

その間にも、ネウロイは急降下を開始する。芳佳が動いた。

「行きます!!」

芳佳は美緒とミーナの前に立ち、向かって来るネウロイに対して機銃を向ける。

ネウロイはそんな芳佳に対して攻撃をするが、ウィッチの中でも高い魔法を持つ芳佳にシールドをさせられ攻撃が防がれる。

そして芳佳がネウロイに対して攻撃をする。ミーナも後方から援護する。それによつて数機のネウロイが破片に変わる。

「よし、いいぞ！もう少しだ！」

「はいー！」

そしてさらに攻撃を加えて行く芳佳、ついに坂本はコアを特定した。そのネウロイは急降下したのち美緒達に攻撃せずそのまま離脱していく。

「あれなの？」

「ああ」

「全隊員に通告、敵コアを発見!! 私達が叩くから他を近づかせないで!」

『了解!!』

すかさずミーナが全体に命令を出す。命令を受けたウィッチ達はコア以外の敵を接近させないように叩き始める。

そして芳佳とミーナ、坂本がコアに対して攻撃を開始する。攻撃を受けたネウロイは被弾、回避する。

「宮藤、逃がすな!!」

「はい!」

芳佳がネウロイのコアを追尾攻撃する。そしてついに芳佳の攻撃が命中、コアが破壊された。

それにより、別の場所で交戦していた洋介達のネウロイも破片に変化した。

芳佳、ミーナ、美緒は破壊されたネウロイの破片をシールドで防ぐ。しかしその時だった。

「…っ!？」

「美緒…!？」

破片の一部が美緒のシールドを突き破り、彼女の髪を少し切り裂いたのだ。その光景を間近で見ていたミーナも驚く。

しかし、他の隊員はそんなことに気づかず芳佳に近づき称賛の声を送る。

「芳佳ちゃんすっごーいい!」

リーネが芳佳に抱き付く。しかしペリーヌがツンとした感想をするが、トウルーデがフォローする。そんな光景を見ていた洋介はペリーヌの表情を見てないが、雰囲気から彼女が芳佳を少し称賛しているのではないかと考えていた。

「宮藤やるじゃーん」

「えへへ、そうかな？」

そんな会話をしているとき、芳佳は撃墜されたネウロイの破片を見る。破片はキラキラと輝きながら陸上に降り注いでいく。その光景はさながら雪が降っているようだった。

「綺麗…」

「ああ、こうなつてしまえば…」

芳佳の言葉に美緒が加わる。

「綺麗な花には棘が…つて言いますわね」

「自分のことか？」

「なっ失礼ですわね！」

「おいおいハルトマン、失礼だぞ。ペリーヌだって美人なんだから」

ペリーヌの言葉にエーリカが茶化すが、洋介がここで助言する。

しかし、この言葉を聞いていた他のメンバーが洋介の方向を向いた。

「…ん？どうした？」

洋介は自分を見ている人全員が意外そうな顔をしていたことに気付き聞く。

「いや、桜井がそんなことをサラツと言うものだから…」

「ん？なんか変なことだったか？」

トゥルーデが代表して言ったが、洋介は何か可笑しいことでも言ったかと言う反応をした。その反応に更に全員があり得ない物を見たような反応をした。そんな反応をして洋介はがつくり肩を落とす。

「そんな反応はないだろ…中佐？」

洋介は自分をどんな目で見られていたのかを考え若干傷付くが、ミーナがどこか寂しそうな表情をしながら突然降下をしていくのに気付कि反応した。その行動に他の隊員達も気づく。

「ミーナ？」

「え…おい、どこに…」

「待て、…一人にさせてやろう」

エーリカがミーナについて行こうとするが、美緒がそれを腕で静止する。トウルレーデがこの地に気付いた。

「…そうか、ここはパ・ド・カレーか」

「パ・ド・カレー？」

洋介はトゥルーデに聞くが、彼女は首を横に振るだけで答えなかった。

ミーナはそのままパ・ド・カレーの地に降り、そして一台の車の前に来た。そしてそのままミーナは車の扉を開け、助手席にあるものを見て固まった。

車の助手席に包みがあった。そしてその包みを開き、そしてその中であつた物を見た。それは赤いドレスと一通の手紙だった。

ミーナはその中身から誰の物なのかを理解し、そして、静かに涙をボロボロと流し始めたのだった。

空母赤城――

「やつぱり来なかった……」

日が水平線に沈む赤城の甲板上、芳佳に手紙を渡そうとした青年はそう呟いた。あの時ミーナに忠告されていたから来るはずないとは思っていたが、それでも少し寂しく感じたのだろう。

そんな時だった。彼の帽子が宙を舞った。それと同時にウィッチが通り過ぎる。青年はそのウィッチを見た。

「宮藤さん！」

「みんなありがとうー！がんばってねー！私も頑張るから!!」

芳佳が手を振りながら甲板の上に立つ兵士たちに声を張る。その声に反応して兵士たちも「ありがとう」と嬉しそうに口々に言った。

「芳佳ちゃん、よかったね！」

「うん！ちゃんとお礼言えた」

「世話になったからな」

「はい！」

そして洋介とリーネが赤城に並行して飛行した後、基地に向けて帰投した時だった。美緒達の耳にあるインカムから音が流れる。それは赤城の艦橋にも届いた。杉田艦長が気付いた。

「これは…全艦に繋げ！」

「了解!!」

そして、その声が流れた。

501基地では、ウィッチ達が集まっていた。それだけでなく、何名かの兵士たちもいる。彼らの目線の先にはサーニヤの伴奏に合わせて歌うミーナがいた。

彼女が歌うのは『リリー・マルレーン』だった。洋介はどことなく懐かしい雰囲気だった。

「フィリピンのマニラのBARを思い出すな…（いい歌だ…あの戦場で戦った者たちにも聴かせたいな…隊長、沖田さん、虎雄、幸吉、進次郎、トチローさん、トチコさん、晴

香さん、澤さん、柚子さん、サン……………姉さん……………雪、…亜弥…」

そしてミーナが歌い終わると、ミーナはお辞儀をした。周りのみんながミーナに拍手を送る。

芳佳が近づいてミーナに感想を言った。

「とっても素敵な歌でした！」

「ありがとう」

ミーナはそんな芳佳に微笑み返す。

その時、芳佳の頬つぺたを後ろから誰かが引つ張る。

犯人はエイラだった。

「サーニヤのピアノはどうした？サーニヤの？」

「ふおっへもふへひへひは〜」

「えゝい、もつと褒めろゝ！」

「ほへへまふつへばゝ」

そんな二人の光景を見て周りのみんなが笑い始める。その光景を見て自然とミーナも笑いが漏れる。

「はははゝ♪」

洋介も壁の所にもたれかかりながらその光景を見て、自然と微笑んだ。

第10話 守りたいもの

ミーナの歌を聞いた後、洋介は報告書を持ち執務室に向かっていた。

「失礼します、中佐！報告書を持ってきました」

執務室にまだ赤いドレスを着たままのミーナがいた。

「あら、桜井さん。デスクに置いてね」

「本日の戦闘及び歌手のご活躍、お疲れさまでした！」

「ありがとう。桜井さんもいい活躍だったわね。」

「いえ、この状況で希望という灯火を照らす為に飛び、戦い続けます。これにて失礼します」

洋介は執務室から出た後、坂本美緒とすれ違い、執務室に入った。よくは聞こえなかったが、中から物騒な雰囲気だった。

洋介は先にユニットの整備の用事で格納庫に行った。

「中尉、お疲れさまですー！」

「君達も、いつもウィッチ達のユニットの整備お疲れさまですー」

「中尉、最近ですが、坂本少佐が桜井中尉のユニットを使用しているらしいですね…」

最近、美緒が洋介のユニットを模擬空戦で使用していた。

今日のネウロイ来襲時に洋介のユニットで出動しようとしていた洋介は疑問を感じながら時間が過ぎていった。

整備を終えた後、洋介はふと前気になったことを思いだしつつあった。零戦64型が

戦闘機からストライカーユニットに変化した後、ユニットの初飛行の時、ミーナに言われた事だ。

「あの時、…ミーナ中佐から僕の年齢を聞かれたな…二十歳、…ウィッチと二十歳…何か関係が…」

洋介は自室に入ろうとした時―

「ん？……僅かな殺気だ………」

殺気のオーラを感じ、用心の為にホルスターから南部十四年式拳銃を抜き、拳銃を構え、警戒しながら入った。

「つ…？…ミーナ中佐………」

すると窓際にミーナがいた。赤いドレスのままで拳銃の銃口を洋介に向けていた。

「中佐、あなたに何があつたのですか？」

洋介はミーナに聞いた。しかしミーナは首を横に振る。

「あなたに関係ないわ……今ここで、あなたを始末します…」

ミーナの言葉を聞いた洋介は、構えていた拳銃と軍刀を床に置いた。

「……………いいでしょう。…僕は太平洋の海戦で同胞を守り切れず、自決しようとした時、戦つて死ぬとかつての上官の命令を受けており、常に覚悟は出ています。…ですが、昼間の行動…パ・ド・カレーで何があつたかは知りませんが、いや…それ以前に最近の坂本少佐は僕の零式ユニットを使用している事に何か関係しているんじゃないですか？…だからつて坂本少佐に飛ぶなんて…」

「あなたに何がわかるつて言うの!!」

洋介の言葉にミーナは怒鳴る。そこにあつた表情は洋介に対する怒気と過去の悲し

みを懸命に堪えていた。

ミーナは続けて洋介に想いをぶつけた。

「あなたにだってわかるでしょう！大切な人を失う悲しさが！」

「…わかりますよ」

洋介は目を瞑り呟く

「だったらっ…！」

「…だが、その想いに共感できません」

ミーナは洋介に向けて言葉を放とうとしたが、洋介が目を開けて否定をしたため黙る。

「あなたが悲しみを背負い、二度とそうなって欲しくないという考えはわかります。だ

が、決意を決めて戦うと言う人に対して、あなたのそれはただの我が儘です。その我が儘で、あなたは相手の気持ちや踏みにじろうとしていることを理解していますか!？」

洋介はミーナに向けて強く言い、そして爆発したその炎を少しづつ鎮める。

彼の目には涙が浮かんでおり、その雫が頬を伝っていく。それをミーナは見て、そしてこれ以上言葉を発することは無かった。

洋介だって辛い。仲間が墜ちる姿など想像したいとは思わない。しかし彼はミーナと違い、その人の決意に対して自分自身がとやかく言うことはしない。部屋の中で沈黙が続く。洋介は腕を顔の前に上げ、目元の涙を拭う。

洋介自身も戦ったあの戦争は忘れようにも忘れられない。

あの戦争で多くの戦友を失ってきた。

空母や陸上基地で朝一緒に食事をした仲間が夕方、戦闘から帰ったときには消え、一緒に並んだ食事の席が空になり、そして日に日に空席が一つ一つと増えていく。

そして生き残った仲間は死んでいった仲間の分まで必死に生き必死で戦った。

たとえば死にぞこないの卑怯者と言われようとも

そして仲間を失うのと同時に自分はその戦争で多くの命を奪ってきた。

時には戦闘機、時には爆撃機、時には艦艇や陸上基地の機銃手を

お国のためとはいえ、多くの命をこの手で血に染まったこの手は一生洗い流し、何も

無かったことにすることは出来ない。戦争という泥沼の世界に入ったら、もう昔のようには戻れない

今もお、あの出来事は毎晩のように悪夢として現れる

だがそれは一生背負わなければいけない罪であり罰だ。

そう自分に言い聞かせている。

「すいません中佐、上官に対して反発を…」

「いえ…」

洋介はミーナに謝る。

普通なら上官に反発など謝っても許される行為ではないが、ミーナもこの時ばかりはその事を咎めることもなかった。

「中佐、過去に捕らわれてずっと悲しんでいては、その先には進めません」

「…あなたも、…私と同じようなことなの…？」

「僕が戦った戦争が終わった後、緊急の出撃で大空を飛んだ時、お国のために、愛する妻と娘と別れてしまいました。…先の夜間哨戒の報告で、黒い丸状のホールは僕が元の世界に帰れる唯一の道でした。だが、僕がウィッチの世界でいなくなれば…世界が滅る、そのために自ら断ち切りました…僕が生きている限り、最後の一体を倒す為に…」

「桜井さん…、今晚だけ…今晚だけここで…寝かせて下さい…」

「…中佐、僕は既婚者です…／／／」

「…いいのよ、上官の命令です。私たちは似た者同士かも知れない／／／」

洋介はミーナと禁断の一夜を過ごした。洋介は彼女に対して背を向けながら眠り、ミーナは眠りながら一筋の雫が流れた。隊長自ら禁断の事をやったのか、暖かいのか、それは彼女にしかわからなかった。

翌朝、洋介は思いもよらぬ目を覚ました。

「……ミーナ中佐、何も着ずに寝るとは……／＼／＼」

洋介はこっそりベッドの布団から出て、軍服を着用する。ミーナに毛布を被せたまま横抱きして厳重警戒をとりながら部屋から移動、道中夜間哨戒を終えたサーニャに遭遇するも息を殺し、陰を隠した。

冷や汗掻きながら難なくミーナの部屋に入室、ベッドに寝かせてこっそり出た。

それから時間が経ち、ミーナは何事もなかったかの様に、執務室のデスクで書類整理を行っていた。

昨晚、洋介の部屋のベッドで眠り、朝には自室のベッドにいた。洋介の言っていたことを考えている時、執務室の扉を叩く音が聞こえた。

「ちよつといいか」

部屋に入ってきたのは坂本美緒だった。そしてその後ろから芳佳と洋介も入ってくる。彼に關しては昨晚の件で赤くなり、目を反らした。三人の手元には様々な資料が

あつた。

「悪いな、便利に使つて」

「いえ、このくらいへつちやらです」

「はい……／＼／＼」

坂本がそう二人に声を掛け、芳佳はどういうことないと返事して、洋介は少し赤くなりながらだつた。

坂本が持つて来たのはデータだつた。それはつい最近のネウロイの物であつた。

「8月16日、18日に来襲したネウロイだが、奴の出現した時に各地で謎の電波が傍受されている。周波数こそ違うがサーニヤの歌っていた声の波形と極めてよく似ている」

「ええ」

「唄…!？」

坂本の説明を聞いていたミーナは小さく返事し、さらに横で聞いていた二人は歌という言葉に反応した。

初めての夜間哨戒に出た時に聞こえた、サーニヤの歌に似たネウロイの声、黒い丸状のホール。あれを思い出したからだ。

「あのネウロイはサーニヤの再現していたと見て間違いなさそうだな」

「ええ」

美緒がそう結論付けた。

「分析の規模をもっと広げよう。暫くは忙しくなるぞ」

「そうね」

美緒がこれからのネウロイ襲来について話し終わつたが、ミーナは終始小さな返事を繰り返すだけだった。

「バルクホルンやハルトマンにも今のうちに知らせておきたいな。二人をここに……」

美緒が二人を呼ぼうとした時、芳佳が声を発した。

「バルクホルンさんなら今日は非番です。夜明け前に出て行きましたよ？」

「何処へ？」

「ロンドンです」

「ロンドン？」

芳佳の言葉に美緒が聞き返す。

「意識不明だった妹さんが目を覚ましたって、バルクホルンさんが慌ててストライカー

を履いて出ていくのをみんなで止めたんですよ？いつもはあんな冷静な人なのに！」

その様子を思い出したのか芳佳は笑い、洋介が笑みを浮かべた時、ミーナが静かに返した。

「無理もないわ。バルクホルンにとって、妹は戦う理由そのものだもの。誰だって、自分にとつて大切な守りたいものがあるから、勇気をもつて戦えるのよ」

トウルルーデがロンドンで妹のクリスの見舞いで喜ばしい時と、501で模擬戦闘による訓練が行われている最中のロマーニヤ、イスキア島のウィッチ診療所にて療養、半引退状態でフェデリカ・N・ドツリオ、ロマーニヤ空軍の少佐が日光を浴びながら空を眺めていた。

「ふう……さて……っ!!」

ベンチから立ち上がった時、上空に煙りが吹いた戦闘機が飛来、海岸沿いに墜落した。

「なんてことなのっ!!」

墜落したのはリベリオンの戦闘機、P-51ムスタングだった。駆け付けたフェデリカがムスタングに近づき、操縦席からパイロットを引きずり出して救出した。

「ふう……しつかりしなさい、キミ!!」

「……う……う……。パウ……。ラ……。アリ……。シア……。マ……。リ……。シャル……。兄さん……。」

飛行帽を脱がし、ロングシヨートヘアで金髪の女性が腹部から出血、フェデリカは彼女を背負い、急いで診療所に運んだ。

フェデリカが墜落したムスタングを調査した。

「ふう…よかったよかった…しかし、あの娘の機体の国籍マーク…リベリオンと似てるけど、ちよつと違うわね…」

ブリタニア501基地

模擬訓練でシャーリーとルツキーニのペアが敗れ。芳佳、ペリーヌのペアが勝利した。

審判をしていたリーネがホイッスルを鳴らし、洋介は見向きもせず、別の方角を見て感じた。

「ペリーヌ、宮藤ペアの勝ち！ 凄いよ芳佳ちゃん！ 凄いね洋介さん！ 洋介さん…？」

「ん…？」

「どうしたのですか洋介さん…？」

「あつ、リーネごめん！微かだが…気のせいかな…」

「…つてひゃあ!？」

芳佳は周りに褒められ照れるが、突如変な声を出した。原因は彼女の後ろについて胸を揉んでいる人物が原因だった。

「どれどれ♪どれどれ♪」

「な、なにするの!？」

ルツキーニは芳佳の胸を揉みまくる。芳佳はその手触りにあたふたしながら悲痛な叫びを出す。

暫く揉んだのち、ルツキーニは芳佳から離れた。

「残念、こっちはちつとも変わらない」

「うん、見りや分かる」

「おいおい……」

「アッー！」

ルッキーニの感想にシャーリーが便乗して言ったため、洋介がすかさずツツコミを入れた。

芳佳はそんな会話を聞いて思わず叫ぶ。

「もー、二人とも酷いですよ！」

「でも腕を上げたのは確かだ」

「本当ですか？」

すかさずシャーリーが助言する。

下げるだけでなく再び上げる彼女の行動はやはりムードメーカーなところだろう。洋介はよく周りを見ているとシャーリーを評価したのだった。

模擬訓練が終わり基地に帰還した後、洋介はミーティングルームでお茶を飲んで一休みしていた。

「訓練後のお茶は旨い」

「洋介さん、お疲れ様です」

リーネが入浴の後、洋介の元に来た。

「リーネか、訓練の後の入浴はいいなあ……みんなが入浴から出た後、僕も湯槽に入るか……」

「いいですね。…あの…洋介さん…／／／」

「なんだいリーネ…？」

リーネの顔が赤くモジモジしていた。洋介は気になって彼女に尋ねた。

「この戦いが終わったら…私の実家に…／／／」

格納庫からウィッチが二人、出撃した。気付いた洋介は窓から見た。

「ん…出撃？…誰が行ったんだ？」

「あれは芳佳ちゃんとペリーヌさん…」

「変だな、…午後からの哨戒予定ではないのだから…」

気になった洋介はリーネと格納庫に向かい、ストライカーユニットが無く訓練用のペ

イント銃が置いてあった。

「全く…リーネ…あの二人でなにか、喧嘩かなにかなかったか!？」

「ごめんなさい…わかりません、あつそう言えば…芳佳ちゃんとペリーヌさんがなにか揉めていたとか…」

「うん、発進装置のラックの中に銃がない…まさか!？」

ウウウーウウウーウウウー

洋介が空を見上げた時、突如空襲警報のサイレンが鳴り響いた。

「警報!?!」

「行くぞリーネ!」

「はい!!」

洋介とリーネが緊急出動、その後に美緒たちがペリーヌと合流して、ペリーヌが状況は報告をした。

「じゃあ宮藤が一人で向かったんだな!？」

「すみません、元はといえばわたくしが…」

「その件はネウロイを落としてからだ!（余計な気を起こすなよ、宮藤…）」

ペリーヌが色々と謝り、状況を説明する。ネウロイが出現、それを受け芳佳が単機先行、美緒や洋介たちは後を追っている。

そして、基地にいるミーナから連絡が来た。

「『宮藤さんが、ネウロイと接触したのは間違いないわ。でも、そこから先はサーニヤさ

んにもわからないって』

『『すみません…』』

『まさかあいつ捕まったんじゃ…』

ミーナの言葉でサーニヤが謝り、エイラが不吉なことで隊員たちを不安にさせる。

「どういう事だ、離れるように言えないのか!? こっちから呼び掛けているが通じないんだ!」

『『こちらも駄目、ネウロイが何か、ジャミングの様なものを仕掛けているのかも』』

「宮藤…」

「通信妨害電波か……厄介だな……坂本さん! 芳佳付近に何やら人…ウィツチらしき影を確認です!」

「何だと？桜井…一体何が!?!…まだ追い付かないのか、ミーナ！」

『それが、ネウロイがガリア方面に引き返しているわ。単に戻るつもりじゃ…』

「いた！見つけました坂本さん！芳佳の側にもう一人…黒いウィッチ…?」

美緒たちが全速力で芳佳の元に向かっている時、洋介は波導で遠方にいる目標を捉えた。

彼は、更に言葉が続けた。洋介の言葉を聞いて美緒が右目の眼帯を取り、魔法眼で確認。彼女の目にも、芳佳ともう一人の人影が見えた。

「宮藤の他にウィッチがもう一人いる」

「何だって!?!」

美緒の言葉に他の隊員たちも驚く。ブリタニアの防衛を行い、ガリアのネウロイを倒

しているのはストライクウィッチーズであり、この周辺に他のウィッチがいることはおかしかった。

じつと見ていた洋介は違和感を感じた。

「違う…!？」

「コアが見える…あれはネウロイだ！」

洋介は目の前の存在が人でないことを悟った。そして美緒がその存在に対して答えを出し、周りのウィッチはその答えに体が強張る。

そんな中、芳佳は恐る恐るといった形でネウロイのコアを触ろうとしている。

「何をしている！宮藤！」

美緒が怒鳴る、怒鳴り声に気付いたのか芳佳は我に振り返る。

「坂本さん！」

「撃て！撃つんだ宮藤！」

美緒が芳佳に命令をする。しかし、芳佳は撃たなかった。

「違うんです！このネウロイは！」

「何をしている！いいから撃て！」

「駄目です、待って下さい！」

芳佳はネウロイを背に美緒の方向を向いて両腕を広げる。まるで自分が盾になるように。

美緒はそんな芳佳の行動を見て、彼女がウィッチに意識を取り込まれていくのではないかと考え、懸命に芳佳をネウロイから引き離そうとする。

「惑わされるな！そいつは人じゃない！」

「違うんです…そんなことじゃ…!」

「撃たぬなら退け!」

美緒が何度も芳佳に言うが、芳佳は一向に退かない。それどころか、彼女は立ち止まったまま坂本に向けて何か説得しようとするばかりである。

痺れを切らした美緒はついに、芳佳の方向に向けて九九式機銃を構え、芳佳は思わず硬直する。

その時、芳佳の後ろにいた人型ネウロイが、芳佳の下を離れた。

「えっ!?!」

「おのれ!!」

芳佳は突然の行動に驚くが、美緒はそれを好機と見た。手に持つ機銃の引き金を引き、ネウロイにその弾を浴びせる。

しかし、ネウロイはいとも容易く回避すると、反撃とばかりに両腕の部分を前に出し、その先から赤い光線を放った。

しかし、今までネウロイと戦ってきた美緒だ。奇襲攻撃だろうと即座に空中停止に移り、光線が来る方向に向けてシールドを張った。

誰もがそのシールドで攻撃を防ぐことができると思っていた。しかし、現実は違った。

美緒のシールドはネウロイの攻撃を受けたと同時に消えてしまった。まるで、その姿は弾丸が紙を突き破ったように呆気なかった。

そして、その攻撃で彼女の持つ機銃の弾倉に命中。

機銃は誘爆を起こし、美緒は爆発に巻き込まれた。

「あああああ!!」

「少佐!」

「坂本さん!!」

悲鳴を上げて落ちていく美緒、その姿にウィッチたちは美緒を呼ぶ。しかし、美緒の足からユニットが外れてしまい、そのまま立て直すことが出来なくなってしまう。

芳佳はその光景を見て真っ先に墜落していく美緒の下に向かい、彼女を空中で支える。遅れる形でペリーヌも美緒の所へ向かい、墜落を阻止する。

洋介は墜落していく傷だらけの坂本美緒を見て、かつての仲間が空戦で敵機にやられて落ちていく記憶が過り、そして今度はネウロイの方向を向く。

背に装備している四式半自動小銃を構えた。

「坂本さん……くそっ!!」

「『どうしたの!?何が起きたの!?!』」

「少佐が撃たれた!繰り返し、少佐が撃たれた!救助チームを要請する!グリッド南東第25地区だ!」

「中佐、くそっ……ネウロイめ!落としてやる!」

洋介は美緒を落とした人型ネウロイを、全速力で追撃した。

「ああっ!!桜井!...少佐はシールドを張ったのに...まさか!」

「『バルクホルン大尉!ネウロイを追いなさい!命令よ!』」

第11話 突き詰めた真実

インカムから泣き叫ぶようにミーナが指示する。

洋介は編隊の前に飛び出て、小銃の銃口を人型ネウロイに向けて撃った。

ウィッチたちの距離から離れ、人型ネウロイは空中停止、攻撃してこなかった。

洋介が小銃の照準器に入れて留めを差そうにも人指し指が動かず、引き金が引けなかった。

「なぜだ！なぜネウロイが動かない…なんで指が動かないんだ…」

不審に思っていると、ネウロイが洋介に接近してきた。

「桜井！」

「待て、トウルレーデ！撃つな…」

小銃を下ろし、人型と向き合い静止する。

洋介の波導からは殺気が無く、洋介と人型の距離は1メートルもなかった。

暫く人型は洋介を眺めて、胸部からコアを露出、そして頭の中から声が聞こえた。

「ネウロイのコア…!？」

「(すみません…少しだけあなたを調べさせていただきます)」

「何だって!?!…かはっ!!」

「桜井!？」

ネウロイのコアから太陽に匹敵する赤い閃光が放たれ、洋介は何かショックを与えられたかのように体が動かなかった。

「まさか、洗脳か…!?」

洋介の頭の中で何やら象形文字が浮かび、施設らしき光景を目の当たりにした。

「何だこれは!?…ここはどこなんだ!?…うぐっ!がはあっ!」

洋介の身体から力が抜け、意識がなくなった。

それを目の当たりにしたトゥルーデが怒り、MG42を構えた。

「…おのれ…よくも桜井を…洋介を!!」

「トゥルーデ!!洋介に当たっちゃう!」

トゥルーデが放たれた弾丸が、気を失った洋介の左手からシールドを防いだ。

「あいつのシールドを！」

『邪魔をしないで…』

「！？」

バルクホルンたちは耳を疑った。

洋介の口が動いても、洋介の声ではなかった。機械的な変声で女性的な声だった。

「洗脳、されたのか…？」

「お願い、…私の…邪魔をしないで…」

それを最後に人型ネウロイは瞬間移動で消え、ネウロイの能力で支えていた洋介の身体が宙に放り出された。

「桜井！」

「洋介！」

「洋介さん、しっかりして！洋介さん！」

トウルーデとエーリカは洋介を回収、彼の身体には力がなく、目蓋は閉じられたままだった。

「……こちらバルクホルン。…少佐と桜井中尉が負傷した。これより帰還する…」

洋介を回収したトウルーデたちが基地に帰還するまで空気が重かった。

501基地 医務室前廊下

「坂本さん！しっかりして下さい！坂本さん！」

「少佐！返事をして下さい！少佐！宮藤さん！」

芳佳が治癒魔法を掛け、必死に治癒を施す。ペリーヌは美緒に懸命に呼び掛けながらも意識が、目を覚ます気配はない。

「…桜井さん…落ち着きなさい、宮藤さん」

その隣のストレッチャーには、同じく意識のない洋介が寝かされていた。

ミーナが静止して、男性医師と看護師が駆け付け、二人を医務室に連れて行く。緊急手術のランプが灯された。

「あ…」

「宮藤!？」

芳佳が魔法力を使い過ぎて、彼女はふらつき倒れた。

「芳佳ちゃん？大丈夫？芳佳ちゃん！」

リーネは目に涙を浮かばせ、立っていることしかできず。トゥルーデと芳佳の部屋まで運び、目が覚めるまで椅子に座っていた。

夕方

美緒は何とか一命を取り留めた。しかし、まだ予断を許さない。

美緒の寝るベッドの脇の椅子には、ペリーヌが座っていた。

ペリーヌの後ろには洋介が寝ているベッド。みんなと看病のために座っているが、サーニャが座っていた。

「（洋介さん……）」

「オーイ、交代ダゾサーニャ」

「エイラ…」

エイラがサーニヤと交代の為に入室、医務室に心電図の機械音が鳴り響くとき、入り口の扉を明け、芳佳とリーネが入ってきた。

「っ！」

芳佳の姿を確認したペリーヌは椅子から走るように立ち上がり、芳佳の顔にビンタを浴びせた。その音で視線を芳佳たちに向けた。

「あなたのせいよ…何か言いなさいよ！」

「落ち着け、ペリーヌ！」

ペリーヌは芳佳を責め、エイラが間合いに入って止めようとした。

「芳佳ちゃんは魔法力を使い果たして…」

「あなたは黙ってなさい！」

「黙りません！」

「落ちていてペリーヌさん」

「…」

「芳佳ちゃん!？」

芳佳は美緒に駆け寄り、再び治癒魔法を掻ける。今までより無言であつて集中していた。

エイラのポーチから、一枚のタロットカードが洋介の寝ている布団の上落ちた。出たカードは死神の正位置だった。

「…死神…縁起でもないな…エイラ…」

「洋介さん…!」

「桜井さん!」中尉!

今まで寝ていた洋介が身体を起こし、タロットカードを右手で掴んで見ていた。

「…桜井中尉、起きて大丈夫なノカ?」

「…ああ、このタロット占いだが…あの、夜間哨戒のお守りの譲渡できなかったことで……おアイコだな」

「うるセエ、もう気にしてないゾ!」

「みんな…今の状況を教えてくれ…」

ペリーヌたちが洋介に今の状況を伝えた。

美緒が緊急で一命を取り留めて意識が不明、芳佳が治癒魔法を掻けていることだった。

「そうか……ぐっ……」

洋介がベッドから立ち上がった時に転げ落ちた。

「桜井さん！」

「中尉、何を!？」

「先生を呼んできます！」

「構うな……!」

ペリーヌとエイラが洋介を支え、サーニヤとリーネが医師を呼びに医務室から出よう

としたところ、洋介が血相をつけて制止した。

「…構うな、僕は…中佐に報告することがある…大事なことだ…それに…腹が減った、何か食べるものと…僕の軍刀を…鷹狼はどこだ？」

「わかった…！」

「…軍刀を何に使うのですか？…まさか、…中佐を切り込みに…」

「…杖代わりだ…！」

「私が支えていきます！」

「サーニヤがいくナラ私もいくゾ。刀を杖代わりでも物騒ダナ、…私たちが支えていくから」

「すまん…／／／」

洋介はリーネが食堂でシャーリーの缶詰めのスパムを持って食し、食後にエイラとサーニヤに支えられながら医務室を出て、ミーナがいる執務室に向かった。

黄昏が執務室を照らす中、ミーナとトゥルーデ、エーリカの3人が芳佳の処理について談話を行っていた。

「中佐、ミーナ中佐！」

「「桜井」さん！」

「洋介！大丈夫なの…？」

「エイラ…サーニヤ、ありがとう…後は大丈夫だ…ミーナ中佐、二人つきりをお願いします！す！」

「ええ…わかった…！トゥルーデ、エーリカ！」

「わかった…行くぞ、ハルトマン」

「はいはい」

洋介はエイラとサーニヤ、ミーナはトゥルーデとエーリカを執務室から退出させ、部屋の中で二人つきりになり、洋介は出現した人型ネウロイの件について報告をした。

「あの人型ネウロイですが、僕に教えてくれました」

「何ですって?…ネウロイが…?」

「そうです、異世界人の僕が来てしまったことは…ネウロイが重要な機密を、転移をした計画が存在すると…」

「…桜井中尉、その件については保留にします」

「何ですか!?!確かにネウロイと戦い、欧州を奪回することは百も承知です!そのまま

無闇に戦えば我々の……いや、この世界の未来がありません！」

「そんな事はわかっています！桜井中尉は私たちウィッチで大切な仲間、家族です……坂本少佐のように……美緒みたいに犠牲を出したくないの……だから、お願い……行かないで……」

ミーナの顔が険しくなり、人型ネウロイに関わることを取り止めることを宣告したが、彼女の左目から涙を流しながら懇願して、洋介に抱きついた。

洋介はまだ負傷した身であり、暫く医務室のベッドで休むことが第一の任務に就いた。

翌朝 医務室

それから、一晩に及ぶ芳佳の治癒の甲斐あり、美緒は目を覚ました。洋介も昨日に比べてかなり身体が回復した。

いつネウロイが襲来しても出撃可能だが、1日は安静にすることを医師に忠告を受けた。

「ん？あ…ああ！さか」

「し…」

美緒は一晩看病して、そばで眠っているリーネとペリーヌ、洋介を指差した。

「よかった…」

「宮藤…ありがとう…」

美緒から感謝を受けた芳佳は少し顔を赤らめる。

坂本は窓の向こう、大空に眼を向けていた。顔を少し引き締め、芳佳に説いた。

「宮藤、なぜ撃たなかった？あるとき、お前はなぜネウロイを撃たなかった…」

「撃てなかったんです…」

美緒は芳佳の手を掴み、引き寄せる。

「人の形をしているからか？あれはお前を誘い込む罠だ…」

「でも、私あるとき、何かを感じたんです」

「ネウロイは、敵だ」

「…もし、私が撃っていたら、坂本さんも洋介さんも、こんなことならずに済んだんですか…？」

「芳佳…そういう話しじゃないだろう？」

洋介がいつの間にか起き上がっており、二人の話しを聞いていた。

「おはようございます坂本さん、芳佳。坂本さん、ご無事で何よりです。芳佳、一晩の看病お疲れ様」

「洋介さん！身体は大丈夫ですか…？」

「ああ、医師から1日だけ出撃の停止を食らった。過程や規則はどうあれ、俺と少佐は生きて帰ってきた。それで充分だ」

洋介は二人の前で笑みを浮かばせた。

「でも…」

「芳佳は失敗をしたかもしれない、でも坂本さんを助けてそれでいいんだ。もし、自信が持てないなら、自分の行いが、その感じた何かが正しかったかどうか、その目で確かめ、貫く勇気も必要だ。」

「…」

「少なくとも、俺はそうする。悔いのない選択を……と、言っても俺の父親の口癖だ」

芳佳はどこか納得していない表情だったが、ミーナに呼ばれて医務室から出て執務室に向かった。

芳佳は独断先攻、命令違反、上官を負傷させて敵を取り逃がした重罪により自室禁固を受けた。

リーネの計らいで浴場に行き、芳佳はシャリーリーの胸元に抱き寄せ、埋まってニヤけて赤くなり、みんなの笑い声が響いても、彼女の気分は晴れなかった。

基地宿舎

「いいな、宮藤軍曹。必要な時以外は外出禁止だ」

芳佳の自室にはトゥルーデから鍵を架けられ、彼女はベッドにうずくまりながら悩み、考えていた。

「(どうして、誰も信じてくれないの？あれは間違い？…ううん、きっと違う…私、どうしたら良いんだろう…)」

芳佳は医務室で洋介に言われた言葉を思い出し、跳ね上がるように起き上がる

「(やっぱり、確かめたい)」

医務室で洋介は美緒と談話していた。

洋介は執務室から出た後、美緒とミーナが二人つきりになった時、扉に耳を傾けて聴く。

ウィッチの年齢は二十歳前後で魔法力が衰退、シールドを張れなくなることを、彼女は二十歳を越えていたためシールドが弱体していた。

「…坂本さんは随分、飛ぶことに執着しているんですね。俺のかつての隊長みたいです
よ」

「…知っていたのか…しかし、お前は羨ましい。ウィザードの年齢が二十歳を過ぎても

魔法力は衰えず、シールドも健在だな」

「そ、そんな…俺は魔法に関してよくわかりません…それに…あの時の夜、ミーナ中佐と話しているのが気になって、聞こえてしまつて。すいません…」

「謝らなくていい…私は、まだ飛ばなくてはならないんだ。ウィッチに不可能はない!」
「ウィッチに不可能はない!…いい言葉です。…しかし、宮藤芳佳のことですか…でも、もうあなたは…」

「桜井、お前は何のために飛んでいる?」

洋介の言葉を遮り、美緒が質問を問いかけてきた。彼は何て解答すればいいのか迷っていた。

「…わかりません…なぜこの世界に迷い込んだのか…幾つか知りたいです。俺は…この世界に来てしまった引き換えに…この世界を救いたい…」

「はっはっはっ！お前らしいな!!」

「うう…／＼／＼」

美緒から笑われ、洋介は照れ気味になり、暫し沈黙の後、坂本が自らの質問に答えた。

「…私にとって、戦うことは生き甲斐だった」

「坂本さんはウィッチの中のサムライですね。…今までの俺は、ひたすらお国のために戦ってきました。一時は故郷に帰還して、幼馴染みと結婚して夫婦になりました」

「そうか…お前既婚者だったのか!？」

「…翌年に娘が生まれ、国と家族のために戦うと決めました。家族で過ごした期間は3日。俺は戦いの空に戻った後、妻は空襲で倒れ、意識不明に…そして戦争が終り、家族の元に帰れると思ったが…このウィッチの世界に来てしまいました…」

「そうか…気の毒なことを聞いてすまなかった…」

「いいんです！…この命がある限り戦い続け、この世界に骨を埋める覚悟です！」

「…そうか、お前もサムライだな！向こうの世界に未練はないのか？」

「無いと言ったら嘘になります。仮に戻っても、家族と一緒にこの世界に移住して来ますよ。それに、最近ミーンナ中佐から妙な目で見られています…」

「はっはっはっ、そうか！それに、お前がいた世界の思い出話しが聞きたいな」

「いいですよ、お互いに語り合いましょう。ただし、激戦の話は無しですよ」

洋介はお互いに坂本との思い出話を語った。

坂本美緒の思い出は、扶桑海事変の前後で仲間と最後の勝負で引き分けになり、恩師の刀を譲り受けて欧州に渡って、教え子と共に苦楽を共にネウロイと戦い、今に至って

きた。

桜井洋介は南太平洋の赤道祭で宴会。ラバウルでの拳闘大会の準決勝で敗退。釣り勝負で勝利。

そして、ストライクウィッチーズみたいな少数精鋭の名前ばかりのはみ出し部隊、ラバウル六勇士を結成。

母国で幼馴染みと結婚。翌年に娘が産まれ、感涙した。そして、語り合う時間が過ぎた。

いつの間にか眠り、雨が降る夜明け前に洋介は目覚めた。

「…!? これはっ!」

洋介は何かに気付き、格納庫に向かった。そこには芳佳とリーネがいた。

「芳佳ちゃん!」

「リーネちゃん…!」

「今度出て行ったら禁固処分では済まないよ」

「どうしても確かめたいの！」

「私、…ネウロイのことはわからない…でもね！芳佳ちゃんのこととは分かる！諦めないところ、真っ直ぐなところ、…だから…私も一緒に行く！！」

「え？」

「直ぐに仕度するから！！」

「駄目、リーネちゃん！」

リーネがストライカーのラックに駆けつけようとした時、芳佳が制止した。

「…どうして？…私じゃ駄目…？」

「…違うの、…これは私一人でやるって決めたの…お願い…!」

「駄目だ!」

「!?!」

光りのない影から、険しい顔をした洋介が出てきた。

「リーネの言う通り、勝手に行くのは許されんことだ!」

「洋介さん…! お願い、行かせて!」

「二人では無理だ、リーネの危険を措かせない代わりに俺が行く」

「え…?」

洋介が意外なことを述べ、二人は驚いた表情だった。彼は装備を軍刀と拳銃を整えな

がら説明した。

「芳佳、君が先に飛び立って行くその後、俺も出撃して君を追う、威嚇射撃を…」

「駄目です！絶対駄目！芳佳ちゃんに当たっちゃう！」

聞いたリーネは断固反対した。リーネの気持ちとしても、彼をこれ以上に殺させたくはなかった。

「仲間を助けるための演技だ、あくまでも万が一周囲から誤魔化すためだ、僕を信じろ！」

洋介の目は真剣だったため、リーネは後ろに下がり掛けた。だが、芳佳はなぜ付いて行くのか疑問に感じ、彼の前に立ちはだかり質問した。

「…洋介さん…何で…」

「…あのネウロイが教えてくれたんだ、…僕がこのウィッチの世界にやってきたことが…その真実を知るためにも僕は行く！」

「…わかりました…！」

リーネは無言で洋介と芳佳を抱き締めた

「早く帰って来てね…」

「うん…」

「ずっと、待っているからね…」

「うん」

雨の降る中、芳佳は単独で出撃。洋介は完全武装のままタイミングを見計らって、軍刀鷹狼と南部拳銃、四式小銃を装備したまま待機、そして時間がきて出撃した。

「桜井洋介、零式戦行きまーす！」

洋介は芳佳を追い、出撃して数十分。

基地からミーナからの通信が入った。連絡内容は宮藤芳佳の脱走、上からの指示で墜命令が下った。厄介なことだが、洋介の想定内だった。

「墜命令ですか!？」

「『ええ、発砲を許可します！宮藤さんの拘束をお願い、私たちもあとで追って行きます！（全く、扶桑の魔女に続いて魔術師も…）』」

「…了解しました！…行くぞ相棒!!…ハックション!!」

医療室にいた坂本もくしやみをした。

洋介はユニットの魔導エンジンの速度を上げ、雲が開いた先に日光が照らし、かつて遭遇した空域に芳佳と人型ネウロイを肉眼で目視、インカムを使用するも雑音が止ま

ず、肉声が届くまで接近して呼び叫んだ。

「おおーい!! 芳佳あつ!!」

「っ!?! 洋介さん!!」

「キュイイン!」

「待て! 今はこんな装備しているが、君と戦うために来たのではない!!」

瞬間に人型ネウロイが片腕を洋介に向けてビームを発射した時、その間に芳佳が割り込み、制止する。

「待って! 洋介さんは悪い人じゃないの!」

「…キュイイン」

人型は突き出した腕を下ろし、洋介は両腕を上げ、戦闘の意思がない様に芳佳の隣に並び、人型と向かい合った。

「君、僕のことは覚えているか…?」

「……………」

「そうか、よかった…」

芳佳が洋介の顔を覗くように見つめ、訪ねた。

「洋介さん…このネウロイの言っているのがわかるのですか!？」

「…わからん…ただ、僕の波導で感じる…」

「キュイイン」

「何!?! わかった。今度はお手柔らかに頼む。」

「洋介さん、何て!?!」

「…私はあなた、宮藤芳佳と話す代弁者になって下さい。と…」

「代弁者…?」

人型の胸元からコアを洋介に見せ、赤い閃光が放たれた。

「ーっ!…ぐあっ…ぎやつ…」

「洋介さん!!」

余りにも眩しい光りを浴びて、洋介は苦痛な叫びを上げ、芳佳が止めに入ろうとするが、彼は片手で制した。

「洋介さん……!」

『あなた方を待つていました。』

「!?……洋介さん……洋介さんではない……」

『私は、人の言葉を話すことができません。だから彼の身体を借りました』

「か……借りた?」

ネウロイが洋介の身体を借りて、芳佳に代弁していた。どちらを見て交流するのか彼女は困惑する。

『宮藤芳佳さん、私はあなたとこの方に伝えたいことがあります』

「私に?」

『はい、私たちの巣にご案内します』

ネウロイは洋介を従えて、上空の黒い雲にネウロイの巣方に向かった。芳佳は慌てつつも着いて行つた。

「いた！みんな一緒にいるよ！」

芳佳の追撃に遅れたミーナ中佐以下トゥルーデ、エーリカ、シャーリー、ルツキーニが到着。

遠いところから洋介と芳佳を目視した。

「あいつが坂本少佐を!!」

「待って、よく見て！」

「洋介の奴どうしたんだ？」

「前にあった時と同じだ…また洗脳されたんだ！」

彼女たちからは、洋介がネウロイ側に従事、ネウロイの横に飛行して芳佳とネウロイの巣に入った。

「洋介と芳佳が中に入って行くよ！」

「なにっ!？」

ルッキーニの言葉を聞いて全員が見る。その光景を見て全員が哑然、今までの激戦で誰も近づくことができなかったネウロイの巣に、二人は易々と入ったのだ。

「入っちゃった…」

「誰も入れなかったのに…」

「奴らの罠か!？」

全員が口々に言うが、トゥルーデは最悪のことを仮定した。
それを聞いて真っ先にルツキーニは巢に向かって飛ぼうとした。

「芳佳！ 洋介！」

「待ちなさい！」

「中佐!？」

「…様子を見ましょう」

ミーナの突然の制止にみんなは驚くが、彼女はこの状況を黙って見ることにしたのだ。

一方、雲の廊下を抜け、巢の中心部らしき大部屋に出た。

『「こちらです、芳佳さん」』

ネウロイはドームの中央付近にある大きなコアのそばへと向かう。部屋の地面に当たる部分が、世界地図を表示する。丁度ガリアの位置にコアが点在する。

「これは…地球…?」

『見せたいものはこれです』

向かい合った芳佳とネウロイの周りに無数の画面が現れる。地球が表示され、大戦初期の映像が流れる。

欧州の地を、ネウロイが焼き払う光景だった。

『これは、私たちが行ってきた許されるべきではない行為『侵略』です』

また別のネウロイが映し出され、一人のウィッチも映し出された。

「坂本さん!」

「『あなたたちウィッチは私たちにとって脅威であり、興味深くもありました。』」

突然場面が変わり、戦場跡のクレーターの中にネウロイのコアが残っていた。研究所の施設らしきところが映され、そこには見たこともない物体と、先ほどのコアがガラスに閉ざされていた。

「『私たちがウィッチを知ろうとしているように、あなたたちが言うネウロイを知ろうとしていた…』」

芳佳が見た映像は、ついこの間の映像であった。

『ねえ、私をからかっているの!?!』

「私だ…」

「『もう1つ、重大なことがあります』」

「えっ!？」

「『この扱っている人が、私たち秘密裏の実験でこの世界に転送したことを…』」

「なんですって!?! 洋介さんがこの世界に…」

「『私は科学者の一人で、現在は頓挫していますが、実験研究を行っています。異次元転移計画、通称ガリバー・プロジェクト』」

「ガリバー・プロジェクト…」

「『そう、残念ながらこれ以上はわかりません。ウィッチを調べていくうちに、私たちの興味は人類そのものとへと移りました』」

「人類…」

「『そう、あなたたちが私たちを、私たちもあなたたちと分かり合い、願わくは共存したい』」

「私たち、きつといつか分かり合えるよ」

「『ありがとう、芳佳さん』」

人型は右腕を出して、腕の先に五本指を生成、その手を前へ差し出す。

「『握手していただきませんか？』」

「うん…」

ネウロイの手が、芳佳の手を握ろうとしたとき、その手が止まる。

「どうしたの？」

『誰か…いや『何か』が来ます…!!』

「えっ?」

「『ここ』にいて下さい!」

人型は洋介ごと瞬間移動して、彼女は巢の外に出現した。

「さっきの奴だ!!桜井も一緒!」

「洗脳が解けてない!」

「いない、やっぱり罠か!」

「『逃げて下さい!!』」

「[[[[[!?!]]]]」

『ここから逃げて下さい!!早く…!!』

「あいつ、なにを…?」

人型と洋介が、ミーナたちの背後に周り、驚いたトゥルーデとエーリカが機銃を向けるが、洋介がいて発砲ができなかった。

ネウロイが洋介の身体を使ってシールドを張った時、突如、ビームが着弾した。

「!?!」

「なに!?!」

「ネウロイが、私たちを庇った…!?!」

『早く逃げて下さい…逃げて!』

それを最後に、洋介の身体の呪縛が解かれ、零式戦ストライカーが再起動して、意識が戻った。

「…はあ…がはっ!？」

「よ…洋介、大丈夫!？」

「あ、ああ…おいつ君！」

「キュイイン」

第12話 ストライクウィッチーズ

洋介は人型に手を伸ばした時、別の方向からのビームが彼女に直撃。

そのビームが直撃する直前、ネウロイの表情はないが、洋介からして見れば哀しみと笑みを浮かばせた。

別の機体が出現、編隊のすぐ脇を通り過ぎた機体が人型に変形し、その機体はネウロイの巢を捉え、機体からビームを発射して巢を貫き燃やした。

「なんだあいつ？」

「ネウロイを一撃で…」

「…まずい、巢の中に宮藤が…」

「うじやああ!? 芳佳あつ!?」

「宮藤イイ!!」

シャーリーとルッキーニが落ちていく芳佳を追う。あの機体に変形し、もと来た方角へ飛び去った。

「(あれは!? ネウロイのコアと一緒にいた…)」

「桜井さん? 大丈夫ですか!? それと、あのネウロイは…?」

二人に連れられて芳佳が編隊に戻ってきた。

「大丈夫だ、身体に異常はない。あの人型は…俺たちを庇って死んだ…」

「!?」

「桜井、なぜ二度も洗脳されるようなことに？」

「洗脳？ トウルルーデそれは違う！ 俺はただ、ネウロイの通訳と極秘な情報を掴み…」

「その話は後よ！ 宮藤軍曹、あなたを無許可離隊の罪。桜井中尉、あなたも共犯として拘束します！」

「…わかりました！」

洋介は所持していた小銃と拳銃、軍刀鷹狼を空中でミーナたちに手渡し、解除した。基地に戻る途中、洋介はネウロイが残した重大な記憶を整理した。

異次元転移計画Ⅱガリバー・プロジェクト。ネウロイの極秘の研究実験で異世界から異世界兵士を送り込み、ウィッチの世界を窮地に叩き込む作戦計画だ。

実験の漏洩か何かで、あの占守島の戦いで洋介がネウロイの実験に巻き込まれたことを推測した。

「（あのネウロイの中にも、あいつのようなパイロットがいたんだなかし…あの物体は

…」

だが、最も重要なのが人類とネウロイ研究とその軍事利用だ。先ほどの攻撃でやられたネウロイは存在を感知していた。あの機体がビーム兵器を所持、あれにはネウロイの技術が使用されている可能性がある。

「あれ、誰かいるよ？」

滑走路にはブリタニアの歩兵8人、士官服を着た初老の男が一人立っていた。

ミーナたちは彼らの前に到着した。あの時ブリタニアの上層部で洋介を動物のように見ていたブリタニア空軍大将トレヴァー・マロニーだった。

「ご苦労だった、ミーナ中佐」

マロニーの背後に、先ほど飛来した飛行物体が着離。直後、彼の歩兵がウィッチを包囲、短機銃を向けた。その合間でウィッチたちの武装を強制的に取り上げ、解除させた。

「まるでクーデターですね、マロニー大将」

しかし、マロニーはミーナの言葉を特に気にする素振りをせず、当然と言わんばかりの態度をとる。

そして、マロニーは書類をミーナ達みんなに見せた。それは配置転換の書類だった。

「命令に基づく正式な配置転換だよミーナ中佐。この基地はこれより私の配下である第一特種強襲部隊、通称『ウォーロック』が引き継ぐことになる」

「ウォーロック…!?!」

ウォーロックという言葉にウィッチーズを困惑させた。洋介はマロニーの後ろに聳え立つウォーロックと呼ばれる兵器を見る。

機械の身体に手が生えた様な構造をしているウォーロックを見て、あの時意識の中、人型ネウロイの記憶で見たことを呟いた。

「こいつがウィッチの変わりになるのか、あの時のネウロイの記憶で見た機械か…」

暫くすると、包囲されているミーナたちの所に次々と基地で待機していたリーネとエ

イラとサーニヤ、車椅子に乗る美緒とペリーヌも集まってくる。

「ウィッツチーズ全員集合かね」

マロニーは一步前に出て、芳佳の前に立つ。

「君が宮藤芳佳軍曹、そして桜井洋介中尉か」

「はい…」

芳佳は目の前に立つマロニーの気に押され尻すぼみな返事をする。

「君は軍規に背いて脱走をした。そうだな？」

「…軍規…」

芳佳はマロニーに言われ思い返すが、彼女は何か思い出したのか反応する。

「あつ…！その後ろの…」

「ウォーロックのことかね？」

芳佳の反応にマロニーは自信満々そうに紹介をする。しかし、芳佳はさらに続けた。

「私見ました！それがネウロイと同じ部屋で、実験室のような部屋で…」

「なっ!?何を言い出すんだ君は！」

芳佳の発言にマロニーはまるで動揺したように反応した。

そしてその反応を見逃さない者が数名いた。その中で洋介は、冷静にあの時の記憶を分析し、マロニーに述べた。

「俺も見た。俺と宮藤芳佳が接触したネウロイは、人類のネウロイ研究と軍事利用のことを知っていた。彼女はそれを教えてくれた！」

「何を言っておるのだ…質問に答えたまえ！君は脱走した！そうだな？」

「…はい。でも…」

洋介の言葉を見無視して、マロニーの質問に芳佳は返事をするが、追加で何かを訴えようとした。しかし、マロニーはそれを聞かずミーナを見る。

「中佐、私は脱走者を撃墜するように命令をしたはずだ」

「はい、ですが…」

「隊員は脱走を企てる。それを追うべき上官と部下も司令部からの命令を守らない。全く残念だ…」

マロニーは心底失望したように述べ、それを聞いて洋介は腹が立つが何とか胸で抑えた。そしてさらにマロニーは衝撃の言葉を追及した。

「本日只今を持って、第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズは解散する！」
『なっ!?!』

マロニーの言葉に全員が驚く。
ブリタニアの防衛を担っているストライクウィッチーズを突然解散すると言い出すのだ。

「各隊員は可及的速やかに各国の原隊に復帰せよ！以上だ。わかったかね中佐」

「…了解しました」

ミーナは相手に悟られないように、しかしそれでもマロニーを睨みながら返事をした。

中で一番ショックを受けたのは芳佳だった。

「そんな…解散…ウィッチーズが…」

「君の独断専行が原因なのだよ、宮藤軍曹」

芳佳は解散と言う現実を受け止められなかったが、更に畳みかけるようにマロニーが追及。

そして、それにショックを受けた芳佳は気を失い倒れた。洋介は倒れ込む芳佳を介抱し、マロニーに反論した。

「…芳佳っ…くっ…たかが下士官…いや、一人の女の子の行動で、部隊の解散を追いつ込むなんて…血と涙もない冷徹な機械で、ウィッチー人の変わりをさせることが馬鹿げてる…!!」

「黙れ!…異世界人の君に関して、桜井中尉は我がウォーロックの傘下に入ってもらおう」

「なに…!?!」

「マロニー大将！彼は、桜井中尉は私たちカールスラントが…」

「ミーナ中佐、君にはもう権限はない。桜井中尉もウィザードの拒否権はない、強制的について来てもらう」

「…よせつ、やめろ!!俺はあんたが上官になつても命令はクソ食らえだ!!ウィッチーズを解散に追い込む奴なんか、ネウロイとの戦争に勝てるのかあ!!」

マロニーは手の合図で数名のブリタニア兵が洋介を捕まえるように、基地の内部に連れ込み、洋介は暴れた。

「生意気な…構わん」

「ぐがはっ!…」

「ああ…」

マロニーの合図でブリタニア兵は洋介の後頭部を小銃で殴打、気絶させたまま連れて運ばれた。

ミーナが制止することができなかったことを悔やんだ。

ウィッチたちはマロニーの命令通り原隊や母国に帰投、501基地から出て行った。

そして、ウィッチたちが立ち去るところを見計らつて。マロニー大將麾下、態勢を整えていた。基地の格納庫が封鎖され、ストライカーの射出が不可能になっていた。

管制塔

「閣下、ウィッチーズ全員が当地より離れました」

「うむ…」

報告を聞きマロニーは頷くが、彼は内心で焦りを感じていた。

「すべて順調です」

「どこが順調なのか。全くとんだタイミングだ……こちらの戦力はまだウォーロック機しかない。表に出る時期では無かったのだ」

副官がマロニーに述べ、マロニーは不満だらけだった。彼の顔を歪めて副官の言葉を反論する。

「しかし、もう隠れているわけには……」

「そうとも、しかしもう一ついい収穫もあった。世界でただ一人の扶桑のウィザードだ、奴の身体を徹底的に研究調査し、そのエネルギー源を発見して量産、わがウォーロックと並ぶウィザード部隊を結成させるのだ。」

マロニーがあの上層部で桜井洋介を目の当たりにした時、ウォーロック同様に彼の魔法のエネルギー源で何とかウィザード量産の計画を視野に入れていた。

一方、洋介は基地の地下の独房で洋介は気絶したまま閉じ込められていた。

気絶した洋介は夢を見た。夢の中で現れたのはフィリピンのレイテ、エンガノ海戦で空母瑞鶴の最後まで戦い、その後マバラカット基地で別れ、戦死。

洋介が尊敬した生粋の戦闘機パイロット厚木十三少佐だった。

「(何しているんだ洋介!!)」

「(…厚木隊長…!!)」

「(こんなところでくたばるのは勝手だが、それでも戦闘機乗りか!! 戦闘機乗りの任務を遂行しろ!!)」

「(…厚木隊長…すみません、隊長…戻ります。俺がいる世界を助けるための戦いの大空に)」

洋介は気が付き、目覚めたところが檻の中に閉じ込められていた。

洋介は航空半長靴の右靴を脱ぎ、靴の中に針金を仕込ませており、針金の先を変形さ

せて、檻の鍵穴に挿し入れて解錠した。

「よしっ、解錠成功……あ…」

「…!? 扶桑のウィザード!! 止まれ!」

「そう問屋が卸すか!!」 バシッ

「…ぐはっ……………」

洋介は檻を見張っていた一人ブリタニア兵の背後に回り、手刀で後頭部を殴打、気絶させ、身ぐるみを脱がせて洋介が着用、彼はブリタニア兵に変装した。

「……以前のニューブリテン島、グロスター岬を思い出すなあ」

洋介は感傷に浸りながら個人装備の軍刀鷹狼と拳銃、四式小銃を探しに基地内部を探索している時、彼は波導で海の一点を指し示し、確認したのは空母。空母が黒煙を上げ

て、時折爆発を起こしていた。

「あれは……赤城……赤城じゃねえか!？」

空母赤城が飛行物体であるウオーロックの攻撃を受けていた。ウオーロックと唯一、交戦していたのは芳佳ただ一人だった。

「くそっ……芳佳、待ってろ!」

洋介は急いで自身の所持品の軍刀等を探したが困難を極めつつ、やっと発見した。

管制室

「ウオーロック強制停止システム、作動!!」

しかし、ウオーロックは止まらず、暴走を続けていた。次第に基地も攻撃に被弾、赤城も大破炎上し沈没寸前だった。

「っ！ なぜだ！なぜ停止しない!?」

次の瞬間、管制室の扉から警備兵が緊急で駆けつけに来了。

「マロニー閣下、緊急です!」

「今ウォーロックに関して手が一杯だ、後にしたまえ!」

「それが、地下に閉じ込めていた扶桑のウィザードが脱走しました!!」

「何だと!?こんな時に…奴を探せ!」

「了解しました!!奴は…ここにいます!!」

一人の警備兵が身に纏った軍服を脱いだ。

その正体は日本海軍中尉、第三種軍服を着用し、軍刀鷹狼を所持した桜井洋介だった。

鞘から軍刀を抜き、マロニーを突きつけた。

「なっ…貴様!!」

「こうなることだと思った!トレヴァー・マロニー!今すぐウォーロックを停止しろ!!」

「できるものならとつくにやってるさ!兵たち、この扶桑のウィザードを捉えろ!不可能であれば射殺だ!」

「」 はっ!! 「」

「させるか、そこっ!!」

ステンマシンガンを構えた兵士が洋介に銃口を向けて発砲、洋介はシールドを晒して防ぎ、ホルスターから南部十四年式拳銃を抜き出して発砲、ステンマシンガンを当て、弾き飛ばした。

管制室にいた兵士と研究者が恐怖を感じ取り、全員が部屋の間隙に逃げて怯えている。その姿は追い詰められたネズミのようだった。

「…ウォーロックが止められないなら、撃墜するしかないか…」

「無駄なことはやめろ！」

マロニーは懷から拳銃を取り出した。気付いた洋介は軍刀を抜刀、そして副官も床に落ちていたステンマシンガンを拾い、銃口を向けた。

「待て！武器を捨てろ…」

「待て…誰に言っているんだ副官！」

「閣下だ。…中尉、一つ頼みがある。私のことはどうでもいい。だから、閣下や部下、研究員には手を出さないでくれ」

「副官！」

「…いい部下をお持ちだな、大将」

洋介は軍刀を鞘に納め、拳銃をホルスターに入れながらマロニーを睨んだ。

「…」

「副官、一つ聞いていいか？なぜ、この研究に携わったんだ？」

「…戦争は男の仕事だ…女には任せられない！」

「本当にそれだけか？」

「ウィッチを、少女たちを戦場で戦わせたくなかった。傷付けたくなかった」

「だから、ネウロイの技術を利用しようとしたのか…それに副官もう一つ、なぜ俺をウォーロック部隊の強制的に傘下を加えようとしたんだ…」

「…中尉は世界でただ一人のウィザードだ、中尉を研究してブリタニアに多くのウィザードを量産を視野に…それ以外方法がなかった…」

「そうか…俺を実験台にするのは構わん、だがな」

「!？」

洋介は副官の襟首を掴み挙げた。

「彼女らは自分の意志で戦っている！奪われた祖国の解放のため、家族のため、希望と未来、平和のためと言う意志でな！お前はその思いを踏みにじった！俺の言ってる意味が分かるか！」

「ぐるうつ！」

「実際にウィッチと最前線で、激戦地で戦ってみろ！さっきまで綺麗事なんて言っただれんぜ！」

「でぶうつ……！」

洋介はぼろぼろになるまで副官の腹部と顔を殴り、彼は床に座り込み、最後に副官の首筋に刀を向けた。

「即座ウィッチたちの解散と、ウォーロックの実践配備で赤城の誤射、この代償は安くない」

「待って!!」

「ミーナ中佐!!」

管制室の出入口に、基地から退去した筈のミーナとトゥルーデ、エーリカの三人が入室した。

「殺すのはダメよ」

「…ミーナ中佐、これだけはお許しを…たあつ！」

「げふっ…」

洋介は軍刀で壁を傷付け、副官を気絶させた。トゥルーデは管制室のコードでマロニーを縛り、確保した。

「桜井、一体何があつた!？」

「…そうだ、ウォーロックが暴走した挙げ句、赤城を攻撃。芳佳が一人で戦っている！」

「宮藤が!？」

「格納庫に急ごう!!」

赤城上空では、芳佳とウォーロックが激しい空中戦を繰り返していた。

するとウオーロックが突然空中で静止し、V字の赤いランプが消え機体内部からカプセルに入ったネウロイのコアが露出する。

「(…っ！人型ネウロイも、同じ事をした。あのネウロイは、私たちと分かり合おうとした。もし、このネウロイもそうなら…)」

芳佳は銃口を下げ、コアに近づいていく、左手を銃から離し、コアへと伸ばす。
だが―

「きゃっ―」

突然ビームが発射されるが、咄嗟に張ったシールドで防ぎ、事なきを得る。

「(違う…このネウロイは、敵なんだ!!)」

基地 格納庫前

「つまりだ、宮藤がネウロイと接触しようとしたから、奴らは慌てて、尻尾を出したって訳だ。わかるだろう？ ミーナ」

「はいはい」

「だろう？ エーリカ、桜井？」

「あー、もう私の知ってるトゥルーデじゃない…」

「俺も接触したんだけどなあ。ネウロイと人間の通訳になったんだが…極秘の情報を知ったー」

「極秘の情報…？」

「異次元転位計画、通称ガリバープロジェクトだ!!」

「ガリバープロジェクト…ねえ…桜井さん…この戦いが終わったら、私たちとカールスラントに来てくれる？／／／」

「…いいでしょう。…ただし、僕が負傷しなければ♪」

トウルルーデの熱の入る説明を聞き、ミーナは苦笑いをし、エーリカはぐったりとする。洋介はミーナにネウロイの極秘の情報を真剣に聞いていた。そして、四人が格納庫に近づくと、格納庫前に立っている二人の人影に気付く。

「あれ？」

「エイラさん！サーニヤさん！」

「お前達…なんで戻ってきたんだ？」

格納庫の前に立っていたのはエイラとサーニヤだった。二人は封印された格納庫を見て困ったように立ち尽くしていたが、四人に気づき振り向く。そしてトウルルーデに質

問されエイラは何故か慌てる。

「あ、えっと、その…列車がさ！ほら、二人共寝てたら始発まで戻ってきちやつて…仕方ないからこの様子でも見ようかな…って…なあサーニヤ」

エイラが説明をするが、完全に何か本音を隠している説明だった。
そしてサーニヤに賛同を求めるが、サーニヤは本当のことを話した。

「途中で気付いたんです。今、洋介さんと芳佳ちゃんが戦ってる。私達は洋介さん達を助けに来たんです」

「ああ、サーニヤ…」

「素直じゃないな」

「私達も同じよ」

「わ、私は違うぞー！」

サーニヤの言葉にエイラがハタレた反応をする。

そんな姿を見てエーリカがからかう。ミーナもおんなじだと言うと、今度は何故かバルクホルンが焦った反応をする。

しかし、彼女たちはこうやって話している暇はない。

「それより始めるぞー！」

トゥルーデは魔力の怪力を発動、鉄筋の一本を持って、投げ飛ばした。その光景を目にした洋介は感心した。

「……凄い怪力だな……」

赤城の方角から複葉機を操縦していたシャーリーとルツキーニが、赤城に乗船していた美緒とペリーヌを救出して滑走路に着陸。

最後にリーネが滑走路の脇から駆けつけに来て到着。ストライクウィッチーズが再

集結した。

赤城上空―

「くっ！はあ…はあ…」

未だに激しい空中戦が繰り広げていた芳佳は疲れが出て、さらに追い討ちを掻けるように、ウォーロックが多重ビーム攻撃を仕掛ける。

シールドを張り耐える時に突如、ウォーロックの脚部に対戦車小銃弾が着弾する。

「あっ！」

バランスを崩したウォーロックは落下、赤城を巻き込み、海に沈んだ。杉田艦長以下、赤城の乗組員は内火艇で避難、赤城の最後を見守った

「…赤城が…」

「…沈んでいく…」

上空

「お待ちせ！」

「芳佳！」

「一人でよく耐えたな宮藤」

「坂本さん、皆！」

「こいつは必要なくなったな」

トゥルーデは、芳佳のストライカーを脇に抱えながらの時、エイラがタロットカードを取り出した。

「そうでもないかも…」

「「「「「 え? 「「「「」」

「ほら見て!」

エイラの引いたカードは塔の正位置。意味は『破壊、破滅』。海面から泡が湧き、沈んだ赤城が浮上、空中に飛び立った。

「ウォーロックが赤城と…」

その間、美緒はミーナとペリーヌ、芳佳はシャーリーとバルクホルンに自身のストライカーユニットを装着、エンジンを作動した時、赤城のビームがウィッチたちを狙い発射。

「いかん、散開!!」

「美緒、出来る？」

「ああ、大丈夫だ！」

美緒の飛行がやや不安定のため、ミーナが彼女の手を繋ぎ、魔眼と空間把握を作動させた。

「な…なんだあれは…」

「ウォーロックと赤城が融合している…これじゃ手の付けようがないわね…」

「だがやるしかない、あれはウォーロックでもネウロイでもない、別の存在だ！我々ウィッチーズが止めなければ誰も、止める者はいない！」

「うん」

「…そうだ、あれを倒さない限り…未来がない…!」

洋介はネウロイ化した赤城を睨み、呟いた。

サーニャの魔導レーダーが作動した。

「来ます!!」

赤城全体からビームが発射。そして、ミーナが指示を出した。

「ストライクウィッチーズ、攻撃体制をとれ! 目標、赤城及びウォーロック!!」

「「「了解!!」」」

坂本はミーナの合体魔法でコアを探索、把握した。

「コアは赤城の機関部だ!」

「外から破壊出来そうもないわね、内部からたどり着くしか…」

「内部を知ってる私が行く！」

「ああ…」

ミーナは美緒の行動に危惧、手を握り締めた。

「私が行きます！」

「私も行きます！」

「わっ…わたくしも内部なら多少のことはわかりますわ」

「ありがとう！」

「俺も行くぜヨ！君たちだけじゃ不安だ！」

芳佳とリーネ、ペリーヌ。そして洋介も志願した。

「では、その他各員は4人の突入を援護、突破口を開いて！」

「了解！！」

赤城が雲海に出たところで、ミーナが合図を出した。

「攻撃開始!!」

トゥルーデとエーリカは赤城の右舷機銃座をシュトゥルム、機銃攻撃させ。

エイラ、サーニャペアは予知能力でビームを回避、フリーガーハマーで左舷機銃座を攻撃。

赤城のビームが弱まったところで、シャーリーとルツキーニは超加速と高熱魔法で急降下、艦首のウォーロックのビームを回避、ウォーロックの艦首ごと切り落とした。

ルッキーニの合図で4人が艦首から突入、だが

「きゃっ!？」

「あれは、ウォーロック！」

雲の中からビームが発射、艦首ごと落ちた筈のウォーロックが再び飛行した。

「ここは俺に任せろ！君たちは機関部に行くんだ!!」

「「はっはい!!」」

洋介はウォーロックの殿を勤め、あとの三人は赤城内部に突入した。

「ウォーロック！俺が相手だ!!」

洋介とウォーロックの一騎打ちが始まった。

機銃と小銃、拳銃弾を乱射してもシールドで防がれつつもウォーロックが弱まってきた。

「銃器の弾丸が尽きた…鷹狼で留めを…っ!」

ウォーロックが高速で洋介に接近して彼の左腕を強打、骨折した。

「ぐるう!!…ああ…」

「桜井!!」さん!!」

「洋介!!」さん!!」

その光景を目の当たりにしたウィッチたちは救援に駆けつけに行こうとしたが、赤城の機銃座らが再開、行くにも激しいビームで身動きとれなかった。

ウォーロックが旋回、洋介は飛ぶだけに精一杯であり再び彼に接近してきた。

「……くそ……次で弱った俺に留めを刺すつもりか……なら、俺もこの一撃で仕留めるしかない！零戦と鷹狼、力を貸してくれ……俺の魔法力よ、燃え上がれ……」

右手で軍刀を鞘から抜き出して精神を集中、洋介の身体と刀身から淡い光りが溢れた。

「……見える……そこだっ!!……流星斬!!」 スパアアアアアン

洋介は全速力でウォーロックに飛行、ウォーロックがビームを発射したところ、洋介は真正面から突進して背後に通り着いた。

ウォーロックが縦に斬られたと同時に赤城が結晶に変わり落ちた。

「やったな」

「あつ芳佳だ!」

結晶の中から芳佳を抱き支えた芳佳、リーネ、ペリーヌの三人が出てきた。

「やった！やったんだよ芳佳ちゃん!! 芳佳ちゃんがやつつけたんだよ!!」

リーネは強く芳佳を抱きしめ、ペリーヌはツンとした表情で芳佳のそばから離れ、ガリア上空のネウロイの巣が消滅。

シャーリーとルツキーニは歓喜を挙げ、その光景を見たペリーヌは涙した。

「ネウロイの巣が消滅した…」

「ガリアが…わたくしの故郷が…解放された…」

「凄いよ芳佳ちゃん」

「…うん…あれ?…洋介さんは…?」

だが、その喜びの中に洋介の姿はなかった。

先程のウォーロックのビームで腹部を射ち抜かれ、海に落下し、赤城の乗組員は落下した洋介を急いで内火艇で回収した。

洋介の存在に気付いたミーナたちは急いで洋介の元に来た。その姿の彼は右手で軍刀を持ったまま表情は微笑んでいた。

「…そんな…そんな！洋介さん!!」

桜井洋介は夢を見ていた。暗闇の世界で身体が浮いた状態であった。

「…僕は…死んだんか…これで…戦友たち…雪と亜弥たちの元に…往けるんだ…」

「(殺し合うのが、ウィザードじゃないでしょ)」

「!?!?…その声は…雪…どこに…どこにいるんだ?雪…」

彼の背後に洋介の妻、赤十字従軍看護衣を纏った桜井雪が現れた。

「(うふふ、あなたといつも心のなかにいるわ♪)」

「そうか…雪、君との過ぐす時間がなくて……すまない…」

「生きて、あなたがウィッチのいる世界で、ウィザードとして戦い生きて行くことが、私が許されることよ」

「雪…わかった、…僕は生きる、この世界でも僕は戦う！この命がある限り戦い、生きて行く！」

暗闇の中で表れた桜井洋介の妻、桜井雪は微笑みながら抱きしめ、突如光りとなって洋介を包んだ。

「洋介さん、目を開けて！……お願い……目を開けて！」

内火艇に芳佳とリーネが洋介を抱き抱えていた。彼の身体は冷たく、息がなかった。ついさつきまで飛んでいたのが嘘みたいだった。洋介の協力でウオーロックを倒し、赤城を撃破。そして、ガリアも解放されたのだが、隊の空気が重かった。

「リーネちゃん……洋介さん……」

芳佳も洋介の目が覚めるまで治癒魔法を懸命に掻けつつも、彼の息はなく心臓も動いていなかった。トゥルーデも大粒の涙を流し泣いていた。彼を本当の家族と想っていた。

そして、ミーナ自身が動き出した。

「ミーナ？」

「私はウィッチーズの隊長の果たす勤めです…（クルト…お願い、力を貸して…）」

「わわっ…」

「おお…／／／」

ミーナは洋介に人工呼吸で息を吹き付け、周囲は驚くも静かに見守った。

そしてー

「いぶおっ…はあ…はあ…ミーナ中佐…みんな…」

「洋介さん!!」

「桜井…!」

「洋介っ!」

洋介は咳き込みながら意識が戻った。ウィッチたちは涙ながら歓びながら抱きつき、彼は上半身を起こして自身の上官であるミーナ・ヴィルケ中佐と坂本美緒少佐に敬礼した。

「…ミーナ隊長…坂本さん！日本海軍中尉、桜井洋介。ただ今を以て生還しました!!」

「はっはっは！桜井よくやった、お前は我々ストライクウィッチーズの勇敢な仲間だ!!」

「お帰りなさい、桜井さん。ストライクウィッチーズ、全機帰還します!!」

「「「「「「「「 了解!! 「「「「「「」」

1944年9月、ガリア共和国のネウロイ完全消滅が確認された。

これを持って正式に、第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズは解散した。

そして、桜井洋介の戦いは新たな戦場で、戦い続けるのであった。

ストライクウィッチーズ ブリタニア編 おわり

第502 ブレイブウィッチーズ ペテルブルグ編 第13話 新たなる戦場へ

1944年9月 扶桑 佐世保

扶桑のウィッチである雁瀨孝美、ひかりの姉妹と母親の竹子が欧州の第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズのガリア共和国解放で活躍した新聞の記事を目の当たりにした。

「あ、ウィッチの記事だ！」

「坂本少佐、第501統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズの一員として獅子奮迅の活躍……」

「お姉ちゃん、坂本少佐って知ってる？」

「リバウ撤退の時に一緒に一緒したわ。厳しかったけど、とても尊敬できる人よ」

新聞の写真には堂々と坂本美緒少佐が写っていた。その写真の隅に扶桑のウィッチ、宮藤芳佳も写っていることに目を通した。

「あれ……この人も扶桑のウィッチなの……？」

「どうかしら……？ 統合戦闘航空団に扶桑のウィッチが配属されているならニュースになっているはずだけど……」

ひかりは次の項目を捲り、ある人物の写真が写っていた。

「お姉ちゃん、この写真に写っている人って知ってる？」

「え…？どんな人かしら…？」

ひかりと孝美が目にしたのは世界初のウィザードの記事だった。

「第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズでの、もう一つの活躍。扶桑皇国が世界初のウィザード、欧州で戦えり。」

「……ウィザードも、ブリタニア防衛とガリア解放の為に奮闘。お姉ちゃん、この人ウィザードって？」

「私もこの記事で初耳だわ……欧州の501にウィザードが、配属して戦って……いえ、それ以前に世界的なニュースになっているわよ……」

「扶桑皇国海軍中尉、桜井洋介……どんな人なんだろう……」

翌日 佐世保航空予備学校

「ねえ、聞いた…?」

「うん、501統合戦闘航空団が、ガリアの解放を…!」

「それもそうだけど…その部隊に、扶桑から世界初の男性ウィッチの活躍!」

「そうそう!写真で見ている男だけど、どんな人なんだろう!」

ひかりが通う佐世保航空予備学校では、ウィッチたちの会話でガリア解放のニュースで盛り上がっていた事と、扶桑皇国出身で世界初のウィザードの話題と活躍話が持ちきりだった。

「ウィッチじゃなく、ウィザード!」

「三隅さん…」

ひかりの同級生であり、学年首席の三隅美亜が呟いた。

「ふふふ…私はいつか、そのウィザードと空を飛んでみたいし…そして…家に招いて…
／／／」

彼女はいずれ、令嬢として招き入れることの思惑を抱いていた。

佐世保航空予備学校 講堂

「え、諸君、知つての通り欧州の戦局は厳しく、ウィッチの増強がすぐにも必要である！故に、我が校からも欧州派遣の志願者を1名、募ることとなった！」

校長の北郷章香が教壇に立ち、ウィッチの欧州派遣の志願者を募ることを宣告した。

「欧州………派遣!？」

「学生故、最前線に配属されることはないが、決して楽な任務ではない。志願者は挙手
!」

すぐに幾人の1年の首席の三隅美也、ひかりを含む学生ウィッチが挙手した。

「宜しい、誰かが適任か三日後に選抜試験を行う!」

ひかりを除く三隅美也たち学生は、欧州に滞在するウィザードを婿候補にする魂胆を持っていた。

ガリア共和国

解放されて二週間後、元日本海軍中尉の桜井洋介は501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の解散後、宮藤芳佳と坂本美緒と扶桑に行かず、ミーナ中佐率いるカールスラント組に同行せず、欧州に残留してペリーヌの故郷であるガリア共和国のネウロイ残党の討伐、首都パリ復興の為にリーネと従事していた。

「洋介さあ〜ん！昼食ですよ〜！」

「おう!!」

洋介は青空の下でリーネ、ペリーヌと一緒に昼食を摂っていた。

「ああ、働いた後の食事は美味しい！」

「そうですね。ガリアが解放されてから2週間、つい前の戦いが昨日のように思います。」

「それにしても、桜井中尉。あなたはなぜ復興活動の従事に……？」

「……僕の母国の日本も、ペリーヌのガリアのように荒廃してたんだ……」

「桜井さんの国も……？……ですけど、扶桑は直接ネウロイの攻撃に……」

「僕がいた世界の国だ……」

1945年の3月10日以降、アメリカ軍の長距離爆撃機B-29の爆撃で主要都市が灰塵、民間人も犠牲になって荒廃した。

洋介が焼け野原で歩く度に、なんとしてでも這って立ち上がる事を思っていた。
例え、この異世界であつてもだ。

「食事も終えたところだ、他の方々と作業に行つて参ります！」

「はい、お氣をつけて」

「あつ、私も行きます！」

リーネも洋介について行こうとした時、空からウィッチがペリーヌの元に飛来した。
アメリカ・プランシヤール。ガリア自由空軍軍曹、ペリーヌの同僚ウィッチであつた。

「ペリーヌ中尉イイ！」

「あら、アメリカーさん。どうしましたの？ そんなに慌てて……」

「はい、桜井洋介中尉宛の電報を持ってきました！」

まだ離れていなかった洋介が反応し、彼女たちの元に赴いた。

「なに、僕宛の電報だつて!? アメリーさん宛先はどこだ?」

「はい、宛先はオラーシャ帝国、ペテルブルグです!」

洋介は電報を受け取り、内容は配属命令だった。

明後日、ブリタニアのサウサンプトン港からオラーシャ・ノヴォホルモゴルイ港行き
の船団に乗り込み、当港に所属するウィッチと合流するとの事だった。

「ストライクウィッチーズが解散してから2週間、洋介さんだけ転属するなんて…それに、どこで洋介さんの情報を…」

「この前のわたくし達、記者からインタビューを受けたあの時じゃないかしら…」

以前のブリタニア基地にて記者が殺到、ペリーヌとリーネのインタビューはもちろん、軍関係が注視するのは、ブリタニアとガリアの戦いにて世界でただ一人、501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』に配属していたウィザード、桜井洋介の存在だった。

洋介は軍の機密を語らなかったのはもちろん、記者からの言葉でいつ、ウィザードに覚醒し、今までニユースにならなかったのか、この世界での彼の出自と経緯については重要機密であり、ノーコメントだった。

リーネが頭を抱えていると、洋介の顔が険しくなった。

「第502統合戦闘航空団、『ブレイブウィッチーズ』。転任辞令がでたからには行くしかない。僕の午後からの作業は取り止めた。これから扶桑軍駐屯所に戻って準備をしに行ってくる」

洋介は自身が乗って来た九七式側車付きバイクに乗車した時、側車にペリーヌが乗

車。リーネが彼の座席に乗車した。

「ん…？きみたち…？」

「私も手伝います」

「わたくしもよろしくてよ。ウィッチーズのよしみでウォーロックの借りとガリアの復興の従事していた御礼がありますてよ〜♪」

「ありがとう！」

駐屯所、リーネとペリーヌは彼の四式小銃と99式13ミリ機銃のメンテナンスを行い。洋介は衣食の荷物をトランクに入れ、愛機の零戦64型を調整、ロケット弾、南部14年式拳銃を整備。

最後に愛用の軍刀、鷹狼を抜き出してフオームを整えた。

翌日 パ・ド・カレー港

ブリタニア、サウサンプトン港行きの船が寄港、見送り人はペリーヌ、リーネ、アメリーの3人だった。

「ペリーヌ・クロステルマン中尉、リネット・ビショップ曹長、アメリー・プランシャー軍曹。見送りに感謝します！」

「桜井さん、寒地ですからお体を大事に」

「桜井中尉、短い期間でしたがお元気で。現地で戦っているガリア人にもよろしく願います。」

「洋介さん、お弁当です。芳佳ちゃんから教えて貰った扶桑のおにぎりです。船でゆっくり食べて下さい。」

「ありがとう、リーネ」

弁当を受け取った時、船の出発間近の汽笛が鳴った。

「おっと、出発の時刻か。またいつか、宮藤芳佳に再会したらよろしく！扶桑皇国海軍中尉、桜井洋介。カレー港からサウサンプトン港経由、オラーシャ帝国に行きます!!」

洋介は船上から三人のウィッチたちに敬礼。

港の三人も彼に対して敬礼した。洋介はガリアが見えなくなるまで眺め、涙ながら食事を摂った。

「さらばガリアよ、また来るまでは…」

そして、サウサンプトン港に寄港。

オラーシャ行きの船団を確認、洋介が乗艦する艦艇は扶桑皇国海軍の重巡洋艦足柄を旗艦とした第5艦隊であった。

洋介の任務はノヴォホルモグレイ港までの航海中、ただ一人でネウロイからの第5艦隊と輸送船団の護衛任務に就いた。

扶桑皇国 佐世保

2週間前、欧州派遣の空母瑞鶴を旗艦とした第3艦隊が出港、佐世保航空予備学校の雁淵ひかり軍曹、姉の雁淵孝美中尉とは配属先とは別々だが、ウィッチたちや地元民に見送られた。

「行つてきまーす!!三隅さん…」

「私の変わりにウィザードを見てきなさいよー!!」

三隅美也はその後、第507部隊に転属するのであった。

その頃欧州ではまた一つ、ネウロイの巢が誕生しようとしていた。

第14話 北国の大空に羽ばたけ

オラーシャ帝国 ペテルブルグ 第502統合戦闘航空団基地

当基地の隊長、帝政カールスラント空軍少佐、グンドウラ・ラルが新聞の記事に501の活躍とエーリカ・ハルトマン中尉が写った目を通したところに、カールスラント空軍曹長、エディータ・ロスマンが執務室に入室してきた。

「私の教え子も活躍したようで、鼻が高いです」

「次は我々の番だ、そのために孝美を呼んだ。」

「隊長とは、リバウ撤退戦で一緒だったとか…随分と彼女を買っているんですね」

「ああ、それともう一つ」

ラルはロスマンにある隊員の資料を渡した。

「この基地に転属する隊員の資料…隊長…これは…!？」

「桜井洋介、階級は中尉。扶桑海軍第302航空隊の所属、世界初の男性ウィッチ…いや、ウィザードだ」

ロスマンはウィザードである桜井洋介に疑問点が幾つかある。

「…ウィザード…でも、彼には謎が多いところもあります。桜井中尉は501以前の所属以外の経歴が全く…彼のユニットは管野さんと下原さんの零式より高性能らしいです。それに…」

彼女が見た資料の重要事項には『人型ネウロイと接触。何らかの情報を入手…』など、表示されていた。

「確か、彼は501に所属していたはず…あそこで一体何があつたのかしら…」

第501の最後の戦いについては機密情報になっているため、彼女達は全く知らない。

北極海海上 扶桑海軍第5艦隊及び輸送船船団。早朝、ブリタニアのサウサンプトン港からのオラーシヤ帝国のノヴォホルモゴルイ港に到着した。

この1週間の航海でネウロイの襲撃は無く、寄港。洋介は例の502のウィッチの出迎えが来るまで積み荷の降ろす作業を手伝っていた。

「ふう…、ここがロシア＝オラーシヤか。」

「すみません中尉、あなたまで手伝って貰って…」

「ああ、大丈夫です。荷物運びで身体を動かすことは私にとって、いい運動になりますよ」

その時、重巡足柄の艦橋と電信室で騒ぎが起こっていた。洋介が気になって作業を中断、通信室に行った。

「どうしたんだ!？」

「第3艦隊より緊急要請、ネウロイ襲来！ウィッチの援軍要請を求むと！」

「場所は!？」

「東北東、距離〇〇〇〇です！」

「くそっ！こんな時に…この距離から俺に近い、出撃する!!カタパルトの準備を!!」

「了解!!」

洋介は足柄のカタパルト付近で装備品の四式半自動小銃と九九式13ミリ機銃、ロケット弾。南部十四年式拳銃をホルスターに入れ、最後に愛用の軍刀鷹狼を帯刀。

略帽と飛行ゴーグル、左耳にインカムを装備、零式戦64型のユニットを履き、カタパルトに接続した。

「カタパルト接続、進路善し！発進どうぞ！」

「桜井洋介中尉、零戦64型。行きます!!（頼む愛機、間に合ってくれ!!）」

洋介が発艦、全速力で向かっている中。第3艦隊上空、中型、小型ネウロイの群れが襲来。雁淵孝美中尉の指揮の元で空母瑞鶴の艦載機が発艦した。

北極海

雁洩孝美はS―18対物ライフルを装備、中型ネウロイを固有魔法の魔眼でコアを狙い、次々と撃墜した。

「まず一機―！」

激戦の中で護衛の駆逐艦が被弾、戦闘機隊の消耗が激しかった。

「はあはあ…数が多すぎる…！」

危機を感じた雁洩ひかりは練習用ユニットを履き発進しようとした所、ネウロイのビームが瑞鶴に被弾、ユニットは大破。使用不能になった。

「あぁっ!!……ユニットが……あっ……ネウロイ……」

ひかりは初めて目の当たりにする敵、ネウロイに恐怖する。

上空ではただ一人、孝美だけが飛行する。彼女は禁断の魔法を使った。

「行かせない!!……もう、……あれしかない……絶対魔眼!!」

瞳と髪が赤く変色、ネウロイのビームを集中的に狙い、孝美は縮小したシールドで防いだところで一本のビームが彼女の胸部に被弾。孝美は激痛に堪えながらも次々と撃墜。全滅させた。

空母瑞鶴

「敵編隊、全て消滅しました!」

「あの数で一気に……何が起きたんだ……!?!」

「レーダーに反応！ネウロイ第2波編隊接近!!数5!」

「なに!?!」

上空で孝美は息切れの中、彼女からもネウロイの編隊を視認した。

「ネウロイ…もう、これ以上は…」

ネウロイのビームが孝美を狙い撃った。すると

一発のロケット弾が飛翔、ビームの攻撃を阻止した。

「っ!?!…なに…!?!」

ロケット弾が飛翔した方向から一人の援軍である桜井洋介が飛来した。

「やらせるかつ!!そこっ!!」

彼は小銃と機銃で次々とネウロイを撃墜。最後の機は軍刀で斬り落とした。

「…5機、全て撃墜完了!」

「…援軍…よかった…ひかり…よかった…」

孝美は安堵したのか、ユニットが停まって落ちた。

「お姉ちゃん!!」

ひかりが孝美を呼んでも気付かない。そのまま海に落下を仕掛けた時、戦っていた洋介が孝美を空中で回収した。

「君っ!!しっかりしろ!!君!!いかん、血が…」

洋介は孝美を抱きながら介抱し、左腹部から流血。

図囊から三角巾を取り出し、左手で強く圧迫、止血した。

「こちら、援軍のウィザード！負傷したウィッチを回収、共に緊急着艦されたし！！」

『ウィザード！？…了解！！』

「お姉ちゃん…」

ひかりが遠くから姉の孝美の無事を祈った。そして、洋介は彼女と緊急着艦。

「このウィッチは腹部を負傷している！担架を急げえ！」

「はっはい！！」

「お姉ちゃん！！お姉ちゃん大丈夫!?」

「お姉ちゃん… 君はこのウィッチの妹か。急いで医務室へ連れて行かねば!!…っ!? この反応は…ネウロイの巢!?!」

洋介は波導でネウロイの巢を感じ、次々とネウロイが出現。危険を感じた洋介は急いで小銃と機銃に弾丸を詰めロケット弾を装填、瑞鶴から発艦した。

「ネウ公共、俺が貴様らに地獄を見せてやる…ここで瑞鶴を、これ以上ウィッチと艦隊の犠牲を出してたまるか!!」

その頃、6人のウィッチが第3艦隊が到着するノヴォホルモゴルイに向けて飛行していた。

「直ちゃん、やけに張り切ってない？」

「扶桑から知り合いのウィッチが来るんだよね。確か……雇ぶち……」

「おう！孝美はおれのマブダチだからな！おれたちが着く頃にはネウロイはいねえかもな！」

管野直枝少尉はヴァルトルト・クルピンスキー中尉とニツカ・エドワーディン・カタヤイネン曹長の質問にウキウキしていた。

「へえ〜♪可愛い娘だったらいいなあ〜♪下原ちゃんとジョゼちゃんは隊長から特別な任務を帯びていたんだったね」

「私は港で補給する物資以外、詳しく知らされていないけど定ちゃんが……」

「隊長の命令でブリタニアから502に補充する男性ウィッチを、ノヴォホルモゴルイ港へ迎えに行く様に指示を仰ぎました。」

「男性ウィッチ!?」

クルピンスキーの質問にジョーゼット・ルマール少尉があたふたする時、下原定子少尉の言葉で皆が反応する中、戦闘隊長のアレクサンドラ・I・ポクルイーシキン（サーシャ）大尉のインカムから無線が入った。

「えっ!?もう一度お願いします………はい、雁洩中尉が戦闘不能……!」

「孝美がやられただど!」

直枝は孝美が戦闘不能の情報に青ざめた。

「はい、……ウィザードが単独で艦隊を護衛……!」

「ウィザード!?……もしかして……例の男性ウィッチ……!」

扶桑艦隊上空―

洋介の目の色が変色し、次々とネウロイを撃墜した。

瑞鶴 ―

「…あれが…杉田艦長の報告で、先のブリタニアの防衛とガリアを解放した、ウィザードの桜井洋介か…!?!」

第3艦隊の乗員は士気高揚、ウィザードである彼を対空射撃で援護。

「これで20…撃墜……ん……瑞鶴からウィッチが…!?!」

ひかりが姉のユニットの試作紫電改チドリで発艦、不安定ながらも飛行。

別方向から迫るネウロイのビームでシールドで防ぎ、対して対物ライフルで乱射を行っていた。

「わわっ!!…お姉ちゃんとあの人も何倍のネウロイと戦っているのに!!」

「君っ!!うしろだっ!!」

「え…?きやつ!!…」

ひかりは洋介の言葉に反応して後ろを向いたところネウロイが彼女に衝突。飛行体制を整え、ひかりの目が一瞬ボヤけた時、何かを感じた。

「あれは!？」

ひかりは狙い撃った。だが、外れた。

ネウロイ2機が急旋回して、彼女に多重攻撃。シールドがビームに耐えきれずひかりが落下。

「ああ…」

「っ!?やらせるか!!」

洋介はひかりを空中で確保した時、直上からの攻撃でネウロイが爆散した。
上空から6人のウィッチが援軍として飛来。もう一機のネウロイを協同で撃破した。

「…ウィッチの援軍か…助かったぜヨ…」

「はあはあ…」

「君、助かったぞ!」

「…あ…ありがとうございます!…大丈夫です…私、飛べます…」

「孝美ーっ!!」

ひかりが息切れする中、援軍の中の扶桑のウィッチが二人に接近した。

「やっぱり、孝美がやられる訳…誰だてめえ…？…もう一人は男…男のウィッチ…」

第3艦隊はノヴォホルモゴリイ港に到着。

502JFWの隊長、グンドウラ・ラル少佐は険しい顔をしながら非常に残念な結果を受けた。

派遣予定のウィッチ雁淵孝美中尉は昏睡状態に陥っており、彼女がいつ目覚めるかは不明であった。

「まさか、…あれを使ったのか…!？」

新たなるネウロイの巢が確認された以上、この港からの航路は使用不能。
孝美をそのまま扶桑に戻すことを決断した。

「ちよつと待てよ！孝美は俺たちと戦うためにここに来たんだろ!!」

「私も残念だ、…だが孝美はもう戦えない」

「くっ…!」

扶桑のウィッチ、管野直枝が反発してもなにもできず悔やんだ。その時――

「お願いがあります!!」

502部隊のウィッチたちがひかりの方向を見た。

「私を、私を502部隊に入れて下さい!!」

「お前は…?」

「雁渕ひかりです!」

その名前にウィッチたちが反応した。

「私が、お姉ちゃんの代わりに戦います!!」

「雁渕孝美の妹…」

「てめえ、孝美の妹だかなんだか知らねえが、ろくに戦えねえ奴が抜かすんじゃない!!」

沈黙を破ったのは直枝がひかりに怒鳴り翔ばした。

「戦えます!! 私もウィッチです!!」

「ふざけるな!! 俺たちがいなければてめえ死んでたぞ!!」

「じゃあ、じゃあっ! 死ぬまでいいから戦わせて下さい!!」

「止せ!!」

洋介は二人の間に入り、制止した。

「君たち止すんだ、ウィッチの味方同士で争うのは止めろ！この状態で得するのは敵だ、ネウ公だ!!」

「うう……」

「あなたは……？」

「にほ……扶桑皇国海軍中尉、桜井洋介であります！」

「……桜井……？……っ!!あなたが世界初の男性ウィッチ……いえ、ウィザード!？」

「サーシャ、お前は どう見る？」

ラルはサーシャに彼ら二人の評価を尋ねた。

「妹の戦力としての評価はゼロです。ただ、私たちが到着するまで中型ネウロイを二体を相手に五分。彼、ウィザードの戦力は強大です。雁淵中尉に引きを取らないネウロイを撃墜しています。」

「生き残っていたか、…どう思うんだ先生」

「もう決めてらっしゃるんですよ」

ロスマンはラルに笑みを返した後、二人に近づき宣告した。

「雁淵ひかり、お前を第502統合戦闘航空団の一員に迎え入れる。」

「えっ!？」

「ええーっ!!」

「ただし、戦いたければ強くなるんだ!」

「はいっ!!」

洋介がラルの言葉に耳を傾ける中、二人のウィッチが近づいた。

「桜井洋介中尉、私たちは中尉をお迎えに502基地へご案内します!」

「ああ、ありがとう。ご苦勞様です!」

「あの……予定の時刻に遅れて、大変申し訳ありません!!」

定子が洋介に謝罪する時に、身体が震えていた。

「構わない……あの緊急時で仕方ないことだ、少尉たちが援軍に来てくれたことは大変感謝しています!」

「……………はい!!……………／／／／」

水平線に沈む夕陽に照らされる中で、定子の頬が赤面した。

第15話 502着任での腕試し

桜井洋介はノヴォホルモゴリイ港からペテルブルグ基地に移り、予定通り502に着任。

そして彼だけは隊長室でコルセットを着けた少女のラルとロスマンに尋問を受けていた。

「私はこの502部隊の隊長を勤めるグンドユラ・ラル、カールスラント空軍少佐だ。突如の緊急で扶桑艦隊の護衛、ご苦労だったな」

「そして、私はこの教育係を務めているカールスラント空軍曹長、エディータ・ロスマンです。あなたの活躍は501で聞いています」

「はっ！大変恐縮です。桜井洋介中尉です。よろしくお願いします！」

「さて、桜井中尉さつそくだがお前に訊きたいことがある」

ラルは笑みから表情を変え、キツイ眼差しをした。

「…なんででしょうか…」

「君は一体何者だ？」

「…は？…どういふことでしょうか？」

「聞いた通りだ、私の部隊には扶桑のウィッチが配属しているが、その一人にお前の確認をしたが、扶桑海軍にお前の名前はなかった。他にもお前の501配属以前の原隊である302航空隊も存在しない。もう一度聞く、君は何者だ、桜井洋介中尉？」

隊長のラル以外のロスマンもキツイ眼差しを送ってきた。

洋介はあの時の、ブリタニア501時代の尋問を思い出しながら口にした。

「確かに私は、扶桑海軍でも扶桑皇国民のものでもありません。俺は大日本帝国海軍中尉、桜井洋介です」

「日本？どこだそこは？」

「聞いたことありませんね…」

二人とも首を傾げ、ロスマンが質問する。

「桜井中尉、その日本はどこにあるのですか？」

「異世界の国ですが、扶桑皇国と似た国です！」

「異世界!?!あなたは何を言っているの!?!」

「待て、先生。中尉、詳しく話してみろ」

洋介はこの世界に赴くまでの経緯を語った。

彼のいた世界ではネウロイが存在せず、人同士の戦争のことを。母国が敗戦、終戦後の戦いで機体と自身が損傷してこの世界に飛来。

そして、洋介の愛機がストライカーユニットに変化し、魔法力が覚醒し、この世界でただ一人のウィザードとして戦うことになったなどの経緯を語った。

「異世界か…信じられない話したが、中尉の不明な点を考えると納得がいくな」

「そうですね…それと中尉。もう幾つか聞きたいことがあります。501の報告では人型ネウロイと接触したと書かれてますが、本当ですか？それについて詳しく聞きたいんですが」

「…ただ501については…今の言える範囲で伝えます。あの戦いで私は人型ネウロイが私に伝えた重要機密。異次元転移計画、通称ガリバープロジェクト」

「ガリバープロジェクト…!？」

ラルはこれ以上501の質問はしなかった。だが、ロスマンは個人的な質問を行った。

「中尉、あなたはウィザードであっても、年齢は二十歳なのですか!？」

「はい、なら試してみますか？」

洋介は腰のホルスターから南部十四年式拳銃を取り出して、ロスマンに渡した。

「いきます」

ロスマンは拳銃で数発発砲、洋介は魔法力を発動してシールドを晒し、防いだ。

「どうだ先生？」

「凄いです…桜井中尉、二十歳でもシールドを貼れるなんて…」

「ロスマン曹長、私に中尉は要りません。自由に呼んで下さい」

「では私もロスマンで桜井さん。これ、拳銃をお返しします」

「さて、桜井。あと1時間すれば夕食だ。お前の自己紹介は雁渕ひかりとその時にしようと思うんだが、構わないか？」

「はい、問題ありません」

「それじゃあ、時間になったらミーティングルームへ来てくれ。それまでは部屋で待ってろ」

「了解！」

洋介は502基地に用意された部屋で荷物整理を整え、そして写真を取りだした。

「雪、僕は頑張つていくぜヨ。新たな地で。」

時間が訪れ、ミーティングルームへと足を運んだ彼を待っていたのは、この部隊のウィッチたちとテーブルに並べられた温かい食事だった。洋介とひかりの分も用意されている。

誰もがひかりを含め、彼を珍獣でも見るかのような視線を送っており、司会はロスマンが務めた。

「扶桑から援軍の予定だった雁洩孝美中尉に代わって、妹のひかりさんが配属することになりました」

「雁洩ひかりです！姉の代わりにがんばります！」

「そして、元501の一員でブリタニア防衛、ガリア解放した世界で唯一のウィザード。桜井洋介さんです」

「日本海軍中尉、桜井洋介です。よろしくお願いします」

「ちっ…」

洋介とひかりが敬礼する時、その中に舌打ちするウィッチがいたが、ひかりが睨み気にせずに進んだ。

「私は戦闘隊長のアレクサンドラ・I・ポクルイーシキン。階級は大尉です。」

「ヴァルトルート・クルピンスキー。中尉だよ。伯爵と呼んでくれるかな」

「ん…?」

「伯爵…そんな偉い人が…?」

「この人の冗談には付き合わないでいいのよ」

「んんゝ酷いなあゝ先生ゝ…」

ロスマンは二人に助言し、洋介は呆れた顔をした。

「(はは…だらうな…)」

「先生？」

「ジョーゼット・ルマール。少尉です。」

ジョゼは何か距離を取ったような挨拶をした。

「下原定子です。少尉です…：／／／」

定子は洋介を見て赤面した。

「……………」

「おい、管野の番だよ…それに一人は上官だよ…」

「知るかよ…ふん！」

「むむ…」

ニパは注意するが直枝は聞く耳持たず、品定めをしているかのようにひかりと洋介を鼻で吸った。

「（おいおい…部隊内部の争いはあかんぜヨ……トチコさんがいたらお玉で打たれるな…）」

「えっええ〜と…隣は管野直枝少尉。私は曹長のニツカ・エドワーデイン・カタヤイネン。ニパでいいです。よろしくお願いします」

「はい！紹介は終わり、食事にしましょう」

洋介とひかりは席に着き、食事を始める。洋介はテーブルに並ぶ食事の味に舌を鳴らしながら、周りの質問に受け答えする。

「ねえ、雁淵さん。ひかりちゃんと呼んでいいかな？あ、あれ…？」

「寝てます…」

「仔猫ちゃんはよっぽど疲れているんだね」

「ぶつくくく…」

「何が面白いんだ…」

管野はパンをかじりながら愚痴った。洋介は席から立ち上がり、彼女を背中に背に乗せた。

「僕が部屋まで運んで寝かせますよ」

「桜井さん、すみません」

洋介はひかりを部屋まで運び、ベッドに寝かせた。彼は戻って、食事を再開した。最初に質問してきたのはニパだった。

「ねえ、桜井さん。前は501にいたんですよね？ イツルは元気でした？」

「イツル？ ああエイラか…元気だった。501でも楽しかったよ。…この料理美味しいな。誰が作ったんだ？」

「私です、中尉…／／／」

「下原少尉か、凄いな。僕も料理作れるけど、ここまで異国の料理は作れないな」

「あ、ありがとうございます／／／桜井中尉も作られるのですか…？」

「

洋介に褒められ、少し照れたように言う。定子も洋介に質問した。

「まあな、炊き込みご飯などの日本料理や中華料理とか」

「中華料理…？日本…？」

「桜井中尉！」

「なんですか、ポクルイーシキン大尉？」

「えっと、サーシャでいいです。ラル隊長やロスマン曹長から聞いたのですが、桜井中尉のいた世界はネウロイがないのは本当ですか…？」

「はい、僕がいた…」

「おいってめえ！」

「ん？なんだ？菅野少尉」

「俺と模擬戦しろ!!」

サーシャが洋介に質問した時、賑わいを止めたのは菅野直枝だった。

「ちよつと菅野さん！」

サーシャが注意するが直枝は止まらなかった。

「ふん、こいつが中尉だろうが上官だろうが、孝美の妹より信用できる訳ねえーよ！日本なんて国は知らねえ、そんな在りもしねえ国の軍人だとか名乗った怪しい奴を信用できる訳ねえだろ！だから俺と模擬戦しろ！お前もウィッチ、いやウィザードなら空で語れ！」

彼女の言い分に間違いはなかった。友軍の陸海軍の共同戦線でさえも信用することは難しい。

かつてのラバウル時代、ゲタバキ（フロート装備）の連中が信用できなかった。そう思っていると、直枝の目は闘争心が溢れた目で彼を見ていた。彼女の目を見たら、昔の洋介に少し似ていた。

「…いいだろう少尉。本気を出せ、戦いはいつも真剣勝負だからな」

火花を散らし合い、一触即発の二人の間に入ったのはロスマン曹長だった。

「着任早々にこんなことを起こすなんて、まあいいです。模擬戦を行うのであれば、書類申請をしてからにして下さいね。そして、私からの条件をお願いします」

「条件ですか…？」

「管野少尉との模擬戦時に、雁刈さんも見物させてください」

「わかりました」

「了解…おいつ！首洗って待っとけよ、ワイザード！」

そう言つて直枝は食事を終え、出て行つて行つた。

「まったく…桜井中尉、初日でこんなことになってすみません」

戦闘隊長のサーシャが、直枝に代わつて謝罪した。

「あつ、いいんですよ。ああいうのは、嫌いじゃないです。俺が前の世界で、精鋭部隊時代に彼女みたいな仲間がいましたよ」

「コアっ!!」

翌日、ひかりの部屋

あの時の記憶でひかりが目を覚ました。持って来た荷物の中に姉の孝美と自身の写真を取りだし、孝美に挨拶した。

「おはよう、お姉ちゃん！私、がんばるからね！」

基地の外周に直枝とニパ、軍刀を腰に携えた洋介が走っていた。

「寒くなってきたな」

「そうかな…？でも桜井さん早いや…」

洋介は走りながら基地から朝日を照らすペテルブルグを眺めた。

「いい朝日だ…ん…？」

洋介の前方に走りこむ人影が居た。

「おはようございます！」

「おはよう！雁渕ひかりさん、よく眠れたか!？」

「はい！えつと…名前は…？」

「桜井洋介、ウィザードだ！」

「あれ？雁渕さんと、ついてくるよ？桜井さんもう一週したんだ！」

「ふん…！素人が俺たちのペースについてこれる訳ねえ！」

そして直枝はペースを上げる。

ひかりに追い抜かれぬように。洋介も上がり、突然ペースを上げた三人にニパはついていくことができなくなる。

そして、階段を上がり、基地で一番高い塔にたどり着いた。

「おい！てめえ！」

直枝が大声を上げる。それに気づき二人が止まる。

「俺は認めないからな！お前なんかじゃ孝美の代わりは務まらねえ！あいつと俺でネウロイの巣をぶっ潰すはずだったんだ！なのに…てめえが弱えから…！」

「そうです…！」

直枝が繰り返し口撃にひかりも言い返す。

「私のせいで…私が弱いからお姉ちゃんは…でも頑張つて絶対強くなります！」

「頑張るだけで強くなりや世話ねえんだよ！今必要なのは即戦力だ！」

「やってみなきゃわかりません!!」

「いい加減にしろ!!二人とも、戦力が在ろうか無かろうが、共に戦う仲間じゃないか!!」

ヒートアップする口喧嘩は第3者の洋介によって止められた。そこに遅れていたニパも到着した。

「ちよつと二人とも、桜井さんの言う通り喧嘩はよそうよ。仲間なんだし…」

「仲間じゃねえ！」

ニパがなだめようとするが、直枝にそれは逆効果だった。

「弱え奴は他の奴まで危険に晒すんだ。仲間ごっこしたいならさっさと扶桑に帰れ！お前もだ、ウィザード！お前も俺が模擬戦で勝ったら、この基地から出て行け！」

「ちよつ、ちよつと管野」

そう言つて直枝は行つてしまう。ニパが止めるがそれでも立ち止まらなかった。

「管野は口は悪いが、あいつはあれで必死なんだ…」

「わかってます…私がもつと強ければ…」

自分が弱いことに自覚があるらしく、ニパがフォローしてもそのことを気にしていた。

しかし、洋介にしても直枝の言い分は最もなところがある。

まともに戦えない兵士が戦場に出たところで、危険な目に遇うのはわかりきっていることでもある。

あの戦争で学徒出陣で学生が戦場に送られ、哀しくも、未来ある学生たちが散って逝った。

そんな時、ニパが話しかける。

「ところで雁淵さんってマラソン選手か何か？」

「えっ？違います。いつもお父さんにお弁当届けてただけです」

「えっ？お弁当……？」

「確かに、凄いトレーニングだな。戦争がなければ、東京かロンドンオリンピックに出場していたかも知れないな……」

ひかりからの突拍子のない答えに驚くニパ。

洋介は笑顔で感心した。そんな時、突然変な音が鳴り響き、音の主はひかりだった。それを聞いて洋介が微笑み、ニパが笑った。

「ははっ、昨日食べながら寝てたよね。もうすぐ朝食だし戻ろう？」

「あの、ニパさん、桜井さん！」

「ん？」

「なんだ？」

突然雁渕ひかりに名前を呼ばれて二人は反応する。

「ありがとうございます！仲間と呼んでくれて！桜井さん、あの時お姉ちゃんを助けてくれてありがとうございます!!」

その言葉を聞いてニパと洋介は微笑んだ。

「ああ、僕も昨日配属したばかりだ！共に…」

「あつ！思い出した！」

「ん…？どうしたんだ？」

「桜井洋介さんって、世界初のウィザード!?前に扶桑の新聞で見ました！」

「え…？そうだったのか……恐らく片桐さんだな…」

洋介は異世界の日本Ⅱ扶桑皇国で、自分の事が新聞に載ってたのを恥ずかしながら頬

を掻いた。

一連の光景を見ている人たちがいた。

「基礎体力はありそうですね」

隊長室からラルとロスマンが先ほどの光景をみて、ひかりを分析していただいた。

ミーティングルーム

「現在我々の前には重要攻撃目標だったネウロイの巣アンナ、南方にヴァシリーがあります。それに加え、今回白海にも出現しました。」

「また厄介なところに…」

朝食を終えた後、ロスマンからの説明にサーシャが困惑する。洋介も地図に記されて

いるネウロイの巢を見て自身の手帳に記した。

「オラーシャを完全に分断する要塞線ができる。こりや厄介だ…」

「新しい巢を敵性目標『グリゴリー』と命名する」

ラルの言葉によつて、新たな巢はグリゴリーと命名された。そして、ロスマンの説明が進んだ。

「グリゴリーから出てくるネウロイの影響圏は急速に広がっており、このままでは補給が断たれ孤立します。そうなれば、我々は基地から退却を余儀なくされます」

「いやゝ参ったねえ…絶体絶命じゃないか」

「そのためにも、我々は可及的速やかにグリゴリーを殲滅する必要がある」

クルピンスキーは軽く言うが、内容はとても軽いものではなかった。

ロスマンがグリゴリ殲滅は絶対であると宣言する。その中で定子が手をあげる。

「あの、ネウロイの巣つて倒せるんでしょうか…?」

「倒せる」

その質問に洋介が答えた。その言葉に全員が洋介を見る。

「俺が501の配属時に、ウィッチたち仲間と戦い倒した」

「だが、501にやれて我々にやれない訳がない」

「ふん！俺がぶつ潰す！」

直枝は手と拳を合わせて宣言する。

洋介は確かに巢の消滅を確認した。

あくまでウィッチたちと洋介はウォーロックの後処理で倒したに過ぎない。宮藤芳

佳から聞いた戦いで、あれが正攻法だと無論考えておらず、一体どうしたらネウロイの巢を倒せるのかなどと想像がつかないのが現状だ。

そして、彼が独自に調査するネウロイの極秘、異次元転移計画Ⅱガリバープロジェクトもまだ至ってない。

「雁洩」

「はっはい！」

ラルがひかりを呼ぶ。ひかりは立ち上がって大声で返事をする。

「お前は午後から訓練だ。それまで誰かに案内をしてもらえ」

「はい！……えっと」

「桜井は管野と模擬戦の前に、サーシャと先生にユニットを見せろ」

「はっ！」

ラルに予定を言われて返事する洋介とひかり。しかし、彼女は誰に案内をしてもらえばいいか困惑、周りを見る。

「じゃあ、ジョゼさんお願いできる？」

「えっ？あの、私はちよつと用事が…」

ロスマンに指名されるジョゼだが、彼女は都合が悪いらしく目を反らす。

しかし、洋介はジョゼの表情を見て、彼女がひかりを避けているのではないかと思った。

「そう…じゃあ二パさんお願い」

「はい」

ロスマンはニパを指名した。

ニパは特に予定はないようなので、その任務を受けた。そんなニパを見て直枝は気に入らない様子だった。

「よし、各自勤務表通りに移れ」

『はい!』

格納庫前、洋介は直枝との模擬戦の前にロスマンとサーシャの指示により零戦64型のユニットを履き、訓練用の13ミリ機銃と軍刀鷹狼を装備して基地上空を飛行した。

「サーシャさん、桜井さんの64型ユニットの記録では1500馬力、速度は700以上ですが、それを軽く越えましたね」

「凄い…これが異世界の扶桑のユニット…」

「桜井さん、管野さんとの模擬戦をお願いします!」

『了解!!』

「さて、ウィザードの力を見せて下さい」

二人が舌を蒔いている時、上空で直枝が待機していた。
空に舞上がったら、身分や階級は関係ない。

戦闘機同士の戦闘、対地上対水上からの高角砲弾や対空機銃の弾幕の嵐によって散る可能性のある戦場。

第1次欧州大戦から始まった空中戦とは時に残酷なところであるが、パイロットの命と誇りが賭けられる。それはウィッチ同士での空戦も同じである。

「遅えぞウィザード！俺から逃げずに来たことを褒めてやるぜ」

「それはどうも！」

『二人とも準備はいいですか』

「問題無し！」

「ああ」

洋介と直枝はユニットとトレーニング用の機銃を装備、彼女は彼が履いているユニットに気付いた。

「（あいつの零式、少し違う…それに国籍のマークも…）お前の零式は少し違うがなんだ！？」

「ん？これはこの世界じゃなくてな、俺がこの世界に飛来するまで一緒に戦った機体だ！」

「また異世界か、馬鹿馬鹿しい!!」

「何とでも言え、これは事実だからな少尉！」

「っけ！」

そう言うのと菅野はそっぽ向いた。

「始め！」

ロスマンが模擬戦開始の合図を出した。空中停止から戦闘態勢に移った。

二人は激しい轟音を出しながら速度を上げる。直枝は照準を捉え、機銃を発砲した。

「喰らえ……何?！」

直枝が照準で捉えた筈の洋介が消えた。

彼女の真下から洋介が速度を上げ接近、機銃を向けて発砲、直枝は機銃弾を浴びて被弾した。

洋介が使う海軍のパイロットが使用する「木の葉落とし」の改良、「逆鷹戦法」だった。

「ぎやつ！」

「管野直枝少尉を撃墜成功！」

「畜生!!もう一戦だ！」

第2戦が開始、そして直枝は洋介の後ろをとって銃撃する照準も洋介の頭を捉えている。

「喰らえ！」

直枝は発砲、不思議なことに銃弾は洋介に当たらない。彼を避けるように弾が横に避けている。

「な!どうなっているんだ！」

地上から観戦しているロスマンとサーシャ。基地見物を終えたひかりとニパ、クルピ

ンスキーは青空を舞台に、ひこうき雲を描く二人を見ながら思い思いに呟く。

「ナオちゃんの弾が当たってないね」

「あれは…機体を斜めに横滑りに避けているわね…いい腕だわ」

「桜井さんのユニットが早い…！ 管野から離れているよ」

「チドリよりも速い…」

「…やはり、資料は本当なのね…」

「資料…？ロスマンさん、彼について何か知っているのですか？」

「サーシャさん、彼が配属する軍歴を隊長と見たのですが、桜井さんのユニットの最高時速が750キロ。それに501での試験飛行では900キロを出したとか」

「750キロ！それに900って…」

「それに桜井さんの使い魔が鷹と何か関係あるのでは…」

速度を聞いてサーシャが驚き、昼食の知らせにきた定子が呟いた。

「そうなのかも知れない、鳥の使い魔は飛行能力が優れます。それに彼の国籍マークも扶桑の月と違い、赤い丸。彼は日の丸と言っていましたね…彼が異世界人というのもあるが嘘ではなさそうですね…」

ロスマンが舌を巻いているころ、上空で二人は回り巴戦になっていた。

「ぐっ…少尉は俺と同じ格闘戦派か…」

「（こいつ速い…射程に入らねえ…）」

直枝が得意とする巴戦でも彼の背後に中々つけなかった。しかし、直枝が洋介の背後

を取った。

「もらった!!」

そう言つて引き金を絞った瞬間、洋介の姿が消えた。

「消えた!?もしかして下か!急降下して消えたのか!？」

直枝は左右上下を確認した

「どこだ!?どこに…?」

「どこだ…管野直枝少尉」

声を聴いて彼女は振り返ると、するとそこには距離1メートル位の洋介は軍刀を抜き、ニヤリと笑つて刃物を首に向けていた。

海軍秘術の「左捻り込み」の改良型、海軍秘伝の大技、「燕返し」だった。

「管野直枝少尉、擊墜成功」

洋介の目の色が変わり、冷たい声が直枝の耳に入る。

そして、直枝は体験したことのない感情が沸くのだった。獲物を狙う鷹に睨まれるような感じだった。

人間としての本能が警報を鳴り、響かせていた。こちらの挙動を一切見逃さない、直枝はそう感じ取っていた。

今の洋介の眼は、あの戦争で戦った武人の目になっていた。

「く、くそ……くそっ！ 剣一閃……」

恐怖を感じた菅野直枝は、魔法を込めた右の拳で洋介を殴ろうとした。

「うわっ!？」

殴られる寸前に洋介は、瞬時に魔法を込めた左手で押さえた。

「なに!？」

「あ、…危ない…」

格納庫前で見物したロスマンが勝敗を宣言する。

「そこまでです！勝者、桜井中尉！」

その宣言を聞いた洋介と直枝は、地上の滑走路に着陸。降りた洋介の元にウィッチたちが集ってきた。

「凄いです、桜井さん。管野さんに勝つなんて」

「そんなことないさ、管野少尉くらいの強いパイロットはかつての部隊や敵さんにもうじゃうじゃいる。それに、2戦目の最後の少尉の技だが、俺の左手で抑えなければやられていた。それに戦場で油断は禁物、あれは引き分けだ」

「おい！」

すると、洋介の言葉を耳に入れた直枝がやってきた。

「あの2戦目が引き分けか、いつかもう一度お前に模擬戦を挑む。それまでネウロイにやられるんじゃないぞ!!」

「…承知した。どうだ菅野少尉、これで少しは俺が何者なのか理解してくれたか？」

笑みを浮かべながら洋介は直枝に問いかける。

仏頂面で直枝は黙り込んだが、ようようと口を開いて言葉を発した。

「…俺はおめえが気に食わねえ…色々信じられねえ事もある。でも、あんたの技量と手腕に関しては認めてやってもいいぜ」

「それは光栄だ、今後はこの一員として宜しく頼むよ」

洋介は直枝に微笑み、直枝はやや照れ隠しをしてそっぽ向いた。

「…次は負けねえからな！中尉」

「こちらこそ。俺から少尉に一度だけの上官命令だ、俺の名前を好きに言え、少尉」

「俺も、管野でいいぜ。洋介」

そう言い直枝は右手を差し出す。

それを見た洋介も右手を差し出し、二人は握手を交わした。
それを少しはなれた格納庫からラルが合流、眺めて呟いた。

「ともかく、一件落着きといったところか？」

「それを言うのはもう少し先になりそうですが、次は雁淵ひかりさんの番です。」

洋介は格納庫で、愛機の零戦64型を確認していた。

「ふう…、お疲れだったな愛機よ」

「あの…お疲れさまです桜井中尉」

彼の背後から下原子子が訪問に来て、洋介は振り向いた。

「あ…下原少尉」

「あ…私は少尉は要りません…／／／」

「そうですか…なら僕も中尉は要りません」

「はい、桜井さん。ウィザードの戦いぶり、私は感激しました／／／」

「そんなこと、強くはありません。僕はこの世界にやってくる前はウィザードではない、唯の戦闘機パイロットです……」

「…桜井さん…あの、この基地の案内がまだですよね…わたしが案内します。隊長の許可は貰っています」

「それは助かります。なんせ昨日着任したばかりですから、少しでも基地のことを知って措かないといけませんからね」

洋介は整備を終えて、定子と格納庫から出て行き、彼女から基地の施設の案内をして貰った。

基地で洋介と二人きりの案内で、定子の胸が高鳴った。

第16話 野戦看護婦の慰問

スオムス ヘルシンキ

連合軍北部方面総司令部

「以上が、報告です」

グンドユラ・ラル少佐、エディータ・ロスマン曹長が司令部に訪問、上層部のカールスラント陸軍エアハルト・フォン・マンシュタイン元帥、スオムス軍最高司令官クラウス・マンネルヘイム元帥報告した。

「うむ、では本題だが、ペテルブルグ軍集団が結成することになった」

「ペテルブルグ軍集団？」

「新しい巢『グリゴリー』を、連合軍総力を挙げて叩くことに決定した。そのための軍集団だ。」

「ついに反攻作戦ですか」

「スオムス軍も協力するが、飛行兵力として、君たち502部隊にも協力して貰いたい」

「我々の部隊に？」

「そうだ、作戦の詳細は追って連絡する」

「了解！」

「ところで、ブリタニアの防衛、ガリアを解放した男性ウィッチ…いや、ウィザードと、勇猛と噂の扶桑のウィッチ？…えーと…」

「桜井洋介中尉、雁渕孝美中尉です！」

雁渕ひかりは基地施設で高い塔に登っていた。先端の軍帽を取りに行く為に。

発端は3日前、洋介と直枝の模擬戦の後だった。ひかりはロスマンとサーシャの指示で紫電改の試運転をした。

扶桑皇国が開発した新型ユニットと言うものの、ひかりはユニットに回転する数値がなく、十分な魔法力を注ぐことが出来ていなかった。

翌日、ひかりはエディータ・ロスマン曹長の指示で射撃場で13ミリ機銃を所持、先の硬貨を狙い、単発で撃った。だが、外れた。

「魔法力が弱い……反動吸収ができていないわね。……五歩分前に出なさい」

「え、はっはい！」

ロスマンの指示通り、ひかりは五歩分前に移動。

「構え！撃て！」

「はい！」

撃ち、外れた。その繰り返しで的から外れた。そして

「あと五歩！」

「はい！」

その一発で的に命中した。

「当たった！」

銃弾が命中した距離は１メートルにも満たない距離であった。

「まさか、ここまでとは……あなたは絶対的に魔法力が不足しています。私が教える基準に全く達していません」

「じゃあ、テストは…?」

ひかりはどよめき、ロスマンからの結果が述べた。

「不合格!」

「じゃあ、だったら朝の走り込みを倍に増やします! そしたら魔法力だつてきつと強く…」

「なるわけないでしょ! 魔法力は先天的なもので、あとからどうにかなるものじゃないわ!」

洋介は射撃場の隅で軍刀の鷹狼の手入れをしていながらロスマンの解説を聞いて納得した。

「（へえ、そうなのか……魔法力は個人の差によって違うのか）」

「まだ、一週間ありますよね！テストを続けさせて下さい！」

「じゃあ、こっちに来なさい」

「はい！」

ロスマンはひかりの諦めない気持ちにより動き、次の試験所に移動する。そして、洋介は二人の後に着いて行くと共にニパと覗いていた。

「……ん？ニパか……」

「洋介さん、やっぱり無理かな……」

「ほらな！」

「うわっ…!？」

「管野か」

ニパの後ろから直枝が出てきた。

「言った通りだろ。洋介、ニパ」

「管野いつの間にいたの？…って、洋介さん…」

鷹狼を鞘に納めて、洋介は略帽を被って動いた。移動した場所は基地で一番高い塔だった。ロスマンは軍帽を塔の先に投げ飛ばし、先端に引つ掻けた。

「あれを取って来なさい」

「はい！ユニットを持ってきます…」

「飛んではダメです」

「ええっ!?じゃあ、どうやって…?」

ひかりを制止させ、ロスマンが手本を見せた。

「魔法力を全身に回して、それを手足に分配。触れている箇所に制御をきちんとすれば登れるわ」

ロスマンは手足に魔法力を注ぎ、登って行った。洋介も近づいて俄然と見上げていた。

「そんなの、学校で習いませんでした!」

「ひかりよ、常に戦場は兵士の命懸けで学んでいく。そんな教本に書かれただけの内容で生きて戦えん」

「桜井さん…そうですね。無理なら国に帰りなさい。このテストに合格出来なければ、出撃は認めません！」

上から洋介の言葉を聞いたロスマンは降りて戻った。

「どうする？」

「やります!!（そうだ、やってみなくちゃわからない!!やる前に諦めちゃダメだ!）」

ひかりはロスマンの手本通りに手足に魔法力を注ぎ、登ろうとしたが直ぐに落ちた。

「いててて…」

「取れたら持ってきて」

ロスマンは宿舎に戻った。そして、洋介も試しに魔法力を手足に注ぎ、塔に戻った。

「おお、凄いな！今までなかった試みだ。もしかしたら…」

「ええっ!？」

その場にいたひかり、遠くから陰ながら見ていたニパと直枝は驚いた。洋介は魔法力を両足に注ぎ、足のみで立っていた。

「忍法壁掛けの術!!はっはっはっウィザードさまさまー!あらっ…」

「「あっ!」」

洋介は塔を登ったり降りたり、回っているとところ足を滑らせ落下、地面に激突した。

「洋介さん、大丈夫!？」

「ああ…痛てえ…なあひかり、この1週間頑張れよ！君の健闘を祈る！」

「はい!!それに、洋介さんも医務室に行ったらどうですか…?」

「ああ、俺は失礼する…」

洋介がこの場を去った後、ひかりは日が暮れるまで繰り返し、特訓をしていた。夕食時、ひかりは特訓続きで痙攣を起こしていた。

「痺れる…」

「痙攣だな、今は慌てずゆっくり食べろ」

「食わねえならおれが食おうか?」

洋介は心配しながら励まし、直枝は冷やかした。

「た、食べますよ!」

ひかりはスプーンでスープを掬った途端に手が震えて、直枝にスープが懸かった

「熱ちいゝ!」

「わっ! すいません!」

翌日、ひかりは今日も頑張って塔を登っていた。昨日より魔法力が安定、塔の中間部まで登りつめた。

「ひかり、頑張れよ!」

本日の洋介は、整備員からドラム缶を受領。ウィッチが使用しているサウナ場を隣接して脱衣室と浴場を構築した。

「洋介さん……うわっ！」

ひかりは足を滑らせ、地面に落ちた。

「痛った〜お姉ちゃん……うう……ん……桜の御守り……？」

ひかりはスランプ気味になりかけた時、石畳の上に桜の御守りを拾った。

「あなた、どうしたの？」

ひかりの前に現れたのは、紺の外套を着た、長い黒髪で美しい扶桑人の野戦従軍看護婦だった。

「あなたは……？」

「私はこの通り、看護婦ですよ」

「看護婦さんが…なんで…?」

「悩みがあれば話なさい。心をケアンズすることも看護婦の仕事ですよ」

ひかりは看護婦に色々と悩みを相談した。

姉の負傷や自身の魔法力が弱いこと、仲間の足を引っ張っていることなど

「そうなんだ…でもさつき担当教官の言う通り、戦場で教科書通りにいく訳にはいかない。例えば強者で戦場に行っても敵の的になるだけだわ」

「つ……でも、私は戦いたい!お姉ちゃんのようなウィッチに!」

「でも、ひかりさん。私は魔法に関してわからない……人には完璧なところはないのよ。これだけは約束して、命はただひとつだけ、あなたの親愛する仲間や家族、お姉さんの為に戦い、生きるのよ!」

「…はい!…あの、看護婦さんも…」

「……そうね、私の親愛なる人も、幼かった頃、ドジなところもあり、強くて優しい。私が海に溺れた時や戦闘機パイロットになった時、空襲で助けてくれた…／＼／」

「っ!? 空襲…? 看護婦さんが愛した人はどこに…?」

「うふふ、今でも大空を飛んでいるわ。この世界を守る為に戦っているのよ」

「おい、ひかり!」

「おめえ、なにやっているんだ!」

ひかりが看護婦との思い出話を語っているところに、ニパと直枝が様子を見に来了。

「ちよつと休憩です。看護婦さんの指示で…」

「看護婦…?」

「どこに看護婦がいるんだよ…?」

「え…?」

ひかりが振り帰ると、看護婦の姿は消えていた。

「あれ…? 確かに看護婦さんが…」

「おめえ、頭大丈夫か…?」

「ねえ、ひかり。サウナ行こうよ」

「サウナ…?」

ひかりは看護婦が何故いなくなったのか気になりながら、桜の御守りを握り締めなが

らポケットに入れた。

3日目 執務室

ラルとロスマンは紅茶が入ったティーカップを片手に飲みながら執務室から見物した。

「まだやっているぞ」

「昨日より上に行きましたね」

「もし、やり遂げたらどうする?…落ちた…」

執務室の扉から叩く音が聞こえ、洋介が入室した。

「失礼します！哨戒の報告書を提出に参りました！」

「ご苦労だ桜井。この502部隊に配属して助かっているぞ」

「はっ！では…あ… ロスマン先生」

洋介は報告書を提出後、執務室から退出しようとした時にあることを思い出してロスマンに尋ねた。

「御守りを知りませんか…？」

「御守り…ですか？」

「はい、桜の形をした」

「…いいえ、見ていません…どうして御守りを探しているのですか…？」

洋介は半ば困り顔になり、ロスマンが相談に乗った。

「雁渕ひかりが合格できるように、と…思ったのですが、無くしたみたいで…」

そう、1日目の時、洋介が塔で調子に乗って走り回っていた時に、滑った拍子にポケットから落ちたのであった。

そして、ひかりが洋介の桜の御守りを拾ってポケットに入れた。

4日目、ひかりは御守りを握りながらあることを考えた。

「そうだ！」

遠くから見物したニパと直枝は頭を傾げた時、ひかりは靴を脱いで登った。執務室から見ていたラルとロスマンが見物した。

「そうきたか…」

「落ちた…」

5日目、ウィッチたちが食事する中で、ひかりは絶食した。

「どうしたんだひかり、食べないんか？」

「えへへ、ちよつとでも軽い方が登れるのかなって…」

「お前は超弩級の馬鹿だな」

その後、ひかりは塔に登ったもののずり落ちた。

「ダメだあゝ…お腹が減って全然力が出ないいゝ…」

6日目、ひかりは昨日の反省を活かして、食物をたらふく摂取した。
。

「やっぱ、沢山食べないと！」

彼女は今日も塔に登っている。毎日、ニパと直枝が見守っていた。

「流石に疲れてきてるね…」

「連日魔法力を使いきるようなことをしているんだ！普通じゃねえ…」

「あ…止まった」

ひかりは塔の中腹辺りに止まり、落下した。

「う…わあっ!! ひかりっ!!」

ひかりが地面に激突仕掛けた時、直枝がシールドを貼りながら受け止めた。

「寝てやがる…」

直枝とニパはひかりを自室まで運び、ベッドに寝かせた。

「つたく、世話掛けやがって」

直枝は廊下でロスマンにそのテストの意味を質問した。

「あんなテスト、なんの意味があんだよ…」

「彼女を心配してるの？」

「ちげーよ、でも…」

「塔の上の帽子を取って来れば、出撃させる約束です。あれぐらい出来ないのなら、出撃して死ぬだけです」

ロスマンはその場から去った。満月の夜で、ひかりの部屋で看護婦が椅子に座っていた。

「看護婦さん、わたしはなんで部屋に…？」

「お疲れ、ひかりちゃん。塔に教官が待ってるよ」

「はい、ありがとうございます！行ってきます」

すぐさまひかりは部屋を出て、訓練課題をやらうとする。そして、塔に触れようとした時に、後ろから声を掛けられる。

「こんな時間からやるつもり？」

ひかりは声のした方向を向く。

「ロスマン先生」

「ちよつと付き合いなさい」

ひかりはロスマンから将来を聞かれたり、彼女の教官としての経験で、魔法力が弱い

ひかりのようなウィッチを育てたが二度と空を飛ぶことはなかったと、苦い話をした。

「戦場では能力がない者は、本人も悲しい思いをするのよ」

「…でも、その娘は悲しかったのかな？」

「！」

ひかりの言葉はロスマンを驚かせた。その言葉は今まで彼女が考えたことのないものだった。

「先生！わたしも他の人の迷惑になるなら扶桑に帰ります。でも、ちよつとでも戦力になる見込みがあるなら、ここにいたいんです！」

「それなら…」

「わかってます！帽子を取るんですよ？最後の最後までやらせて下さい！」

ひかりは自分の思いをロスマンにぶつけた。そして、ロスマンは折れた。

「もう好きにきなさい」

「はい！」

そう優しく言うロスマンに、ひかりも返事した。そして、ひかりがいなくなった後、ロスマンは立ち止まりながら声を発した。

「盗み聞きとは関心しませんね、桜井さん」

「すみません、あまり眠れなくて…盗み聞きするつもりはなかったんですが、出づらい雰囲気だったので…」

洋介はそう言ってロスマンは歩きながら彼の所へ行く。横に並んだ二人はペテルブルグの無人の街を見る。

「いいんですか？止めることだと考えましたが…」

「あの娘の諦めが悪いからです。いずれ猶予は明日まで、それによって決まります」

「そうですか。僕も内地に帰国、一時教官を務めましたが大変ですよね」

「ええ、桜井さんはネウロイがない世界の戦争は……？」

ロスマンからの質問で洋介は戸惑い、言及した。

「…お国の為に言えども…母国の初空襲で1機の爆撃機の撃墜以来、僕の手は血に染まっています。幾つかの敵戦闘機や爆撃機の撃墜。味方の編隊や艦隊護衛、拠点の守備と母国の防衛…見たくもない屍を目撃しました…国や仲間を守るとは言え、多くの敵の命を奪ってきた」

「……………そんな……………」

「…人を助けるために、国を守る為に人を殺す。…戦いが進むに連れて、残虐非道で十死零生の作戦も…」

「十死零生…もしかして…!？」

「敵の艦艇や重爆撃機、拠点への体当たりでの自殺攻撃、特別攻撃隊こと特攻隊です」

「………特攻隊…!？」

「作戦の成功＝死です…」

洋介の経験談を聞いたロスマンは口には出さなかった。

翌日、試験最終日。この日は生憎の曇りであり、強風が吹いていた。ひかりは決して諦めずに塔を登り続けている。

だが、不利な天候であるにも関わらずネウロイ襲来ของサイレンが鳴った。

『東方から急速に接近する中型ネウロイを確認！総員緊急出撃！』

「ネウロイだ！管野、ニパ！」

洋介は走って格納庫へ行き、ユニットを履く。直枝やロスマン、ニパもユニットを履くが、彼女にはひとつ心残りがあった。

「一緒に出たかった…」

ニパはひかりと一緒に出撃したいと思っていたが、それは叶わなかった。

そして3人は離陸するが、離陸をしてすぐ、直枝は何かを思い出したかのように言っ
た。

「ちよつと忘れ物した！」

「お、おい管野？」

「行かせてやれ！」

そう言っただけで戦列から離れる直枝。ニパはその行動に驚くが、洋介は察したのかそのまま行かせた。

そして、暫く洋介たちがネウロイの出撃地点に向かっている時、後ろから直枝が追い付いた。

「もういいのか？」

「ああ……」

洋介が直枝に聞くと、彼女は返事を返した。

心なしか、その声には喜びを感じ取れた。その様子から、どうなったかを理解した。そしてついに、洋介たちはネウロイを発見した。

「ネウロイ発見！」

「管野一番、出る！」

直枝が威勢よく言い先行していく。それに続くように洋介たちもついていく。

「前衛は攻撃、中尉たちは攻撃を！」

「了解!!」

「任せろ！」

サーシャの指示に従い、洋介はクルピンスキーと共に前衛を援護をする。

直枝は上昇した後、急降下を開始。そして高速で急降下しながらネウロイに向けて銃弾を放ち、そしてネウロイの前方を通過する形で急降下していく。

洋介は一連の動きを見て、直枝の類いまれなる才能を見る。

「(ふつ、重爆撃機を撃墜した戦術だな)」

波導で感じながら分析した。

嘗て洋介は本土初空襲でB―25。ラバウル時代の対重爆撃機対策としてB―17やB―24、B―26。本土が本格的な空襲でB―29を撃墜した戦術。

そんな直枝に、ニパが注意する。

「先行し過ぎだよ！」

注意しながらも、ニパは攻撃を続ける。

洋介はネウロイのコアがあらう地点を予測して引き金を引く。しかし、ネウロイは未だに破片に変わらない。その時だった。

「あれ？ひかりだ!？」

ニパが戦闘中、基地の方角から飛んでくる二つの影に気づく。一つはロスマンであり、もう一つはなんとひかりだった。

「ふんっ、遅せえんだよ！」

「だが、よく来た！」

直枝がそう言うが、その言葉はどこか嬉しそうだった。そして洋介も、ひかりの登場

に同じように言った。

そしてひかりはネウロイに向かって飛行する。無論ネウロイも攻撃を仕掛けるが、ひかりは攻撃を堅実に、そしてしっかりと回避、そしてネウロイに接近していく。

「前のひかりとは比べ物にならない程動きがよくなっている！」

「紫電改の動きがすっかり回っている！力を集中させているんだ！」

「あの訓練のおかげ？流石ロスマン先生！」

洋介は以前の艦隊上空やテストをしていたひかりとは全然違う飛行に純粹に驚き、直枝とニパはひかりを指導したロスマンを称賛した。

そしてひかりはネウロイに急接近をして引き金を絞る。弾丸は着実に飛来、その装甲を削る。

しかし、ひかりは側面に気を取られ、後ろに迫るネウロイの尾翼に激突する。衝撃によつてはじき出されるひかりだが、ここで彼女は変化を感じた。

「コアが…見えた！」

ひかりの目には、ネウロイの弱点であるコアが見えた。そしてひかりはその位置に機銃を向けて発砲した。周りのウィッチたちは、ひかりがコアを見つけたのを知り、一斉にひかりが撃っている位置に向けて発砲した。

洋介も四式小銃で狙い撃っている時、波導で先の位置を感じた。

「…っ！ネウロイが左旋回するぞ！」

「！ えっ!?」

突然の洋介の言葉に周りは驚くが、その言葉通りにネウロイは左旋回を行った。

その景色が既に見えていた洋介はすぐさまネウロイの進行方向に先回りして13ミリ機銃で銃撃、進路を拒ませた時にメンバーがコアを狙い撃って破壊され、その姿を破片に変えた。

戦闘が終了、全員が集まる。

「ひかり凄いい！」

「ビギナーズラックってやつか…」

ニパと直枝がそういう横で、洋介はひかりに詰め寄る。

「よくやったなひかり、君はコアが見えたのか？」

洋介はひかりに聞いた。

「はい、見えました！前と同じぶつかった時に見えたのです！」

「（…ぶつかった時）」

ロスマンはひかりの言葉を聞いて、考える。

そして基地に帰投した後、ひかりはロスマンに連れられ隊長室に来た。そして、ロス

マンは今回の戦闘で起きた現象を隊長のラルに話した。

「…確かなのか？」

「ええ、どうやら接触することでコアが見えるそうです」

「噂に聞いたことがある」

ロスマンの説明を聞いて、ラルも過去に聞いたことを思い出す。

「雁渕ひかり、お前には『接触魔眼』の固有魔法があるようだ」

「接触魔眼!？」

「だが、絶対に使うな」

ひかりは自身に固有魔法があると聞いて嬉しくなるが、ラルが釘を刺す。

「え、何ですか？魔眼があれば…」

「無駄に命を捨てるな！」

ひかりは何故と聞くが、ラルの覇気のある言葉に口を止める。あの看護婦と同じ言葉を言われたことを思い出した。

「何のために、孝美はあの技を使ったと思っているんだ」

「あの技？」

『絶対魔眼』だ、聞いていないのか？

「心配掛けたくなかったのね…」

その様子をロスマンはそう解釈した。

「リバウの戦いで聞いた話したが、通常の魔眼では捉えない特異型や複数のネウロイのコアを一瞬で特定出来る必殺の技だ」

「ただし、肉体と精神の負担が大きく、シールドの能力も著しく低下するから、援護なしでは自殺行為に等しいわ」

「お姉ちゃん…あの時そうだったんだ…」

ひかりは姉があの時に行っていた行動の正体とその真意を知り、瞳を揺らす。

「いいか、接触魔眼は禁止だ。いいな。」

「…わかりました。あと、わたしを励ましてくれた扶桑の長い黒髪の看護婦さんにもよろしく伝えてください。」

ラルは念を押すように言い、ひかりはそれに返事して隊長室から退室した。

「なあ、エディータ…この基地に扶桑の長い黒髪の看護婦は配属しているのか…？」

「いいえ、いません……ひかりさんが見たのは……なんてまさか……」

「……………」

ロスマンの言葉に恐怖を感じ、ラルは青ざめた。

洋介は川の水を満杯にしたドラム缶風呂に火を沸かしながら、ひかりが側で相談していた。

「へえ、接触魔眼か…君のお姉さんと、俺の上官の坂本さんに匹敵する能力とは、凄いなあ…」

「でも…隊長から禁止を受けたのですよ…」

「ラル隊長の言ってることは、それまで大事なところまで温存して置けっことだ」

「えっ!？」

「次に使える場面は必ずある。それまで保証するゼヨ……」

「はいっ！あの、洋介さん……ドラム缶風呂が沸いたら入浴していいですか？」

ひかりの言葉を聞いた洋介は悩んだ。

「んーそうだな……わかった、今日はひかりが善戦した褒美だ！」

「やったー♪一番風呂だー♪……だけど覗かないでくださいよー！」

「はいはい、軍曹（やれやれ、せっかく風呂場を築き、沸かしたドラム缶風呂をヒョッコに一番風呂を譲らせるとは……）」

内心、一番風呂をひかりに譲り、ショックを受けつつ、釜戸に薪を積み上げれる洋介であつた。

しかしこの後、扶桑出身の直枝と定子も入浴しに来た、自身が最後に入浴するのは、まだわからなかつた。

第17話 極寒の再会 前編

洋介が502に配属してから数週間、毎朝欠かさずに剣術の鍛練をしている時に毎日何かの視線を感じた。

「またか……どこからの視線なんだ……？」

彼は軍刀を持つて廊下を歩いている時にふと鼻に触れるいい匂いを感じた。

「いい香りだ……」

そういうしながら洋介が炊事場に足を運ぶと、割烹着を着けている定子とその横で味見をしているジョゼがいた。

「おはよう。いい香りだな、下原さん…」

「桜井さん、おはようございます／＼／＼ジョゼ、今日のつまみ食いそれで5杯目だよ？」

定子は洋介に頬が赤く染まり挨拶をしながら、ジョゼに少し注意する形で言う。しかしジョゼはその言葉に反論する。

「違うよ定ちゃん。これはつまみ食いじゃなく味見」

「はいはい」

「つまみ食いか、下士官時代に空母瑞鶴や航空隊でギンバイをやったもんだ」

「桜井さん…ギンバイって…？」

「糧食庫に忍び込んでつまみ食い、ばれたら責任者に罰としてバターで尻をくらったな…」

「ヒイ……桜井さん……もしかして……わたしにバターを……」

「……安心しろ、か弱いジョゼにバターを与える訳にはいかん……」

洋介が手拭いで顔を拭いている時、ジョゼは内心ホツとした。その時、ジョゼの肩をうしろから触れる手が伸びる。

「ジョゼちゃん。僕にも君を味見させて欲しいな？」

「おいおい、クルピンスキーさん……」

うしろから掴んだのはクルピンスキーだった。洋介はそんなクルピンスキーの言動にあきれたように言う。彼女はジョゼから目標を洋介に変えた。

「なら、洋介くんを……」

「どうぞ。しっかりと味見してください」

定子がクルピンスキーに鍋のスープを入れた小皿を出す。

「そりやないよう下原ちゃん」

そう言いながらも受け取るクルピンスキー。

「あの…／＼桜井さんもいますか／＼」

「いや、朝食のお楽しみにさせてもらうからいいよ。さつきはありがとう。下原さん…顔が赤いな…」

定子は顔が赤らめ、洋介にも味見をするか聞くが、彼は美味しそうな香りのするスープを朝食のお楽しみにすることにした。

「おはようございまーす!」

洋介たちのうしろから声がある。振り返ってみると、ひかりが元気よく挨拶をしていた。

「おはよう、ひかり」

「おはよう、ひかりちゃん」

「おはようございます」

3人はそれぞれ挨拶をする。

「あの…私ちよつと用事が…」

「えっ、ジョゼさん…!」

しかし、ジョゼはひかりを見た瞬間、その場から逃げるように出ていった。ひかりが

呼び止めるがジョゼはそのまま歩いて行ってしまった。

ひかりは今の光景を見て、ジョゼが自分に好かれていないと感じた。

「私、嫌われているのかな…？」

「違うんです！…ジョゼは…」

「とっても照れ屋さんなのさ」

定子が何かを言おうとするが、すぐさまクルピンスキーが言う。

「この僕の思いにも答えてくれないもんね」

「…逆に答えたら驚きだ…」

洋介はクルピンスキーがまともな答えを言うのを期待したために、がっかりしながら言った。

そして朝食が始まる時、ウィツチたちが席に着くがただ一つ、ジョゼの席だけは空席になっていた。

そこには食器が置いてあるため、既に朝食を取っていた証拠が残っていた。

「(ジョゼさん：一人で先に済ませてる)」

ひかりはジョゼに何か言おうと思っていたが、既に居ないことに少しがっかりしていた。

「このカーシャ美味しい」

「スープもうめえ！」

ニパと直枝が朝食の味に舌鼓を打つ。定子がカーシャにはソバの実を使っていると説明をする。

「オラーシャではシチーって言うのよ。シチーとカーシャ、日々の糧。オラーシャの代

表的な家庭料理です」

朝食に出ているシチーとカーシヤについて、サーシヤが説明を加える。ラルはその説明を聞きながら黙々とスープを口に運んでいる。

「下原さんって、オラーシヤ料理も上手なんですね!」

「喜んでもらえてうれしいです。あの、桜井さんはどうですか…? / / /」

定子の言葉に、黙っていた洋介は反応した。

「…ん? ああ、凄く美味しい。あの戦争末期で戦った、敵国ロシアのロシア料理がこんなに深い味わいとは…」

「ありがとうございます。 / / / …… ロシア…?」

定子が洋介が言った単語が気になり何気なく聞く。502のウィッチたちは洋介が

異世界から来たことが気になった。

「桜井さんがいた異世界はどんなところですか!？」

「ああ、私も気になります。桜井さんの世界でネウロイはいないのですか!？」

定子の言葉にサーシャも反応した。だが、洋介はスプーンの動きを止めた。

「…ああ、ネウロイはいません…今は話せませんが、必ず皆さんに話します…」

「はい、その時はよろしく願います」

洋介の事情を知るロスマンがフォローしたため、みんなも聞く様子はなかった。ふと、ロスマンがひかりに聞く。

「それよりも、ひかりさんは何か作れるの?」

「お姉ちゃんの作る海軍カレーが好きです！」

「そんなこと聞いてんじゃねーよ！」

ひかりは自分が作れる料理ではなく、自分が好きな料理を言っただけのため直枝が間髪入れずに突っ込む。

「昨日の洋介くんの料理は美味しかったなあ」

「確かにあれはジューシーだったな、何て料理だった？」

「オラーシャ料理のペリメニに似ているわね」

「餃子だ。俺の世界で食べている中華料理だ。まだ昨日の余りがあるゆえに、万能に料理できる」

食卓が賑わう中、定子が何かを考えるように手元を見ているのに洋介が気付く。

「何か悩み事か…」

洋介は引つ掛かる様子だったが聞くことはなくそのまま朝食は終了した。

洋介はいつも通り格納庫で整備兵と愛機の零戦64型ユニットを整備、定子の行動が気になったのか、その最中に右手に傷を負い、整備兵が心配しにかけつけた。

「中尉、大丈夫ですか!？」

「…イイテ……ああ、取り敢えず自室に戻って応急措置してくる」

洋介が自室に戻ると、部屋のドアが開いていた。部屋の中にはひかりとジョゼがいた。

「あつ洋介さん!」

「桜井さん…」

「ん…二人とも、何で僕の部屋に？」

「勝手に入ってすいません…」

洋介から見たジョゼの格好は頭に三角巾を巻いて、両手に水バケツとモップを持っていた。

「そうか、いつも部屋がピカピカに整理していた正体がジョゼだったのか！」

「あの、私…実家でペンションをやっています。だから、みんなの部屋のベッドメイキングなら出来るかなって…」

「どうも、ありがとう！」

洋介はジョゼが部屋を綺麗にしてくれたと知り、感謝の礼を言う。ひかりは洋介の部屋を見渡し、机にあるものに目が行く。

「写真？」

ひかりは写真を拾い、写っている人物を洋介に尋ねた。

「洋介さん、この写真に写っているのは洋介さんと、この女性は誰ですか？」

「本当だ。桜井さんとお隣の女性は彼女さんですか…？」

「あ…いや、…そ…その人は……僕の妻だ…／／／」

「…え？ええーっ!?」

洋介は赤くなりながら右頬を掻き、ひかりとジョゼは驚いた。

彼は異世界に来てからあまり既婚していたことは語らず。この502に転属してから初めてひかりとジョゼに話したのだった。

「洋介さん、結婚してたのですか!？」

「てっきりいないと思ってました!」

「いないのは余計だ…／／／」

「あつ! 洋介さん!」

「あつ! 待って!」

ひかりが血が出る右手を見て驚くが、ジヨゼがさかさず止める。

「桜井さん、手を出してください。今治癒を掛けます」

「治癒を…?」

洋介が切った手を差し出すと、ジヨゼがモップとバケツを下ろして血が出ている洋介

の手に彼女の両手を翳す。

そしてジョゼが治癒魔法を掛ける。するとたちまち、手にできた切り傷が塞がりついに無くなった。

「これで大丈夫です」

「ありがとうジョゼ、おかげで助かった。君は治癒魔法が使えるんだね」

「ふう〜…」

ジョゼは治癒を終えると、頭に手を翳す。ひかりはジョゼの顔が赤くなっているのに気づき話しかける。

「ジョゼさん、顔が赤いですよ?」

「本当だ、大丈夫か…?」

「治癒魔法を使うと、身体が少し熱くなるだけです。そ、それじゃあ…」

そう言つてジョゼは部屋から出ていく。そして、残されたひかりは―

「んで、ひかりはいつまでいるのかな？」

「あつ！すみません、失礼します！（あの女性…どこかで…）」

洋介に言われたひかりは気づき、慌てて部屋から出た。

そのあと、ウィッチたちがミーティングルームに集まり、グリゴーリからのネウロイ侵攻状況について説明があつた。

現在、ネウロイはラドカ湖の北方で停止、湖の凍結が始まると一気に南下。ペテルブルグに侵入すると予想した。

凍結は12月のため、あと1ヶ月足らず。次の補給を待つて新たな防衛網を構築せねばならないのだった。

「今日の定時偵察、当番はだれですか？」

ロスマンが聞くと、定子とジョゼが手を上げる。今日の定時偵察は二人が当番だった。そして、指し棒を地図に向けて説明をする。

「偵察範囲をラドカ湖北東、ペトロザヴォーツク周辺まで広げます。気づいたことがあったら全て報告してください」

「了解！」

ロスマンに言われて定子とジョゼは返事をする。そして、ロスマンは洋介とひかりの方向を見る。

「桜井さんは偵察隊の隊長として、指揮をお願いします」

「わかりました！」

「ひかりさんも同行しなさい。遠乗りの訓練にいい機会だわ」

「はい！」

ロスマンは洋介にひかりの経験を積ませようと、今回の出撃に同行するように指命、洋介は階級の順として指揮を執るのであった。

「俺が君たちの指揮を執るのか、よろしくお願いします」

「よろしく願います！」

「こちらこそ……／／／」

「よ、よろしく……」

洋介とひかりは定子とジョゼに同行の挨拶を伝えた。

しかし、定子は洋介を向いて微笑んで赤くなり、ジョゼはまた下を向きながら返事をした。

「(ジョゼ…何かひかりに引け目を感じて避けている？なぜ、…下原さんは僕を見て赤くなって…?)」

洋介はそんな二人の姿を見ながら考えながら、外套を着て出撃した。

ラドガ湖上空―

「今日は晴れてて気持ちいいね」

「でも、寒冷前線が近づいているから夜には雪になるんだって」

「夕方までに戻るから大丈夫だよ。ですよ、桜井さん」

「…ん？…そうだな、敵さんが出てくる以外に無ければいいな…」

定子が洋介に話し掛けた時に、ひかりは接触魔眼のイメージトレーニングで手を振っていた。

「あの時確か…こうだったかな…？…触ったんじゃない、ぶつかった…」

「雁淵さん…？」

「はいっ！」

「何やっているのですか…？」

定子はひかりの行動に気にかけて接近して訪ねた。

「(そうだと……接触魔眼のことは喋っちや駄目なんだ……) あつあの……体操してました」

「(はは……ん……接触魔眼の練習か……上手く誤魔化したな)」

ひかりは練習を体操と誤魔化し、洋介は薄々感づいた。そして、ひかりは定子に質問した。

「そ、そう言えば……下原さんは、扶桑のどこ出身なんですか？」

「広島の尾道です」

「尾道!! 尾道といえば、坂道ですよね! わたし長崎の佐世保で……」

「なに、尾道……佐世保………広島と長崎………ピカが落とされた場所やないか………」

二人の会話で、洋介は震えた。

すると、ジョゼが洋介の言葉が気になって側に寄った。

「…………ピカ…?…………桜井さん、なんですかそれ？」

「いや、何でもないよジョゼ…」

ジョゼの質問に洋介は誤魔化した。

洋介が異世界に転移する前の戦争末期、1945年8月6日広島に、9日の長崎に新型の原子爆弾が投下されて壊滅。夥しい犠牲者が出たとの情報を聞いたのだった。

その中にラバウル六勇士、厚木十三の妻の柚子が広島で、沖田新一郎大尉と金城幸吉一等飛行兵曹が長崎上空で被爆、戦死したのであった。

そして、定子とひかりが洋介に接近した。

「桜井さんは扶桑…えっと…異世界である日本のどこ出身ですか？」

「ん…………俺か、兵庫の神戸出身だ…」

「神戸!?尾道と佐世保と同じ坂道があつて、女性が憧れるお洒落な街じゃないですか!」

洋介の言葉にひかりははしやぎ、興奮した。

「桜井さんは、その外套を着てお洒落な雰囲気を出すんですね」

「そんなことないさ下原さん、戦争でお洒落は無縁だ。俺はあの戦争で生きること一杯と言えども、多くの敵を殺した。俺は人間として恥ずかしい…」

「そうなんですか…それに……／＼／＼前の501部隊の活躍は見事です。世界初のウィザードはどんな人かと思ったら、こんな人だったことは、わたしはよかったです!」

「あ、ありがとう……下原さんも、この502でも活躍しているな。前の第3艦隊の救援は助かった」

「そうですよ、下原さんも凄いです!」

洋介とひかりの言葉に、定子は下を向いた。

「そんな…私ってあまり部隊の役に立ってません…」

「そんな筈不是吗！今朝の料理もみんな喜んでたじゃないですか！」

「確かに、あれは俺が母艦と基地時代、501時代より美味しいものはない」

「料理なんて関係ないです…この部隊にいるからにはネウロイと戦って戦果を挙げないと…他の皆さんに比べたら、私なんてまだまだだめ…もつと頑張ってネウロイを倒さないといけないんです…」

「定ちゃんがだめなんてことはないよ！」

定子が暗いことを述べる中、ジョゼが渴を唱えた。

「ら…ラドガ湖を越えるわ。任務に集中しよう」

「そうね…」

「はい！」

「ジョゼの言う通りだ、今は戦うより生きること执着しろ！」

「はっはい！」

湖を越えた後、雲が増えて雪が降ってきた。雪が降る中でも4人はペトロザヴオーツクに飛行した。

「寒冷前線の動きが早いようですね！」

「早く、偵察を終えて戻りましょう」

進むにつれて天候が荒れて吹雪が吹き、視界が悪化した。

「吹雪いてきましたけど、大丈夫ですか!？」

「平気です!」

「こつちも異常なし!もうすぐ引き返すぞ!」

「変だよ…そろそろペトロザヴォーツクの筈なのに…」

ジョゼが違和感を感じる中、ひかりが若干寒さに震え、洋介も南方暮らしで寒さに慣れていなかった。

「さ…寒い…」

「うう…俺も寒い…」

「街が見えました。…あれはっ!？」

「街が…」

定子と洋介が目の当たりにしたのは、凍りついたペトロザヴォーツクの光景だった。
4人は上空で停止、街を確認した。

「ペトロザヴォーツクが凍ってる…」

「どうして…こんな…」

洋介と定子は気配を感じた。

「雲の上にネウロイ発見！」

「確かにネウ公だ！ 赴くぞ！」

「え…？ 何も見えませんよ…」

「定ちゃんは、遠くの物を見る能力があるの！」

「行きましょう!!」

「はいっ！」

「下原さん、凄い能力だな！」

「あつ…いえ…／／／」

4人はネウロイが点在するところに飛行して雲を切り抜けた。

「あつ、いた！」

「こちらジョゼ、ネウロイ発見！502基地、応答願います！」

ジョゼがインカムで502基地に連絡した。だが、応答が無く雑音が鳴り響いてい

た。

「無線が通じない……桜井さん、定ちゃんどうしよう!？」

「今からこの空域を離脱する!」

「っ! 離脱ですって!？」

「作戦を……下原っ!？」

「(私だって……) 戦いましょう!」

洋介が決断を下した時、定子がネウロイに向かって飛行する。それに続いてジヨゼとひかりもネウロイに向かって飛行、機銃を掃射した。

「君たち、何を!？」

「桜井さん！あなたが中尉と言っても、離脱の指示には従いません。ネウロイを倒さない限り戦います!!」

定子が洋介に反発、ジョゼは彼女が心配になって接近した。

「定ちゃん！無茶しない方がいいよ！」

「私だって502のウィッチよ！一つでも多くのネウロイを倒すの!!」

ネウロイがビームを撃ち出し、4人はシールドで防いだ。

「うわっ！」

「桜井さん、雁渕さんっ!？」

「大丈夫です!!」

「下原さん！今ならまだ間に合う、すぐに離脱して作戦を練り直すぞ!!」

「桜井さん、もう一度行かせてください!!…きやつ…」

ネウロイが強風を扇ぎたて、油断した定子とジヨゼは強風に吹き飛ばされた。

「定子!!…ぐわあっ…」

「洋介さん!!…下原さん、ジヨゼさん、洋介さんが…!!」

「このっ!!」

吹き飛ばされた定子が、彼女のユニットが洋介の頭部に激突して地上に落下した。
定子は無我夢中になり、機銃の引き金を引こうにも機銃が凍り付いて使用不能になった。

「なっ…機銃が」

「私もだよ定ちゃん！どうしよう!？」

「雁渕さん!？」

その瞬間、ひかりがネウロイに向かって飛行した。

「わたしの銃は凍ってません！やってみます!」

「雁渕さん！ダメエ！あつ…ユニットも凍ってる!」

「まさかっ!?!あのネウロイが冷気を出して気温を下げてる!?!雁渕さんっ戻って!!」

「…さ…寒い…」

ひかりはネウロイが放つ冷気を浴びて落下、定子とジョゼがひかりを止めようとした瞬間、2人のユニットが凍りつき停止して地上に落下した。

そしてネウロイは積乱雲に戻り、ペテルブルグの方向に進んだ。

「大丈夫!?! ジョゼ…」

「うん…大丈夫、定ちゃんは?」

「うん、平気…雁淵さんと桜井さんは…?」

定子とジョゼは吹雪が吹き荒れる地上の激突寸前でシールドを張って防いだが、落下したひかりは積雪に激突して埋もれていた。

二人はひかりを救出したものの凍傷になり掛かり容態が悪化、指揮していた桜井洋介は行方不明になった。

「ど…どうしよう…私のせいよ…私がネウロイを倒すことに…拘ったから…雁淵さん…
…うう…桜井さん…」

「…む…」 パアアン

定子が自身の身勝手な行動に責任を押し付けた時に、ジヨゼが平手で定子の左頬を叩いた。

「定ちゃん、自分を責めるのは後!! まず雁淵さんを助けて、何がなんでも桜井さんを探して助けなきゃ!!」

「そうね、ジヨゼの言う通りだわ!」

定子が雪を掻いて穴を掘り、ジヨゼが治癒魔法で凍結しているひかりを回復している中で洋介は―

「さ…寒い……下原……ジヨゼ……ひかり……どこ…だ…」

定子の衝突で落下した洋介は、頭部が流血してたが三角巾で止血。

吹雪が吹き荒れる中で零式ユニットを背負い、四式小銃と軍刀を杖としてついて雪原を彷徨っていた。

波導で探すも、定子のユニットが頭部に激突したため能力が曖昧になり凍傷になりかかっていた。

「…陸軍さん……………の……………八甲田山事件…も……………こん…なんだ……………ろうな……………」

洋介は雪原に倒れ、意識が朦朧した。

「もう、ここまでか…厚木隊長、沖田さん、虎雄、進次郎、幸吉、トチローさん……………トチロさん…柚子さん…晴香さん……………純子さん……………姉さん……………勇介……………雪……………亜弥……………すまない……………」

「(なに弱音を吐いている)」

意識を失いかけた洋介の頭から話す声が聞こえた。

「…っ!?!誰だ…!」

「（お前は这个世界にきて、家族を守りながら敵と戦うんだ！）」

「守るって、…僕の家族を守ることを…なぜだ!？」

洋介は起き上がり、背後には犬より倍大きい牙があり、巻いてない尻尾、狭い胸幅、長い前足の指、美しい毛並みで白銀の狼が立っていた。

「あれは…何かの本で読んだ…絶滅したエゾオオカミか…?…なぜ…だ…夢でも見てるのか…?…ん…刀…?…」

狼の足下に刀が置いてあった。よく見たら洋介の軍刀、鷹狼だった。狼が軍刀を口にくわえてその場を離れた。

「待て、…その…軍刀を…返せ…（なぜ、あの狼は歩いているんだ…?）」

エゾ狼は走らず、洋介の動きに合わせて歩いていた。しばらくしてエゾオオカミは止

まり、鷹狼を置いた。

「はあ…はあ…っ！…あれは…少女…？…大変だ!!」

洋介は幽霊を見たような表情で狼が座っているところに雪に埋まった少女のところに駆けつけた。

「おいっ!!しっかりしろっ!!」

「…う…う…ん…」

洋介が掘り起こし、その少女を揺さぶり、擦りながら意識を確認する。

「…よかった…だが…ここじゃ…凍死する…危険だ…一刻も早く懷抱を…」

ワオオオオオン

エゾオオカミが遠吠えした方向には、ネウロイの戦場で放棄したオラーシャのKV—2戦車があった。

「ロシア…いや、オラーシャの戦車か…助かった…おつと、その前に白樺の樹皮を…」（幸吉から学んだことが、役立つとは）……」

洋介は急いで少女を抱きながら軍刀を携え、白樺の樹皮を確保して、エゾ狼と戦車に入りマツチで火を着けて暖を摂った。更に外套を脱いで少女に被せたせた時だった。

「（…っ!?なんだこの感触は…この娘…どこかで…どこだ…?…思い出せん…思い…）」

洋介は頭を傾げながらも思い出せず、疲労が出て女の子の手を繋ぎながら床に倒れながら魔法力を発動、力を注いだ。

エゾオオカミは二人に接触して囲んで暖めた。

吹雪がまだ吹き荒れる中、雪の鎌倉から定子とジョゼ、ひかりがストライカーユニットを担ぎ、戦車に近づいて側面ハッチを開けたら洋介と少女、狼がいるのに驚いた。

「さ…桜井さん!？」

「洋介さんだ…なんで…戦車の中に…」

「…なんで少女と…ひっ…狼がいるよ…」

「狼に構わず、二人を…」

定子が洋介と少女の肌に接触して確認すると、洋介の体温と魔法力が著しく低下していた。

「桜井さんは…この娘を助けるため魔法力を注いでいるのだわ…」

「下原さん!早く二人を助けないと…」

「定ちゃん!私が二人に治癒魔法を…」

「ちよつと待つてジョゼ！」

定子がジョゼの行動を制止させ、指示を仰ぎ出した。

「ジョゼはこの娘に治癒魔法をお願い、雁淵さんは白樺を…火の燃料の薪を…」

「わかりました！」

「わかった！…定ちゃんはどうかするの!?…「なっ…！／／／」

定子は氣を失っている洋介の第3軍服等を脱がし、自身の軍服とズボン（競泳水着）を脱いで洋介の肌に接触した。

「（…凄い傷…お願い、洋介さん…私…私の言葉を聞くまで死なないでください！）」

定子は洋介の身体に幾つもの傷痕を見て驚いたが、願いながら強く抱き締めた。

502基地　ー　猛吹雪の影響で偵察していた4人の搜索が出撃が中止になり、命令があるまで待機が続いた。

夕食時、テーブルの食卓にどす黒いスープが並べてあった。

「なにこれ…?」

「スープですね…多分…」

「ヴウ…」

ロスマンがスプーンでスープを注ぎ、口に運び入れたら顔が真っ青になった。そして、炊事場からエプロンを身に着け、お玉を持ったクルピンスキーが出てきた。

「どう、美味しいでしょう♪先生ご自慢の食材で愛情たっぷり込めて作ったんだよ♪」

「なんですって!? きゃあああ!!」

ロスマンが炊事場を訪れた時、悲鳴が上がった。

「…わ…私が1年かけて…集めた貴重なオラーシャキャビアが…おのれ、偽伯爵!!」
ロスマンがクルピンスキーに制裁する中、みんなはスープを口にした時に真っ青になった。

「な…なんだこれ…」

「やつぱり…下原じゃねえと駄目だ…」

だが、ラルは無表情で何度もスープを口に入れた。

「さ…流石隊長…こんな時に冷静ですね…」

サーシャが感心し、ラルはスプーンを止めた。

「…不味い…」

502のウィッチたちはネウロイの戦鬪どころか、こんな不味い食事を摂取したら絶命しかねない。

「そうだわ！」

突然、サーシャは思い出したような声を上げた。

「桜井さんが作り置きした餃子が残っていました！」

「そう言えばそうでした！」

「そうか、飢えずに済むぜ！」

「そうと決まれば、早速やろう！」

「…餃子…ああ、…洋介くんが残したその餃子も、先生の愛情が籠った料理の中に…」

「な…なんだって…？」

鍋をかき混ぜると、中からドス黒く変色した餃子が出現した。

「『この、偽伯爵ーっ!!』」

「ひいひい…」

ウィッチたちは洋介が作り余った餃子を食べる望みを掛けた時、クルピンスキーの一言ですぐに希望から絶望に変わった。

怒りのオーラが漂ったウィッチたちは、鉾をクルピンスキーに向けて制裁したのであった。

第18話 極寒の再会 後編

その頃、戦車の中で暖を摂って眠っている少女は夢を見た。広島の呉郊外で父母と過ごした最後の1日だった。

1945年 7月23日

「よしよし亜弥！お父さんだ！」

「ふふふふ」

母親は従軍看護婦、父親は軍刀を帯刀した特務士官、敏腕の戦闘機パイロット。二人は休暇で咽やかな道を家族水入らずで歩いていた。

「あなた、この戦争はどう思う？」

「もうすぐ戦争の終わりが近い、終わったたら雪と亜弥の為に精一は……」

「この非国民が!!」

家族の雰囲気突如壊された。この先の道でガラの悪い警察官がリヤカーに荷物を引いた夫婦子連れの家族の主人を暴行していた。

亜弥がその恐怖で泣いた時、父親はその光景を目にして、その場所に駆けつけた。

「その警官、止めんか!!」

「何者だ!?!」

「海軍少尉、桜井洋介だ!!」

「少尉…失礼しました!!」

警官は洋介が海軍軍人の身分であることに驚き、慌てて敬礼した。洋介は警官から事情を聞いた。

警官からは家族ぐるみで闇から食料の芋を入手したのを検問。だが、警官は家族の尋問の時に、父親が自身の子供に芋を食べさせた時に怒り、暴行。

「…なるほど…だが貴官は、家族が食糧を調達した場所、闇物資だと言う証拠を掴んだのか!？」

「…はっ、その…」

その時、戦場で戦い抜いた洋介は察した。

大した取り調べをせずに暴行、この時代で食糧が不足気味、尋問の行動を偽り、暴行、

強奪しようとした。

洋介の言葉で警官は冷や汗を掻き、たじたじになった。

「…この家族が入手した行き先を取り調べ、私と共に捜査に向かうぞ！」

「な…なんの権利があつて…」

「命令だ!!」

「はっはい!!」

警官は直ちに家族の父親から入手した住所を入手、洋介は警官とその住所先を捜査。気の毒でありながら、雪は亜弥と抱きながら家族を見張っていた。

「皆さん、申し訳ありません。軍人の妻として見張らして頂きます」

「いえ、あの…主人と子供たちを守って頂いたことでも感謝しています…」

「ありがとうございます」

「お姉ちゃん、ありがとう！」

家族の妊婦の母親と姉弟三人は旦那の代わりに感謝を述べた。

「あの、旦那さん……お怪我を、手当てをします。あたしは看護婦です」

雪は亜弥を妊婦に預け、常に所持している携帯用医療道具で消毒薬とガーゼを取り出し、手当てを施し終えた頃に洋介と警官が戻ってきた。

そして、家族は無罪に終わった。

「ありがとう、ありがとうございます軍人さん！」

家族一同、涙ながら桜井一家に感謝の言葉を述べられた。

「いえ、長い間戦場で戦ってきた感が働いただけです。それに、弱き者を助けるのが、私の役目です。最後に、これを譲ります」

洋介の図囊から酒保で購入した希少なミルクキャラメル三箱を取り出し、三人の子どもたちに譲った。

「やったー！キャラメルだ！」

「ありがとう！軍人のあんちゃん！」

「いやいや、君たち元気だな。では失礼します!!」

洋介は家族に敬礼、家族はその場を去り、呉へ帰投した。亜弥の僅かな記憶でありながら、正義感の強い父親の勇士を目の当たりにした。

三人は呉の旅館に宿泊。宿泊した家族水入らずの部屋で川の字で眠ったのも最後だったのかまだ分からなかった。

24日 蟬が騒ぐ中、何かに反応したのか、洋介は起き上がった。

「雪、空襲だ！急いで防空壕へ！」

「ええっ!?…あなたは基地に…!?」

「そうだ、僕はこの軍港と君と亜弥を守るために飛ばねばならない！」

「…洋介さん…、この娘のために生きて還ってね…」

洋介は黙りながら妻子を優しく抱き締めた。腰に帯刀していた短剣を妻の雪に手渡した。

「必ず、帰ってくる。それまでに、この誓いの短剣をお願いします。僕は愛する雪と、幼い娘の亜弥のために。じゃあ…行つてきます！」

洋介が二人に背を向けて出て行った後、空襲のサイレンが鳴った。

それが、妻子が見た最後の姿であり、まだ産まれたばかりの幼い女の子は徐々に父親の顔を思い出した。

「……お……父……さん……」

そして、洋介は夢を見た。

雪が舞う北海道の小樽、ある住宅の母親が危篤、知人らが囲む中、布団で横になっていた。

1954年 12月

「お母さん……！」

「………亜弥………わたしが何か……あつた………御守りと……短剣………をお願い……」

「……うん………」

「……わたしの分も……お父さんと生きて……生きて………」

「……お母………さん………お母さん………お母さん!!」

その娘の母親がある言葉を残し、静かに息を引き取った。その娘は悲しみに暮れて泣いた。

「（……雪………そんな………）………雪………!!………夢………なのか………」

洋介は目を覚ました。密閉した戦車の中で偵察メンバーと一晚過ごしたのだった。ひかりとジョゼは女の子を挟んで暖を摂り、定子に関しては互いに裸体で暖を摂っていた。

「おいおい……／＼、……下原さん……起きてください……」

「……う……うん……桜井……さん……?」

「……その……なんで君は……／＼……それは後に、……軍服を着用して状況の説明を……」

洋介は静かに定子を起こして、お互いに軍服を着用する。

ひかりとジョゼを起こし、洋介の携帯する乾パンで軽い朝食を摂り、お互いに戦況を報告、検討した。

「なるほど、……そんなことが……ひかりとジョゼの関係がよくなってホッとしたぜ……」

「桜井さんも、このペトロザヴォーツクの郊外に扶桑の少女を…」

「そうですね、…在留していた少女が引き返したにしても…なんで、狼と一緒になのか…」
幾つかの疑問で悩める中、洋介たちは戦車から出た。既に外は晴れており、吹雪が止んだという証拠だった。

「ペテルブルグの方は真っ暗、猛吹雪に包まれているみたいね」

「この吹雪がやんだってことは…」

「ネウロイが移動したのね」

定子の固有魔法、遠距離視により、ペテルブルグでの吹雪が観測される。そしてそれは、あのネウロイが移動したことを意味していた。

「じゃあきつと、基地の皆さんが気付いて出撃してますよ！」

「それはどうでしょう…」

ひかりが希望的に予測するが、定子はそれを否定した。

「ネウロイは雲に隠れてて基地からは見えないし、レーダーにも映ってないかもしれない…」

「それに、あの猛吹雪じゃ飛べないはず…と、考えるとネウロイのことを知っているのは多分、…私達だけ……」

ジョゼと定子の分析により、現状を知るはこの4人だけという結論に至った。

「じゃあ、4人で倒しましょう！」

「そうだな、俺の四式半自動小銃と十四年式拳銃、軍刀はまだある。」

「でも、近づいたらまたあの冷気で凍っちゃう…」

洋介はひかりの言葉に提案して所持する武器を手にした。

大した武器も無く、ユニットを凍らせて来るネウロイの存在に対してなす術が無い。

「ウィッチに不可能は無い」

「えっ？」

突然、定子が言ったことに、二人は何を言ったのかと思い反応した。

「私の上官の口癖です…そうですね。やってみましょう！」

「そうと決まれば、早速準備に取り掛かるぞ！」

「」
「はい!!」
「」

そして、4人は準備を開始した。

4人はそれぞれ、ユニットを温め解凍する。ユニット凍防止対策のために周りにテープを巻く。

ガラスの熱割れの原理を利用したネウロイ攻撃を考えてる。そしてその材料に戦車の燃料を使い、その露出したコアを、洋介の図囊に入っていた、たった一発のロケット弾を四式小銃の銃口に設置した。小銃を任されたのは、下原定子であったが、彼女は困惑した。

「あの…桜井さん、…なんで私が…」

「さっき言った上官の口癖は、坂本少佐のしろ」

「…っ！だったら…なんで…？」

「僕の右手と腕は落下の影響で曖昧になってしまった。それに下原さんは、坂本さんの部下なら直のことだ！プレッシャーを与えるかも知れないが、君なら出来ると信じてい

る」

「わかりました!!……………桜井さん、……この任務が終わったら、私と付き合ってください!」
／／／

「……／／……任務が終わったらな……定子……／／……出撃!!」

「」 了解!! 「」

洋介はやや赤くなった。

洋介、定子、ジョゼ、ひかりはあの扇風機型ネウロイの討伐の作戦を練り、そして出撃した。

その出撃を戦車で待機した少女とエゾオオカミが静かに見守った。

「……お父さん……あのお兄さん、お姉さんたちを見守って……」

こうして、4人は離陸を開始した。そしてそのままネウロイの方向へ向かう途中、彼らは衝撃の光景を見た。

「見てください！ラドガ湖が！」

「カチカチだ……」

まだ凍らないと予想されていたラドガ湖が凍っていたのだ。

無論、この原因はあの扇風機型のネウロイによるもので、そして4人はそのままネウロイのいる雲に突入した。

「さ、寒い……！」

「桜井さん、定ちゃん、急がないと！」

ひかりは雲の中の寒さに身体を震わす。そして、ジョゼは既に凍り始めているユニットを見て洋介と定子に注意をする。

そして、ついに4人はネウロイの位置に到着した。洋介とひかり、ジヨゼは定子から離れて攻撃の体勢を整えた。

「攻撃開始!!」

「えいっ!」

ひかりとジヨゼは洋介の合図で戦車の中にあつた葉莖に入れた即席の燃焼材を、ネウロイの上に思い切り投げた。

「そこっ!」

そして、洋介は燃焼材に向けて拳銃を乱射、拳銃弾が命中して誘爆。瞬く間にネウロイは火だるまになり、表面を削りコアが露出した。

「あつ、あそこにコアが!」

「ええっ！」

ジョゼの指示で定子が四式小銃を構えて狙いを定める。

しかし、ユニットが凍り突如魔導エンジンの回転が停止、そして定子はバランスを崩して狙いが定め難かった。

「そんな、もう凍り始めてる！」

「私は下原さんを支えます！ジョゼさんはユニットを温めてください！！」

ひかりが定子のユニットを支える。しかし、ジョゼは困った様子で言う。

「駄目！誰かが怪我してないと、治癒魔法が使えないの！」

「えっ!?!だつたら……！」

突如、ひかりは定子のユニットに頭部を思い切り叩きつけた。その行動を見ていた3

人は驚いた。

「雁渕さん!？」

「痛って…これでいいですか!？」

「う、うん！」

ひかりの突然の行動に困惑するが、自分の身を削ってまで戦うひかりを見て、ジョゼもすぐに治癒を開始した。そして、治癒魔法の熱はユニットに伝わっていき、少しづつ解凍をしていく。

「これで少しだけ飛べるわ！」

「ありがとう、2人とも！」

定子は感謝したものの、まだ不安が残り手が震えた。

そして、洋介は定子の肩に左手を支え、自身の波導を彼女の魔法に組み合わせた時に、定子の眼からロケット弾の弾道予測が見えた。

「落ち着け、定子ならできる!!」

「洋介さん、ありがとうございます!」

そして、四式小銃の先端に装備したロケット弾を放った。

「いっけえ!!」

定子の念は届き、飛翔したロケット弾はネウロイのコアに直撃。そしてついにコアを破壊したネウロイはその姿を破片に変えた。それと同時に、周辺の雲も晴れた。

「やったー! やりましたね!!」

「やったね定ちゃん!!」

「よくやったな、定子!」

ひかりとジョゼ、洋介は定子の元に寄つて来る。そんな3人の活躍に、定子も感謝の言葉を伝えた。

「ありがとう、2人とも。そして、洋介さんありがとう!／／／」

「わわっ!／／／」

定子は嬉しさの余りに、洋介に抱き着いた。

「おおっ!洋介さん、やるうゝ!」

「桜井さん、定ちゃんを盗ったら奥さんに言いつけてやるゝ」

「奥さん…?」

その言葉を聞いた定子は洋介から離れた。

「すまない下原定子、僕は元の世界では既婚者だ。今まで隠して申し訳ない…」

「…洋介さん…」

「さて、あの娘の元に…」

洋介が振り向いた時に、3種軍服の懐からなにかが落ちた。それを見たジヨゼが掴み取ったのは扶桑海軍の短剣だった。

「桜井さん、あの娘を見つけた時に、治癒魔法を搔けた時こんな扶桑海軍の短剣を持っていました。あれ? 鞆に小刻みした扶桑の文字が…」

「…短剣に扶桑語だって…? これは…? ……な……なんてとこだ…」

洋介はその短剣を見て、身体が震えた。

「どうしたのですか？」

短剣の鞘には小刻みした文字に名前が彫ってあった。それは桜井洋介の名前だった。

「これは…僕の名前が彫ってある。…この短剣…もしや!!」

「あつ、洋介さん!!」

「洋介さんっ!？」

洋介は急いで戦車の元に戻って飛行、続いて定子たちも洋介の後を追い掛けた。

洋介は戦車の元にたどり着き、ユニットを脱いで戦車の中にいた少女の首から下げていた桜型の御守りを確認した。

「…っ!?お兄さん!どうしたの…?」

「首から桜型の御守り…君は…君は…もしや、亜弥か…桜井亜弥…」

その少女は困惑したが夕べ見た夢の記憶を思い出した。

あの戦時中で離れ離れになった父親の顔だった。少女、亜弥の両目から涙が流れた。

「…お兄さん…あなたは…もしかして、…桜井洋介…?…お父さん…?」

「くっ……」

お父さんと聞いた洋介は、戦車から出た時に定子たち3人が合流した。

「洋介さん!」

「洋介さん、もしかして…あの娘は洋介さんの親類じゃ…」

「そうだ…あの娘は…僕と妻の…娘だ…偶然にしても…恐ろしい…」

「…凄いですよ…奇跡ですよ！異世界からこの世界に、洋介さんの娘さんが来たんですよ！染みないで、運がいいじゃないですか！」

ジョゼが笑みながら進言した。だが

「そうなのか……」

「え…？洋介さんは、こんな可愛い娘さんと再会して嬉しくないのですか…？」

「ジョゼ…そうだろうか…はつきり言って嬉しくない……」

「…え…なんで…？」

「定子…ジョゼ…ひかり……ネウロイの秘密計画で巻き込まれたと言えども…僕は家族を置いて…いや、…捨てたと言っても過言ではない…僕は卑怯な男だ…あの娘の前で、

父親と語る資格はない…」

「「!?」」

洋介は自責を感じながら、左手で軍刀鷹狼を抜き、刃を首筋に近づけた。

「洋介さん!」

「妻と娘に詫びて…死を…あつ!」

ガルルルル

「やめて…死なないで…お父さん!!」

エゾオオカミが軍刀鷹狼を咥え、洋介の自決を阻止した時、戦車から亜弥が出てきた。

「…お父さん…亜弥は…お父さんがお母さんと亜弥の元に帰ってこなかったのを恨んだ…死んだら…許さない…一生許さない!!」

亜弥の言葉を聞いて、洋介は涙を流した。

「そうだ、…ぬちどう宝…ぬちどう宝………!」

「……お父…さん……うわああーっ!!」

「ごめん…ごめん…亜弥! 亜弥とお母さんを2人ぼつちにさせてごめん…!」

亜弥は父親の洋介に強く抱き着いて涙を流し、そして洋介も娘の亜弥を両腕で抱き着き泣いた。

傍で見ていたウィッチたちも貰い泣きをしていた。

「やっぱり奇跡ですね……こんな離れた戦地で……別の世界から父娘の再会なんて……泣けちゃいます……」

「ええ……本当に……」

「あの娘……少女が……洋介さんの娘さん……」

亜弥を含む5人は502基地に帰投した。

夜、洋介は隊長のラル少佐とロスマン曹長に報告した。

「ペトロザヴォーツクを襲来したネウロイの撃破をよくやった」

「はっ、私だけではありません。定子とひかりとジョゼの連携があつたからこそです！」

「しかし、ラドガ湖が凍結されたことで、ネウロイ襲来は時間の問題です。それともう一つ、桜井さんの娘さんがなんで、このオラーシャに……？」

「わかりません、……俺の娘の亜弥を最後に見たのはまだ赤子でした……なぜ、あんな成長を……」

「お前の娘の訊問は近い内に行く。それまで面倒は桜井中尉を含む他のみんなに任せる。」

「はいっ！」

「もうすぐ食事だ、食堂にいくぞ」

洋介、ラルとロスマンは隊長室から出て食堂に向かい、テーブルに付いた。今夜の献立は日本食ならぬ扶桑食であつた。

「やっぱり下原さんの料理は最高だね〜！」

「美味しい!!」

「……日本食は久しいなあ……／／／」

「……お母さんの味がする……」

ニパと直枝、洋介と亜弥が料理を舌打って堪能していた時、ロスマンは茶碗蒸しの中にある食材に気付いた。

「あら？……この茶碗蒸し……」

「はい、缶詰の底にキャビアが残ってたので使ってみました！」

「キャビアの使い方、よくわかっているわね〜♪どこかの偽伯爵とは大違いだわ…」

ロスマンは定子を褒め称え、クルピンスキーに睨み付けた。

「キャビアなんて塩辛いだけで、どこがいいんだか…」

「だからあなたは偽伯爵なの！まだ桜井さんの方が伯爵よ！」

「ん…僕が!？」

ロスマンとクルピンスキーの論争の言葉で洋介は反応、その食卓に皆は笑い出た。

サーシャはその光景を見ながらラルに話しかける。

「食事の力って、凄いんですね」

「…美味しい」

食事は戦場で戦う兵士の士気に関わることが心の支え。

「しかし、洋介くんが女の子を抱えて基地に帰投したのは驚いたねえ♪」

「そうそう、市街地から拐ってきたかと思っただぜ！」

「……人聞きが悪いよお管野、洋介さんに失礼だよ。この辺りの都市の住民は避難しているから誰もいないよ……」

直枝が冗談半分でからかう中、ニパが抑えた。

「…ねえ、亜弥ちゃん♪どうやって洋介くんの元に来たのおく？」

クルピンスキーが質問する時、疲れたのか食事しながら眠っていた。

「あら、眠っているわね」

「そう言えば、この基地に配属したひかりちゃんも食べながら眠っていたねえ」

「えっ!? そうなんですか?」

皆が笑いあう中で食事を終え、洋介は亜弥を抱き抱えて自室に戻り、ベッドで眠っている亜弥を静かに見つめた。

「…亜弥……………ん…?…どうぞ」

夜遅く、洋介が自分が就寝するハンモックの準備する時に部屋の扉から叩く音が鳴り、入ってきたのは定子だった。

「洋介さん…」

「ん…定子か…僕を軽蔑してきたのか…?」

無言だった彼女は洋介を抱き締めた。

「…洋介さん…、あなたは私が恋したウィザードです。私は力不足かも知れませんが、この娘の…亜弥ちゃんの親になりたいのです!」

「……………定子……………」

「私は、…洋介さんと亜弥ちゃんの心を支える…家族になりたいのです!」

それが、定子から洋介への決断だった。

「定子……………その…気持ちだけは受けとっておく…」

「……………洋介さん……………」

「……………俺は、…亡き妻一筋だ…君はまだまだ若いウィッチだ、純粋な心でネウロイと戦うんだ…この世界の未来のためと、平和のために…」

洋介は心を鬼にし、定子に呟いた。

第19話 幸運と覚醒 前編

桜井洋介の娘、桜井亜弥がウィッチの世界、502基地にきてから数日。亜弥はラルとロスマン、父親の洋介から尋問を受けた。

亜弥から聞き出した経緯としては、洋介が行方不明になってから9年後の1954年からやってきた。

母親の雪が亡くなるまでの間に洋介を探すために北海道に移住、亜弥と慎ましく生活をしていた。

母親が亡くなったショックで父親の短剣を持って家を飛び出し、友のエゾオオカミひびきと猛吹雪に会い、このウィッチの世界に迷い混んだ。

ウィッチの世界にきた亜弥ですら信じられない事態であつた。

「信じられないが、…桜井洋介と同じ異世界…それに未来から…」

「そうですね…ねえ、亜弥ちゃん。どうやってこの世界にきたのか覚えているの?」

「わかりません…ひびきとただ走ってきたこと以外、…覚えていないです…」

亜弥は哀しい顔をしながらロスマンの顔を合わせられなかった。

ラルは亜弥に近付いて、少し微笑みながら手でそつと頭を撫でた。

「亜弥、父親の桜井洋介がいるこの基地はお前の家だと思って暮らしても良い」

「隊長…!?!」

「…いいのですか…?」

「その前に、新しい衣服と健康診断をやってもらおう。桜井、連れて行け」

「はい、行こうか亜弥」

「うん」

「失礼します！」

洋介は亜弥を連れて隊長室から退出した。

「隊長、私はひかりさんの指導とあとで…隊長…？」

「…ふっ…私に妹ができた♪」

ロスマンが見た光景はラルは微笑みながら紅茶を飲んでいた。

洋介は亜弥に基地を案内する前に定子とジョゼ、菅野の元に行き、服装の調整を頼んだ。

「出来たわ」

「ふう、こんなもんだな!」

亜弥の服装は、定子と直枝がまだウィッチ候補生時代の赤いセーラー服。

そして、亜弥の希望でスカート（ベルト）とスパッツ風のスク水。そして洋介みたいな略帽を作った。

「似合っているぜ、亜弥!」

「うん亜弥ちゃん、似合っているよ!」

「本当に!? ジョゼお姉ちゃん! 直枝お姉ちゃん! どうもありがとう!」

「はあゝ亜弥ちゃん、可愛いく!!／／／」

「ぶはっ!」

定子は亜弥に強く抱き締めた。

「ああつ！もうつ亜弥ちゃん！小さいです！可愛いです！たまりませんっ！」

定子は亜弥に抱き着いて幸せそうな顔をしていた。そして洋介は小声でジョゼと直枝に話した。

「なあ管野、ジョゼ…定子のあれは…？」

「ああ、あれは下原の病気だ…」

「そうそう、定ちゃんのくせなの…」

「（やれやれ…頭が痛いゼヨ…）」

洋介は飽きれつつ、定子の行動は「小さくてカワイイもの」に目がなく、抱きつくく

せがあった。

直枝からの聞いた話しでは直枝とロスマンが定子に抱きつかれた犠牲者だった。

そして暫くして定子は正氣に戻り、亜弥は開放された。そして定子はジョゼと任務に戻った。

「じゃあね、亜弥ちゃん」

「う…うん…定子さん、ジョゼお姉ちゃん！」

「はわあゝ可愛いゝ／／／」

「はい、定ちゃん。今は任務に戻りましょうねゝ！桜井さん、あとはよろしくお願いします。」

「あ、ああ…行こうか、亜弥」

「うん、お父さん」

再発した定子はジヨゼに羽交い締めを受けながらその場を離れ、洋介は亜弥に502基地を案内した。

ミーティングルームや食堂、そして格納庫に行くとロスマンがひかりを指導を行い、サーシヤはニパに説教と正座、ユニットの整備を行っていた。

頭を怪我したニパは固有魔法は超回復で回復。

サーシヤの固有魔法は映像記憶の能力でニパのユニットを整備していた。

亜弥は好奇心旺盛で、ニパとサーシヤに興味を示して近づき見物した。

「ニパお姉ちゃん、サーシヤお姉ちゃん。凄いウィッチだなあ」

「あははは」

亜弥に褒められたニパは嬉しく笑っていた。

だが、サーシヤは亜弥に対して目を細くして睨んだ。

「亜弥ちゃん、ウィッチになった娘は良いことばかりではないのよ…」

「わたしはウィッチになったことは後悔していません。逆になったことはうれしいかったですよ亜弥ちゃん」

「そうね、中には複雑な心を持つウィッチもありますがサーシャさん、戦闘隊長であるあなたの力は、出来れば修理以外で活用して欲しいものね」

「すみません…」

ロスマンが彼女に戦闘隊長として指摘、注意を受けてサーシャは複雑な気持ちであった。

その頃ペテルブルグの市街、北東部にある監視施設が砲撃、破壊された。ブザーが鳴り、ラルの指示でニパを除く動けるウィッチとウィザードが出撃した。

『『状況は?』』

「目撃した兵によると、砲撃は一発目ペテルブルグ外周に撃ち込まれたと思います」

「くそっ！街の近くにまで来やがったか！」

直枝が怒りを顕にしていた。

ペテルブルグの絶対防衛線のラドガ湖が凍結した影響でネウロイの侵入を許していたのであった。

ラルはサーシャに戦闘の指揮を委ねることになった。

「……これより手分けして周辺区域の探索を始めます！ラドガ湖方面を重点的に探ってください！」

「「了解!!」」

その頃、基地の格納庫に残されたニパは

「……サーシャさん……私はいつまでこうしてればいいの……？……し……痺れ………」

正座で足が纏れ倒れた時、ニパのユニットのカバーが開いた。

「あ……あれ……？」

「ニパお姉ちゃん………お姉ちゃんのユニットのカバーに……文字……？」

502基地のウィッチたちは目を拵えながらペテルブルグ郊外上空を探索。
洋介と定子、ジョゼの班はネウロイの影すら見当たらなかった。

「『こちら桜井、下原、ジョゼ班。ポイントA異常無し！』」

「『ポイントB、異常無いぜ！』」

「『了解、帰投して下さい。』」

「『えっ!? まだネウロイを見つけて無いですよ！』」

「『ネウロイ探索は、これより陸上ウィッチ部隊へ引き継ぎます。』ロスマンさん、雁刈さ

んを先に戻って下さい。私、は最後にもうひと回りしていきます。」

「了解、戻りますよひかりさん！」

「あつ！はい！」

サーシャを除く、502ウィッチたちは基地に帰投した。

洋介班―

「定子、何かあったか…？」

「いえ、なにも……」

「そうか、…僕の波導にも異常はない…定子、ジョゼ。基地に帰投する！」

「はい！」

夕暮れ、ネウロイの再攻撃により貯蔵庫が破壊された。

502基地 会議室

「ちつ……監視所の次は貯蔵庫か……」

直枝は苦虫を噛んで惜しんでいた。

「物資が不足気味な時に貯蔵庫がやられたのは痛いな」

「すいません…私が油断したばかりに、ネウロイを獲り逃がしました…」

「失敗は誰にでもありますよ。ははは！」

そう、サーシャが単独行動の時に砲台型ネウロイを目撃、攻撃時に雪原の中へ見失ったのであった。

彼女が悔やむ時にニパが励ました。

「今回も、撃たれたのは一発のみ。ペテルブルグから、８８キロ地点の雪原に潜んでの長距離ピンポイント砲撃です。」

「驚いた。こいつじゃ一流の砲撃手だね」

ロスマンの説明にクルピンスキーが言う。

洋介も今回ばかりはクルピンスキーの言葉に同調した。

「全くだ。んでもって、狙っている位置は全て重要施設…まるで観測でもしているみたいだな…（沖田さんと幸吉の零観みたいに）」

「いかにネウロイであろうとも、これほどの長距離からピンポイントで直撃させることは不可能です。ですが…」

そう言って、今度はラルが口を開く。

「観測班から、砲撃前標的となった施設から微弱な電波が発信されたという報告が上
がってきた」

「えっ？」

「どういうことですか？」

ラルの言葉にどういうことか分からず定子が聞いた。

「つまり、砲撃を誘導するマーカの役目を果たすネウロイがいるという事よ」

「じゃあ街の中に…その、ネウロイが？」

「そうとしか考えられないな、しかしネウロイも、知恵を持った戦術を考えたことだ…」

ロスマンの説明を聞きジョゼがまさかという風に聞くが、洋介が代表して言い、他の

全員が黙っているためそれは肯定とみなされた。

「そこで部隊を二つに分ける。エディータ・クルピンスキー・管野・下原・ジヨゼは砲撃ネウロイを搜索し、発見次第撃破」

そしてラルが今回の撃退にウィッチ達を分散してそれぞれ各個撃破する作戦に出た。

「サーシャ・桜井・ニパ・雁淵は街に侵入したマーカーネウロイを発見し、こちらも撃破せよ」

そして洋介は第二班に選ばれた。

「二人はオラーシャとスオムス出身だ、土地勘があるだろう」

「でも、私は南部の生まれでこの街のことは…」

「まあ、お前ならなんとかなるだろう」

「そんな他人事みたいに…」

ラルの言葉にサーシャは気を落とす。洋介も流星にラルがそんな他人事のように言うので思わず肩を落とした。

「私がついてますよサーシャさん！一緒に頑張りましょう！」

「ええ…」

ニパがサーシャに向けて励ましの言葉を言うが、サーシャとしては気が気では無く、洋介も「ニパがついてるって言ってもなんか不安なんだよな…」と思ったのだった。余談だが、定子は洋介との班と外されたことを残念そうな顔をしていた。

翌日、二手に分かれて基地を出発し、洋介達マークーネウロイ撃退班はペテルブルクを飛行していた。

「いやあ……ラル隊長はああいつてたけど、街には小さい頃に一度買ひ物に來たぐらいで、本当は土地勘とかあんまりないんだよね」

と、自信なさそうに言うニパに洋介は内心大丈夫かと思う。

「へー、何買ったんで……うわあ！」

と、よそ見をしながら飛行していたひかりは、目の前に建物の尖塔が迫り、慌てて回避をしたひかりはバランスを崩す。

「大丈夫ひかり？」

「なんとか……」

「はあ……」

「余所見をして墜落するなよ…」

二パが心配して駆け寄り、サーシャと洋介はそんな危なっかしい動きのひかりを見て互いに心配になる。

その時、ひかりはサーシャに話しかける。

「あの、サーシャさん！」

「はい？」

「サーシャさんはこの街に詳しいんですか？」

ひかりは二パの言葉を聞いてからサーシャがこの街に詳しいのか気になり質問した。しかしサーシャの答えはひかりの思いにあまり期待できるものでは無かった。

「昨日も言ったけど、私は南部の生まれだから…この街には祖母が疎開する前に住んでいたらしいけど…」

「じゃあ大事な街ですね！」

「え？」

サーシャの説明にニパが割り込んで言う。

「頑張ってネウロイから守らなきゃ！」

「…どうせ無人なのだから、街を防衛する意味はありません」

しかし、ニパの言葉に対してサーシャの言葉は冷たかった。

「え？でもおばあちゃんの家が…」

「私自身何の思いありません。そもそも、この街に祖母を訪ねたことなど、一度もないのだから…」

「サーシャさん…」

サーシャの言葉にニパはショックを受ける。

「無人の街を守るよりも、ネウロイを倒すことこそウィッチの責務です」

「そ、そんな…」

「くれぐれもつまらないことに気を取られ、直したばかりのユニットをまた壊さないでくださいね」

「はい…」

サーシャのきつい言葉にニパは黙ってしまう。

しかし、今まで黙って聞いていた洋介が口を開いた。

「…街を守るのも大切な事だと思いますよ大尉」

「えっ？」

突然の言葉に思わず驚き洋介を見るサーシャ。

横にいたニパとひかりも洋介の方を見ると、洋介は真剣な眼差しをしながら下の街を見ている。

「疎開している人達が無事に戻ってくるようにネウロイから守り、そして街を解放する。ウィッチの大切な役目だと俺は思うぞ？」

洋介の真顔の言葉に全員が黙ったままになる。

彼の世界の故郷である神戸も、水災害で両親が亡くなり、戦時の空襲で焼かれた。

しかし、その沈黙はあつという間に破られた。突然、ラルの言葉がインカムに流れる。

『第二貯蔵庫付近より、謎の電波の発信を観測班がとらえた。至急向かってくれ』

「了解！」

ラルが無線で緊急電を伝える。その言葉に全員が表情を引き締め、そして急行した。洋介達が到着したときには、第二貯蔵庫は滅茶苦茶に破壊されていた。砲撃ネウロイの攻撃によるものだ。

「間に合わなかった…」

「そんな…!」

ニパとひかりはネウロイの攻撃阻止が間に合わなかったことにショックを受ける。

「第一斑、砲撃ネウロイは発見できたか!？」

『駄目です、見つかりません!』

「散開して!まだ近くにマーカーネウロイが居るかもしれない!」

『了解！』

洋介は砲撃ネウロイ攻撃班に無線を飛ばすが、ネウロイの位置を特定できなかった。サーシャはまだネウロイが離脱していないと考え第二班の散開を命令する。

そして洋介たちは散開する。

「くそ……何処に居る……つて！」

と、低速で空中停止をしていたニパがよそ見飛行をして何かにぶつかる。

「痛てて……もう、ついてないな……」

そう言いながらニパは自分のぶつかった銅像を見る。その時だった。

突然、銅像は形をぐにやりと変形をさせ、そして形を変形、ついには黒と赤色だけになる。

「いた！化けてた！」

ニパはそのネウロイに発砲しながら報告をする。それを聞き洋介達もネウロイの姿を確認した。

「擬態能力を持つネウロイ!？」

「化けたネウロイだと!？」

「追います！続いて！」

サーシャの指示で逃げるネウロイの追走劇が始まった。

ネウロイはペテルブルクの街中を飛行、その行動は高速で離脱したと思ったら突然路地に入ったりと、不規則な動きをしていく。

サーシャは先頭に立ちネウロイを追う。

それに続いて洋介、しかしその後ろをついてきていたニパとひかりは、突然のきつい

軌道に付いていけず、店の看板や道に置かれていた木箱に激突してしまう。

「もう！何してるの！」

サーシャは後ろを見ながら二人に注意をする。

対するサーシャは後ろを向いた状態でも激突する事無く華麗に飛行する。流石にその芸当は洋介でも厳しく、彼は後ろを一瞬見ただけであり、声を掛ける余裕はない。尤も、彼はネウロイの方に必至なだけもある。

その後もネウロイとの追いかっちは続く。サーシャと洋介が機関銃で銃撃をするが、ネウロイはそれを狭いペテルブルクの道ですいすいと回避をする。ネウロイの方は自身の攻撃手段が無いのか、機関銃の攻撃に対して反撃してこない。

しかし、その動きは徐々に激しくなってくる。ネウロイは狭い路地をまるで隙間を縫うように移動していく。その動きに先頭で追いかけるサーシャは見失うことなくついていけるが、サーシャの後ろをついてきていた洋介、ついにネウロイの位置を把握できなくなってしまう、サーシャが行く道についていくのでやっとなってくる。

「くそっ……サーシャさん、こっちはこれ以上追跡できん！上からネウロイを確認します

！」

「わかりました！」

洋介はサーシャのように迷わず移動できないと判断をし、街を上から見る形で追跡することにした。

洋介は自身が上から観測する形で見ようと思い街の上に上昇し、街を見下ろす洋介。しかし彼はここで判断を失敗したことを知る。

「よしっ…なにっ!？」

最初こそ大通りのような広い場所を飛行していた洋介だが、ネウロイを追いかけいく内に狭い路地に入ってしまったため、上空から確認すると建物の影に隠れて道はほとんど見えなかった。

おまけに周辺の建物は高さが同じの物が密集して並んでいるため、場所を把握しようにも困難になってしまった。

その結果、上空から波導で探すつもりが、ネウロイを感じても建物が邪魔になる結果

になり、洋介は後悔した。

「(くそっ…建物がこんなに密集して迷路みたいだ、ネウロイを感じても建物が邪魔だ…厚木隊長の手腕と沖田さんと幸吉の能力があれば…)」

一方、唯一追跡していたサーシャはマーカーネウロイの動きに追いつて行っていた。

そしてサーシャはネウロイが次に移動するであろう一に先回りすることにした。

「(っ)っだー！」

そして一つの路地に迷いなく入った時、サーシャはある違和感に気づいた。

「…あれ？何で私、こんなに迷わず飛べるの？」

サーシャはそう思いながらも、正面に出会うネウロイに向けて発砲をする。それを受けてネウロイはすぐ脇にあった路地に入り、サーシャはそれに続いて路地に入る。

そして、サーシャは先ほどの違和感を更に感じることとなった。

「…えっ!？」

突然、自分の目の前に景色がフラッシュバックする。それは、小さい少女が今自身がネウロイを追いかけている道を走っている姿だった。そしてサーシャはその少女が誰なのかを知っていた。

そして、そのフラッシュバックした景色に気を取られてしまい、ついにサーシャもネウロイを逃してしまった。

サーシャは周辺をもう一度確認しネウロイを探すがその姿は無く、仕方なく高度を上げる。

そしてそのサーシャにひかりとニパ、洋介が駆け寄ってくる。

「サーシャさん!遅れてごめん!」

「すまないサーシャさん!上空からネウロイを追いかけるのを失敗した」

「ネウロイは!？」

ニパと洋介はそれぞれの謝罪の言葉を並べ、ひかりはネウロイが何処に行ったかを尋ねる。しかし、サーシャはそれよりも気になることがあった。

「私、この街を知っている…?」

サーシャのつぶやきを聞き、聞いていた三人は首をかしげたのだった。

「解析班によれば、砲弾はネウロイの体組織より生成されたもので、一日に三発が限界だと思われます」

「とりあえず、今日はもう安心か。とは言え、街に潜伏するマーカー役のネウロイが擬態するとは…また面倒だな」

隊長室内にロスマンの分析の言葉が報告され、ラルは厄介ごとだと言う。

あの後、ネウロイを発見することは出来ず、もう二発の砲弾を街に許してしまい、あえなく帰投しサーシャとロスマンは部隊長室に来ていた。

ラルはサーシャの表情が優れないのを見て声を掛ける。

「どうした？サーシャ」

「い、いえ。すみません、自分が仕留めてさえいれば…」

サーシャは自分がネウロイをしとめることができず街に続けて被害が出たことに、自分があの時に倒していれば、と後悔していた。

「まあ、そういう時もある。明日も頼むぞ」

しかしラルはそんなサーシャに責任を押し付けることなく、明日も頼むと励ましの言葉を述べた。その晩、サーシャはサウナの中、昼間に見た光景を考えていた。

「あの時のあれは…」

ネウロイを追いかけているときにフラッシュバックした景色。あれは自分の固有魔法で記録したものだと考え、サーシャは魔法を使う。

しかし、いくら思い出そうとしてもその景色は思い出すことは出来なかった。

「(…やつぱり、過去にあんな景色を記録した覚えはないわ。けど、なんで街のことをあんなにはつきり…?)」

サーシャは何故か疑問に思い考え——そして首を振った。

「何を考えてるの？街のことよりネウロイを倒すことの方が先決よ！」

そうやって、自分に暗示をかけてサウナを出る。

そしてサーシャは格納庫に入ると、そこに意外な人物が見えた。

「ニパさん、亜弥さん？どうしたのこんなところで？」

そうしてサーシャはニパと亜弥のところに行くと、二人は何故か狼狽える。

「サーシャお姉ちゃん！」

「それ、私のユニットでしょ？」

「なな、なんでもないよ？」

そう言うニパだが、サーシャは二人の向こう側に自分のユニットに書かれているあるものに目が行った。

「なつ、なにこの落書き!?!」

そこにはサーシャのユニットの整備開閉扉の内側に、謎の物が描かれていた。それは確かに落書きに見えるものだ。

「あの、これは…」

「亜弥さん、悪戯にも程があります! 確かにニパさんには厳しく当たることもありました…だからと言って、こんなこと!」

サーシャは悲しそうにニパに訴える。

ニパは懸命に弁解をしようとする。

「待ってよ！違うんだ、これは…」

「私だって別に好きで厳しくしているわけじゃないのに！でも、私は戦闘隊長だから皆のことを…」

「サーシャお姉ちゃん、これはニパお姉ちゃんの心ばかりのお礼です！」

「お礼？」

「亜弥の言う通り、それを分かっているから、ニパも恩返しをしたかったんだ」

サーシャはそんなニパに目に涙を浮かべながら言うその時だった。

サーシャとニパのいる位置と反対側のユニットの位置から声がし、二人は振り向く。

そこには、自分のユニットを手で整備している洋介の姿があった。尤も、ニパは最初から共にいたため分かっていたが、サーシャは洋介の存在に気づいていなかったため驚いたように見ていた。

「洋介さん……」

「桜井さん、どういふことです……?」

「二パは自分のユニットに、サーシャさんのお守りの言葉が書かれていたのを見て、自分もお返しにそこにテントウムシの絵を描いたんだ」

「て、テントウムシ?」

洋介にそう言われてサーシャは自分のユニットに描かれているテントウムシを見る。形は不格好ではあるが、背中に七つの黒丸に、足が六つ。言われてみればテントウムシの形をしている。

サーシャはそれを聞いて二人に聞いた。

「ほ、本当なの?」

「え？う、うん…」

ニパが返事をする横で、洋介が油まみれの手を手拭いで拭きながら説明し始めた。

「欧州でテントウムシは幸運を運んでくる縁起物、ニパは部隊のことを思ってくれているサーシャさんに幸運がやってくるようにとテントウムシをお返しで描いたのさ…まあ、ニパの絵心が無いのが誤解の原因だったがな」

「洋介さん、それは酷いよ！第一、最初から説明したらこんな誤解が生まれなかったのに！それに亜弥ちゃんのアイディアなんだから」

「な…何だつて…亜弥の！？いや、だってサーシャさんの存在に気づいてない様子だったもんで…」

洋介は説明の後に絵のことを言い、言われたニパはへこみながら反論するが、彼は愛娘である亜弥のアイディアと聞いて困惑する。

サーシャは洋介で自分の存在が無かったことに対するショックを受けへこんでいた。

そんな光景を見ながら、サーシャは涙を一つ、静かに零した。それは悲しいからでは無かった。部隊の皆に、自分の思いがしっかりと届き、そして逆に、自分のことを思ってくれている仲間がいるという嬉しきの表れだった。

「…バカ」

目の前でへこんでいる二人に向けて、サーシャは一言、そう呟いたのだった。

第20話 幸運と覚醒 後編

格納庫―

ニパとサーシャの関係が改善した後だった。

「…どうしたのひびき？…どこに行くのひびき？…ひびきっ!？」

亜弥は居座っているエゾオオカミのひびきを撫でている時、何かを察知したのか格納庫から飛び出し、基地から出て行き、暗闇へ溶け込んだ。

「どうしたんだ、亜弥!？」

ユニットを整備していた洋介は中断して、亜弥の元に駆けつけた。

「お父さん、…ひびきが…ひびきが出て行っちゃった……」

亜弥は泣きながら、洋介にしがみついた。

洋介は隊長であるラルに相談した。

「そうか、亜弥の友であるオオカミが…」

「はっ、私的なことですが…万が一擬似態するネウロイと遭遇したら、搜索の許可を下さない！」

「良いだろう、許可する」

「ありがとうございます！では、失礼しま…」

「待て、桜井」

「なんですか？ラル隊長…」

亜弥は、父親である洋介が戻るのを待っていたため、亜弥自ら隊長室に向かった。

「…お父さん、遅いなあ…なにしているんだろう…」

「なんですって!？」

「…っ!？」

洋介の言葉に驚き。扉が開いていたため、亜弥は隙間から覗いた。

「そんな馬鹿な…亜弥の…亜弥の体内にネウロイのコアが…」

そう、亜弥がこの基地で身体検査にて、レントゲン撮影で医師からの診断で心臓部にネウロイのコアを確認した。

「（…そんな…わたしの身体に…ネウロイのが…）」

亜弥は両手で口元を押さえて、後ろ向きでゆつくりと歩いた。

「隊長、亜弥を…俺の娘をどうするつもりだ、…この基地で処刑か、もしくはカールスラントの研究施設に移送するのか…あなたの判断次第で許さんぞ…」

洋介は殺気を出しながら、右手を拳銃のホルスターに近づけた。

「落ちて着け桜井。お前の娘を処刑はしない、無論、研究施設にも送らん」

ラルの瞳は曇り無く、真剣な眼であつた。

「…隊長…取り乱してすいません…」

「構わない。これだけは約束する、君の亜弥は絶対に犠牲にしない」

「……はっ、ありがとうございます！」

洋介が格納庫に戻ると亜弥の姿はなかった。

「……亜弥……まさか……!?!」

翌日、再び行われたマーカー型ネウロイと亜弥の搜索に出た洋介たち。
ロスマンが指揮する砲撃ネウロイ搜索組はネウロイはもちろん、亜弥の搜索を行っ
た。

「亜弥ちゃん!!」

「亜弥くん!!」

「亜弥く!!」

「亜弥ちゃん!!」

「亜弥ちゃん、どこー!?」

その中で定子は能力を全開して人一倍に探索した。

出撃前、格納庫―

「頼む定子、亜弥を探してくれ!僕と…亡き妻の…血の繋がった大事な家族だ…」

洋介は両手で定子の肩を握りしめ、涙ながら嘆願した。

定子は亜弥が眠っている時、洋介の以前にいた世界での経緯を知った。

神戸の水害で両親を亡くし、弟は陸軍に入隊して戦車部隊に配属。姉は従軍看護婦に従事。

戦争に突入して、弟はベルリンで戦死し、姉は沖縄で行方不明。

そして、前妻の雪も洋介の帰りを待ちながら亡くなった。

「…洋介さん、わかりました。必ず見つけます！…それに、わたしは洋介さんと亜弥ちゃんとの家族に迎えさせてください！」

「…わかった！…俺はウィザードとして二言は無い！」

洋介は定子の家族入りの条件を受け入れた。

ペテルブルグ市街地―

二つのチームに分かれ、ニパとひかりのペア、サーシャと洋介のペアで飛行していた。
ニパとひかりは共に海軍港周辺を飛行していた。

「今日は別行動なんですネ、ニパさん」

「うん。サーシャさんが街を記憶して、ネウロイが潜んでいるのを見破るんだって。洋介さんはサーシャさんの付き添い」

「えっ!?この街を全部ですか!」

ニパの説明を聞きひかりは思わず驚くが、ニパはまさかという反応をした。

「流石にそれは無いよ。次にネウロイが狙いそうな施設の周辺を記憶して、あぶり出さ
んだって」

「へえ」

ニパの説明を聞き関心するひかり。

だが、ニパは横を見ながらよそ見飛行をしてしまい正面に気づかず、先に気づいたひかりが慌ててニパの名前を呼ぶ。

「ニパさん前！」

「え？ぎゃー！」

しかしニパはその言葉に反応できず、正面に迫っていた銅像に激突した。

「ニパさん大丈夫ですか？」

「またかよ……えっ？」

ニパは自分の激突した銅像を確認し、そして不思議に思う。そこは建物の屋根より高い高度、本来ならこんな場所に銅像などありはしない

「こんなところに銅像……？」

そう思った次の瞬間、銅像の形がぐにやりと変形をする。

そして、昨日見たネウロイの形になった。

「わわああ!？」

二人は慌ててネウロイに機関銃を向けるが、ネウロイはバレたと知ると一目散に逃げ始め、弾をすいすいと避ける。

その様子は別行動中の洋介とサーシャにも届いた。

『マーカーネウロイ発見! 追跡中です!』

「なにっ?」

「位置は?」

『えっと、海軍港を北に…わあっ! ニパさんが頭からズズズって街灯に! ニパさんしっかりして—!!』

と、状況報告をするひかりがこんがらがったように言うが、同時に位置を報告してくれただけで場所は分かった。

「全くあの子ったら……ついているのやらないのやら……」

「とにかく追いかけましょう！今度こそネウロイの好きにはさせない!!」

そうして二人は報告のあった海軍港の方角に向かう。

すると、その道中に街灯にめり込んでいる二パを見つけ、さらに奥には木に絡まっているひかりが居た。

「何でそう絡むことができるんだ……」

「……っ！……あつ！あそこです！」

洋介は思わずその姿を呆れ見て言うが、ひかりはそんなことを構わずネウロイの方向を指す。

そこには銅像が一つ立っており、その手前にいびつな形をした像が立っており、間違

いなくネウロイの変形したものだ。

ネウロイは自分を見ている洋介達の方をチラリと見る。

「それで隠れたつもりか！」

「バレバレよ！」

洋介とサーシャが機関銃を撃つと、ネウロイはそそくさとその場から逃げる。

そしてそれを洋介とサーシャが追いかける。しかし、昨日と同じように段々と洋介は遅れが生じる。

「くそっ…戦闘機でこんなところ通ることなんて殆ど無いからな…（亜弥…無事でいてくれ…）」

しかしそれでも懸命に食らいつきながら亜弥の無事を祈る洋介。

その頃、ペテルブルクから88km離れたラドガ湖周辺地点で、亜弥はひびきを探しながら雪原の斜面で身を潜めていた。

「…ひびき…どこにいるの…寒いよ…お母さん、お父さん…」

「…ここにいたのね」

「っ!?!皆さん……」

ユニットの爆音を鳴らしながら5人のウィッチが空中停止した。

「…なんで…ここにいるのを……」

「定ちゃんの能力で探したのよ」

「…そうなんだ……」

ジョゼが説明するなか、亜弥は踞った。

「亜弥ちゃん、基地に帰りましょう。あなたのお父さんの桜井さんも探していますよ」

ロスマンが亜弥に手を差し伸べた

「…わたしを…殺すの…？」

「え…？」

「わたしを殺すの…!!…あなたたちは…ネウロイと言う化け物と戦い、退治する魔女、わたしの身体の中に…化け物の一部が……」

あの夜、亜弥は隊長室の前で体内にネウロイのコアが確認されたことに気付き、恐怖に怯え、ひびきを探しながら出て行った。

「そんなことが……」

亜弥の出来事でウィッチたちは蒼然。そして次の言葉を述べた。

「お願い……わたしを殺して……」

ウィッチたちは亜弥の言葉に驚愕した。

「亜弥くん、ボクたちの隊長はそんな馬鹿なことをしないよ」

「そうよ、亜弥ちゃん。あなたの体内にネウロイの一部が入っても守るわよ！」

クルピンスキーとロスマンが助言した時、亜弥は制服の懷から隠し持っていた短剣を

取り出した。

「…わたしはネウロイ…人類の天敵…いつそ自決を…」 パァン

亜弥が鞘から短剣を抜き、喉元を突き刺そうとした時、定子は地上に降りて彼女の頬をぶった。

「…亜弥ちゃんはネウロイじゃないわ…絶対に、死なせはしないわよ…」

「……………お母さん……………」

亜弥は定子を、亡き母である雪の幻影を見た。

すると、砲撃型ネウロイ搜索班はついにそのネウロイを発見した。

「砲撃型ネウロイ発見！」

「あれだけ砲撃を受けていれば、砲撃地点からある程度潜伏地点を絞り込めます」

管野がロスマンを見る。砲撃ネウロイの潜伏地点を割り出したのはロスマンだったのだ。

砲撃型ネウロイはあぶり出された腹いせに攻撃を開始する。

「さあ、仕留めますよ」

『了解!』

「あ…ああ…」

「下原さん、ジョゼさん! 亜弥ちゃんを連れて基地に!!」

「了解!!」

ロスマンの指示で定子が護衛をする形で、ジョゼが亜弥を抱きしめながら基地へ飛行しようとした時――

ヒュウウウ　　ドカアアン

「きゃっ!!」

砲撃型ネウロイが一発だけ定子たちに向けて砲撃、定子とジヨゼは衝撃によりバランスを崩し落下。

「つくう……」

ネウロイが油断していた定子に向けてビームを放った。

「しまった!」

「定ちゃん!」

「やめろーっ!!」

亜弥が定子の前に出て底おうとした。

「「下原」さんっ!!」

「「亜弥ちゃんっ!!」

ロスマンとクルピンスキー、直枝とジヨゼが腕を伸ばした時――

ウオオオオ――

「(ひびき…?)」

いなくなったはずのエゾオオカミのひびきが現れ、亜弥に体当たりをしたと同時に
ビームが着弾した。

「亜弥！下原ーっ！」

「…そ、そんな…下原さん、亜弥ちゃん…」

「…あ、あれは…!?」

直枝が叫ぶ前で、ロスマンとジョゼが涙ながらにしている時、噴煙が無くなると、ク
ルピンスキーが指を指した。

「……………これは……………!?!」

黒髪だった亜弥の髪が白銀となり、頭部と尻にひびきの耳と尻尾が生え、定子を庇いながらシールドを貼っていた。

「…あ…亜弥ちゃん？」

「シールドを貼っている！あなた……ウィッチの力が!？」

「……え？……ウィッチ？……あ…ああ…耳と尻尾……なんだこりゃー!？」

亜弥は頭部と尻に触手して確認しながら混乱に陥った。

「素質のある者が使い魔と契約することで魔法力を発揮することができる……」

「ロスマンさん。そうですね…あの狼は…亜弥ちゃんを守る為に付き添い、そして、庇られたことで使い魔になったのね」

「使い魔……？ひびきが……!？」

砲撃型ネウロイが移動をしながらウィッチたちを攻撃。

「ひっ…まだ、わたし達を狙っている！」

「シールドがあるならもう心配ないわね！」

ロスマンが接近して亜弥に助言した。

「……どうする気なの!？」

「人類とペテルブルグを守る為に、ネウロイと戦うのみよ。攻撃開始！」

「「了解!!」」

ロスマンの指揮により、ウィッチたちは砲撃型ネウロイを攻撃した。

「…凄い…これが…これがウィッチの闘い…」

亜弥の身体が硬直して、固唾を飲み込んだ。

5人のウィッチたちはネウロイに攻撃を集中していく内に弱点であるコアが露出した。

「コア発見っ!!」

「一気に決めてやるぜっー!!」

直枝が右手に魔法力を込めてシールドを展開、殴り込みをした時、砲撃型ネウロイのアンテナ部分が点滅、砲身をペテルブルグに向けて一髪放った。

「うわっ!？」

「しっしっしっしっ!!」

クルピンスキーが突撃銃でコアを狙い射撃、砲撃型ネウロイは撃破した。

「…やった…やった…!!」

亜弥はネウロイが撃破した時、驚愕した。それ以前にネウロイにマーキング、射撃を許してしまった。

定子は市街地搜索班に連絡した。

跳ばされた砲弾はサーシャ率いる市街地に潜むマークーネウロイを搜索、撃破した部隊に情報が届き、洋介とニパが目前に防ぎ、市街地を守った。

「…っ！…定子…なんだって…！…亜弥が…」

当然、洋介のインカムから定子の連絡があった。それは娘の亜弥がウィッチに覚醒したという知らせだった。

「…亜弥が…ウィッチに…ううつ…」

洋介は飛ばうにもユニットが損傷して飛行不能になった。すると、ひかりとサーシャが手を差し伸べた。

「基地に帰りましょう桜井さん。亜弥ちゃんが待つてますよ」

「そうですよ！わたしたちが支えて行きます。その目で亜弥ちゃんのウィッチの姿を」

「あつ、しかし……」

洋介は赤面して、帽子の鰐を掴み顔を隠した。

「二人の言う通りだよ、洋介さん！壊れたユニットじゃ基地に帰れないし、サーシャさんの街を救った英雄だよ。堂々すればいいよ」

「ニパ、……そうだな、……ひかり、サーシャさん。頼みます…」

「はい！」

洋介は二人のウィッチに支えられ、基地に帰投した。

そして、砲撃型ネウロイ及び亜弥を搜索していたウィッチたちも、亜弥は定子におぶさって帰投した。

基地、格納庫―

亜弥は自らウィッチの力を発動。ウィッチの特徴である頭部に耳と尻に尻尾を生やした。

「どう？お父さん！」

「……………」

その光景を目の当たりにした洋介は言葉を失った。

「お父さん…?」

「洋介さん、どうしたのですか?」

「あ…いや、…凄いが、確かにこれはエゾオオカミのひびきの耳と尻尾。髪が銀色に染まるとは…」

洋介は亜弥の頭部に触れながら、険しい顔付きになった。

「亜弥…ウィッチになったのは凄いことだが、前線だろうが後方支援で生死を別ける戦場に送られる。僕がラル隊長に扶桑、つまりこの世界の日本に送る手配を進言するから……」

「お父さん、わたしもペテルブルグに残ります！」

「……なんだって!？」

「わたしは……危険なことでも覚悟を決めました！もし、ウィッチになつたらこの世界の人たちを助けるために、守るためにウィッチたちと戦いたい!!……それに、わたしのような、家族を亡くした人たちを作りたくない！」

亜弥の言葉で洋介はハツとした。

あの大戦で母国がアメリカ軍の爆撃機B―29の空襲や、この世界でネウロイの戦闘で親が犠牲になり、焼け野原や国を失った市街地を彷徨く子供たちを目に焼き付けていた。

その光景を見て、自信も何も出来ず、無力であつたことを悔やんでいた。

亜弥の瞳は曇りなく、真剣な眼差しを、父親の洋介に送っていた。

「ウィッチの戦闘によるネウロイとの戦いはそんなに生易しくない。僕も、今日の戦い以前何度も死にかけた！あの戦争でもだ！」

「…洋介さん…」

側にいた定子は心配しながら洋介の手を握った。

「そこまで真剣なら父さんは反対しない…正規のウィッチになりたいなら、ロスマン先生の指導を受けろ！」

「その通りだ」

洋介が歯を噛み締めた時、ラルが格納庫に赴いた。

「ラル隊長！」

「ラルさん……」

「亜弥、君がウィッチに覚醒した報告はロスマン先生から聞いている」

「…先生から…ですか？」

「先生の指導は厳しい、それでもいいんだな亜弥」

「はいっ!!」

「そうか、…なら、戦いたいなら強くなり、生きろ！」

「はい！桜井亜弥、ウィッチになるために頑張ります!!」

「(雪…)」

亜弥の瞳は狼の如く真剣な表情になり、洋介の視点では、1942年末、戦時の呉で再会した雪に似ていた。

「桜井亜弥、私と同じ狼の使い魔同士のウィッチだ。よろしくな」

「はいっ！」

ラルは笑みを浮かべ、亜弥と握手した。

その後、再びレントゲンを撮り、亜弥の体内にネウロイのコアは確認されなかったが、まだネウロイの副作用が残っていた。使用するのはまた後の事。

この時点で弱冠9歳、扶桑の年少ウィッチが第502統合戦闘航空団に居座った。

第21話 戦場のメリーサトウルヌ

1944年、12月下旬

「ううつ、寒みい……ペテルザヴオーツク以来、身体が堪えるなあ……」

洋介は約2年半、年がら年中日が照らす暑い南方の最前線ラバウルとトラック諸島、フィリピンでアメリカ軍と戦闘を繰り返しながら暮らしていたため、寒さに慣れていなかった。外套を着用、軍刀鷹狼を帯刀して外に出た。

「川が凍結してる……流石は北の地だなあ……。ん……亜弥……ひかり、ニパ、管野か」

桜井洋介の娘、桜井亜弥は第502統合戦闘航空団に配属、基地所属のウィッチたちの妹分になり。エディータ・ロスマン曹長の指導により、ひかりと共に日々指導を受けていた。

ストライカーユニットに関しては、ユニットには数に限り、洋介が非番の時に彼の愛機零戦64型ユニットを使用して練習をしていた。

ペテルブルグ基地付近の凍結した川にて亜弥、ひかり、ニパ、直枝がジャンケンして、魔法力を発動しながら橇を押しながら滑り楽しんでた。

「凍結した川で滑りながら遊んでいるのか、楽しそうだなあ」

みんなが楽しんでいる時、亜弥の遊ぶ光景を見て微笑んだ時、夜が明けた。

そう思っていた時だった。洋介は橇の進んでいる先に薄くなっている氷があるのに気づく。そして同時に、後ろで押していたひかりがこけてそりから離れてしまい、そりはブレーキを失った状態でその地点に突っ込んでいった。

そして案の定、薄い氷は三人乗りの橇の重さに耐えきれず崩壊し、三人は冷たいネヴァ川の中に落っこちて行ったのだった。

「あらら、大変だ」

割と呑気なことを言う洋介だった。

「風邪？」

「はい。応急処置はしておきましたので、明日には熱も下がると思います」

食堂の席、ジヨゼが説明する。

その後、洋介に引き上げられた3人とひかりはサウナに向かい暖を取ったものの、ひかりが熱を出してしまいサウナの中で倒れてしまった。そしてその後、ジヨゼの治療魔法による応急処置を受けて、現在に至るのだ。

「直ちゃんたち、ひかりちゃんを凍った川に落としたって？」

「落とされたのは俺らだ！」

クルピンスキーが茶化し、直枝は被害者は自分達だと主張する。

「あの…ウィッチってあんまり風邪とか引かないですよね…?」

「ん? そうなのか?」

ニパの言葉に洋介は初耳のため疑問に思う。しかし、その説明はロスマンとサーシャがした。

「ええ。ウィッチは魔法力で守られているから、怪我や病気に罹ることは珍しいわ」

「ただ、肉体的、精神的な疲労がたまると、ウィッチでも病気になることがあります」

「過労!？」

説明を聞きニパが驚く。そしてコップを両手で持ったまま下を向く。

「…やっぱり私が朝から連れ回したせいで…」

「それだけが理由じゃないわ。ひかりさんは元々魔法力が強くないの」

「最近、厳しい任務が続いたことが一番大きいと思います。もう少しこちらも考慮すべきでした」

「まあ、全ての新人がここまで最前線で戦ってきたんだ。どう足掻いても疲れない方がおかしい話さ。しかしながら、亜弥も共に湖に落ちたものの風邪を引かないとは……」

「うん、わたしとお母さんは北海道の小樽に暮らして、アイヌの子たちと遊びながら足を滑って川とかに落ちて慣れちゃった」

二パの言葉をロスマンはそれが一概に言えないと言い、サーシャと洋介はそうなった原因となる点を挙げた。

亜弥に関しては思った以上にウィッチの精神力が強く、洋介は心底驚いた。

「なに、風邪程度で済んでよかった。それに、亜弥も無事でよかった。」

そんな中、ラルは表情を変えずにそう言い、カップの中の紅茶を飲む。
しかし、ニパはそれでもひかりが心配であり、カップの中の液体に映る自分の姿を眺めていた。

「ひかり…」

その時、台所から定子が鍋を持って現れる。

「お食事、出来ましたよ」

そう言つて、鍋の中身をそれぞれの皿に分ける。

「下原ちゃん…なんだい、これ？」

クルピンスキーは定子が出した料理を見て質問をする。
他の隊員も、食べながらその料理を追求する。

「ニヨツキに似てるわね…これ、ちゃんと煮えてる？」

ロスマンが食べながら言う。

「ピエロギ…じゃないよね？」

「具の無いペリメニ？」

「うーん…？」

クルピンスキーとサーシャも言う。ジョゼはその料理を食べながら色々考えている。しかし、誰一人正解では無かった。

しかし、この答えは洋介と亜弥、直枝が知っていた。

「これ、すいとか？」

「すみません。…今ある食材では、これが精一杯で…」

定子は申し訳なさそうに言う。

洋介は戦争末期、亡き妻雪の手料理で一度だけ口にしており、亜弥も戦後の混乱で竹の子生活で何度も口にしていたのであった。

そして現在、502基地は深刻な食糧問題に立たされているようだ。

その後、ブリーフィングルームに熱を出したばかり以外のウィッチが集められた。

「現在、ムルマン港からの補給が立たれた上に、先日の砲撃で弾薬や燃料の集積所と、食料貯蔵庫も破壊されています」

「…完璧な陸の孤島。…このままじゃ基地機能が崩壊するな…」

ロスマンが前に立ち説明をし、それに対し洋介が現状が続いた先のこの基地の状況を冷静に分析する。

ラルはロスマンに聞く。

「スオムスからの援軍は？」

「頼んではいますが、あちらも残っている補給線は北海経由の陸路のみで余裕がないそうです」

「現在補給線奪還作戦を立案中ですが、とにかく食料の備蓄が足りません」

サーシャが付け加えるように説明する。それを聞き横に座っていたクルピンスキーが肩を落とす。

「しばらくはずつとあれ食べることになるのかー…えつと…チントン？」

「『』 すいとんだ 』」

クルピンスキーのミスに洋介と管野、亜弥がツツコむ。

「現状打開策はなし、補給が改善するまで待つしかないということか」

「明日は基地恒例のサトウルヌス祭が予定されていますが…？」

「（サトウルヌス…？）」

ラルがそう結論付ける中、ロスマンが聞く。洋介と亜弥が今の言葉で頭を傾げ、ラルの答えは決まっていた。

「今年の祭りは中止だな」

「えええええっ!？」

ラルの中止の言葉を聞き、驚いたのはなんとニパだった。ニパは立ち上がるが、周りがそんなニパを黙ってみているのを感じ、すぐに座る。

「あつ…いえ…なんでも、ありません…」

そうして小さくなるニパであった。

その後、洋介と亜弥の部屋にニパと直枝が訪れた。

丁度、洋介たちもサトウルヌス祭に関して聞きたかった。このウィツチの世界は、
2月下旬に始まるクリスマスであった。

「（クリスマスⅡサトウルヌス祭。やるのはフィリピンのマニラ以来だな）」

そして、亜弥も小学生になる前から母親の雪と戦没犠牲者会でよく楽しんだ。

「……介さん……洋介さん！」

「ああ、すまないニパ。隊長の許可は？」

ニパの説明では、502基地に転属した洋介と亜弥。風邪で寝込んだひかりの為に少しでもサトウルヌス祭を実行しようと宣言した。

但し、ラルの許可無しでの状況だった。

「ニパお姉ちゃん……わたしたちのために……」

「やろうとしても、物資がない状況で難しいぜ洋介。」

そう、この基地の物資が枯渇した状況でサトウルヌス祭を実行するのは困難であった。

「はあくそうだな…」

洋介はため息をつきながら、部屋の戸棚から三個の缶詰を亜弥に手渡した。

「お父さん？」

「洋介さん？」

「洋介？これは牛肉の缶詰じゃねえか!?隠し持ってたのか!」

「ははは…、ブリタニアで頂いたんだ。この缶詰を定子に渡してくれ。僕はちよつと、基地郊外に出掛けて食材を探して行きます。」

そう言って、洋介は軍刀と拳銃、格納庫で小銃を所持して森林地区へ向かった。

基地、食堂室―

缶詰を持った亜弥は定子とジョゼに渡した。

「ありがとう、亜弥ちゃん！」

「亜弥ちゃんありがとう。ニンジンだけの食材じゃサトウルヌスは出来なかったわ。」

ジョゼは亜弥を抱き締めた時、定子は膨れっ面になった。

「ずるいジョゼ、わたしも抱きしめたくて我慢しているのに」

「ジョゼお姉ちゃん、定子さん。わたしもお手伝いします。」

亜弥は定子たちと食材の配膳を手伝った。

「ジョゼお姉ちゃん！またつまみ食い？」

「むぐっ……」ほっほっ！これは味見だよ亜弥ちゃん……」

「お父さんがせっかくウィッチたちみんなにあげた缶詰を…これ以上食べたら、お父さんに言い付けてやる。」

亜弥がジョゼを指差した時、定子が抑えた。

「亜弥ちゃん、これはジョゼのやり方だから許してあげて。」

「うん…」

そう言って、彼女の配置に戻った。

「……ねえ、定子さん。」

「なに？」

「お父さんのこと、好きなの…？」

「…っ!?!／／／」

定子は亜弥の言葉に赤面した。洋介がこの基地に配属してから意識し、気づいているのは亜弥だけじゃなく、他のウィッチたちもわかつていた。

一方、森林地区で食材探しをしていた洋介はある投函された差出人不明の手紙の事について悩んでいた時―

「(大木田虎三郎…何者だ…) ん? あれはクルピンスキー。何やつてるんだろう」

そこには斧をもつて首に何にか板をぶら下げているクルピンスキーがいた。

「おつ、洋介くくん♪ いいとこに来たよ、松の木切るの手伝ってくれ」

「ん…松の木っていうと…」

「うん実はね…」

クルピンスキーの話によると、自称19歳の女狐にやられ、その罰としてサトウルヌス祭に使う松の木を探せるんだと、またロスマンにちよつかい出して制裁されていた。クルピンスキーが切り、洋介がそれを運ぶ形となった。クルピンスキーは呑気にワイン飲みながら歩いてる。

「ぐぬぬゝ重てえ…てクルピンスキーさんも手伝え…」

「そんなこと言わない。これもひかりちゃんの為なんだから。それに後でカワイ子ちゃんも紹介するし」

「いや、結構…／／／」

洋介は遠慮しがちしながら基地に帰投した。それと同時にロスマンに目撃された。

「ニセ伯爵さん。あなた仕事をほっぽて、男性に押し付けて何やってるのかしら？」

ロスマンに会った。笑ってるけど目は笑ってない顔であった。

「これは先生。洋介君が自主的にだね…」

「……本当なんですか？桜井中尉」

ロスマンがそう洋介に言う、そのことでクルピンスキーは心の中でヒヤヒヤした。

「ええ、私が松の木を運び、クルピンスキーさんはその代わり森でキノコや木の実集めなどの食糧調達とかを手伝ってもらってました」

「そ、そうなんだよ先生」

「では、その食料はどこにあるんですか？」

「ここにあります。キノコはまだありませんが…」

そう言い洋介は集めた食材をロスマンに譲渡した。

「二人とも、ご苦勞様」

洋介は松の木を格納庫前に設置すると――

「うわあ!?!」

格納庫内部での突然の出来事に悲鳴を上げる。そして、大きな土煙を上げた先に、
4
人の人影が見えた。

「ん……ニパと管野、サーシャさん、ひかり?」

「いやー、やつと運んでこれたよー。いっちばんでつかい奴採ってきたからねー」

「おい……主に運んでたのは俺だ……」

この大きな木を運んできたのはクルピンスキーと洋介。そしてクルピンスキーは入口の所にいるひかりに気づき大声を出す。

「あ！ひかりちゃん！見て見て〜♪」

「わあ！中尉だめー！」

「まっまで、言うな！」

ニパと洋介はクルピンスキーが声を掛けたのに気づき、慌てて止める。しかし、その努力空しくクルピンスキーは口を開いた。

「ひかりちゃんの為のツリーだよ」

「あちゃー…」

「中尉のバカ…」

「だからあれほど言ったのに…」

クルピンスキーがばらしてしまい直枝とニパ、洋介は頭を抱える。洋介に至っては、ひかりに遭っても「資材集め」と誤魔化すようにくぎを打っていたのに言ってしまったことで、両手を頭に抱えてうずくまっていた。

「私の…ための…ツリー…?」

「わああ、ほら、やっぱり寝てないと」

しかしひかりはその言葉を聞いた後、突然体をぐらりとしてしまい、慌ててニパが体を支えた。

その後、ニパはひかりを部屋に連れてベッドに寝かせた。

「私のためにお祭りですか?」

「うん。今中尉がロスマンさんと洋介さんと一緒においしいキノコを採りに行ってるから、楽しみにしてて」

ひかりにニパが説明する。

その後、クルピンスキーは注意が足りなかったことで情報漏洩をしたということで、洋介とロスマンと共に懲罰としてキノコ採りに行ったのだった。

それでしばらく3人で森の中を探してみるとキノコを発見した。

「おっ！美味しそうなキノコ発見！」

基地、ひかりの部屋―

「お祭り…私も大好きです」

ひかりもお祭りが好きであり、ニパの話聞いて楽しみにしている。

「祭りって、人と人との心を繋ぐ不思議な力があると思うんだ。だから、ひかりにもサトウルヌス祭を楽しんでもらいたくて」

「ありがとうございます…ニパさんって優しいんですね」

ひかりの言葉に、ニパは照れる。

「え、いや、そろそろキノコ届いてるかな！ちよつと見てくるね！」

そして、照れ隠しで部屋から出て行くニパ。そして、ニパが食堂に着いたとき、それは起きていた。

食堂のキッチンには、亜弥、ロスマン、定子、ジョゼの4人が居た。しかし、なぜか全員机にひれ伏していた。

ニパは様子がおかしいと感じ、全員に声を掛ける。

「ど、どうしたのみんな!？」

「このキノコを料理したら…」

ロスマンは懸命に何かをこらえながら、スープ皿に入っているものをニパに差しだ

す。ニパがそれを取り出し中身を見ると、びっくりしたように反応した。

「これってワライダケじゃん！なんでこんなのを…」

そう、スープの中に入っていたキノコはワライダケだったのだ。そして、食べている人全員が今、懸命に笑いをこらえていたのだ。

そして、事の成り行きを定子が話し始める。笑いをこらえながら。

「クルピンスキーさんが絶対おいしいって…くくつ」

「えー!？」

ニパが驚く中、後ろから声を掛けられる。

「ニパ君ごめん…せっかくの祭りを台無しにして…ぐっひゃっひゃっひゃっひゃっ！」

「ぶっ…あっはっはっはっはっはっ！」

そして謝罪をするクルピンスキーではあるが、笑い声が完全に台無しであり。笑い声に包まれて亜弥も我慢できずに笑い出した。

そして、不は連鎖する。突然、基地内に警報が鳴りだした。

『中型ネウロイ一機、基地に接近中！』

索敵兵により、ネウロイの接近を知らせる報告が来る。

「こんな時にネウロイだなんて！」

ニパはそう言いながら急いで格納庫に走る。

そしてニパは中にいる三人を呼ぶ。

「洋介さん！管野！サーシャさ……」

「だーっはっはっはっ!!」

「ふふ……ふふふふ……」

「あつはははははははは!!」

しかし、既に遅かった。スープを飲んでしまった直枝とサーシャ、そして洋介はワライダケの力に伏してしまっていた。

「こつちもかよ……」

『ニパ、聞こえるか』

「隊長!」

その時、ここでニパに希望が舞い降りる。なんと無線でラルがニパを呼んでいるではないか。

『出撃できるのはお前だけだ、頼んだぞ』

「了解！」

そしてニパはユニットを履きMG42機関銃を持つ。その時、後ろから声をする。

「ニパさーん！」

「ひかり!？」

なんとひかりが格納庫入り口から入り、そしてひかりはその足でユニットのところに向かっていた。

ニパはそれを見て静止させる。

「ワタに任せて！絶対に来ちゃだめだからね！上官の命令だよ！」

「えっ!?!…了解」

ひかりはニパに上官命令を言われてしまい立ち止まる。その時だった。ネウロイの攻撃で被弾、格納庫入り口に燃えるツリーが倒れてくる。

「あつ！ツリーが!!」

「くそっ！よくもー!!」

ひかりがツリーの惨状を見てショックを受ける中、ニパは塞がった格納庫入り口の隙間から離陸をし、そして上空のネウロイに向かう。

『敵の発見が遅れたのは、何らかの能力が原因だと思われる。十分に注意しろ』

「了解！隊長はまともでよかった…」

指示を受け返事をしたニパは、唯一無事だと思われるラルの様子に心強さを感じた。しかし、実際は違った。

「ぐっはっはっはっはっはっはっは！」

部隊長室内、ラルの笑い声が響き渡っていたのは当人以外知らなかったのだった。

基地上空でたった一人稼働可能のウィッチであるニパが中型ネウロイと交戦。

戦闘の最中、ネウロイの機影が忽然姿を消失。別の角度から確認してネウロイを発見。再交戦に突入、銃撃するも弾詰まりを起こし装弾不能に陥った。

「何でこんなについてないんだよ!!」

ひかりは集中攻撃を受けているニパの様子を心配し悲鳴を上げる。ニパは自分の幸運の無さがここで出たことに対して最悪だと思った。

万事休す、と思われた次の瞬間。攻撃を受けているニパの後方から、数発の大型弾頭が飛来する。そしてその弾頭はネウロイに向けて全弾命中した。

「えっ!?!」

「誰が撃ったの!？」

空に上がっているのはニパだけである。それなのに、後ろから攻撃が来たことに二人は驚いた。

そしてネウロイはその攻撃にコアを露出し、居てられなくなったのか、再び急旋回をする。

「コア、確認」

逃げるネウロイにニパのいる場所から違うところから弾丸が飛んでいき、ネウロイのコアに命中。そしてついに、ネウロイはその姿を光の破片に変えたのだった。

「一体、何が…?」

ニパは目の前の不思議な光景にただ呆然とする。その時、ニパは後ろから声を掛けられた。

「よー、ニパ」

ニパは呼ばれて振り返り――そして最大級の歓喜の顔をした。

「あー!! イツル!!」

「へへーん」

なんとそこに居たのは、ユニットと機関銃を持ち、サンタクロースの格好をしたエイラだった。

さらにそれだけでは無かった。

「敵、撃破確認。オールグリーン」

「サーニヤさん!」

「お久しぶりね、ニパさん」

エイラだけでなく、今度はサーニヤも現れるではないか。ユニットにフリーガーハマー、そして彼女もエイラと同じようにサンタクロースの格好をしていた。

「えっ？誰？」

ひかりは上空に居る人物が誰か知らずにポカンとする。

「エイラ！サーニヤ!!」

「501のリトヴャク中尉とユーティライネン少尉…」

「なんだ？あの派手な服」

すると、ひかりの後ろに先ほど格納庫に居た三人が出てくる。

洋介はエイラとサーニヤの姿を見て大きく目を開く。冷静に何故ここに居ると言っ

た様子で、直枝は赤い服装をしている二人が気になる様子で同じように見る。

「管野さん、サーシャさん、洋介さん。もうおかしくないんですか!？」

「おめー、喧嘩売ってんのか!？」

「私達、食べた量が少なかったから」

「はっはっはっはっは……しかし、エイラとサーニヤが来るとは思わなかった。しかし、久しいなあ」

ひかりがなかなかに失礼なことを言うので直枝はジト目でひかりを見る。そしてサーシャは原因を説明し、洋介はまだ笑いつつも、再びサーニヤたちを見る。

その後、502の格納庫内ではサーニャ達によって運ばれた物資を下ろしていた。

「わあ！ハムです！」

「こっちはりんごジャムだ！」

下原とジョゼは補給物資の中に食料の姿を見つけて嬉しそうにする。

「こっちは弾薬に武器……よかった。これで基地の機能麻痺の心配は無くなったな……」

もう一つの箱の中身を見て洋介はホッとしたように息を吐く。

そんな中、ニパはある箱の中身を見て目を輝かす。

「あつ！ひかり見てー！」

ニパは横にいたひかりに箱の中身を見せる。すると、ひかりは目をキラキラさせてその中身を見た。

「わあー！」

そしてその後、格納庫内に大量のろうそくが並べられる。エイラとサーニヤの持つて

きてくれた補給の中にあつたろうそくを並べたのだ。

二パは横に立つひかりに聞く。

「どう？ひかり」

「すごくきれいです…」

ひかりは目の前の光景に心を奪われる。ひかりだけでなく、502の隊員たち全員がその光景を見ていた。

「先生もキノコ採ったのにさ…なんで僕だけ…」

と、格納庫の端っこでぼやく者がいた。首から下に看板を掛けたクルピンスキーだ。看板には『私は破壊活動をしました』と書かれており、洋介はその姿を見て「予科練とラバウル時代を思い出す」と、心の中で震えていたのだった。

「スオムス軍より、502基地への補給任務、完了しました」

サーニヤがラルに書類を渡す。ラルはそれを受け取った。

「確かに受領した」

「向こうも苦しいと聞いたけど……」

ロスマンは502だけでなくスオムス方面も補給がきつい状況であると聞いていたため、補給状況が気になりサーニヤに聞く。

「エイラ達スオムスのウィッチが、ニパさんを助けるんだってかき集めたんです」

しかし、サーニヤはこれがスオムスウィッチ達による厚い支援であると説明したため、周りもそれに納得した。

「助かりました。リトヴァク中尉、ユーティライネン少尉」

「いやー、そんな大したことはー」

サーシャに代表して礼を言われエイラは大したことじゃないと言う。しかし、その笑顔から感謝の言葉は届いた様子であった。

そして、補給によつて無事にサトウルヌス祭を開くことができた502は、テーブルに豪華な料理が並べられた。

「おい、雁淵」

「はい」

直枝がひかりを呼び出す。ひかりは何だろうと思い返事をすると、彼女の目の前に一つの人形が渡される。

「わあ…可愛い」

「マトリョーシカっていうオラーシャの人形よ」

サーシャが説明を加える。ひかりが受け取ったのはオラーシャ人形であるマトリョーシカである。

「お前にやる」

「ありがとうございます！」

「それ、真ん中から開くのよ」

直枝からもらい喜ぶひかり。そしてサーシャは、マトリョーシカの秘密をひかりに説明する。サーシャの説明通りにひかりが開くと、今度は中に一回り小さなマトリョーシカ人形が出てくる。

「わあ……！」

「まだ開くんだよ」

ニパがさらに説明を加える。そう、マトリョーシカ人形は開けると中に小さな人形が入っているのだ。

そしてその言葉の通りひかりは人形をさらに開けると、今度は中から直枝の木彫りの人形が出てきた。

「わぁ…！ 可愛いブタ！」

「犬だ…」

「お父さん！」

「亜弥、これは…？」

洋介はその光景で笑みを浮かべた時、亜弥は洋介に手のひらサイズの紙包みを差し出した。

「わたしからのプレゼントです。」

「亜弥、こ…これは？」

洋介が包みを開けると、それは日本海軍少佐の階級の襟章だ。

洋介は悟った。あの占守島の戦いにて行方不明になった後、二階級特進に昇進した。

「どう？お父さん？」

「ありがとう、亜弥。しかしながら、僕が少佐の階級を受け取ったら軍規違反になる
ゼヨ」

「あ……そんな……」

その言葉で亜弥は落ち込んだ。

「でも、僕は亜弥からのプレゼントは凄く嬉しいぞ」

「お父さん！」

その言葉で表情は明るくなった。

そんな中、クルピンスキーはこそそこそと隠れながら四つん這いで歩いていく。

「匂う…匂うぞ…」

そしてクルピンスキーは輸送ソリで送られた物資の木箱のところに行く。

「僕を呼んでるこの香り…おっ！」

そしてクルピンスキーは木箱の中をあさると、その中から一本の瓶を取り出した。

「君かー！シャンパン君！」

クルピンスキーは中から出てきたシャンパンを見て喜ぶが、すぐさまそのシャンパンに別の手が伸びる。

「ああ、隊長!？」

「これを振つたら楽しくなるかな？」

「なると思います」

シャンパンを手にとったラルはロスマンに聞くと、ロスマンは賛同する。すると、ラルはシャンパンを横に振り始めた。

「ああー……」

クルピンスキーがその姿を見て悲痛な声を上げるが、ラルはそのままシャンパンのコルクを指で弾いた。すると中からシャンパンが噴水のように舞い上がる。

シャンパンの中身は格納庫内の蠟燭の光を反射しキラキラと輝く。

「わあ……綺麗……」

「うん！」

「せっかくのシャンパンがあ…」

ひかりたちがその光景に見とれ、クルピンスキーはシャンパンが飲めずに嘆く。
そんな中、洋介とサーニヤ、エイラの三人は少し離れたところでその様子を見ていた。

「ちよつと心配してたんだけどナー」

「ニパさんのこと？」

「うん。あいつ502で浮いてんじゃないかって…」

「そんなことは無いぞ、ほら…」

そう言って洋介は二人の方を見る。それに続いてサーニヤとエイラがニパを見ると、ニパはひかりたちといっしょに笑っていた。

「な？」

「心配ないみたいね」

「うん。心配して損した。ん…？」

洋介とサーニャに言われ、安心したようすのエイラ。そして、二人は洋介の背後に隠れる少女の亜弥に気づいた。

「あら、こんにちは。」

「なあ洋介中尉…アンタのうしろに隠れている少女は誰なんだ？」

「ああ、初対面だったな。この娘は亜弥、僕の実の娘だ。」

「え…ええ…!?」

エイラとサーニヤは驚いた。洋介の説明では、彼の戦時から9年後、例のネウロイ極秘計画の影響でウィッチの世界に彷徨い、そして、使い魔と契約してウィッチに覚醒した。

「そうだったんだ…」

「そうだったんですね。えつと…よろしくね亜弥ちゃん」

「はい！よろしく願います。お二人はお父さんから聞いています。」

亜弥はエイラとサーニヤに打ち解け、その光景を見た洋介は微笑んだ。

「ふふつ、姉妹みたいだ…あ、そうだ…」

そう実感している時、あることを思いだした。

「サーニヤ、君に手紙がある」

「手紙ですか…?」

「もしかして、アンタがサーニヤにラブレターか…!?」

洋介がサーニヤに手紙を渡そうとした時、エイラが洋介にドス黒いオーラを放ち、睨んでいた。

「違う違う…この基地の俺に宛てられた手紙だが、もう一つの内容がサーニヤに渡してくれとの内容だ…」

「……」

「サーニヤ…?」

サーニヤは手紙に書かれた内容を読むと、両目から涙を流した。

「お父さま…お母さま…よかった…ありがとうございます……」

彼女は手紙と同封された写真を手にしていた。

洋介は格納庫から出て、寒くありつつも夜空を見上げた。

「…雪…勇介…滯さん…志帆姉さん…家族でクリスマスをしたかったな…」

「洋介さん！」

「ん？定子か…なにしに…ムグツ…／／／」

定子は洋介の略帽を取って、口を重ねた。

「／／…定子っ！……」

「洋介さん…あの…すみません…突然こんな事を…／／／」

洋介は一旦、彼女と顔の距離から離れた。

「あの、定子…メリーサトウルヌス…／／／」

「…洋介さん…／／／」

そして、洋介も定子と熱い口付けを交わしながら、思考が停止した。そして、それに気づいた502のメンバーは全員、格納庫の扉からその光景を見て驚愕の顔をする。

「ああー！／／／」

第22話 幻光の観客席

12月26日 ペテルブルグ 502基地

昨日のサトウルヌス祭が一夜明け、現地のウィザードの桜井洋介は、娘であり、ウィツチの桜井亜弥に彼の零式64型ストライカーユニットを履かせ、試験飛行をさせていた

基地 上空

『「左の旋回が大きい!!もつと小さく旋回しろ!!」』

「はっはい!!」

亜弥はインカムで地上で指示を出す洋介の教育を受けていた。

「これが空なんだね……お父さん……」

亜弥は洋介の厳しい指示を受けつつも、笑顔になって飛行していた。

地上

「ふん、亜弥め……笑顔になるのも今のうちだ……ネウロイとの実戦になれば、死となりあわせだぞ……基地の周りを10周!!」

洋介が言いつつも、口元は笑みを浮かべていた。

「亜弥ちゃん、精が出ますね!」

声をした方向を、洋介が振り向くと定子が赴いていた。

「定子か…」

「洋介さん…亜弥ちゃんがウィッチとして、戦場に赴くことは反対ですか…？」

「…半々だな…あいつの持ち前の頑固さは、亡き妻に譲り受けている…それに、…君の頑固もな…／＼／＼」

「え…？」

「何でもない…」

「ねえ洋介さん、今言ったのはなんですか…!？」

「おっと、隊長に呼ばれたから隊長室に行かねば！定子、あとは亜弥を頼む…!」

「あつ…洋介さん、教えて…!」

洋介の呟いた言葉に反応した定子にせがまれ、洋介は隊長のラルに用事があるがために離脱、彼女は必要に迫り掛けた。

隊長室

「桜井、亜弥のユニットの操作はどうだ…？」

「わずかの日数ですが、ユニットを手足の様に操作しています」

「そうか、ウィッチに覚醒して目覚ましい報告だな」

洋介が亜弥に関して報告した時、ラルの顔は微笑ましかった。

「桜井さん、亜弥ちゃんのストライカーユニットの件ですが、亜弥ちゃんのはありませんよ…」

ロスマンがユニットの件で洋介は悩んだ表情を浮かべていた。

「う…それなんですよ…いくらウィッチがいても、ストライカーユニットが不足です」

亜弥が航空ウィッチになっても、肝心な専用ストライカーユニットがなかった。

洋介が頭を手で支えた時、デスクに置かれていた新聞記事を目に通した。

「ロスマン先生、その記事は…？」

「ええ、これですか…？」

その記事の内容は、ネウロイから解放されたガリア共和国の首都パリにて凱旋勝利の発表だった。

今注目を浴びている『連盟空軍第72統合戦闘飛行隊兵站支援中隊航空魔法音楽隊』通称『ルミナスウィッチーズ』連盟空軍直轄の音楽隊であり、「歌と音楽」で人々の笑顔を守る部隊として設立された。

さまざまな理由で前線から離れざるをえなかった、戦いに向かないウィッチたちが活躍している。

音楽隊（Music Band）ではあるが、人員の編成上実際には器楽演奏は行わず歌唱・合唱を主とする歌唱部隊であると言える。

航空ウィッチが歌唱部隊員として所属していることを活かし、歌唱やダンスだけではなくアクロバット飛行による航空ショーも演目に加えた活動を特色としている（そのため、航空魔法音楽隊はその名の通り音楽隊だけでなくウィッチによる曲技飛行隊としての側面も持ち合わせている）。

9人のウィッチによる凱旋記念、歌唱コンサートだった。

「ガリアの記念コンサートか、いいなあ……」

「ですが桜井さん、出席するのは主に軍の上層部等ですよ」

「え……？　そうなんですネ……（ガリアにいる、ペリーヌとリーネ。見れたらいいな……）ん……」

ブリーフィングルーム

「へえ、これがルミナススイッチーズか」

「8月末に、扶桑の東京でコンサートしたらしいですよ！……わたしは佐世保の訓練で行けませんでしたけど……」

「ケツ…行つて見てないんかよ…」

「まあまあ直ちゃん、だけど可愛い娘ちゃんばかりでいいねえ♪」

「オラーシャの戦況で行けないけど、一目だけでもルミナススイッチーズを見てみたいな」

502のウィッチたちは新聞の写真を見て、ルミナスウィッチーズの話題でもちきりだった。

訓練を終え、休憩する亜弥は洋介に尋ねた。

「ねえ…お父さんはルミナスウィッチーズのレコードを持っているよね！」

「ああ、502に転属する前にルミナスメンバーのエレオノール・ジョヴァンナ・ガシヨン軍曹と広報特別番組収録で会った…」

「ええっ!? 洋介、ルミナスのウィッチに会ったのか!？」

「聞きたい聞きたい! どんな話しをしたのですか、洋介さん！」

直枝とジョゼが洋介の話に食い込んできた。

「まあまあ落ち着け、…しかし…彼女が俺に違和感なことを質問されたんだ…」

「違和感…?」

洋介がまだガリア共和国のパリに滞在時、廃墟と青空の元で、501部隊でガリアを解放したペリーヌ・クロステルマン中尉、リネット・ビショップ曹長。

世界初のウィザード、桜井洋介中尉と共に、ルミナスウィッチーズの一員のガリア人、エレオノール・ジョヴァンナ・ガシヨン軍曹ことエリーと広報番組の収録に出席。だが、エリーは洋介を目を丸く見て色々と質問をした。

「え…? 洋介さん、何を質問されたのですか?」

「それが…エリーさんと初対面だが、あなたはブリタニアにいるはずなのに、なんで…とか…名前が大木田虎三郎さんと呼ばれたんだ…」

「以前、洋介さんはルミナスウィッチーズと対面したことはないんですか…?」

「ああ、聞いた話によると、ルミナスさん方は3月に編成。そして俺は…」

「洋介さんは、4月にこの世界に…ブリタニアのドーバー海峡で飛来した…」

「不思議ダナ…それに、サーニャへの手紙も…」

サーニャとエイラが洋介に証言する。

そして、サーニャ宛の両親からの手紙の文章に、細かい内容が記載されていた。

『12月26日、ガリア共和国現地の日時より電波が発信されたのち、受信。そして、黒猫と白銀のオオカミと手を繋げ』

夕方 格納庫

「すまないなサーニャ、このペテルブルグ基地での夜間哨戒の任務を…」

「はい、大丈夫ですよ洋介さん。常に夜間の哨戒は大事な任務ですから」

「サーニヤ、わたしもついて…」

「大丈夫よエイラ、今夜は何かいいことがあるから」

「あの手紙か…？ だけどもりするナ…」

「サーニヤお姉ちゃん、わたしが作ったお弁当。持って行つてね」

「ありがとう、亜弥ちゃん」

そして、ユニットを履いたサーニヤは滑走路を離陸、単独で夕暮れの空へ飛んだ。

洋介は娘の亜弥とウィッチたちと夕食を摂り、終えたあとはネウロイの襲来のない長い夜が始まった。

洋介は軍刀鷹狼の手入れを施す時、亜弥は睡魔に襲われ、ウトウトしていた。

「…亜弥…寝てもいいんだぞ…」

「だ…大丈夫…サーニャお姉ちゃんが帰ってくるまで起きている…」

「オーイ亜弥…サーニャに手を出すナヨ…」

「これこれエイラ、まだ子供で俺の娘だ。野暮なことを咄くなよ」

「ウウ…」

エイラが亜弥に向けてうめき声を上げる時

「皆さ…ん、眠気覚ましのコーヒーです」

定子が炊場でコーヒーを淹れ、ウィッチたち一人一人に配った。

「ありがとう、下原」

「定ちゃん、ありがとう♪」

「ありがてえ〜下原♪」

「ありがとうございます、下原さん」

「どういたしまして。…洋介さんもうぞ」

「ああ、ありがとう定子」

「亜弥ちゃんにも、砂糖入りよ」

「あ…ありがとう…あれ!？」

コーヒを口にしようとした時、外から爆音が響いた。

「あつ、サーニヤガ帰ってきた…!」

エイラがそう言うのと、サーニヤが予定より早く帰還した。帰ってきたサーニヤは、魔導針を発動したままブリーフィングルームに赴いた。

「ねえ、みんな！これを聞いて下さい！」

「サーニヤ…？」

「え…？…これは…?!」

みんなが耳を傾けると、魔導針から音楽が流れていた。

「……これが…ガリアで歌う、ルミナスウィッチーズの!」

「いい歌だな〜♪」

サーニヤが受信する魔導針から、ガリア共和国で凱旋記念で歌うルミナスウィッチーズの歌唱だった。

洋介やウィッチたちが静かに聞いていると、亜弥は魔法力を発動させ、サーニヤの手を繋いだ。

「なっ!!なんだこりゃ!!」

「ウソでしょ!!」

「これは…ガリアの首都…パリの凱旋門!」

ブリーフィングルームにいた13人の背景が、パリのシンボルである凱旋門の前で、観客たちの座席に居座っていた。

白き衣装を身につけた9人のルミナスウィッチーズが横列の編隊を組み、倒壊したパリのシンボルの一つ、エッフェル塔に向けて飛行し、赤、青、白の光りを放ちながら輝くガリア国旗を描き、エッフェル塔を成り立ちながらアクロバット飛行をした。

ガリア共和国の最高司令官、シリル・ド・ゴール将軍が拍手喝采した。

「これは…？」

「どういふことかな…私たちは、オラーシャのペテルブルグにいるはずなのに…？」

「まあ、どうだつていいじゃない♪歌う可愛いウィッチたちの観客で飲むブドウジュースも最高だよ♪」

「…あなたねえ…観客席で飲食は禁止よ…」

クルピンスキーがブドウジュースを飲む中、ロスマンが睨んみ、注意した。

二人のウィッチにせがまれて、リベリオンの軍服を着た指揮官がマイクの前に立った。

『えつ…えつと…私、航空魔法音楽隊のグレイス・メイトランド・スチュワード少佐です。本日は、ガリア解放記念式典に、及び私たちルミナスウィッチーズのステージをご覧頂き、誠にありがとうございます。以下略』

グレイス少佐の元にスポットライトが照らされ、彼女の美声による『永遠のよす処』を

歌っていた。

彼女の歌唱を終えると、赤きステージ衣装に着替えたルミナスウィッチーズが出揃った。

一人一人のウィッチが観客に向けて挨拶し、客席の観客たちも歓声を上げた。

センターにいたエリーは、右端のヴァーヅニア・ロバートソン軍曹と交代、リーダー各のアイラ・ペイヴィッキ・リンナマー少尉が宣告した。

『今夜出会えたこの奇跡を、一緒に楽しみましょう！』

ルミナスウィッチーズたちは横列で手を繋ぎ、歌を再開した。

『みんなの世界』

『歌を歌おう』

『flying Sky high』

ルミナスウィッチーズの歌うプログラムが終わり、コンサートが幕を閉じたと同時に、いつもの502基地のブリーフィングルームに居座っていた。

「いつものブリーフィングルーム…？」

「あの凱旋門は…夢…？」

「わたし達、集団幻覚になったんじゃ…？」

「信じられないな…」

「夢であることを、私は信じたいな…」

「隊長…？」

ラルは何処と無く気まずい顔をしていた。

凱旋門の観客席に503部隊、8人のウィッチも座っていた。

母国のカールスラント防衛戦までの戦友、副官のフーベルタ・フォン・ボニン少佐。隊長はオラーシャ軍、ブロニスラヴァ・F・サフォーノフ中佐。だが、彼女はラルの顔を見ての笑みには、怒りのオーラを感じた。

早朝の新聞に、ある記事が掲載された。

『怪奇、世界各地で発生した謎の通信障害。解放記念式典の一部が、ガリアを中心に世界で観測される怪現象が発生か……?』

「そこはどうあれ、楽しい一夜だったよ!」

「そうだね♪僕はあの娘たちのファンになっちゃったよ♪」

「そつちかよめえら!…まあそうだな。今までネウロイの戦いで歌を聞くのは、久しぶりだ…」

「そうね、歌を聞いて一時の安らぎを感じたわ」

ニパとクルピンスキー、直枝とサーシャは笑顔になった。

「さあ、本日もそれぞれの任務を始めましょう！」

「「はい!!」」

ロスマンの合図でウィッチたちは自らの行動に移った。

炊事場

定子とジョゼが調理していると、手伝う亜弥は口ずさみながら歌を歌っていた。

「赤い〜リン〜ゴに〜♪くちび〜るよ〜せ〜て〜♪」

「亜弥ちゃん、その歌はなんなの…？」

「うん…？えつとね…『リンゴの歌』わたしのお母さんが歌っていたの、昔の戦争が終わったあとに、ラジオで流れた歌と…」

「いい歌だね」

「…リンゴ…聞いていたら食べたくなっちゃう…」

ジョゼはリンゴの言葉を聞いて、口元から排水していた。

隊長室

ラルはサーニヤの夜間哨戒の報告を受けていた。

「リトヴァク中尉、昨夜の哨戒でネウロイが出現していなかったのは幸運だったな」

「いえ、それに他のナイトウィッチたちからの情報に関して、ネウロイの遭遇はありませ

んでした」

「不思議ですね…」

「もしかしたら、ルミナスウィッチーズの歌ならではのかもしれませんが…」

「桜井さん…」

「ふっ…そうかもしれんな…ん…？」

サーシャと洋介の言葉でラルが微笑んだ時、基地から歌声が聞こえた。

「（歌か…南洋のラバウルやトラック諸島…結婚式と千歳基地で仲間たちと歌いあったな…）」

洋介は、以前の世界にいた頃の懐かしく感じた。

1日の任務を終え、基地の塔の側に寄った洋介は、例の大木田虎三郎の手紙をポケットから取り出し、題名が『めぐりあい』、描かれていた歌詞を歌った。

「Believe! 人は悲しみ重ねて大人になるいま 寂しさに震えてる 愛しい人
の その哀しみを胸に抱いたままで Believe! 涙よ 海へ還れ
恋しくて つのる想い そら茜色に 染めてく」

第23話 番外編 ペテルブルグで一番長い日

まだ朝日も上がらず静かな雰囲気のパテルブルグ。502の基地の中は静かでみんな寝ていた。

そしてとある部屋―

「……………」

「……………うゝん……………」

洋介はハンモックで眠り、娘の亜弥はベッドで自然に起きた。実に平和な時間が流れている。

「……お父さん……」

亜弥が微笑んでいるとー

バタンっ！

いきなりドアが開きジョゼがモップを片手に入ってきた。

「うわっ!? ジョゼお姉ちゃん！」

「サトウルヌス祭の次は年末お掃除！年越しまであと1週間。基地中ピカピカにしちゃうんだから！」

「わっ！な、何だ!？」

熟睡していた洋介はジョゼの大声と入室に驚き、ハンモックから転げ落ちた。

「く痛てえ…」

「洋介さん、亜弥ちゃん。さあ、さっさと着替えて出てってください！」

ジョゼにそう言われ二人は着替える。

二人が着替えを終えて廊下に出ると、エイラとサーニヤがいた。彼女らはサトウルヌス祭から年末年始まで休暇を取ったので、502基地で過ごすことになった。

「おつ、サーニヤ、エイラ。おはよう。」

「お姉ちゃんたち、おはようございます。」

「洋介さん、亜弥ちゃん。おはようございます。」

「中尉、亜弥、おはよう。まったく502にも変な奴がいるんだな」

「ははは…」

二パとエイラが廊下を歩きながら話をする。

「ジョゼさんって普段は静かな人だけど。年末の大掃除だけはやる気が出すぎて人が変わっちゃうんだよ。」

「は〜勘弁してくれよ〜」

彼女はぼやいていた時、エイラが足を止め見えたものは

「サーニャ」

サーニャが窓の外を眺めていたのだった。

「サーニャ、何を見てるんだ？」

「エイラ…街を見ていたの」

彼女が見ていた先には今は誰もいないペテルブルグの街だった。

「あれ？サーニヤさんってペテルブルグに来たことあったっけ？」

「ううん、ただ大きいけどさみしい街。そう思っって」

サーニヤは悲しそうな目をして呟いた。

「まあ、みんな疎開しちゃって誰も住んでいないからね」

「でも、いつかきつとみんなこの街に戻ってこれるよね」

「サーニヤ…よしっ！ちよつと街に行ってみようか。」

「え？」

「誰もいないけどさ。オラーシャの街を散歩してみようぜ！…その二人つきりで…」

エイラはサーニヤを励ますため、ペテルブルグの街に行こうと誘ったのだが、ロスマンとラルがそこに来てスオムスの状況を詳しく聞きたいからといって、サーニヤは隊長室に行ってしまうのだった。それを見てエイラはがっかりするのだった。

一方そのころ洋介と亜弥は昨晚、川に網を設置して、この時間にカワエビを収穫していた。

「おおー♪獲れた獲れたー！」

「お父さーん！こんなに獲れたね♪」

「ああ、蕎麦とおせち料理の材料はバッチリだ。さて、基地に戻るぞ。」

基地 炊事場ー

「わああー、こんなに！洋介さん、亜弥ちゃん、ありがとうー♪」

定子は洋介に礼を言い、亜弥を抱きしめていた。

「…むぐぐ…」

「まだ糧食不足だが、せめて年末年始は楽しく…」

「うわーっ!!」

「ん…悲鳴か？」

洋介は気になり、自ら赴いたところは直枝の部屋。

ジョゼが実力行使に出て、直枝ごとベットを持ち上げて強引にどかす。そしてベットのあつた場所には小さな本があつた。

「…相変わらずだなジョゼ…ん？なんだ、これは？」

「ほら！こんなところに本が落ちてる」

「うわっ！ちよつと待て！」

洋介は気になり、ジョゼは本を拾おうとしたが直枝は慌てて止めようとするが

「あら？」

「あゝ止め……」

たが、すでに遅かった

『小公女』…管野さんもこんなかわいい本読むんだ♪」

「ほう、意外だな」

「うぎゃー！！！！」

知られたくない秘密を知られてしまい直枝は顔を真っ赤にして叫ぶのだった。

翌日

「昨日は邪魔が入ったけど今日こそは」

昨日サーニヤを誘えなかったエイラはもう一度サーニヤを誘おうと部屋に向かったが

「やあ、エイラ君。ちょうどよかった。サーニヤちゃんの部屋教えてほしんだけど」
花束を片手にクルピンスキーが現れた。

「お前、サーニヤ二なんか用か？」

エイラは警戒した目でクルピンスキーを見る。するとクルピンスキーは妖艶な笑み
で

「かわいい子をデートに誘うのに理由があるのかい？」

「サーニャに妙な色目使うな!!」

エイラはクルピンスキーに言うが、クルピンスキーはエイラに近づきクイツとエイラの顎を持ち上げた。

「なら、エイラ君に使うのならいいのかな？」

耳元でそうささやくクルピンスキーに、エイラは顔が赤くなった。

「お、おおおお前って見境ないのかよ!!」

クルピンスキーから離れ指をさして突っ込む。しかしクルピンスキーはふつと笑い
そしてー

「無いね！」

どや顔で言う。この時エイラは感じたこいつは危険だと

「逃げろーサーニャ！危ないやつがいるぞ!!」

エイラはサーニャの部屋へと走るが

「ははは！甘いねエイラ君。危ない恋こそ燃えるものだよく！サーニャちゃん♪」

「させるかー!!」

クルピンスキーはもうダッシュでエイラを追いかける。エイラも追いつかれないように全力で走り、サーニャの部屋へと向かった。

「ん？あれはエイラとクルピンスキーか？」

その様子を見ていた洋介がそう呟いていた。

「ん、あの方角はサーニヤの部屋だな…」

「桜井さん」

「あつサーシャさん」

洋介が二人のことを見ていると、サーシャに声をかけられた。

「すみませんが、お時間を取らせてもいいですか？」

「え？別にいいですけど。何で？」

「桜井さんも知っている通り、うちには問題児が多いので、ぜひ飛行技術を教示していただきたいと思ひまして」

「しかしな…僕はウィザードとしての経験は浅いです。ウィッチとしての飛行技術ならもっと適任がいるんじゃないのですか…？」

頭を傾げ、ウィッチとしての飛行技術なら、洋介よりも経験豊富なサーニャやエイラが適任だ。

「しかし聞けば桜井さんは元の世界でもエースパイロットだと聞きます。ですから向こうの世界での経験談を聞きたいのです。それにウィッチとしての教示はエイラ少尉にお願いするつもりです。ペテルブルグの街を守ってくれたお礼がしたいのですからお願いします」

サーニャに頭を下げられ、洋介は悩み、断るに断れない状態になってしまった。

「はあ…わかりました。そこまで頼まれたら断れません」

「ありがとうございます」

サーシャはエイラを呼びに、洋介はミーティングルームへと行くのだった。

ミーティングルームー

「……というわけであります。」

洋介は向こうの大戦時の経験や、501での飛行経験の話を話した。無論、人間同士の戦いの話は省いて解説した。

「なるほどなくそんなやり方があるのか」

「勉強になります」

話し終わると、直枝とひかりは感心して聞き、手帳等に書き記した。

「うんうん……なるほど」

クルピンスキーは頷く

「クルピンスキー中尉、今の話わかるのですか？」

「僕はそこまで馬鹿じゃないよ。サーシャちゃん」

「では私の講義はここまです。サーシャさん後をお願いします。」

洋介は教卓から降りて、後ろの席に座った。

「わ、わかりました。次にエイラ少尉の講義です」

エイラが講義する番が始まった。だが、擬音語を含めた言葉で話しているので何を言っているのかはわからない。

洋介はその光景に苦笑していた。

講義が終わると洋介はしばらく散歩していた時、壁際にロスマンや直枝が何か覗いて

いた。

「ロスマン先生、管野。何を覗いているんだ？」

「あ、桜井さん。実は…」

「洋介、見てみるよ…」

「ん？」

直枝にそう言われてみると、定子がサーニヤに抱き着いて幸せそうな顔をし、エ
イラがそれを引き離そうとする。

「もしかして定子。あれが出ちゃったんですか？」

「ええ、彼女の病気が発動したのよ」

「俺たちに続いて、洋介を覗いて501まで…」

「うーん…定子よ、ほどほどに…」

洋介はその光景を見て悩み、手で頭を押さえた。亜弥の体験談では地味に堪えたのであった。

そして、大晦日の日がやってきた。みんな年越しの準備をしており、ペテルブルグでは日本みたいに除夜の鐘や年越しそばを食べるのではなくサトウルヌス祭みたいな感じだと二パから聞いた。

洋介は定子とサーニヤと共に食卓の準備、亜弥は二パにサウナに誘われて、エイラとひかり、直枝と汗を流したが―

「小!」

「うにゃ!!／／／／」

「中!」

「うわっ！／＼／＼」

「大!!」

「うわゝ止めろー!!／＼／＼」

エイラは気を紛らわすため、直枝、ひかり、二パの三人の胸をもむのだった。だが、彼女はずまらなそうな顔をしていた。

「…はあゝつまらないナゝ」

「てめえ！人の乳揉んどいて何を言ってんだ!!」

「あゝくすぐったかった…／＼／＼」

「ねえ！イツル！まさかサーニヤさんにもこんなことしてるの!?!」

と、二パは怒って言うのだったか

「えいつ！」

「うわっ！あ、亜弥！お前何してんだよ！？／＼／＼」

「へへへゝ三人の仇ゝ♪」

「亜弥、いいぞゝ。やれやれ！」

「良いではないかあゝ！」

亜弥は三人の仇と称して、エイラの胸を揉んだ。それを見て直枝は応援する。亜弥はどっこその時代劇風の言葉を口にした。

「なあ亜弥、こんなやり方どこで？」

「うん、時代劇の映画で観たの〜♪」

「ぎやあああ〜…」

エイラはそうエイラは叫んだ。

その三人のウィッチたちの光景はまるで、狼が狐を狩っているようだった。

その後5人はここでは大晦日何をするかの話をしてエイラは、二パが話したスオムスでは大晦日花火をするっていう言葉を思い出し、サーニャと二人つきり計画を練り上げるのだった。

「花火？そんなムダなことに貴重な物資を使えるか。無理だな」

「ぐぬぬ…ケチ」

そしてエイラは服を着て部隊長室に行き、ラルに提案をした。しかし、ラルは物資不足の状況でそんなことができるかとバツサリと提案を切ってしまい、エイラは膨れ、小声で呟いた。

その後、食堂のテーブルに豪華な料理が並べられる。どれもすべて定子とサーニヤが作ったものであり、そして、小型のお椀サイズの年越しそばを作った。その上にカワエビが盧っていた。

そしてラルとロスマン、サーシャの三人は前に立つ。

「諸君らの活躍によつて、今年もネウロイの進行を阻止し、ペテルブルクを守ることができた。そして来年こそ奴らへの反攻の年とする。いいな」

『はいー!』

ラルの言葉に全員が返事をする。

「ふあい」

その中で、一人だけ既に食べ始めている者が居たジョゼである。
それに直枝が気付く。

「あー！こいつもう食ってやがる！」

「ジョゼ、お行儀が悪いよ」

「らって…」

定子に注意されるが、ジョゼはどうやら待てなかったようである。そしてひかりもそれに続いて食べ始めたため、全員が流れで食事を開始した。

「うん。このボルシチ最高だね」

「美味しいわー」

「懐かしいオラーシャの味です」

「美味い」

「この年越しそばもうめえ」

「懐かしい扶桑の味。さすが洋介さん／＼／」

みんなテーブルの料理を食べて、顔がほころぶ。

「きょうの料理の味付けは、殆どサーニヤさんがやつてくれたんですよ」

「さすがサーニヤ」

定子の説明を聞き、エイラがサーニヤを褒める。その言葉にサーニヤは少し照れたように赤くなる。

それを聞き、ひかりたちもサーニヤの下へ行く。

「えい！そんなんですか？」

「凄すぎです、サーニヤさん！」

みんな口々にサーニヤを褒める。そんな中、サーニヤは洋介が気になり見る。

洋介はもぐもぐと口を動かし、そしてそれを飲み込むと今度は微笑んだ。

「ん…美味しい…」

静かに放たれた洋介の言葉を聞き、サーニヤはホツとしたのと同時に嬉しさが巡る。その反応に洋介は気づいていなかったが、サーニヤの周りにいたメンバーは微笑ましくサーニヤのを見ていた。

その時だった。基地全体に警報が鳴りだす。

「ネウロイ!？」

「もう…空気が読んでよ!」

口々が反応する中、ラルは冷静に命令を下す。

「食事は中断だ。すぐに出撃の用意をしろ」

ラルが命令するが、ロスマンとサーシャは誰を出すか考えていた。

「誰を出しますか?」

「弾薬と燃料は相変わらず心もとないですが」

「おまけに夜間戦闘と来たか…」

そう言つてラルはウィッチ達を見る。

その後、出撃を開始した。出撃メンバーは、ナイトウィッチであるサーニヤ。夜間戦闘経験の豊富なエイラと洋介。夜間視を持つ下原。そして、夜間戦闘経験を積むためにロスマンの付き添いでひかりが出撃した。

ひかりは、初めての夜間戦闘に興奮していた。

「うわあっ?! なんですか、これ。星が凄い……こんなの見たこと……うわあ!」

その時、ひかりは突然ひっくりかえってしまい、自分がどの方向を向いているのかを完全に見失ってしまう。

「どっちが上ー!」

「一度目を閉じて深呼吸。力を抜いたら、あとはユニットに聞きなさい」

「はい!」

ロスマンがそんなひかりに指導をする。それをききひかりはすぐさま実行に移し、そしてふらついていた体を立て直した。

「戻った! ふう……ありがとう、チドリ」

ひかりは自分のユニットに礼を言う。そしてロスマンがひかりの横に行く。

「夜空は位置を見失いやすいわ。常に自分の仲間の位置を把握すること」

「はい!」

「夜間戦闘の経験を積むために来たのだから、しっかりと体に叩き込みなさい。いいわね?」

「はい!」

そんな様子を見て、サーニヤは何か思い出したのか微笑む。その様子に洋介とエイラ

は気づく。

「どうした？」

「芳佳ちゃんと初めて夜空を飛んだ時を思い出したの」

「ああ、宮藤もバタバタしてたナー」

「俺も初めての夜間飛行はややこしかったな」

そう言っているとき、洋介は別のことを思い出した。

「もうすぐ、二度目の1945年……あの光景を、再び繰り返してはならん！」

『えっ!?』

その言葉で気になった定子は洋介に近付いた。

「洋介さんの1945年？あの…なにがあったのですか…？」

「定子……必ず話す。僕が経験した戦争の悲劇を」

その時だった。

「前方3000！ネウロイです！」

「っ！」

突然定子がネウロイ発見の報告をしたので、全員が臨戦態勢に戻る。

「エイラ、洋介さん、お願い！」

「いづくぞー!」

「さっさとネウロイを倒すぞ!」

そして洋介とエイラは先陣を切って突撃する。その後ろをサーニヤが付いていく。

そんな様子を見てひかりは驚く。

「わっ! 皆さん凄い気合が入ってますね」

「よく見ておきなさい。彼女たち501エースの力を。そして特に、エイラさんが無傷のエースと言われるわけを」

「はい!」

そしてロスマンはひかりに先ほど突貫したウィッチ達、その中でも特にエイラの動きを見るようにと言う。それはひかりの追求すべき戦闘スタイルを求めるうえで、最も近い動きをするのがエイラだからだ。

そして先陣を切ってエイラがネウロイに攻撃を加える。しかし、ネウロイはエイラの攻撃を数発受けた後、即座に反撃を開始する。

そして、エイラはそのダメージがあまり通っていないのに気づく。

「効いてない!? ウソだろ?」

「私が行きます!」

エイラが下がって、今度は定子が突撃する。そして定子も攻撃をするが、その攻撃が

ネウロイの装甲を僅かに削った程度だったことから、このネウロイが防御特化型のネウロイと判断する。

「装甲が硬い!？」

「下がつて!」

「B―29の装甲並みか、俺が行く!」

「洋介さん、私も行きます!」

そして今度は定子が後退をし、今度は洋介とサーニヤが攻撃を開始する。サーニヤが手に持つフリーガーハマーのロケット弾をネウロイに命中させると、今度は洋介がその隙をついて突撃する

「(行くぞ、そこだ!)」

そして、久しぶりに洋介は波導を使用。そのまま洋介はネウロイが進行するであろう方向などを先に読み取り、手に持つ九九式機銃を構えた。弱点らしいところを狙った。

「喰らえ!」

強化も合わさった九九式機銃の弾丸は、ネウロイの装甲を完全に決めることは出来なかったが、その表面を大きく削る。

そして、ロスマンが全員に指示を出した。

「攻撃が効かないわけじゃない。防御特化型のネウロイよ!」

「特化？」

「つまりこいつは攻撃を続ければいいんだ！」

ひかりはちゃんと理解できていない様子だったので、洋介はわかりやすく言う。

「そうと分かれば……！」

「そうよ。効くまで攻撃を続けてコアを探し出すだけのこと！」

「つまり、いつもと同じってことだろ」

「ですね！」

そうして、再び編隊を組み直す。

「行くわよー！」

そして、ネウロイに向けて再攻撃を開始する。ネウロイは急旋回をし、連携を組んでいる洋介達に攻撃を仕掛ける。

未来予知の固有魔法を持つエイラと、波導を使用していた洋介はネウロイの攻撃が来るのを予想したため、そのまま上昇をして回避をする。それ以外のウィッチはシールドで攻撃を防ぐが、ひかりは攻撃の強さに弾き飛ばされる。

「ああっ!？」

そして弾き飛ばされたひかりはすぐさま体勢を立て直す。ネウロイは容赦なく攻撃

をするためひかりは回避するので精一杯になっていた。

「近づけない……！」

「おい！」

その時、先に回避をしていたエイラがひかりの下へ来る。

「えっ!？」

「いいか？ 攻撃はこうやって躲すんだ」

そう言つてエイラは急上昇をする。そして今度は急降下をし、ネウロイに向けて進んでいく。ネウロイがエイラに気づき攻撃をする。

「当てれるもんなら当ててみな！」

しかし、その攻撃はエイラの前では無意味だった。エイラは攻撃をまるで隙間を縫うようにすいすいと回避していく。

「すごい……シールドを全然使つてない」

ひかりはそんなエイラに驚く。

「そらそらそらそらそらーっ！」

そしてエイラは急降下するそのままの速度でネウロイに攻撃を加えていく。

そしてネウロイの攻撃がエイラに向かっている間に、洋介はもう一度、弱点らしきと

ここにロスマンとサーニヤに指示を出し、ネウロイの前方に立ちほだかり、同時にフリーガーハマーとロケット弾で攻撃をする。ネウロイはその攻撃に遅れて全弾命中し、そしてついに装甲が剥がれてコアが見える。

「コアです！」

「今のうちだわ！」

全員がすぐさまコアに向けて照準したその時、ネウロイはその露出したコアを隠すべく装甲をすぐさま再生させる。

「再生が早い……！」

そして、再生したネウロイは物凄いスピードで直進を開始する。そしてそのままウィッチ達の横を通り過ぎていく。

「逃げた！」

「違います！向こうには基地があります！」

ひかりはネウロイが逃げたと思うが、定子の夜間視によつてその方向が基地とわかる
と全員が驚く。

「まずいわ！今、基地に行かせては…」

「追います！」

全員が急いで基地の方向に向かおうとしたその時、後ろから声がする。

「大丈夫です」

「えっ!？」

突然のサーニヤの声に全員が振り返る。そこでサーニヤが述べた。

「どういうことですか？」

「だって」

防御特化型ネウロイの進行方向の先にはエイラが待ち伏せをしていた。彼女の固有魔法にて先回りして、弱点の位置をインカムで聞き、機銃でネウロイを撃墜した。その姿を光の破片に変えて消滅させた。

その光景はまるで夜空に大きく現れた花火のようだった。

「すごいわ、エイラさん」

「綺麗…花火みたい」

その様子を、出撃したメンバーは離れた所から見ていた。

そして、基地の中からもネウロイの消滅した姿が確認できた。

「たーまやー！ つか」

「かーぎやー♪」

直枝がそう言うように、隣で亜弥が唱えた。まるで花火のように輝く光景を、基地の中から全員が見ているのだった。

サーニャはエイラの手を取って、共に新年を迎えた。
そして洋介はそんな光景を静かに見ていた。

「代用の花火、綺麗だな…」

そう呟いたその時、突然洋介は自分の手を取られて驚く。そして、手を取った人物の方向を見ると、それは定子だった。

「定子」

「洋介さん、お疲れ様です。花火みたいですね…／／／」

そう言って、定子は微笑む。洋介も顔を赤面しながら微笑んだ。

「今年もよろしく／／／」

そう言って、定子は洋介の手を握った。

第24話 特攻隊の介錯 前編

1945年1月 ペテルブルグ基地

第502統合航空戦闘団は新年を祝った。

基地内で飲食や遊戯など楽しみ、ウィッチの世界でただ一人のウィザード、桜井洋介と娘の亜弥はその場で正月らしく、扶桑のウィッチたちと遊技の羽根つきで楽しんだ。

「それっ！」

「あゝっ負けちゃった〜！ひかりお姉ちゃん」

「ふふふ。はい、亜弥ちゃんの顔に墨を塗るよお〜♪」

塔の下でひかりと亜弥が戯れている時、洋介と定子、直枝はその光景を見ていた。

「二人は楽しくていいですねえ♪」

「みんな、まだ子供だな〜♪」

「そう言う洋介だつて、子供みたいに楽しんでるじゃあねえか！」

「…ははは、管野に返す言葉がねえな」

洋介の言葉で直枝に突っ込まれた時、エイラとサーニヤがやってきた。

「洋介さん、皆さんー！」

「オーイ！ワタシたちも混ぜてくれ〜♪」

「ああ、いいとも！」

その場で、扶桑の文化ならではの羽根つきで楽しんだ。

正午―

「あゝ正月つてのは旨いものを食う以外、ヒマだなゝ」

「そうですね…買い物に行こうにも相変わらず市街地は無人、私たちがネウロイの巢を撃退するまで難しいです」

洋介と羽根つきの遊戯で楽しんだウィッチたちは廊下を歩きながら娯楽がヒマで仕方なく呟いた。すると、直枝が洋介に尋ねた。

「なあ洋介、何か楽しいことないかあ？」

「ん、そうだなあ…正月の娯楽は風上げ…には女性のイメージがない…せめて…」

「せめて…?」

「映画くらいあれば……」

「…映画…サーシャさんの魔法能力じゃ無理がありますし…」

「……わっ…」

「…亜弥っ!」

亜弥は廊下で躓き、魔法力を発動した。固有魔法は影分身だが、もう一つ隠れた能力が開花した。

「うわっ!」

「なんじゃこりや!」

「……これは……扶桑……？」

「……いや……違う……これは日本だ……！」

躓いた拍子に一部廊下の景色が変わった。

壁、床、天井を同時に映像を投影する。その景色は扶桑であり扶桑ではなく、洋介と亜弥がいた日本の小樽だった。

「……」が、洋介さんと亜弥ちゃんの異世界の扶桑、日本！」

「わああ！凄くおしやれなお店」

「あれが小樽運河か……ちよつと見てくるゝ♪……がはっ!？」

「管野さん、大丈夫ですか!？」

扶桑のウィッチたちからして見れば、世界と国名が違えど同じ母国。

目を輝かせた直枝は見物しようとした先で廊下の壁にぶつかつた。景色は果ての先まで続いているものの、中身は狭い廊下であつた。

「ん……これは……？」

「あつ」

廊下で隊長のグンドユラ・ラルと遭遇、彼女はミーティングルームにウィッチたちを招集させ、亜弥の隠れた能力を披露した。

「……凄い……」

「へえ。これが洋介君と亜弥ちゃんの国か。♪」

「ああっ！あそこのお店の食べ物、美味しそう。♪」

「ジョゼ待った！見た目が広くても、元は狭いミーティングルームにいるから壁にぶつ

かるぞー!」

「ええっ!? ちよつと残念だなあ…」

ジョゼは直枝の説明を聞いて、残念そうな顔をしていた。

「ねえ亜弥ちゃん、これはいつの時代なの?」

「はい、先生。これは1954年の小樽です。」

ロスマンからの質問を聞いた亜弥は答えた。

「と、言うことは今から9年後の世界!」

「9年後の異世界の扶桑…活気があり、みんなお洒落な格好して、ハイカラな建物ばかり。基地の市街地でも、こんな活気が戻ってくれたら…」

「サーシャさん、戻ってくるよ。ワタシたちがネウロイを倒したら、街の人たちが戻ったら、この街の人たちの様に笑顔が戻るよ。」

「ニパさん…」

サーシャが呟いた時に、ニパが励ました。サーニヤが亜弥の肩に手を置いた。

「ふふっ♪亜弥ちゃん、凄い能力ね」

「サーニヤお姉ちゃん。えっ!？」

「これは…!？」

亜弥がサーニヤに手を重ねた時、景色が変わった。

サーニヤの夜間哨戒の任務やブリタニアの501団所属時代の活動が写し出された。これは芳佳と洋介があの人型ネウロイの巢に入った時と同じ状況だった。

「もしかしたら、亜弥ちゃんの記憶だけじゃなく、他の人物の記憶を写し出されるのかしら……?」

「凄いねえ、これは♪サーシャちゃんの能力より凄い!」

「ん……?」

「あつ……いや……あはは……」

クルピンスキーの言葉でサーシャが睨んできた。彼女は冷や汗を掻いた。

「面白そうだな。誰の記憶にする?」

ラルは面白そうに言う時

「はあーい! 僕、洋介君の記憶が見てみたいな〜!」

クルピンスキーが手を挙げて言った。

「お、いいなそれ！」

「おい、ちよつと待って！何で俺なんだ!？」

「だって、洋介君って向こうの世界の話、全然してくれないし」

「確かに、少し興味がありますね」

クルピンスキーの発言に直枝やサーシャがさういう。

「わかりました…あの…わたしもお父さんの戦時のことが知りたい。良いですか？」

「…はあ……まあ、いいよ。いずれにせよ、みんなに話さねばならんことだ。」

洋介が亜弥の手に触れた時、辺り一面景色が変わった。

そこは日本国内、北海道の小樽から移動して南方の九州、鹿児島市の市街地。

「洋介さん、ここは？」

「ここは、…九州の鹿児島だ……」

「鹿児島っ!?わたしの佐世保に近い!」

1945年4月中旬、沖縄戦の真つ只中の鹿屋基地所属時代―

桜井洋介が少尉の時代、敏腕の戦闘機パイロット、下士官の沖田進次郎一等飛行兵曹を付き添いながら、側車付きバイクで知人の実家を訪問して基地に帰投していた。

「やつと虎雄さんの荷物を送り届けてよかったですね、桜井さん」

「そうだな…内地に帰国して、それまでの間に戦場に従事して、今に至るまで生きているのが奇跡だ…」

「おれたちは厚木隊長の命令があつてのことです!」

「…進次郎…ああ…」

「助けてくれえ!!」

「!?」

バイクの走行中、青少年の悲鳴が聞こえた。

「なんだっ!あの声は!」

「行くぞ進次郎!」

「はい!!」

洋介と進次郎は側車ごと路地に突入、悲鳴が上がったところに向かった。

「くっひっひっひっ!」

「た、助けて〜!」

キキーツ 「やめろ！なにやつとる!？」

洋介が見た光景は、海軍第二種軍服を着用した士官の少尉が短剣を抜き、民間の青少年を襲っていた。

「貴様、なにしておるか!？」

「…助けて下さい…この人が僕を…」

「ヒック…護衛戦闘機隊のパイロットか…おれが短剣で…志願兵の手足を切り刻むところだ…邪魔するな!」

少尉が酒で酔いしれ、短剣で目の前の志願兵を切り刻もうとしていた。

「やめろ！そんなことやったら…軍法会議だ!」

「黙れえ！護衛戦闘機パイロットになにがわかるのか！おれが貴様を切り刻んでやる」

！
」

士官が標的を志願兵から洋介に変更、短剣を向けて襲い掛かった。

「桜井さん！」

「この野郎〜！」

「くっ！」

洋介は素早く軍刀鷹狼を鞘から抜き、短剣を弾き跳ばした。

「なっ〜!?」

「大人しくしろ!!」

「…ぐ…はっ……」

洋介は酔いしれた士官を、鷹狼の峰で腹部を打ち、気絶させた。

「桜井さん、大丈夫ですか!？」

「進次郎、俺よりも志願兵を！」

「はい。君、大丈夫か？」

「…はっはい…」

「熊井少尉っ！」

別の路地から士官が赴いた。

「君は？」

「はっ！海軍少尉、中山進です！」

「俺は海軍少尉、桜井洋介です」

「沖田進次郎、海軍一等飛行兵曹です！この志願兵が怪我をしています。傷の手当てを
！」

「…うう…かすり傷です…」

「近くに知り合いの旅館がある。そこで手当てをしよう」

「す、…すみません…」

「桜井少尉、お手数おかけしますが、こいつもお願いします」

「わかりました。俺がこの士官に暴行した責任があります。ですが先に志願兵を側車
で」

「わかりました！」

洋介は進次郎と共に志願兵の中岡浩二を側車に乗せ、中山少尉が指定する旅館へ運んだ。

その次に、中山と熊井を旅館に運び、案内された部屋で、中岡を手当てしながらひと休みした。

洋介が気絶させた彼の名前は熊井大二郎。学徒出陣の少尉だが、何事もなかったかのように居間で眠っていた。

「中山、酒はまだか？」

「ああ、熊井！この旅館に迷惑を掛けるな！」

熊井は起き上がり、襖を開けて廊下で叫んだ。

「やいやい女将！はやく酒を持ってこんかあつ！」

「ふん、酔っ払いのキチガイめ」

洋介たちは内心で、嫌味を感じた。

「やい、女将!! 貴様ら酒を持つてこんと罰が当たるぞ!! このわしは特攻隊員! まもなく死んでいく軍神さまだぞ!」

「特攻隊だつて!?!」

「そうです。おれとあの熊井は5日後には爆弾を抱えて、沖繩の敵艦に突っ込んで死ぬです…」

「5日後に……」

洋介と進次郎は彼らにゾツとした。

フィリピンの特攻隊の出撃以来、日本に帰投しても硫黄島の戦いに続き、この鹿児島

の鹿屋まで特攻隊の最前線基地に指定された。

「お待たせしました！このところ酒が手に入らなくて…特攻で死んでいく中山さんたちのために必死に探してきたんですよ…」

「うるさい、早く持つてこい！」

「すまん、女将」

酒を盆に載せた旅館の女将が入室しても、熊井の態度は変わらず徳利ごと酒をガバ飲み、中山が代わりに謝罪した。

「ふーっ、畜生！5日後には好きな酒も飲めなくなるんだ……やいっヒヨコ、その戦闘機パイロットも飲め！」

「……わかった、例え特攻隊員でも生死を共にする戦友だ。進次郎」

「はい、盃を頂きます」

洋介と進次郎は熊井の誘いを受け、志願兵の浩二は遠慮した。

「ぼ、僕は飲めません…」

「きさま、軍神のおれの酒が飲めんのかっ」

「飲んでやれ、責めてみんなと酒を飲み交わして死ぬことを忘れたいんだ」

「（いやだ、あんな奴の酒なんか…）」

「お前も今におれと熊井の様になる時がくるんだ、戦争が続いている限りな」

「……………」

中山の言葉を聞いて、洋介たちは盃を持った手が止まった。

「ヒヨコつ、戦闘機パイロット！きさまらは大馬鹿だ!!」

「いらんお世話だ…」

洋介と進次郎は言葉に出来ず、浩二が内心感じた。

「だいたい人間は老人から死んでいくのが当たり前だ。そ、それがおれたち若い者が先に死んでいく……なんで戦争を起こして命令ばかりしているジジイが生き残るんだ、間違つとる！お、おれは死にたくない！まだまだやることはいっぱい残っているんだ……」

「熊井、もうやめろ…」

「畜生！戦争したけりや、戦争を始めたやつらだけが無人島でやりやがれ！」

そう盃を投げて怒鳴り散らす。彼らの内容は大学の実験室で残してきた研究をやり

遂げることを悔いていた。

1943年10月2日、彼ら大学生は学徒出陣で戦場に駆り出される命令が下された。

10月21日、東京近郊の77校が神宮外苑競技場に集まり壮行会が開かれた。こうして大学生は戦場へ戦場へと追われていった。

熊井と中山は飛行機乗りを志願、海軍霞ヶ浦航空隊基地で厳しい訓練に耐え、飛行兵になった。

45年1月、鹿屋基地―

「かしらゝ中！」

熊井たちパイロットが司令に敬礼。

「これより、神風特別攻撃隊の志願を募る。戦局はますます厳しくなっておる。必殺の

爆弾を抱いて敵艦にぶち当たり、戦局を逆転してくれ。志願兵は一步前へ出ろっ！」

特攻隊員に志願するパイロットは一步前に出た。だが、熊井は前に出ず、司令と志願するパイロットに睨まれた。

「この隊には女の様に腐った臆病者がいるのう。国のために、命を捨てられないとは情けない」

彼、熊井大二郎は死ねない理由があつた。身寄りのない年取つた母親の面倒を誰がみるのか、そして、結婚する日を待っている夏子さん。

彼は結婚して、孫を抱くのを楽しみに生きている母親のために死にたくなかつた。

「志願だが、無理には進めんが日本男児として情けないのう。みんな自分を捨てて国を守るために進んで志願したのに」

「熊井少尉、志願するであります！」

みんなに睨まれ、司令の言葉に惑わされ、一步前に出て志した。

その夜、士官室で家族写真を観ながら涙を流し、酒を浴びる様に飲んだ。

「おふくろ、夏ちゃん。許してくれ…幾ら生きたくてもまわりが死ぬようにするんだ…」
「おふくろ…許してくれ…夏ちゃん、許してくれ…」

3月26日、沖縄の慶良間諸島。

4月1日、沖縄本島にアメリカ軍が上陸を開始。

沖縄周辺のアメリカ艦隊を撃滅するために、特攻隊の出撃命令が下された。

特攻隊は戦う機銃やいらぬ装備を外され、生きてかえることはない。

燃料は片道分、胴体には重い爆弾を括り着けてあつた。

「武運を祈るぞ」

「はっはい！（別れの盃だ、…おれも今日で最後か…）」

熊井は上官から酒を盃に注がれ、喉に流し飲み干した。

「劍神隊、行つてまいります！」

「たのむぞ！」

「出撃！」

「(おふくろ、夏ちゃん、さようなら……許してくれ)」

「発進！」

爆装の零戦に搭乗。轟音を唸り、滑走路を蹴つて大空へ飛び立った。

「……………むつ、このコースはおれの家の上空を飛ぶぞ！……………ああつ！」

熊井が上空から見た光景は、家の畑に母親と婚約者の姿を目の当たりにした。

「…………おふくろ…………夏ちゃんだ…………おふくろゝ夏ちゃんゝ」

熊井は編隊を離れ、単独で実家の上空で旋回飛行した。

「おーい、お母さーん！夏ちゃーん！」

地上で畑仕事をしていた二人は激しい爆音ゆえ、熊井の声は聞こえなかった。

『熊井少尉、なにしとるか!?編隊にもどれ!』

「うう…いやだ…おれは死にたくない…お母さんと夏ちゃんを残して…死にたくない…お母さーん、夏ちゃーん!!」

無線を聞いた熊井は涙を流し、操縦桿の先端を頭に付けて命を惜しんだ。

「もう、1時間も飛んでいるわお義母さん」

「なんで上空を飛び続けるのかしら…？」

「うう…お母さん…夏ちゃん…っ!?しまった燃料が！」

熊井機が一瞬飛行バランスを崩し、燃料計器の針が0を指していた。燃料をなくした零戦が墜落してきた。

「こっちに落ちてくる！」

「きゃああつ！」

墜落した熊井機は畑に不時着、熊井は負傷しながらも操縦席から脱した。その二人は彼を見て驚愕した。

「ああつ！大二郎！」

「大二郎さん！」

「ううう…お、お母さん…お母さん…お、おれは怖い…死ぬのが怖い…」

熊井は母親と婚約者を抱きしめながら命を惜しみ、涙を流した。
負傷した熊井は基地に引き返され、海軍病院の病室に移された。

「熊井少尉、きさまは海軍航空隊の面汚しだ恥をしれ恥を！」

「天皇陛下の大事な愛機を無駄にして、なんとお詫びできるか！人間の代わりはいくらでもいるが、飛行機の代わりは無いんだぞ！」

「きさまと一緒に出撃した仲間みんな突っ込んで死んだんだぞ、臆病者め！」

「傷が治ったら直ちに攻撃、はやく死ね！わかったか熊井少尉！馬鹿者！」

「ううう…」

母親、婚約者は熊井のために非国民のレッテルを貼られ、近所から責められて泣いているそうだった。

「おれがなぜ悪い、人間として素直な気持ちでいただけなのに……」

「く……熊井さん……」

熊井の回想で洋介たちは涙を流した。洋介もフィリピン決戦前に、雪と結婚したばかりであった。フィリピンから日本に帰国した時、雪から電報の知らせで妊娠したと聞いて喜び、戦場で戦い、生きて帰ることを誓ったのであった。

「ヒヨコ、生きろよ。生きておれたちの出来なかった自由に行動のできる……好きな女と結婚して家族と楽しく過ごさせるそんな世の中を創ってくれよ。人間にとって、一番幸せなんだ。」

熊井は浩二に向けて良き未来を創るように忠告した。そして、浩二は盃を手にした。

「熊井さん、お酒ください」

「飲むか？」

「熊井さんのお酒、もの凄く美味しいです」

「こいつめ」

浩二は進次郎と同様に未成年であり、飲酒。苦かったのか涙した。

「ヒヨコ、どうしても予科練に入隊したいのか。入隊するにはまだ遅くはない、手足をア
ダにすれば命は助かる」

「ぼくは、どうしても入隊しなければなりません。広島の親姉弟のために往かなければ
…」

「馬鹿たれ、勝手にせいっ！おい、戦闘機パイロット！飲むぞー！」

熊井は浩二の前にそっぽ向き、洋介たちと酒を飲むことを再開した。

「熊井さん、中山さんのご武運を祈ります。」

浩二は部屋を出て、鹿屋基地へ向かった。洋介も酒をほどほどにして鹿屋基地に戻った。

第25話 特攻隊の介錯 後編

それから4日後、第二種軍服を着用した熊井と中山は特攻出撃前夜に休暇が下されたが、市街地で中山と酒を飲んでも、どこことなく顔が冴えなかった。

「……熊井……出撃は明日だから飲め！」

「…すまない中山…おれは…」

熊井に続き、中山も冴えなくなった。すると軍用トラックが二人の前に停車した。

「わわっ!？」

「馬鹿野郎！なにするんだ！あつ…あんたは…桜井少尉！」

第三種軍服を着用した洋介と進次郎がトラックを運転してやってきた。

「熊井少尉、中山少尉。トラックの荷台に乗車しろ！」

二人は洋介の指示に従い、進次郎が運転するトラックの荷台に乗車した。

「おい、戦闘機の少尉！どこに向かうんだ？」

「今にわかる！」

向かった先は基地郊外の住宅、熊井の実家であった。

「(ハハハ)は……(ハハハ)にどうするつもりだ?」

熊井は洋介の襟首を掴み、持ち上げた。

「ぐつ、熊井少尉の明日は特攻出撃だ。あんたが死ぬ前の情けだ、仮初めの式を挙げてやる！」

「よ…余計なお世話だ、きさま！」

「桜井さ…」

熊井は腰に帯刀していた鷹狼を抜き、洋介に向けた。進次郎が心配して赴いたが洋介が制止した時、家の玄関から女性が出てきた。

「大二郎さん…？」

「……大二郎っ！」

「…おふくろ…夏ちゃん…」

母親と婚約者が熊井の名前を呼んだ。手元の軍刀を落とし、二人の元に駆けつけた。

「…大二郎さん…」

「…大二郎…お前、身体は大丈夫か…？」

「おふくろ…ああ、大丈夫だ…」

「あの、……あなた方は……？」

婚約者の夏子と母親が洋介たちに気づき、三人は敬礼した。

「私は海軍少尉、桜井洋介です。本日、我々は熊井少尉が命ある限りいつ、明日か明後日の戦場で散る前に式を挙げたいのです。どうか、少尉と婚約者の式の許可をください！」

「お願いします！」

洋介は熊井の母親と婚約者の前にお辞儀して、中山と進次郎も続いてお辞儀した。

「……………わかりました。家にお入りください。夏子さんの衣装準備をしますので、お時間をください」

「はいっ！」

洋介たちは、熊井を除いて居座る居間を式の準備を急がせた。

式を見守る三人は、夫婦になる証の盃を用意など。すると、座布団に座る熊井は洋介に尋ねた。

「なあ、桜井少尉…」

「……………僕の名前、初めて言ってくれましたね」

それを聞いた洋介は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「…あんたは、その…結婚しているのか…？」

「ええ、います。…妻は妊娠していると電報がありました」

「そうか、…あの時とさつき…刃物を向かせてすまなかった」

「別に気にしていませんよ。フィリピン、硫黄島の激戦時以来、僕は特攻隊を護衛する任務に就いています。特攻隊員で少尉みたいに式を済ましたり、中には学生結婚して子供を授けて、最後の晩餐となり出撃。僕は戦闘機パイロットの意地として最後まで見届けました」

「……そうか……明日は必ず頼む」

「はっ………」

すると、母親が襖から出てきた。それに続いて夏子が簡素で白衣の花嫁衣装を纏って出てきた。

「お待ちせしました。夏子さん」

「はい、大二郎さん……」

「夏ちゃん……」

夏子は熊井の左側に居座った。司会は洋介が務めた。

「う……おほん……以下略」

辞を終え、二人の前に盃に酒が注がれて、そして一気に飲み干した。

この契りにより、熊井大二郎と夏子は夫婦となった。その光景を目の当たりにした母親は嬉しく、感動して涙した。

式を終え、洋介たちはトラックに乗車した。

「熊井、先に基地へ帰って待つてゐるぞ！」

「ああ、すまない中山。桜井少尉、沖田一飛曹ありがとう……！」

「いえ、……夫婦となった今、明日の朝迎えに行きます。良き時間をお過ごしを……」

洋介と進次郎は敬礼してその場を後にした。

明朝、洋介と進次郎はトラックで熊井を迎えに行った。

「熊井少尉！」

「待たせたな二人とも。悔いはない、行こうか！」

「はっ！」

熊井がトラックに乗車。彼は背を向け、家から去った。家の内部から最後の最後まで息子、夫の光景を見届けた。

「……大二郎……！」

「……あなた……」

鹿屋基地―

本日の護衛戦闘機はたったの二機。

洋介と進次郎は、常にスパナを持ち歩く整備士トチローが、洋介と進次郎の零戦64型の整備を終えた。

その1機の機体は、ストライカーユニットに変化する前の洋介の愛機、零戦64型であつた。

「洋介、進次郎！おめえら愛機の整備を終えたってんでい！」

「トチローさん、ありがとうございます」

「しかし、トチローさん。熊井さんと中山さんの特攻機の燃料は片道分ですか？」

「馬鹿言うな、特攻隊の連中の機体の燃料は腹一杯にした！ネジ一本の緩みもねえってんだ！おれっちにとって、ささやかな情けでい！べらぼうめ!!」

「ありがとうございます！」

10人の特攻隊員の中に熊井と中山の姿があった。そして、最後の盃を飲み干し、盃を地面に叩き割った。

「行つて参ります!」

特攻隊員は次々と機体に搭乗。

遠くから来た洋介と進次郎は、熊井の姿を目の当たりにした。光景は死ぬ顔には見えなかった。

「出撃!!」

一機、また一機、鹿屋の滑走路から次々と飛び立った。また滑走路には、予科練に入隊した中岡浩二も見送りに帽子を振っていた。

「家だ、…お母さん…夏ちゃん…さようなら…さようなら…」

熊井は朝日が照らされる家と、畑に母親と妻が立っており、薩摩富士こと開聞岳を通する最後の最後まで目に焼きつけた。

特攻隊、護衛戦闘機を含む12機が喜界島を過ぎた時、一機の零戦が火を吹いて落ちた。

「あつ！」

「敵機だ！」

数十機の敵機が襲来、次々と特攻機を襲って来た。爆弾を身に付けた機体は敵機の的に過ぎなかった。

「……」までか……ちくしう！」

熊井の背後にF6Fがピタリと憑かれ、風前の灯かと思つた時に爆発した。

「はっ!?……あれは……」

「そこっ!!」 ダダダダダダ ドカアアアン

洋介と進次郎は味方を上回る敵機を次々と機銃で火を吹かせ、最後の一機になるまで敵機を海に叩き落とした。

「……すごい……あれだけの敵機を落とすなんて」

「あんたらは一体……」

「……ふう……伊達に、南洋のラバウルで6人と共に、幾多の敵機と戦ってきたんだ!」

「ラバウル……?……もしかしたら、あんた達は……」

「全機に告ぐ、我々はこれより海面まで降下する!」

洋介は特攻機に告げて、すぐに機体の向きを変えて降下した。

「なぜなんだ!? 予定の進路に…」

「我々とはとくに、敵さんのレーダーにつかまっているから、既に敵機が向かってきます。全機、桜井少尉の指示に従い飛行せよ!」

「…り…了解!」

進次郎が洋介の助言して降下、熊井たち特攻隊員も頭を傾げながら降下、全機が海面ギリギリに飛行していると、敵機の大群が待ち伏せしていた。

「敵機だ……」

「危なかった…あのまま飛行していれば敵機の餌食に……」

「大丈夫ですか、桜井少尉。上からは丸見えですよ…」

「安心しろ、海面に太陽が反射して見えやせん」

太陽の反射で海面が靡く中、暫く低空のまま縦陣飛行。

「よしつ、機首を起こせ！太陽に向かって上昇！」

「なぜだ桜井！このまま水平飛行で敵艦隊に向かった方が確実だろう」

「俺たちの方が実戦は知つとる！ついてこいっ!!」

熊井たちは疑問に感じながらも、9機の特攻機は洋介機と進次郎機の誘導に従い太陽に向かって上昇する。

「高度二千、…三千、…四千、…五千…機体を水平に直せ！」

「熊井さん、中山さん、下を見てください！」

「なにっ!?…て…敵艦隊だ!」

全機が機体を水平に保てた時、特攻隊員が下を見下ろした時、編隊は敵艦隊の上空を飛行していた。

洋介たちの角度は太陽を背にしており、高度なレーダーがあつても発見しにくかつた。

フィリピン戦以来、初期の戦いで特攻隊で混乱していたが、沖縄に至るまで慣れていった。

特攻の爆装零戦では速度が遅く、水平飛行で敵艦に一直線に進めば絶好の的。例えば敵の弾に当たらなくても、砲弾の水柱に突っ込んでも成功の見込みはない。

「見ろ、太陽を背にしているから気づいていない、進入角度は二十度数から入って五十度の急降下で突っ込むのが一番効果があるスピードがでる」

そして、7機の特攻機が突入の準備を整え、それぞれの標的艦に向かって飛行した。

「進入角度をとります！さようなら、みなさんさようなら!!」

戦艦や輸送船、航空機の基地である空母を標的に向かった。

「やった…やりました!」

「ああ、戦艦、輸送船の突入を確認。だが…」

空母突入組は対空射撃により落とされ失敗した。

最後に残った中山と熊井は突入準備を整えた。

「中山少尉、空母に突入する!」

「熊井大二郎少尉。同じく空母に突入する。桜井洋介、沖田進次郎。最後に、君たちラバウル六勇士に会えてよかった。おれたちの介錯人を務めてくれて、幸いだ!」

「…熊井さん、…中山さん…」

二人は空母に向けて突入した。

速度を維持して弾幕をすり抜けつつも、機銃等で進入を拒ませた。

「……く……」までか……あつ……」

二機の零戦64型が、空母の機銃座を掃射。

「(……二人とも、生きて帰れたら。おれの母さんと妻の夏ちゃんに最後を教えてください……さようなら……)」

中山機と熊井機は空母の飛行甲板に突入。撃破した。

「……やった……中山さん……熊井さん……必ずや、最後をご家族に報告します!」

洋介は敬礼しながら涙を流し、進次郎と共に鹿屋基地に帰投した。

その3カ月後、亜弥が生まれ、8月15日に戦争が終結し、日本は敗戦した。

そして3日後、洋介は北方の戦いより、魔女の世界に異動した。

502基地、ミーティングルームで観賞していたウィッチたちは考えられず恐怖して青ざめた。

洋介は半年前まで人間同士、血にまみれた戦場で戦ってきた兵士であつた。

「…洋介さん…」

「…桜井、君の世界の人間は、想像以上に残酷非道だな…」

「あの、桜井さん。熊井さんの家族に、彼の最後を伝えたのですか？」

洋介はサーシャの言葉に反応して言った。

「…帰還して5日後、報告しました。熊井さんは妻との間に身籠っていました」

「…そんな……」

「…皮肉なことですね桜井さん…男女の結婚してすぐに死へ追い込むなんて……軍人とはかく、それが人間のやることですか？」

ロスマンが洋介に怒りと悲しみを込めて述べた。

「…返す言葉がありません…ロスマン先生…あの特攻隊が実戦に参加した時から作戦とも言えない邪道な戦いです。僕は家族へのお詫びとしても金と、一族の繁栄です。…彼らこそ、戦争が終わった後の未来を作るべき人間だった…戦場で散って逝った者たちへの手向けです。祖国は連日の空襲で灰燼…女子供が爆弾で焼かれる想像ができますか？」

「……………」

「あれから何十人のパイロットが死にました…直援機は特攻機を守るのが役目です…例えば自分が楯になろうとも…守るのが務めです…それなのに…それなのに僕は見殺しにしてしまった…僕は…彼らの犠牲の上に生きながらえている…彼らが死ぬことで生き延びている…」

洋介はミーティングルームから出て行った。

「…お父さん…」

「…洋介さん……………」

亜弥と定子は洋介のうしろ姿はどことなく悲しい姿をしており。彼は格納庫から出

て夜空を眺めた。

「…熊井さん…あなたの残した家族はどうしていますか…?」

熊井大二郎の妻、夏子は翌年に娘を出産した。

サーニャとエイラがスオムスに帰投する日に、502のウィッチたちが洋介の誕生日を祝った。

「おめでとうございます！洋介さん！」

「洋介くん、おめでとう〜！」

「おめでとうございます！」

「おめでとう、洋介！」

「洋介さん、おめでとうございます！」

「おめでとう、中尉」

「おめでとう！」

「おめでとうございます！」

洋介は誕生日を迎え、21歳になった。

「ウィツチの皆さん、僕の誕生日を祝ってくれてありがとうございます。僕はこのウィツチの世界にきて1年が経ちました。このネウロイの戦いで各国の連合軍が犠牲がでる中、少しでも犠牲を抑えるために、未来と勝利、平和の為に戦います！」

洋介のスピーチが終わった時、その場にいた502部隊のウィツチたちとサーニャとエイラ、娘の亜弥が拍手した。

第26話 父娘、それぞれの活動

洋介の班はペテルザヴオーツク周辺の陸上型ネウロイを撃破。

「こちら、桜井班。ペテルバヴオーツクのネウロイを排除完了!」

『了解!これより帰投して下さい。』

「了解!」

洋介がインカムで報告した時、ロスマンから帰投命令が下された。

「定子、ジョゼ。だいぶ上達したな〜!」

「いえ、洋介さんが戦いながら指示してくれるから、わたし達は強くなりました！」

「これで補給路が開通。洋介さん、基地に帰りましょう！お腹空きました！」

「さて、基地に帰投する！今日の食事は何だろうなあ〜♪」

洋介たちはペテルブルグ基地に帰投。

しかし、洋介だけはラルの隊長室に赴く様に、指示を受けた。

隊長室
ー

「桜井、失礼します！」

隊長室にはラルの他に、ロスマンとサーシャ、クルピンスキーがソファに座っていた。すると、サーシャが立ち上がり、ある資料を洋介に見せた。

「桜井さん、この兵器をご存知ですか…？」

「え……っ!? ……これは……」

洋介が目を見開き、目の当たりにしたのはかつて、501部隊のブリタニア時代に駐屯していた時に導入された、ネウロイのコアを利用した血も涙もない冷徹の無人兵器『ウォーロック』の資料だった。

「ウォーロック……サーシャさん、ラル隊長！この資料をどこで……？」

「クルピンスキー中尉の手立てでハルトマン中尉が物資の中から送られてきた。」

「あのハルトマンが、クルピンスキー中尉と関わりがあるとは意外……」

洋介は腕を組んで感心した。

「ネウロイをもってネウロイを制す……そんな作戦が存在したとはな」

「だが、ウォーロックは作戦中に暴走をして、そのツケを俺たちが払わされた…今となつては思い出したくもない兵器だ…」

洋介はあの時の状況を思い出して嫌な顔をした。

ウォーロックのせいで501は解散させられ、そして暴走したら今度は501が倒すことになった。面倒なことを運んできたこの兵器に対して、いい思い出など一つもないのだ。

「倒せたと言っても、これを我々が再現するのは不可能です」

「だがこの資料から分かったことがある。ネウロイの数にも限りがある。倒し続けていれば、いつかは巢が空になる」

サーシャはその真実を聞き、自分たちがウォーロックを再現するなど出来るものではないと言う。そんな中ラルは、この資料からネウロイの巢の特性を理解し、巢の破壊につながる重要な手がかりとなる点を説明する。

それを聞き、ロスマンも顎に手を当てて考える。

「マンシユタイン元帥も、この情報を知れば火力を集中させて、ネウロイに消耗戦を仕掛けようとするでしょう」

「だろうな」

「ひよつとして！」

ラルの反応を聞き、サーシャは何かに気づいた。そして様子を、ラルは納得したように説明した。

「そうだ。ムルマンに向かっていている物資の中に、グリゴリー攻略の切り札が積まれているに違いない」

「ムルマン？」

洋介はラルの言葉に何のことかわからずに聞く。その質問を、サーシャが説明した。

「現在ムルマンに、ブリタニアからの大規模な輸送船団が向かっているんです」

「だから私たちに護衛を…」

ロスマンは事前に502に護衛の援軍要請が来ていたことについて、これで合点がいった様子だった。

そんな中、クルピンスキーは護衛船団の話聞き食いついた。

「ぶどうジュースあるかな？」

「ない、それに桜井に扶桑から指令が下されている」

「指令…ですか？」

その後、洋介達は食事の席でラルとロスマンからの作戦説明を受けていた。

「そのままでもいいから聞け、作戦を伝える」

ラルがそう言うのと、全員が手を止めて前方を見る。そしてロスマンが地図を立てると、説明を開始した。

「現在、ブリタニアからムルマンに大規模な補給船団が向かっています。その船団を護衛するのが今回の作戦です」

ロスマンが指し棒で示すと、現在の輸送船団の位置が指される。

そしてラルが付け加えて言う。

「今回の作戦に参加するのは五名。作戦指揮はクルピンスキー中尉、副指揮は桜井中尉が取れ」

「はい！」

「えっ!? 待つてよ、僕が行くの〜?」

洋介はすんなり返事をしたが、クルピンスキーは乗り気ではなかった。

その反応を見越してか、ロスマンは一枚の写真を取り出して説明を加える。

「船団には非常時用に一人、ブリタニアのウィッチが同行しています」

そう言つてロスマンは写真をクルピンスキーに見せた。それを見てクルピンスキーは（可愛い……!）と心の中で反応した。

「行きます！」

「おい…」

クルピンスキーの早変わりの様子に洋介は呆れてしまう。
そしてラルは残りのウィッチを見た。

「残りのメンバーは中尉が選出せよ。また、現地で新型ユニットを受領し戦力強化後、護衛を行うように」

「新型!?!行く行く!俺が行く!」

新型ユニットという言葉に今度は直枝が反応した。

「じゃあ残り三人は直ちゃん、ニパ君、ひかりちゃん」

「えっ!? 私もですか?」

「ムルマンか…遠いなあ…」

ひかりは自分が指名されると思わず驚き、ニパはムルマンまでの距離を頭で想像して大変そうだったといった反応をする。

勿論、この選出は洋介もある程度推測ができた。

「(管野、ニパ、ひかり…なるほど、最年少組への経験か)」

ウィッチは基本的に20歳であがりを迎えてしまい、殆どは魔力が無くなってしまふ。そうなってくると、次世代のウィッチ達が今度は引つ張っていく番になる。それを見越してクルピンスキーが選出されたと考え、洋介はいつものあのクルピンスキーから考えを少し改めたのだった。

そして夜、洋介は軍刀の素振りや射撃の練習をしていた。生き残るためにも昔の感覚を思い出す必要があった。

洋介が射撃所で九九式13ミリ機銃、四式自動小銃の射撃練習をしている時

「おや？洋介君じゃないか」

「どうも、クルピンスキーさん。クルピンスキーさんも射撃練習ですか？」

「まあね」

そこに現れたのはSTG44自動小銃を持ったクルピンスキーだった。

それからしばらくは二人で射撃練習をしてると

「そういえば聞いたよ。君と亜弥君は、次のグリゴリー攻略後、扶桑に転属になるらしいね」

「ええ…」

ラルの指示で、扶桑政府から桜井洋介、亜弥の両名が扶桑皇国に赴く電報を受け取った。

しかし、ラルは洋介と亜弥を502に留まる書類を偽造して損ねていた。

「君が502にいなくなると基地も少し寂しくなるな」

「はは…そうですね。確かに少し名残惜しいところがあります」

「じゃあ、ここにいます？」

「それはちよつと無理ですね。扶桑がもう決まってしまったことですし」

「そうかー！」

そういうとクルピンスキーは少し寂しそうな顔をする。

「珍しいわね。桜井さんはともかくあなたが隠れて特訓なんてね」

いつの間にかロスマンが後ろにいた。

「こんばんは。ロスマンさん」

「やあ、先生。また深夜にデートのお誘いかい？」

「桜井さん、話はラル少佐に聞きました。一時扶桑に転属になるらしいですね」

クルピンスキーの言葉をあつさり無視し、洋介のところに来る。

「はい、予定としてはグリゴーリを討伐した後です」

「転属続きで大変ね」

「いえ、向こうの世界でも転属ばかりでしたからもう慣れましたよ」

「へゝ初耳だねゝ、向こうではどんぐらい転属したんだい？」

「そうですね…まず、空母瑞鶴に半年。そしてアジア最前線であるソロモン諸島のラバウルに1年半、そして再び空母瑞鶴に配属、フィリピンに4ヶ月、その後内地で防空任務。大体5回くらいですかね」

「結構、異動してるね…」

「そういえば、桜井さんのいた世界では人同士の戦争でしたね…いつから戦っていたんですか？」

「17歳です、かれこれ3年間ずっと戦っていたな…」

話によると、ロスマンは1937年のヒスパニア戦線から7年。

クルピンスキーは1939年から5年間戦い続けている。それと比べると短いが見ても洋介はベテランといってもいい経歴だ。

「そう、桜井さん。あなたは元の世界に戻りたいと思ったことはないの？」

ロスマンが質問する。

「そうですね……昔の俺ならそう思ったかもしれませんが。ただ、今は違います。俺にはこの世界で離れた家族と再会して、大切な人ができた。」

「それは、下原少尉のことと亜弥ちゃんのことですか？」

「ええ、それに。501にいたとき、坂本少佐にも言ったことなのですが、あの世界での俺の役目は終わったと思っています」

「終わった？」

「ええ。俺がこの世界に来る前、もう戦争は終わりました。ですから俺がいなくても、次の世代連中と生き残った戦友が頑張ります。だから大丈夫です」

「そう…」

「ロスマン先生、一つ頼みがあります」

「え…？なんですか？」

「実は、亜弥にウィッチの飛行法を伝授させて下さい」

洋介はロスマンの前に頭を下げた。

対するロスマンは、洋介の言葉で何も言わなくなった。するとクルピンスキーは何か思い出したように呟いた。

「そういえば洋介君、亜弥ちゃんは今どこ？」

「どこって…俺の部屋で寝ているが…？」

「いや、この前先生のところで一緒に寝ていたでしょ？だから今回もそうだったら忍び

込んで寝込みをおそ…」

ゴンッ

ドガッ

「うぎゃー」

クルピンスキーがそう言った瞬間、クルピンスキーはロスマンや洋介に鉄拳制裁されるのだった。（洋介は少し手加減）

そして翌日、格納庫。

出撃メンバーはユニットを履いて準備をしていた。しかしそんな中、ニパのユニットと同時に黒煙が少し出てきていた。

「おい、大丈夫か？それ…」

「うーん…1000キロ持ってくれよ」

「1000キロか、かつてのラバウルからガ島、鹿屋基地から千歳基地の長距離飛行を思い出すなあ…」

直枝が聞くが、二パは大丈夫と言い切れず神頼みをする。

洋介はかつて南方の戦場と内地の長距離飛行を少々思っていた。
そしてひかりは

「〜♪」

昨日クルピンスキーからもらったリベレーターを紐を通して自分の首からぶら下げていた。

直枝はそれに気づきひかりに聞く。

「おめえ、それ持っていく気か？」

「いいでしょう♪あげませんよ」

「死んでもいらねえ…」

「仮にあげるとしたら、洋介さんにあげたいです！」

「そ…そうか…（…リベレーター拳銃…フィリピンのゲリラに悩まされたもんだ…）」

洋介は一時、陸戦隊としてフィリピンのジャングルにてアメリカ軍、フィリピンのゲリラに悩まされた苦い思い出があった。

嘘のお守りなど何が起こるかわからないため、直枝は欲しくなく、洋介は苦笑する。

「お父さん、ひかりお姉ちゃん達、気を付けてね〜！」

「ありがとう、亜弥ちゃん！」

「おう、亜弥！ムルマンの土産、楽しみにしとけ！」

励ましの言葉でひかりと直枝は亜弥に向かって返事を返した。

「亜弥、ロスマン先生の指導する訓練、頑張るんだぞ！もし、無理だったらお父さんが進言するから…」

「お父さん、亜弥も決めたことは絶対にやり遂げる、みんなを守るウィッチになるから！」

「そうか…フツ…」

亜弥の真剣な眼差しで、洋介は微笑んだ。

そしてクルピンスキーは、先ほどから机の前で真剣な表情をしていた。

「むう…」

「指揮官に選ばれたから、さすがにクルピンスキーさんも真剣ですね」

「ニセ伯爵の真剣って、なんか碌でもなさそうなんだよな…」

ひかりはそんなクルピンスキーに感想を述べるが、洋介はその表情を見て嫌な予感を感じていた。

「夜空の星…いや、大輪の薔薇…違うな」

案の定、クルピンスキーはロスマンから渡されたブリタニアウィッチの写真を見てそんな事を考えていた。

「ねえ、ひかりちゃん」

「伯爵様？」

クルピンスキーはひかりに聞こうとするが、それを後ろから威圧のある声が止めた。

「ういつ!?先生…これは…その…ぐえっ!」

クルピンスキーは懸命に言い訳をしようとするが、その前にロスマンからの制裁を受けたのだった。

それを見て、洋介は「やっぱりな…」と呟いたのだった。

その後、洋介達は発進、ムルマン港に向かった。

そんな中、クルピンスキーは飛行しながらもブリタニアウィッチのことでいっぱいだった。

「早く会いたいな♪ブリタニアの子猫ちゃん♪」

「楽しそうですね、クルピンスキーさん」

ウキウキしているクルピンスキーにひかりが話しかける。この状態のクルピンス

キーに話すのはひかりだけである。

「ああ、当然ひかりちゃんと亜弥君も可愛いよ。でも、この子うちの基地には居ないタイプでさ〜」

そんなひかりにクルピンスキーは手に持つ写真を見せる。ひかりは苦笑いしているしかない。

そしてその会話を、前方で聞く三人は耐えていた。

「さつきからずつとあの調子だよ…」

「くそ〜…殴りてえ…」

「我慢しろ…むしろ、今はひかりを讃えてやれ…」

「うん、洋介さん…」

三人は、クルピンスキーのマイペースに対して相手をしてあげているひかりを心の中で讃えた。

もしひかりが相手しなかったら、自分たちにそれが飛んでくるのだから。

ペテルブルグ基地

自身専用のストライカーユニットを持たぬ亜弥はエディータ・ロスマン曹長の指導を受けていた。

使い魔のエゾオオカミを発動、九九式機銃を抱えて基地周囲をランニングをした。ただ走るだけではなく、用意された障害物にぶつかった。

「亜弥ちゃん、あと5周よ!!」

「はい!!……はあ……はあ……（つらい……だけ……ど……戦場は怖いところで……お父さんたちは戦っているんだ!!……なつてやる……）超一流のウィッチになつてやる!!」

亜弥は狼の如く、空に向けて叫んだ。

そして、洋介たちは途中数回の休憩を挟み、1000kmの長い道のりを越えて、ムルマン基地に到着したのだった。

「あゝ、遠かつた……」

「やっぱり1000キロは疲れるな」

ムルマン基地に付いた洋介達、クルピンスキーとニパは長旅の疲れを感じていた。洋介も黙ってはいたが、同じように疲労は感じていた。

そんな中、ひかりはまだ元気だった。

「私はまだまだ行けますよ！」

「お前はそのまま飛んで扶桑に帰れ！」

誰よりもスタミナのあるひかりの言葉に反応して直枝が意地悪を言う。

それに対してひかりは両手の人差し指を口に持っていていき、「いーっ！」と直枝に言う。

そんな風に五人は歩きながら、ムルマン港に積み上げられた物資を見ていた。

「いや、凄い量の物資だね」

「これにまだ追加があるんですよね？」

「ああ、これでもまだ一部だからな。今回の船団が大規模なものも領けるな」

クルピンスキーとひかりは物資の量を見ておったまげたという感じに、洋介はこれだけの荷物に追加であるのだから、今回の作戦がいかに重要なものを再認識する。

そんな中、ニパはあるものに気づいた。

「ねえ、何？あのでっかいの」

「すげえな、戦艦でも作ってんのか？」

直枝たちの視線の先には、物資の中に混じって置かれている巨大な機械があった。それはパツと見、大口径砲の装填装置のようである。

「あれは……！」

と、クルピンスキーが何かに気が付いたようである。

「陸戦ウィッチのカワイ子ちゃん発見！いいねいいね〜！」

「またかよ…」

しかし、それは先ほどの機械ではなく、その横に数名居た陸戦ウィッチの姿だった。体をくねくねとさせながら喜んでゐるクルピンスキーを、直枝は呆れたように見る。

「へえ〜！…あれが陸戦ウィッチか…初めて見るな」

洋介は今まで航空ウィッチしか見た事が無いため、陸戦ウィッチを初めて見た洋介はその姿を見て少し新鮮な雰囲気だった。

そして、五人はムルマン基地の大きな倉庫に向かってゐた。そこには、補給船団によつて運ばれた新型ユニットが置いてある。

そして様々な荷物が積みあがる倉庫に到着した後、彼らは中を歩いていく。

「確か、ここに補給ユニットが…あったあった」

そして格納庫内の奥まで歩いていくと、そこには固定台に固定された二つのユニットがあった。

直枝はそれを見てはしゃぐ。

「やったあ！俺の紫電改だ！これさえあればネウロイなんてイチコロだぜ！」

直枝は自分の目の前に固定されている紫電改を見てそう豪語する。

実際、直枝が通常使っているのは零式であり、紫電改は新型である。

無論新型の方が性能向上が図られるため、こう豪語できるのも頷ける。

「ピカピカだ〜」

「こっちのK型は僕のだね」

そしてクルピンスキーの言ったK型は、メツサーシャルフ社が開発した新型ユニットであり、クルピンスキーが使っているG型の性能向上型である。

そんな中、ひかりは固定台の横にある箱が気になる。

「他の箱は何ですか？」

「ラル隊長とロスマン先生用だね」

クルピンスキーがひかりの疑問について説明する。

箱の中に入っているのはクルピンスキーに支給されたK型と同系のユニットが入っているのだ。

「いいなあ、新しいユニット」

「じゃあ、ニパ君はこれを使って」

ニパは周りに新しいユニットが支給されていることを羨ましがる。それを聞き、クルピンスキーが提案した。

「ええっ!?でもそれクルピンスキーさんのでしょう?」

「ニパ君のは壊れちゃったから仕方ないよね」

ニパはクルピンスキーの提案を受けて驚くが、彼女のユニットがムルマン基地に到着した時に壊れてしまったため、現在ユニットが無い状態である。そのため、クルピンスキーはこの新型をニパに譲ろうとしたのだ。

そんな中、先ほどからずっと黙ってた洋介に周りが気付く。

「どうしたの、洋介さん?」

「…いや、俺宛の荷物もある」

「え……？」

洋介は箱の前に立ち、蓋を開けて中身を確認した。

「…零式戦闘脚54型…」

洋介の使用ユニット64型をベースに製造されたユニット。箱の中に同封された手紙を読んだ。

『桜井へ、お前の零式ユニットを量産するために、扶桑の技師に頼み込んだが、魔導エンジンの製造に関して、見たことがない部品ばかりで製造が難しく、機体に関してもかなりの手の込んだ造りになっていた。

我が扶桑の零式ユニットと、完成した魔導エンジンで組み立てた1機のみになった。これで、獅子奮迅の活躍を祈る！ 扶桑皇国海軍少佐 坂本美緒 』

「坂本さん、ありがとうございます。ですが、54型のユニットは僕の娘の亜弥に使わせ

て頂きます」

『追伸、ユニットの胴体の国籍マークだが、お前の異世界の扶桑の赤い丸を施した。』

「ああ、本当だ。しかし坂本さん、赤い丸ではなく、日の丸ですがね…おつと…」

洋介が坂本からの手紙を読み終えた時、直枝とニパのウィッチが受領したユニットを履いて飛行していた。飛行する突風にて、略帽が飛ばされるのを片手で抑えた。すると、洋介はボトルを片手に飲むクルピンスキーを目の当たりにした。

「おいおい、クルピンスキー。この明るい時間でなに飲んでいるんだ？」

「んゝ♪やあ、洋介君。補給物資の中に、僕の大好きなブドウジュースを飲んでるんだよ♪」

「どうだか……」

「洋介君も一緒に飲む？ 美味しいよぉ♪」

「輸送船団の護衛任務を達成したらな、程々にしておけよ……！」

呆れた顔をしながら、インカムを片耳に装着した。

「おうっ二人とも、調子はどうだ!？」

「『洋介さん、もう最高だよー!』」

「『おれも最高だ!! おい、洋介! この新型ユニットを手に入れたから、再び模擬空戦に挑戦させてくれっ!!』」

「わかったわかった! だがな、この船団の護衛任務を終えたらな。(…亜弥、…どうしているか…?)」

新型ユニットを確保した直枝は、再び洋介に模擬空戦の挑戦を申し入れる時、洋介は

任務を終えた後に承諾する。

夕焼けに染まるムルマンの港から、ペテルブルグの空を見つめる洋介だった。

ペテルブルグ基地

訓練で疲れた亜弥は定子に抱かれ、ベッドで一緒に眠っていた。

「…すうー…すう…」

「亜弥ちゃん、お疲れ様。…洋介さん…船団の護衛任務が終わったら、帰ってきてくださいね…」

定子は亜弥の頭を撫でながら、洋介の無事を祈った。

翌朝

「ほらっ、そこ！」

「はあっ！たあっ！」

次の日、訓練用の銃を使わず、木刀を構えた亜弥は、指導するロスマンが投げつける雪玉を固有魔法、影分身を展開する。

次々と雪玉を叩き落とし、刀身を彼女の喉元に付けた。

「はあ…はあ…どうですか…先生？」

「え…ええ、よくやったわ…亜弥ちゃん…でも、あなたのお父さんの強さまで、まだまだだわ！元の位置に戻りなさい！」

「はいっ！」

そう言ったにも関わらず、ロスマンの身体は震えていた。

「（気のせいなのかしら……亜弥ちゃん、まるで……以前、模擬空戦した桜井さんの相手をしているみたい……このまま成長すれば……）」

第27話 伯爵からの約束

ムルマン港

「そろそろ時間なのに…クルピンスキーさんどうしたんだろう?」

輸送船団護衛の日、格納庫内でひかりは出発前の時間にまだクルピンスキーが来ていないことにどうしたのかと心配をする。

「遅いね…」

「まったく…作戦指揮官が一番遅くてどうする…」

ニパも同じように思う。洋介はリーダーであるクルピンスキーが時間までに来ない

ことに對して、ややイラついていた。

その時、ひかりは格納庫入口の人影に気づいた。

「あつ、来ました!」

その声を聞き全員が見ると、クルピンスキーがやって来た。

「うう…気持ち悪い…」

しかし、その足取りは重く、フラフラとしながら歩いてくるではないか。気持ち悪そうにしながらやって来るクルピンスキーを見て、管野とシュミットはすぐに理解をする。洋介に至っては頭に手を当てて頭痛を感じていた。

「やっばりな」

「典型的な二日酔いだ…だからほどほどにしとけて言ったのに…」

そしてひかりはそんなクルピンスキーを心配して声を掛ける。

「どうしたんですか？ 顔がおかしいですよ」

「それを言うなら顔色がおかしいだろ」

「ああ…ひかりちゃんは今日も可愛いね…」

クルピンスキーは酔った状態でひかりを見て、開口一番にそう言った。

その様子に洋介は軽くため息しながら、さらに頭を痛めた。

「これから船団の護衛に行くのに…」

「ちよつと休んでた方が…」

ニパはこれから任務に着くというのにまるで頼りないクルピンスキーを見て困った様子で言う。ひかりはそんなクルピンスキーの体を氣遣って休んだ方がいいのではと

いうが、クルピンスキーは拒否した。

「いや！どうしても行くんだ」

「中尉…」

クルピンスキーの言葉にニパは思わず打たれかかる。しかし、次の言葉は完全にそれを台無しにした。

「ブリタニアのカワイ子ちゃんを迎えに行かないと…！」

「海に捨てようぜ…」

「もうそれでいいんじゃないか…？」

この状況下でもぶれないクルピンスキーに管野が言ったので、洋介は彼女の言葉に同感した。

そして予定通り出撃をした五人であるが、クルピンスキーは二日酔いの結果最後尾でフラフラとしていた。

その時、インカムに入電が入った。

「緊急入電！船団にネウロイ襲来！」

「奇襲か！」

「えっ!?そこってネウロイが出ないはずじゃ…!?」

ニパが入電内容を言い、洋介は予想以上にネウロイが速かったことに自分の読みが浅はかだったと思う。

そしてひかりは現在船団がいる海域が安全圏であるのにネウロイが出たことに驚いていた。

「出たんなら出たんだろ」

「戦場では何時、何が起こるかわからないもんだな」

「とにかく急ぐぞ……うわあっ?」

直枝が全速力でネウロイに向かおうとした時、横から高速で通り抜けるクルピンスキーに驚いた。

一瞬のことではあったが、洋介はクルピンスキーの表情が見え、そこにあったのが先ほどの酔いどれと大違いだったことに驚いていた。

「急にどうしたの?」

「ブリタニアの子が危ないって言ってましたよ」

ひかりの説明を聞き、洋介は納得した。

「相変わらずだな……」

「俺達も行くぞ！」

洋介の言葉と共に、スタートが遅れた洋介たちも急いで輸送船団に向かったのだった。

そして現在、輸送船団は突然現れたネウロイの攻撃にさらされていた。

「間に合え…間に合え…!!…あつ…」

ネウロイのビームは何と、旗艦の艦橋の目の前で突如拡散していき、周りの海に落ちていく。

それにより、旗艦は直撃を受けることは無かった。

「こちらは第502統合戦闘航空団、クルピンスキー中尉！これより船団を援護する！」

ビーム攻撃が拡散したのは偶然ではない。クルピンスキーが咄嗟にビームと艦の間に入り込み、シールドを展開したのだ。

そして、洋介たちも到着し、ネウロイに向けての攻撃態勢を整える。

「よし…なにつ!？」

その時だった。球体形状をしていたネウロイは突然、その体を分裂させたのである。その数は3個。しかし大きさはそれぞれ違い、一つだけ他より小さかった。

「分裂しやがった!？」

「直ちゃん、ニパ君、左側のネウロイをお願い」

『了解!』

クルピンスキーはすぐさま直枝とニパに命令をする。

「クルピンスキー、俺は中央の少ない奴に単独で行く。ひかりはクルピンスキーと共に右側のネウロイを」

「了解！ひかりちゃんは僕について来て！」

「はい！」

洋介はここで提案をする。そしてクルピンスキーはそれを受け入れ、ひかりを連れて右側の分裂したネウロイに向かう。

洋介は単独でネウロイと格闘し、四式自動小銃と九九式十三ミリ機銃、南部十四年式拳銃で狙い撃ち、さらに軍刀鷹狼で斬り落とした。

五人はそれぞれネウロイに向けて向かう。すると、三つに分かれたネウロイはさらに小型のネウロイを無数に排出する。

「うわあ！いっぱい出てきた！」

「行くぞ」

先に命令を受けて行動をしていた管野とニパが接敵をする。直枝は先制攻撃で無数に現れたネウロイを攻撃する。

しかし、その弾丸でもいくつかのネウロイを逃してしまう。

「逃した!」

「任せろ!」

そこをニパがフォローに入り、取り逃したネウロイを的確に撃ち落としていく。かなり厳しいはずの状況ではあるが、二人は楽々とこなしていく。

「なんだ、楽勝じゃねえか」

「新しいユニットのおかげだね」

そう、彼女たちがここまで楽に戦えるのは、新型ユニットの性能によるお陰であった。再びネウロイが攻撃をするが、それでも二人は次々と墜としていく。

洋介は分裂した中で小さいネウロイに向かっていた。しかしここでもネウロイは小型のネウロイを大量に排出してくる。

「(奮発した数だな、501の時のキューブ型ネウロイ戦みたいだな!)」

洋介は現れた小型のネウロイを見てそう思いながら、かつてブリタニアの戦場を思い出していた。

「いくぞー!」

洋介はネウロイに向けて突撃する。幸いにも、小型のネウロイに特別な攻撃は無く、これらは高速で船団に向かおうとしていた。それを洋介は的確に撃ちぬいていく。

「:10::14::19::」

ここでも、洋介は撃墜数を重ねていく。ウィザードの実力を発揮しており、全力を出しているため今までより動きが格段に良くなっており、ネウロイは次々と撃墜されてい

く。

しかし、洋介の一方的な撃墜にはさらに別の理由があった。

「…右上方20…左上方18」

洋介は波導を使い、そのおかげでネウロイの細かい位置や進行についても見え、世界がスローモーションに流れている。

そのおかげで、洋介はネウロイを効率良く、そして素早く撃ち落としていくのだった。そして、クルピンスキーとひかりも、ネウロイに攻撃を開始する。

「ひかりちゃん、背中には任せたから、絶対に離れちゃダメだよ」

「はい！」

いつもより真面目に命令をするクルピンスキーにひかりは返事をする。ネウロイはここでも小型のネウロイを排出してくる。それを、クルピンスキーが先頭に立ちネウロイを撃ち落としに向かう。

そして次々と小型ネウロイを撃墜していくクルピンスキーであるが、ひかりはそんなクルピンスキーに驚いていた。

「凄い……ついていくのがやつとなのに……！」

そう、クルピンスキーの攻撃速度は速く、そして鋭い。ひかりはそんなクルピンスキーについていくのがやつとである。

洋介たち五人は、粗方子機ネウロイを倒した。しかし、ネウロイは再び子機ネウロイを出してくる。

「参ったな……キリが無いよ」

クルピンスキーがそうぼやくが、それでもすぐさま攻撃をしていく。その間にも、輸送船団はムルマン港に向けて進路を変えていき、護衛艦は対空戦闘で子機ネウロイを墜としていく。

しかし、全力で戦っていたウィッチ達の壁に、綻びが生まれた。

「やべえ、親機に抜かれた！」

「子機が邪魔で追いつけないよ！」

直枝とニパが戦っている場所で、親機が移動をし始めたの。直枝たちは子機に足を止められ、その追跡ができない。

「くそつ、マリアナ沖海戦を思い出すな!!…ひかり…クルピンスキー…」

洋介が多勢のネウロイに手こずる中で、ひかりとクルピンスキーを目の当たりにした。

「ひかりちゃん、ちよつと直ちゃんたち手伝ってきてくれるかな？」

「えっ!？」

突然の言葉にひかりは驚く。

「でもクルピンスキーさんは!？」

「大丈夫大丈夫、あとは僕一人で何とかなるって」

クルピンスキーはそう言う。実際、クルピンスキーとひかりの迎撃したネウロイは既に子機を失っており、残りは親機のみであった。

しかしひかりはそれでも一人だけで戦わせることになるのは嫌だったのか、首にかけていた物をクルピンスキーに渡した。

「じゃあ……このお守り持ってくださいー!」

ひかりが渡したのは、首からかけていたりベレーターであった。クルピンスキーの嘘を信じ込んでお守りにしていた物を、ひかりはそれをクルピンスキーへのお守りとして渡したのだ。

クルピンスキーは一瞬驚いた後、それを受け取った。

「…ありがとう、ひかりちゃん。これがあれば百人力だよ」

「じゃあ、行つてきます！」

そしてひかりは直枝の手伝いに向かう。残ったクルピンスキーは、ひかりに渡されたリベレーターを見る。

「ふつ、弾も入っていない銃がお守り、か…」

「万が一だがクルピンスキー、心臓部の上に重ねておけ…」

「ふふつ、そうだね」

洋介がインカムで連絡し、クルピンスキーはおかしく感じながらも。それを胸ポケットに入れると、クルピンスキーはネウロイに向かった。

「さて、ここは絶対通すわけに行かないね」

そう言うクルピンスキーではあるが、親機は足掻きと言わんばかりに再び子機を出す。

「とか、カッコつけたけど、ちよつと厳しいかな…やるしかないね！」

そう言うのと、クルピンスキーは自身に固有魔法をかけた。

「マジックブースト！」

マジックブースト、それはクルピンスキーの持つ固有魔法であり、一時的に超加速を得ることのできる固有魔法である。

クルピンスキーはそのままネウロイに向けて突撃した。

そしてその頃、ひかりは直枝とニパの所に合流した。

「ひかり!!?なんで!!?’

「おめえ！あつちはどうした!？」

「クルピンスキーさんが応援に行けって！」

ニパと管野は案の定驚くが、ひかりの説明を聞くと今度は別のことに驚く。

「ええっ?!じゃあクルピンスキーさんは1人!？」

「こいつと同じのを一人で相手してるのか!?!くそつ、カッコつけやがって!…洋介はどこだ…!？」

そして、ひかり達三人は子機のネウロイを攻撃していき、ついにすべてを撃墜し終える。そしてそのまま親機である大型のネウロイに向かい、その銃弾を思い切り浴びせる。

「どけどけどけ！」

そして大型のネウロイは、ついにその姿を光の破片に変える。

「やった！」

「待って！コアなかったよね？」

「つてことは……こいつは本体じゃねえ！」

ひかりが喜ぶが、ニパはその中にコアが無いのに気づく。そう、彼女たちが戦っていたのにはコアが無かったのだ。

その頃、一人になったクルピンスキーは単独でネウロイと戦っていた。

しかし、それはあまり優勢と言える状況では無かった。

「あと少し……持つてよね」

ユニットからの悲鳴を聞き、クルピンスキーはそう念じる。マジックブーストは瞬間

的に超加速を得る代わりに、ユニットへの負担が増大する。

と、そんなクルピンスキーに助けがやって来る。

「おつ、洋介君！」

「こっちは片づけた！加勢するぞ、クルピンスキー！」

洋介が飛来。彼は一人でネウロイに向かい、そしてネウロイを倒して援軍に駆けつけてきたのだ。

すぐさま洋介も固有魔法をユニットに掛ける。

「いくよ、洋介君！」

「言われなくてもだクルピンスキー！！絶対に生きて帰るんだぞ！！」

「わかった！洋介君、ちゃんと帰ってきたら、僕の望み聞いてくれる？」

「いいだろうー！」

そして彼女は洋介の言葉でニヤケながらユニットにブーストを掛けてネウロイに突貫した。

一人より二人、さらに洋介は小銃と機銃の二挺で、ネウロイは一瞬にして墜とされる。しかし、ここでクルピンスキーのユニットの左足から火が出る。マジックブーストの負荷に耐え切れなくなったのだ。

「喰らえー！」

洋介はユニットの強化を解除し、機関銃と小銃に強化を掛ける。二丁から放たれる弾丸は、ネウロイの装甲を大きく削っていく。しかし、それでもまだコアの位置が特定できなかった。

その時だった。洋介の後ろから、飛来物がやってくる。それは何と子機のネウロイであり、洋介が後ろを振り返ると、クルピンスキーがおり、洋介はあの子機はクルピンスキーが弾き飛ばしたものだと言いつつに理解する。

そしてそれは親機に吸い込まれていき、その装甲を大幅に削り取る。そしてそこに、

コアが露出した。

「コアだ！」

それに気づき、クルピンスキーは手に持っていたSTG44に外付けしたロケット弾を発射する。

ロケット弾はそのままネウロイのコアに吸い込まれていき、コアを破壊、そして今度こそネウロイをひかりの破片に変えたのだった。

ネウロイを撃墜したクルピンスキーはホッと息を吐く。

「はあ…」

「クルピンスキー!!」

その時、洋介はクルピンスキーの名を大声で叫ぶ。その声に気づいて顔を上げると、なんと目の前に消滅したはずの子機が一機、突撃してくるではないか。

「しまっ…」

クルピンスキーは反応が来ず、その攻撃をともに胸元に喰らってしまい、そして落ちていく。洋介はすぐさまその子機を撃墜した後、落ちていったクルピンスキーの下へ向かった。

「クルピンスキー！」

名を呼んで駆けつけ——そして安心したように肩の力を抜いた。

クルピンスキーは意識がある。それもしつかりと。海におおむけで浮かんでいるクルピンスキーは、右手を自分の胸ポケットに入れ、そして中から先ほどひかりにもらったリベレーターを取り出した。

「ありがとう、ひかりちゃん。助かったよ」

ひかりからもらったリベレーターがネウロイの突撃を防いだのだ。その証拠に、リベレーターに凹みができている。

それを見て、洋介も察した。

「…嘘から出たまことと言うべきか。運が良かったな、クルピンスキー」

「まあね…」

「後でひかりにしつかりと礼をしておくことだな」

そう言つて、洋介は手を差し伸べた。クルピンスキーもその手を取り、洋介に引き上げられる。

「さて、まずは病院か？足、罫が入つてゐるんだろ？」

「ははっ、お見通しかな？優しくお願いするよ、洋介君？」

「生憎、その保証は出来ないな、伯爵」

そうやって、洋介はクルピンスキーを抱えて飛行をするのだった。

「ねえ、洋介君」

「なんだ、クルピンスキー…」

「僕は生還したんだから、約束を…」

「そうだな、ウィザードに二言は無い。何が望みだ？」

「それはね…」

「な…なんだと!？」

次の日の夕方、クルピンスキーを除く3人のウィッチと1人のウィザードがペテルブルグ基地に帰投する。

護衛部隊、副指揮官の桜井洋介はラルに輸送船団護衛達成と、クルピンスキーが負傷した報告を終えた後、廊下で洋介は泥まみれの亜弥と再会した。

「…お父さん……」

「ん…亜弥…半歩でも…近づいたな…」

「うん！」

「洋介さん！」

「わわっ…！定子…／／／」

洋介が亜弥の頭を撫でた時、廊下から定子が駆け付け、洋介を抱きしめた。

「よかった…よか…ん…これは？」

定子は洋介の上着から落した写真を拾った。

それは、負傷したクルピンスキーと船団護衛のウィッチ、直枝とニパ、ひかり。

そして女装し、看護婦姿の桜井洋介だった。

「あの…洋介さん…これは…？」

「ご…誤解するな…負傷した…クルピンスキーの注文だ…／／…僕からの生還命令での引き換えだ…」

その言葉を聞いた定子の身体が震えていた。

「…定子…好きでこの女装になった訳では…」

「洋介さん、いつか…わたしの前で女装姿をお願いします!!」

「わわっ!!それだけは勘弁を〜!!」

定子の目が、今まで以上に輝かせながら洋介に抱きしめられた。

「わたしも見たい!沖田のお兄さんのアルバムで写っていたのを見たよ〜♪」

「沖田……進次郎のか……そうか……って、あの野郎〜!!余計なことを〜!!進次郎〜!!クルピンスキー〜!!」

洋介は、かつての戦友だった沖田進次郎に怒り叫び、亜弥と定子は彼に抱きしめながら嘆願した。

第28話 ブレイクウィッチーズ

「管野さんはそこに正座！」

格納庫内、直枝はサーシャに正座をさせられていた。

「うゝ…」

「あゝあ…」

直枝は正座をさせられて膨れる。

その様子を、格納庫入口の扉の影からニパとひかり、そして直枝を救助して、帰還した洋介と亜弥の姿があった。

整備兵は直枝のユニットを点検し、そしてサーシャに報告した。

「インテークから入ったネウロイの破片のせいで、魔道タービンが破損したようですね」

「管野さんも中尉になったんですから、もっとユニットを大事にしてください」

そう、今回正座させられたのは、直枝が新型ユニットである紫電改を壊したことから始まる。

新ユニットを渡された5人は、慣熟訓練を行っていた。その時に、ネウロイと遭遇してしまい交戦状態に入ったのだ。

ネウロイは防御型であり、銃弾が通りずらかったため、洋介が軍刀の鷹狼で斬ろうにも、直枝が出しやばり固有魔法を使いネウロイに突っ込み、そしてネウロイを貫いて消滅させた。しかしその結果、直枝はユニットを壊してしまったのだった。

サーシャが注意をするが、直枝はあまり反省した様子は無かった。

「階級なんて関係ねえ！ネウロイをぶっ倒せばそれでいいだろー！」

「はあ…ひかりさん、亜弥ちゃん！」

「は、はい！」

「なんですか…？」

突然サーシャに言われて、ひかりと亜弥は慌てて返事をする。

「あなたたちはブレイクウィッチーズなんて言われちゃダメですよ」

「ブレイク…ウィッチーズ？」

聞きなれない単語にひかりはハテナを浮かべながら説明を聞いた。

「まず、その二パさん」

サーシャがニパの方を見る。

「わ、私は壊さないよ！壊れるんだ！」

ニパは必死に訴える。しかし、彼女の不運さはある意味狙っているのではないかと思えるほどである。

「それから、管野さん」

「ふん！戦果は上げてんだろ。ブレイク上等だ！」

直枝に至っては戦果が上回ってるのだから、ブレイクしたって別に構わないだろうと、堂々と反省の色は無し。

「そして、療養中のクルピンスキーさん」

流れたのか、彼女はこの時「はつくしよい！」と、くしやみをしていたのだった。

そして、洋介が締めを括った。

「まあ、そう言うわけだ。補給が来たばかりだから、ひかりと亜弥もユニットを壊さないようにな」

「は、はい！」

「うん、お父さん！」

そう言う洋介に返事をするひかりと亜弥。

しかし実は彼以外知らない事実として、洋介は501にいる時に、ネウロイ化した空母赤城、ウォーロックとの戦いでユニットを1回壊して、502では観測ネウロイとの戦いにて、損傷を受けた。

ユニット消耗具合を知ってから、出来る限り壊さないよう努力をしていたので、実際の所はあまり偉そうに言えないのが現実であった。

――――――――――

「直枝お姉ちゃん、大丈夫…？」

「すまない亜弥、イテテ…まだ痺れが収まんねえ…」

その日の夜、直枝はしびれる足を引きずりながら、亜弥が彼女を支えながら廊下を歩いていた。

その痛みに苦痛の表情をしていた直枝であるが、ふと目の前に人影が見える。

「？」

よく見てみると、それはひかりだった。

「ひかりお姉ちゃん！」

「雁淵…こんな時間にあいつ…？」

ひかりが歩いていった方向は格納庫であった。直枝と亜弥はひかりが何故この夜中に格納庫に向かうのか気になり、付いていく。

そして格納庫を覗くと、ひかりは自分のユニットの前で膝を抱えてしゃがんでいた。

「チドリ…あれから連絡が無いんだけど、お姉ちゃん大丈夫かな…?」

ひかりは愛機のチドリに聞く。その言葉は、格納庫で見っていた直枝が出て答えた。

「心配すんな。孝美は簡単にくたばる奴じゃねえ」

「管野さん」

ひかりは直枝に気づき立ち上がる。そして直枝はひかりに説明した。

「孝美はハンパなくつええからな。呉の海軍学校で初めて会った時、俺の相棒はコイツしか居ねえって思ったぜ」

「管野さんの相棒…それって、私じゃダメですか!？」

ひかりは、自分が直枝の相棒になれるか真面目に聞く。その言葉に直枝は驚く。

「はあ!?!おめえが!?!100年早えんだよ!」

「じゃあ、どうすれば相棒にしてくれます?」

直枝に言われるが、ひかりはそれでも食い下らない。

「そんなの簡単だ」

そして直枝はそれに対して堂々と言った。誰でもわかる単純なことだ。

「強くなればいいんだよ。孝美のようにな」

その言葉を聞き、ひかりはチドリをなでながら話す。

「お姉ちゃん言っていました。ネウロイを倒して世界に平和を取り戻したら、チドリと一緒の旅をしたいって」

「孝美らしいな」

ひかりの言葉を聞き、直枝はそれから孝美つぼさを感じた。

そしてひかりは直枝に質問した。

「管野さんの戦う理由って何ですか？」

ひかりは直枝が何故戦うのか気になり質問した。それに対して、直枝は堂々と宣言した。

「決まってるだろ！どっから来たかわかんねえ変な奴らに好き勝手やられてムカつくじゃねえか！」

「フフツ、管野さんっぽいですね」

直枝の言葉に、ひかりは直枝らしいと感じた。

しかし、直枝はひかりを指差し、そのための決断も宣言した。

「だがな！その為には強くななくちゃいけないえ！今よりもっともつとな！」

「ええっ!?直枝さんは今でもすごく強いじゃないですか!」

直枝がさらに高みを目指すことを聞き、ひかりは驚く。今でも十分強い彼女であるから、それよりもさらに強くなるとはこの時考えもしなかったのだ。

しかし、直枝にはある引け目を感じていた。

「ダメだ！洋介やクルピンスキーの方がずっと強ええ。けど、絶対俺は奴らより強くなって、ネウロイを全滅させてやる！一秒でも早くな！」

そう、直枝は以前の模擬空戦で勝負した洋介、この間の戦闘で、単独で戦うクルピンスキーを見て、現実を突きつけられてしまった。上には上がいる、それを理解してしまった直枝は、今のままではまだだということを実感したのだ。

その言葉を聞き、ひかりは背筋を伸ばして手を上げ、宣誓をした。

「はい！私も一緒に頑張ります！」

「ばーか、お前の力なんて当てにしてねえよ！宛にしているのは、妹分の亜弥だ！」

そう言って、直枝は亜弥を舐しながら歩いて行ってしまった。ひかりはそんな直枝の方を見て、

「いーっだ！」

と、言っただけだった。

「グリゴリー攻略に向け。まず、ペトロザヴオーツクに向かっているネウロイを排除しろ、との軍司令部からの命令だ」

翌日、ブリーフィングルームに集められたウィッチ達は、ラルから命令を下された。

「ペトロザヴオーツクって、この前……」

「せっかく取り戻したのに……」

ひかりと二パはこの間開通させた補給線が、再び脅かされていることを知り衝撃を受ける。

「ということば、このネウロイを倒さない限り……」

「また補給が止まっちゃう……」

「そんな！クルピンスキーさんが怪我までして守ったのに！」

定子とジョゼの言葉に、ひかりはこらえきれずに声を出す。

「要は倒せばいいんだ。そうだろ？ラル隊長」

「ああ、その通りだ」

しかし、直枝は堂々とラルに聞く。それに対して、ラルも無論だと言わんばかりに簡潔に言う。

そして洋介達は出撃する。その中、零式54型ユニットを履いた亜弥の姿があった。彼女は直接実戦に出さず、遠距離からの見物のみの任務だった。

そんな中、ニパは直枝の雰囲気の違いに気づく。

「今日の管野、少しピリピリしてない？」

「一秒でも早く、ネウロイを倒したいんですよ！」

「何で？」

ひかりは昨晚のことを聞いていたため、すぐさまその答えを言うが、二パは何故そうなのか知らないためひかりに聞く。

「（実戦で場数を踏むんだ。倒して倒して、強くなつてやるぜ！）」

直枝は今、自分のパワーアップの為に闘志を燃やしていた。そんな直枝に気づき、サーシャは忠告をする。

「管野さん。新型のユニットにも慣れたからって、あまり無茶しちゃだめよ」

「ああ、わーつてゐるって」

サーシャの忠告を受ける直枝ではあるが、直枝の内面にはまだメラメラと燃える闘志があった。

「……………」

「どうしたの、お父さん…？」

「いや、管野の闘志だが…、初陣時代を思いだす…。」

「ねえ、お父さん…教えてね…初めての戦い…。」

「いずれは話…ん…？」

「ネウロイ確認！まだ動きはありません」

突然、定子の遠距離視が、飛行をしているネウロイの姿を捉えた。そしてその言葉に、誰よりも反応したのは直枝だった。

「管野一番！出る！」

そう言つて、直枝は先陣に立ちネウロイに向けて飛行する。それに続くように、他のウィッチ達も出撃していく。

その行動に気づいたのか、ネウロイは回頭をし、ウィッチ達の方を向く。

「みなさん！距離を取つて！」

「先手必勝！このまま突つ込む！」

サーシャはその行動に警戒をし、全員に散開を命令する。しかし、直枝はその命令よりも先にネウロイに突撃を刊行する。

しかし、ここでネウロイは今までの沈黙から一変、こんどは直枝たちに攻撃をし始める。その攻撃は今まで戦つてきたネウロイとは桁違いであり、全員がシールドを張らざるを得なくなる。

「ぐっ…」

「う…きやあつ！」

「ひかり！」

皆それぞれシールドで守る中、ひかりはそのエネルギーを抑えきれずに弾き飛ばされる。

直枝はそんなひかりにまたかという。

「つたく…何やってんだあいつは！」

「蜂の巣をつついたみたい！」

「これじゃあ攻撃する暇が無いよ！」

定子とジョゼは、この攻撃の嵐に防衛で手いっぱいになる。他の皆も、攻撃に回れずにいた。

そんな中、ロスマンはネウロイの行動パターンを見て、あることに気づいた。

「この攻撃パターン……もしかしたら！」

そう言つて、ロスマンはネウロイの攻撃を避けながら急上昇をする。そして、手に持つフリーガーハマーで狙いを定め、攻撃をする。フリーガーハマーのロケット弾は、そのまま飛翔していき、ネウロイの後部に直撃した。それと同時に、ネウロイの攻撃は止まった。

「やっぱり！ コアだわ！」

「なるほど、あのネウロイはコアを守る形で攻撃をしていたのか！」

「ロスマン先生、さすが！」

誰よりも先に気づいたロスマンに、全員が流石と言う。

「管野さん！」

「おうー任せろー!」

そして、直枝とサーシャが前衛に立ち、ネウロイに接近していく。ネウロイはそれでも攻撃の手を緩めず、ウィッチ達に強烈な弾幕を放ってくる。

「なんて弾幕なの…っ!」

ロスマンはネウロイの攻撃にそう零すが、その時に彼女はある物を見てしまった。

彼女が気付いた先には、洋介が居た。ネウロイに向けて飛行している洋介であるが、その飛行はいつもよりキレがあり。攻撃を回避しているには、固有魔法の波導で次々と回避した。

「凄い…これが、お父さんの戦い方…」

洋介の戦い方を見物する亜弥は恐れながら唾液を飲んだ。

だが、その空域で戦っていた洋介は手こずっていた。

「（くそっ！なんて弾幕だ…まるで…マリアナ海戦のVT信管だ!!）」

ロスマンは頭の中で一つの推測を立てた。

そしてサーシャと直枝はネウロイに向けて接近していく。しかし、弾幕の濃さに自由に接近ができない。

「管野さん！一旦距離を取って！」

「問題ねえ！このままいける！」

「管野さん！」

サーシャが命令をするが、直枝はそれを振り切ってネウロイに接近していかうとする。サーシャがその行動を止めようとするが、それでも直枝は止まらなかった。

「（クルピンスキーと洋介は大型ネウロイを一人で倒したんだ。俺だって…！）」

そして接近していく直枝であるが、突如ネウロイは攻撃パターンを変更し、先ほどまるで弾幕のように撃っていたネウロイであるが、突如その攻撃を収束させる。そして、収束したネウロイの攻撃は、まるで巨大なトンネルのように管野に向かっていった。

「!?」

直枝はその攻撃に急いでシールドを張る。しかし、そのエネルギーは今までの比ではなく、直枝は後ろにノックバツクされる。

その隙を、ネウロイは逃さなかった。ネウロイは先ほどの収束攻撃をもう一発放った。

「管野さん!」

「!!」

サーシャが直枝を呼ぶが、直枝はその攻撃に対処できない。その時だった。

なんとサーシャが直枝に突撃をしていき、サーシャを突き飛ばした。弾き飛ばされた直枝はネウロイの攻撃の射線から抜ける。しかし、そこにはサーシャが取り残されていた。まった。

「間に…合え…!!」

その時だった。サーシャの目の前に、なんと洋介が飛んできた。

そして洋介はサーシャの盾になる形で、ネウロイの攻撃の前に立ち、シールドを張る。しかし、ネウロイの攻撃は生半可なものでは無かった。

即席で張ったシールドは強大な攻撃を受けきれず、洋介は後ろに飛ばされてしまう。そしてそのままサーシャにぶつかってしまうと、ウィザードのシールドをネウロイの攻撃が僅かに超えてしまう。そして超えた攻撃でサーシャのユニットの破片が洋介の両目の目元に付着した。

「ああああ!!」

「きゃあああ!!」

そして、二人はバランスを崩して墜落していく。

「サーシャ!」

「洋介さん!」

「お父さん!!」

墜落していく洋介とサーシャを、直枝とひかりが追いかけていく。そして、直枝はサーシャを、ひかりと亜弥は洋介を空中で掴むことに成功した。

「サーシャ!おい!サーシャ!!」

「うつ…」

直枝は懸命にサーシャを呼ぶ。サーシャは頭から血を流しているが、痛みを感じて僅かに呻き声を出す。

しかし、洋介よりサーシャの方が危険だった。

「洋介さん!!」

「お父さん!!……しっかりと、お父さん!!」

「大丈夫だ……ぐ……痛てえ……目をやられた……」

そしてブレイブウィッチーズは、ウィッチー1、ウィザード1名の負傷を出し、作戦中断。帰還したのだった。

ネウロイの戦闘による負傷を受け、洋介とサーシャは治療を受けていた。

治療には治療魔法を持つジョゼが加わり、両目の怪我の具合が酷い洋介が拒否し、サーシャから治療を受けていた。

治療魔法をサーシャにするジョゼ、その横には定子が付き添いでジョゼの汗を拭って

いた。

そしてしばらくの時間治癒魔法を続けていくと、計器のバイタルが安定していく。

「心拍が安定した。こちらはしばらく大丈夫だ」

「はあ…」

医師がそう言うと、ジョゼは治癒を止める。

その後、洋介も治癒魔法を掛けられた。元々の魔力の高さから、その目の回復に繋ぐことができた。

そして彼女は洋介だけでなく、まだ負傷していたサーシャにも治癒を掛けていかなければならない。ジョゼはすぐさまサーシャの治癒を開始する。しかし、サーシャより軽傷であった分、その時間は先ほどよりは短い時間で彼女のバイタルは安定した。

「こちら心拍が安定した。もう大丈夫だ」

「ふうー…」

医師の言葉に、ジョゼは治癒を終えて一息を吐く。

いつも治癒を加えている時は一人だけのことが多いのに対し、今回は二人、それも二人共がかなりの怪我を負っていたため、顔はいつもより赤く火照っている。

「良かったね、ジョゼ」

「うん」

「洋介さん、よかったです。」

「ああ、定子、ジョゼ。ありがとう！」

そんなジョゼに定子は言葉を伝え、ジョゼもそれに返事をしたのだった。

定子は両目の見えない洋介を看病して、手を握るのだった。

その後、亜弥は洋介の病室に赴いた。

「…お父さん…」

「おう、亜弥か！この通り、目がやられても元気だぜ！」

その日の夜、ウィッチ達は食事を取っていた。しかし、その席には病院に居たクルピンスキーだけでなく、本日負傷した洋介とサーシャの席も空いていた。

そんな中、病室から戻った亜弥、ひかりは直枝の様子に気づいた。

「管野さん？」

「直枝お姉ちゃん…？」

亜弥ひかりの言葉に全員が直枝を見ると、彼女は下を向いたまま食事にあまり手を付けていなかった。

直枝は、今日の二人の負傷のことについて大きな責任を感じていた。

「俺のせいだ……俺が無茶したばかりに、あの二人が……」

「管野の責任じゃないって」

そしてラルは食堂の席に座るものに命令を下した。

「明日、あのネウロイに再攻撃を掛ける。それまで各自、十分体を休めておけ」

そして、食事を終えた直枝は、医務室に向かった。部屋に入ると、手前から2番目のベッドにサーシャ。

彼女は頭に包帯を巻いており、洋介は両目に包帯を付けていた。見た目で重症なのは洋介だった。

そして直枝は椅子を持ってきて、サーシャの眠るベッドの横に座った。その時、ひかりが医務室に入ってきた。

「管野さん」

「雁淵か…何だ？」

「サーシャさんと洋介さんのことが気になって…」

「洋介なら、下原と亜弥が看病している」

ひかりが振り向くベッドでは、洋介が食事を摂るにも、定子と亜弥の手助けでスプーンを口に入れていた。

「おいおい、定子…僕は赤ん坊じゃ…ムグ…」

「ふふふダメですよ洋介さん。その怪我で私と亜弥ちゃんがいなければ、食事もまともに出来ないじゃないですか」

「そうそう、いつも戦ってくれているから、暫くはわたしと定子母さんに頼つてよ！」

「あ…ああ…／／／／」

そう言つて洋介は病室にいるみんなの前で赤面、ひかりはベッドに眠るサーシャを見る。その時だった。

「…うん…?」

先ほどまでベッドで寝ていたサーシャが瞼を開けたのだ。そしてサーシャは自分の傍にいる二人に気づく。

「管野さん…ひかりさん…」

「サーシャ!」

「サーシャさん!」

「サーシャお姉ちゃん!」

直枝とひかり、定子と亜弥はそんなサーシャに驚き声を上げる。そして、サーシャはどこか安心したように話し始めた。

「管野さん…あなたは無事だったのね」

「ああ、おかげでこの通りピンピンだぜ」

「よかった…」

「でも、桜井さんが…」

「サーシャさん、俺はこの通り無事だ」

サーシャは両目を包帯で巻かれ、負傷した洋介の姿を目の当たりにした。

すると、彼女は固有魔法を発動、映像記憶でネウロイの戦闘に、サーシャが落とされた時に洋介が救助の際に敵のビームでサーシャのユニットが損傷、飛び散った破片で洋介の両目が負傷した。

「桜井さん！……うう……ごめんなさい！……ごめんなさい！私なんかの為に両目を……」

サーシャを助ける為に、洋介の両目が負傷した責任で彼女は頭を下げ、謝罪した。

「僕は軍人として失格だが、人間としてやる事をした。……それに、目を負傷したのは二回目だ」

「二 二回目!?」

「亜弥、お前の能力を」

「あ……はい！」

洋介は少しでも戦闘の参考になる為に、亜弥を招き、右手を彼女の頭に手を伸ばした。病室の景色が、かつての北方の千島列島の占守島上空、オラーシャソビエトロシア軍との戦いで不慣れな敵機の戦闘で片目を負傷、そのまま魔女の世界へ迷い込んだ。その光景で人間と戦ったことのない、ウィッチ達と亜弥は青ざめた。

「相変わらず……洋介が経験した戦争はおつかねえ……サーシャ、洋介済まねえ、あの時、俺

一人で突っ込んでいかなければ…」

そんな中、直枝は再び自分にその責任を感じ取ってしまい謝罪の言葉を出す。しかし、そんな言葉にサーシャと洋介は怒らなかった。

「それが管野さんらしさなのよ。だから、あまり自分を責めないで」

「管野の戦いに誰も悪いなんて言うやつはいないさ」

「サーシャ、洋介…」

二人の言葉に直枝は驚き顔を上げる。怒るだろうと思っただけに、予想外すぎて驚いたのだ。

そして、サーシャは直枝に言う。

「あなたなら、きっとあのネウロイを倒せるわ。だから、頑張って」

「……ああ、ぜってー俺がぶっ倒す！」

サーシャの励ましの言葉に、直枝は決意を新たに返事をする。

「ひかり、君も頼むぞ」

「はい」

直枝の横に居るひかりに励ましのエールを送り、ひかりは大きな返事をする。しかしそんなひかりに、直枝が言う。

「でしゃばんじゃねえぞ！」

「はい！」

「うふふ」

「ふっ…」

直枝の言葉に、ひかりは真っ直ぐと返事をする。そんな様子に、サーシャと洋介は微笑む。その中

「お父さん、わたしもあのネウロイと戦いたい！」

「…… え!？」

亜弥の言葉でウィッチ達は言葉を失った。

「亜弥ちゃん、危険よ!!」

「そうよ、亜弥ちゃん！ネウロイの戦いは生易しくないわ！訓練をしているあなたにはリスクが高過ぎる…痛っう…」

定子の言葉にサーシャも賛同した。だが、現状として戦力が不足しているのは事実

だった。

そして、一人のウィザードがベッドから立ち上がった。

「亜弥、ネウロイと戦いたいのなら、僕と特訓するか……？」

「お父さん……はい！」

「無茶です、桜井さん!!」

「そうですよ！医師の診断で数日は入院しないと……」

定子は洋介の手を繋ぎ、制止した。

「わかってる。目が回復するまで、空へ飛ばん。この時だけ、亜弥と特訓させてくれ。一刻も、この世界で平和を掴める為に」

「……洋介さん……」

両目が見えない洋介は固有魔法を発動、波導を利用して、夜中の滑走路に赴いた。二人の親子は木刀を構えた。

「…お…お父さん……」

「亜弥、ロスマン先生から聞いたが、飛行法はひかりより優れているのは、凄いことだ。だが、ネウロイを仕留めるには道具でも技術でもない。俺は君が子供とは思わん。これからネウロイと戦うウィッチとして、全力で掛かってこい!!」

「はい!!」

亜弥も固有魔法を発動する。彼女は父親の洋介に向かい、頭部に木刀を振りかざすも、寸止められ、薙ぎ倒された。

洋介の両目の視覚がやられ、包帯で巻かれているにも関わらず。見えているかのように、動きは俊敏だった。

「亜弥、研ぎ澄ました戦意で、俺の身体のどこかに少しでも刃を打てば、実戦に出されることを、隊長に伝えてやるぞ！」

「はい!!」

—————

「先ほど入った情報では、昨日のネウロイはこの地点から殆ど動いていないようです」

翌日、ブリーフィングルームでロスマンが地図に描かれたバツ地点を指す。

「このネウロイを排除できなければ、再び補給路は立たれ、我々は飢え死にだ」

「そんなあ…」

「腹が減っては戦は出来ません」

ラルが続けて言った言葉にジョゼたちは困った反応をする。

「クルピンスキーさんやサーシャさん、洋介さんの為にもあのネウロイをやっつけましょう」

「当たり前えだ！これ以上好き勝手させてたまるかよ！」

ひかりの言葉に同調するように直枝が言う。この補給線を確保しなければ、502は事実上の壊滅を辿っていくことになる。

それを回避するためには、このネウロイを撃墜する未来しかなかった。

しかし、ここで問題が2つある。

「管野、このメンバーではお前が最上位の中尉となるが…」

「うえっ!?俺が戦闘隊長かよ!？」

ラルに言われて直枝は驚く。そう、負傷している三人はそれぞれ階級が大尉と中尉であり、その不在の中で一番上の階級は中尉昇進をした直枝に回ってくるのだ。しかし、彼女はまだ中尉になりたてで現場指揮を経験しておらず、いきなり現場指揮を行えと言っている状況である。

だが、ラルもそんな直枝にいきなり戦闘隊長をさせるわけにはいかないため、対策を考えていた。

「いや、現場の指揮はエディータに任せる。それで構わんな？」

「ああ、わかった」

ラルの言葉に素直に従う直枝。ロスマンは階級こそ下であるが、前線戦闘経験は直枝より多い。この状況ではそのほうが最善であると直枝も理解した。

「不足の戦力を補う為に、桜井亜弥も出撃させる」

「はい!!」

顔の頬にガーゼを貼られた亜弥が返事をする。

そう、昨晚の訓練で父親の洋介の左頬を掠めた。

早朝、洋介は上官のラルに、亜弥の対ネウロイの出撃を渡々と許可させた。

無論、彼女たちは猛烈に反対したが洋介の墨付きである、愛刀の鷹狼を帯刀していた。

「隊長、俺は亜弥の出撃は絶対に反た…なっ!？」

目に止まらない速さで亜弥は抜刀、直枝の前髪一本を切り裂いた。

「お姉ちゃん、直枝お姉ちゃん…いや…管野中尉! 今だけの出撃で、お父さんの仇を獲りたい!」

「亜弥…足引つ張んなよ!」

そして作戦を立て、直枝達が出撃をする。向かう先は無論、ネウロイが飛び続ける地点。

しばらく飛行をしていくと、定子の遠距離視が昨日のネウロイを捉えた。

「30 km 前方にネウロイ確認！まだこちらには気づいていません」

「ここに分かれましょう」

『了解！』

ロスマンの指示で、ひかりと直枝、そして二パの三人は散会していく。そう、今回の作戦は前回と違った。ネウロイの特性は前方の火力が高く、後ろのコアを守る形になっている。そのため、ロスマンとジョゼと下定子、亜弥の四人はネウロイに先に接敵し、注意をひきつける。そして注意が四人に向かったところを見計らい、残りの三人は後ろから攻撃を仕掛けるという作戦に出たのだ。

そして、別れた三人の中で直枝は、ひかりと二パに話す。

「二パ！雁淵！俺達で絶対に決めるぞ！」

「はい！」

「うん！」

その決意に、ひかりとニパも返事をする。

そして直枝達と別れたロスマン達は、ネウロイに接近をしていく。

「攻撃開始！」

ロスマンは合図とともにフリーガーハマーを向けて攻撃を開始する。

定子とジョゼが手に持つ機関銃を向けて引き金を引く。その攻撃に気づき、ネウロイは体の正面を向ける。

そして攻撃を開始する。

そして亜弥も、初めての实战で機関銃を構え、発砲した。

「直枝お姉ちゃん達…頼むわよ」

亜弥は攻撃を懸命に耐えながら、今回の作戦の要である管野達に祈るのだった。

その頃直枝達は、ネウロイの後方に移動していた。その時、ネウロイが赤い光線を出している姿に気づく。

「始まった！」

「行くぞ！」

「はい！」

直枝の声と共に、全員がネウロイに向けて接近をしていく。そして接近していく中で、ひかりは気づく。

「ホントだ。全然撃ってこない」

そう、ネウロイはひかりたちが接近しても攻撃を全然してこない。そのおかげで、三

人はすんなりとネウロイの後方に接近することができた。

第29話 仇討ちするブレイク

「コアの位置も分かっているし、これなら行けるね！」

「ああ！速攻だぜ！」

指揮する直枝はそう言つて、手に持つ機関銃を向けて引き金を引く。それに気づきネウロイも攻撃を後方に始めるが、前方に対して圧倒的に少ない弾幕量のため、彼女たちは撃ちながら周辺に散開する。

連続して攻撃を加えて行き、このまま続けて行けばネウロイは倒せると思われていた。しかし、突如無線連絡が流れた。

『不味い、分離するぞ!!』

「なにっ!？」

基地で通信要員として従事していた洋介の言葉に気づいた直枝は驚く。突然、ネウロイの体が半分離れ始めていた。

「分離ですって!？」

ロスマンも洋介の言葉で驚きの声を上げる。

ロスマンだけでなく、他のウィッチたちも驚く。そして、二つに分離したネウロイは大きい方をさらに分離、合計分離数は5つとなった。

ロスマンはすぐさま次の指示を出した。

「作戦変更! 分離した各個体を迎撃せよ!」

「作戦が気付かれた!？」

「焦んな！コアさえやればこっちの勝ちだ！」

ニパが動揺する中、直枝は怯むことなくネウロイに機関銃を向ける。

しかし、それだけで終わりでは無かった。なんとネウロイは先ほどの形から一変、形状を変化させて別の形になってしまった。

「あっ!? 形が…」

「くそっ！コアの位置が分かんねえ！」

ひかりは驚き、直枝は愚痴る。そう、形状変化により相手の動揺だけでなく、コアの位置を判別することができなくなってしまった。

そして、形状を変えたネウロイはひかり達に攻撃を開始する。その弾幕量は先ほどロスマンたちを攻撃していた時並みの量だ。

三人はシールドを張る。

「くっ…もうちよつとだったのに！」

「うっ…何っ!？」

その時、ひかりたちを攻撃していたネウロイは離れて行く。

「あっ!逃げろ!」

それに気づき三人は追撃していく。ひかりは指示を求めて直枝に話しかける。

「管野さん!」

「コアだ!コアの位置さえわかれば…!」

管野は状況打開はコアにあると考えて、懸命に破壊しようとする。しかし、先ほどの変形の為にコアの位置は判別できなくなってしまうていた。

そんな中、ひかりは直枝の言葉に気付いた。

「コアの位置…」

別の場所で個別に分かれるネウロイを攻撃するロスマンたち。しかし、ネウロイは攻撃を加えてもその体を再生させていく。

「コアを破壊しないとキリがないです！」

「弾薬も魔法力もちません！」

定子とジョゼがそう言う中、ロスマンはインカムでラルに聞く。

「隊長」

『やむを得ん…撤退だ』

「うう…ちくしう…！」

亜弥は悔しい言葉をかけた。

ラルの撤退の命令と、亜弥の言葉を聞き、ひかりは驚く。

「待つてください！じゃあ補給路は!？」

『一旦、諦めるしかあるまい』

「そんな…」

「くっ…あのネウロイめ…ネウロイめーっ!!」

ひかりはラルに聞くが、ラルは状況を見てネウロイを倒すのは難しいと悟り、補給路を捨てる決断をした。

『ひかり、亜弥、焦るな!!…悔しいのは俺も同じだ！俺は回復して、次の出撃であのネウロイを斬る!』

「…お姉ちゃん…お姉ちゃんも…悔しいよね…」

しかし、洋介の言葉をきっかけに、ひかりの中で思いが渦巻く。せつかく開通した補給路を、ひかりはみすみすネウロイの手に明け渡したくなかった。

半年前の第三艦隊の襲撃で姉の孝美がネウロイにより負傷したことが脳裏に浮んだ。そして、あることを思い出した。

『それまで大事なところまで温存して置けってことだ』

「えっ!？」

『次に使える場面は必ずある。それまで保証するぜヨ……』

「……ラル隊長、私に接触魔眼を使わせてください!」

そして、ひかりは決意を胸に、ラルに意見具申をしたのだった。

「雁淵軍曹!」

ひかりの突然の発言に、状況を知っているロスマンが驚いたように声を出す。

「接触…魔眼？」

「何それ？」

しかし、接触魔眼のことを知らない定子たちは何のことか分からずに疑問を浮かべるのだった。

そんな中、ロスマンは懸命にひかりを説得をする。

「やめなさい！雁淵軍曹！」

「お願いです！今使わないでいつ使うんですか!?ラル隊長!!」

『……』

ロスマンが制止を呼びかけるが、ひかりは懸命にラルに説得をする。しかしインカムの向こうのラルは沈黙したままである。

「おめえ、何言ってるんだ…」

「どういうこと？ ひかり…」

そんな中、直枝とニパは困惑した様子でひかりに聞く。ひかりは説明をする。

「私、ネウロイに触ったらコアの場所が分かるんです」

「触ったら!? 触ったらって、バカかてめえ! そんな危なっかしいもの役に立たねえだろ!」

「立ちます! 立たせます!」

「無理だ! 死にてえのか!」

『止めろひかり！俺は管野とロスマン先生の意見に同意だ！素人が下手に突っ込んだら、命を落とすぞ!!』

ひかりの主張を直枝は否定し、洋介は猛反対する。

直枝の言い分は尤もであるが、状況を打開するために接触魔眼を使いコアの位置を特定する。

しかしそれに対して要求されるのは、ひかり自身が回避を行いながらネウロイに接近をしていくと言うことなのだ。無論、そんな危ないことを直枝と、無線で連絡するが領くはずがなかった。

しかし、インカムに声が流れてくる。

『…いいだろう。管野、雁淵を援護してネウロイまで連れて行け』

「はあ!?!やらせるのか!?!」

「隊長!?!」

「『隊長!』」

なんと先ほども黙っていたラルが口を開くと、とんでもないことを言ってくるではないか。管野は思わず聞き返す。管野だけでなく、洋介とロスマンも驚きラルに聞く。

『命令だ、管野中尉。雁淵がコアを特定し、管野がトドメを刺せ』

「くっ…」

しかし、ラルから帰ってくる言葉は作戦指示であり、肯定だった。直枝は思わず黙ってひかりを見る。

そんな直枝に、ラルは声をきつくして言う。

『聞いているのか? 管野中尉』

「わかったよ! 連れてきやいいんだろ、連れてきや!」

「管野！」

直枝はその威圧に押され、返事を返した。その行動に二パは驚くが、直枝はひかりの方を向く。

「てめえ！足引つ張ったりすんじゃねえぞ！」

「わかってます！」

直枝に言われて返事を返すひかり。

「行くぞ！」

「了解！」

「ああ、もう！」

直枝が先に動き出す。それに続きひかりが付いていき、ニパはそんな様子に困りながらついていく。そして三人は逃走を開始するネウロイを追撃する。

「(あいつ…本当にネウロイに触る気か…?)」

直枝は後ろを飛ぶひかりを見ながら考える。そして、その行動は仇となった。

逃亡するネウロイは再びビームを収束させ、後ろ向きに飛んでいる直枝に向けて放ったのだ。

「管野おおお!!」

それに気づきニパが全速力で直枝の前に行く。そして直枝は自分に迫るビームに気づくが、シールドを張る余裕は無かった。

しかし、そのビームは直枝に当たらなかった。

「ニパー!」

直撃の寸前に、ニパが直枝とビームの間に割り込みシールドを張った。それによって、ネウロイは防がれる。そして攻撃が収まると、ニパは直枝の方を振り向く。

「おい！よそ見すんなよ！」

ニパはそう言つて、ひかりと共に前進を再開する。しかし、直枝が動けなかった。

「はあ…はあ…はあ…」

彼女は呼吸を荒くして立ち止まっていた。そしてその様子に、ひかりとニパが気付いた。

「管野？」

「管野さん？」

二人が振り返って直枝を呼ぶが、直枝は懸命に声を絞って言った。

「駄目だ……こんな作戦馬鹿げてる……どうせ失敗する」

「え？」

「作戦は中止だ……」

直枝の判断に二人は驚く。

いつもの威勢のいい管野直枝ではなかった。今ここに居るのは弱気になった、ただの少女だった。

「管野さん！」

「なんだよ？」

そんな直枝にひかりが近づいていくが、直枝は力のない声で返事をする。

そしてひかりは直枝に聞く。

「管野さん、変ですよ。どうしちゃったんです?」

「俺には…無理だ…クルピンスキーやサーシャ、それに洋介みたいに、お前らを守れねえ…」

ひかりの言葉に、直枝は力なく言う。直枝は自分の力では駄目だと、洋介達のように戦えないと言っている。その様子はいつもの直枝とは完全にかき離れていた。

そしてひかりはそんな直枝に大声で聞く。

「何言ってるんですか!いつもの管野さんらしくないです!ここで帰ったら補給路は、502はどうなるんです!」

「んなのわかってる!わかってんだよ!!」

「私の接触魔眼と管野さんの突破力があれば絶対に勝てます!」

「うるせえ！ひよつこが生意気なこと言つてんじゃねえ！」

直枝が大声で言うが、その声にはいつもより覇気を感じられない。そんな直枝にひかりもそれに引くことは無かった。

「じゃあ、クルピンスキーさんやサーシャさん、洋介さんが怪我したのは何ですか!? 補給路を守る為じゃないんですか! 基地の皆を守る為じゃないんですか! その戦いをパアにするんですか!?! 私は絶対に嫌です!」

「お、おい二人共さあ…」

ひかりと直枝の間にニパが懸命に止めようとは言ってくる。しかし、ひかりの思いはそこで止まることは無かった。

「私達は今ここで絶対にあのネウロイを倒すんです! 倒さないといけないんです! ここに立ち止まってちゃいけないんです!」

「…」

「だから！ネウロイの所まで私を連れて行ってください！お願いだから、やる前からできないなんて言わないでください！お願いだから…」

ひかりは目に涙を浮かべながら直枝に懸命に頼む。そんなひかりに、直枝は何も言い返せなくなり黙っているしかできなくなってきた。

「管野さん言ってたじゃないですか。今度こそあのネウロイを必ず倒すって！なのに、今更…なにビビってんですか！そんなんでお姉ちゃんの相棒になるなんて1000年早いんです！」

「…」

「それでも…」

そして、ひかりは懸命に涙をこらえながら、直枝に言い放った。

「ブレイクウィッチーズか!!」

「っ!!」

その言葉に、直枝はハツとした表情をした。そしてしばらくの沈黙の後

「!!」

「っ!!?」

直枝はひかりを頭突きした。突然のその行動にひかりはおでこを抑えながら直枝を見る。

「ああ、やるよ! やってやるよ!」

「管野さん…」

そこにあつたのは先ほどの弱気な少女では無く、いつもひかりが見てきた管野直枝だった。

「泣くんじゃねえ。そんなんでネウロイに触れんのか？」

「泣いてないです！」

直枝の言葉にひかりは懸命に反論する。それを聞き、彼女は顔をニヤリとさせる。

「行くぞ、雁淵。俺の真後ろにびったりついてこい！」

「はい!!」

そして、直枝達三人は再びネウロイに向けて追撃を開始した。その管野の表情には、もう迷いなど微塵も無かった。

「作戦は？」

「俺が真っ直ぐあいつに突っ込む。お前も俺に続いて突っ込め」

「わかりました！」

直枝の指示を受け、ひかりは後ろに着く。

「ニパはこいつの後ろを守ってやってくれ！」

「うへえ…了解っ!？」

そしてニパは命令を受けて苦笑いをしながら返事をする時、猛烈なビームが三人を襲う。

「あ……亜弥!？」

ネウロイのビームを防いだのは、ロスマンたちと共に飛んで、瞬時に移動、影分身でシールドを張る桜井亜弥だった。

「直枝お姉ちゃん！さつきまでの弱気だったら、お父さんに負けちゃうよっ!!」

「うるせえっ！基地に戻ったら、洋介に勝つ!!お前も付いて来いっ亜弥!!」

「はい!!」

そして、四人のウィッチは突撃した。

「(そうだ…何びびってんだよ、管野直枝。お前はこんなところで立ち止まってちゃいけねえだろ!)」

直枝は心の中で先ほどのことを後悔した。そして、自分が今なすべきことを胸に、ネウロイに向けて直進していく。

そんな直枝達に、黙っているネウロイでは無かった。再びネウロイはビームを収束させ、直枝に向けて放ってくる。

「管野！でかいのが来るよ！」

「このまま行く！」

「落とさせない!!」

ニパに忠告を受けるが、直枝はそう言つて手に持っていた機関銃を捨てた。そして空いた右手に、自分のシールドのエネルギーを一点集中させる。固有魔法、圧縮式超硬度防御魔方阵によるシールドであり、直枝はそれを自分の前に出す。

その時、ビームが直枝に狙いを定めて撃ってきたものの、亜弥がシールドで防いだ。

「直枝お姉ちゃん!!」

「ありがとう、亜弥!!うおおおおりやあああああ!!!!!」

彼女は亜弥に感謝。そして大声を出しながら直枝はネウロイのビームに突っ込んでいく。ビームと直枝は接触するが、前方に張られた圧縮シールドは強力な攻撃をもろともせずに突き破っていき、直枝はそのまま前進をしていく。

そして、ネウロイはそのビームを出し終えてしまい、残ったビームも直枝によって霧散させられた。そして、直枝は後ろについてきているひかりを見た。

「今だ！ 行け、雁淵！」

「うおおおおおおお！」

直枝の指示で、ひかりは直枝の後ろから飛び出してネウロイに急接近する。そして、その手でネウロイの体を触った。そしてひかりは振り返りネウロイをしっかりと目に捉える。同時に、彼女の目は赤く光り、接触魔眼が発動した。発動した魔眼によって、ひかりはコアの位置を特定する。

「あそこだ！」

そう言って、ひかりは機関銃を接触魔眼で見た位置に向けて放つ。すると、その部分が剥がれだし、コアが露出するではないか。

「あつた！本当にあつた！」

ニパがその様子に驚くその時だった。ネウロイは再びその体を分離させ始めた。

「あつ！また分離した！」

「ええええつ!？」

「へっ、場所が分かればこつちのもんだ」

ひかりとニパが驚く中、直枝は威勢よく呟く。そして、そのまま急降下をしていく。

「うおおおおおおお!!」

大声をあげながら、直枝は攻撃をするネウロイの隙間を縫っていく。そして、一つのネウロイに向けて突っ込んでいく。

「くたばれええええ!!」

そう言つて、右腕を引き絞る。そして

「剣一閃!!」

露出していたネウロイのコアを圧縮シールドと共に拳で殴った。

それによりコアは砕け散り、ネウロイはその体を破片に変えて行く。同時に、他の独立していたネウロイの体も次々と破片に変えて行く。

その様子は、別の場所で戦っているロスマンたちにも届いた。

「えっ? 何?」

「向こうがコアを破壊したんだわ」

突然の行動に驚く中、ロスマンは冷静に状況を分析する。

「やったー！やりましたよ、管野さん！」

ひかりは喜びの声をあげながら直枝に近づいていく。そんなひかりに、直枝は振り返っていった。

「ああ、やったぜ相棒と妹！」

なんと、直枝はひかりのことをお前などではなく相棒、亜弥にも妹と言った。その言葉に驚き、ひかりは聞き返した。

「えっ!?今なんで言いました?」

「えっ？あ、いや…な、何も言っただけ！」

「確かに言いました。相棒って！」

「冗談じゃねえ！お前が相棒なんてありえねえ！」

「あはは」

「確かに、直枝お姉ちゃんはひかりお姉ちゃんに相棒と！そして、わたしにも妹と！」

「なっ！！／／／」

直枝はひかりの言葉を否定するが、ひかりはしっかりと相棒という言葉聞いていたため直枝に懸命に詰め寄る。

そんな姿を見ていたニパは思わず笑う。

そして、亜弥も直枝の言葉を聞いて、笑みを浮かべていた。

そして、この声はロスマンたちにも届いていた。

「言ったよねー？」

「言ってたね」

ジョゼの言葉に定子が同意する。そしてロスマンはインカムで話す。

「ふふ……こちらエディータ。ネウロイを排除しました」

『ロスマン先生、亜弥を航空ウィッチに育ててくれて、ありがとうございます！』

「いえ、亜弥ちゃん次第ですよ」

『そうか、やったか……いい弟子じゃないか（しかし、管野も亜弥を妹分……少し妬けるな……）』

「胃に悪いです。それに、桜井さん。私に亜弥ちゃんをウィッチに育てた報酬をお願い

しますね。」

『はい、了解です!』

どうやらその様子もラルに聞こえていたようであった。

そして洋介も、亜弥と関わったロスマンとウィッチ達に感謝の言葉を述べた。
その時、ひかりたちに悲劇が訪れる。四人のユニットが息を吹いたのだ。

「なっ!？」

「えっ!？」

「嘘ッ!？」

「あっ!？」

四人が嫌な予感がする中、それは見事に的中した。

「『うわあああゝ!!』」

ユニットのエンジンは停止してしまい、四人の体は重力に逆らえずに落ちて行くのだった。

「管野さんニパさんひかりさん亜弥ちゃんは、そこに正座―」

頭に包帯を巻いているサーシャの声と共に、四人は格納庫内に正座をさせられる。その様子を、基地に帰投した者たちは揃って見ていた。

そして正座している4人を見ながら、松葉杖をしているクルピンスキーはひかりと亜弥に言った。

「いやゝ、これでひかりちゃんと亜弥ちゃんもすっかりこの502、そしてブレイク

ウィッツチーズの仲間入りだね」

「ホントですか!? やったー! やったやったー!」

「なんか…嬉しくない言葉…」

クルピンスキーの言葉にひかりは両手を上げて喜ぶ。
しかし、逆に亜弥は膨れっ面になって、僻んでいた。

「なに喜んでるんですか! ひかりさん!」

「あつ」

しかし、サーシャの言葉にその手は突然固まり、そしてゆっくりと下ろしていく。

「クルピンスキーさんも、そこに正座!」

「えー!!なんでー!?つてあれ?」

突然足にギブスを巻いている人に正座をしろと言うサーシャにクルピンスキーは反応するが、その様子を感じ、包帯を目元に巻いた洋介が四人の隣に正座した。

「洋介さん?」

「洋介…?」

「連帯責任だ。僕も、あのネウロイの戦いで落ちた、ブレイクウィザードだ。」

「お父さん…」

亜弥は涙目を浮かべた。

洋介の、落ちた言葉を聞いた直枝とニパ、クルピンスキーはサーシャを見つめた。

「そう言えば、あのネウロイの戦場で、戦闘隊長も落ちたな…」

直枝は笑みを浮かべながら、サーシャに呟いた。

「う……／＼／＼さて、私はまだ身体を休まねばならないと医師に言われたから、戻ります。」

「あゝ!!逃げたゝ!!」

サーシャは赤面して、格納庫から離脱した。

その頃扶桑皇国の舞鶴にて、固有魔法の治癒能力の高いウィッチが、昏睡状態のウィッチの意識を目覚め、回復させた。

第30話 再会の無情

「そっちに向かったぞ!!」

両目が回復した洋介は戦場に復帰。

ネウロイ出現の報を受けたブレイブウィッチーズは、出現地点に出向いていた。

「剣一閃!」

その掛け声と共に、直枝はネウロイの右翼付け根に拳を振り下ろす。

その攻撃により、ネウロイは表面の装甲と共に内部のコアが破壊され、その姿を光の破片に変えたのだった。

ひかりは真っ先にネウロイ撃墜をした直枝の元へ行く。

「やりましたね！管野さん！」

「ああ！お前もよくやったぜ」

「はい！相棒ですから！」

ひかりの言葉に、直枝は一瞬ドキッとした後胸元で腕を組み、「100年早い」と言う。

「えっ!?この前そう言ってくれたじゃないですか」

「言ってねえよ」

「言ってましたー！」

ひかりは言ったと主張するが、管野はそれを頑なに否定する。そんな様子を、他のウィッチたちは皆で見ていたのだった。

「アハハ、すっかりいいコンビだ」

「ちよつと妬けちやうな」

ニパはその光景を見て少し微笑みながら言い、クルピンスキーは少し羨ましそうな感じで感想を零す。

他のウィッチたちも微笑みながら見る中、突然クウという小気味良い音がする。音源はジョゼだった。ジョゼはお腹を押さえながら定子に話しかける。

「定ちゃん、お腹空いた」

「じゃあ、帰ったらワツフル作ろっか」

ジョゼの言葉に、定子はおいしい提案を出す。それを聞いて、ジョゼは笑顔になる。

そして最後に、サーシャが締めくくる。

「それでは帰投します。ニパさんが落ちる前に」

そう言つて、サーシャはニパの方向をチラリと見る。ニパはニパで突然自分のことを言うと思わず焦る。

「うええ？最近減つたよね？」

「減つてません」

「あ、あれえ？変だな…」

サーシャにピシヤリと言われてニパは慌てて自分のユニットを見る。

洋介も、ニパのユニットの方を見て言つた。

「いや、今日は落ちないぞ」

「えっ？」

突然の言葉に、サーシャは思わずそんな声を漏らす。洋介は、ニパのユニットをじつと見た後、もう一度言った。

「うん。変な音とかしないし、多分落ちないな」

「ほ、本当ですか洋介さん？」

「ああ、ユニットの調子が良い、雑音は感じられん。」

基本的に不確定なことを洋介はあまり言わないため、サーシャは基本的に彼の言動について信じることが多い。

そんな様子に全員が笑っている中、ひかりは遠方から聞こえるエンジン音に気づき、音のする方向を向いた。

「あれ？何でしょう？」

ひかりの言葉につられて、全員がウィッチの方向に向けて飛んでくる飛行機を見る。
機種はJu52、カールスラントの輸送機であった。

「あの機体は…」

ロスマンはその機体を見て、中に乗っている人物にどこか心当たりがある様子である。

そしてJu52はそのまま、502基地の方向へ飛来する。

「とりあえず、基地に帰投しましょう」

『了解』

サーシャの言葉で、全員が基地に向けて飛行を開始する。

「マンシュタイン元帥に敬礼」

ラルの言葉に、全員が各国それぞれの敬礼をする。洋介と亜弥も、自分の母国軍の敬礼をする。

502基地に帰投したウィッチーズは、すぐさまブリーフィングルームに集合させられた。

そして全員が部屋に入ると、なんとそこにはラルの他にもう一人いた。

カールスラント陸軍エアハルト・フォン・マンシュタイン元帥。そしてマンシュタインは全員の敬礼を確認した後、すぐさま首を小さく振り、洋介を目にした。

「君は、桜井洋介君か。世界初のウィザードで先の501でのブリタニア防衛とガリア奪還、502に転属しての活躍は耳にしているよ。」

「はっ、大変恐縮です」

「うむ、座ってくれたまえ」

その言葉に、ウィッチたち全員が席に着く。そしてマンシュタインは、ラルの方を向いた。

「突然すまないな、ラル少佐」

「いえ。それで、今日はこういった用向きで？」

ラルが聞くと、マンシュタインは正面を向いて説明を始めた。

「一部の者には内々に伝えていたが…ペテルブルグ軍集団によるグリゴリ攻略のフレイアー作戦について、だ」

「ついに…」

マンシュタインの説明を聞き、ロスマンはついに覚悟をした様子で反応した。

そんな中、洋介と亜弥、ひかりはフレイアーが何のことか分からず小声でニパに聞い

た。

「フレイアーって何ですか？」

「こつちの神様で、豊穰の女神って言われてるんだ」

「豊穰の女神にちなんだ作戦とは…」

そして、マンシユタインは続けて説明する。

「補給路が回復し、士気が大幅に向上したことでフレイアー作戦の発動が正式に決定した。そこで、君たち502部隊にも当作戦への参加を要請する」

「いよいよか」

直枝はマンシユタインの説明を聞き、拳をつかみながらやる気になったように言っ
た。

しかし、ラルは気になることがありマンシユタインに質問した。

「その作戦ですが、501ストライクウィッチーズがガリアを開放した例に準ずるので
しょうか？だとすれば、リスクが大きすぎると思われますが…」

その言葉を聞き、眉を上げた洋介。

それは昨日にラルの元へ届いた資料に記載された、ウォーロックのことを言っている
のだと理解した。あれを投入すると、連合軍側への被害が来る可能性の方が高い。

それについてはマンシユタインも理解している様子であった。

「ウィッチは耳も早いな。安心したまえ、ネウロイのテクノロジーは我らの手に余る」

その言葉を聞き、洋介は少し安心したように息を吐く。

「では？」

「作戦そのものはシンプルだ。現在ムルマンに集結中のペテルブルグ軍の戦力でグリーゴリーを叩く。そうすることにより…」

「ネウロイの生産力を壊滅させる」

「そうだ。そして無防備になったグリーゴリー内部に侵入し、本体のコアを超大型列車砲で撃ち抜く」

その説明を聞き、二パと直枝は考える。

「超大型列車砲って、この前船で運んでたやつかな？」

「つーか、コアをぶち抜くたって、どうやってコアの位置を見つけるつもり…」

「あっ!!」

『!!』

ニパと直枝はコア特定方法を考え、ある答えにたどり着いた。そして同時に、502のウィッチたち全員も何かを理解した。ただ一人、ひかりだけは理解していない様子であった。

「なお、グリゴリーのコアを見つける魔眼持ちウィッチも、既に選定済みである」

そしてマンシユタインの言葉を聞き、真っ先に立ち上がったのは直枝とニパだった。

「ちよつと待て！まさか、ひかりにそんな危ねえ真似させるつもりかよ!？」

「駄目です！駄目駄目！」

「えっ、私？」

ひかりは分かった様子で無かったが、直枝とニパはあまりにも危険すぎる内容に抗議

をした。

他のウィッチたちも、三人の方向を向いていた。

「ついにバレちゃったか…」

「落ち着きなさい。管野さん、ニパさん」

「けどよ先生！こんなひよっこがネウロイの巣に突っ込んで無事で済むと思ってんのかよ!?!」

直枝は指を指しながら問う。洋介も黙ってはいたが頷いていた。ロスマンの指導があつたひかりであるが、接触魔眼は元々危険なうえに、ネウロイの巣はさらに激戦区となる。そんなところに新人のひかりを突っ込ませるなど正気の沙汰ではない。

「作戦開始まであと一カ月あります。その間に、私がひかりさんを育て上げれば何も問題はありません」

「残念だが、作戦決行は、これより7日後だ」

ロスマンがそう説明した時だった。マンシュタインから信じられない言葉が出たのは。

「はあ!？」

「7日後!？」

7日後という言葉に、管野とニパはありえないと言った様子で目を見開く。ラルはおかしいと思い質問した。

「どういうことでしょうか？ 内示によれば作戦は1カ月後だったはずでは？」

「グリゴリーが動き出した」

「なっ!？」

「グリゴリーが…」

「動き出した…!？」

そしてさらに告げられた真実は、ウィッチーズ全員を動揺させた。今までネウロイの巢は停止している者ばかりであり、巢そのものが動き出した例など無かったからだ。

「再び補給路を失えば戦線は一気に瓦解する。もはや悠長に1カ月も待っていていられない。今しかないのだよ」

それを聞き、全員が黙ってしまった。

「あ、あの…」

「ふざけんな！」

ひかりが何か言おうとした時だった。直枝は大声で怒鳴った。

「やめろ！管野」

「いいや、やめないね！隊長こそ、ひかりをみすみす死なせるようなこんな命令断つちまえよ！」

「管野さん…」

大声で抗議する直枝に同調するように、他のウィッチたちも反対する。

「私も反対！仲間を危険な目になんて合わせられないよ！」

「他に何か手は無いのですか？」

ニパ、サーシャが言う。

「子猫ちゃんを一人で行かせるわけにはいかないよね」

「どうしても、と言うのでしたら…」

「私たちも一緒に行きます」

「俺もです、ひかりの固有魔法でグリゴーリのコアの確認まで、全力を持って護衛します」

！
」

「わたしも、ひかりお姉ちゃんを守り為に務めます！」

「お前ら……」

「みなさん……」

クルピンスキー、定子、ジヨゼ、洋介、亜弥も言う。ウィツチたち全員の総意に、直枝とひかりは思わず驚く。

そして、ひかりは立ち上がった。

「私やります！ やって見せます！」

「バカかてめえ！ 何言って……」

「君たちは何か勘違いしてるようだが。この作戦、雁淵軍曹を使うつもりなどない」

『えっ!?!』

ひかりの言葉に直枝は止めようとするが、ここでマンシユタインは新たに告げる。すると、ウィッチーズ全員がまるで予測していなかった言葉に驚く。

そしてマンシユタインは手元の時計を見る。

「そろそろか…」

そう言って、マンシユタインはブリーフィングルームの窓から外を見た。すると、窓の外から飛行音がしてくる。それは徐々に基地の方へと近づいてきていた。

「来たか」

「来たって…」

「ムルマンからここまで時間通り。流石と言うべきだな」

マンシユタインは満足したようにいった。そして洋介達は席を立ち、窓辺に立つて外を見た。すると突然、謎の飛行物体が窓の目の前を通り過ぎて行くでは無いか。

「何？今の…」

「ウィツチ…だよね？」

ウィツチの姿に全員がその人物を探る。しかし、身近でその飛行を見ていた人たちからは、その飛行は見覚えのある物であった。

「あれは…！」

直枝は気づいたように反応した。その時だった。

ひかりは嬉しそうに顔を笑顔にしながら走り出した。

「ひかり?」

「ひかりさん?」

皆が何事かと思ひひかりの名を呼ぶが、ひかりはそれを聞かずに無我夢中でブリーフィングルームを出て行く。

そして部屋にいたマンシュタインは、ラルに向かって言った。

「これで502も正しい形となるだろう。これまで現場の判断でよく頑張ってくれたな、ラル少佐」

「…恐縮です」

「では、失礼する」

そう言つて、マンシュタインも部屋を出ていった。

そして部屋に残つたラルの横に、ロスマンと洋介が来る。

「とんだタヌキじいだ」

「隊長の独断でひかりさんを502に引き留めた件は、お咎め無しそうですね」

「代わりに、少しばかり面倒なことになりそうだがな」

そして洋介がラルに質問した。

「ひかりの反応といい、今来たのって…」

「ああ、あいつだ」

ラルの言葉に、洋介も納得したように頷いた。

そして基地の外、滑走路では今まさに、ひかりが空を見ながら走っていた。

「間違いない！あれは…あれは…お姉ちゃん！」

ひかりは喜びながら走る。自分の憧れであり、いつか共に飛びたいと願っていた姉、雁淵孝美が負傷から帰ってきたからだ。

そしてひかりは、姉の着陸した場所へ到着する。

「お姉ちゃん」

ひかりは自分の姉、孝美を呼ぶ。孝美は振り返り、ひかりを見た。

しかしその表情は、まるでひかりをこれから叱ると言った表情をしていた。そして、孝美はキツイ声で話し始めた。

「ひかり」

「お、お姉ちゃん…？」

「どうしてあなたがここに居るの？」

「えっ？」

ひかりはまるで驚いた様子で孝美を見る。

「あなたの本来の任地はカウハバ基地だったはずよ。それが何故ここに居るの？」

「そ、それは…」

ひかりは答えることができなかった。ひかりは負傷した孝美の代わりに502に来たことを、自分の口から言う事が出来なかった。

そして、孝美はさらに言った。

「ひかり。ここはあなたが居ていい場所ではないわ」

「お姉ちゃん…で、でも！私、扶桑にいた時より強くなったんだよ！チドリだってちゃんと乗れるようになったんだよ！」

「誰もそんなこと聞いてないわ」

そして孝美は、ひかりの横を通り過ぎて行く。

「すぐに荷物をまとめてカウハバに行きなさい。これは正式な辞令よ」

「そんな！」

ひかりは振り返るが、孝美はそんなひかりを振り返ることなく、そのまま502基地へと行ってしまった。

「お姉ちゃん…」

残されたひかりは、ただ呆然と突っ立っていることしかできなかった。

第31話 妹対姉 魔眼対決

格納庫
―

「孝美！ やつと来たな。待たせやがって、コノヤロウ」

孝美が格納庫にユニットを止めると、502のウィッチたちは格納庫にやってきた。直枝は孝美にそう言うのと、孝美は直枝の様子を見て微笑んだ。

「相変わらずのようね、管野さん」

「ふん、そうそう変わるかよ。けど、お前の妹はなかなかやるようになったと思うぜ」

直枝の口からひかりのことを言われ、孝美は下を向いて黙ってしまふ。

「…孝美？」

「いえ、なんでもないわ…」

直枝が気にするが、孝美はなんでもないと振り切つて、ラルに話しかけた。

「本日をもって、502統合戦闘航空団に着任しました、雁淵孝美中尉です。リバウ以来ですね、ラル隊長」

「ああ。久しぶりだな、孝美」

「本当に復帰できたんだ…」

「良かったね、ジョゼ」

孝美に言われて、ラルは返事をする。ジョゼは自分の治癒魔法で回復できなかった孝美が復帰をして502に来てくれたことに涙を浮かべ、その様子に定子はよかったと

言った様子でジョゼに言った。

「……」

孝美の悲しげな顔を見た洋介は見逃さなかった。それに気付いた亜弥は口を聞いた。

「……………」

「…お父さん…どうしたの？」

「いや、僕の志帆姉さんの事を…あんな顔を…思い出してな…」

「姉さん…？もしかして、志帆伯母さんのこと…？」

「あの、少佐…この人達は…？」

孝美は洋介と亜弥に気付き、首を傾げ、その場にいたラルが紹介した。

「…覚えていないのか…まあ無理もない。北海で航行する扶桑の第3艦隊を救った。501に所属した世界初の男性ウィッチ…いや、ウィザードの桜井洋介中尉と彼の娘、世界最年少のウィッチ、桜井亜弥だ」

「雁刈中尉。この場でお初となりますが、私は元501部隊隊員であり、502部隊隊員の海軍中尉、桜井洋介です。」

「わたしは桜井亜弥です」

「あなたが桜井中尉と亜弥さんですか。あの当時の艦隊への救援、ありがとうございます」

「いえ、私だけではありません。あなたの妹さん、ひかり軍曹の協力がいなければ、艦隊は海の底です」

「そして、わたしはひかりお姉ちゃんの妹分で…あれ…?」

洋介と亜弥の言葉で、孝美は深刻そうな顔をしていた。

「あの…雁洩中尉…？」

「あついえ、なんでもありません…中尉は…それに、私は孝美の名前で結構です」

「そうですか…俺の名前は自由にどうぞ孝美さん」

「はいっ、えっと…洋介さん」

洋介が孝美と話していると、背後から定子が睨み妬いていた。

亜弥はこっそり脱け出し、直枝とニパと共にひかりを探しに行く。そして、格納庫の外で滑走路の先で突っ立っているひかりを見つけた。

「居た居た、ひかり」

ニパが声を掛けて駆け寄っていく。

「ねえ、お姉ちゃん…?」

「どうしたのさ?こんなところで」

「待ちに待ってた孝美が復帰したつてのによ

直枝がそう問うが、ひかりは振り返らなかった。その様子に気づき、直枝は歩いてひかりの正面に立つ。

「…お姉ちゃん…」

「ひかり?あつ…」

そこにあつたひかりの表情を見て、亜弥と直枝は気づいた。その表情は、先ほど孝美がひかりの話を聞いたときにしていたのと同じものだったからだ。

翌日、孝美はクルピンスキーと模擬空戦。結果は引き分け。

洋介は直枝と再び模擬空戦を始めた。そして、結果は洋介の勝利。

「畜生おゝ!!…負けたゝ!!…洋介っ…もう一度、もう一度挑戦を受けさせろ！」

「全く、グリゴーリの討伐の前に、身体に障る。これで終了…！」

「うう…絶対に、ウィザードに勝ってやる!!」

滑走路 脇

「お父さん！はい、珈琲」

「ありがとう、亜弥」

洋介は基地の滑走路に着陸、亜弥から飲用しながら休憩している時、孝美が洋介の元に赴いた。

「洋介さん！」

「ん…孝美さんか…？」

「グリゴリーの攻略前ですが、ウィザードの洋介さんと模擬空戦をお願いします！」

「その必要はありません。孝美さんは素晴らしく、扶桑のエリートウィッチさんじゃないですか。ブランクの微塵がない以上、勝負の結果は決まっています」

孝美が模擬空戦の挑戦を宣告したが、洋介は断った。

だが、彼女はしつこく迫ってきた。

「洋介さんは敏腕のウィザードだと、クルピンスキーさんや管野さんから聞きました…是非とも…」

「…お断りします…!!」

「っ!？」

「孝美さんが、ひかりを追い出す理由を口にしたら、模擬空戦を受けて頂き構いません!!」

洋介が孝美にキツイ言葉を呟き、兵舎に向かった。

その夜、孝美とひかりの故郷、佐世保の料理、皿うどんだった。

「なにこれ、美味しい〜」

「皿うどんと言って、扶桑の郷土料理なんです」

「いや〜綺麗で強くて料理も上手だなんて完璧だね孝美さんって…」

ジョゼとニパやみんなは皿うどんを堪能する中

「…」

「ひかり？」

「え？あ、そうですね…」ちそうさま」

ひかりはそう言つて席を立て行つてしまう。

「あ…ひかり？」

ニパはそんなひかりを思う。

他のウィッチたちも、ひかりの様子がおかしいのに気づき、全員がひかりの方向を見る。ただ一人、姉の孝美を除いては。

「あの…洋…いえ、桜井中尉はどう…？」

孝美が洋介の席を見ると、食事や箸も着けず、本人の姿はなかった。

「…あの…亜弥さん…桜井さんはどこに…？」

「お父さんは、たぶん剣術の鍛錬です…」

「そう…」

洋介は外で鷹狼を構え、鍛練していた。

「何かちよつとおかしいんだよな」

その晩、サウナの中でニパが言う。サウナ内にはニパの他に、直枝、サーシャ、クルピンスキー、定子、ジョゼ、亜弥が居た。

ニパの言葉に、ジョゼが返事をする。

「何が？」

「ひかりのこと……どうも孝美さんを避けてるみたいなんだけど……」

「言われてみれば……仲の良い姉妹だって聞いてましたけど……」

そう、ひかりと孝美は本来仲の良い姉妹であると聞いているニパ達は、ひかりがまるで孝美を避けている様子におかしいと感じていたのだ。

「久々に会って緊張してるのかも？」

「そっかなー？それならいいんだけど……作戦も近いし」

ジョゼがそう言うが、ニパはどうも釈然としない。

そんな中、サーシャが全員にある告白をした。

「そのことです…：ひかりさんにはカウハバへの転属命令が出ているようです」

「え？」

『ええーっ!?!』

突然のカミングアウトに、思わず驚くニパ達。そんな中、直枝は黙ってその話を聞いていた。

「待つてよ!どうしてひかりが居なくなっちゃうのさ!?!」

「そもそも今の状況がイレギュラーであって、カウハバ基地が本来の配属先なんですよ」

そう、ひかりの本来の配属先はカウハバ基地。それをラルが黙って502基地に置いているのはおかしい話であり、この命令は当然起こりうることだったのだ。

「でも、次の作戦はすごく重要なんでしょう？二人一緒に戦うつてのは駄目なの？」

「マンシュタイン元帥直々の命令です。残念ですが…」

「そんな…」

「サーシャさん、亜弥ちゃんはどうか？まさか、最前線に…」

定子はサーシャに亜弥の配置を説いた。

「心配しないで下原さん、亜弥ちゃんは後方で衛生の任務に就かせます」

「そう、ですか…」

定子は内心ホツとした。

元帥直々となれば、この命令を変えることなど到底無理な話になる。

それを聞き、ジョゼと亜弥はしよんぼりとする。

「私、ひかりさんが居なくなるのはイヤだな…」

「わたしも…一人のお姉ちゃんが居なくなるのがイヤだな…」

「でも、これで良かったのかも…」

「え？なんで？」

定子の言葉の意味が分からず二バが聞き返す。

「うん。接触魔眼は凄く危険だから、命令通りカウハバに言った方が…」

「えーっ？ ジョゼさんまで…」

ジョゼの言葉も一理ある。ひかりの接触魔眼は使いどころを間違えば命を落とす代物。

まだ後方にあるカウハバに移動した方が、ひかりにとつては平和になる。しかし、ニパはそれに納得しない様子であつた。

そんな中、今まで黙つて聞いていたクルピンスキーは、直枝に質問した。

「直ちゃんはどう思つてんの？」

「え？ 俺？ なんぞ？」

「だって、ずっと言つてたじゃない。俺は孝美と一緒に戦うんだ！ つてさ」

突然降られて訳が分からない様子だった直枝だが、クルピンスキーに言われて少し考える。そんな様子を、他の人達も直枝が気になり注目する。

「はつきりしてることは…戦場に必要なのは強え方だつてことだ…亜弥の様なウィッチには、危険過ぎる…」

「…直枝お姉ちゃん…」

直枝の中では、亜弥の頭を撫でながらこれに尽きるのだった。

その頃、ひかりは基地の柱を登っていた。そこは以前、ロスマンに指導をしてもらった時に使った柱である。ひかりはそこを、以前のように両手に魔法力を這わせながら登っていく。その速さは、前よりも比べ物にならないぐらい速かった。

そしてひかりは、柱のてっぺんまで上り詰めた。

突然、下から声を掛けられひかりは見る。すると、なんと下から孝美が登ってくる。しかも、ひかりやロスマンのように柱に手を添えるのではなく、彼女は洋介の様に、足だけでまるで歩くように登ってくる。

そして、難なく柱のてっぺんまで登ってきた孝美にひかりは驚く。

「(流石は、エリートウィッチだな…)」

鍛錬を終えた洋介は、柱の影に隠れながら目撃した。
姉妹のやり取りは喧嘩をしている様子だった。

「…姉さん………」

眩く時、柱から飛び地面に降下する。そして、慣れたように地面に降り立って行ってしまうた。

「…」

残されたひかりは、ただ一人柱の上で黙ってしまっていた。
そして基地に戻っていく孝美は、途中で建物の柱にもたれかかっているラルに気づいた。

「ラル隊長」

「大事な妹を危険な目に遭わせたくないのだと、はつきり言ってしまった方がいいじゃないか」

ラルは孝美にそう言うと、体をこんどは孝美の方へ向けた。

「妹をこの最前線から引き離す。それがマンシユタイン元帥との取引か」

「知っていたんですか？」

今回のひかりの転属命令は、孝美がマンシユタインとの取引の結果生まれたものだ。孝美は、まだちぐはぐな自分の妹が最前線で戦うことを良しとしなかった。そこで、ひかりを502からカウハバへ正式に転属させることで、危険な最前線から遠ざけようと考えていたのだ。

それを知っているラルは、一つ疑問に思うことがあり、孝美に質問した。

「正式な辞令が出ているなら、何故そこまであいつを追い込もうとする？」

ラルは辞令があれば転属できるひかりを追い込もうとしている孝美の心境が知りたかったのだ。

そして孝美は、その質問に下を向きながら答えた。

「だってあの子は、ひかりは絶対にあきらめない子だから…。こうでもない」と…」

「フ…」

「本当は…本当はあの子を力いっぱい抱きしめたい。抱きしめて、強くなったねって褒めてあげたい。なのに私は、ひかりを傷つけることしか…」

孝美自身は、ひかりをちゃんと褒めてあげたいと思っていた。しかし、ひかりの我儘な性格を考え、自分を鬼にして最前線に戻らないようにしていたのだ。

その様子を見て、ラルは笑った。

「…姉妹揃って不器用なことだ」

そしてラルは、基地の外で立ったまま、口を開いた。

「そこで盗み聞きしてる奴、出てこい」

ラルがそう言うと、建物の奥の柱から洋介が出てきた。

「洋介中尉…」

「いや、盗み聞きするつもりは無かったですよ？俺は」

「最初から聞いていたんだろ？」

「はっ…最初からですけど」

そう言つて、洋介はバツが悪そうにする。そう、実は彼は最初からラルと孝美の会話を聞いていたのだった。

そして、洋介はラルと孝美の側に寄つた。

「孝美さん、俺の姉さんみたいに言うな…」

「洋介さんのお姉さん……」

「お前にも、姉がいたんだな」

「ええ…それに弟もいます…」

洋介は、自身の経緯を話した。

故郷、神戸の洪水災害で両親を亡くした後、洋介は海軍の飛行予科練習生。弟の桜井

勇介は陸軍幼年学校に志願した。

だが、猛反対したのは兄弟の姉、桜井志帆だった。

1938年 初夏

「ダメよ、二人が軍隊へ往くなんて!!」

「なに言っているんだ! 戦争を反対して、赤十字の看護婦になった志帆姉さんに言われたくない。」

「そうだ、兄貴は予科練。俺は陸軍幼年学校に行く年齢だ! 亡き父さんが言ってた、いつかこの国が危うくなると……」

「だけど……あんた達が……」

「……ごめん、姉さん……サムライだった先祖の血が滾る。この国を守るために!」

後日、決意を秘めた洋介と勇介は出征した。

翌年、世界大戦が勃発。戦時下で3兄弟は再会と別れ、弟は欧州へ留学して従軍、ベ
ルリン攻防戦で命を落とし、姉は南方の島で行方不明になった。

そして翌日。グレゴリー攻略のための偵察部隊が全滅した。その部隊を全滅させた
ネウロイとはこの前の補給輸送団の護衛任務の時、クルピンスキーと洋介が撃破したあ
のネウロイだった。

「バレンツ海のネウロイだ?!」

「そんなバカな!! あいつは僕たちが確かに倒したはずだ!」

「ですが、事実です」

納得のいかない様子の洋介とクルピンスキーだったが、ロスマンが正面に写真を張り
付ける。するとそこには、洋介達がバレンツ海で戦闘した球体型のネウロイが映ってい

た。

そしてさらに驚くべきものが映り込んでいた。

「あのユニット…！ 僕のだ！」

そう、写真の中の一枚に、クルピンスキーの履いていたユニットを取り込んだネウロイの写真があつたのだ。それは、そのネウロイがあの時戦闘した球体型ネウロイであると決定づける証拠になっていた。

「コアを破壊したのに…何で!？」

「そう熱くなるな」

そうやって首を下げ考え出すクルピンスキーを、ラルが静止した。クルピンスキーが顔を上げて見ると、そこにはロスマンにコルセットを縛られているラルの姿があつた。

それを見てクルピンスキーは戦慄した。

「隊長……まさか！」

「お前達が倒しきれなかったのなら私が出るしかないだろう」

そう、ラルは自分が出撃する気にいるのだ。今まで洋介は502でラルが前線で戦っている姿を見たことがないため、ラルの実力をよく知らない。

しかし、ラルはこれでもエーリカ・ハルトマンとゲルハルト・バルクホルンと並ぶ、世界第三位の撃墜数を誇る、スーパーエースの一人なのだ。

そしてラルは孝美を見る。

「行くぞ孝美、作戦の肩慣らしにちようどいい」

「はい」

「待ってください」

ブリーフィングルームの後ろから声がし、全員が振り返る。するとそこには、ひかりが立っていた。

「ひかり！」

「何をしに来たの？」

直枝は驚いてひかりの名前を呼ぶが、孝美はやはり鋭い目つきをしながらひかりに厳しく言う。

しかし、ひかりはそれに臆することなく進言した。

「私も戦わせてください」

ひかりの言葉に反応したのは、やはり孝美だった。

「あなたには無理だと何度言えば！」

「そんなのは、やってみなくちゃわかんない！」

孝美はひかりに言うが、ひかりはその言葉を聞かずに孝美を睨み返した。両者互いに睨んだまま硬直する中、それを解いたのはラルだった。

「いいだろう」

「えっ！」

「ラル隊長!？」

ラルはニヤリとしながら許可をした。その言葉にひかりは顔を明るくし、孝美はありえないと言った様子でラルを見た。

そしてラルも、只では出撃許可を出さなかった。

「もしお前の接触魔眼が孝美に勝るようなら、どんな手を使つてでも502に置いてやろう」

「ホントですか!？」

ラルからの衝撃の提案に、ひかりは驚く。しかしそれは、都合のいい話ではない。

「ただし、その場合お前に変わつてカウハバには孝美に行つてもらう」

「えっ!？」

そう、いずれは誰かがカウハバに行かなくてはならないのだ。ひかりが勝つて残った場合、代わりに行くのは敗者となる孝美なのだ。

「もしお前が勝つても、孝美と一緒に戦うという望みは叶わない。それでもやるか？」

ラルはひかりに聞く。そして、ひかりは決意した。

「…やります！だって今の私は502の一員だから！」

「ひかり…」

「お前…」

ひかりの決意に、孝美と直枝は驚く。孝美は自分の妹が即座に決断をしたことに気づく。直枝はひよつこのはずだったひかりが、ここまで成長していることに。

そしてラルは、その様子に満足したようだ。

「上等だ。さあ、孝美はどうする？」

「…」

ラルに言われ、孝美もわずかに考える。そして、答えは決まった。

「いいわ。どちらがこの502にふさわしいか、はつきりさせましょう」

「うん、わかった」

孝美は、そんなひかりを迎え撃つことを選んだ。そして、両者の存続を賭けた勝負が始まるのだった。

「(ねえ…お父さん……)」

「亜弥、これは姉妹としてのけじめだ、手出し無用だ」

—————

そして、502は出撃した。いつもは出撃をしないラルを含むフルメンバーのプレイ
ブウィッチーズ。

そしてその先頭には、ひかりと孝美が並んで飛行、その後ろを、他のメンバーが編隊を組んで飛行していた。

そしてネウロイは撃墜された。

勝負の結果は僅かな差でひかりの姉、孝美の勝利に終わったのであった。

「コアへの指示だが、二人とも正確な位置を示していた。だが、孝美の方が僅かだが早かった。よって、命令通り部隊には孝美を残す。以上だ」

そして基地に帰投した後、ブリーフィングルームでラルが全員に向けて伝える。しかし、その席にはひかりの姿は無かった。

ひかりは、基地の滑走路に居た。滑走路の先端で、懸命に涙をこらえていた。

「うつ……うつ……」

ひかりは、涙を流しなくなかった。自分で決めたことであり、そして敗北した。悔しい思いがあつたが、決して後悔はしていなかった。

しかし、彼女の中に渦巻いていた思いは、ついに爆発した。

「うわああああん！うわああああああん！！」

ひかりは滑走路の先でへたり込み、思い切り泣いた。大粒の涙は、次々と滑走路を濡らしていく。

自分の中に渦巻いていた思いは涙と共にグシャグシャになってしまい、もはやどうして泣いているのかすらひかりはわからなくなってしまった。しかしひかりは、大声で泣いていた

その様子を、ブリーフィングルームから出てきたウィッチたちは、静かに見守っていることしかできなかったのだった。

第32話 雪原の一大決戦

その夜、洋介はある用事で電話を終え、廊下で歩いている時、窓から見ると外にはひかりがいた。

彼女は塔のそばで夜空を見ていた。ここを去る前にペテルブルグの夜空を見たかったからだ。

「この景色も今日でお別れか…」

「こんなところで何をしてるんだひかり？」

「あ、洋介さん…明日でペテルブルグともさよならですから最後はこの景色を見ようと思っただけ」

「そうか…ひかり。いいのか、これで…？」

洋介がひかりにそう言う

「はい。少し名残惜しいですけど、自分はやれることはやったのでスッキリしました。やっぱお姉ちゃんはずごいです」

ひかりは気持ちのいい笑顔でこう答える。そのとき洋介は、かける言葉は必要なく、そして笑みを浮かべた。

「そうか…それは良かった。そう言えば、あの勝負は結構良かった、正直言って君が勝つかもって思ってたくらいだよ」

「ほんとですか!」

「ああ、君なら、お姉さんを超えられると思うぜ」

「…ありがとうございます、洋介さん」

「スオムスでも頑張れよ、応援してるぜ。それに僕も、このグリゴリーの戦いが終わった
ら、亜弥と共に扶桑に行くからな」

「そうなんですネ…洋介さんも頑張ってくださいね。応援しています」

「ひかり、ありがとう！」

互いに握手をした後、洋介は兵舎に戻った時に、赤面しながら月を眺めた。

「ねえ、洋介さん…わたし…わたしは…北海で会った時…洋介さんのことが…／

／

その時の夜は満月だった。

翌朝
ー

「本当にスオムスに行っちゃうのかよ、ひかり」

「あはは…そうですね」

ひかりの転属を、見送りに来た代表としてニパは言う。その言葉に、ひかりは少し笑ってから返事をする。

そして次はサーシャが前に出る。

「向こうに行ってもユニット壊しちやダメよ」

「はい。正座させられないように気を付けます」

サーシャはひかりがユニットを壊さないように念を押しながら、見送りの言葉を述べる。

対するひかりも、正座されないようにしようと言うが、カウハバに正座があるわけがないのであった。

そして次に、定子とジョゼが出る。

「これ、おにぎりです」

「飲み物も」

そう言つて、二人は手に持っていた物を差し出す。

「下原さん、ジョゼさん。お世話になりました」

「ひかりさん」

ひかりが二人にお礼したら、今度はロスマンがひかりに話しかけた。

「あなたの今日までの日々は無駄じゃないわ」

「先生……」

「昨日の動き、なかなか良かったわよ」

「ありがとうございます、ロスマン先生！」

ひかりはロスマンに言われ、嬉しくなり大声でお礼を言う。
そして、ひかりはトラックに乗り込もうとした時だった。

「ひかりちゃん」

「?」

呼び止められて振り返ると、クルピンスキーが歩み寄ってきた。

「やっぱり、ひかりちゃんが持ってた方がいいよ」

「あ、お守り」

クルピンスキーがポケットから取り出したのは、ひかりに以前渡されたりベレーターだった。ネウロイの体当たりからクルピンスキーを守ったそれは、表面を変形させていた。

「ニパさんから聞きましたよ。これ本当は武器なんですよね」

「あはは、ばれた？一発くらい入ってた方がお守りっぽいよね」

あの後、ひかりはニパから本当のことを言われ、リベレーターがちゃんと弾の撃てる武器であることを聞かされた。そしてクルピンスキーはそれを、今度は弾丸を込めてひかりに返したのだった。

「ありがとうございます、クルピンスキーさん」

ひかりはそう言って、リベレーターをポケットに入れたのだった。

そして、最後に亜弥が赴いた。

「ひかりお姉ちゃん！」

「亜弥ちゃん……後方支援と言えども、グリゴーリとの戦い、気をつけてね！それに、わたしはこの基地で妹ができてよかった〜！」

「うん、戦いが終わったら、いつかまた会おうね、お姉ちゃん！」

「うん！」

ひかりと亜弥は互いに抱きしめる。そして、ひかりを乗せたトラックは出発する。

「みなさ——ん！お元気で——！」

ひかりはトラックの窓から体を取り出して、そして全員に手を振って別れの挨拶をした。

その様子を、洋介とウィッチ達は黙って見ていたが、ニパは思わず走り始めた。

「ひかり！」

ニパは、離れていくトラックを追いかける。

「ひかり——！」

「ニパさん……」

追いかけるニパを見て、ひかりは少し寂しそうな顔をする。始めてきた502で、一番最初に親しくしてもらったニパのことを思うと、ひかりも別れるのが辛く感じるのだった。

そして、今まで離れたところで様子をうかがっていた直枝は、ひかりを追いかけていたニパの下へ行く。

「おい、作戦会議始まるぞ」

「何で追いかけないんだよ…」

「追いかけてどうにかなんのかよ?」

ニパの言葉に、直枝は聞き返した。それを聞き、ニパは思い切り直枝の方を振り返った。

「私たちの仲間だろ! 管野の相棒じゃなかったのかよ!」

ニパは思わず、直枝に大声で問う。

直枝の表情を見ると、ひかりと別れるのが少し寂しそうだった。

「…俺の相棒は孝美と、ライバルの洋介と妹分の亜弥だ!」

しかし、彼女の中の相棒は孝美とライバルの洋介、妹分の亜弥。これは変わらない。今までがそうであり、直枝にとつてはこれからもそのつもりなのだから。

そしてひかりは本来の行き先であるカウハバへと向かうのだった。

しかしその見送りに姉の孝美はいなかった。

洋介が会議室に行く途中で、孝美は格納庫でかつて妹が履いていたユニットの柴電改チドリを見ていた。

「…」

「あなたの妹さん。行きましたよ孝美さん」

「洋介さん…ひかりはどんな様子でした？」

「妹が心配ならなんで見送ってやらなかったのですか。姉だろ？」

「姉だからこそです。今あそこで見送ってしまったら、なにか悔いが残りそうで…」

「そうですか…」

孝美はチドリをなでる。チドリにはたくさんの傷がついていた。

「…傷だらけ」

「その傷は妹さん…俺の戦友のひかりさんがいた証です」

「本当にあの子がこんな最前線で戦えるようになってたなんて…。頑張ったんですね、ひかりは」

「ええ、本当に頑張っていましたよひかりは。孝美さん、本当にこれでよかったのですか？」

「はい、姉としてこれ以上ひかりを危険な目にあわせないため、だからこそ、あの時、自分の手で決着をつけてあげよう…諦めさせてあげようつと、それが姉として精一杯できることだと思っただけです。洋介さん」

「そうですか…」

すると隊長のラルがやってきた。

「ここにいたのか二人とも」

「少佐…」

「じきに作戦会議が始まる。それとだ孝美中尉。桜井中尉の言う通りあいつは頑張った。だが今私が望むのは作戦を遂行させることができる強いウィッチ。それだけだ…できるな」

「はい。その役目は私が必ず果たします。」

そして、グレゴリー攻略のための作戦会議が行われるのであった。そしてその指揮官である、マンシュタイン元帥が話を始める。

「周知の通り、グレゴリーは現在時速5キロで南西に移動している。目標はペテルブルグ。この502基地で間違いない。従来 of 出現した敵に応戦する策を捨て、我々から打って出る大反抗。それがフレイアー作戦である。」

その後マンシュタイン元帥は話を続ける。

作戦内容はまずカールスラントの口径800ミリの超巨大列車砲グスタフとドーラ砲を使う。

グスタフが爆風砲弾を使い、グレゴリーの周りについていく雲を吹き飛ばし次に陸戦ウィッチの魔法力によって強化された対ネウロイ用魔導徹甲弾を本体であるグレゴリーにぶつけ消滅させる。しかしこの砲の射程は10キロ。敵の攻撃範囲に入ってしまう。

そこで502の任務は列車砲を護衛し、射程内に到達させること。そしてコアの特定は魔眼の持ち主である雁淵孝美中尉がすることになった。

作戦会議が終わった後、十三ミリ機銃と短剣を装備、零式54型ユニットを履いた桜

井亜弥はマインシユタイン元帥達将校が搭乗する機体、j u 5 2の護衛に就いた。

「亜弥、後方支援の任務と言えども、気をつけてな……」

「うん、お父さんも……生きて……生きて帰ってきてね。約束だよ……」

「ああ、約束だ……」

洋介は心配しつつ、軍刀の鷹狼と、亜弥が所持する短剣の束をぶつけ、親子の約束を交わした。

亜弥を見送った桜井洋介は格納庫に行き、外套を着用する。

四式自動小銃、ロケット弾を装着した九九式十三ミリ機銃を装備、南部十四年式拳銃をホルスターに入れ、軍刀鷹狼を帯刀。

最後に略帽と飛行ゴーグル、零式ユニットを履いた時、ラルから掛け声があった。

「いいか！グリーゴリーを倒すまで、帰れるとは思うな！502統合戦闘航空団、出撃!!」

『了解!!』

洋介が緊迫する空を見る時、インカムから定子の問いがあつた。

「洋介さん、亜弥ちゃんの為にも戦い、生きて帰りましょうね！」

「ああ、定子。桜井洋介、零式。行きます!!」

ギョオオオオン

502のウィッチ達が次々と基地の滑走路を走り、離陸した。
目指すはペテルブルグに向かうネウロイの拠点、グリゴリーへ。

一方、駅の前にはひかりがいた。

「えつと…確かスオムスからの迎えの人が…」

そう言い周りを見渡す。しかし駅の周りにいるのは軍人と軍関係者ばかりで誰が迎

えの人かわからない。すると

「ようゝ」

「あつ！」

「エイラさん！　サーニヤさん！　迎えに来てくれたんですか？」

ひかりの前に現れたのは、以前に休暇で共にしたエイラ・ユートイライネン少尉とサーニヤ・リトヴァク中尉だった。そして、その後三人は汽車の客車に乗車した。

「まさか迎えの人がエイラさんとサーニヤさんだなんて」

「へっへっ驚いたろ？」

「洋介さんとニパさんから迎えに来て欲しいって連絡があつたの」

「洋介さんとニパさんが？」

「ああ、二人ともひかりのこと、すんげー心配してたぞ」

エイラがそう言うのとひかりは沈んだ顔になる。

「あ…」

すると突如、サーニヤの固有魔法レーダーが反応した。

「サーニヤ？どうしたんだ？」

「空」

そう言いサーニヤは外を見るす

「あっ!!」

空には基地から飛行したウィッチたちが編隊を組んで、グリゴーリへ向かって飛んでいた。

「502が出撃したのか」

「はい！」

「あれは隊長！ あれはサーシャさん！ ロスマン先生、下原さん、ジョゼさん。」

「よく見えるナー…」

あそこまではかなり高く、顔は見えないはずなのにそれを正確に言うひかりにエイラは感心する。

「左はクルピンスキーさん、ニパさん、菅野さん、洋介さん。それから…」

「ねーちゃんか？」

「はい」

「頑張つて、お姉ちゃん…」

「ま、そんな湿っぽくなるなつて。じゃーん。」

そう言い、エイラは何か取り出した。

「え?」

「気分が落ち込んだときでも、おいしいお菓子を食べればウキウキハッピーになれるもんなさ。」

そう言って、エイラが渡したのはエイラの好物であるサルミアッキだった。ひかりはチョコと勘違いし大量のサルミアッキをほおばり悶絶するのは言うまでもなかった。

悶絶するひかりをよそに、エイラとサーニヤはかつて、501の仲間だった洋介が飛んでいる空を見上げるのだった。

「洋介中尉、無事でいろよな…」

「無事でいてね、洋介さん…」

心配する彼女たちであった。

一方、上空ではフレイアー作戦が開始されていた。

陸上では大量の88ミリ高射砲やIV号J型中戦車。

オラーシャのカチューシャ自走多連装ロケット砲が陸戦ネウロイやグレゴリーの周りにいるネウロイを攻撃し、上空では黒海の空母から発艦したスピットファイア、メツサーBF109、零式艦上戦闘機21型が小型ネウロイに対し激しい空中戦を繰り広げていた。

そして、巨大列車砲を護衛する502も激しい空中戦を繰り広げていた。グレゴリー周辺のネウロイたちは近づけまいと必死にビーム攻撃をする。

「くうっ！」

「何だよこのビームの数！」

「敵も本気ってことね！」

グレゴリーの本体は、ネウロイにとってはペテルブルグ攻略のための最重要な巢、これを破壊されたら大打撃を受けるため奴らも必死だった。

だがそんなネウロイも直枝と孝美のコンビによって撃墜される。

「すごい…菅野と孝美さん、いきびったりだ。」

「二人もすごいですけど、洋介さんも凄い！」

定子が見た先では洋介が単機で10機以上のネウロイと戦っていた。洋介はネウロ

イのビームを固有魔法である波導で回避して、機銃と小銃、軍刀と拳銃で次々と撃墜した。

その姿に全員が息をのんでいた。そして、グスタフ・ドーラ両砲が射程内に入った。そしてグスタフに爆風砲弾が装填される。

作戦本部 ー

「魔導シリンドー内、術式展開まで、3、2、1…」

「発射準備完了。グスタフ、射程圏内に到達。」

通信兵の言葉を聞き、マンシュタイン元帥は

「グスタフ砲。発射!!」

発射命令を出す。そして

ドドoooooooooooo

グスタフの800ミリ砲が火を噴き、グレゴリーの周りにあつた黒い雲はグスタフの爆風弾によって吹き飛ばされ、本体が見えた。

「あれが敵の本体」

「うわー、でつかー…」

「…空に浮かぶ…要塞だな…」

あまりの大きさにみんな、洋介は驚く。そして、ロスマンがフリーガーhammerを撃ち、命中するが、グリゴリーは傷一つ付いていない。

「通常の兵器では傷もつけられませんね…」

「雁淵中尉、コアの特定だ」

ロスマンの報告を聞いた元帥は孝美にコアの特定を指示した。

「行くぞ孝美！」

「了解！」

「孝美をコア特定エリアまで護衛する」

『了解！』

ニパとジョゼはシールドを展開してグスタフとドーラを守る。

そして孝美は魔眼を発動させ、コアの場所を見つけドーラの通信士に報告、ドーラその位置に砲を向ける。

だが、それに気づいたグリゴーリは強力なビームをドーラに向けるニパたちが必死にシールドで防ぐが、強力すぎてシールドが貫通、そしてドーラの砲身がビームで折られたのだった。

「ドーラ被弾！ 砲身が破損して発射できません！」

「何っ!？」

「撃てないだど!？」

通信兵からの報告を聞き、上層部の将軍たちは驚く

「ならばグスタフで撃つ！ 予備弾を用意しろ！」

「了解!!」

しかしグレゴリーは攻撃をやめ移動を開始した。

「大変です！グレゴリーがペテルブルグ方面に移動を開始しました」

「何だと!？」

「発射まであとどれくらいだ!？」

「術式の展開に20分必要です!」

「遅い! 射程外に出られたら終わりだぞ!」

元帥たちは渋い顔をする。

戦線
――

「くそっ! どうする…20分じゃ間に合わない。どうすれば…考えろ…考えろ…!」

洋介がそう考えると一つ目のものが目に入る。それは砲身が破壊され、使用不能となったドーラ砲であった。

「…破壊されたドーラ…そうだ！」

案を思い出した洋介は、ドーラに向かって急降下。

「洋介さん!？」

「何を！」

洋介の行動に全員が驚くが、それを見ていた孝美は

「そうだわ！その手があったわ！」

何かに気付き洋介のところに行く。

洋介はドーラの砲弾を持ち上げようとしても、1トン近い重量で手こずっていた。

「んぐぐぐ…重てえー!!ん…孝美さん!？」

「洋介さん、私も手伝います!!」

「感謝します!」

そう言い、二人はドーラに装填されていた弾丸を取りだし魔法力を生かし持ち上げようとす。それを見た502のウィッチも二人が何をするか気が付く。

「あれは、魔道徹甲弾!!」

「そうか!あれをぶつける気だな!そうと分かれば!!」

そう言い、みんなは二人のもとに向かう。

「バーカ、一人で出来る訳ねえだろ。孝美、洋介。手伝うぜ!」

「私もよ!」

「守るより攻める方が性に合うからね〜♪」

「可能性はこちらのほうが高いです」

「やつぱり妹さんとソックリね」

「姉妹揃ってバカつてことか」

「洋介君も、冷静に見えて結構馬鹿なことをするね」

「そうですね」

「…バカは嫌いじゃない」

そして502のウィッチが力を合わせ、800ミリ砲弾を持ち上げることに成功。

そして、グレゴリーの真上に到達した。グレゴリーはそのことに気付いていないのか
余裕で進む。そしてウィッチたちは急降下して800ミリ砲弾を投下。

しかしただ一人、孝美だけはまだ手を離さなかった。

「何やってんだ、孝美！」

「絶対に当てて見せる！」

直枝が大声で呼ぶ中、孝美は砲弾を確実にコアに命中させるために最後まで残った。そして、ネウロイはその様子に気づいた。直上からやってくる孝美と砲弾に向けて、赤いビームを放ったのだ。

しかし、そのビームが孝美に命中する前に、直枝がシールドを張って防いだ。

「行くぞ！孝美！」

「管野さん！はい！」

そして、直枝が盾になりながら砲弾は徐々に降下していく。そして

「いっけええええ!!」

孝美は、砲弾を手から離れた。そして、そのまま投下された砲弾はネウロイのコアがある位置に真っ直ぐと進んでいき、そしてネウロイを貫いた。

砲弾の命中と同時に、ネウロイの体は光の破片に変わっていく。

「やったぞ、孝美!」

「はい!」

結果は見事グリゴリーに命中し、爆散する。

その様子に顔を歓喜の表情に変えた。

その時だった。散り散りになっていくはずの光の破片が、突然ピタリと止まる。そして、まるで映像の巻き戻しのように今度は収束していくではないか。そして今度は、再

び黒い不気味な形を形成していく。

「グリゴリー健在！再生しています！」

「グリゴリーが再生!?」

「何故だ!? コアを破壊したはずじゃないのか!?」

勝利を確信した司令部に動揺が走る。

その時、孝美は再生していくネウロイを見てあるものを見つけた。

「あれは……!」

魔眼を発動している孝美の目には、小さな何かが映っていた。それは以前、孝美が見たことのある物だった。

「コ、コアの中にコアが見えます!」

「なんだって!？」

「こいつもコアの中に真コアを持っていたのか!」

孝美の言葉に、ウィッチーズは全員まるで頭を強くたたかれたような衝撃を受ける。
その衝撃は、司令部にも伝わった。

「真コアをピンポイントで撃たないと倒せないだ!？」

孝美の言葉を受け、マンシユタインは信じられないといった様子で聞き返す。

そして、同時刻にグスタフに砲弾が装填されたと、通信兵から伝えられた。

「グスタフ、発射準備完了!」

「最後の一撃だ、次は無いぞ」

「雁淵中尉！今、真コアは見えているか!？」

マンシユタインは大声で孝美に聞く。最後の一発、これを外したらもう後がない状況下だ。

「見えます！グリットH6…えっ!？」

「どうした？孝美」

孝美は冷静にコアの位置を伝えようとするが、突然その口の動きが止まった。

「き、消えた!?!捕捉不能！真コアが見えません!」

「何だと!?!」

孝美から出た次の言葉は、さすがのラルも動揺させた。魔眼持ちである孝美が、ネウロイのコアを特定できないのだ。

そして、孝美はあるカラクリに気づく。

「コアが魔眼を遮っているんだ……くっ……」

孝美は、ネウロイのコアの作りを理解し、そして思わず奥歯を噛みしめる。

「……」筋縄にいかんな……さすがにネウロイも、我々が思うより防御が優れておる……」

悔しさの余り、機銃のグリップを握りしめる洋介だった。

第33話 ひかり輝いて

地上の戦車・高射砲部隊が、グリゴリーに向けて砲撃を行う。

しかし、どの攻撃もグリゴリーに有効なダメージを与えることができず、逆にビームを食らい高射砲部隊は壊滅する。

「第6陣地、突破されました。∴敵が進路を変えました！グスタフに向かっています」

報告を聞いたマンネルヘイムは、突然動きを変えたグリゴリーに焦りの表情をする。

「奴め、こつちの狙いに気づいたか」

その頃、桜井亜弥は壊滅した地上部隊の前線から後方の野戦病院まで手作りの櫓で幾人もの負傷兵を乗せて、運んでいた。

「…ぐう……うう……」

「しっかりして下さい!!」

「…もう……だめだ……」

「っ!?だめです!!死んだら家族が悲しみます!!必ず生きて下さい!!」

亜弥は櫓を引っ張り飛行しながら、負傷兵に励ましの声を掛けた。

野戦病院で負傷兵を降ろし、再び前線へ飛行、空に浮かぶグリゴーリを睨んだ。

「くっ……お父さん……みんな、頑張って……お母さん、みんなを見守って下さい……」

直接激戦区へ戦えない亜弥は、心の中で洋介たち502部隊の無事を祈った。

上空

孝美が単機でネウロイに突っ込んで飛行した。

「待て！ 孝美！」

「おい！ 孝美！」

直枝が必死に追いかけようとするがネウロイのビームのせいで前に進めない
「くっ…孝美!!」

「はやまるな、孝美！」

「隊長！ 他に方法がないんです！」

「ばかやろう！」

「発動…絶対魔眼！」

孝美がそう言うのと彼女の髪の色が、茶色から赤色に変化した。

彼女が言う絶対魔眼とは、通常の魔眼では捉えられない特異型や、複数のネウロイのコアを特定できる必殺の技だが肉体と精神の負担が大きく、シールドの能力も著しく低下するから援護なしでの使用は自殺行為な危険な技なのである。

絶対魔眼でグレゴリーのコアを探す孝美。

「真コアは…どこに…きやつ…」

コアを探す中、グリゴリーは孝美に向けてビームを放つ。シールドで防ぐがそう長くはもたない。

すると無数のビームが孝美を襲う。すると502全員が孝美の前に出てシールドで孝美を守る

「どうやら間に合いましたね。少佐」

「そうだな、ぎりぎりだったかな」

「まったく、あいつと同じ無茶しやがるぜ孝美」

「ロスマン先生から聞いたよ、絶対魔眼の話」

「雁淵中尉ならきつと使うだろうって」

「だって、ひかりさんの姉でしょう？」

「一人で行くなんてずるいです。」

「皆でやりましょう。」

「はやまるなと言っただろう。」

「みなさん…ありがとう。」

孝美はみんなに礼を述べ伝え、そして

「絶対魔眼！」

再び絶対魔眼を発動させる。グリゴーリはビームを撃つが502のみんながシールドを張り孝美を守る。

「目標、最終補正。完全捕捉！真コア、グリットH58954∴T87449∴。」
孝美が通信兵にコアの位置を知らせると同時に彼女の魔法力が尽きたのか、そのまま落下する

「孝美ーーーー！！」

直枝はそう叫ぶ、しかしジョゼが間一髪ところで孝美をキャッチし、治癒魔法をかけるかし∴

「ジョゼ！孝美！危ない！！」

「っ!？」

グレゴリーは二人を目掛けてビームを撃つ。すると

「やらせるかーっ!!」

間一髪のところ、洋介が間に入り、軍刀でビームを切り裂いた。

「なっ!？」

「うそ！」

「ビームを斬った!？」

その光景にみんな啞然とした。

「ジョゼ！早く孝美中尉を！」

「は、はい!! 洋介さん!!」

ジョゼは洋介の言葉にうなずき、下におろすと同時にグスタフから、魔道徹甲弾が発射された。

しかしグレゴリーは再び黒い雲を発生させ、砲弾が当たる寸前に雲に遮られ砲弾はそこで止まりそして碎け散った。

そしてグレゴリーは、ドーラとグスタフを破壊し、そのままペテルブルグに向かう。

「そ、そんな…」

「まさか、あの雲がシールド代わりになっているのか!」

「く、くっそー!!」

「失敗だ…」

直枝は拳を握り締め、言いようのない怒りを振り撒く。
ラルも、声を掠らせながら呟き、平常心を保つラルも、今回ばかりは絶望した。

「魔導徹甲弾は予備共に破壊されました…」

「万策尽きたか…」

司令部内も、重い空気が流れる。

「そんな…そんな…くっ！」

失望した場面にいた亜弥は齒を軋り、飛行した。

作戦は失敗。上層部は作戦中止を決意、そして撤退命令を出した。

現時点でもうグリゴリーを攻略する術は失われてしまい、これ以上は軍隊の消耗だけになってしまう。

地上で見ていた兵士たちは、呆然としながらグリゴリーを見上げた。彼らの目には、もう希望が失われていた。

「お姉ちゃ——ん！」

その時、ウィッチ達のもとに聞きなれた声が聞こえる。全員が振り返ると、そこには信じられない人物が居た。

「ひかり!？」

まず最初に驚いたのは、直枝だった。そこには、カウハバ行きの列車に乗ったはずのひかりが走ってやってきた。

「ひかりちゃん？」

「ひかりさん……」

「ひかり……」

他のウィッチ達も、ひかりが現れたことに気づき驚くが、ひかりはその様子を無視し

て、孝美に駆け寄った。

「お姉ちゃん！お姉ちゃん、しつかりして！死んじや駄目っ！」

ひかりは、目から涙を流しながら孝美に呼びかける。

彼女の目には、孝美が今にも死んでしまいそうに見えた。

「大丈夫だよ、ひかりちゃん」

「えっ…!?」

しかし、その様子をクルピンスキーがまず否定した。その言葉に、ひかりは思わず顔を上げて驚く。

「でも、お姉ちゃん、絶対魔眼を…？」

「絶対魔眼の弱点であるシールドの低下は皆で。肉体へのダメージはジョゼさんの治療

魔法でカバーしたわ」

「脈も体温も正常よ。安心して」

「だが、全ての攻撃を防ぎきれず、孝美に傷を負わせてしまった。すまん…」

ロスマンとジョゼが説明をし、ラルは自分たちの力が及ばなかったことをひかりに謝罪した。

しかし、ひかりはそんなラルの言葉に首を横に振った。

「皆さんがお姉ちゃんを助けてくれたんですね。ありがとうございます」

ひかりがそう言つて、メンバーにお礼を言う。

その時、ジョゼの膝元で眠っていた孝美が目を覚ました。

「ひかり…」

「お姉ちゃん！」

「ごめんね、ひかり…倒せなかった…」

孝美は、自分のことを心配しているひかりの方を見ると、最初に謝った。

「そんな！何で謝るの!？」

「中尉は悪くありません」

「そうだよ！精一杯やったよ！」

そんな孝美の言葉を、ひかりは元より、隊員達も揃って否定した。
孝美は自分の身を削ってまで、グリゴリーのコアを特定したのだ。不運なことに、グリゴリーによってその思いは阻まれてしまった。

定子の目線の先には、自身の直下にある兵器を蹂躪するグリゴリーの姿が映っていた。グリゴリーはグスタフやドーラだけでなく、撤退をしていく連合軍兵士にも容赦のない攻撃を浴びせて行く。

「ああっ!？」

「このままペテルブルクが落ちるのを見てるしかないの…?」

ニパは思わず、目の前の光景に問う。

「真コアの位置がわかんないんですね」

「残念だが、あれからコアの位置も移動している…」

ひかりの言葉に、洋介が答える。尤も、洋介も為す術のない状況でも、彼の目には絶望はせず、軍刀鷹狼を握っていた。

しかし、ひかりは洋介の行動を見て、メンバー全員を振り返った。

「…洋介さん……私に接触魔眼を使わせてください。私も戦います！」

「ひかり……？」

「気持ちはわかるけど……」

「列車砲も魔導徹甲弾も無い今となっては……」

「ひかり、俺もこの通りまだ武器がある。グリゴーリを倒さない限り、この世界の未来がない！」

ひかりの言葉で洋介も戦うと言うが、既に手段の無いウィッチ達の手では、どうにか出来るものではなく、誰もその言葉に首を縦に振らなかった。

「俺もだ洋介！俺もまだ戦いてえ！」

なんと、ひかりと洋介の言葉に最初に頷いたのは直枝だった。直枝は拳を握り締める
と、全員に主張した。

「俺はまだピンピンしてるぜ！魔法力だつて残ってる。最後のカスを使うまで諦めたく
ねえ！弾がねえなら、この拳がある。俺がぶん殴つてやる！」

「ムリだよ。相手はグリゴーリだよ？」

直枝は大声で主張するが、ニパはどうやって倒すのだと言った様子で直枝に言う。
そんな中、今まで黙っていたラルは、何かを感じていた。

「…」

「隊長？」

コルセットを抑えるラルの様子に、ロスマンが疑問に思い聞く。

「さつきから、妙に古傷が熱い…」

「え？」

「向こうに何かを感じる」

ラルはそう言つて、何かを感じる方向を見る。

そして、ウィッチーズがそこに歩いていくと、それはあつた。

「これだ」

「魔導徹甲弾の碎けた弾芯のようですね」

そこにあつたのは、グリゴリーの雲によつて防がれた魔導徹甲弾の一部分だった。

「まだ魔法力を失ってないわ」

そして驚くことに、この弾芯は陸戦ウィッチの魔法力を残していたのだ。

『502の諸君。よく健闘してくれた。だが我々にはもはや反撃の術は残っていない。
撤退だ…』

「撤退!?!」

無線から聞こえるマンシユタインの言葉に、まさか撤退になると思わず、ひかりは驚く。

しかし、ラルはその言葉を遮った。

「待ってください、元帥。我々に策があります」

『何?』

ラルの言葉に、無線の向こう側のマンシユタインは思わず目を開く。

そして、ラルは直枝を見る。

「管野」

「？」

「望みを叶えさせてやる。殴って来い」

なんと、ラルは直枝に殴って来いと進言した。

「隊長？」

「本気ですか？」

「盛り上がってきたぜ!!」

サーシャとロスマンもラルに聞く。二人はラルが何をしようとしたか理解したようだ。直枝は拳を上にあげて一人盛り上がる。

「時間がない、始めるぞ」

そう言つて、ラルは作業に入ろうとする。

司令部では、ラルの説明を聞いたマンシユタインが頷いた。

「そうか…わかった」

そう言つて、マンシユタインは受話器を下ろした。

「出来るのか？そんなこと」

「今は彼女たちに希望を託すしかありません」

横に居たマンネルヘイムが聞くが、マンシユタインはこの件を全てウィツチーズに委ねた。もはや彼らに出来る事は何も無い。頼るなら、残りはブレイブウィツチーズだけだった。

「落下の衝撃でこんな状態ですが、魔法力はまだ宿っています」

「こんなバラバラなのにどうするの？」

サーシャの言葉にニパはどうしたらいいのか聞く。

「なるほど。隊長、魔法力を別のものに移せばいいんですな」

「そうだ。そしてそれを、管野の手に移す」

「えっ!？」

そんなニパの質問を、洋介とラルが説明する。しかし、膨大な魔力を手だけに移すなどとても出来る事でなく、定子はありえないと言った様子で驚く。

「正確に言うと、その魔法力だけを管野さんの手袋に移植します」

サーシャが説明の付け足しをしたため、ようやく定子たちも理解した。

右手の手袋を魔導徹甲弾の芯に向けて翳す。

すると、徹甲弾の魔力は直枝の方に移っていき、直枝の右手は青く光り輝く。

「うおお……！」

「すごい！」

その光景に、他のウィッチ達は驚く。

「あれっ……洋介さん……？」

「なにを……？」

「あっ！」

魔導徹甲弾の光がまだ輝きが残り、それを見た洋介は鷹狼を鞘から抜き、魔力が鷹狼の刃に移った。

「管野が失敗した時の備えだ！」

「桜井の刀と管野の右手は魔導徹甲弾そのものだ」

「おい！」

その時、遠くから声がする。

「あつた、あつたよー！」

クルピンスキーとロスマンが揃ってやって来る。クルピンスキーの手には魔導徹甲弾の内部にあつた弾芯によく似たピンク色の結晶があつた。

「超爆風弾の弾芯よ。やっぱりバラバラに破壊されていたわ」

「使えそうなのはこれだけ」

「ちようどいい」

超爆風弾の弾芯を、ラルは自動小銃に取り付けていたロケット弾に括り付けた。これにより、小型ではあるが、超爆風弾が完成した。

そしてラルは、直枝の方を向く。

「いいな？ 殴れるのは一度だけだ」

「へっ！ 一度で十分だ。な、ひかり」

「えっ!？」

直枝に突然振られたひかりは思わず間の抜けた返事をする。しかし、ここで直枝から思わぬ言葉が出る。

「えっ!?! じゃねえよ。俺の相棒はお前だろ」

「管野さん…」

なんと直枝は、今まで否定していた相棒と言う言葉を堂々とひかりに向けて言ったのだ。

「大体、おめえの接触魔眼が無きや、真コアを殴りようがねえしな」

そう言つて、直枝はひかりに向けて左拳を突き出した。

「はいー！」

それを見て、ひかりも大声で返事をし、そして拳を打ち返した。

そして、ひかりはジョゼに抱っこされている孝美の方を見る。孝美は、ひかりのことを厳しい目で見ていた。

「お姉ちゃん…」

「失敗は許されないわ。ひかりに出来る？」

「えっ…それは…」

孝美の真剣な声に、ひかりは思わず言い吃る。
しかし、彼女の決断は早かった。

「でも、やってみなくちゃわかんない！」

「くすっ」

「ふふっ」

ひかりの言葉に、孝美は笑う。それにつられて、ジヨゼも笑う。

「フッ」

「ふふっ」

「アハハ！言うと思った」

二人だけでなく、他のウィッチ達も笑いだす。ニパに至っては、ひかりの言う事をまるで分っていたかのように返す。ひかりは思わずキョトンとする。

「ひかり、チドリを使って」

「わかった」

そして、孝美は自分の使っていたチドリを、ひかりに譲った。

ひかりはチドリを足にはめると、魔法力を流し始める。ひかりの魔法力を受けたチドリは、勢いよくその回転数を上げる。

「さあ、奴をぶっ飛ばしにいくぞー！」

『了解！』

ラルの掛け声と共に、ブレイブウィッチーズは発進した。

負傷した孝美と、孝美の治療に魔法力を使ったジヨゼは、洋介から外套と携帯糧食を預かり、出発したひかりたちを地上から見送った。

上空
ー

「グリゴーリから中型ネウロイ!!」

502がグリゴーリに向けて飛行する中、洋介がグリゴーリから2機の中型ネウロイが接近するのを確認した。

「…こんな時に限って……」

「奴らとの戦闘を何とか避け…」

ドカアアアン

ラルが指示を出したと同時に、中型ネウロイが空中で爆発した。

「なんだ…?」

「…ネウロイが…爆発した…」

「…いったい…っ!?…あれは…!」

定子の能力で、502部隊上空に一人のウィッチが急降下してきた。

「お父さん!!」

零式54型ユニットを履き、十三ミリ機銃を所持した桜井亜弥であり、グリゴーリに向かう502部隊に合流した。

「…亜弥…お前…」

「お父さん!!わたしも、グリゴーリを倒す為に、戦わせて下さい!!」

「…亜弥……」

「ラルさん…お願いします!!」

洋介は、今の部隊でグリゴーリ討伐の戦力が不足気味だったが、娘の亜弥が加わることで五分五分だと見立てた。

亜弥は、父親の洋介と隊長のラルに戦闘参加の許可をする。

「お前が来るまで、我々は戦力不足だ。この臨時だが亜弥、付いて来い!」

「ラルさん、ありがとうございます!!」

11のウィッチとウィザードが厚い雲が覆うグリゴーリに接近した。

「雲の生成過程を全て記憶し、分析した結果、グリットH2223、T3358に層の薄い箇所が確認できました」

「了解」

サーシャの固有魔法、『映像記憶能力』によって記憶したグリゴリの形状は、雲の薄い部分を作っていた。

そして定子の固有魔法、『遠距離視』によって、グリゴリの位置を特定する。

「グリゴリまでの距離、12000!」

「今の進行速度だと、15分でペテルブルクが飲み込まれるわね」

「5分で片を付ける、行くぞ!」

『了解！』

ラルの言葉に、ウィッチーズ全員が返事をする。そして、グリゴリーの雲の薄い地点へと向かっていく。

グリゴリーは、雲から雷を発生させてウィッチに襲い掛かる。しかし、それは先頭に立っていたロスマンがシールドで防ぐ。

「そこだ！」

そして、ラルが後方で銃を構え、そこから超爆風弾の魔芯を括り付けたロケット弾を放った。固有魔法、『偏差射撃』を使ったロケットの軌道は、そのままグリゴリーの雲に突き刺さり、そして爆発する。

その爆発により、魔導徹甲弾を防いだグリゴリーの雲は穴を開けた。

「今よ！」

「フォーメーションアロー！」

そして、クルピンスキーを先頭に、雲の中にウィッチ達が向かう。グリゴーリは、突入させまいと再び攻撃を加えて行く。

「邪魔するな――！」

クルピンスキーがシールドを張り攻撃を防ぐと、そのまま穴の中へ入っていく。そして、中へ侵入したウィッチ達は、内部に待ち構えていたグリゴーリと対峙する。

「ブレイク！」

サーシャの掛け声と共に、チームに分かれる。ひかりと直枝をグリゴーリまで送り届けるクルピンスキーと洋介、ニパと亜弥のチーム。そして、その護衛を行うサーシャと定子のチームに。

「なんとしても管野さんとひかりさんが本体に到達するまで耐えるのよ！」

「ユニットが悲鳴上げそう！」

「壊しても怒らない？」

サーシャの言葉に、ニパとクルピンスキーが言う。

「ちゃんと二人を届けられたらね！」

そんな言葉に、いつもは怒るサーシャが許した。

「右上、敵の攻撃が薄くなっています！」

「マジックブースト！」

定子の言葉を聞き、クルピンスキーは固有魔法、『マジックブースト』を使う。それにより、加速をしたクルピンスキーを先頭に、グリゴリーの触手をかいくぐっていく洋介達。

そして、ここで先頭が交代する。

「洋介君！」

「了解！」

先頭を飛んでいたクルピンスキーから、今度は洋介が先頭に立つ。そして、後ろに付いてくるひかりと直枝を今度は引っ張っていく。

「そこっ!!」

そして、洋介は波導を使う。それにより、景色はゆっくりと流れ出し、そしてグリゴリの攻撃する未来が見える。

「右だ！」

「はいー！」

洋介は指示をしながら、回避行動をしながら攻撃する。ひかりと直枝もそれについていくと、先ほどまでいた位置をネウロイの攻撃が通り過ぎる。

「よしっこれなら…っ!?!あれは…!」

洋介は、その先に最後の関門が接近する三角型を確認した。

「…亜弥、ひかり、直枝！」

「お父さん!？」

「洋介さん！」

「洋介!!」

「あの獲物は俺が仕留める、グリゴーリのコアを叩け!!」

「洋介、済まない！だが、必ず勝て！」

「お父さん……くっ！」

亜弥、ひかり、直枝は三角型を洋介に託し、グリゴリーのコアを探索した。

「（こいつを討たない限り、未来と502が危ない……）そこっ！！」

洋介は小銃と機銃の照準で狙いを定めた。だが、銃弾が当たる寸前に三角型が4つに分離した。

「分離した……（あのブリタニアで遭遇した型に酷似しているな……他は子機……1／4の確率でコアがある……ならば……）」

洋介は波導と魔法力を集中させ、コアを探した。

「いたぞっ！っつと…邪魔するなっ!!」

ダダダダダダッ ドカアアン

「食らえっ!!」

洋介は3機の子機を撃破、本命のコアを持つネウロイに狙い打った。

「……装甲が厚い……」

銃弾が三角型ネウロイの装甲を弾いた。

その時、ネウロイがビームを発射、洋介は寸前に回避したものの、左腕と右脚を掠めた。

「…洋介さん!!今行きま…きやつ!」

遠距離視で見ていた定子は、洋介の元に飛ぶにも、ワーム型ネウロイのビームに遮られていた。

負傷した洋介はシールドが貼れず、回避するだけでも精一杯だった為、ゴーグルを目元に掛け、魔導を込めた軍刀の鷹狼を鞘から抜いた。

「…落ちる訳にはいかん…奴を落とすまでは…みんなのためにも…落ちるまでは…！
…愛機と鷹狼…俺の魔法力よ…燃え上がれ!!」

洋介の身体と鷹狼は淡く燃え、刃先を三角型ネウロイに向けて高速に飛行した。

「…魔導斬!!」 スパアアアン

洋介が三角型の本体を真つ二つに斬ったと同時に、グリゴーリが破滅した。

「やった……やったんだ…亜弥…ひかり…直枝……」

洋介は魔法力と力が尽き、地上に向けて落下した。

「お父さん!!」

コアを破壊した組の亜弥が洋介の手を掴んだ。

グリゴリーの戦いで疲れた洋介は夢を見た。

「ん……これは…!？」

洋介はストライカーユニットに変身する前に、いつもの愛機零戦64型に搭乗し、暗黒の空に居た。

「…亜弥…すまない…命を落とした僕を許してくれ……」

「…あ…あれは…?」

洋介機の周囲には、幾千幾人万の光が洋介を囲んだ。

『生きろ』

「……さん……お父さん!!」

「はっ……」

亜弥の呼ぶ声で、洋介は目が覚めた。

「お父さん…よかった…よかった…」

「亜弥…心配かけて…ごめん…」

「『『 洋介さん！ 』』」

「洋介！心配したぞ、この野郎！」

「やあ洋介君♪」

502のウィッチたちが洋介の周りを囲んで抱きついた。

「わわっ、みんな……」

「全くです桜井さん、心配しましたよ」

「そうですよ、あなたは命を粗末にしたから正座です!」

「す…すみません…」

ロスマンとサーシャに注意を受けて、冷や汗を流し苦笑する洋介だった。

「……は…?」

「……は野戦病院だ、桜井中尉。」

洋介が亜弥の頭を撫でている時、マインシュタイン元帥とマンネルハイル元帥、ラル少佐たちウィッチ達が洋介のベッドを囲んでいた。

「君が雁瀨軍曹とグリゴリー撃破の貢献したことを心から礼を言う。」

「マインシュタイン元帥、マンネルハイル元帥…私は、この502と未来の為に戦ったままです。」

「桜井中尉、私からも礼を言う。君と亜弥も、502の勇敢な仲間だ。」

「はっ、隊長！」

「ラルさん！」

「戦場の魔術師に祝福あれ」

洋介と亜弥は、自身の上官に対して敬礼した。

1945年3月、オラーシャ地方のネウロイの巣、グリゴリーの完全消滅が確認された。

ノヴォホルモゴルイ港

雁渕ひかりが姉の孝美と港で別れる頃。

「では、ラル隊長。桜井洋介中尉と桜井亜弥はこれより、扶桑皇国に向けて移動します！」

「うん、502は君の居場所だ。いつでも戻ってこい。」

「はい！」

「亜弥もだ、元気でしつかりな。」

「はい、ラルさん！」

洋介と亜弥はラルと握手して、乗艦予定の空母に向かって歩いた。

「亜弥ちゃん！洋介さん！」

「定子…？」

「これ、私が作ったお弁当です。途中で食べてください」

「ああ、ありがとう」

「ありがとうございます」

洋介と亜弥は、定子から弁当を受け取った時

「あれ……？下原さん、洋介さんと亜弥ちゃんにお弁当を!?わたしも作って」

「え……？」

「じ……実は……オレも……」

ひかりと直枝も洋介と亜弥のために、弁当を作ってきた。二人にとっては、初めての手作り弁当であった。

「まあまあ待て、三人の弁当を頂くよ！」

「お姉ちゃんたちのお弁当を、美味しくいただきます」

三人がにらみ合う時、洋介と亜弥が制止した。

第502統合戦闘航空団のウィザード桜井洋介と、小さなウィッチの桜井亜弥は、扶桑皇国海軍の空母に乗艦、扶桑に向けて旅立った。

君と繋がる空 短編集

第34話 高野五十六

オラーシヤ帝国、ノヴォホルモゴルイ港から北極海を経由した扶桑海軍第3艦隊は、扶桑皇国の横須賀に向けて航行してるその途中。

北太平洋

「風向きよし、進路よし…桜井亜弥…行きます!!」

ギューイイイイン

異世界からやってきた小さきウィッチ、桜井亜弥はユニットを履いて、扶桑海軍の航空母艦瑞鶴の飛行甲板を走り、発艦する。

亜弥は艦隊上空を一周し、空母瑞鶴の飛行甲板を目指し、着艦準備を整えた。

「うう…やった！…きやつ…」

着艦したところで、艦体は上下に揺れた影響でバランスを崩し倒れた。

「おい、亜弥ちゃん!？」

「大丈夫か!？」

甲板に待機していた整備員たちが、心配し駆けつけた。

「イタタ〜うん、大丈夫です…」

「空母の飛行甲板は陸上の滑走路と違い、上下に揺れるから無理するなよ」

「よいしょっ……お父さんや孝美お姉ちゃんのような、負けないウィッチになりたいの……もう一度!」

亜弥は再びユニットを履いて、魔導エンジンを発動し、発艦した。

「…亜弥ちゃんのお父さんが…世界初のウィザード、桜井洋介中尉の实の娘さんとは……」

「それ以上に驚くのは父親は21歳、娘さんが9歳。年の割が合わなねえな…」

「亜弥ちゃんのお母さんって、どんな人なんだろうな」

「それがな、お母さんは…中尉が戦場で行方不明になった影響で…」

「……そうか…気の毒だな…」

「それに…中尉は娘さんのために再婚する意思はあるのか…」

「どうだろう…仮に再婚する相手はウィッチだったりして…」

整備員たちが噂を告げる中、亜弥は繰り返し、離発着の訓練を続けていた。

そして、別の空域にて

ギューイイイン ダダダダダダ

「消えた……」

「……だあ！孝美さん!!」

ダダダダダダ

「きやああつ?!」

零式64型ユニットを履いて扱う桜井洋介中尉は、紫電改ユニットの雁淵孝美中尉と模擬空中戦を行っていた。

孝美は洋介の背後に付き、彼は急降下で逃走。海上の太陽の光の反射を利用して、ユニットを捻って回避、孝美が油断した隙を狙い、止めを刺した。

「ふう…、4勝ですよ。そろそろ空母へ…帰還しま…」

「いいえ、まだです！ウイザードの洋介さんに勝つまで！」

「わかりました……はあ、…誰かさんと似てるなあ…」

オラーシャ帝国から離れて3週間後、扶桑の横須賀へ接近した報を聞いた洋介は、デッキに上がり、眺め、涙を流した。

「あれが扶桑か…異世界と言えども…僕は……日本に……日本に…帰ってきたんだ…」

洋介が日本の本州で最後まで過ごせた思い出は山口の岩国基地と帝都東京を防空す

る厚木基地以来だった。

第3艦隊は横須賀軍港に寄港。

洋介と娘の桜井亜弥は空母の艦橋に寄った。

「小沢提督、孝美中尉。お世話になりました！」

「うむ、桜井中尉。オラーシャの戦いは見事だ。また、何かあれば、よろしく頼むよ。」

「はっ！」

「亜弥ちゃん、妹のひかりと仲良くしてありがとう」

「うん、こちらこそありがとうございます！孝美お姉ちゃん、お元気で！」

互いに握手して、二人は空母を降り、ユニットが降ろされた後、第3艦隊は佐世保に

向けて出港した。

洋介と亜弥は、自身を乗せた艦隊に向けて敬礼した。

「さてと…」

「おい、おい！」

「ん…？あれは…」

降りた波止場には、くろがね四駆と海軍第二種軍服と眼帯を付けた、見馴れた女性士官が立っていた。

「はっはっはっ！久しぶりだな、桜井！」

「あつ、坂本さん！」

坂本美緒、扶桑皇国海軍少佐。

洋介がブリタニア防衛、ガリア解放戦で世話になったウィッチであった。

「坂本さん、お久し振りです!!」

「オラーシヤの活躍は見事だったな!ん…?」

美緒が洋介の背中を叩きながら、彼の側にいた少女を見つめた時、亜弥は洋介の背後に隠れた。

「桜井…その娘は…?」

「はい、以前手紙で知らせた俺の娘です。」

「おおつ、そうか!名前は…?」

亜弥はやや硬直気味になりつつも、美緒の前に出た。

「は…はい、桜井亜弥です。父が大変お世話になりました！」

「はっはっはっ！君の父、桜井洋介の上官の海軍少佐、坂本美緒だ。よろしくな、亜弥。」

「はい！よろしくお願ひします！」

「お前と亜弥、横須賀鎮守府へ出頭命令が下された。」

「「えっ？」」

洋介と亜弥は美緒の従兵、土方圭介兵曹が運転するくろがね四駆に乗車。

横須賀鎮守府へ向かいながら積もる話をした。

特に亜弥に関しては、ネウロイの極秘計画で魔女の世界に転移、ウィッチの覚醒。

扶桑からオラーシャに輸送された、零式54型ユニットを履いての戦闘で活躍した。

「そうか、この（ご）時世で一人でも戦力になるウィッチが欲しいからな！」

「そのことなんですが坂本さん。俺がこの扶桑に呼ばれた理由は何ですか？」

「ああそれか：実はだな。ある海軍の将官がお前について興味を持つてな。私が何度説明してもお前と直接会って話したいと聞かなくてな：お前たちが異世界から来たということは話していないぞ」

「それで、その将官さんが俺を扶桑に？」

「ああ。それだけじゃない。これは私の推測だが桜井、お前を正式に扶桑海軍所属にしたいんじゃないか？」

「俺を？」

「ああ、お前はいまだに無国籍扱いだ。事実上お前は義勇軍兵士であって国籍はない。それだけじゃない、お前を欲しがっている国は多々ある。その中でも三つの国がある。一つはカールスラント、一つはブリタニア、そして最後は扶桑。お前は別世界の扶桑：日本人だって言うてはいるが、そんなことはこの国のお偉いさんには通用しない。向

こうは無国籍のお前をどうしても手に入れその国の人間にしたいと思っている可能性がある」

「はあ…そうだったんだ…」

「だが、さっき言ったようにこれは私の勝手な推測でしかない。もしかしたら別の要件で呼んだのかもしれない」

「それは？」

「それは…私にもわからない。万が一、警戒しておけ」

「はい！」

その間に車は横須賀鎮守府へと着く。

鎮守府の廊下で洋介と亜弥、坂本美緒少佐は歩いて応接室に着いた。

「……ですか？」

「ああ。……だ」

そう言い坂本少佐はドアをノックすると

「海軍少佐、坂本美緒。桜井洋介中尉と他一名をお連れしました」

「（……他一名って……わたし……？）」

亜弥はその他の言葉を聞いて頬を膨れていると、そう言うドアの向こうから

『入りたまえ』

ドアの向こうから男性の声が聞こえ、美緒が入室した。

「入ります」

一言言うと、ドアを開け、二人一緒に部屋に入る。洋介は部屋の中に幾人の将校がいるのかと思ったが、部屋の中には一人の初老の男性が座っていた。

「やあ、よく来てくれたな桜井洋介君、亜弥君」

「はっ…海軍中尉、桜井洋介です」

「同じく、桜井亜弥です！」

洋介と亜弥が自己紹介、敬礼すると男性は頷いた。

「私は大本営作戦部長官の高野五十六大將だ…欧州から遠路はるばる着て申し訳ない」

「(五十六?) いえ…それで私を呼んだのはあなたなんですか長官?」

洋介は、ある名前を聞いて耳を傾けた。

「ああ、そうだ。君のガリア解放とオラーシャのグリゴリーの撃破した活躍は聞いているよ。」

「大変恐縮です。それで何の要件ですか？」

警戒した目で洋介がそう訊くと、彼は少し真剣な目になった。

「坂本少佐。すまないが彼と娘さんの三人きりで話がしたい。席を外してくれるかな？」

「はっ、わかりました」

そう言い美緒は部屋を出ると、まず彼が最初に開いた言葉は

「さて中尉、本題に入る前に私から一つ質問がある……」

そう言い、彼が洋介に訊いた言葉は

「あのラバウルで、アイヌの測量士、金城幸吉君の海ガメのチタタプウは絶品だったな」
♪桜井飛行兵曹長。」

「っ!?…ラバウル…幸吉……海ガメのチタタプウ……飛曹長…あなたはもしや…山本長官…!?」

その名前で高野は頷き、唱えられた洋介の階級はラバウル時代であつたのに衝撃を受けるのだった。

あのブーゲンビル島上空で山本五十六は敵機の奇襲を受けて命を落とす前に、厚木十三と沖田新一郎と沖田進次郎の兄弟。

大賀虎雄と金城幸吉、秋山敏郎と敏子の双子の兄妹。さらに原住民の少女サンと、現地で調達した食材を囲んで食事したことを呟いた。

彼、山本五十六はブーゲンビル島上空で戦死した。だが、彼はふと目が覚めたら新潟で生まれ、生前と同様軍人の道を進んだ。

この世界では人類との争いが無く、突如出現した異形の存在ネウロイ。

高野は、初陣の扶桑沖戦役、扶桑海事変から戦闘を嫌ほどネウロイ知ったのであった。洋介もあの戦時下での報告をした。

マリアナ沖海戦とフィリピン海戦で航空部隊と連合艦隊が壊滅。その戦いで戦艦武蔵、翌年の4月に戦艦大和が撃沈された。

精鋭パイロット集団、ラバウル六勇士に関して、44年の2月に解散。

翌年の45年2月に突入してから隊長の厚木十三少佐がフィリピンのマバラカットで戦死。

7月、マラッカ海峡上空で大賀虎雄少尉が戦死。

8月、長崎上空で特殊爆弾により沖田新一郎大尉、金城幸吉一等飛行兵曹が戦死した。

「8月15日、日本は敗戦しました。そして、私はその後、ソビエトロシアとの戦いで、このウィッチの世界へ…」

「あの、わたしも戦争終結から9年後、ネウロイの計画でこの世界に…」

「そうか、あの忌まわしい戦争で日本を守ってくれた事と、この世界で欧州のブリタニア

防衛とガリア解放、オラーシャの激戦で人類の為に戦ったことを、心から礼を言う。」

高野は洋介の前で礼を言い、頭を下げた。

「長官、私は長官の指示でラバウル六勇士の編成とその一員として大変感謝しています。苦楽を共にした仲間がいました！それに、私はこの世界で人類の未来と平和の為なら、勇士として当然です！」

身体を整え、キリツとした表情になった。

「そうか、謙虚だな……上の方の報告と連合軍上層部については私がいろいろとやっておこう。あの戦争で戦った同郷のよしみだ。今後、桜井洋介中尉、亜弥君は正式に扶桑皇国の国籍及び、正規兵に編入される。そして、桜井中尉は今後、大尉になる。亜弥君は一等飛行兵曹に任命する。」

「はっ!!」

「はい!!」

「追伸、5日後に佐世保へ行き、欧州行きの二式水上大型飛行艇に搭乗。ロマーニャの504部隊へ短期配属を命ず」

「5日後ですか…?」

「そうだ、わずかな日数だが扶桑で骨休めしなさい。娘の亜弥君と共に」

「ありがとうございます、やま…いえ、高野長官!」

「ありがとうございます!」

洋介と亜弥は高野五十六長官に敬礼。

その後二人は坂本美緒と合流した。

「それで、桜井。いったい話とは何だったんだ?」

「俺と亜弥は正式に扶桑皇国海軍の正規兵に着任。俺は大尉に昇進、亜弥は軍曹に就任しました。5日後に、再び欧州へ配属命令を下され、佐世保でロマーニヤ行きの飛行艇に搭乗せよと、高野長官の指示です。」

「そうか…はっはっはっ！まあお前の実力とウイザードなら、昇進されてもおかしくな
いからな！ちよつと済まないが、私はあるところに行かねばならない。代用で1日
だけ、横須賀のウイッチ候補生の教官なつてくれないか…？」

「俺が、ウイッチ候補生の教官ですか…？」

「そうだ、私も近い内に欧州で戦う為に鍛えたいから頼むぞ。」

「……うん、わかりました。坂本さんにはブリタニアから色々と恩がありますから、引き
受けます。」

「はっはっはっ！桜井、ありがとう！宿泊に関して、私に任せろ！」

確かに洋介は、この世界に来て美緒から幾つかの縁があり、断れなかった。

第35話 ウィッチ育成の指導

その後、大尉の襟章を第三種軍服を着けた洋介と、一等飛行兵曹の腕章を右腕に着けた亜弥は、坂本美緒の指示により横須賀航空学校に足を運び、1日のみの教官を務めた。

「ふう…以前の横須賀航空隊の教官以来だな」

洋介は万が一に備え、黒の色めがねを掛けた。

「ねえお父さん、なんで色めがねを…？」

「ん…それは父さんの素性を隠す為に…（ここ）か、坂本さんが担当する教え子がいる教場は…」

洋介と亜弥は坂本美緒が担当する教場へ入室する。

「……………え……………男の人……………」

突如、ウィッチ候補生たちの前に、見たことがない濃緑Ⅱ第三種軍服を着た男性士官と、皆より幼い少女が入室しているのに驚愕した。

「ウィッチ候補生の皆さん、私は坂本美緒少佐に代わり、本日のみ教官を務めます」

候補生はどよめきながら、洋介が教壇に立った。

「ウィッチの持つシールドに関しては、少しでも長く維持するために常に節約することが大事です。ベテランでは上級の技術左捻り込み、経験が浅い者としての技術、木の葉落とし戦法にて、敵の怪異ことネウロイのビームを回避が可能です」

講義する授業はスムーズであり、真面目にしつつウィッチ候補生はノートに書き刻

み、あるウィッチが疑念を感じた。

「(あの男性士官…どこかで…)」

練兵場

練習ストライカーユニットを履いての実習時、亜弥は候補生たちの前で飛行、あるいは敵役として模擬空戦の鍛練を行った。

「ちくしょう…あのチビ…チヨコマカと…！」

ダダダダダ 「きやつ…」

「フッフッフ、これで7機撃墜♪」

「その射撃の下手くそな候補生、敵さんの未来位置を読め！」

「はっはい!!」

「そこの候補生!木の葉落としを使い!!」

「すいません、教官!!」

「青二才の候補生め……はあ……もう少し候補生の為に、横須賀に長く居たいが、時間が少ないな……」

「…青二才……教官っ」

「ん……?君は……?」

「大尉は何様のつもりですか!?!」

「大尉は男性ですよね！坂本少佐みたいなウィッチじゃないのに、私たちウィッチ候補生の口出ししないで下さい!!……この……腰抜け………口だけ大尉!!」

一人の候補生が洋介の発言で前に赴き、両手で襟首を掴み反発した。

「ふふふ……青二才と言われたくらいで、そう怖い顔するな。……なら、私自ら直にユニットを履いて教えます」

「え……？あなたがユニット……!?!」

洋介は候補生の両手を払い、その言葉で候補生は頭を傾げ、用意された専用のストライカーユニットを練兵場に出した。

「零式ユニット……ちよつとエンジン部の形状が違う………っ!?!」

「行きますっ!!」

洋介は愛機64型のユニットを履き、轟音を轟かせながら、連続宙返りや急降下。きりもみ、超低空背面横飛行など須賀航空学校上空と海上を曲芸飛行した。

教室と教官室の窓から頭を越し、飛行する男性ウィッチを眺め、次々と驚愕した顔をしていた。

曲芸飛行を終え、滑走路に着陸した。

「ふう〜…やっぱり、日本の空はいいなあ…」

「(日本…?) 教官…もしかしてあなたは…」

「自己紹介が遅れました。俺は桜井洋介、この通りウィザードです」

洋介が候補生たちの前で色めがねを外し、笑みを浮かべた。

入室した以上に、ウィッチ候補生たちは驚愕した。

「桜井…!?…あの…501部隊でガリア、502部隊でオラーシャを救い、大活躍した世界初のウィザードの桜井洋介…!!」

「活躍かどうなのか知らんが、その桜井だ。名前の下に教官か大尉が付きますよ。」

「はっはい！桜井教官!!」

候補生が慌てながら洋介に敬礼した。

洋介が着陸してすぐ、ウィッチ候補生たちが彼を囲んだ。

「…きやあゝ!!聞いた!?桜井洋介大尉ですって!」

「あの人が、世界初のウィザード!」

「写真の通り、ハンサムな人だわ!」

「凄いわ！サインして貰おうかしら！」

候補生たちは必死に空戦技術や射撃と剣術の技能。何人かは能力が向上。

あるいは私的でサインの執筆や、模擬空戦をした亜弥に関して、実の親子の関係と聞いたら、どことなくがっかりした様子だった。

「さてと、ぼちぼち坂本さんが指定した宿泊場所に行くか、亜弥。」

「うん、お父さん……………あれ……………さっきのウィッチさんが……………」

洋介を襟首を掴んだウィッチ候補生が洋介の前に赴き、頭を下げて謝罪した。

「……………あの、桜井教官……………先ほど大変失礼しました！」

「いやいや、構わんよ……………それに、君の名前は？」

「……………はい、私は服部静夏です!!」

「服部静夏か、覚えておく。」

「あ…あの…教官…」

「なんだ…?」

静夏は桜井洋介という人物。出身は扶桑だと言われているが不明な点が多すぎる事に疑問を感じた。

最初に魔法力があるなら、今まで話題にならなかったのか、そして出身を聞かれても扶桑の言葉に僅かながら戸惑っているときがある。

本当に彼は扶桑人なのか疑ってしまう。以前に教官である坂本美緒にも質問したが、なにかごまかされた。

彼女は嘘をつくのが下手すぎるからすぐに何か隠していることは分かった。

何よりの決定的なのが、先ほどのユニットに、赤い丸の国籍マークであった。

だが、彼を見る分悪い人物ではないことは分かる。

「い……いえ……／＼／＼……いつか…桜井教官との模擬訓練をお願いします!!」

「君が、統合戦闘航空団に選抜さるウィッチに成長したら、相手をする。いつか戦場で戦う時は死ぬな、生き延びろ。では!」

「静夏さん、それではごきげんよう。」

洋介と亜弥は静夏に敬礼し、横須賀訓練学校の校門から出た。

「桜井洋介……いつか……あなたを追って往きます!」

そう自身の胸に秘めて、決意する静夏であった。

第36話 この空の下で

校門では、土方圭介海軍兵曹が洋介と亜弥をくろがね四駆に乗車させる。

「お待ちしてました！桜井大尉、亜弥さん。坂本少佐が指定する宿泊場所をご案内します！」

「ああ土方さん、宜しく頼みます」

「お願いします！」

向かった先は横須賀港が見渡せる坂に昇り、ある民家に到着した。

「到着しました」

「ありがとう、土方さん。ここは…診療所か…」

「…あ……その声は…もしかして……洋介さん!？」

よろずや診療所。

本件の庭から玄関に一人の少女が現れたのは、501で洋介の命を救われた戦友、宮藤芳佳の実家であり、ブリタニア以来の再会だった。

洋介と亜弥は芳佳の実家の居間に上がり、彼女の母親の宮藤清佳、祖母の秋本芳子からおもてなしを受けた。

「あの、桜井さん。私たちの芳佳がブリタニアで大変お世話になりました。」

「いえ、芳佳さんからお世話になったのは、僕の方です。彼女の治癒魔法が無ければ、僕は生きていません」

洋介は清佳に感謝の意を述べ、頭を下げた。

「しかし、あんたが孫の世話になった、桜井さんとは〜！芳佳からよく聞いているよお〜！」

「僕のこととは存じ上げているのですか…？」

「そりやあもう！新聞に載るくらい世界初のウィザードだからね。ガリアとオラーシャを救った扶桑の英雄の1人だって、あんた有名だよ。それに若いのに娘さんまでいて、驚いたよ〜！」

「きよ、恐縮です。あはは……色々と理由がありますが…これ以上は極秘です…」

芳子の言葉で洋介は頭を掻きながら苦笑する中、亜弥と芳佳、彼女の親戚で友人の山川美知子が芳佳の部屋で賑わっていた。

「へえ〜！洋介さんと亜弥ちゃんは、別の世界の扶桑からやって来たんだね！」

「うん、その事は他の皆に内緒にしてね美千子さん…」

「わたしの事は美千子でいいよ、亜弥ちゃん！」

「ねえ、亜弥ちゃん。亜弥ちゃん的能力は凄いいんだねー！映画みたいだったよ、あれが洋介さんと亜弥ちゃんがいいた世界の扶桑、日本なんだね！」

「うん、芳佳お姉ちゃん。わたしのお父さんはあの戦争で死んだんだと、ずっと思っていたんだ……この魔女の世界に迷い、お父さんと再会したのには驚いちゃった。だけど、もっと驚いたのは、わたしもウィッチになっちゃった……！」

「凄いいね。ねえ、続きはお風呂に入ろう亜弥ちゃん♪」

三人の少女は風呂場へ移動、洋介は三種軍服から浴衣に着替え、お茶を啜りながら月と庭を眺めた。

「（…昼と庭の匂いが懐かしい…僕の家もこんなだったな…）」

亜弥は芳佳の部屋に寝泊まり、洋介は芳佳の亡き父の部屋、新一郎の部屋に寝泊まりした。

翌日、洋介と亜弥は芳佳と横須賀を巡り歩いた。

「洋介さん！」

「お父さん！」

「二人とも、あまり引つ張るなよ」

軍港を見渡せる公園や諏訪大神社。更に市街地で食事や買い物など、三人で手を繋いで楽しんだ。

夕暮れ時

「洋介さん、亜弥ちゃん。横須賀はどうでしたか…？」

「僕は、戦闘機パイロットの育成を受けたからな。教え子として、あるいは教官として、休暇の度によく出掛けたな」

「わたしは初めて。お母さんと二人でお買い物をしたのがちよつと懐かしい…」

「亜弥…」

「亜弥ちゃん……ごめんなさい……」

亜弥がウィッチの世界に転移する前に、母親の雪が亡くなった辛いことがあったために、芳佳は謝罪する。

「そんなことないよ芳佳お姉ちゃん、なんだか…お父さんとお母さんと歩いている気分だったよ…」

その言葉で、洋介と芳佳はどことなく赤面する。

「……………／／／」

「／／／…そ…そうだ！…ねえ二人とも、今から温泉に行きませんか…？」

「温泉…？」

洋介と亜弥は芳佳の案内でウィッチ御用の温泉旅館『島田屋』に赴き、男女に分かれて入浴した。

「ああゝ気持ちいいゝ」

「極楽極楽…洋介さん、どうですか？」

「ああ…生き返る…空を眺める温泉は…元の世界…北海道の夕張温泉以来だ…」

洋介は戦闘機のパイロット時代、南方のニューブリテン島のラバウル航空隊にて、空戦を終えて、疲れや負傷する度に花吹山の麓の温泉にて身体を治療していた。

また、本土防衛として鹿児島島の鹿屋や北海道の夕張温泉以来だった。

「気に入ってよかった♪この温泉は、坂本さんの勧めた温泉なんです。以前にペリー又さんとリーネちゃんが扶桑にガリア復興事業に来日し、坂本さんたちと温泉で入浴したんです♪それに、古くからウィッチ御用たちと言われてきた由緒ある温泉なの」

「へえ、そうなんだ！」

「…そうなのか…この温泉の成分は…ウィッチ御用と言われているが、ウィザードである僕にも有効だな…」

洋介は笑みを浮かべながら魔法力を発動し、シールドを出した。
そして温泉から出て、芳佳の実家に向かって歩いた。

「あゝ気持ちよかったね、お父さん」

「うん、温泉に案内してもらってありがとう芳佳…芳佳…？」

芳佳は月を眺めた。

「こんな静かで穏やかなのに…今もどこかで戦争が起きてるなんて、ウソみたい…」

今でも血みどろの戦場から、遙か彼方の扶桑からは平和であった。

解散した501部隊のウィッチたちや、オラーシャのペテルブルグを拠点に、502部隊のウィッチは今でも怪異の敵、ネウロイと戦っている。

「そうだな…僕と亜弥はあと3日したら、この扶桑の佐世保を出て欧州に行く……弟と戦友の妹さんに慰霊碑を建立するために…」

「そうなんだね……ねえ洋介さん、亜弥ちゃん。この戦争が終わったらどうしますか…？」

「あ…」

「そうだな…考えてなかったな…」

「いつか、戦争が終わったらわたしの家で暮らしませんか？」

「えっ!?!いいの？」

「……………／／／」

芳佳の言葉で洋介は赤面した。

芳佳の家に帰投した洋介と亜弥。芳佳の家族、洋介と亜弥の親子5人は、卓袱台を囲みながら食事を摂った。

「ねえ…洋介さん…?」

「ああ、すまない芳佳。食事がとても美味しく、つい言葉を失ってしまったよ…」

「あの、洋介さん」

芳佳の母、清佳が赴き進言した。

「…あつ、なんですか？」

「洋介さん…私たちの娘、芳佳を嫁に貰ってくださいませんか…？」

「ぶはっ…げほげほっ…え…芳佳さんの…嫁ですか…／＼／＼」

その言葉で、洋介はお茶を吐き出し咳き込んだ。

芳佳の家族の母親の清佳と祖母の秋本芳子は、由緒ウィッチの家系。親子揃って治癒魔法を持っている為に、病氣や負傷する患者を治癒させる。

もしも、洋介と亜弥が芳佳の家族となれば、魔法力を持つ家族となる。

余談だが、横須賀ウィッチ航空学校に関しても候補生たちからも、自身を嫁にしてくれとの声ばかりであった。

色々なことで、洋介の顔が赤面する。

「(色々な意味で、ウィザードってのは厄介な存在だよ……雪……君は………僕が……許さんのかね……)」

洋介は内心で亡き妻の雪に、呟いた。

翌朝

「はあ……はあ……」

洋介は走り込みながら数種類の花を摘んで、芳佳の実家に戻り、芳佳の手作りの朝食を摂った。

「洋介さんと亜弥ちゃんは、再び欧州へ行くんだね」

「ああ。今日中に佐世保に到着して、明後日は欧州行きの便に乗らねばならん。軍からロマーニヤ行きの命令を下されたからな」

「そうなんだ、せっかく洋介さんが横須賀に来てくれたのに残念です…」

「わたしも芳佳お姉ちゃん。兵隊さんになって、とても大変だよ…」

仲良くなったばかりの亜弥と芳佳は気持ちが沈みつつあった、特に芳佳はあの命令違反の影響で不名誉と除隊を下された。

洋介は考えながら、あることを提案した。

「まあ亜弥、芳佳。少しでも長くいるために、横須賀の滑走路まで見送りに来てくれ。」

「えっ、本当に!？」

「ウィザードとして、僕の権限で土方兵曹に頼みつける」

「やった〜！ありがとうございます。」

その後、迎えの土方兵曹とくろがね四駆が到着。芳佳の計らいで美千子も乗車、横須賀航空基地に向けて出発した。

「ありがとう洋介さん、美っちゃんも乗せてくれて。」

「なあに、治癒回復と一宿一飯の恩がある」

「ねえ洋介さん、さつき道中で摘んだ花はなに…？」

芳佳の質問に深刻な顔をした。

「ああ、これは……僕の亡き家族と戦友への手向けだ…」

「あ……」

芳佳と亜弥は、以前に洋介の苦い思い出話を聞いたのだった。

あの戦争で、洋介の家族と戦友はそれぞれの災害で、国内の戦場で命を落とした。故郷の水害で両親は、亜弥にとっての祖父母であった。

「だけどお父さん……この世界におじいちゃんとおばあちゃんのお墓が無いんだよ……意味が……」

「意味がある、……例えば別世界であっても、亡き者に花を捧げなければならぬ。父さんの戦友と戦友の妹さん、そして弟の勇介が亡くなった戦場でもだ！」

「……お父さん……うん、わたしもおじいちゃんとおばあちゃん、勇介叔父さんの元へ！」

亜弥はあることを思い出した。

魔女がいる世界に行く前、血の繋がった叔母の桜井志帆も、年と時間が掛かっても弟

たちが命を落とした戦場跡へ花束を捧げることができた。

2年前、小樽

「叔母さん、あやもお父さんと叔父さんのところにお花を……！」

「……亜弥……うん、そうだね。」

横須賀航空ウィッチ学校 滑走路

「芳佳お姉ちゃん、美千子お姉ちゃん。短い間だったけどありがとう！」

「お元気で、亜弥ちゃん。」

「亜弥ちゃん、欧州に行っても頑張つてね！」

まだ眠る時刻でウィッチ候補生がいない滑走路にて、芳佳と美知子は亜弥を抱きしめた。

「芳佳、今はいないが坂本さんによろしく。いい医者になる様に頑張れよ。」

「うん、洋介さん。洋介さんも欧州の無事を祈っています。」

「洋介さん、サインありがとうございます。」

「美千子さん、どういたしまして。土方さん、この横須賀でお世話になりました。」

「はっ、こちらこそ！」

土方兵曹は洋介に対して敬礼した。

洋介と亜弥はそれぞれの武装など装備、生活用具を容れたリュックを背負い、発進ラックに上り、自身の零式64型と54型ユニットを履き、魔導エンジンを発動させた。

「桜井洋介、行きます!!」

ギョオオオン

「桜井亜弥、行きます!!」

ギョオオオン

洋介と亜弥は佐世保に向けて飛行した。

「行っちゃったね芳佳ちゃん、…亜弥ちゃんと洋介さん…今度はいつ会えるかしら?」

「わからないよ…だけど、おそらく戦争が終わるまで…二人は大丈夫だよ美つちゃん」

横須賀から飛行して20数分、神戸上空。

洋介は横須賀で摘んだ花を神戸の空に投げ、ばら蒔いた。

「お父さん、お母さん！長く掘ったらかshにて、すみません……そして……空襲で亡くなった民間の皆さん……ご冥福を……」

「……おじいちゃん……おばあちゃん……」

二人は手を合わせ、水害で命を落とした亡き両親と、空襲で亡くなった方々への冥福を祈った。

それから、広島上空にて花を投げ、ばら蒔いた。

「お父さん……？なんで広島に……？」

「ああ、父さんの上官だった、隊長の柚子さんと生まれたばかりのお子さんが、広島のパカで亡くなった…」

「っ!?…そうなんだね…」

洋介と亜弥は、広島に落とされた原子爆弾の被爆で幾万の人々が亡くなった。二人は広島空にて手を合わせ、冥福を祈った。

「(…隊長の娘さんが生きていれば…、亜弥と友達になっていたかも知れんな…)」

そう思いながら、洋介と亜弥の親子は長崎の佐世保へ向かった。

第37話 戦友への花束

九州 長崎 佐世保

桜井洋介と娘の亜弥は朝日が昇り、桜が咲く長崎の佐世保上空に到着した。

「凄い桜♪お父さん、凄い長くて高い塔だね〜!」

「あ、ああ…桜前線が通過し……あれが日本……いや、扶桑で高い針尾電波塔だ。それに、命令を受けた場所へ行かねば……」

「あつ…待って!」

拙い言葉を口にした洋介はある施設に向けて、進路をとった。

佐世保航空予備学校 上空

「……こも、ウィッチの学校なんだねお父さん」

「ああ、規模は横須賀と甲乙つけ難いが、航空ウィッチを育成する施設だ。虎雄もこんな施設で育ったんかも知れんな」

「虎雄……？」

「ああ、ラバウルで共に戦った、父さんの戦ゆ……」

「そこで止まれ!!」

「っ!?」

零式ストライカーユニットを履き、海軍第二種軍服を着たウィッチが、二人の前に現

れた。

「何者だ、お前たちは？ん…お前は…男…男のウィッチ…!?」

「扶桑海軍大尉、桜井洋介です！」

「えつと…一飛曹の桜井亜弥です！」

「……桜井…洋介……はっ、噂で聞いた世界初の男性ウィッチ…いや…ウィザード!? 私は佐世保航空予備学校の教官、国崎橙子大尉です!!」

国崎は慌てながら洋介に敬礼、洋介と亜弥も彼女に対して敬礼をした。

「私は高野長官及び、坂本美緒少佐の命令により明朝、佐世保から欧州行きの飛行艇に搭乗せよとの辞令を下されました!!」

「ご苦労様です！私が佐世保学校へご案内します!!」

国崎が二人を誘導、航空予備学校に着陸した同時に一人の職員が伝令として赴いた。

「国崎教官〜！」

「なんだ!?……わかった。桜井大尉、当学校の校長室へご案内します。」

「校長室……?わかりました。お願いします」

「校長がなんのために呼んだんだろう……?」

亜弥は頭を傾げながら国崎に案内され、校長室に到着した。

「校長、国崎です。桜井大尉とその他1名をお連れしました!」

「(はあ……)」

オマケみたいな言葉を聞いた亜弥は、軽く息を吹き、校長室に入室した。

だが、当学校の校長は洋介が想像したよりも若く、その容姿を見た二人は驚愕した。

「失礼します…あ…っ!?坂本さん」

「ん、坂本…?」

「いえ、失礼しました!!私は扶桑海軍大尉、桜井洋介です!!」

「桜井亜弥一飛曹です!!」

洋介も亜弥は戸惑いながら、校長に敬礼した。

「佐世保航空ウィッチ予備学校へようこそ。私は学校の校長、北郷章香中佐だ。因みに坂本美緒は、私の教え子だ。」

「え…?」

その言葉に二人は内心驚いた。そして、洋介と亜弥は北郷の接待ソファに座った。

「君が世界初のウィザードか、ブリタニアとオラーシャの活躍は耳にしているよ。雁淵孝美とひかりの姉妹も、この教育学校出身のウィッチだからね」

「恐縮です！」

「へえ〜！ここが孝美さんとひかりお姉ちゃんの学校なんだ……」

「君の様な少女もだ、まだ幼い少女が、ネウロイと戦っていたなんて未だに信じられない。年は？」

「はい、9歳です」

「そうか、ふふふ……」

北郷は笑みを浮かべながら質問を変えた。

「君たちを調べたがこの部隊は愚か、教育部隊についても名簿すら存在しない…何者だ…？」

「…わかりました。隠さずに伝えますが、私と亜弥は…ネウロイの極秘計画により、異世界から来た住人です…」

洋介はいつかのブリタニアとペテルブルグの尋問を脳内から思い出し、真実を呟いた。

「はははっ！そうか！ブリタニアとガリア以前にウィザードと弱冠9歳のウィッチが表れる事態大ニュースになっているぞ〜！」

北郷の笑止する姿を見て二人はキョトンとした。

「君がいた世界ではどんな事があったのか、話して貰うぞ！」

「はっ！ですが、我々の内密にお願い申し上げます。」

「うん、かまわない」

洋介は、この世界に転移する前の世界について語った。

二人のいた世界はネウロイ処かウィッチは存在せず、共通する敵がない相手は人類同士が争っていた。

自身はウィザードではなく、海軍を志願し、血みどろの戦場で戦った戦闘機パイロットであった。

戦争が終結、母国が敗戦。だが、一部の戦場で戦闘が続行。それを阻止するために再び戦闘機に搭乗、激戦で負傷して、ウィッチの世界に迷いこんだ。

亜弥は洋介の血の繋がった娘であり、元の世界で父親の洋介を待ちわびる中、ウィッチの世界に迷いこんだ。

「なるほど…要するに、二人はネウロイの実験に巻き込まれた被害者だな…」

「そう言うことになりますね…それに！」

洋介はソファから立ち上がり、扉を開けた。

「「きやつく!?」」

洋介が扉を開けると、ウィッチ候補生の何人かが、次々と雪崩れ込んだ。

「世界初のウィザード、桜井洋介さんとお会いして凄く光栄です!!」

「桜井大尉は、ひかりと一緒に戦ったんですか!？」

「大尉は、ウィッチの恋人がいるのですか!？」

「あ…いや…その……」

洋介があたふたになっている時だった。

「馬鹿者!!お前たち、授業をサボるとはいい度胸だな、全員校庭を10周だ!!」

国崎が候補生たちに怒号を下し、候補生たちは蜘蛛の子を散らすように校長室から去り、それぞれの科目の教場へ向かった。

「すいません、桜井大尉。このような事態になってしまつて…生徒たちに代わつて謝ります…」

国崎は洋介の前に頭を下げ、謝罪した。

「いいんですよ、国崎教官。彼女たちはまだ幼く、青春を犠牲に身を投じた少女たちですから、少しでも楽しい思い出が刻まれるといいですよ」

洋介は手を差し伸べて、制止した。そして、北郷があることを述べた。

「桜井大尉、君の年齢は21であるにも関わらず、シールドは張れるのか?」

「はっ…この通りです」

洋介は片手でシールドを出した。

「そうか、…君が羨ましいな…大尉。君が…いや…ウィザードの存在が…扶桑海事変でいれば…まっ…無い物ねだりはよくないな…」

「北郷校長…そうですね…」

北郷章香はどこか悲しい顔をしていた。

その後、洋介は国崎から聞いた話によると、彼女は扶桑海事変で負傷、魔法力があつても、もう二度と、ストライカーユニットを履いて、大空を飛ぶことはなかった。

正午を過ぎた頃、洋介は亜弥とウィッチ候補生たちに腕を引っ張られ、学校の食堂に赴いた時

「あつ洋介さん、亜弥ちゃん！」

「孝美お姉ちゃん！」

「孝美さん」

佐世保学校で雁瀨孝美と再会。彼女はオラシーヤの戦いで、連合軍上層部から大尉に昇格した。

三人は同じテーブルを囲み、学食を食した。

「そうなんですか…孝美さんも再び欧州へ…」

「ええ、そうなんです。佐世保から欧州へ派遣する前に、実家で休養を摂ろうと」

「そうですか…」

「洋介さんと亜弥ちゃんは長崎は初めてですか？」

「うん、初めてです♪」

「初めてですね、元の世界で鹿児島以外はどこも行つてません」

「なら、わたしが案内します」

「え、いいの？」

孝美の言葉で、亜弥は輝いた。

「お父さん、行こうよ！」

「そうだな、少しでも日本……いや、扶桑で少しでも時間を過ごしたいから、行くか♪」

亜弥を見た洋介は、賛同する。三人は食事を終え、学校を出た。

教場

「桜井大尉、雁淵大尉とどんな関係なのかな…？」

「あのオラーシャの戦いで、二人は共に戦った仲だつて」

「もしかして、恋人同士なのかしら…」

「「ええっ!？」」

「そんな」

「あの亜弥つて娘、桜井さんの娘ですつて！」

「「ええっ!？」」

「だけど、あの二人は親子の割に年が若いって言うか……合わないような……」

「孝美大尉……美人だから、桜井大尉と……もしかしたら……」

「うう……わたしも花嫁に立候補しようかな……」

「だけど、欧州に配属した三隅さん、気の毒だね」

「うん、誰よりも桜井大尉に会いたがっていたしね」

ウィッチ候補生たちは三人を見て羨ましく、色々と噂をたてていた。

出島やガラス砂丘、喫茶で休憩し、名物のカステラを頂いた。

「これが……長崎のカステラ……」

「美味しいでしょ、亜弥ちゃん。洋介はどうですか？」

「……ああ……とても美味しいですよ………」

孝美の言葉で、洋介はボーツとしていた。

「長崎に到着してから、疲れてませんか……？」

「いえ、長崎つてのは所々、僕の故郷の神戸に似てるなと……」

「そうなんですね。いつか、ネウロイの戦争が終わったら、洋介さんの神戸を案内してくださいね」

「ええ。但しこの世界の神戸に、僕の実家はありませんが……」

「お父さん………」

「………洋介さん………」

二人の前で洋介は笑みを浮かべるが、亜弥と孝美はどことなく悲しんでいることを、わかっていた。

その後、眼鏡橋と大浦天主堂、などを回り、最後に稲佐山展望台へ登った。

「凄ーい！この展望台で長崎が見える！」

「ええ。洋介さん、どうですか……？……え……」

「……………沖田さん……………幸吉……………虎雄……」

「（……沖田さん……幸吉……………虎雄……？）」

洋介は長崎の景色を見ながら涙を流し、ある人の名前を呟いた。

三人は展望台から降り、孝美は洋介と亜弥に今後を尋ねた。

「洋介さんと亜弥ちゃん。どこか宿泊先はありますか……？」

「佐世保からの飛行艇に搭乗する前日に到着する様に命令を下され、旅館に宿泊を……」

洋介が頭に略帽を被せ、すると孝美が洋介の手を繋いだ。

「じゃあ、私の実家で宿泊しますか……？」

「え……いいの孝美お姉ちゃん!？」

「そうですね、お言葉に甘えて頂きます（やれやれ……またかよ……）……………／／／」

そして、洋介は旅館の宿泊を取り止め、孝美の呼びつけで士官が使用する高級車に、亜弥と乗車。

「お父さん、凄い車だねー！」

「ああ…、俺は予科練出身の特務士官にしては、縁のない乗車だ…」

「ふふふ、遠慮はしないで下さい…」

「はい…それにいい景色だ…故郷の神戸が懐かしい…」

彼女とひかりの実家は緑と海が一望できる地帯であった。

雁渕家

「遅せーな、孝美ちゃん」

「またリバウや、オラーシャの話し聞きてえな〜」

近所の方々が、真鯛に入れたたらいを持ちながら孝美を待っていきおり、車輛が実家付近に到着する。

「おお、立派な車だ！」

「そりやあ佐世保の英雄だもんな！」

孝美が先に下車。

「ただいま帰りました。」

「孝美、お帰りなさい……え……？」

続いて洋介と亜弥は車から降りた。

「んー！思ったよりも、いい景色だねお父さん。」

「そうだな、どことなく懐かしい雰囲気……？」

洋介は気配を感じて、顔を右に向けると、孝美の両親と近所の方々が出迎えに来ていたが、彼らの様子は目を見開いていた。

「…孝美……?」

「……孝美ちゃん……」

「その人……どこかで…」

「あつ!あの人、写真で見たことがある!扶桑のもう一人の英雄。世界初のウィザード、桜井洋介だ!」

「…た…孝美……も…もしかしてその人は…孝美の…」

「その…娘は……まさか?」

「もしかして、旦那さんと隠し子!」

近所の方々から色々と誤解される中、洋介と孝美、亜弥の必死の説得で何とか説かれ

た。

その夜、洋介は孝美の実家で、彼女の父親の浩平と近所の人々と酒を飲み交わしていた。

「かははは〜♪…洋介さん…あんた…かなりの飲みっぷりだなあ〜♪」

「はははっ〜♪俺はウィザードです〜！こんな酒なんて軽い軽い〜♪」

「洋ちゃん気に入った！飲め飲め〜！」

「はい、頂くであります〜♪」 バタッ

「孝美ちゃん、ウィザードの洋介ちゃんといっ付き合うようになったの!？」

「結婚の約束してるの!？」

「や…やめてください／＼…わたしは…その洋介さんとの関係が……／＼／」

「亜弥ちゃんは、孝美ちゃんみたいな美人のお母さんがいいの?」

洋介が何杯か飲む内に酔いつぶれ、畳の上に倒れ寝込む、孝美は洋介と亜弥の関係で赤面する。

「それはわかりません……………選ぶのは…お父さん自身です。…ふう…お父さん……………」

質問を受けていた亜弥は呆れ、洋介を揺さぶっていると、目元から涙を流した。

「…沖田さん…幸吉…隊長…虎雄……………晴香さん……………勇介…」

「……………お父さん……………」

洋介は寝言で、あの大戦で戦い、散って逝った戦友たちと兄弟の名前を呟いた。
その後、亜弥は孝美と風呂に入った。

「そうなんだ…異世界からやってきた……あの洋介さんに悲しい出来事が……」

「うん、お父さんの弟…つまり、わたしの叔父さんと友人の妹さんがドイツ…いえ、カールスラントのベルリン…南方のシンガポールとフィリピンの戦いで…そして…長崎の爆弾で…」

「…長崎に爆弾ですって!？」

亜弥は孝美と秘密の理由で、あの世界で起こった長崎の悲劇的な惨劇を口にした。

8月6日の戦争末期、リベリオンⅡアメリカが広島に、そして9日に、忌まわしい光を放つ新型の原子爆弾が投下され、夥しい死者が出た。終戦以降、未だにタブーが続いている。

「そ…そんな…」の長崎に……」

湯船に浸かっている孝美でさえも、手と身体が震えていた。

「…介さん…洋介さん…」

洋介を揺さぶったのは、孝美の母親、竹子であつた。

「ん…？あ…すいません…竹子さん…あなたの娘さん、僕の戦友のひかりさんの武勇伝を…」

酔いがまだ醒めておらず、ぶつぶつと呟いていると

「洋介さん…わたしの娘の、孝美かひかりのどちらかを嫁に貰つてくれませんか…？」

「な…なんですと…／＼／＼わが…娘の亜弥が…」

「亜弥ちゃんはこの家の養女としても受け入れてもかまいません」

「……はあ……考えさせて……ください……」

バタツ

竹子から、孝美かひかりのどちらかを貰ってくれないかと、聞かれた洋介は再び眠りについた。

洋介が扶桑に来てからは、若きウィッチたちが自身を嫁候補として赴いた。

まさか、戦友の実家に赴いた洋介と亜弥の親子は芳佳と孝美、ひかりを嫁に貰ってくれとの言葉を聞き、更に亜弥を養女に迎え入れることで困惑した。

「(全く……これで何十人目だ……亡き……雪……に怒られる……)」

早朝

居間のちやぶ台には欧州へ出立する三人の朝食の用意がされていた。

「亜弥、今日は日本……いや、扶桑を出立する日だから、しっかりシヤバの飯を味わえ！」

「うん！」

「洋介さん、ご飯のおかわりしますか？」

「ええ、孝美さんお願いします」

ちやぶ台で共に朝食を食する孝美は微笑んでいた。

「ふふふ♪（もしも、私に家庭を持つとすれば、この光景を見られるのかしら…）」

朝食を終え、洋介と亜弥は軍服とセーラー服を纏い、腰に軍刀と短剣を装備して最後に略帽を被った。

佐世保 浜辺

二式大型飛行水艇が留まる海岸の浜辺には、必要な物資と新型ストライカーユニット、欧州に配属するウィッチが待機していた。

「凄い物資の量だね」

「まあな、この分だけでも数日分に過ぎん。欧州に配属するウィッチも屈強揃いだな……」

浜辺には、搭乗する桜井洋介大尉と亜弥一飛曹の他に小村定恵少尉と松田昌子少尉、新藤美枝少佐が搭乗する。

「孝美、再び欧州に行っても身体に気をつけるんだよ！」

「はい、お母さん。」

「洋介さん、亜弥ちゃん。孝美のことをよろしくお願いします。」

孝美の母親、竹子は洋介と亜弥の前でお辞儀する。

「は……！」

「もう……お母さんたら……／＼／＼」

孝美は洋介たちの前で赤面した。

整備員たちが物資を二式大艇に積み込む間、洋介は浜辺で花を摘んでいた。

「よし、こんなものか」

「桜井大尉、そろそろ出発だから乗り込め！」

「はっ!!」

新藤少佐の命令で洋介は二式大艇に搭乗、浜辺から佐世保の海軍軍人やウィッチ候補生、地元民が見送りに手を振った。

「雁淵大尉……頑張ってください!!」

「武運を祈ってますよ!!桜井さん!!」

「ウィッチのみんな、頑張つてー!!」

二式大艇は水上を走り、離水した。

大艇が長崎上空を飛行した時、洋介は操縦席に邪魔して、窓を開けた。

「うう……沖田さあーん、幸吉いいー!!安らかに眠れえー!!」

洋介は窓から浜辺で摘んだ花を投げ飛ばした。

それは、あの終戦の6日前、長崎の原子爆弾で命を落とした六勇士の沖田新一郎と金城幸吉に対し、涙を流しながら黙祷したことだ。

「……沖田さん、幸吉。俺は再び欧州へ行きます。この扶桑……日本の長崎に帰還したら必ずや、慰霊碑を建立します……だから……俺たちを見守ってください!」

「お父さん……?」

「亜弥、…異世界であっても扶桑……日本を目に焼きつけろ！」

「うん！」

大艇は徐々に扶桑に離れて飛行する中、洋介と亜弥は目に焼きついた。

「(さらば、日本よ…今から旅立ち、必ず帰ってくる…)」

洋介にとって外地への配属は、戦時を含め5回目。彼は異世界の日本、扶桑皇国に敬礼した。

飛行する進路は佐世保から出発して3時間、正午過ぎに台湾に到着。

補給した後にシンガポールに進路を向けて飛行する中、太陽が西に沈むフィリピン海上空を飛行した。

再び操縦席の窓から水に活けられた花を投げ飛ばした。

「うう、厚木隊長…!!…隊長…あの世で妻の柚子さんと、娘の成美さんと安らかに過ごし

て下さい……」

待ち合い席にいた亜弥も、窓から投げ飛ばされた花を眺めながら手を合わせ、黙祷した。

もし、あの戦争がなければ、亜弥と成美が友人同士になっていたかも知れないと感じた。

二式大艇はマレー半島、シンガポールに到着。一晚現地で補給整備を受けるのであった。

「シンガポール……一年振りだな……」

シンガポールに足を踏み入れた時、染々とした。

元ラバウル六勇士の一員、海軍大尉の大賀虎雄、海軍兵曹長の整備士秋山敏郎ことトチローの妹、秋山聡子ことトチコが配属していた場所であった。

燃料の補給、機体の整備を終えた二式大艇は早朝に発進、欧州に向けて出撃した。本機体がマラツカ海峡上空を飛行した時、洋介は再び操縦席の窓から花を投げ飛ばした。

「虎雄く!!故郷の九州の花だ!必ずベルリンに行き、妹の晴香さんの慰霊碑を建てるから、安らかに眠れえ!!」

涙を流しながら黙祷を捧げ、最後に敬礼をした。

洋介が仮眠室へ戻る途中、新藤少佐が赴いた。

「あつ…新藤少佐…」

「桜井大尉、長崎とフィリピン、マラツカ海峡に花を投げ落としたのは、その地で亡くなった友人への手向けか?」

「はい!」

こうして、戦場でラバウル六勇士の一員である桜井洋介は、戦場で散って逝った仲間たちの慰霊を終えた。

残るはドイツ、帝政カールスラントの首都ベルリンで戦いで散った弟の桜井勇介と、虎雄の妹大賀晴香に慰霊と花を供えることだった。

「桜井大尉、君の配属先は…？」

「第504統合戦闘航空団、アルダーウィッチーズです。短期間のみ配属予定であります少佐」

新藤美枝少佐、雁淵孝美大尉以下2名のウィッチは新設する第508統合戦闘航空団、マイティウィッチーズに配属するのであった。

ロマーニャ 504 基地

「目覚ましい活躍だな、桜井洋介。会うのが楽しみだ」

その者は星の国籍マークのユニットを履き、ロマーニャの空を飛ぶのであった。

第501 ストライクウィッチーズ2 ロマーニヤ編

第38話 もう一人のウィザード

「……さん！お父さん！」

「ん……なんだ？」

「欧州が見えたよ！」

扶桑海軍大尉、桜井洋介と娘の桜井亜弥一等飛行兵曹Ⅱ軍曹が搭乗する二式大艇がロマーニヤの軍港に着水した。

「新藤少佐、孝美さん。お世話になりました！」

「構わない大尉。大尉は世界で貴重なウィザードだから504の任務が終わり次第、508の隊員として推薦しておく」

「あはは…わかりました…！」

「亜弥ちゃん、ロマーニャでの戦闘気を付けてね」

「うん、孝美お姉ちゃんもオラーシャのグリゴリーみたいに、無茶しないでね。家族とひかりお姉ちゃんを悲しませないように」

「ええ、約束するわ。」

洋介は新藤三枝と挨拶を交わし、亜弥は孝美と指切りして約束した。

零式64、54型ストライカーユニット、必要な物資を下ろし、二式大艇は大西洋に向けて出発した。

「新藤少佐、孝美さん。お元気で！武運を祈ります!!」

「孝美お姉ちゃん!!」

洋介と亜弥は、送ってくれた機体とウィッチたちが見えなくなるまで帽子を振り、最後に被り敬礼した。

「さて、行くか！」

「うん！」

二人は504基地に向かう列車に乗車。

異世界のイタリア共和国ことロマーニヤの景色を堪能して数時間後、基地に近い駅に到着した。

「ロマーニヤの景色、とてもよかったね！」

「おーい亜弥、そもそも観光しに来たんじゃねえぞ。えつと…知らせじや扶桑の海軍士官が迎えに…」

二人が駅から出て階段を降りている時、一人の士官が赴いてやってきた。

「あの、桜井洋介大尉ですか…？」

「はい、あの…あなたは…？」

「私が扶桑皇国海軍大尉、竹井醇子です。ロマーニヤへようこそ、桜井洋介大尉。歓迎します」

「はっ！ 出迎え、感謝します。竹井大尉!!」

洋介は彼女の前で敬礼するが、亜弥は緊張しながら彼女に対し敬礼する。

そして出迎えてくれたのは504統合戦闘航空団『アルダーウィッツチーズ』の戦闘隊長である竹井醇子大尉だった。

「あなたが世界初のウィザード。『荒鷹の桜井洋介』……数少ないウィザードと聞いて、どんな方かと思いました……」

「はあ……思っていたのよりも案外普通でしょう？」

「ええ、それに後ろの娘さんかわいいですね♪それより……その娘が報告書に書いてあったネウロイの実験に巻き込まれた……」

醇子が亜弥をじつと見ると、亜弥は緊張して洋介の後ろに隠れる。

「はい。それとあまり睨まないで上げてください」

「失礼しました。可愛いのでつい…」

醇子は頭を下げて謝り、そして亜弥の目線まで腰を下ろした。

「怖がらせてごめんなさいね」

亜弥は少し警戒心が解けたのか、顔をのぞかせ、そして洋介の顔を見る。

「大丈夫だよ亜弥」

洋介がそう言うのと亜弥は安心したのかゆっくりと醇子の前に出る。

「こちらこそごめんなさい…初めまして竹井大尉。私は桜井亜弥軍曹です。竹井大尉が言った通りネウロイの実験によりやって来たウィッチです」

亜弥はお辞儀をして挨拶する。

「初めまして亜弥さん。私は竹井醇子大尉よ」

と、笑顔でそう言いながら握手する。洋介は安心して醇子に今回のことを聞く。迎えの車輛に乗車し、醇子が所属する基地に向かって走行する。

「それで大尉。輸送機の中で、扶桑から極秘資料を読みました。ロマーニヤにいるネウロイとのコミュニケーション実験、ですか？」

「ええ、この作戦が成功すれば、戦争を終わらせられるかもしれない。前にコミュニケーションを取りに来たウィッチがいたのだけれど言葉が通じないみたいで、それで大尉には人類とネウロイの通訳になってもらいます」

「ガリアの時のか、あれは目が痛々しいんだよね」

そう言い洋介は頭を掻く。あの時は凄く眩しく目が激痛する。あれをまた再びやるとすると少し不安だった。

「その必要はないと思います」

「え？」

洋介と醇子は亜弥に顔を向けた。

「いざとなれば、わたしも手伝います！」

「亜弥！でもお前に何かあつたら…」

「大丈夫だよお父さん。それにこれが成功すれば、もう誰も悲しむことのない世界が生まれるかもしれません」

「だけど…」

「お父さん。お願いします！」

亜弥は真剣な目で見つめる。その瞳には強い信念を感じた。

「亜弥…本気か？」

「はい！」

「………わかった。でも無理はするな」

「わかりました」

その結果、ロマーニヤにいるネウロイの通訳は亜弥。そして洋介は通訳を兼ねた護衛という任務に決まった。

暫くすると、車輜は基地に到着する。

第504統合戦闘航空団 アルダーウィッチーズ 基地

「作戦までしばらくこの基地で暮らすことになるでしょうから、部隊のみんなを紹介しておくわ」

向かう先の『ブリーフィングルーム』の扉を醇子は開け、504部隊のウィッチが揃っていた。

「お、噂をすれば。来たわね」

「竹井、そいつが例の男性ウィッチか？」

赤い服を着た女性とイタリア人とアメリカ人、ここではロマーニャ人とリベリオン人がその二人が醇子に訊く。

「そうよ」

「扶桑皇国海軍大尉の桜井洋介大尉です。以前は501、502に所属しておりましたが、本作戦に限り、504に配属となりました。よろしく願います」

洋介は海軍式敬礼でそう答えるが、服装がやや淫らの赤い軍服のウィッチが笑っていた。

「そう硬くならなくても良いのよ？ 私はこの隊の指揮官フェデリカ・N・ドット、ロマーニヤ空軍の少佐よ。よろしく」

「よ……よろしく……です……／＼／＼」

「私はドミニカ・S・ジェンタイル。大尉だ。気軽に大将と呼んでくれ」

「（ん……大将……？）」

「ジェーン・T・ゴッドフリー大尉です。大将の僚機に勤めてます。大将っていうのは、あだ名みたいなものです」

側に居たジェーンが解説すると、洋介は納得した。

「は、はあ…なるほど（クルピンスキーの様なウィッチだな）」

「パトリシア・シェイド中尉。この隊の後方支援を任されてるわ。気軽にパティって呼んでね」

「そ、そうなのか…？」

「基本的にみんなニックネームとかで呼んでるから。敬語もなしよ。私はフェルナンディア・マルヴェツツイよ。階級は中尉。フェルって呼んで」

「あ、そうなんですかあはは」

洋介はお堅いところだと思ってたが、そのことを考えると洋介の世界に所属していた特殊部隊、ラバウル六勇士と似たような感じだ。

何処と無く、少し懐かしいと思った。

「アンジェラ・サラス・ララサーバル中尉だ。ガリアとオラーシヤの『荒鷹のウィザード』の噂は聞いている」

「噂って？」

「ルチアナ・マツツエイです。よろしくお願いします」

「僕はマルチナ・クレスピ！よろしくね！」

「うーん…名前が混乱しそうだな」

「ははは…」

「いつものことだから、気にしないで！」

「すみません…」

なんか、この二人仲が良く、微笑んだ。

「で、最後に私が、隊の戦闘隊長。竹井醇子大尉よ」

「改めて、よろしくお願いします」

「で、その子が例のネウロイに拐われた女の子なのね」

フェルがそう言い、亜弥のところに来る、すると亜弥はやっぱり恥ずかしいく緊張する。

「あれ？もしかして嫌われちゃった？」

「フェル。いじめちゃだめじゃないか」

フェデリカがフェルに注意する。

「いや、私まだ何もしてないですよ隊長」

「大丈夫ですよ中尉。亜弥はこう見えてやや、人見知りなんですよ」

「そ、そうなの…」

フェルはそう言い亜弥の目線までしゃがんだ。

「大丈夫よ、私のことはフェルって呼んでね」

優しい言葉で亜弥の頭を撫でる。

「うん、よろしくお願いしますフェルさん！」

亜弥とフェルが握手する。そして、隊長のフェデリカは笑みを浮かべた。

「あと4人はいるけど、二人は扶桑に任務があつて離れている。一人は修行中よ」

「へえ、そうなんですか…あと一人は…？」

「あなたと同じ、ウィザードよ♪」

「へえ…ウィザードか、それは心つよ…?!?何だつて…この基地にもう一人のウィザード!?!」

洋介の心に衝撃が走った。

去年、元日本海軍戦闘機パイロットの桜井洋介が出現して、世界初のウィザードが世に現れ、ただ一人だけの存在だと思っていた。

「フェデリカ少佐、そのウィザードは何者だ、どんな奴なんですか!?!」

「まあまあ、慌てない慌てない」

「久しぶりだな!」

「つ……その声……まさか……まさか……！」

洋介と亜弥が入ってきた扉から、彼に掛ける声が聞こえた。

洋介が振り向くと、フェデリカが述べ伝えたウィザードが立っていた。

「久しぶりだな、桜井洋介！」

「……お前……お前は、バツキー・五十嵐……!？」

「お父さん……あの人は……？」

洋介と亜弥の前に現れたのは日系アメリカ人のバツキー・S・五十嵐。

かつての元いた世界大戦で、洋介と戦いを繰り返したアメリカ海軍大尉の戦闘機パイロットだった。

「よう、あんたと会うのは、あの8月6日以来だなっ!!」

バツキーは魔法力を発動させ、洋介に殴り掛かろうとした。
洋介も魔法力を発動して、左手で制止した。

「へっ！あの忌まわしい日以前、直に会うのはフィリピンのマニラだ!!」

拳を振り払い、腰に帯刀していた鷹狼を抜いた。

ブリーフィングルームで洋介とバツキーが一触即発になりかけた。

「あわわわわ…」

「お父さん、止めて!!」

亜弥は二人を止めに間に入ろうとした。だが、パティとアンジェラに止められた。

「大丈夫わよ、亜弥ちゃん」

「だけど、パティさん…」

「心配するな」

カアアアン

竹井醇子が自らの拳で、洋介とバツキーの頭を拳骨した。

「あなた達、ふざけていないで下さい」

「…は…はい…」

口が笑っていても、目が笑っていない醇子が二人を注意した。

そして、洋介とバツキー、亜弥は竹井醇子大尉の恐ろしさを認識しながら気絶した。

それから意識が戻って落ち着き、基地の格納庫で洋介と亜弥、バツキーの三人きりになつて経緯を話した。

バツキー・S・五十嵐はあの戦争が終結して1年後の3月11日、大西洋のバミューダ海域にてアメリカの艦船と航空機が行方不明の事態を聞き入れ、急遽調査することになった。

だが、海域上空で機体の計器トラブルが発生、海に突っ込んだ。

だが、目が覚めると魔女がいた。そして、搭乗していた愛機グラマンF8Fベアキャットが、この世界の魔女たちが扱う機械の蒂、『ストライカーユニット』に変形した。

「…お前もこの魔女の世界に巻き込まれたとは信じがたい…」

「そりや同感だ、…時代にしても去年にタイムスリップしたかと思つた途端…ネウロイと言う訳の分からん化け物と戦っていることで衝撃だった！」

「わたしも同じだよバツキーさん、わたしは10年先からやって来たから……」

「そうなのか…亜弥ちゃん、あの世界の俺と洋介、亜弥とステラが、この世界でウィッチとウィザードになるとは…」

「ステラ…?」

「ああ、彼女は女性戦闘機パイロット。洋介はあの南方のニューギニアとラバウル、フィリピンで戦った筈だ」

「……ニューギニア…ラバウル…フィリピン……もしかして…!」

洋介は内思い出した。

ステラ・A・エヴァンス。ニューギニアとラバウルに滞在していた時、P-38ライティングの操縦席に女性が搭乗していた。

だが、1945年7月30日。ステラはP-51H型に搭乗、シンガポールに向けて爆撃機の護衛に務めた。

ステラは日本の防空戦闘機と空戦し、落とされて行方不明になった。当然、バツキー

の仲間たちは嘆き悲しんだ。

そして、この世界で第504統合戦闘航空団アルダーウィッチーズで再会した。
再会しても、彼女はあるウィッチの訓練をしている身であった。

「そうか、そうだったのか…」

「ステラさんも、凄いウィッチになれる様に応援しなきゃね！バッキーさん、お父さん
！」

「亜弥…そうだな。この世界の未来と平和の為に！」

「人々の笑顔の為に！そして、このネウロイの戦いが終わったら、再び洋介と戦いを挑む
ぜ。」

「ああ！」

バッキーは先ほど酒場で購入したウイスキーをグラスに注ぎ、グラスを手にして口に

運んだ時、すぐに上官の醇子に拳骨を受けるのだった。

一方そのころ、一人の女性が彼らウイザードとウイツチの履歴を読んでいた。厚い飛行服を着て、胸には照準眼鏡を下げていた。

「…彼ら、近いうちに会ってみるか」

そう言い彼女は立ち上がり輸送機に搭乗、ロマーニヤに向かうのであった。

第39話 決死のトライヤヌス 前編

ロマーニヤ ある小島

「ん…よいしよつと…」

一人の女性が、井戸の水を汲み上げた。

「この世界に来て6ヶ月。このイタリア…いや、ロマーニヤの気候は相変わらずね」

汲み上げたバケツの水を別のバケツに移し、取っ手を箒に潜らせ、飛行する。

「さて、水をタンクに入れないと、クソババアにどやされる…」

第504 統合戦闘航空団 アルダーウィッチーズ

短期配属する桜井洋介大尉と亜弥軍曹、当部隊のウイザードのバックキー・S・五十嵐大尉は、ヴェネチア上空に滞在するネウロイのコミュニケーション作戦『トライヤヌス』の説明を受けていた。

「確かに、この作戦で連合軍は無駄な犠牲を出さずに済む、そして…敵さんのガリバー計画のことも…」

作戦に備え、午前中は文学、午後はユニットを履いて飛行に移った。

「イタリア…いや、ロマーニャの空は、暖かくていいな…つい前の極寒のオラーシャで戦っていたのが嘘みたいだ……」

洋介は非武装でユニットウォーミングアップをしながら飛行している時

「洋介く!!」

「んっ! バツキー!」

洋介の20キロ先に飛行しているのが、ベアキャットのユニットを履いているバツキーだった。

そして、バツキーの使い魔は鷲であった。

「なあ洋介! もう一人、ウィザードのお前とやってみたいことがある!!」

「やってみたって、なんだ!？」

「チキンレースだ!!」

地上、滑走路

「おーい、フェル隊長ー！」

「なに？ ルチアナもうすぐ亜弥ちゃんと買い物に行こうと……」

「洋介さんとバツキーさんが何かをやるつもりですよ！」

「お父さん、バツキーさん……なにを……？」

上空ー

「旋回するのは、左か右のどっちだ!？」

二人は互いに高速で接近、2000メートルまで接近した。

「当然、左だ!!」

ギューイイイイン

二人は互いに背を向けて、左に急旋回した。

「ひゃー！ 凄いよ隊長ぐ!!」

「本当に凄いですよ…洋介さんとバツキーさん…」

「凄いわねえぐ！ 流石は世界でただ二人のウィザード！」

「（わたしも、あれほどのユニットを扱えるウィッチになりたい…）」

赤ズボン隊は拍手喝采し、亜弥は内心で機動力と強いウィッチになることを心から決心した。

「しかし洋介よ、一発でチキンレースができるのはあんた凄いなあぐ！」

「まあな、長い間飛行機乗りをしてきた勘だ。この飛行曲芸はいつからやっているんだ

？」

「あの戦時でだ、隊長や弟のトムと訓練飛行が終わった後にしょっちゅうやっていた。」

「弟……ああ、マニラのBARで会ったな、弟も戦闘機パイロットだったのか……」

洋介はある程度の記憶を思い出した。

フィリピンを巡る戦地のマニラのBARにて、一時のクリスマスでバツキーの上官、隊長ランスロー・W・アイリツシュとトム・M・五十嵐と共に、厚木十三と沖田進次郎と呑み交わした。

「弟さん、あの世界で取り残されてたままだが、元気か？」

「……俺の弟、トムは……行方不明に……」

「あつ……そうか……済まない……」

バッキーと弟のトム・M・五十嵐はF6Fヘルキャットに搭乗、沖繩を巡る戦艦大和の戦いにて、爆雷撃部隊の護衛を務めた。

桜井洋介と沖田進次郎の零戦64型。彼の兄、沖田新一郎と金城幸吉の零観は大和を護る為に戦った。

激戦の最中、トムは進次郎に撃墜された。九死に一生を得たトムは、恐怖に悩まされ戦闘機に乗ることはなかった。

その後、哨戒部隊に転属。ウィリアム・J・スパロウ少佐と従軍看護婦シャルロット・F・トラインのPB Y-5カタリナに搭乗した。

そして、終戦まで生き延びた。だが、9月17日枕崎台風で遭難、彼らは行方不明になった。

「いいんだ洋介、行方不明ならどこかで生きている」

「そうか…」

洋介とバッキーは滑走路に着陸した。すると

カアアアン

「痛てえ」

「あんな飛行曲芸、他のウィッチたちも真似したら、下手すると空中衝突するわよ二人とも？」

「す、すみません……」

洋介とバツキーは、口が笑っても目が笑っていない醇子の鉄拳制裁を受けていた。

ヴェネツィア上空 トラヤヌス作戦戦闘空域

桜井洋介と娘の桜井亜弥、バツキー・S・五十嵐を先頭に後ろから504の赤ズボン

隊とアンジェラのウィッチたちや研究員を乗せたJU52輸送機。

その護衛のロマーニヤ空軍戦闘機MC-202フォルゴレも飛行する。

そして今、ベネツィアにあるネウロイの巢元へと辿り着き、そして相手側が現れるのを待つ。

すると、ネウロイの巢の真下から出現。

「来た！」

「あれがフランス……いや、ガリアに現れた人型のネウロイか……」

去年の9月、ガリア共和国に現れた人型ネウロイと同じ個体に酷似していた。

そしてネウロイの巢の下、洋介と亜弥、バツキと竹井醇子大尉、そして人型ネウロイが向き合う。

「どうやら、上手くいきそうだな！」

「ああ、……」

作戦は成功に思えた。

だが

「…っ!?!なっ」

すると洋介の固有魔法である波導がとあるところに表示された。その場所は亜弥と人型ネウロイがいる場所でその予測線の大きさは二人がすっぽり入るぐらいの大きさだった。

「亜弥、人型っ！危ない!!」

「キュイ!？」

「わっ!？」

「大尉! いったい何を!？」

なりふり構わず、洋介は二人の腕を取り乱暴に引つ張る。
そしてその瞬間。二人が先ほどまでいた場所に極太のビームが照射された。

「あ…………間一髪だ…………」

「ネウロイのビームがネウロイを…………!？」

「…まさか…あれは」

「キュイイイ!？」

醇子と亜弥が驚き、そして人型ネウロイに表情はないが、驚いている様子だった。

「あれは…」

見上げると上空には、今まで見たことも無い巨大な巣が出現し、小さいほうの巣を飲み込んでいた。

その新たに現れた巨大な巣はまがましいオーラを発していた。

「一体…何が…」

「えっ…!!お父さん、早くこの場所を離脱しないとまずいよ!」

亜弥は人型の通訳として洋介に述べる、彼女の顔から見て相当恐ろしく感じる。

「なんだって!?…わかった!竹井大尉、撤退命令を今の我々で何とかできる相手じゃない!!」

今回の任務はヴェネツィアに滞在するネウロイのコミュニケーションが任務。

そのためその任務に参加する研究員も巻き込み、504のウィッチたちの武装も護衛程度の弾薬しか積んでいない。もしここで交戦が始まれば全滅する可能性がある。そのためにもこの空域を離脱する必要があった。

「わかったわ！作戦は失敗！繰り返す、作戦は失敗！全員この空域を離脱せよ！」

竹井醇子大尉の言葉に従い、まるでクモの子を散らすように逃げる。

研究グループを乗せた輸送機も、撤退命令に従って逃げ始めた。

「そうと決まれば……」

「ああ、バツキー……一丁やるかあ……」

洋介とバツキーは互いに機銃を構え、戦鬨を整えた時にアンジェラが制止する。

「桜井大尉、バッキー大尉！先に行け！ここは私たちに任せろ、お前たちと亜弥、そのネウロイを基地に連れて行くんだ！」

「ですが！」

「俺もだ……みすみす仲間を見捨てる訳ができない！」

「早く行け！今この二人、亜弥とネウロイを守るのはお前らだけだ！だから早くいけ！」

「っ！……すまない」

504たちの任務は、ネウロイとのコミュニケーション実験から、人型ネウロイの保護へと移った。アンジェラの言葉に二人は頷き、洋介は亜弥、バッキーは人型ネウロイを連れて安全区域まで逃げるのだった。

「フォーメーション・アブレスト！！攻撃開始！！」

醇子の指示で、フェルナンディアとアンジェラ、ルチアナとマルチナは戦闘配置に就いた。

「よし！みんな！あの4人がこの空域を脱出、市民の避難が完了するまで何としても：こかで食い止めるわよ!!」

「」 「」 「」 「」

「ザ…緊急通信、少佐応答願います！」

『オツケー、聞こえているわよ』

「人型ネウロイとの交流実験は失敗…新たに現れた巨大な巢に以前の巢は潰され…新たな巢から巨大なネウロイが多数出現、現在応戦中です」

『そつか…結局最悪の形になっちゃったわね…』

「桜井大尉とバッキー大尉、亜弥ちゃんは以前の巢の人型ネウロイと共に基地に向かっていきます！」

『それはそれで仕方ない…今からでも最善を尽くさないかね』

「はい、まずはヴェネツィアから市民の避難を。それにどうもネウロイの動きがヴェネツィアとは別の方向に向かっていているものも見受けられます」

『その方向は？』

「504基地…あの4人です」

醇子はフェデリカに状況を報告する。

こうして504部隊による殿戦が始まったのである。

第40話 決死のトライヤヌ 後編

一方、亜弥と人型を連れて逃げる洋介とバツキーはとても辛そうな顔をする。

「…お父さん、バツキーさん。大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ亜弥」

「それと君、今から飛ばすからしっかり掴まっていろ！」

「はい！」

「キューイ！」

亜弥と人型は洋介とバツキーの身体にしっかり掴まる

「よしー、エンジン全開だっ!!」

洋介の零式、バツキーのベアキャットの出力を最大にする。

しかし小型ネウロイ数体が接近し、ビームを放っていた。

「邪魔をするな!!」

洋介は九九式機銃を撃ち、バツキーはM―2機銃で小型のネウロイを撃ち落とした。

「お父さんーうしろー!」

「なっ!!」

亜弥の言葉に洋介が振り向くと背後に敵が二機喰らいついてきた

「この速度でも追ってくるのかよ！」

洋介は九九式機銃を撃つが、向こうは回避して、今にもビームを放とうとしていた。
だが

「キュイっ！」

「危ない！」

ダダダダダ ドカアアン

亜弥と人型が片腕を洋介とバツキーから離し、敵のほうへ向け、機銃とビームを放ち正確な射撃で二機を撃ち抜き、二機の小型ネウロイは粉々になる。

「ありがとう亜弥」

「それと君もありがとう！」

二人は亜弥と人型に礼を述べたが、人型の名前がわからなかった。状況下にて、何とか基地近くの場所まで帰投する。

「なあ洋介……」

「なんだ、バツキー……」

「本当にこれでいいのだろうか？」

「わかって……仲間を見捨ててまで、彼女らとは出会ってまだ日が浅いが、それでも大切な仲間だ……」

と
だが、亜弥と人型を置いていくわけにもいかなく、洋介とバツキーがそう考えている

『桜井大尉、バツキー大尉。聞こえるか？ 応答せよ大尉！』

無線のインカムから基地内に待機しているフェデリカの声が聞こえた。

「こちら桜井！」

『話しは醇子から無線で聞いたわ！桜井大尉、バッキー大尉、亜弥ちゃん。あなたたちを捉えた。着陸を許可するわ！』

「」 了解！ 「」

人型を含め、4人は滑走路に着陸する。

「…少佐…保護対象引渡し後、残存部隊の支援に向かいたい」

「同じく、俺も支援に向かう！」

『だめよ。残念だけど情報が錯綜していて、殿に出ていた部隊は撤退はし始めているの』

「だけど、現場の細かな状況が把握できないわ!」

フェデリカが述べる言葉で、声は悲しさと悔しさが混じった声だった。

フェデリカ自身もユニットを履いて仲間を助けに行きたい。だが、魔法力が上がりを迎えつつあるいまの自分じゃ足手まといになってしまう。

そして、撤退する基地の兵士たちの護衛も務めなければならなかった。

「(本当に…本当に俺はそれでいいのかよ…)」

洋介とバツキーが悩む、すると亜弥が洋介の手を握る。

「亜弥?」

「お父さん。行つて、私たちなら大丈夫!」

「でも…」

「大丈夫です。もう基地の目の前なので、お父さんは早くみんなを助けに行つて」

「亜弥の言う通りだ桜井大尉、バッキー。」

「ドミニカさん…」

「桜井さん、バッキーさん！基地の防衛は私と大将に任せて下さい！」

「行くのが面倒くさいが、ここに襲撃するネウロイを私らが迎え撃つ！」

ドミニカとジェーンは、滑走路に数挺の機銃やロケット弾を整え、いつでも迎え撃つ余裕がある。

「亜弥…みんな…、わかった。でも少佐の言う通り場所が…！」

「キュイイイン」

すると人型ネウロイが『大丈夫ですよ』つというような感じの声を発する。それは指定された安全区域の座標の言葉だった。

「なんだって?なるほど、わかった。ありがとう!!」

そのあと、亜弥や人型ネウロイを滑走路で待っていたフェデリカに預ける。

すると、機銃を所持するパティが洋介とバツキーの元に訪れた。

「ねえ…桜井さん、バツキーさん…アンジーは…どこ…?」

「アンジェラさんはな、竹井大尉と赤ズボン隊と共に殿を務めて…今も戦闘中だ」

バツキーが事実を伝えた時、パティの顔は真っ青に豹変し身体が震えていた。

「…あなたの…あなたのせいだ…:…ネウロイの和平だとか!!状況を換えられる可能性とか何とか言って!!変な希望を持たせたからアンジーは!!」

彼女は苛立ちながら、先に帰投した責任を洋介と亜弥にぶつける。

「落ち着けパティ、この作戦自体上からの命令だ!!誰が悪いって話じゃない!!苛立ちを洋介にぶつけるヒマなんて…」

「わかってるわよ!!」

「……っ!!」

「わかってるわよ…そんなこと…う…っひつく…」

パトリシアが504部隊に配属される以前のアフリカ戦線、彼女の目の前で隊長が負傷した。

その光景を目の当たりにした彼女はショックを受けた。

「あの時から…仲間が傷つくのがずっと恐いの…もう…誰も…傷つくのは…イヤなの

…」

「パティ……わかっている……」

「俺もだパティ……」

パトリシアたちウィッチたちの視点で、二人のウィザードにオーラが漂っていた。

「アンジェラたちみんなを助けに往く」

「…桜井さん……バツキーさん…」

「だから、君の成すべき事を」

「…はい…」

「亜弥、人型と504を頼む！」

「うん！」

洋介とバツキーは すぐに再武装を施し、エンジン全開にし、醇子たちが殿するヴェネツィアへ向かうのであった。

一方、殿部隊

「くそっ！次から次へときりがないわ！」

「また味方一機やられた！」

「こいつら、今までのやつより手強いわ！」

「ルチアナ！後ろ！」

「くそ！数が多すぎるわ！」

撤退命令を受け、撤退する504のウィッチたち、だがネウロイたちは逃さないと次々と襲い掛かりあたりはレーザーや機銃弾の嵐となっていた。

「11時方向に再度敵来襲！」

「くそう！情報が錯綜してる！一体誰から見てなんだ！」

ヴェネツィア空域は混乱しているため、連携がうまくいかなかった。

するとネウロイのビームが先ほどネウロイの破片で負傷するアンジェラに放たれた。

「アンジー！左!!」

「!?っ」

アンジェラがその方向を振り向いた瞬間、すでにビームが目の前に来ていた。

バシユツ

何かが切り裂くような音がし、アンジェラに迫っていたビームが二つに割れ、攻撃したネウロイが落ちた。

そして目の前にはブルーの軍服、緑色の軍服を着て、片手に軍刀を持った青年がいた。

「お、お前は……！」

「どうやら間に合った……！」

彼女の前にいたのは人型ネウロイと亜弥を連れて基地に向かったはずのバツキと洋介だった。

「どうやら間に合ったようだ！」

「桜井大尉、五十嵐大尉!？」

「アンジェラ…傷は大丈夫か!？」

「なぜおまえたちがここにいる!?!あの人型ネウロイと亜弥はどうしたんだ!?!」

アンジェラがすごい剣幕で洋介とバツキーに述べる。

二人は人型ネウロイを保護し、504の基地に向かっていたはずだった。

「大丈夫だ、二人なら基地にいるフェデリカ少佐に預け保護してもらった!」

「そう言うことじゃないわ大尉!なんで危険を承知であなたはここに戻ってきたの!?!」

醇子も少し怒っているような声でそう言う。2人はここに戻ってきたのかを説いた。

「仲間が傷つきながら戦っているのに、俺たちだけが安全な場所にいるわけにはいかない。それに俺はもう、誰一人仲間を失いたくない。俺が生きている限り絶対に仲間を死にさせやしない!!」

そう、洋介とバツキーは力強い声で醇子たちに言う。

洋介とバツキーは片手に自動小銃、機銃に持ち替える。

「竹井大尉、殿は俺たちがやる」

「その隙に、負傷したアンジェラと基地に向かって撤退してください」

「なっ！無理です桜井大尉、バツキー大尉！100機以上相手にあなた二人では太刀打ちできません！」

「なあに、あの世界で『荒鷲』なんて呼ばれたわけじゃない！」

「……しかし……」

「安心してください、まだ死ぬつもりはありません。俺には大切な家族、亜弥がいますの

で…それに竹井大尉ここからは…」

二人が目を閉じ、そして

「俺たちの戦いだ…」

目を見開いたのと同時に彼の身体からすさまじい殺気があふれ出す。

この殺気は人同士の血と血で洗う殺戮の戦場を経験した洋介とバツキーだからこそ出せるのだ。

醇子たちも生まれて初めて感じた二人の殺気に驚く。

「(な、何だ…これは)」

「(な、なんてすさまじい殺気…本当にあれが桜井大尉とバツキー大尉なのか?)」

「(ふ、震えが止まらない)」

「(こいつら…かなりの修羅場を超えている)」

いつも優しい感じの彼が放つ殺気に504のウィッチたちが震えあがる。

「(な、何なのこの殺気は…どこからあんなのが出せるのよ…)わ、わかったわ大尉。全機今のうちに撤退!!……大尉、私達が来るまで絶対生き残って下さい!!」

「了解!!」

そう言い醇子たち504のウィッチたちは、洋介とバツキーがネウロイたちを相手にしている隙にこの空戦空域を脱出するのだった。

「さて…他のウィッチはいなくなったことだし、おつ始めるかバツキー!」

「ああ、洋介。俺たちの力を見せてやるぜ!」

「思い出すな、お前と初めて会ったラバウル上空で!」

「ああ、そこから終戦まで引き分けが続いたな！」

ラバウルから終戦間際の思い出を語っている間にも、ネウロイの大群が二人に向かって来た。

「さて、ネウロイども。今からお前らに俺たちの戦争つてものを教えてやる!!」
二人がそう呟いた瞬間、ネウロイたちは洋介とバツキーに襲い掛かり洋介は固有魔法である波導で次々と回避して、九九式十三ミリ機銃と四式小銃での照準を敵に合わせて撃つ。

バツキーに襲い掛かった四機のネウロイは、固有魔法の強化でブローニング12.7ミリ機銃とM1ガーランド小銃弾を喰らって瞬時に爆散する。

それを見たネウロイたちが一瞬怯み、二人はその隙にネウロイに近づき機銃を撃ち続ける。

機銃の弾丸がネウロイに当たり、あるものは大破し、あるものはコアを碎かれ爆散する。ネウロイたちはどんどん数を増やし、彼にありつただけのビームをお見舞いさせる。たまにビームが彼の頬や腕、足に掠るときがある。だが二人はそんなのお構いなしに接近し攻撃をする。

「こんな攻撃、アメリカ（日本）軍の連中に比べればぜんぜん怖くないぜっ!!」

今の洋介とバツキーはウイザードとしての彼ではなく、かつて元の世界の戦場で敵に恐れられたはみ出し部隊の戦闘機乗り『荒鷹』と『荒鷲』として戦っているのだった。

機銃の弾丸が切れたときはその銃床でネウロイを殴って撃破したりした。

そして一機のネウロイが向かってくると洋介は得意の空戦技『逆鷹戦法』と『燕返し』で回避、そして避けている最中、腰にあるホルスターから南部十四年式拳銃とM—1911ガバメント拳銃を取り出し、魔法力を加えてそのネウロイに向けて拳銃弾を叩き込む。

基地に残るウィッチたちは、基地を捨てる為に撤退の準備を進める中、ドミニカとジェーンパトリシアは地上でネウロイを迎撃する。

そして亜弥は、唯一ストライカーユニットを履いたウィッチとして、上空で戦っていた。

「このおー!!」

ダダダダダダダ ドカアアン

「よしっ!」

地上

「大将、亜弥ちゃんはやりますね」

「世界最年少のウィッチつてのは、なかなかの腕をしてるなあ……おつとジェーン弾切れだ、次の機銃を」

「はいはい大将……」

ドミニカがBARやM—2を撃つ中で、ジェーンが銃弾の装填や銃身の交換、あるいは擲弾を彼女に手渡した。

すると、ネウロイのビームがドミニカに着弾し、倒れた。

「大将——!! いや……つやだ……!! なんで……つ!! こんな……大将が死んじやったら……わ……わたし……わたし……つ!!」

「ドミニカさん、ジェーンさん!」

「危ない二人とも、亜弥ちゃん!」

「ああ……あ……」

ネウロイがビームを発した時、収容していた人型ネウロイが飛び出し、亜弥たちを底い、消滅した。

「…そ…んな……なんで……」

扶桑陸軍のウィッチが軍刀でネウロイを斬り、弱点のコアを露出させた。

「パトリシアさん、新入り撃って!!」

「はあっ!!」

亜弥とパトリシアはコアを破壊し、撃墜した。

「ありがとうございます!…あの…お姉ちゃんは…?」

「扶桑陸軍少尉、中島錦です!ふうーっギリギリでしたけど間に合って良かったです」

錦が基地に居残るウィッチたちの危機を救った。

「うう…なんて…なんてとこをするのよーっ!!」

亜弥はネウロイに消滅させられた人型ネウロイに対し涙を流し、さらに襲来するネウロイを迎撃し、戦った。

ヴェネツィア上空

そして拳銃の弾が尽きると、今度は洋介の愛刀鷹狼でネウロイを切り裂くのだった。だが、ネウロイは次々と撤退しているウィッチを追撃しようとするが、洋介とバツキーがそこに立ちふさがっているため通れない。ネウロイたちはバツキーに集中攻撃をするがバツキーはボクシングスタイルで、ネウロイを殴り、攻撃する。

「まだ、まだだあ!!」

そう叫ぶ中、二人を追撃してくる9体の高速ネウロイの集団が出現した。

「くそっ!! 中型が!!」

「洋介! 弾薬が危ういぞ!」

「だな、撤退するぞバツキーっ!!」

二人は504基地に向けて撤退。

だが、追撃してくる9体のネウロイの集団がビームを放しながら迫ってきた。

「追ってきたか!!」

「二手に別るぞ!!」

洋介とバツキーは二手に別れたにも関わらず、洋介には5体、バツキーには4体が迫ってきた。

「くそっ!!こいつら、ピタリとくつついてくるぜ!!」

「全くだ、しぶといネウロイさんだぜ!!」

二人はネウロイから逃亡しつつも、魔法力が著しく消耗、ネウロイの餌食になるのも時間の問題だった。

「くそっ!魔法力が無くなれば、翼をもがれた鳥だ…!」

「鳥…っ!そうだ洋介、最後にチキンレースをやろう!!」

「なんだって…こんな時に…!そうか…そうこなくっちゃ!!待ち合い場所は!」

「ヴェネツィアで高いシンボル、大鐘楼だ!!」

インカムで飛行曲技の指定場所を決めた時、低空飛行に移った。

「さあこい、貴様の獲物はここだあゝ!!」

二人はサン・マルコ広場に向かって速度を加速した。

「見えたぜ、バツキー!!」

「俺もだ、洋介!!合図をするまで待て!」

「おうっ!」

二人は正面に向かって飛行、1000メートルまで迫った。

「今だっ!!」

洋介とバツキーは互いに背を向けながら左に旋回、追ってきたネウロイは次々と空中に衝突、撃破した。

「ひやつほー！」

だが、最後の一体が二人に迫って飛行した。

「最後の一体だ、拳銃を貸すから援護を頼む！」

「OK！」

バッキーは洋介の拳銃を受け取り、ネウロイに乱射し、弱点のコアが露出した。洋介は帯刀する軍刀、鷹狼を鞘から抜いた。

「食らえ、流星斬っ!!」

スパアアアン

最後の中型ネウロイを共同で撃墜した。

一方、醇子たちは指定された基地に生還。

いったん戻り装備を整えて、赤ズボン隊を率いて二人のところへ向かっていた。

「急がないと、彼が危ないわ」

「待つて竹井！助けるにしても、この人数じゃ…」

「わかってるわ！でも救出くらいはできる！」

「わたしは助けに行きます！」

「ボクも行くよ、洋介とバッキーを助けないと、ステラと亜弥が悲しむよ！」

醇子たちは洋介とバッキーのところに急いで向かう。しばらくして彼女たちは二人のいる空戦空域付近に飛来する。

「見えたわ…っ!？」

だが竹井たちがそこについて見たものは、そこには洋介とバツキーがいた。

そしてその周りには白い破片が舞い散っていた。

「ネウロイがない…まさか彼ら二人で…」

醇子がそう言うと、洋介とバツキーは互いに肩を組みながら、片方ずつのユニットを動かしながら、指定する基地に帰投。

「おおーい…竹井大尉」

「…………ふう…眠いな…」

その途中で魔法力を使い果たし、二人ゆっくりと落下し始めた。

「っ!？」

「いけないっ！」

醇子とフェルはすぐに急降下し落下する洋介とバツキーを受け止めた

「桜井大尉、しつかりしてください大尉！」

「バツキー、しつかりしてよバツキー！」

醇子とフェルは洋介とバツキーに声をかける。二人の身体はスリ傷だらけだった。

しかし、洋介とバツキーは

「すすすす…」

寢息を立てて、眠っていた。

「ね、ねえ竹井…彼、眠っているわね…」

「そ、そうね…」

フェルの言葉に醇子は苦笑しそう言う。

「とにかく連れて帰りましょ」

「ええ、それにしてもたった二人で100機以上のネウロイを倒すなんてな…彼が味方で本当によかったわー！」

「ええ、彼がもしネウロイだったら敵わなかったでしょうね」

「それにしても彼強すぎるでしょ。こんな可愛い寝顔なのに」

「そうね…なのに、20歳のウィザードが…彼らが敵じゃなくて良かった……」

そして醇子たちは二人を背負って504が指定した基地へと向かうのだった。

そして、遙か彼方の扶桑皇国にて、予備役になっていた治癒魔法のウィッチも、横須賀基地を訪問、緊急通信を受信、再び欧州に行く決意した。

第41話 マジックキャットの指令

「おい、ウィッチ隊、ほぼ壊滅だって…」

「畜生……マジかよ…」

撤退先の504基地の格納庫ではストライカーユニットを整備する整備兵たちがトライヌス作戦でのことを話していた。

「ああ、ただ…幸いけが人が出ただけで死人は出なかったらしい…」

「ああ、それは聞いたぜ。なんでも、桜井大尉とバツキー大尉が殿に出て、たった二人で追撃してきたネウロイを撃退したらしいぜ」

「それ本当か？」

「ああ、本当らしい。それにしても怪我つといつても504のウィッチたちはまた戦えるのか？」

「当分無理だな。ベテランのウィッチたちが負傷した今、存続は難しいってさつき軍医の連中がそう言ってたぜ」

「じゃあ、ロマーニヤの防空はどこが？」

「空軍のどつかがやってくれるさ。俺たちはただの整備兵だからな」

「そうだ、俺たちが騒いだところで、どうにもならん。それより保護したっていう人型ネウロイは…？」

「さあ？俺たちには関係のないことだ。それよりさつさとこれ直さねえと…」

「そうだな」

不満を呟きながら、整備兵たちはストライカーの整備をするのだった。

病室

「桜井大尉、バッキー大尉。具合はどうですか？」

「ああ、大した怪我じゃないし大丈夫ですよ竹井さん」

「俺も、この通りピンピンして元気ですよ！」

桜井洋介とバッキー・S・五十嵐がベッドで目が覚めたのはあの殿戦から翌日。

あの戦いで体力、気力、魔法力も出し尽くして二人は気を失い落下しかけたところを援軍に來た醇子たちが保護してくれた。

「あの…竹井大尉それで、彼女は？」

「彼女？…ああ、あの人型ネウロイね…」

人型ネウロイの言葉を聞いた醇子は気まずい様子だった。

「竹井さん……もしや…！」

「…残念だけど…消滅した…」

「っ！…そんな…」

504に帰投し、亜弥を守るために底い消滅した。

「くそっ…命からがら連れ、帰投したのに…ガリバープロジェクトが…また、一からやり直しか…」

ネウロイの極秘計画、ガリバープロジェクトを掴めず終い、洋介は歯噛みしながら悔しい思いをした。

「お父さん……」

「亜弥……すまない……」

「大丈夫、……お父さんが無事ならそれでいいよ……!」

病室に寄った亜弥が洋介の手を重ね、彼も娘の頭を撫でた。

「お父さん、ちよつと格納庫でユニットを整備してくるから」

「おう、気をつけてな!」

亜弥が病室を去った時

グオオオオー

「!？」

すると、基地上空に大きなエンジン音が鳴り響き、何かが通り過ぎる。

「あれは…?」

「カールスラントのJU52輸送機ね…」

窓から頭上を飛んできたのはカールスラントの輸送機のJU52。

JU52はそのまま滑走路へと着陸するのだった。

「なんででしょう?」

「さあ?補給とか?」

「いいえ、それに追加の補給の知らせも聞いてないし…」

「え…？」

醇子にも心当たりがないみたいだった。

その後、醇子はフェデリカに指令室に来るよう指示を受け、その場を後にした。

一方そのJU52から一人の女性が出てくる

「うん……さて、やっと着いたな…」

そう言うとな彼女は機体から降りてまるで誰かを探すようにあたりをきよろきよろ見渡す。

「さすがに格納庫にはいないか…仕方がない。指令室に言って挨拶でもするか」

そう呟き、彼女は指令室へと向かう。すると廊下を歩いている途中だった。

「ん？あれは…子供？」

彼女が目にしたのは奥の廊下に9歳を目に映ったのだが、彼女は気にせず指令室へと行くのだった。

「久しぶりだなドットリオ少佐、トライヤヌスに関して申し訳ない。竹井大尉、扶桑海事変の時以来か？」

「お久しぶりです。ガランド少将」

「それで、少将。今回はどういった件で？」

「ああ、そうだったな。大したことはないんだが、実は私がここに来たのは、ヴェネツィアで奮闘した例の二人のウィザードを見てみたいと思つてな」

「桜井大尉と五十嵐大尉をですか？」

「ああ、で、その彼は今どこにいる？」

「ええと…病室にいます…」

「そうか、では行ってくる」

笑みを浮かべせながら、彼女は指令室に出て洋介とバツキーを探しに行くのだった。

「ガランド少将が彼にね…？　いったい何の用かしら？」

「まあ、確かに世界初の男性ウィッチが二人揃っているんなら少将が珍しく、興味を持つのはわかるけど…」

そう述べながら、二人は首をかしげるのだった。

洋介とバツキーは病室から格納庫に移動し、自身が履くユニットの整備を行った。

「ありやく、プラグに埃が被っているな」

「おいおい洋介、取り除かないと飛行中にアダとなるぞー！」

「お父さん、バッキーさん！交換するオイル持ってきた…わあっ！」

「…亜弥っ!？」

亜弥は格納庫の床に滑った。ある女性が亜弥を支えた。

「大丈夫か？扶桑のお嬢さん」

「あ、ありがとうございます…／／／」

「あっあの…」

女性は洋介とバツキーの側を通り過ぎ、三人のストライカーユニットを目にした。

「……変わった国籍だな…扶桑とリベリオンに似てるが、全く違う。それにこのユニットの部品や形と言い、扶桑の零式とリベリアンのグラマンと比べても違う。それ以前にこのユニットからは全く別の国の精神が見える…」

そう述べる、彼女は洋介とバツキーに振り向く。

「あなたは…誰だ？」

「私は第44戦闘団指令、カールスラント空軍総監のアドルフイーネ・ガランド。階級は少将だ。君たちが世界初の男性ウィッチ。桜井洋介大尉とバツキー・S・五十嵐か？」

「あ、ああ…確かに俺は桜井だ…」

「俺も五十嵐だ、少将殿」

「そうか、もつと厳つい人物かと思っていたが、なんとも男優みたいで可愛いらしい顔だな大尉たち」

いたずらな笑みでそう呟くガランド少将。

「…で、そのウィッチの総監様がなんでこんなところに？」

「何も大した理由はない。二人の男性ウィッチ…いや、ウィザードがどんな奴か見に来ただけだ」

「……そうですか……」

「そう言えば桜井大尉。君のうしろに隠れている子は君の娘か？」

「そう言いガランドは洋介の後ろの隠れている亜弥を見てそう言う。

「ああ、娘の亜弥だ」

「亜弥…するとこの子がネウロイの秘密実験に巻き込まれた少女か？」

「っ!？」

亜弥がネウロイの秘密実験に巻き込まれたことを知っていることに驚愕した。

洋介は彼女の前から一步下がりがりそして帯刀する軍刀に手をかける

「そう警戒するな大尉。お前の娘に危害を加えるつもりはない」

「……」

「それにな。この前、この基地に行く前にペテルブルグに行つたんだが、彼や君の娘のこ
とを聞いた時にグンデュラやエディータに釘を刺されてな」

「ラル隊長に？」

「ああ、『桜井の愛娘である彼女を実験研究所に送ったら、ウィザードを敵に回すことになるぞ』ってな。だから君の娘には手を出さない。約束する。もし上の連中が彼女に手を出そうとしたら全力で止めるつもりだ」

両手を挙げてそう言ったガランド少将、洋介は刀から手を離れた。

「あなたが亜弥に手を出さないっていうことはわかった。で…少将殿。いったい何の用だ？単に俺とバツキー、亜弥に会いに来て顔を見に来たんじゃないですよね？」

「ああ、鋭くて助かる桜井大尉、五十嵐大尉。お前たちは何者だ？」

「っー」

「お前たちの戦歴には不審なところが多い。それに決定的なのはこのユニットについてある国籍マーク。私を知る限り白い縁取りに赤い丸と星の白い横線国籍マークの国は存在しない。もう一度言う大尉。貴様たちはこの世界の人間か？」

洋介とバツキーは頭を掻き、この人物に嘘は通じなさそうに見えた。

「…今言うことは他言無用ですよ」

二人は、ガランド少将に自身のことを話した。

「なるほど…つまり君たちは…異世界から来たことになるのか信じられない話だが。大尉たちのユニットや性能がその証拠だな。高野長官から聞いたことは半信半疑だったよ」

「っ！…高野長官と…!？」

「少将、くれぐれも…」

「わかつてる。誰にも言わないよ大尉」

そう述べる、少将は亜弥の前に立ち、しゃがんだ。

「怖がらせてすまなかったな」

「い、いいえ…」

ガランドはそう述べるが、亜弥はいまだに洋介にしがみ付いていた。

「え…と君は」

「あ、桜井亜弥です。軍曹です！」

亜弥は緊張しながら恐る恐る紹介する。するとガランドは優しく微笑んだ。

「そうか、では亜弥君。君はお父さんのことは好きか？」

「はい！」

「ははは！そうか。」

そう述べ、ガランドは亜弥の頭をゆっくり撫でる。

「では、桜井大尉、五十嵐大尉。私はこれにて、次の任務頑張れ。もし何か困ったことがあれば言ってくる。できる限りの協力はするつもりだ」

そう言って、彼女はその後にした。

「しかし亜弥ちゃん…君のお母さんは…この世界にいるのか…う…」

バッキーは亜弥の母親の存在について質問した時、その言葉に反応して悲しげな顔になった。

「…いいえ…お母さんは…北海道で亡くなりました…」

「…そうか…気の毒なことを聞いて済まなかった…亜弥…」

「そんなことないよ、バツキーさん！わたしには…この世界で新しいお母さんと出会えたから…／／／」

「そうか…つて…ええ!？」

頭を下げたバツキーに、亜弥は氣を落とさずに言った。そして、ある言葉に氣が付いた。

「洋介…お前…」

「ま…まあな…俺もあるウィッチとある関係になった…／／／」

「そうかあゝ！がんばれよ!!」

洋介は頬を掻き、バツキーは洋介の背中を叩き、応援した。

「あ……ありがとう……／＼／＼……それに、ステラって娘は、バッキーとなんの関係だ……？」

「うっ……／＼／＼……さて、整備の再開だ……！」

「……らっ！ 誤魔化すな、待てえ……！」

洋介は鷹狼を鞘から抜き、逃亡するバッキーを追いかけた。

「……ふふふ……お父さん……バッキーさん……ちよつと、子供っぽいなあ……！……ガランド少将……不思議なウィッチだな……」

一方、JG52に搭乗し、作戦本部に帰路につくガランド少将は

「桜井大尉と五十嵐大尉、亜弥か……彼らならこの世界に良い風を吹かせてくれるかもしれない……」

そう笑みを浮かべたアドルフ・イーネ・ガランドだった。

そして翌日、食堂で洋介は新聞を読みながらコーヒーを、亜弥はルチアナが作ってくれたお菓子を口にしていた。すると

「大尉、亜弥ちゃん、ちよつといいかしら？」

醇子が赴いてきた。

「竹井さん！」

「この記事を読んで欲しいの」

机の上に、新聞の一面を広げ、ある項目を目にした。

「なにになに？…501…再結成!？」

「501…？」

桜井洋介が魔女の世界にて、解散するまで大変世話になった第501統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズだった。

見出しの記事にはそう記してあった。

「今、504は機能していないでしょう？だから、501再結成の話があがったのよ」

「…」の数日で、11人全員が揃うとは驚きだ！」

新聞の写真には、こじやれた基地をバックにして、横に並んだウィッチー11人が写っていた。

その中に、不名誉除隊した戦友の宮藤芳佳も写っていた。

「…竹井大尉」

「そうだと思ったわ。もう手筈は済んでるの」

醇子は一枚の書類を晒せる。

「…俺の名前が書いてある…もしや!」

「ええ、ガランド少将があなたに、501への転属命令がでてるわ。もちろんあなたの娘である亜弥ちゃんも501の指揮に入るように、と」

「そうか…あの時にか…竹井さん、感謝します!!なあ、バツキー!お前も501に行くか

「？」

洋介は醇子に敬礼した。そして、洋介はバッキーと501転属の話聞いた。だが、バッキーは首を横に振った。

「いや、俺はこの504部隊に残る。ここに居ないと、ステラの帰りを待たないとな。それに、フェデリカ隊長に残地する書類をサインしたからな……」

「ん……？」

バッキー・S・五十嵐はこの魔女の世界で、愛機ベアキャットと共に504部隊基地に不時着。そして、愛機がユニットに変形し、ウィザードに覚醒した。

目の当たりにしたフェデリカは、部隊に滞在する同意書にサインをした。

「……全く……隊長らしいわ……」

この件で、醇子は片手に顔を抑えた。

「そうか…残念だが…離れても同じ、ロマーニヤにいらんだから、共に戦うことに変わりはない!」

「そうだよバツキーさん!バツキーさんも、この504でも凄いウィザードだから、やっていけるよ!」

「…二人とも、ありがとう!」

「ステラさんがくるまで、504を頼むぜ!」

「ああつ!!俺たちは、この世界で唯一無二のウィザードだ!」

洋介とバツキーはお互いに手を握りしめた。

「お父さん…?」

「ああ、俺と亜弥は501に行くことになったんだ。横須賀で会った、芳佳に会えるぞ」
「本当に、芳佳お姉ちゃん！」

洋介の言葉を聞いて亜弥は喜んだ。

「（ふふふ、美緒と徹子を思い出すわ）後日、501から補給部隊が来ることになってるの。彼らの車に便乗して、あちらの基地まで行きなさい」

「わかりました。それまでに準備をしておきます。亜弥、行こうな！」

「うん！」

こうして、洋介と亜弥は501に転属することになった。

第42話 魔術師、再び501へ

501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ基地

「私、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐以下、坂本美緒少佐」

次に、戦闘隊長である坂本美緒が呼ばれる。

「ゲルトルート・バルクホルン大尉。シャーロット・E・イエーガー大尉」

そして、階級によって大尉のトゥルーデとシャーリーが呼ばれる。

「エーリカ・ハルトマン中尉。サーニャ・V・リトヴァク中尉。ペリーヌ・クロステルマ

ン中尉。エイラ・イルマタル・ユーティライネン中尉」

その後、階級が中尉であるエーリカ、サーニヤ、ペリーヌ、エイラが呼ばれる。

「フランチェスカ・ルツキーニ少尉」

そして、唯一少尉となった最年少、ルツキーニが呼ばれる。

「リネット・ビショップ曹長、宮藤芳佳軍曹」

そして、士官の次にさらに階級が下であるリーネと芳佳が呼ばれる。リーネはブリタニアでの功績により曹長へと昇格したが、芳佳は軍規違反による点から以前と階級はそのままである。

そして、ミーナは全員の名前を言い終わった後、周りを見回した。ウィッチ全員、ミーナの顔をじっと見ており、ミーナは確認を終えると真ん中を見て宣言した。

「ここに、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』を再結成します！」

『了解！』

ミーナの宣言の言葉に、全員が大きな返事をし、次を述べる。

「尚、この場にはいませんが、桜井洋介大尉も着任します」

「えっ…洋介さんも!？」

「やったー!! 洋介も来るんだー!!」

「桜井もか、ミーナ！」

ミーナは何枚か束になった書類のうちの一枚をトウルーデに差し出す。

「桜井もここに転属になったのか。これで十二人揃うな！」

戦友がここに転属になることを知って彼女は嬉しそうにそう言う。しかし

「トウルルーデ、あと一人配属するウィッチがいるのよ、下を見てちょうだい……」

「配属するウィッチ……？」

そう言い、トウルルーデは下に書かれている文章を見る。

その夜、執務室でミーナとトウルルーデ、坂本美緒の三人が集う。

『桜井洋介大尉の転属と同時に、以下の者を配置に置くこと。ネウロイの極秘計画で転移したウィッチ、桜井亜弥を……』桜井亜弥……？何者だそいつは？』

「ガランド少将の命令だから、断るわけにかなかったの……」

「上層部はまた厄介ごとを押し付けて……で、桜井とこのウィッチはいつ来るんだ？」

「明日よ」

「明日ッ!？」

「はっはっは！亜弥か！」

その言葉にトゥルーデは驚き、美緒は笑い出すのであった。

「笑い事ではないぞ少佐！その亜弥ってウィッチは何者だ!？」

「それはこのウィッチがやって来た時にだ、紹介するぞバルクホルン大尉。ミーナ中佐、私が宮藤と共に桜井を迎えに行くぞ」

「ええ、よろしく願います。少佐」

504 統合戦闘航空団アルダーウィッチーズ基地

「扶桑からの物資、助かったわ。ありがとう」

501から回されてきた扶桑の救援物資の引渡しは無事に終わり、坂本美緒は旧友である竹井醇子と話していた。

「報告書を読んだ。あの内容は事実なのか？」

「…ええ」

「あつ？」

醇子はハンガーの一角、入り口付近に目をやる。そこには

「坂本さん！」

洋介と亜弥がやってきたのだ。

「おおー！桜井か、かれこれ数日ぶりか？」

「ええ、お久しぶりです」

「お前も元気そうで…ん？」

美緒は洋介に挨拶する。そして、彼の背後に亜弥が現れた。

「お久しぶりです、坂本さん！あの…横須賀以来ですね！」

「無事だったか亜弥！訓練学校のみんなは、あの作戦でお前を心配していたぞ！」

「あ…ごめんなさい…」

「ははははっ！　なに、無事であればそれでいい！」

美緒は亜弥の頭を撫でながら笑った。

「さて、そろそろ帰るか。宮藤！」

「あ、はい！」

荷物の運び込みを手伝い、軍に復帰した宮藤芳佳が、こちらに駆け寄ってくる。

「久しぶりだな、芳佳！」

「芳佳お姉ちゃん！」

「はい！洋介さん！亜弥ちゃんも無事でよかったよー！」

芳佳と亜弥が再会するのは、彼女の横須賀の実家以来であり、互いに抱き締めた。

美緒と醇子が何か話しているが小声のため、あまり聞こえなかった。

そして、出発する前に、バツキーが挨拶にきた。

「洋介、501に行つてもくたばるな。お前を討つのは、このバツキー・五十嵐だ!」

「お互いになバツキー、この空が平和になつたらな!」

その後、芳佳と美緒がバツキーと挨拶。そして、彼も洋介と同じく、ウィザードの存在を聞いて驚いた。

しばらくして会話も終え、洋介と亜弥、そして二人のユニットを積み、美緒と亜弥はトラックに乗車、504を後にするのだった。

そしてトラックの中は3人乗りになっていて運転は美緒、真ん中は芳佳。そして、亜弥は洋介の膝の上に座っている。

「しかし芳佳、君が軍に復帰するとは…」

「実は洋介さん…私の家に、お父さんからの手紙が来たの…」

「芳佳の……お父さん……宮藤博士からの手紙……？」

宮藤芳佳の父、宮藤一郎は扶桑のストライカーユニットの研究技師。

ある境で扶桑からブリタニアに渡り、ネウロイの奇襲で帰らぬ者となった。

だが、命を落とす前に手紙を送っていたが、検閲のトラブルにより遅れていた。

封筒の中身が、研究の設計図らしき書類が同封。そして坂本美緒と再会し、技術班に譲渡した。

「そうだったのか……お父さんからの手紙か……」

戦時の洋介も、南方の最前戦ラバウルへ向かう物資を積んだ輸送船がことごとくアメリカ潜水艦により、沈められた。

洋介も姉の志帆と、恋人で、のちの妻となる雪の手紙を心より待っていた。

そして、ドイツに留学した弟の勇介にも手紙を送った。だが、勇介からの一通の手紙も無かった。

今は亡き、父親の宮藤一郎の家族への手紙を受け取り、洋介は少し羨ましかった。

「桜井」

「はい？」

「トライヌス作戦の時、なぜ、ネウロイがネウロイを攻撃したんだ？」

美緒が洋介に質問した。彼女は消滅した人型ネウロイから色々と聞いた。

「報告書に書いてあったな。攻撃、防御、戦術。すべてが、今までのネウロイより優れている、と」

美緒が運転をしながら呟く。

「俺の魔力で感じた勘だと、抗戦派の中でも精鋭中の精鋭で楽には倒せません……」

洋介が珍しく表情を若干険しく呟いた。

洋介とバツキーも激戦地ヴェネツィアで危うかったのも事実だった。

504の報告では、かなりの手練れで、強いことを予想する。

「桜井、504は今、再編途中だったな？」

「はい、俺ともう一人のウィザード、バッキー・五十嵐大尉との共同で幸い死人は出まさんでしたが重症を負って、後送になったウィッチの代わりを集めています。ですが、バッキーだけでは時間が…」

「地上勢力の抵抗もいつまで持つか…」

「今、ヴェネツィアにいる抗戦派を抑えられるのは501だけだよ…」

亜弥が洋介を向く

「亜弥…」

すると芳佳が

「…坂本さん、私、戦います！」

「！」

「戦って、このロマーニヤを守ります！」

彼女は上官の美緒に決意する。その目には強い決心と信念が感じられた。

「よく言った、宮藤！それなら早速帰って訓練だ！」

「はい！」

「…芳佳お姉ちゃん。共に戦おう！」

「うん！」

芳佳と亜弥が共に手を繋いだ。

それから数時間後、501統合戦闘航空団基地に到着した。

執務室

「亜弥、大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよお父さん……」

亜弥は何処と無く緊張し、身体が硬直している。洋介は深呼吸をして、そしてドアをノックする。

「入りなさい」

ドアの向こうでミーナの声が聞こえた。

「失礼します」

洋介はドアを開け中に入りそして敬礼する

「桜井洋介大尉、本日付けで501基地に到着しました」

「ご苦勞様です。そして、以前の502部隊の任務もご苦勞様です。それで、書類にあつた、ネウロイの計画でやって来たと言うのは…？」

「はい、この娘です」

「はわわ…」

亜弥は洋介の背中に隠れている。

「ミーナ隊長…すいません…」

「いいのよ…だんだん、時間をかけて、ここの雰囲気慣れていけば良いわ。よろしくね」

「…よ…よろしく願います」

ミーナの母性あふれる笑顔。それを見て、亜弥は少し落ち着かせ、洋介の前に出て、緊張していて強張っていた顔が少し緩んだ。

そして

「…私は桜井亜弥…です…ミーナ隊長」

「…良い名前ね亜弥さん」

「あ…ありがとうございます…」

亜弥は少し嬉しそうな顔をする。

「亜弥さんの紹介は、夕食前にやってもらいます」

「はい！」

挨拶を終えた二人は、執務室から退室。

すると、カーテンに隠れたトゥルーデが出てきた。

「ミーナ、あいつがネウロイの計画に利用されたスパイだとは考えないのか？」

「本物のスパイなら、人を洗脳してスパイ代わりにするわ。それにスパイにしても彼女はまだ小さいしね……」

「確かにそうだが……」

「やっぱり信用できない？」

トゥルーデとて本当はその娘を信じたい。だが、ネウロイにカールスラントを破壊されたことがあって、すぐに信じるができない。

「大丈夫よトゥルーデ。あなたの戦友がついているんだから」

「だいいが…」

トゥルーデは心配そうにドアの先を見つめるのだった。

執務室を後にした洋介と亜弥は自分たちの部屋へと向かい歩いていった。

「それにしてもこの前の基地も広がったけど。今回の基地もまた随分と広いな〜！」

ミーナによると、この基地は昔の遺跡の跡地に構築された。

石畳に階段、ドアの出っ張り、つまづきそうな床がいっぱいあった。

「…おっと…亜弥、段差とかあるから転ばないようにな」

「うん…お父さん」

洋介はつまづき、亜弥の手を握りながら歩いた。

「お父さん、お部屋はどこだろう？」

「確か…宿舎の一番端だな。急ごうか」

「うん」

洋介と亜弥は手を繋ぎながら部屋へと向かい、たどり着いた。

「……かあ〜！」

「お父さん、いい部屋だね！」

部屋の中は大理石の床と石壁と窓が張っていたシンプルな部屋だった。

「ああ、ベッドと棚があればな……トチローさん程じゃないが……なんとかするか！」

洋介と亜弥はベッドと棚を作る為に、基地内の廃材を回収した。

夕方 格納庫の一角の仮食堂

まだ基地の設営が終わっておらず、格納庫の一角を食堂代わりにしている。
美緒が話を始める。

「皆揃ってるな。今日は食事の前にちよつと話がある」

「話？」

「入って来い！」

「呼ばれた、行くぞ亜弥」

「うん…」

亜弥が存じているウィッチはサーニャ・リトヴァクとエイラ・イルマタル・ユートイライネン、芳佳に会って落ち着いたと思った。

だが、緊張しながら震えていた。

「…大丈夫、怖かったら俺の背中に隠れてれば良いから」

「うん…」

亜弥が洋介の背中に隠れる。そして、洋介はみんなの前に出た。

「皆さん、お久しぶりです」

「洋介、久しぶりっ!」

「おおー! 洋介! 久しぶりだなっ!」

「おひさー♪」

「お久しぶりですわね中尉…いや、昇進して…大尉に」

洋介の前でエーリカ・ハルトマン中尉、シャーロット・E・イエーガー大尉、フランチェスカ・ルツキー二少尉、ペリーヌ・クロステスマン中尉が嬉しそうに呟いた。

「洋介さん、お久しぶりです。ところで、後ろのその子は…」

リネット・ビショップ曹長は洋介の後ろにいる亜弥に気付いたのか、洋介に聞く。

「ああ、そう言えば芳佳とサーニヤ、エイラ以外はみんな初めてだったけな。ほら亜弥、みんなに挨拶！」

洋介は亜弥の背中を押した。

「うん、お父さん……始めまして。あ…桜井亜弥です」

洋介の背中から出てみんなの前に出ると、礼儀良く頭を下げる。

「亜弥さん、始めまして。あの、幼いけど、もしかして新人のウィッチさんですか？」

「あ、あの……」

亜弥は緊張し、辺りをちらちらと見て。そして目線を芳佳とエイラ、サーニヤのほうに向けると芳佳は『大丈夫』っていうような顔で無言で頷いた。

「あ、あの…わたしはネウロイの計画で転移させられたウィッチです！」

「はい？」

「へ？」

「うにゃ？」

亜弥の言葉にその場にいたウィッチたちが固まる。

「ちよつと、桜井大尉！その娘は…」

そして、沈黙を破ったのはペリーヌだった。

「ペリーヌ、亜弥は例のネウロイ秘密計画に転移した…大事な娘だ！」

「娘…？もしかして……」

「俺の…実の娘の桜井亜弥だ」

「！！ つ！」

洋介の言葉で芳佳、美緒、トゥルーズ、ミーナ、エイラ、サーニャ以外、501のウィツ

チ達は絶句する。

「そう言えばさつき桜井のことをお父さんって…桜井、どういうことか説明しろ！」

トゥルーデは洋介の軍服の襟首を掴んで顔を引き寄せる。

「あはは…、これには深い理由がある…」

「桜井さん？ どういうこと？」

ミーナも黒いオーラを出しながら訊く

「え？ あ、そのこれはですね……前に話したじゃないですかー！」

確かにブリタニア時代、洋介が既婚者だったのは芳佳と美緒、トゥルーデとミーナ。ペテルブルグではサーニャとエイラ以外、口にしていなかった。

「みんな、この娘…桜井亜弥は502で桜井に保護された娘だ」

「坂本さん、助言ありがとうございます」

「その娘もウィッチ…？ 私たちと共に大丈夫なの？」

「その件なら大丈夫よフラウ。さつき、502のラル少佐やロスマン曹長。そしてクルピンスキー中尉からこの子は短時間の育成で、中型を撃墜したとの報告が来ていたからそのことなら問題ないわよ」

「先生と伯爵から!？」

ミーナはやや頬を膨れながら、恩師である二人の名を聞いてエーリカは驚く。

「亜弥が洋介の世界から来たってことは、いつの時代から？」

「どんな場所から来たの…？」

エーリカとシャーリー、ルツキーニが食事しながら色々と亜弥に質問した。

そして、談話室に移動しても質問の最中、亜弥の使い魔のエゾオオカミ、発動した時に髪が白髪に変色。固有魔法は影分身、目の当たりにしたみんなは驚愕した。

そして、ネウロイによる副作用で人の記憶を覗く力を利用し、映画みたいに映せる能力にみんな興味を持つ。

そこでまず誰の記憶にするか話し合っていると

「おもしろ〜能力だな〜♪」

「はいはいはい！私、洋介の奥さんと、亜弥ちゃんと再会した時のが見たいっ！」

エーリカが手をぶんぶん振ってそうリクエストする。

「なにつ!？」

「ねえ、洋介。いいでしょう〜！」

「ちよつと、興味があるんだよねえ〜♪」

シャーリーはニヤけながら洋介に付き添った。

「まあ、…ある程度は…／＼／＼」

洋介は頬を掻きながら赤面した。

「それじゃあ、亜弥ちゃんその時のこと見せてくれる？」

「うん…」

洋介は亜弥の肩に手を置き、亜弥は片手を翳し、談話室の内部が変化した。

「い、これは…?」

「この世界が、異世界の扶桑…日本か！」

「あつ、あれが洋介さんだね！」

映し出されたのは、洋介が少尉に任官したばかりの時代。

1944年9月、場所は広島。

東洋一の軍港の呉、その繁華街に並ぶ旅館で洋介が上官の厚木十三大尉との喧嘩。だが、喧嘩を制止した人物が柚子と雪。

従軍看護婦で美しい女性、妻となる雪と、厚木十三と柚子と同時の婚礼式。

翌年の7月。娘の亜弥が生まれ、休暇を取って家族水入らずでの散歩。だが、ガラの悪い警官と喧嘩してある家族を助けた。

翌日の空襲で、洋介は雪と幼き亜弥。妻子に短剣を渡して戦場に。これが、家族と過ごした最後の日だった。

その空襲で雪は意識不明になり、目が覚めたのは8月18日。

洋介が北方の戦場で命を落とした日だった。

それから9年後、1954年12月北海道。

妻の雪が洋介の帰りを待つ間に亡くなった。

ショックの余り亜弥は家を飛び出し、エゾオオカミのひびきと吹雪に遭遇、そして、辺り一面の暗黒に飛び入り、どうやって脱出したのか覚えていなかった。

猛吹雪が舞う雪原にて亜弥は倒れた。

亜弥が目覚めたのは鋼鉄の中、内部に下原定子少尉とジョーゼット・ルマール少尉、雁渕ひかり。

502時代、父親の桜井洋介が気付いた時、再会に泣いた。

502基地で健康検査のレントゲン写真でネウロイのコアが確認された。

それを知った亜弥は基地から逃亡。翌日、彼女はペテルブルグ近郊の雪原に引きこもっている時、エディータ・ロスマン曹長たち5人のウィッチに発見された。

その時、ペテルブルグを襲うネウロイと戦いの最中で定子とジョゼに基地へ避難する時、ネウロイのビームで二人は落下、ネウロイが定子に狙いを定めた時、亜弥は定子を庇おうとした瞬間に、エゾオオカミのひびきが彼女に接触。

シールドを張り、髪が白く変化して、ウィッチに覚醒した。

それを目の当たりにしたウィッチ達は青ざめた。

「…亜弥は…恐ろしい戦乱で暮らし、そして皮肉にも桜井の後に付いて往くように、この世界へ……」

「洋介さん……奥さんと離れて…悲しくなかったのですか…？」

リーネが洋介に問いかけた。

「…当たり前だ…雪の死を知った時はどれだけ胸が痛む程…僕は…悲しかった…一時は自決を考えた程だ…！」

「あつ…ごめんなさい…」

リーネは洋介に謝罪した。

「(「こちらこそ…」ごめん…」

「桜井さん……理由はどうあれ、亜弥さんは私たちの家族です。この娘と共に戦い、生きるのよ。」

「中佐……」

「そうですよ！ 私たちが、亜弥ちゃんの家族になります」

「あたしも」

「あたしも♪」

「わたくしもですわ。孤児の面倒は見慣れてますわ」

「わたしも」

「はっはっはっ私もだ！ 異世界からきたウィッチを育てたいな！」

「ありがとう…皆さんありがとう…」

洋介はお辞儀して、目元から一筋の涙が流れた。

「皆さん、わたしはまだ未熟ですがよろしくお願いします!!」

亜弥は、501ウィッチ部隊の前でお辞儀をした。

「ねえ、洋介さん。仮に亜弥ちゃんの母親代わりは誰なんですか…?」

「えっ!?!／／それは……」

「桜井!!」

「っ!?!」

口を閉じていたトゥルーデは洋介の前に出て述べた。

「いくら年端が往かない娘で、お前は戦場で絶対に命を粗末にするな！」

「百も承知だトゥルーデ、…ぬちどう宝、俺の戦陣訓だ！」

「桜井亜弥！」

「はい…えつと、バルクホルンさん…」

「死にたくなければ、扶桑に帰れ…」

「ひっ……」

トゥルーデは談話室から出て行った。亜弥はやや涙声で洋介に聞いた。

「お父さん……バルクホルンさんはなんであんなことを…？」

「あの娘も、亜弥と年齢が変わらない妹がいるんだ」

洋介はトゥルーデの気持ちを充分に分かっていた。

彼女の妹、クリスの意識を取り戻し、命ある限り、母国を取り戻すまで戦うのであった。

第43話 小島の訓練所

ロマーニヤ 501基地上空

「ええーい!!」

ダダダダダダ バシユツ

「ぎやつ…!」

「なっ…!?! 勝者、亜弥!」

桜井亜弥による自己紹介の翌日、彼女は零式54型ストライカーユニットを履いてルツキーニと模擬空戦を実行、左捻り込みで勝った。

滑走路で父親の桜井洋介とトゥルーデ、エーリカは双眼鏡で見物、驚いた。

「凄い……！　ねえ洋介、亜弥は……本当にロスマン先生の元で鍛えたの……？」

「ああ、俺が502所属時代、僅か曲芸飛行ができるほど成長したが……先生曰く……驚いていた」

洋介が502時代、亜弥がエディータ・ロスマンの指導を受けたにも関わらず、僅か数日で成長したことに冷や汗を掻いた。

「それにしても……ウィッチに覚醒して……その僅かに空に……ネウロイと戦ったなんて……凄い成長ぶりだね！」

「……いずれ……ハルトマンを越えるエースになるかもな……」

「ん……トゥルーデ……？」

「いや、なんでもない……」

トゥルーデは小声で呟きながら亜弥を誉めつつ、その場を去った。

その午後、坂本美緒少佐の指導の下で、洋介も含め芳佳たちと一緒に訓練をした。

しかし

「「はあ……はあ……はあ……」」

ペリーヌとリーネ、芳佳の三人は最初のウォーミングアップで、基地周辺の10周ランニングの3週目でばてていた。

「どうしたんだ三人とも、桜井より4周遅れているぞ！」

「明らかに体力不足ね……」

「オラーシャの前線で戦っていた桜井はともかく、あの三人はブリタニアの戦いの後、軍から離れていたからな…半年以上のブランクだな…」

ミーナと美緒は困惑した顔で呟く。

「昨日の飛行訓練でもあの三人は問題が多かったぞ」

芳佳たちは何度も接触衝突など問題が多く、このまま実戦に出すのは危険だった。

美緒は三人の所に向い、指示を出した。

「宮藤、リーネ、ペリーヌ！お前たちは基礎からやり直しだあ！」

「「は、はい！」」

「あの…坂本さん！」

「どうしたんだ、亜弥？」

亜弥が美緒の側に立ち、進言した。

「わたしも、芳佳お姉ちゃん達と一緒に訓練へ行かせてください!!」

「っ！何を言うか亜弥、お前は優れたウィッチだ、緊急にネウロイが襲来したら、一人でも戦力になるウィッチが必要だ」

「強いウィッチになりたいのです！」

「…なに…はっはっは!!…そうか、わかった！」

4人はとあるところに修行しに行くことになったのだった。

4人はストライカーユニットとある場所に向かっていった。すると、小さな小島が見えてくる。ただその小島はヴェネツィアに行くための石橋がかかっていた。

美緒から預かった指定場所の地図をペリーヌが見る。そこに書かれた地図の目的地は先ほどの小島を指していた。

「……………あそこですわ」

そう呟き、4人はその島に向かって降下する。降りると、変哲もないのどかな自然があり、その中で遠くに一つの家がポツンと立っていた。4人は周囲を見渡す。

「本当にここが訓練所なんですか？」

「少佐から頂いた地図だとここで間違いありませんわね」

「ごめんくださいー！」

リーネの言葉にペリーヌは地図を見ながらそう呟く。四人の目的地はウィッチの訓練所。

亜弥が挨拶しても、しかしどんなにあたりを見渡しても訓練所らしきものは見当たらなかった。

「誰もいないよ……あつ！」

「どうしたの芳佳ちゃん？」

「あそこに人がいるよ」

芳佳が指を指したところに、手伝人らしき人物が歩いていた。

「あの人に訊いてみよ。もしかしたら訓練所の場所知ってるかもしれないし」

「そ、そうですわね……」

そう言い4人はその人物のところに向かいそして声をかける。

「ん…何？」

声をかけられた人物は振り返り答える。その人物は金髪の長い髪に青色の瞳をした女性だった。

変わったことに彼女は女が着るズボン姿じゃなく、亜弥の様なベルトを履き、シャーリーの様な陸軍軍服を着ていた。

「すみません、ちよつと聞いてもいいですか？」

「はい、何を訊きたいの？」

「あの、ここいら辺にウィッチの訓練所があるって聞いてきたのですが…」

リーネがそう言うとその女性は目を細める。そして4人にこう聞き返す。

「もしかして……501のウィッチさん達ですか？」

その言葉を聞き二人は驚くがペリーヌが質問した。

「あ、あのもしかしてあなたアンナ・フェラーラさんの関係者ですか？」

アンナ・フェラーラとは、歴代のウィッチ達の多くを育てて来たという有名な訓練教官のことで、4人が会いに行く人物だった。

「ええ、そうだけど？あなたたちのことは、あなたの上官やアンナさんから聞いているわ」

「あ、あの…あなたは？」

「あたしはここでアンナさんのお手伝いをしているのよ。そういえば、くそば…アンナ

さんを探しているんですよ?」

「そうですわ。行方をご存知で?」

「ええ、アンナさんでしたら……」

彼女が指一本を上に向ける。4人は上を見上げると丸い何かが落ちてくるのだった。

「―― うああああああっ?!?」

「――」

4人は驚いて急いで避ける。落ちてきた物の正体はデカイ盥だった。

「あゝらら…あともう少してチャップリンのコントが見れたのに…」

4人に聞こえない声で彼女がそう呟く

「ネウロイ!」

振り向きざまに、ブレン軽機関銃を向けるペリーヌ。

だが

「誰がネウロイだ！」

落ちてきた盥から声がする

「ひやつ！喋った！」

「どこを見てるんだい上だよ上！」

「上？」

怒鳴り声が聞こえ、4人は上を見るとそこには箒にまたがって宙を飛んでいる一人の老婆がいた。

「一人を除き、挨拶もなしにうちの庭に入るなんて、近頃の若いもんは躰がなつてないねえ」

「あ、こんにちは！」

彼女は亜弥を褒めつつも、やれやれつという風に首を左右に振る時、芳佳は慌てて挨拶する。

「おかえりなさい。アンナさん。お客さんが来ているわよ」

「おや、ご苦労だねステラ。で、あんたたちは？」

「あ、あの…もしかしてアンナ・フェラーラさんですか？」

「そうだよ」

リーネがそう尋ねると老婆は不機嫌そうにそう言う。すると芳佳が彼女の前に赴いた。

「私達、坂本少佐の命令で訓練に来たんです！ここで合格をもらうまでは帰るなって言われました！」

芳佳が真剣な目でそう述べると、アンナはめんどくさそうにため息を吐く。

「はあ……とりあえず、その足に履いてるもん脱ぎな。ステラ、ユニット置き場の場所、案内しておやり」

「はあーい！じゃあ、4人ともついてきて」

「は、はい！」

4人は彼女についていき、しばらくして納屋に、そこで4人はユニットを脱いで干し草の上に置く。

「あ、あの。案内してくれてありがとうございます」

芳佳が案内してくれた少女にお礼を言う

「いいよ、お礼なんて。あたしはこれから水くみに行くてくるわ。それよりもあなたたち訓練を受けるのでしょ？」

「は、はい」

「アンナさんの訓練は厳しいから頑張つてね」

そう言い4人の肩をたたき、納屋から出ようとする。すると

「あ、あの！」

「何？」

すると芳佳が呼び止める

「まだ名前を聞いていなかったの、そのできればいいんですけど名前を教えてくださいませんか？」

芳佳がそう訊くと

「あたし？あたしはステラ・A・エヴァンス。よろしくね♪」

そう、彼女は答えるのだった。

「…バケツ？」

修行に來た芳佳たち、そして修行してくれる訓練教官こと、アンナ・フェラーラに出会い、修行を付けてもらうことになった。しかし納屋の外に出て待っていると、アンナがやってきて4人に渡したのはバケツだった。

「あ、あの…これは？」

「じゃあまず、アンタ達には今晚のお料理とお風呂の為に、水を汲んできてもらおうかね」

「水汲みですか？」

「えっと……」

芳佳は井戸を探すが、それらしきものはなかった。

「井戸ならあつちだよ」

アンナが指を指した方向は、遙か先。石橋を渡った向こう側にある崖の上に小さな井戸があった。

「ええっ!? あんな遠くに……」

「あんな所から水を……」

「うわあ……」

「なんであそこに……」

「ここは海の上だからね、水が出るのはあそこだけさ」

そう言われ、4人は困った顔をする。するとリーネが何か思いついたような顔をした。

「あつ! でもストライカーを履けば!」

「あつそつか!」

「あ、それいいアイデアですわリーネさん。ストライカーで飛んでいけばあつという間ですわ!」

「だけど、この練習で簡単過ぎる……」

4人は、納屋においてあるストライカーを取りに行こうとしたが、アンナに阻止された。

「誰がそんなの使っていいって言ったんだい? ほれ、これを使うんだよ!」

「て、まさか?」

「「 箒? 」」

「箒……もしかして……!」

4人は驚いてそう言う。するとアンナは四本の箒を渡す。

一方、アンナが指定した井戸にて

「これで良し…全く、あのくそババアは人使いの荒い…それにこの世界に来て半年。早いわね…兄さん、ヴェン、アイリツシュ隊長、マリー、アリシア…パウラ……シャルロット…トム…スパロウ機長…キャサリンさん…エミリーちゃん…エマちゃん…パンサー…」

ため息をつきながら、あの戦時と戦後で命を落とした者の名前を呟き、バケツを手に取りステラ。

「バッキー…504で大丈夫かな…」

ステラはアンナが住む小屋のある方向を見る。

「……さて、あの4人、うまくできてるかしら？」

一方、芳佳たちは、箒にまたがり魔法力であがろうとした、しかし

「痛い…」

「食い込む…」

「ぐう…」

芳佳、リーネ、ペリーヌは悲痛な声を出す。

アンナから渡された箒にバケツを掛けて跨った三人は、箒に乗りながら浮き上がる。しかし、自身にかかる負荷により三人は浮きあがることしかできず、その場で立ち止まったままである。

「うわっ!？」

「うわあ!」

そして、芳佳とリーネは大きくバランスを崩す。ペリーヌだけが唯一体制を維持しているが、彼女もその状態から動くことができない。

「いつまで地面をうろうろしてるんだい! さっさと飛んでいかないと、晩御飯に間に合わないよ」

アンナはそう言つて、手を一回たたく。すると、全員の箒が動き出す。

芳佳とリーネはその場でぐるぐると回転をし、芳佳はそのまま上に飛んでいく。

リーネは回転に耐えられずに振り落とされる。ペリーヌは前に後ろに流されるように動き、制御が効かずに落ちた。

そんな三人の姿を見て、溜息を一つ吐いた。

「はあ…全く情けない。これで魔女とは片腹痛いね…」

そう言つて、リーネに近づくアンナ。

「あんたは無駄にでかいものつけてるから、バランスが取れないんだよ」

「きゃあ！／＼／＼」

アンナは述べながらリーネの胸を掴む。その行動にリーネは思わず驚き、顔を赤くする。

上空に打ち上げられた芳佳は、箒に懸命に掴まりながらぐるぐると回される。

「うわああああ！」

「いつまで回ってんだい？」

「箒に聞いてください！」

そんな芳佳にアンナは聞くが、芳佳は振り回されたまま呟く。
そして彼女は目を回してしまい、手を放して地面に落ちた。
そんな中、ペリーヌは懸命に姿勢制御を行っていた。

「ほお、中々やるね」

「こ、これくらい…ウィッチとして当然…ら、楽勝…ですわ…」

アンナに返答するペリーヌ。だが、その表情は強張り、声は上ずっていた。

そんな中、アンナはまるで意地悪く呟く。

「そうかいそうかい」

彼女は箒をつんと触る。すると、姿勢を懸命に整えていたペリーヌはバランスを崩す。

「ぐう…う…す、擦れる…」

ペリーヌも箒から脱落したのだった。

三人の無様な様子に、アンナは溜息を吐きながら空を見上げると、葎に股がつて飛行する亜弥の姿があつた。

「凄くいい！これこそが本当の魔女！」

「ん…あの娘は魔法の制御が一段と優れているねえ！それに、あんた達には永遠に合格がやれそうにないね」

「そ、そんな…」

「いまどき！ウィツチの修行に箒だなんて時代遅れにもほどがありますわ！」

ペリーヌは文句を言つて、箒を投げ捨てた。

「おや？もう音を上げたのかい」

「ペリーヌさん……」

「アンナさん！」

リーネはそんなペリーヌに困った顔をするが、芳佳は違つた。彼女はアンナの名前を呼んで質問した。

「あの、私も知りたいです。こんな修行で本当に強くなれるんですか!？」

「あんだ、強くなりたいのか？」

「はい！」

「何故だ？」

芳佳の言葉に、何故強くなるのかアンナは問う。芳佳は、アンナの問いに答えた。

「私！強くなってこの世界を守りたいんです！強くなって、ネウロイからこの世界を守りたいんです！困っている人達を守りたいんです！」

「芳佳ちゃん……」

芳佳の言葉に、他の皆も釘付けになる。彼女の真剣な眼差しは、その答えに嘘偽りが無いという証拠だった。

「……見ておいで」

アンナは手本を見せるため箒にまたがり、飛んで行った。

「あ、アンナさん……?」

「行っちゃった……」

「ふん! もう戻ってこなくて結構ですわ!」

空に飛んでいる亜弥と三人はしばらくポカーンと見ていると、しばらくしてアンナが戻ってきた。

すると、水のたつぷり入ったたらいを吊り下げて。それを見た芳佳たちは驚く

「わあ、こんなにいっぱい!」

「こ、これを一人で!」

「すごいです!」

「で、でもアンナさん。これで本当に強くなれるんですか」

「信じられないかい？けどね、あんたたちの教官だつてここで訓練して一人前の魔女になったんだよ」

「え、教官つて……」

「坂本少佐が？」

「ああ、あの子は素直な子でねえ。最初つからあたしのこと尊敬して一生懸命練習したもんさ、お陰で見事な魔女に成長したつてわけだ？それにほかの奴らだつてみんな素直で私の指導を受けたもんだよ」

アンナが胸を張つて、自慢を促した。

「よく言うわよ……寝室部屋に書かれてあつた。世界各国のウィッチたちの罵倒の声はなんなのよ……」

「わあ!?!す…ステラさん、いつの間に!?!」

芳佳の背後に、眩きながら大きなバケツを二つ持ったステラがいた。

「ステラ…何か言ったかい?」

「いえ、何も…それよりアンナさん。水汲みが終わりましたので、あたしは夕食を作ります。メニューは何にしますか?」

「ああ、ご苦労だね。それと夕飯のメニューはお前に任せるよ」

「わかりました。では…それとあなたたち。あなたたち4人はまだ修行初日なんだから、できないのは当たり前。頑張りなさい。」

「あ…はい…」

ステラは芳佳たちを励まし、小屋に戻った。

「…アンナさん、ステラさんって…」

「あいつかい？さあね、半年前にロマーニャに、後に新設した504部隊に配属されたけど、魔法能力が曖昧なウィッチ。見た目と名前からして扶桑とリベリオン人らしいけどそれ以上のことは知らないね…まったく不思議な子だよ」

アンナはステラのほうを見て語った。

「そうですか…504っ！…バツキーさんがいる部隊…」

芳佳もステラの後姿を見てそう言う。すると

「あ、あの…坂本少佐が使われていた筈って？」

ペリーヌがアンナに訪ねて訊く

「さつきアンタが投げたやつだよ」

「えっ!? あれがっ!?」

さつき投げた箒が敬愛する坂本美緒が使用した箒だと聞くと、ペリーヌはすぐさま投げ捨てた箒を手にした。

「こ、これが坂本少佐がお使いになった箒いゝっ!」

ペリーヌは頬をつけながらそう言う。

「なんだいありや?」

それを見たアンナは、頭にはてなマークを出したような顔をしてそう呟く。

その後、亜弥を除く芳佳たちは何度も練習したが結局、井戸までは行けずただ宙に浮きコントロールするのがやっとの状態で訓練初日が終わった。

第44話 ステラの経緯

真夜中

「……………うん？」

芳佳は、目を覚ます。芳佳たちは一つの大きなベッドに4人で眠っており、横からはリーネとペリーヌの寝息が聞こえる。

芳佳はふと目が覚め、すぐには眠れそうになかった。

「あれ？」

もう一カ所のベッドにはステラと亜弥が眠っていた。

そばにある棚に置いてあるムスタングユニットの国籍はリベリオンに酷似している

が、変わった星マークだった。そして、ある写真を取って目にした。

「1943年…10月ハワイにて…写っているの…ステラさんとバツキーさん？」

「うん…なに見てるの…？」

「あつ…ごめんなさい…」

「ふふ…いいのよ…」

「わたしは宮藤芳佳です」

「芳佳、いい名前ね」

ふと目覚めたステラは簡素に自己紹介を聞いたあと、芳佳に語った。彼女はリベリオンのリトルトーキョー出身、扶桑とリベリオンのハーフウィッチであった。

写真に写っているステラとバツキー以外の人物たちは、この写真を最後に、45年に

突入、フィリピンと東京上空、ハワイ、扶桑近海など、それぞれの場所で命を落とした。

「そうなんだ……ステラさんのお兄さん……ベルリンでお友達も……つらいことを聞いて……ごめんなさい……」

「いいのよ……いずれネウロイとの戦争が終わったら、……兄さんたちと友人が眠る場所に花を供える……」

「……だけどステラさん……洋介さんみたいだね……」

「洋介……？さて、明日も早いから寝なさい……」

「はっはい……」

芳佳は寝室に戻りながら疑問を感じた。

2、3月にそんな事件は聞いたことがなく、それ以上にこの45年7月以降は先の話になる。

「(もしかして…ステラさんは…)」

ベッドで再び寝ようとした芳佳だが、そこにある物が目に入った。

それは、ベッドに書かれていた文字だった。様々な国の言葉で書かれていたその言葉は、彼女には意味が分からないものだった。しかし一つだけ、芳佳にもわかるものがあつた。

「く、クソババ…」

扶桑語で書かれているその言葉に芳佳は思わず頬を引きつらせる。しかし、その字を見てあることに気づいた。

「これ…坂本さんの字だ」

それは、芳佳が以前見た美緒の字にそっくりだった。そこから、これを書いたのが美緒だと芳佳は理解した。

翌日

亜弥は相変わらず葦に股がつて、島上空を飛行する時

「きゃあ!？」

リーネは思わず悲鳴を上げる。そして、箒からずり落ちると、石橋の淵に掴まったままぶら下がりになる。

「うわーん!」

リーネは助けを懸命に求める。

「いつ…きゃっ…あっ…」

ペリーヌは箒が上下に動き、体がそれにガクガクと揺さぶられる。二人は昨日からあまり変わった様子が無かった。

「やれやれ…」

アンナはそう言つて溜息を吐いた後、もう一人のウィッチを見た。

「…！」

リーネとペリーヌが箒に遊ばれている中、芳佳は懸命にバランスをとると、ゆつくりとだが飛行をしていく。

その様子には、アンナも少し感心した。

「おや、随分良くなったじゃないか」

「あ、ありがとうございます……！」

アンナの言葉に芳佳は答えるが、それでもまだ余裕がなかった。

何故、芳佳は急に上手くなったのか。それは昨夜にあった。

「箒と共に？」

「うーん、なんていうかね。箒に跨って乗るんじゃないくて、箒と一緒に飛ぶイメージかな」

芳佳が疑問に思案中、ステラが説明する。

「皆は箒に跨って浮くイメージがあるけど、そうじゃなくて箒と一緒に飛ぶの。箒だけじゃなくて、自分も飛ぶイメージで」

そう説明するステラに、芳佳は考える。確かにあの時は、芳佳は箒に跨って、箒だけが飛ぶイメージがあつた。

「わかった、明日やってみる！」

芳佳がそういうと、ステラは微笑み返したのだつた。

「ちよつと来なさい」

そう言つて、アンナは全員を呼ぶ。

「あんた達全員、魔法力は足りているんだ。足りないのはコントロール。今までは機械がしてくれたものを、自分でコントロールしなくちゃ駄目なんだよ」

そう言つて、アンナはリーネとペリーヌの箒を持ち上げる。

「ひやつ!？」

「いつ!？」

「痛いのは、箒に体重が掛かってるからだよ。あの子なんか、もうコツを掴み始めてるよ」

そう言つて、ハンナは芳佳を見る。

「いいかい？あんだ達はストライカーユニットつて機械にずっと頼つてた。まずそれを忘れて箒と一体化するんだ」

「箒と一体化？」

アンナの言葉に、リーネは考える。

「箒に乘ろうとするんじゃない、箒を体の一部だと感じるんだよ」

「体の一部…ですの？」

ペリーヌも考えた。

「そして、自分の足で一步前に踏み出す。そんなイメージで魔法を込めるんだ。ちゃんとした魔女なら、簡単な事さ」

そう言って、アンナは堂々と助言する。

その言葉に、リーネとペリーヌ、そしてコツを掴み掛けていた芳佳が考える。すると、三人の魔法力は箒と共に一つとなる。

「一步前へ…」

そして、全員が一步を踏み出した。すると、

「やった！飛べたー！」

「私も飛べた！」

「飛べましたわ！」

「わっ！芳佳お姉ちゃん達、飛べたんだ!!」

「亜弥ちゃん！」

芳佳は先ほどまで掴み掛けていたイメージを完全に掴んだ。他の二人も、今までまともに飛べなかった状態から、こんどはしっかりとイメージを持つて飛べるようになる。

空で遊んでいた亜弥も、三人を見て歓喜した。

4人がちゃんと飛べたことに感激する中、アンナはその様子をしたから見て納得したように微笑んだ。

「アンナさん」

「おや、ステラ。もう終わったのかい？」

「はい」

アンナの言葉に返事をしながら、ステラは足元のバケツを見せる。そこには、水がいっぱいになった水バケツがあった。

そして、ステラは空を見る。

「皆飛べましたね」

「やつと一人前だよ…全く、あんたに比べたらよっぽど手のかかる子だよ」

そう呟き、アンナは箒に跨り4人の下へ行った。

「いつまで遊んでんだい？さっさと水汲みに行かんと、日が暮れちゃうよ！」

「い、言われなくても行きますわ!」

『行つてきまーす!』

そう言つて、4人は水汲みに向かった。

その様子を見ていたアンナの下に、ステラが箒に乗つてやつて来た。

「昨日と全然違いますね」

「あんただろう。あの扶桑の若いのに何か助言したのは…」

「あちやゝ…駄目ですか?」

「…いいや」

アンナの質問を特に悪いと思った様子に、ステラは聞き返す。

そんなステラの様子に、アンナは一つ溜息を吐いてから、井戸に向かった4人の方を再び見る。

その後、4人はアンナから今日のノルマを認められたのだった。

夕方、芳佳たち4人はバケツでためた水をたらいに入れる。

「まあ、今日はこの辺でいいだろう」

「やった！」

「良かったね！」

「と、当然ですわ！このくらい！」

努力して集めた水を見て嬉しそうにそう言うのだった。

献立はアンナ特製の夕食。彼女の特製のシチューとパンとこの島で取れた新鮮なサラダだった。

「いただきます！」

4人はご飯を食べる。芳佳と亜弥がパンをちぎって食べ、リーネとペリーヌはシチューを食べる。

「美味い！！」

同時に叫ぶ4人。努力して何かを成し遂げた後の食事はどんな豪華な料理よりもおいしいからそれはそうだろう。

アンナも自分の作った料理おいしいと言われて思わず笑みを浮かべる。だが、すぐにきつい顔になった。

「食べたらしつさと風呂に入りな！」

「はい！」

そう怒鳴り込み、そして4人は食べ終わると食器を洗いものをしていたステラに渡して風呂に入りに行くのだった。

「〜♪」

そしてステラは鼻歌を歌いながら食器を洗っている時だった。

「ステラ、後は私がやとくから、あんたも風呂に入ってきたな」

「は…は…いい♪」

そう言われて、ステラはアンナに一礼をしてその場を後にするのだった。

「気持ちいい…」

「♪」

芳佳は呟く。夕食をとった4人は集めた水を入れた風呂に入っていた。

一日の訓練を終えて入る風呂は、心の癒しであった。気持ちの良さに、亜弥は身体を横に倒しながら浸かっていた。

「でも、もう少しお湯が欲しいね」

「そうだね」

芳佳の言葉に、リーネが同調する。湯の量はステラの協力があつたにも関わらず、二人の腰よりやや上辺りまでしかなく、体全体を温めるほどの量は無かった。

その時、芳佳はまだお風呂に入らずに海を見ていたペリーヌに気づく。

「あれ？ペリーヌさん入らないの？」

「え？も、勿論入りますわ」

芳佳に咻かれ、ペリーヌもお風呂に入る。しかし、その声はどこか上ずっていた。

「ひゃあ!!」

「うわあっ!」

そして、ペリーヌはお風呂に入るが、突然驚きながら思い切りお風呂から出る。その声に宮藤たちも驚いてみると、ペリーヌは股のところを抑えていた。

「し、しみるゝ…」

ペリーヌは初日と二日目の最初に箆に股が擦れてしまい、その場所が赤くなっていた。そこにお湯が触れ、彼女に刺激を与えていたのだ。

その様子に、芳佳たちも驚いた様子で見る。

「び、びつくりした…」

「大丈夫？ペリーヌさん…」

芳佳は純粹に驚き、リーネは心配した様子で見る。

「大丈夫？」

その時、4人の後ろから声がある。振り返ると、そこには体にタオルを巻いたステラが居た。

「あ、ステラさん」

「みんな、仲がいいね♪あたしも入ってもいいかしら？」

「どうぞ」

「ありがとう」

そう言いステラはタオルを脱ぎ、芳佳の隣に座る。

「ふふ…いい湯加減ね…やっぱり一仕事を終えて入る風呂は格別ね………ん…？」

ステラは気持ち良さそうにそう言う、だが、何処となく視線を感じた。

「おお…リーネちゃんより…いや、シャーリーさんと甲乙着けがたい…／＼／＼」

芳佳はステラの胸を見て、目をキラキラさせ、笑みながら小声で呟いた。

「ん？何か言ったかしら芳佳…？」

「い、いえ！なんにもありません！……ステラさんそのお腹…？」

「あつ…これは…」

「宮藤さん、亜弥さん？ステラさんに…お腹にてこれは…」

「これって銃弾の痕ですか？」

芳佳がそう言いながら亜弥は震え、リーネとペリーヌがステラの腹を見ると、そこには弾痕みたいな痕があつた。

「え？ああ、これね…これは…東南アジアのシンガポールで…敵機の機銃掃射を受けた…不名誉な傷よ…」

「東南アジア…？敵機…どんな敵と戦っていたの？」

「ステラさん、ちよつと失礼します！」

「えっ…亜弥？」

リーネとペリーヌはステラの言葉を聞いて震えた。

すると、亜弥は魔法力を発動して、右手で彼女の肩に接触、風呂場のみ景色が変わった。

「亜弥ちゃん!?これは…?」

「っ……これは…シンガポール?」

ステラによる禁断の記憶が映し出された。

ステラは異世界の戦争で、リベリオン陸軍Ⅱアメリカ陸軍のP-51H型ムスタングの戦闘機パイロットであり、爆撃機B-24の護衛する任務に就いていた。

爆撃機の空襲目標は扶桑軍Ⅱ日本軍が占領するシンガポール。

敵の陸地から高射砲、海に浮かぶ艦艇が対空砲や機銃が発砲。さらにフロート装備、尾翼に虎のマークが描いた二式水上戦闘機が迎撃に向かい、交戦する。

「…あいつは…ダンピールとラバウルのフロート戦闘機！今度こそ落としてやる!!」

激しい空中戦の末、照準を入れた時に敵機から手榴弾を投げ飛ばされ、爆発の影響で風防のガラスが半壊、敵機がステラの背後に周り込まれ、機銃を受けた。

腹部に被弾したステラの身体が衰弱、それでも愛機と共に飛行を続けた時、異次元の入り口に吞まれ、この世界のロマーニャ半島の海岸に不時着。

のちに、504統合戦闘航空団アルダーウィッチーズ隊長、フェデリカ・N・ドツリオ少佐に命を救われた。

ウィッチに覚醒し、愛機がストライカーユニットに変形した。

だが、魔法力があっても、飛行能力は曖昧。

竹井醇子の推薦により、この島に移されアンナの指導により、今に至っている。

「ステラさん…あの戦時…辛くなかったのですか…?」

「…辛くないと言えば嘘になるわ…あの戦争で惨めだったのが、…アメリカに住む移民2世とハーフは差別を受けた…危険な民族として烙印を押された…」

「でも、…なんで軍隊に…」

「両親を解放する為に…」

「両親の解放…？」

ステラは悲しくも、真剣な表情になった。

「あの1941年12月7日、日本…扶桑がハワイを攻撃した日から、アメリカ…リベリオンの目が変わり、扶桑系人とハーフが収容所に送られてた。当然、あたしと兄、母、あたし達を愛した父も一緒に檻へ、それから軍隊があたし達収容所の人間に募集の報告で、あたしと兄、バッキーと弟のトムは志願した。二世、ハーフ部隊は、太平洋と欧州に配属、他の部隊から白い目で見られても、裏切り者じゃないことを証明するために。ねえ、亜弥ちゃんいいかしら？」

「あ……うん！」

ステラは亜弥に触れながら、彼女が携わった戦場が映し出された。

初陣が南太平洋のダンピール海峡、翌年は信頼する仲間たちとラバウルでの航空戦。ファイリピン戦で敵機と抗戦、シンガポールの空に落ちた。

憎しみ合う戦乱の時、幸せなことがあつた。バツキーたち二世とハーフたちはハワイで信頼する白人上官の家に集い、人種問わずのパーティーが一番の思い出であつた。

「さて、明日も頑張つて風呂場の水を貯めないかね！」

「はい、ステラさんも！」

ステラは湯船から去つた。

第45話 5人でできること

その後、芳佳たちも風呂から出て、お風呂で火照った体を冷ますため石橋の上に座り夜風に当たっていた。

「いい風」

「うん」

星の綺麗な夜空を見上げ四人は景色を楽しんだ。

「すごいね…ストライカーが出来る前のウィッチって、みんな箒で空を飛んでたんでしょ？」

「私のお母さんも昔は使ってたって言ってたよ？」

「へえ、芳佳お姉ちゃんたち魔女は箒で飛ぶイメージだけど…」

「でも、箒で飛んだくらいで本当に強くなるのかしら？」

ペリーヌは疑うようにそう呟く時

「疑り深いねえ…」

「アンナさん」

そこに寝巻き着姿のアンナがやってきた。

「明日も早いってのにこんな所で何してんだい？」

「橋、見てたんです。」

「橋？橋がどうかしたのかい」

「あの、アンナさんはあんなに上手く箒で飛べるんだから、橋なんて要らないんじゃないかかって…」

芳佳が疑問に感じて言うアンナは顔を背け悲しい顔をする

「……あたしの娘は魔法が使えなくてね」

「え？」

「娘さん……？」

「ああ、ずいぶん前に嫁に行っちゃったけど、年に数回孫を連れて会いに来てくれるんだ。この橋を渡ってね…」

「あ、あの…娘さんは今どこにいるんですか？」

「ヴェネツィアき…」

「ヴェネツィア……」

「そこつて、ネウロイに占領された…」

芳佳たちはその場所を聞いて驚いた。そこはトライヌス作戦での激戦地であり、今は新たなネウロイに占領されている。

するとアンナは芳佳たちの心配そうな顔を察した。

「大丈夫だよ、家族全員無事に逃げたつて報告があつた。今はこつちに帰ってくる途中だよ」

安心させるように述べる。それを聞いて芳佳たちは安心するのだった。

「早く帰ってくるといいですね」

「そうだね」

「ですわね」

「このネウロイの戦争で、悲しむ人を増やしてはいけない…」

三人は微笑んでそう言うと、亜弥は拳を握りしめながら呟いた。

「さっさと寝な、明日は朝から修行だよ！」

少し顔を赤くし家に戻るのだった。そして四人はその姿を見てさらに微笑むのであった。

翌日、四人は昨日と同じ水汲みをしていた。バランスよく、そして順調に飛んでいた。昨日とは違い今日はバケツではなく四人で大きなたらいをつるす感じで運んでいた。

「初めからこうすればよかったね」

「うん、これこそチームワーク！」

「亜弥ちゃん、今日こそ風呂を一杯にしようね。ステラさんも水汲みしてるんだから。私たちも頑張らないとねリーネちゃん」

「うん、そうだね今夜は肩までつかりたいね。ね、ペリーヌさん」

「え？私はどちらでもいいんですけど」

四人は話し合っていると

「ん？」

ペリーヌが遠くに何か光るものを見つけた。

「何あれ……？」

その光は少しずつ大きくなり、やがて金属体の反射光である事が確認できた。
この周辺は民間機や軍用機が飛べる空域ではなく、正体は限られる

「まさかアレは……」

「ネウロイ!？」

501 基地

「観測班からの報告では、ネウロイは出現場所のベネツィアからアドリア海沿岸をバリー方向にまっすぐに移動しているわ」

「直線的にしか移動しないねネウロイか…」

ミーナと美緒が地図を見ながらネウロイの進路を見ていた。
そして美緒は定規で線を引き進路を書く

「ええ、本部によれば武力偵察らしいわ。調べたところ数は大型が1機と護衛の小型が4機らしいわ」

「さすがネウロイ…とすると迎撃地点は海上だな」

「それまでは陸地を少し掠るだけ。上陸はしなさそうね」

「これなら緊急出動は必要ないか…いや」

美緒はあることを悟り、ネウロイ予想進路線を引きいたところをよく見る。するとその
予測進路は小さな小島を通過する進路だった。

「()は…!?!」

「まずい！」

その場所は今、芳佳たち5人が修行をしているあの島だったのだった。

「アンナさん大変です！ネウロイがこつちに來ます!!」

「今、アンタ達の基地から連絡があつたよ」

「誰か出撃してくれたんですか？」

「……基地からの部隊は、今から出撃しても間に合わないそうだ。この家は、諦めるしかないね……」

悲しそうな顔でそう呟く。

「そ、そんな……」

そうしている間にもネウロイはこの島に近づきつつある。

芳佳たちは森の外でその様子を見ていた。数は5機、そのうち一機は大型の輸送機型、小型機は4機の護衛。

「まっすぐこつちに来ている…」

「このままじゃ、島も橋も！」

「確実にやられますわね」

三人がそう話していると

「アンタ達、何してるんだい！さっさと逃げるんだよ！」

アンナは芳佳たちに激を飛ばした。

「ここを見捨てるなんて出来ません！」

「家族が帰ってくる家なんですよね？」

「それに、この橋が無くなってしまうえば、お孫さん達が帰ってきた時の目印が無くなってしまうすわ！」

「そう、家族を悲しむ顔は見たくない!!」

四人はそう呟きながらストライカーユニットを履き、武装を整えていた。

「あ、
アンタ達……」

「それに4人協力してやればできます！」

「いいえ、5人よ」

[[[!?!]]]

「す、ステラさん!？」

4人のウィッチが振り返るとそこにステラがいた。

ムスタングのユニットを履き、重機関銃を右手に、左手にM―1カービンを担いだ状態で立っていた。

「あたしも出撃するわ。この家にはアンナさんの家族が帰る場所だし、それにアンナさんには恩があるしね!」

彼女は微笑み、そして五人は出撃し、島に向かうネウロイ五機を迎撃しに向かった。

「ステラさん、飛べたんですね」

「ええ、半年間。くそば…アンナさんに、ウィッチの基礎である筈から教えてもらったから!」

ステラはこの魔女の世界に来て半年間、アンナにストライカーの飛び方や基礎である

箒の飛び方をみっちり仕込まれていたのだった。

「今までの修行の成果、見せつけてやるわ!!」

「はい!!」

5人は話していると。ネウロイの姿が見えたのだった。

「見えた! 芳佳とリーネ、ペリーヌはあの大型機に攻撃、亜弥ちゃんはあたしとあの小型を相手するわ!」

「うん、ステラさん!」

「え!? だ、大丈夫なんですか!? 亜弥ちゃんと一人で二機相手にするのは…」

「大丈夫よ、何度も言う様に、あたしはあの空で戦ってきたからね…」

ギユイイイイン 「おつと…墜ちろ、黒い化け物!!」 ダダダダダダ ドカアアン

小型ネウロイ2機が放つビームを回避、シールドを晒しながら得意の一撃離脱戦法で瞬時に2機撃墜した。

即座にペアを務めた亜弥は目を見開いた。

「(ステラさん…凄い…) きやつ…このおおーっ!!」

ダダダダダダ ドカアアン

「やった…」

「亜弥ちゃん、やるねえ!!」

亜弥も九九式機銃で小型ネウロイを撃墜、それを目の当たりにしたステラも驚愕した。

そして、三人は輸送機型に接近し輸送機型は放つビームを次々と避ける。そして三人は急降下して敵の腹に潜り込むネウロイもこれ以上近づけさせまいとビームを放つが三人はビームをよけて機銃を撃ちまくる。

「み、みんなの動きが見える！」

「ビームを躲けますわ！」

「箒のおかげだよ！」

あの特訓の成果が出たのか三人の息はぴったりと合い、まさに三位一体となって攻撃しそして三人が力を合わせた結果。

輸送機型ネウロイの装甲が大きくはがれそこから赤く光る球体。コアが見えたのだった。

「コアが見えた!!」

しかしネウロイは再生し、コアを守ろうとし始める。

「もう、再生が始まってますわ！」

「早くコアを壊さないと！」

「私がやります！」

リーネが対装甲ライフルを撃つも弾丸はコアとはほんのわずかに右にそれてしまい、やがて、傷を再生させたネウロイがビームを放つ。

「危ない！リーネちゃん!!」

芳佳がそう叫んだ瞬間一筋のビームが左側のストライカーユニットの先端を斬り裂いた。

「きやあああ——!!」

制御バランスを失いリーネは落下するが

「リーネちゃん！」

芳佳が全速力で急降下してリーネを海面すれすれで受け止め肩車状態になっていた。

「私のシールドでぎりぎりまで近づくから、リーネちゃんはコアを狙って！」

「了解！」

二人はぎりぎりまで輸送機型に近づこうとしたが、しかし、一機の小型ネウロイが二人に襲い掛かろうとした。

「!?」

小型がビームを放った瞬間

ダダダダダダ　ドカアアン

機関銃の音が鳴り響き、小型ネウロイは粉々に砕け散る。そして上からは

「お姉ちゃん！」

「大丈夫！二人とも!？」

「ステラさん！亜弥ちゃん！」

ステラと亜弥が二人に近づいて無事かどうか訊く。そう、あの銃撃は二人が撃つたのだった。

「はい。大丈夫です！」

「そう、小型の奴はさっきので全部始末したわ。あとはあのデカブツだけよ！」

「は、はい！」

「もうすぐ島ですわ！急いで！援護しますわ！」

「あたしも！」

「私もよ！」

ペリーヌとステラ、亜弥は同時射撃でネウロイの装甲をはがす。そしてネウロイの装甲が崩れそこからコアが見えた。

「今ですわ！」

「リーネちゃん！」

「はい！」

リーネは対戦車ライフルの引き金を引く。

放たれた弾丸は寸分の狂いもなくコアを砕き、輸送機型は白い破片へとなり粉々に砕け散った。

その様子をアンナは見ており、驚いたように啞然としていた。そしてその顔も笑顔になった。

「…ふつ、4人…いや、5人とも合格だよ」

そのころ上空では魔女たちが喜びあっていた

「やりましたわ!!」

「やった!やったよリーネちゃん!!」

「うん!アンナさんの家も橋も守れたね!」

「やったね芳佳お姉ちゃん、リーネお姉ちゃん、ペリーヌさん、ステラさん！」

4人は喜んで、ステラは背筋を伸ばした。

「ふう…久しぶりにシンガポール以来暴れた！」

肩をたたきながらそう唱えた

「あ、あのステラさん！」

芳佳がステラに問いかけた。

「ん？なに？」

ステラがそう気づいて言うのとペリーヌが寄ってきた。

「あなたは一体何者なんですか？」

ペリーヌの質問を訊く。

「あたし？あたしはね、アメリカ陸軍中尉、ステラ・A・エヴァンス。」

501 基地

「坂本です。この度はお世話になりました。」

執務室で、坂本美緒は4人が合格したことを知ると、電話でアンナに礼を伝えていた。
『うん！全然大変じゃなかったよ！誰かさんと違って、ベッドで泣いたりしなかった

しねえ、へっへっへ！』

アンナは笑って電話をしていると、彼女の孫がソファをジャンプしたり、走り回って
いて彼女の娘が自分の娘に注意していた。

「（…クソババア）」

一方、美緒は眉間に少ししわを寄せて心の中で悪態に着いていた。

「私は泣いてなどいませんよ！はっはっはっはっはっは！！」

美緒は笑って誤魔化していた。すると

『静かにおし！聞こえないよ!!』

受話器からアンナの叱り声が聞こえた

『まあ、とにかくあれだね。』

「はい」

『なかなか見込みがあるよ、あの子達は』

その言葉を聞き美緒は嬉しそうに微笑んだ。

「私もそう思います」

修行を終えた芳佳、リーネ、ペリーヌ、亜弥の4人は一緒のベットですやすやすと眠っているのだった。

「陸軍中尉、ステラ・A・エヴァンス。ただいま戻りました！」

ステラは504の司令であり、隊長のフェデリカ・N・ドツリオ少佐に帰隊を報告した。

「お帰りなさいステラ中尉。この通り部隊はダメージを受け、以前の基地はネウロイの襲来により半壊」

「はい、馴染みのウィッチの大半が入院しているのが……とても残念です……」

「おまけに補給も期待できず資金は不足……」

「……不足……」

ウィッチの大半が入院し、さらに資金が不足の言葉を聞いて気まずい状況下に置かれていた。

「復歸したばかりのステラ中尉に、任務をお願いするわ」

「任務…どんな任務を…？」

「ふふふそれはね、504部隊によるセクシーカレンダーを制作!!それを販売することにより資金調達!!これね!!」

「うう…了解です…!」

「なら、早速…」

フェデリカの背後に、黒いオーラを漂う竹井醇子大尉が赴き、妖艶な行動を阻止した。

「お帰りなさい、ステラ。明日から任務が始まるから、今日はゆっくり休んでね」

「竹井大尉…了解です!」

半年の修行を終えたステラ・A・エヴァンスは第504統合戦闘航空団に復帰、バツキー・S・五十嵐と赤ズボン隊と共にロマーニヤの空を掛けるのであった。

第46話 陰悪なジェット

ロマーニヤ基地

桜井洋介と娘の亜弥が自身のユニットを整備しに、熱気が籠る格納庫に赴いた時。

「……いいか、整備兵の整備だけではなく、最終的にパイロットの点検も…」

「…それでもカールスラント軍人か！」

「え？そうだけど？」

「あっはははははは！」

格納庫内部で下着同然のシャーリーとエーリカ、天井付近で寝込むルツキーニを律儀なトウルーデが規律を述べる。

トウルーデは当たり前だといった様子で述べ、彼女はそんなエーリカを睨む。その様子を見て、シャーリーは大声で笑うのだった。

「暑いな…」

その時、洋介と亜弥も格納庫に入ってくる。

彼らは格好はまでもであるが、格納庫内にこもった熱にうんざりとした様子、零式ユニットの前に上着を脱ぎ置いて、整備を始めた。

トウルーデは丁度いいといった様子で、洋介に言う。

「桜井！」

「ん？」

「こいつらにも何か言ってやってくれ。隊の規律が乱れて仕方がない」

そう言つて、シャーリー達の方を見るトゥルーデ、それにつられて洋介も見ると、赤面しながら納得をした様子だった。

「う…／＼暑いから服を脱いだ…つてことかシャーリー？」

「おう洋介、この堅物軍人に何か言つてやれ。この暑さで服なんか着てたら、それでこそいざというときに動けなくなる」

「規律を守れと言つてゐるんだ！もしこの時にネウロイが来たらどうするつもりだ？」

シャーリーとトゥルーデはヒートアップしていく。

その様子を、洋介は「またか…」といった様子で見ることしかできなかった。

「ねえ…お父さん…あの二人…」

「ん…この格納庫でムシャクシャする暑さだ、僕は2年、南方のラバウルとフィリピンで

そんな奴らがいたもんだ……」

どちらの言うことも正しいから、彼はこの場合は時の流れに任せることにした。

その時、格納庫の入り口から数名の兵士たちが入って来る。彼らは何か荷物を持ってきた様子で運んでいる。それと同時に、ミーナと美緒も入って来る。

そして、兵士たちの運んできたものは、ユニットの固定台に乗っていた。

「ほう……これがカールスラントの最新型か」

「正確には試作機ね」

美緒はそこに固定されたユニットを見て眩き、ミーナが捕捉する。

そこには、全体を赤く塗られたユニットがあつた。

そして、ミーナは手元の資料を読みながら続けて説明した。

「Me262V1、ジェットストライカーよ」

「ジェット?」

「ハルトマン中尉」

「どうしたんだ? その恰好」

ジェットという言葉に、エーリカが反応する。しかし、ミーナと美緒はエーリカの格好を見て驚く。

「こら、ハルトマン! 服を着ろ服を…ん?」

トウルーデがエーリカに注意をするがトウルーデも目の前に固定されたジェットストライカーに気づく。

「なんだこれは?」

「ジェットストライカーだって」

「ジェット!?! 研究中だったあれか!?!」

エーリカの説明に、トゥルーデは思い当たるものがあるようで反応した。洋介もユニットを見る。

「ジェットか…終戦前の帝都防空で橘花を思い出すな…」

「橘花…?」

ユニットは、通常エンジンのある位置とは違い、翼の部分に魔導ジェットエンジンが搭載されていた。

洋介がジェットに、思い当たることは、北海道の千歳基地に転属する以前、最後の帝都東京防空の任務に就いたことだ。

完成して間もない数機の橘花がすぐに戦場に導入され、帝都に侵入したアメリカ爆撃機B-29を撃墜した。

だが、その引き換えに燃料の消耗が激しく、滑空しながらの帰路の中で、P-51ム

スタングの餌食に過ぎない。

洋介は愛機零戦64型で幾つものムスタングを撃墜した。

「今朝、ノイエ・カールスラントから届いたの。エンジン出力はレシプロストライカーの数倍、最高速度は時速950キロ以上、とあるわ」

「950!? 凄いじゃないか!」

ミーナの説明に、シャーリーが反応した。950キロという速度は、今まで使われてきたレシプロストライカーでなかなか出すことのできなかった速度だ。

「んで、そつちのは何だ?」

洋介は横に並べてあるものが気になり聞く。そこには4つの大型機関砲と、戦車砲のようなものが置かれていた。

「ジェットストライカー専用に開発された武装よ。50ミリカノン砲一門、他に30ミ

リ機関砲四門

「凄い！」

「そんなに持つて、本当に飛べるのか？」

ミーナの説明にトゥルーデは目を輝かせるが、美緒はそんな武装を実際に持つていくのかと疑問に思う。

その時、シャーリーがジェットストライカーの前に立ちながらミーナに話しかけた。

「なあなあ！これあたしに履かせてくれよ！」

「いいや、私が履こう！」

しかし、そのシャーリーの言葉に待ったをかけたようにトゥルーデが言った。

「なんだよ、お前のじゃないだろ？」

「何を言っている、カールスラント製のこの機体は、私が履くべきだ」

「国なんか関係ないだろ。950キロだぞ？ 超音速の世界を知っているあたしが履くべきだ！」

「お前の頭の中はスピードのことしかないのか？」

シャーリーとトゥルーデの言い合いはヒートアップしていく。その様子を、ミーナたちは呆れたように見る。

「また始まったわ…」

「しょうもない奴だ…」

「喧嘩好きだね全く…」

それぞれが言う。しかし、ミーナは洋介に聞いた。

「桜井さんはどう?」

「え?」

「履いてみたいと思わないの? 一応前の世界でもジェット戦闘機を見たことがあるのでしょう?」

ミーナに聞かれる洋介だが、彼は特にジェットに対しての頓着が無かった。

「前の世界でもジェット戦闘機橘花と共に戦いましたが…それに、俺は愛機零式ストライカーのウィザード、そっちを放り出すわけにはいけませんから」

洋介は遠慮した。

その時、鉄骨の上で寝ていたルッキーニが飛び出した。

「いっちばーん！」

「あつ、おい！」

「ずるいぞルツキーニ！」

今まさに二人が取り合いをしていたジェットストライカーに足を入れた。

その様子にはシャーリーとトウルデーも驚くが、ルツキーニはそのまま魔道エンジンに魔法力を流し始めた。

「へへーん、早い者勝ちだもーん！」

そう言いながら、ユニットのエンジンは回転数を増していく。格納庫内に先ほど以上の轟音が響き渡るその様子を、全員が見守っていた。

「ぴぎゃー!?!」

しかし、突然ルツキーニが跳ね上がった。彼女はユニットから足を離すと、そのまま固定台に体をぶつける。

しかし、ルツキーニはそんな事を気にしていないのか、突然なりふり構わず走り出した。そして、ルツキーニはシャーリーのユニットの固定台の裏に隠れる。

「ルツキーニ!? どうしたんだよ?」

シャーリーがルツキーニの下に行くと、ルツキーニは震えていた。

「なんかビビビッて来た!」

「ビビビ?」

「あれ嫌い…シャーリー、履かないで…」

そう言って、ルツキーニはシャーリーを見る。シャーリーはルツキーニが怯えながら

目で何かを訴えかけているように見えた。

「やっぱあたしはパスするよ」

「何？」

「考えてみたら、まだレシプロでやり残したことがあるしさ。ジェットを履くのはそれからでも遅くはないさ」

「フツ、怖気づいたな。まあ見ていろ…」

シャーリーの言葉にトゥルーデが自慢げに言う。

「私が履く」

そして、トゥルーデはジェットストライカーに足を入れた。そして、魔法力を流し始める。

「凄い…」

一瞬にして、トウルーデはジェットストライカーの力を感じる。けたたましい音の中に感じる不思議なエネルギーは、彼女を納得させるに十分だった。

その様子を格納庫に居たものが全員見るが、ルツキーニだけが嫌そうに見ていた。そして、トウルーデは言った。

「どうだ？今までのレシプロストライカーでこいつに勝てると思うか？」

「なんだと!？」

トウルーデの煽りにシャーリーが反応する。

「みなさん！こんなところに居たんですか…あれ？」

「朝ごはんの支度が出来ましたよ……?」

朝食の支度を終えた芳佳とリーネがやって来る。しかし、どうも様子がおかしいということに二人は気づく。

「いい年してはしやぐなよ。新しいおもちゃを買ってもらった子供みたいぞ」

「負け惜しみか? みつともないぞ」

「気が変わったただけだ。あたしはこれでいいんだよ」

「勝手気ままなりべリアンめ!」

「なんだと!? この堅物軍人バカ!」

その間にも、シャーリーとトゥルーデの言い合いはヒートアップしていく。

「…なんだ…このジェットの違いは…？」

この場をどうにかして押さええないといけないと思いつつも、洋介はジェットストライカーにある違和感を感じた。

格納庫 昼食時

「芋いただきー！」

「あっ!？」

「ふふふん勝った勝った♪」

格納庫でトゥルーデとシャーリーが間食をとっていた。

食堂はまだできてなく、そこで食事をする事になっていたのだった。

そしてその中でシャーリーはトゥルーデがとうとうとしていた蒸かしたジャガイモを取って得意げな顔をしていた。

「ふっ…負けた腹いせか？みつともないぞ大尉」

トウルーデが呆れた顔で呟く。

事の発端は今朝のジェットストライカーのことで、あのストライカーを履いてトウルーデはシャーリーと高度上昇対決で勝って今に至る。

「はあゝ美味しい」

「シャーリー、次は頑張ってね！」

「おう任せとけって」

シャーリーはジャガイモを頬張りながら食べてルツキーニと話す。

「あ、洋介さん、亜弥ちゃんも芋どうですか？」

芳佳は洋介と亜弥に蒸し芋が盛られた皿を渡す。

「ああ、ありがとうございます芳佳」

「ありがとうございます、お姉ちゃん」

亜弥は芋を手にして呟いた。

「お父さんも、あのP-51と戦ったことあるの…?」

「ん…もちろんだ…硫黄島から飛来したP-51と戦った…だが、その時の敵機どもはおぞましいことをやっていたからな…」

「おぞましい…?」

洋介はこれ以上亜弥に喋ることは出来なかった。

3月6日以来、本土防空にてアメリカ軍P-51ムスタングが飛来した。

だが、戦争末期になるとムスタングは軍機体、軍用施設のみならず、漁船や家屋、地上に動く物があれば列車と民間人を襲撃した。

当時、洋介の故郷である神戸にP-51ムスタングが襲来、武器を持たない民間人に機銃を掃射。

「なっ民間人が…野郎っ!!」 ギュイイイン

ダダダダダダダダッ ドカアアン

その光景を目の当たりにし、零戦64型に搭乗した洋介は怒り、民間人を殺傷したムスタングを撃墜した。

「…はあ…ザマア見ろっ!」

終戦になつては、その復讐心で洋介は相手は血の通った人間であつたことにも関わらず、心から悔やんだ。

軽い食事が終わった後今度は搭載量勝負となった。シャーリーはユニットを履きそして腰や方には弾薬箱をわんさか搭載していた

「そんなにいっぱい持つて飛べるんですか？」

芳佳が心配そうにシャーリーに訊くと

「あたしのP-51は万能ユニットだからな。だから、いざとなればどんな状況にでも対応できるんだ」

そこへ、ペリーヌがやってきた。

「今度はなんですか？」

「今度は搭載量勝負だそうです。重いものをどれだけ持てるかって」

リーネがペリーヌい説明するが

「それよりシャーリーさんは胸の搭載量を減らしたほうがよろしくて？」

皮肉たっぷりにそう言いリーネは少し自分の胸を見る。その際に芳佳は彼女の胸をじつと変な目で見ていた。

「待たせたな」

トウルーデがジェットストライカーを履いてやってきた。

両手には二連装の30ミリ機関砲に肩にはその弾薬ベルトそして極めつけは背中に50ミリカノン砲を背負っていた。

「だ、大丈夫ですか。バルクホルンさん!？」

芳佳が驚いてそう言う。

洋介も驚き、無論みんなも

「おいおい…そんなんで飛べるわけないだろう？」

無論シャーリーも、だが

「う、うそだろ？」

結果は飛べた。凄い高速でシャーリーを追い越しはるか先にある気球の的を30ミリ機関砲で全部破壊した。

「(すごい…すごいぞこのストライカーは！)」

トウルルーデは嬉しそうに空を飛びそれを見たシャーリーは

「ま、マジかよ…」

あんぐりと口を開き驚いていた。

滑走路で見物する親子は驚愕していた。

「すごい…あんな重武装であんな速度で飛べるとはな…」

「ねえ、お父さん…」

「ん…?…」

「お父さんは、なんでジェット機部隊に入らなかったの?」

「ん…? そうだな……」

亜弥の質問に洋介は頭に両手を乗せた。

洋介と亜弥はトゥルーデとシャーリーが飛ぶ空を見上げるのだった。

「今日の夕食は肉じゃがですよー！」

夕方みんなが格納庫に集まり夕食を囲んだ。今夜の献立は肉じゃが。

「おっ!?!肉じゃががく久しぶりに食べるな〜！」

「あれ？洋介さんの世界の扶桑…日本にも肉ジャガがあるんですか？と、言うことは扶桑と日本は同じような所なんですね！」

「ああ、俺は一旦扶桑に行ったが、基本的に同じだったな」

洋介が扶桑皇国に立ち寄った時、予科練習生時代の横須賀や、空襲に焼かれる前の神戸と広島に関しての懐かしい光景であつた。

一部の歴史と未来を除いてだ。

「私は料理のことはわからないけど宮藤の作る料理は何でも美味しいな。あ、これ魚の出汁か？」

「はい。鰹です。ありがとうございます。えへへ」

シャーリーが笑顔でただ幸せそうな顔でそう言い、芳佳も自分の作った料理が美味しいと言われて嬉しいのか嬉しそうに笑う。

「それにしても、どうしてこんな油臭いところで食事することになるのかしら？」

「食べながら文句言うナ」

エイラの隣に座るサーニヤは

「美味しい…」

満足げに食べていた。

「芳佳ちゃん、バルクホルンさんとシャーリーさんのことが心配なんですよ」

「うん、私にできることはこのぐらいだから。ほらお腹がすくと怒りっぽくなるって言うじゃないですか」

「そうでしたっけ？」

「あれ、そう言えばバルクホルンさんは？」

芳佳の言葉にペリーヌが首をかしげる。

すると芳佳がトゥルーデを探す。彼女の姿が見当たらないと思うと、洋介があたりを

見渡すとストライカー発進装置によりかかるように座っていた。
すると亜弥はトゥルーデの傍に近づいた。

「ねえお姉さん、大丈夫？ 具合でも悪いの？」

「い、いいや…具合は悪くないよ亜弥…心配するな…」

元氣のない声で返事する。すると芳佳はご飯を置いたお膳を持ってきた
「あ、あの…バルクホルンさんもお疲れなんじゃないですか？」

芳佳がそう言うのとトゥルーデは顔をあげた。

「ああ……多分そうかもしれない。そこに置いてくれないか。少し休んでから食べるから…」

やつれた顔でそう言うトゥルーデだった。

「お姉さん…」

「…」

あのユニットが原因なのか、洋介トウルーデの履いていたジェットストライカーを見るのだった。

あれから翌日基地滑走路先端、上空では昨日と同じく、シャーリーとトウルーデがP-51と試作のジェットストライカーMe262を繰り広げている。
今回の課題はスピード勝負であった。

「よーいつ……ドーンッ！」

ルツキーニが旗をふり、スピード勝負が始まった。そしてシャーリーは全速力で飛ばす

「どっちが勝つと思う？ お父さん？あ…」

「……」

亜弥が洋介の隣で質問するが、彼の顔はやや険しくなっていた。

「なんで…？」

シャーリーはとつくにスタートしているのに、トゥルーデはスタート位置から動いていなかった。

「あれ？バルクホルン、ドーンッ！だってば、ドーンッ！」

ルッキーニが旗をぶんぶん振ってるが一向に動かない、するとトゥルーデのジェットストライカーが急激に轟音をだしそして

「うにやあつ！」

トウルーデが急発進し、その衝撃波でルツキーニが流される

「……はやっ！」

「すげえ……」

静止していたのは、暖機のためか、ハンデなのか、トウルーデはあつという間にシャーリーを追い越してしまった

「スピード勝負もバルクホルンの勝ちだな」

「ああ……ストライカーもレシプロからジェットへ世代交代の時代に………ん？」

すると、いきなりまっすぐ飛んでいたトウルーデのジェットストライカーの軌道が突如乱れた。

瞬時に悪い予感がし、洋介は格納庫に向かうべく走りだそうとした。

「まずい！」

「どこに行くんだ桜井!？」

「ストライカーを履きに…っ!？」

するとトゥルーデは落下し始め、そのまま海面にたたきつけられてしまうのだが、ストライカーを履きに行っても間に合わない、洋介がそう思っている時―

「お姉ちゃんっ!!」

「あ、亜弥!？」

瞬時に亜弥は零式ストライカーを履き、滑走路から飛び立ち、ジェットストライカーを凌ぐ速度で、亜弥はトゥルーデに向かって飛行した。

「間に合ええーっ!!」

なんとか亜弥は、海面スレスレのところでトゥルーデを捕まえ、上昇する。

「よかった…だけど…」

「……」

亜弥はトゥルーデの耳からインカムをとり、自分の耳に付ける。

「お父さん、お姉ちゃんを無事に捕まえました!!」

『ありがとう亜弥、大尉は…トゥルーデは!?!』

「お父さん、トゥルーデ姉さんは大丈夫です!ただ気を失っているだけです。でも…」

亜弥はトゥルーデの顔を見る。

「…お姉ちゃん…」

「亜弥！」

「シャーリーさん！」

「あとはあたしに任せな！」

心配しながら今にも泣きそうな声で呟く亜弥、そしてシャーリーが合流、トゥルーデを背負い医務室へと運んだのだった。

「……」

洋介は医務室に運ばれたトゥルーデを見て思い出した。

あの戦時下、ラバウル六勇士の厚木十三と沖田新一郎と近所幸吉、大賀虎雄。

弟の桜井勇介と大賀晴香を亡くし、辛いことを味わいたくなかった。洋介自身やそして、姉を慕う亜弥のために。

「トウルーデ、無事でいてくれ…」

「バルクホルンさん…」

「お父さん…」

洋介を見て芳佳と亜弥も心配そうに医務室を見るのだった。

第47話 二人の絆

501基地 医務室

「…ん…ここは…」

「あ、起きた」

トウルーデが墜落した翌日の朝。

彼女が目を覚まし最初に見た光景はみんなの心配そうな顔だった。

「…どうしたみんな？私の顔に、何かついているのか？」

「バルクホルンさん！よかった…」

芳佳が安心したように述べ

「お姉さんっ!!」

亜弥がトウルーデに抱き着き彼女は顔を赤くする。

「うおい! あ、亜弥!? ちょっと、抱きつくな! //」

「トウルーデ海に落っこつたんだよ。覚えてない?」

「私が…落ちただと!」

エーリカの言葉にトウルーデは信じられないという顔をする。

「ああ、正確には、落ちかけた。海面スレスレのところで亜弥が助けたんだ」

「あ、亜弥が…」

洋介の言葉にトゥルーデは亜弥を見る。亜弥の目には涙が貯まっていた

「飛行中に魔法力を使い果たして、落ちたのよ。トゥルーデ、あなた覚えてない？」

「馬鹿な！私がそんな初歩的なミスをするはずがない！」

「…お姉さんは悪くない……」

「は？」

亜弥がトゥルーデにそう呟くと、彼女は目を丸くする。

「おそらく原因はあのジェットストライカーだ。…あの時、俺はあのジェットエンジン
の音に違和感を感じていたんだ。こんなことになるなら無理にでも止めれば…」

洋介がそう呟く

「桜井…お前のせいじゃない。試作機に問題は付き物だ。あのストライカーは素晴らしい。早く実戦化するために、まだまだテストを続けなければ…」

トゥルーデは手を握りしめ、決意を固める。すると亜弥が彼女の手を握る。

「だめ、あれは危ない！あれに乗っちゃダメだよお姉さん!!」

「あ、亜弥…」

亜弥の言葉にトゥルーデを含め、みんなが驚く。

「亜弥ちゃんの言う通りよ。あなたの身を危険な目にさらすわけにはいかないわ。バルクホルン大尉、あなたには当分の間、飛行停止と自室待機を命じます」

「ミーナ…っ!」

「これは命令です」

「……………了解」

上官であり親友である彼女ににそう言われたトウルーデは、どこか納得していないような顔をしていたが、命令ということで承諾する。

「原時刻をもって、ジェットストライカーの使用を禁止します！」

格納庫

洋介はストライカーラックにジェットストライカーが鎖に巻かれ、封じられている光景を目の当たりにした。

「……………野上さん…小泉博士…ジェットは何のために開発したんですかね…」

洋介はジェットストライカーを撫でながら、かつての特攻機『桜花』で戦死したパイロットと、厚木基地で『橘花』を開発する技術者の名前を呟いた。

トウルーデは体力と意識が回復した後一週間の自室待機を命じられた。だが

「ふんっ……ふんっ……ふぬっ……」

「あの、バルクホルンさん……」

「何、やってるんですか？」

食事を運びに来た芳佳とリーネが見たのは、部屋の梁に手を掛け、片手懸垂をしているトウルーデの姿だった。

「トレーニングだ……フンッ……私が落ちたのは、ジェットストライカーのせいではない、私の力が、足りなかったからだ……」

「へ？またあれで飛ぶつもりですか!？」

「当然だ。あのストライカーを使いこなすことができれば、戦局は変わる…フンツ」

トウルーデはそう言いながら懸垂を続ける。
すると

「無駄だ、あきらめろ」

「シャーリーさん！亜弥ちゃんも!？」

「お姉さん…」

「…」

「私を笑いに來たのか、リベリアン？魔法力切れで墜落など、まるで新兵だからな…」

「お姉さん…あのストライカーは、危険…」

「危険だと？亜弥。戦場って言うのは常に危険なものだ。実戦が浅いお前にはまだわからないと思うけど…」

「う…」

トウルーデにそう述べられ、亜弥は落ち込む。するとシャーリーは

「亜弥の言うとおりだ。あのストライカーはマジでやばいんだ。飛べなくなるだけじゃすまないぞ」

「ジェットストライカーの戦闘能力の高さは、お前も十分分かっているはずだ。このくらい危険など…」

トウルーデはそう呟くと、シャーリーは険しい顔をする。

「だったら死んでも良いのか!？」

「え!？」

あまりの厳しく重い言葉に芳佳とリーネは驚く。

「私は、もつと強くならねばならないんだ…フンツ…」

「この分からず屋!」

何を言っても聞かないトゥルーデにシャーリーがそう怒鳴ると、敵の襲撃を知らせる警報が基地内に響き渡る。

「あ、ネウロイだ」

部屋の片方のゴミ山から、下着姿のエーリカが現れる。

「ハルトマンさん！」

「居たんですか!？」

「うん……お先！」

軍服の上着を羽織り、ハンガーへ向かう。そしてシャーリーは無言で出て行った。

「あ、ちよつとシャーリーさん！」

「芳佳ちゃん、亜弥ちゃん！私たちは司令室で待機だよ！」

「はい！芳佳お姉ちゃん、リーネお姉ちゃん、先に行つて下さい！」

芳佳とリーネが出て行き、部屋に戻った亜弥が言った。

「お姉さん、私はお姉さんには死んでほしくない！……それに…」

「なんだ？」

「あなたは、お父さんとの約束をここで破る気？」

「っ!？」

トゥルーデは彼女のその言葉を聞いて驚く

「わたしが言いたいのは、それだけだから…」

亜弥は部屋を出たのだった。

「…」

懸垂を止め、床に下り一人残されたトゥルーデは先ほどの亜弥の言葉を思い出していた。

洋介とトゥルーデが戦友になった。あの夜の約束を

「私だつて分かっている……魅せられたんだ、あのジェットのパフォーマンスに……人間、一度上がる
と下がれない、というのはこのことか……私はどうすれば……」

トゥルーデはそう悩む。その時

「隙あーり！」

「うひゃあ!？」

背後に突然エーリカが現れ、彼女の耳に何か付けた。

「忘れ物だよ、にやははー！」

そう言いエーリカは部屋を出るのだった。

「……インカム」

一方、司令室では

「目標はローマ方面へ目指して南下中。ただし徐々に加速している模様……」

『こちらも補足した…はっ!？』

「どうしたの美緒？」

ミーナがレーダーを見ると、一つだった点が五つに分裂した

「なっ!? 分裂した!」

「ミーナ隊長、敵状況は!?!」

ミーナがそう言った時、指令室で待機していた洋介が入って来た。

「敵は高速型。敵が分裂、散開して今美緒たちが迎撃に当たっているわ!」

その様子を見て、美緒たちは苦戦し、基地に連絡する。

『こちら坂本、シャーリーが苦戦してるようだがこちらも手が足りない。至急増援を頼む!』

「了解! リーネさん! 宮藤さん! 亜弥さん!」

『了解!』

連絡を受けたミーナは、後ろに立つ芳佳とリーネ、亜弥を呼ぶ。3人は無線で聞いていたため、用件はすぐ理解していたので返事をする。

すると洋介も立ち合った。

「ミーナ隊長、俺も行きます!!」

「桜井さん!？」

「一人でも多く迎撃に向かい、少なくともペアで共同しなければならぬ!!」

「…わかりました、許可します!」

「了解!!」

洋介の零式はシャーリーのP-51ユニットに匹敵する速度を持っていた。

そして、洋介と芳佳、亜弥とリーネは格納庫に向かってユニットを履き、魔法力を流す。その時だった。

「え？バルクホルンさん!？」

四人の目の前に突然、トウルーデが現れた。

彼女は飛行禁止を受けて自室待機を命じられていた。

「お前たちの足では間に合わん！」

しかし、彼女は四人に言うのと、走り出し、向かった先にあつたのは、鎖で縛られて使用禁止にされたジェットストライカーMe262があつた。

トウルーデはその鎖を掴むと、『怪力』を使って鎖を引きちぎった。

そして、解放されたジェットストライカーに足を入れると、魔法力を流す。

「命令違反です、大尉！」

「今あいつを助けるには、これしか無いんだ！」

リーネが懸命にトゥルーデを止める、しかし彼女は止まらなかった。

エーリカにインカムを渡されて聞いていた彼女は、戦場で苦戦するシャーリーの声を聞き、急いで向かおうとしたのだ。

「でも、まだ体力がつきやあ!？」

芳佳求めにかかるが、トゥルーデは50ミリカノン砲を手にとると緊急発進した。

『トゥルーデ!？』

「すまんミーナ、罰は後で受ける。今は…」

その様子を見ていたミーナは無線でトゥルーデに呼びかける。しかしトゥルーデは

ミーナに謝りながら突き進んでいく。

『5分だ!』

その時、無線で新たな声ができる。それは洋介だった。

『5分以内にケリをつけろ…必ず生還するんだぞ!』

「フツ…5分で十分!」

トウルルーデが洋介に返信する。

「生きて帰ってね! 妹さんのためにも!」

「ああ。私のもう一人の妹、亜弥の為にもな!」

その言葉を聞き彼女は微かに笑うと、全速力でシャーリーのところに向かった。

その頃シャーリーは、ネウロイの速さに苦戦をしながらも、その後ろを取っていた。

「そこだ！」

シャーリーはチャンスを作りだし、そして引き金を引く。

しかし、BARから弾は撃ちだされなかった。シャーリーの機関銃が弾詰まりを起こしたのだ。

「ジャムった!？」

シャーリーは思わず驚く。

その一瞬の隙を突き、ネウロイは更に二つに分かれる。そして、二つに分かれた個体はシャーリーを挟み撃ちにした。

「やばい、挟まれた……！」

シャーリーはもう体力的にもかなり来ていた。たとえ片方の攻撃を防いでも、もう片方が後ろから攻撃をしかねない。

万事休すと思われた次の瞬間、シャーリーの後方に居たネウロイが突然爆発した。

「えっ!？」

何事かと思ったシャーリーを見ると、トウルルーデが50ミリカノン砲を構えていた。彼女が放った弾丸が、シャーリーを挟撃していたネウロイを粉碎したのだ。

そしてトウルルーデは更にカノン砲を3発撃つ。

「バルクホルン!？」

シャーリーはトウルルーデが居ることに驚くが、バルクホルンの放った弾丸はシャーリーに向かって残ったネウロイに2発直撃。そして露出したコアに3発目が命中し、コアは粉碎される。

コアが破壊されたことにより、各場所に分散していたネウロイは全て光の破片に変わった。

「ジ…ジェットストライカーは使用禁止のはずでは…？」

「バルクホルンめ、無茶し寄って…」

「しっしっし」

ペリーヌは使用禁止になっているはずのジェットを使っているトゥルーデに驚くが、美緒は無茶をするトゥルーデに対して言った。

そして、エーリカは「やっぱりな」と言わん顔で笑っていた。

「やったぞバルクホルン…！おい？バルクホルン？」

シャーリーはネウロイを撃墜したトゥルーデの元へ向かおうとする。しかし、当の彼女は直進したまま振り返らない。

シャーリーはそんなトウルーデの違和感に気づく。

「…どうなってんだ？バルクホルンのスピードが落ちないぞ！」

「いかん！ジェットストライカーが暴走してるんだ！このままだと魔法力を吸い尽くされるぞ！」

美緒がトウルーデの身に起こっていることに気づいた。

なんとジェットストライカーの暴走が起きており、トウルーデの魔法力をポンプのよ
うに吸い尽くして言っていたのだ。

ウィッチの魔法力をすべて吸い尽くされては、二度と魔法を使う事が出来なくなつて
しまう可能性が高い。

『シャーリーさん！』

「了解！」

ミーナは切羽詰まった声でシャーリーのことを呼ぶ。シャーリーも、トゥルーデを止めようと返事をしながら向かっていく。

この状況下でトゥルーデを捕まえることができる可能性があるのは、最速のシャーリーだけだ。

シャーリーは懸命にトゥルーデについていく。

魔導エンジンを高速度で回しながらトゥルーデに迫る。しかし、ジェットストライカーの方が直線の伸びが違った。

シャーリーの最高速度を振り切る形で、トゥルーデの体は遠ざかっていく。

「くっそつたれええ!!!」

シャーリーは大声で嘆くと、ありつたけの力を振り絞ってフルパワーを出した。魔導エンジンが焼き切れんばかりに回り、シャーリーの速度はぐんぐんと加速する。その加速によって、シャーリーはソニックブームを出した。

シャーリーは音速の壁を超えてトゥルーデに迫ると、ついにトゥルーデの体を捕まえた。

「止まれえええー!!」

そしてシャーリーは、ジェットストライカーについていた緊急停止装置のレバーを引っ張ったが離れなかった。

「くそっ…レバーの故障か!？」

「ぐおおおーっ!!シャーリー!!トゥルーデをそのまま掴め!!」

「洋介!?!わかったっ!!」

零式で全速力で洋介が空域に到着。

四式小銃を構え、スコープを覗きながらトゥルーデのユニットを狙った。

「……すー……はー……（焦りは……禁物だ……）そこっ!!」

バアアアン バアアアン

洋介の射撃により、弾丸はジェットストライカーに命中。

すると、ユニットが黒煙を吐き出すと、トウルーデの足から離れたのだった。

離れたジェットストライカーは海面に水没していく。しかしシャーリーは、バルクホルンの体を懸命に抱きかかえた。

「はあ……んっ?」

シャーリーは止まったことに溜息を吐く。

その時、自分の胸に新たな感触を感じた。顔を下ろしてみると、トウルーデが気持ちよさそうにシャーリーの胸に顔を埋めていた。他の人から見て、先ほどまで自分のウィッチ生命が危ぶまれる状況にあったなどと誰が思うかというほどに、幸せそうだった。

「ああーっ!!それあたしの!」

ルツキーニがトゥルーデに指差して抗議するが、彼女は起きなかった。シャーリーはトゥルーデを抱えながら、そんなルツキーニの方を笑いながら見るのだった。

夕方、格納庫内

「寝ている間に一体何があっただ？」

「バラバラ…」

夜間哨戒に出ることになったエイラとサーニヤは、目の前でかろうじて原形をとどめていたジェットストライカーを見ながらそう零す。

その横には、砲身が折れて使い物にならなくなった50ミリカノン砲もあった。

「全く、人騒がせなストライカーでしたわね」

「ええ、それと使う人間もね」

ペリーヌが言った言葉に、ミーナは同調する。

そんなミーナの言葉に、罰としてジャガイモの皮むきをしていたトゥルルーデと洋介がドキリとした表情をする。

そんな様子を見てか、シャーリー助言する。

「おかげでネウロイを倒せたんだ、少しは大目に見てくれよ」

「規則は規則ですよ」

しかし、ミーナはそれでも許さない。今回ばかりはトゥルルーデの自業自得である。

「まあ、出撃したのは俺も非があるし、同じように罰を受けるとするか…」

「しかし、亜弥もなんで皮剥きを…？」

「うん、お父さんとお姉ちゃんがやるなら、亜弥もやります。連帯責任として」

「あ…亜弥…」

「しかし、バルクホルンが命令違反なんて初めてじゃないか？」

洋介はそう言つてトゥルーデの横に座りながら、ナイフを持ちながらジャガイモを手につけて手際よく皮むきを始めた。洋介も彼女に5分と述べ、彼も同罪と見てもよかった。

亜弥も以前、502で罰を受けた時に、父親の洋介も一緒に罰を受けた恩を返したのだった。

そして美緒はトゥルーデが命令違反をするなんて珍しいと言う。今までのトゥルー

デは違反無しの記録を作るほどの規則を守っていた人だ。だからこそ、彼女の違反を見た彼女たちは珍しいものを見たと言っている。

その時、美緒の横から声をする。

「皆さん、どうもお騒がせしました」

その声をして全員が顔をあげてみると、そこにはメガネを掛けたエーリカが居た。しかし、全員が全員疑問に思う。

「…何故、お前が謝る？」

「ハルトマンのせいじゃ無いだろ？」

「いえ、私は…」

美緒とシャーリーが言う通り、今回の件にハルトマンが謝る点はない。しかし、ハルトマンは何かを説明しようとしたが、格納庫の入口からした声に遮られた。

「みなさーん！お腹空いてませんか？」

「お芋がいっぱい届いていたから、色々作ってみましたよ」

リーネと芳佳がカートに沢山の料理を運びながらやって来る。そして芳佳は一人一人にフライドポテトを配っていく。

「はい、ハルトマンさんどうぞ！」

「いただきます」

「あれ？メガネなんてしてましたっけ？」

「はい、ずっと」

芳佳はエーリカにフライドポテトを渡す。エーリカもそれを受け取るが、彼女はエー

リカがメガネをかけていることに疑問に思う。

その時、芳佳の後ろから声がする。

「うわっ、美味しそう!」

「あつ、こつちのハルトマンさんもどうぞ…つて、え!」

後ろからエーリカが来たので、芳佳はフライドポテトを勧めた。

しかし、ここで全員が気付いた。

エーリカ・ハルトマンが二人いる。事情を知っているもの以外は、皆はまるでありえないものを見るような目で二人を見た。

「お久しぶりです、姉さま」

「あれ? ウルスラ?」

『姉さま!!?』

衝撃の発言に全員の言葉がシンクロする。何とメガネをかけたエーリカは、フライドポテトを食べているエーリカに姉さまと言ったのだ。

その様子を見て、ミーナが説明した。

「こちらはウルスラ・ハルトマン中尉、エーリカ・ハルトマン中尉の双子の妹さんよ」

『妹!?!』

「彼女はジェットストライカーの開発スタッフの一人なの」

『へ〜…』

ミーナの説明を受けて全員が驚き、そしてビックリしたように見る。双子だけに、

外見はメガネを覗いて完全にそっくりだった。

「双子か…そう言えば、トチローさんとトチコさんは、どうしているんだろう…元氣かな…？」

内心、洋介はあの世界に取り残された整備士の秋山敏郎と聡子の双子の兄妹を思いだした。

だが、洋介は知らなかった。終戦の翌年に、復員輸送艦『葛城』の飛行甲板にて、二人はフィリピン海に落下し、殉職した。

「バルクホルン大尉、この度はお騒がせしました。どうやらジェットストライカーには、致命的な欠陥があったようです」

「まあ、試作機にトラブルは付き物だ…気にするな。それより、壊してしまつてすまなかつたな…」

「いえ、大尉がご無事で何よりでした」

ウルスラが謝罪し、亜弥が頷く。

「……亜弥、お前にも心配かけたな。それに桜井にも…」

「えへへ…」

「まあ、でも無事でよかったよ」

「……………ふっ」

洋介がそう言うのとトウルーデは微笑み、そして亜弥の頭を優しく撫でる。

「…で、スクラップになったジェットはどうなるんです？」

「この子は、本国に持って帰ります」

「ずいぶん、思い入れがあるんですね…もしかしてそのために？」

「そのためにわざわざ来たのか？」

「ええ……代わりと言つてなんですが、お騒がせしたお詫びに、ジャガイモを置いていきます」

外を見ると、大量のジャガイモが入ったたくさんのコンテナがあつた。

「またこんなに……」

その様子を見たペリーヌはげんなりし

「しばらくは糧食の芋には困らん……」

「そうだね……」

そして、テーブルの上には芳佳たちが奮闘して作った料理が沢山並べられた。

『なっ!?!』

しかし、トウルーデとシャーリーがフライドポテトを取ろうとした時、丁度同じものを同時に取ってしまう。そして二人はいつものようににらみ合う。

「これは私のフライドポテトだ」

「リベリオンの食べ物はいらなとか言ってなかったか？」

「今は体力回復の為、エネルギー補給が最優先だ」

「素直に美味いって言え」

「まあまあだな」

二人はたった一つのフライドポテトを奪い合いながら言い合いをする。時にはその

ポテトが宙を舞ったりしている。洋介はその様子を見て溜息を一つ吐く。
芳佳たちも

「もう…沢山作つてあるのに、なんで取り合いになるんですか？」
と言った様子でそれを見ていた。

エーリカがフライドポテトを食べながら笑みを浮かべていた。
「いいのいいのあれで、ほっときなつて」

「そうだな、ケンカするほど仲が良いって言うな！」

洋介もフライドポテトを食べながら、初対面で喧嘩したラバウル時代を懐かしんだ。

第48話　ローマの休日　前編

早朝

洋介と亜弥の親娘が起床し、芳佳とリーネがエプロンを付け始めていたところだった。

「おはよう芳佳、リーネ」

「芳佳お姉ちゃん、リーネお姉ちゃん。おはようございます」

「あ、洋介さん、亜弥ちゃん。おはようございます。今からご飯を作りますからね」

洋介と亜弥が二人に挨拶すると、芳佳たちは笑顔でそう言い、二人は椅子に座る。そして芳佳はご飯を作ろうと米袋を持つ。

だが

「あれ？」

妙に米袋が軽い芳佳が米袋を逆さにし振ってみると、米粒が一つ落ちるのであった。

「ん？どうしたんだ芳佳」

「洋介さんお米が…」

「米？…あ、一粒しかない…」

「ほんとうだ…お米がないね…」

「どうしよう…まだどこからも補給来てないよ？」

亜弥と洋介が米袋を覗くとさっきの一粒以外に米は入ってなかった。するとそこへ美緒がやってきて、芳佳は美緒に気付き声をかけた。

「坂本さ〜ん！お米無くなっちゃいましたあ!!」

「え？一挙に全員集まるとは思わなかったしな…それは困った…」

それを聞いた美緒は困った顔をする。

「ということ、臨時補給を実施することになりました」

朝食の食堂で起きたことで、ミーナがそのことを聞き、臨時補給を行うことにしたのだ。

「大型トラックが運転できるシャーリーさんと、ロマーニヤの土地勘があるルツキーニさんはまず決定します」

「たまには基地の外に出たかったから、こんな任務は大歓迎だよ」

と、ミーナの指示で運転はシャーリーであり、ロマーニヤが故郷のルツキーニが街を案内する意味ではこれは当然だった。

シャーリーもその任務を喜んで受け、横にいるルツキーニは年相応に飛び跳ねてはしゃいでいた。

「他に、宮藤さんとリーネさんも同行します」

「あの…私はやっぱり待機で…」

さらにミーナは、街に送り出すメンバーとして芳佳とリーネを指名する。しかし、リーネはすこし言いずらそうにはあるが、手を上げて自分は待機をすると述べた。

芳佳はどうしてかと思い、ミーナはそれを了承した。

「わかりました。では、宮藤さんお願いね」

「ミーナ中佐、リーネが行かないなら俺が行きます。物資は重いので力仕事もありますから」

「いいわ。では、桜井さんお願いします」

「了解です、ですが…もう一つお願いがあります」

リーネの空いた枠に洋介が入る。そして、洋介が言った側で亜弥が洋介の手を繋いだ。

「止める理由はないわ、行つてらっしゃい亜弥さん」

ミーナがそう言っていると亜弥は笑顔を見せる。

「よかったな、亜弥」

「うん♪」

「洋介さん、亜弥ちゃんの仕草でわかるなんて…」

「さすがは、亜弥ちゃんのお父さんだね洋介さんは」

芳佳とリーネは小声で喋る時

「宮藤、亜弥。任務中は桜井かシャーリーの指示に従うようにな」

「はい！」

「では、欲しいものがある人は言ってください」

そして美緒は、芳佳と亜弥に命令をしつかり守るようと言う。そして、ミーナは全員に何か欲しいものが無いかを聞いた。

「欲しいものか…新しい訓練器具とか…」

「はいはい…そういうのじゃなくて、皆の休養に必要な物よ」

美緒の言う欲しいものが完全にトレーニング系の物であったため、ミーナがそうじゃないと説明する。

「休養か…訓練をしつかりしてしつかり休む、重要だな」

「うーん、それなら訓練の後に士気を保つには風呂が必要だな」

「それ、湯船を買えって事ですか…？」

トウルルーデが休養と言う言葉に共感し、そして美緒が風呂が必要であると言う。

しかし洋介は、美緒がまるで湯船を買ってこいと言っているようにしか聞こえず苦笑いをする。

そしてミーナは溜息を吐く。

「はあ……貴方達の頭って訓練しかないの？誰かもうちよつとまともなものを――」

「あの、私は紅茶が欲しいです」

ミーナが周りに助けを求めた時、リーネが手をあげて意見を出す。今まで出た物の中では一番まともだった。

その言葉に続いて、ミーナも意見を出す。

「そうね、ティータイムは必要ね。それじゃあ私はラジオをお願いしていいかしら？」

「カールスラント製の立派な通信機があるじゃないか？」

「ここに置くラジオよ。皆で音楽やニュースが聞けるといいでしょう？」

ミーナはラジオを注文する。確かに隊の中での娯楽は重要なので、その意見には誰も
が賛成した。

芳佳は次々とウィッチたちのメモ帳に書き記した。

トウルーデは妹のクリスマスに贈る服。

ペリーヌに関しては、頂いた給料と貯金をガリア復興財団に寄付し、リーネが注文し
た紅茶の他に花の種をお願いした。

エーリカは、トウルーデに菓子から書き替え、目覚まし時計に変更された。

サーニャは猫の置物

エイラに関しては拘りと注文内容が多い枕。

洋介と亜弥の親子はトラックに向かって歩いていった。

「亜弥は、ローマで何をかうんだ？」

「あ、うーん…ローマのお店にきてから選ぶよ。亜弥は、ローマで映画の気分になりきるよー。」

「映画の気分？」

「うん、お父さんは…？」

「そうだな…珈琲とワイン。あとは502の…」

「桜井!!」

突然、別の通路からトウルーデが現れた。

「なっ…なんだ!？」

「お姉ちゃん!？」

「私の二人の妹を、守ってくれ！」

「あ、ああ…わかった…」

洋介は苦笑しながら彼女の要望に応えた。

洋介、亜弥、シャーリー、ルツキーニ、芳佳を乗せた軍用トラックはロマーニヤの街へと向かうのであった。その時にリーネが心配顔で送ってくれた。

軍用トラックの運転席にシャーリーが操作し、助手席には洋介が居座った。

「なあシャーリー、ローマまでどのくらい到着するんだ…?」

「そうだね、数時間つてところだ」

「そうか、ちよつと一眠りするから…ローマ郊外に近づいたら起こしてくれ…」

「ふふつ、OK!」

洋介は略帽を顔に被せ、一眠りした。

そして、シャーリーは目付きが変わり、レバーとアクセルを操作し、速度を加速させた。

数時間後

「うえゝ、ぎぼぢわるいゝ」

「…ん…よく寝た…芳佳…？」

トラックの座席で芳佳はグロッキー状態にいた。

シャーリーの運転は、かなり乱暴で、芳佳には応えていた。

「皆、なんで平気なんですか」

「運転してるのあたしだし」

「何度も乗ってるし！」

シャーリーとルツキーニのコンビはそう述べ

「洋介さん、あんな運転でよく眠っていましたね…」

「まあな、戦闘機乗りで慣れているが、もっとひどいのに乗ったことある…」

洋介は少し欠伸をしながら応える。

ラバウル六勇士の金城幸吉の運転に比べれば、ましだった。

亜弥は平然としていた。

「小樽でアイヌの子供たちと、木の上で遊んでいた」

「京都の鞍馬寺で鍛えた牛若丸か…」

そしてトラックはロマーニヤの市街地に入った。

「芳佳、洋介、亜弥！ローマの街だよ！」

「え？」

ルツキーニの言葉に、三人は窓を覗くとそこにはきれいな街並みが見えた。

「うわあゝ!!うわあゝ!!すごい!!」

芳佳は興奮して述べる。

「これは凄いな…」

「あれ?芳佳と洋介、亜弥はローマ初めて?」

「うん!あれ何?」

「あれは昔の闘技場だよ」

ルツキーニが地元を案内しながら自慢し、三人は初めて来たローマの街に興味津々だった。

そして芳佳が気になった建物などはルツキーニが一つ一つ説明する。

「あははは！芳佳、子供みたい！」

「日本…いや、扶桑の建物は基本木造って聞くから、こういう石造りの街が珍しいんだな」

「ローマは歴史ある街だからな」

「へへへん。そ、うでしょそうでしょ！」

ルツキーニは先ほどから目を輝かせてばかりの芳佳を見て笑う。洋介は芳佳が珍しく見る理由を言い、シャーリーも、芳佳と亜弥がこんなに驚くのも街を見ながら納得するので、ルツキーニは自慢げになる。

「ホント素敵な街だね！ルツキーニちゃんの生まれた街なんですよ？」

「ふふへん、まあね！」

「アフリカでも、ローマの自慢ばかりしてたからな」

「だって」

膨れるルツキーニ。

「まあシャリー、ルツキーニがとても故郷を愛している優しいウィツチなんだな。」

「うん、洋介！そう言ってもらえると嬉しいよ？」

そして、ルツキーニが案内した場所でトラックを止める。

「ここでもいいのか？」

「うん、ここは大抵のものは揃ってるんだ」

そこは雑貨屋で、ここで皆の注文した欲しいものを買うのだ。

中に入ると、そこには食器や家具、衣類や食品などありとあらゆるものがあつた。

「おお、似合つてゐるな宮藤」

「どれどれ?...いいな」

シャーリーは芳佳が自分のサイズに合うかを図つてゐる洋服を見てそう感想し、芳佳の服を見る。

「いえ、これはバルクホルンさんに頼まれたやつです」

「えええ!!?これ、あいつが...!」

しかし、芳佳の説明を聞いてシャーリーは服を見ながらあり得ないと言つた顔をす。そして、何を思つたのか突然お腹を抱えて笑い出した。

「あつははははは!...いっひひひひひ!」

「違いますよ！これは妹のクリスさんが着るんです！」

「はっははははは！」

芳佳は懸命に言うが、シャリーは相当ツボにはまったようだ。彼女の頭の中では、芳佳が今手に持っている服を着ているトウルーデの姿が頭にあつた。

「はあ……芳佳、メモを貸してくれ」

「あつ、はい！どうぞ」

洋介はそう息を吐くと、芳佳からメモを貰う。そして、他に必要なものは何かを確認して店内を見る。

「枕……枕……これか？えつと……赤ズボン隊……なんじやそりや、バツキーよ？」

そして、洋介はメモにやたら詳細に書かれていた注文品を見つけて籠に入れる。

「後は…おっ…」

他に必要なものは何かと探しているとき、洋介の目にある物が止まった。

ルツキーニは今、退屈している。理由は、自分が集めるものは集め終わったため、残りの人達が終えるのを待たされていたからだ。

「ふあゝ」

「ルツキーニさん」

「亜弥どつたの？」

「うん、亜弥も欲しいものを買えたから」

「そうなんだ…ん？」

ルツキーニは欠伸しながら、年が近い亜弥とやり取りをしていると、窓の外を見た。

その時、ルツキーニの目にある光景が止まった。

それは、黒服でサングラスを掛けた男二人が、赤髪の少女の手を取って車に入れようとしている姿だ。よく見ると、少女は抵抗している。

ルツキーニはすぐさま店を出て、少女の元へ向かった。

「あつルツキーニさん、待って！」

亜弥もルツキーニの後を追うのであった。

「放してください！」

少女は抵抗をしている。しかし、黒服たちは少女を車に引つ張ろうとした。

「スーパールツキーニキーツク!!」

その時、店から飛んでやって来たルツキーニが、男たちに向けてジャンプ蹴りをした。男はその蹴りを顔に食らい吹っ飛ばされ、そしてもう一人の男を巻き込んで倒れた。

「あああ、あの…」

「へへへん、いこ?」

「え?えええええ!」

少女は倒れた男たちを見てアワアワする。しかし、ルツキーニが手を取って少女を懸命に男たちから放そうとする。しかし、少女はいきなりすぎて何のことか分からずに大声を出したのだった。

「あの…ごめんなさい!」

「ま、待て……ぐっ」

そして、亜弥はルッキーニに代わり、男たちにお辞儀しながら謝罪した。
倒された男たちは手を伸ばすが、力尽きてその場に気絶をしたのだった。

第49話 ローマの休日 後編

一方、シャーリーと芳佳は店の中にルツキーニと亜弥がいなくなったことに気付き、シャーリーたちは軍用トラックのほうへ行くが誰も乗っていないかった。

「あれ、車にもいないな…」

「さつきまでお店の椅子に亜弥ちゃんと一緒に座ってましたよね？」

「うーん…ルツキーニに残りのお金全部渡しちまったからなく…」

「ええっ!?!まだ食料買ってないですよ!」

「あいつ、どこに行っただんだ？」

「それよりも…ウツプ…」

芳佳は洋介に振り向こうとした時、女性の胸部にぶつかった。

「あれ、芳佳？」

「うう／＼／＼…その声は、ステラさん！」

芳佳が至福な微笑みながらぶつかった相手は、以前島での特訓に付き合ったステラ・A・エヴァンスだった。

「おいステラ！あれ、君は…？」

「あ、…バツキーさん！」

ステラのうしろから、連れ添いのバツキー・S・五十嵐が現れた。

「しばらくぶりだね芳佳、元気だった!？」

「はい、バツキーさんとステラさんも！」

「なあ宮藤、この二人は誰だ？」

「シャーリーさん、この二人は504部隊に所属するウィッチとウィザードです」

「え…？ええ…マジか!?すると…洋介と亜弥と同じ異世界人か…」

「芳佳さんの言う通り、俺はバツキー・S・五十嵐。アメリカ…いや…この世界では扶桑系リベリオンの大尉だ」

「あたしはステラ・A・エヴァンス。扶桑とリベリオンのハーフであり、中尉よ！バツキーと同じ、504部隊の隊員よ！」

「へえ…！洋介と亜弥以外のウィザードとウィッチを初めて見た！あたしは501のシャーロット・E・イエーガー、リベリオン陸軍大尉。シャーリーと呼びな、バツキー

とステラ！」

「ああ、よろしく。シャーリー」

「ええ！よろしくね、シャーリー！」

バッキーとステラはシャーリーと握手した。すると彼女はステラのある部分を目にした。

「…なあステラ、…あんたの胸なかなかだね」

「そうかしらシャーリー、あなたには負けないよ」

ステラとシャーリーが火花を散らしている時

「ちよつと待つてくださいお二人さん！」

「なあ芳佳、あの洋介はどうしたんだ…？」

バツキーが指差すところ、芳佳とシャーリーがうしろを振り向くと

「おおーい、亜弥〜！どこに行つたんだ〜？」

洋介は、幾つかの店の中や、路地裏のゴミ箱の蓋をあけて中をのぞき込んだり、あたりをきよろきよろしてうろたえる姿があつた。

バツキーは芳佳から事情を聞くと、501の物資調達で仲間のルツキーニと亜弥は行方を眩ました。

「そうなのね…」

「だから、早く何とかしないと…」

「ところで、ルツキーニはどんな娘だい…？」

洋介を始め、芳佳とシャーリー、バツキーとステラの4人は亜弥とルツキーニを探しに行くのだった。

一方ルツキーニたちはどこかの公園の噴水場にいた。

「あ、ありがとうございます…あの…あなたたちは？」

と、少女がそう言うのとルツキーニが立ち上がり

「私？私は通りすがりの正義の味方フランチエスカ・ルツキーニ!!」

「桜井亜弥です」

「ルツキーニさんに亜弥さんですか…私はマリアといいます」

「マリアかよろしくね♪」

「ねえ、マリアさん…さっきの黒服の方は…？」

「あ…あの方は…」

「わかった、あいつらはマフィアなんだ！」

「ま…マフィア!？」

「裏通りは危険だから気をつけてね〜！」

ルツキーニはマリアに忠告する。

彼女から聞くとなんでも地元の人だがこのロマーニヤを歩いたことがなく、街をうろついていたところさっきの男たちに絡まれていたとのことだった。

「そつか！じゃあ、あたしが案内するよ！」

「え？でも…」

「大丈夫。このルツキーニ様にお任せアレー!! 亜弥も行こつ!」

「あつ!?! うん!」

ルツキーニは亜弥とマリアを連れてローマの街を案内するのだった。

コロッセオに行ったり真実の口やトレビノーの泉などの歴史ある建物へ見物。

またヒスパニア広場で子供たちと一緒にジェラートを食べ、きれいな洋服で手を繋ぎながら歩き、豪華な食事を買ったり食べたりした。

そして、子供たちと別れるとルツキーニと亜弥は財布を逆さにし振ると

「にやはは…財布空っぽ…」

「亜弥も空っぽだよ、ルツキーニさん…」

と、三人で苦笑しあっていた。

「(お父さん、定子お母さんに何を買うんだろう…?)」

亜弥は頭を傾げ、考えていたのだった。

一方、シャーリーたちは喫茶店で休憩していた。

「あゝ、全然見つかんねえ〜…」

「で洋介、少しは落ち着いたか？」

「ここでお茶でも飲んでいなさいよ、洋介さん」

「ああ…面目無い、バツキー…ステラ…シャーリー…芳佳、いつらはどこ行つたんだ…」

「ルツキーニちゃんと一緒ならたぶん大丈夫だと思うんですが…」

「はあ…ん…?」

芳佳の言葉で、洋介は落ち着くためにコーヒーを飲み、新聞棚に置かれてある新聞の

記事に目を通した。

『第一公女、明日初公務　ロマーニヤ公国第一公女マリア殿下は、明日の園遊会に出席。その場で、ラジオや新聞等のメディア向けのスピーチを行う予定』

表面に大きく書かれその横には、その第一皇女らしき少女の写真が載っていた。

「ウィッチと変わらない年齢なのに、公室や政治の事はわからんが、若いのに大変だな
〜」

素直にそう思う中、芳佳とバツキーはケーキを堪能していた。

「シャーリーさん、洋介さん！これすっごくおいしいですよ！」

「おお〜！旨いねえ〜」

「お前な〜…」

「はい！」

自身がおいしいと絶賛したケーキを一口、シャーリーに向け、シャーリーは一口食べる。

「…っ!?…おお! すつげえうまいな、これ！」

「でしょー!」

「へえー!? あたしも!」

「ああ、すいません! このケーキ4つ…いや、5つ!」

「お願いします!」

シャーリーは近くを通ったウェイターに注文する。

「あ、ついでにこの珈琲もう一杯お願いします。」

その間にも、ルツキーニと行動を共にしていたマリアは初めて見る光景ばかりなのか目を輝かせたりしていた。そして今、二人はローマで一番高い観光名所に来ていた。

「どおつマリア、亜弥！ここから見る景色が、私は一番好きなんだ！」

「美しい……」

「うん……キレイだね……」

ルツキーニが自慢げに紹介する。

マリアと亜弥はルツキーニに言われて街を見ると、その光景にとっても感激していた。そこからはローマの街の殆どが一望でき、人も小さく見えるほどの光景だった。

「私、家に帰らないですつとここに居たいです」

「だったらいいじゃん！」

「そうだね」

「ふふつ、そうですね」

ルツキーニがそんなことを言うので、マリアは笑う。しかし、マリアは笑った後に再び街に視線を落とすと、どこか不安そうな顔をする。

「この美しいローマの街を守ることが、私にできるでしょうか…？」

「え？」

「あつ、家から煙が！」

ルツキーニはマリアの言っていることが分からずに聞くが、マリアは家の屋根から煙が出ていることに驚く。

「食事の準備の煙だよ」

そんな風に驚くマリアに、ルツキーニが説明する。しかし、マリアはその家一つ一つをみると、おかしなことを言った。

「あの一つ一つが、民人の暮らしている家なのですね」

「…民人？」

「今まで知りませんでした」

「マリアさん…？」

マリアの不思議な言い方に、ルツキーニと亜弥は疑問に思う。

民人なんていう言い方をする人など、ルツキーニは今まで見たことが無い。しかし、ルツキーニはそんな事よりと、話題を変えた。

「ねえ、ホントは絶対見せたい景色がもう一つあるんだ！」

「それは是非見てみたいです！」

ルツキーニの新たな話題にマリアも食いつく。しかし、ルツキーニはここで表情を少し落とす。

「うーん、今はちよつと…」

ルツキーニは今はその景色を見せることができないと言う。そんなルツキーニの姿を見て、マリアは特にがっかりした表情などを見せずに笑った。

「そうですか。では、またの機会にお願いします」

「うん！」

そんなマリアの約束の言葉に、ルツキーニも笑顔になり頷いたのだった。

その時だった。街全体に空気を吹き飛ばすような音が鳴り響く。それはローマに設置されたネウロイ警報だった。

「ネウロイだ!」

「大変! 早く逃げましょう、ルツキーニさん、亜弥さん!」

マリアは亜弥とルツキーニの手を取って逃げるように言う。しかしルツキーニは動かず、マリアの方を向いて言った。

「あたし、行かないや」

「え?」

ルツキーニの言葉にマリアはどういうことかと思う。

丁度その時、地上を走っているトラックから宮藤が顔を出してルツキーニを見つけ

た。

「居た！シャーリーさん！塔の上です！」

「塔!?!」

「ホントだ、ルツキーニ、亜弥!!」

芳佳の言葉に洋介は驚くが、シャーリーはルツキーニの姿を見つけると大声で呼ぶ。

その声に、ルツキーニと亜弥が気づいて柵を乗り越超える。

「シャーリー!!」

「危ない!!」

「行かなきゃ！あたしウィッチだから！」

「えっ？ウィッチ？」

「亜弥、マリアをお願い！」

「わかりました!!」

ルツキーニはマリアに振り返って言う。マリアはルツキーニがウィッチだという事に驚いた様子だった。

そして、ルツキーニは亜弥にマリアという様に

指示し、ルツキーニは自分のかぶっていた帽子をマリアに投げ渡す。

「これ、持ってて!」

「あ、はい! って、ええっ!？」

マリアがそれを受け取ったと同時に、ルツキーニは屋根からジャンプをする。その高さにマリアは驚く。しかし、ウィッチであるルツキーニはそのまま屋根の上を滑りながら、マリアに話す。

「だからあたし、ロマーニヤを守らなきゃいけないの!」

そう言つて、ルツキーニは大ジャンプをした。そして地面に降り立つと、トラックの荷台に積み込まれていたストライカーユニットに足を入れる。

魔法力を流し込み、魔導エンジンを回転させる。そして右手側に出た機関銃を手にとると、そのまま垂直に飛翔した。

上空では、先に飛んでいた洋介達が待つていた。しかし、ルツキーニは真つ先に先頭に立ち、ネウロイに向かっていく。

そんなルツキーニをシャーリーが止める。

「先走るな、ルツキーニ！」

「でも……！」

「分かってる、だが一人じゃだめだ！」

ルツキーニはシャーリーに何か言いたげだが、シャーリーはちゃんと理解していた。シャーリーだけでなく、芳佳や洋介も分かっている。

「ルツキーニちゃんの故郷を守りたいのは、私たちも一緒なんだから！」

「皆で協力して、ロマーニヤの街を守るぞ！」

「うん！ありがとうシャーリー！芳佳！洋介！」

三人の思いを知って、ルツキーニは笑顔で返事をする。

「おい、洋介!!」

「芳佳！シャーリー！」

別の空域からベアキヤットとP-51H型ストライカーユニットを履いたバツキーとステラが飛来した。

「バツキー！」

「おつ、ステラ！」

「あれ、あんた達は？」

ルツキーニは、飛来したバツキーとステラを尋ねた。

「俺はバツキーだ！」

「あたしはステラ、よろしくね！」

「うん、よろしく!!バツキー!ステラ!」

二人はルツキーニに簡素な自己紹介を済ました時、北部から3体の同型ネウロイが出現した。

「よし、芳佳は俺に付け!シャーリーはルツキーニを頼む!」

「はい!」

「了解!行くぞ、連携攻撃だ!」

「俺とステラはあいつをやるぞ！」

「ええ!!」

芳佳が洋介に並び、ルツキーニがシャーリーに、バツキーとステラが並ぶ。そして、六人は3体のネウロイに向かって飛行する。

ネウロイは六人に向けて攻撃をする。しかし、それぞれ回避をして攻撃を加えて行く。

その時、ルツキーニがあるものを見つけた。

それはネウロイの体の下から僅かに露出していたコアだった。

「あつ、シャーリー！コアが見えた！」

「よし！X攻撃だ！」

「わかった！芳佳、君はルツキーニとステラの方に行け！俺とバツキーはシャーリーと相手の氣を向ける」

「はい！」

「OK!!」

ルツキーニの言葉に、シャーリーが作戦を通達、そして洋介とバツキーはルツキーニ護衛の為に芳佳とステラを移動させる。

芳佳とシャーリーがネウロイの上から攻撃を加えて行く。攻撃を受けて、ネウロイは洋介達にビームを撃つ。

「いいぞ！来い来い来い！」

「そのまま騙されろよ…」

ビームを回避しながら、洋介とシャーリーは続けて攻撃をしていく。これでネウロイの注意はルツキーニ達から離れた。

「ルツキーニちゃん！」

芳佳がルツキーニの名前を呼ぶ。

ルツキーニは自分の前にシールドを重ねて張ると、固有魔法『光熱攻撃』を行う。これで、ルツキーニはネウロイを貫くつもりだ。

しかし、ネウロイはルツキーニの行動に気づき、攻撃をルツキーニ側に変えた。

「気付かれたー！」

「芳佳、ルツキーニを守れ！」

「はいー！」

洋介の言葉に宮藤は返事をし、ルツキーニの前に立つ。そしてネウロイの攻撃を自慢の大きなシールドですべて防ぐ。だが

「あぁっ…しまった!!」

弾かれたビームが地上に落下、その先に亜弥とマリアがいた。

「…っ！あぁ…」

自分の命がここまでだと思った。その時、亜弥は魔法力を発動、シールドを展開し、マリアを護った。

「マリアさん、逃げて!!」

「亜弥さん、…あなたもウィッチ…!?!」

「亜弥…あの少女は写真に写っていた…」

地上の攻撃を亜弥、空中で芳佳がすべて防いでおかげで、ルツキーニは動きやすくなる。そして、ネウロイのビームを避けながらルツキーニは急上昇をしていき、そしてネウロイに体当たりした。

「たああああ!!」

気合一発、ルツキーニはネウロイの体を貫いた。

「そこっ!!」 スパアアア

洋介も、軍刀鷹狼でネウロイを切り裂いた。

「コアよ！ぶち込んで、バッキー!!」

「喰らえ!!」

ステラは機銃で表面を削り、彼女の固有魔法『コア探知』でバッキーに位置を知らせ、バッキーの機銃でネウロイのコアを撃破した。

それにより、三体のネウロイのコアは完全に壊れ、ネウロイはひかりの破片に変わったのだった。

「これが、亜弥たち501、504部隊のウィッチとワイザードです！」

「凄い…」

一連の光景を見ていたマリアは、ただその姿に凄いとしか言えなかった。その時、ルツキーニが空から降りてくる。

「見せてあげる！」

「え？」

「さつき言つてた、絶対見せたい景色」

そう言つて、ルツキーニはマリアの体をお姫様抱っこすると、そのまま上空へ飛翔した。

「はわわ…」

「へへへん！見て、マリア！これが絶対見せたかった景色だよ！」

マリアがだんだん上がって来る高度に驚く中、ルツキーニが下を向きながらマリアに言う。その声につられてマリアも見る。そして、目を輝かせる。

眼前には、ローマの街全てが一望できた。先ほどの塔の上よりもずっと高く、そして

ずっと綺麗に映っていた。

そんな中マリアは、ルツキーニに質問した。

「…ルツキーニさんは怖くありません？」

「え？何が？」

「あんな恐ろしい敵と戦うなんて、怖くは無いんですか？」

マリアは、あんな恐ろしいネウロイと戦うルツキーニに、怖くは無いのかと思う。自分からしたら、あのような敵と戦うとなったら怖いと言ってしまいかもしれないからだ。

しかし、ルツキーニは違った。

「だって、ネウロイやつつけないとロマーニヤ無くなっちゃうじゃん。皆の家とか友達を守るのが、ウィツチだもん」

ルツキーニはそうマリアに言った。ローマニヤ軍の問題児と言われている彼女も、ペリーヌと同じように祖国を愛している。だからこそ、彼女は祖国を守る為に戦うのだ。そんなルツキーニを見て、マリアは微笑みながら言った。

「ノーブレス・オブリージですか」

「え？マリアって難しいことばかり言うね…」

「そうですか？」

ルツキーニとマリアがローマの空から景色を眺めている時、地上の広場でムっとした顔の洋介の前に亜弥が立っていた。

「…ごめんなさい」

亜弥が謝り、洋介は平手で亜弥の頭を叩き、撫でながら優しく抱きしめた。

「全く…心配…したぞ…」

優しく言うのだった。

そして亜弥は、まだ若き父親の彼の温かさに嬉しさを感じ、抱きしめるのだった。すると、ルツキーニと飛んでいたマリアがやってきた。

「今日は、ありがとうございました」

「うん！また遊ぼうね！」

「はい」

「…殿下」

洋介はマリアの前で頭を下げ、右膝を地につけ、小声で話しかけた。

「私の亜弥…娘のことは、大変失礼しました」

「そんなことはありません、私もとても楽しい時間を過ごせました…亜弥さん。先ほどは、

ありがとうございました。あなたは命の恩人です」

マリアは亜弥に感謝を述べ、頭を下げた。

「亜弥は、その…ただ、必死でできることしただけ…」

「胸を張ってもいいんだぞ亜弥。お前が救ったお方は…」

「しー！」

マリアは口到人差し指を当て、わずかに微笑む。

その光景を見た洋介は、敬礼した。

「おっと、失礼しました…」

「では、私はこれで」

「うんバイバイ…」

「…スピーチ、がんばってください」

「…ええ」

ちょうどシャーリーがトラックのクラクションを鳴らした

「おい、ルッキーニ！洋介、亜弥。そろそろ行くぞ！」

「ああ！今から行く！行くぞ亜弥」

「うん！」

洋介と亜弥はトラックに乗り、シャーリーがミラー越しに洋介たちが乗車したのを確認した後トラックが発進する。

「バイバイ、マリアー！またねー！」

「マリアさん、またいつか…」

二人が荷台から手を振る。

そして側から、ストライカーを牽引するジープが走行した。

「おーい、洋介く、亜弥く!!」

「はあーい！芳佳、シャーリー、ルツキーニく!!」

「おっ！バツキー！ステラく！」

「バツキーさあくん！ステラさあくん！」

「また、会おうなく!!」

洋介と芳佳、シャーリーとルッキーニ、亜弥は501基地。バッキーとステラは504基地に帰投した。

マリアも振り返り、そして彼女の後ろには先ほどの黒服の男たちが立っていたのだつた。

「ご迷惑をおかけしました」

二人に謝り、その二人とともにどこかへと帰るのであった。

—————

「うわあああん！ごめんなさい！」

翌日、ルツキーニは両手にバケツを持たされて基地の外に立たされていた。原因は、食料調達のために持つて行つたお金をルツキーニがマリアとの観光に全て使つてしまったことが原因だった。

「監督責任……私にもあるな……共に反省しよう」

「すまん、ルツキーニ」

「今回ばかりは何も出来ない……すまん」

美緒は監督責任と言うが、自分にも非があるなど言つて歩いて行つてしまった。そしてシャーリーと洋介は、ルツキーニの横を謝りながら歩いて行つた。そして、基地の中ではそれぞれの注文した物を渡し合つていた。

「はい、エイラさん」

「言つたものあつたか？」

「サーニヤちゃんにはこれ」

「あ、ありがとう、芳佳ちゃん！」

芳佳がエイラとサーニヤに注文されたものを渡す。そして芳佳は少し困ったように言った。

「もー、エイラさんって注文が多くって…」

「そ、そんな事無いゾ…！」

「エイラ、人をお願いするときはちよつと遠慮するものよ？」
「うゝ…」

サーニヤに注意されて、エイラは少し立場が弱くなる。

そこに、洋介がやって来る。

「はいこれ、これは芳佳、こっちはエイラで、こっちはサーニヤに」

「ん？何だ？」

「洋介さん、これは？」

洋介は三人にケースに入った何かを渡す。

エイラはそれを受け取るとケースを開けた。中に入っていたのは、狐のガラス細工だった。

そして、サーニヤが中を見ると、そっちにもガラス細工、こちらは黒猫だった。

「これって…」

「ロマーニヤの街で見つけたんだ。部隊の皆の分全部買ってきたんだ」

そう、洋介はロマーニヤの雑貨屋で、動物のガラス細工を見つけたのだ。

ロマーニヤで盛んになったガラス工芸品は、洋介の目を引き付けた。そして、洋介は自分のお金から皆の分をすべて買ってきたのだ。

「ありがとうございます、洋介さん」

「ありがとうございます、洋介さん」

「ありがとうございます、洋介大尉」

「喜んでもらえて、よかったよ」

芳佳とサーニヤ、エイラは洋介にお礼を言う。洋介は二人のお礼を聞けて、買った甲斐があつたと言つた様子だつた。

そして、洋介はペリーヌの元にあるものを持っていく。

「ペリーヌさん、これ」

「なんですの、これは？」

「お花の種、この基地の周りにお花を植えたらどうかなつて、リーネちゃんが」

「リーネさんが？」

ペリーヌはリーネが事の発案と知り驚く。

ペリーヌは、今回の件で一人だけ何も頼まなかつた。そのため、リーネはペリーヌに少しでも元気になつてもらおうと思い、花の種を頼んだのだ。

「はい。ペリーヌさんにお花の育て方を教えてもらおうと思つて」

「ど、どうして私がそんなことを…」

「一緒に植えようよ！」

「教えてください」

二人の真つ直ぐとした言葉に、ペリーヌもあつさりと折れた。

「仕方ありませんわね」

そう言つて、ペリーヌはお花の育て方を一つ一つ説明したのだった。

そして、皆はミーナの注文したラジオの前に並び、耳を立てる。

『…さて、本月初めての公務の場である、栄優会に出席されたロマーニヤ公国第一皇女、マリア殿下からのお言葉です』

ラジオからは男の人の視界が聞こえてくる。そして、少し静かになると、次に女性の声が聞こえてくる。

『昨日、ローマはネウロイの襲撃を受けました。しかし、そのネウロイは小さな二人のウィッチの活躍で撃退されたのです。その時私は、彼女からとても大切なことを教わりました』

全員が静かにラジオを見ながら聞く。

『この世界を守る為には、一人一人が出来る事をすべきだと、私も私が出来る事でロマーニヤを守っていきましょう』

そして、ラジオの向こう側に居るマリア殿下は、ある言葉を501のウィッチ達に送った。

『ありがとう、私の大切なお友達、フランチェスカ・ルッキーニ少尉、桜井亜弥さん』

「え？」

『えええええ!!』

衝撃の言葉に、ラジオを聴いていた全員が驚く。

何故、亜弥とルツキーニの名前が出たのかと誰もが思った。

「亜弥ちゃん…ロマーニヤの皇女様と…」

「え…?」

「この国の人の友達になって、よかったね亜弥ちゃん」

「リーネお姉ちゃん、サーニヤお姉ちゃん…うん、ローマで映画の気分だったよ♪」

「映画？」

「ねえ亜弥ちゃん、どんな映画なの？」

「うん、『ローマの休日』なの」

リーネとサーニヤが亜弥に寄り添り、亜弥は笑顔になった。

『感謝を込めて、ささやかなお礼を501統合戦闘航空団に送ります』

そして、殿下の続けて言われた言葉と共に、基地の外で音がする。全員が見てみると、パラシュートによって投下された沢山の木箱があった。それは、マリア殿下がお礼として送ってくれた、補給物資の数々だった。

「お、重い…」

その補給物資の下では、外で立たされていたルッキニーが下敷きになってしまったのだった。

504 基地

「よし、出来た！」

「ねえステラ、なにができたの？」

浴場から出たばかりのルチアナが、ステラが現像したばかりの写真を覗いた。

「……これはもしかして……！」

「さつきラジオで流れたロマーニヤの皇女様と501、洋介と亜弥!？」

ローマの寺院をバックに、ルツキーニとマリア皇女を中心に501の芳佳とシャーリ、洋介と亜弥の親子。

そしてバツキーとステラが写る記念写真であった。

オラーシャ ペテルブルグ 502基地

「みなさん！洋介さんからの贈り物ですよ！」

「なんだって!？」

「洋介さんからの贈り物!？」

502部隊のウィッチ、雁渕ひかりの呼び掛けでウィッチたちが格納庫に集まり、ひかりとニパが木箱の蓋を開けた。

「おおつ、ロマーニヤの菓子だ！洋介、ありがてえぜ！」

「これはロマーニヤのぶどうジュースだ♪洋介くん、ありがとう♪」

直枝とクルピンスキーは笑みを浮かべながら歓喜した。

「柔なことをするな、桜井は…」

「ですが、桜井さんと亜弥ちゃんは元気そうですね」

隊長のラルとサーシャは僻みっぽく呟いたが、心では喜んでいた。

「ああ」

「定ちゃん、これはトマトと海産の缶詰とパスタ。トマトとシーフードパスタができるね〜♪?」

「そうね、ジョゼ。…洋介さん、亜弥ちゃん…」

下原定子は笑みを浮かべながら、洋介と亜弥が写る写真を手にした、